







俳諧系譜逸話集

装幀　津田青楓

蕉風 俳諧 名家競

中央

同 餘花園遲流
江戸 不知齋抱義
同 蝸廬齋朽佛
尾 芳ミ 鴫立菴立宇
江戸 田喜斎居米山
同 シナノ 能静菴霜翠
女 キイ 閑那
ミノ 萬像
エト 普然
尾張 楓下
尾張 拇裡
ヒゼン 悠々
京 公成
江戸 福芝齋得蕤
尾張 月底
京 石外
江戸 烏誰菴由誓
大阪 花屋菴鼎左
江戸 可布菴逸淵

東之方

大関 京　関脇 江戸　小結 尾張　前頭 大阪　前頭 江戸　前頭 武藏　前頭 播磨　前頭 江戸　前頭 同　前頭 大阪　前頭 江戸

夌慰舎梅通　李之本為山　暮雪庵而后　杏蔭素屋　花塢連々　芳涯庵溪齋　三大庵可大　稲掛庵萬古　過日庵祖郷　蘆竹庵白鴎　雙雀庵氷壺

前頭
京　大阪　甲斐　出羽　近江　駿河　加賀　越後　三河　摂津　日向　同　江戸　加賀　陸奥　伊勢

九杢雲御礪連犇乙蓬太雙駝由卓江雀
起隣里風山山壺良宇乙烏岳之丈三叟

同
エト　、　センダイ　ミカハ　カ、　エト　山シロ　エト　ニト　カ、　エト　エチコ　イセモ　イヨ　ムツ　京　大サカ　エト

不菅舎完悠鳥岳卯山大鐘茶其默清大稀荷
染丸用伍平吟鳳月子夢翁山鳳翁民翠處歩

同
エト　下サ　、　大サカ　フシコ　エト　イセ　アキ　エチコ　ミノハリ　ムツ　ムサシ　カヒ　松アイ　シナノ　イセ　下サ　イナバ　ヒゼン　ムサシ

會凱喜虎素麻雅甘巴一地老烏頼和五以南友月
心山年尺隱交琴古陵清明郷春芝春鈴兄嶺甫識

同
ムサシ　遠とう　イツ　イヨ　ビゼン　上サ　松アイ　京　、　ミヨシ　エト　イセ　スルカ　江レウ　エト　ミト　ノト　エト　トサ　エト

抱杜士菊布関有風世好鳳桐碧竹千瀧呂五李秋
叔水敬園閑市年光然煮菊一山山兮尾鳳后峯香

雲　　　水

田月要波米練素音弄舉春曲斗月
禾之五同海良行好化一湖淵米古

西之方

大関 江戸　関脇 京　小結 江戸　前頭 陸奥　前頭 尾張　前頭 京　前頭 江戸　前頭 大阪　前頭 江戸　前頭 同　前頭 同

孤山堂卓郎　五仲庵有節　惺々庵西馬　晴霞多代女　遠近庵烏津　芳窓芹舎　菊守園見外　比良城林曹　佳峯園等栽　旋無庵来足　寶雲庵草宇

前頭
遠江　江戸　同　同　大阪　京　大阪　江戸　仙臺　江戸　京　武藏　尾張　京　江戸　近江

烏㐂丁然祇淡蟻古一蚕杜五李默仙月
谷我知々白節兄山止笠蓼渡曠池皐城

同
アハ　ナンブ　京　エト　上ケ　相シウ　エト　イヨ　京　仙ダイ　ムサシ　、　エチコ　オク　エト　、　シナノ　エッ中

鳳卓条山竹如波柴禾心南寄鷺逕尾五葛恕
棲堂魚方沓々鷗人明阿々三眠泂巿林古兮

同
サガミ　下サ　イセモ　エト　、　ムツ　シナノ　エト　上毛　房カツ　テハ　、　オク　下モ　上サ　ヲハリ　カヒ　下サ　、　アハ

北交鵞成帰白杏蘭梧椿左二五浅金芸通其蚕菜
崖水川五一水郭雄鳥山静丘雲精波石老翼曹葉

同
エト　ヒタチ　ミト　松アイ　丹ハ　イセ　カ、　エト　、　、　カ、　ヤシラ　播とう　、　エト　カイ　、　エト　、　ヒゼン

羽一左北九米北鶴大小均蘭思曲孤文草永推馬
人兆知丸鯤花山山翁年柯平齋樂阜月谷也久蓋翁

雲　　　水

桐秀ミ素墨夷大素立碩喜素茶玄
古何と明方則莫器良水川交瓢之

浪速俳諧系譜

古人の庵号名苗ハ俳諧宗譜に
明らかなり［以下草書、判読困難］
浪花其判者の氏姓ハ［判読困難］
［判読困難］

天保五年甲午秋　無爲菴蔵

芭蕉—其角—淡々—舎拷（八千房）—駝岳（八千房）
屋烏（八千房 後五竹庵）—一肖（八千房）
芭蕉—桃妖—桃枝（桃枝斎）
二柳（不二庵）—奇淵（大黒庵）
天保五年五月十八日没
芭蕉—桃妖—二柳—井眉（井眉菴）
芭蕉—祇空（石霜庵 青流洞）—法策（馬田江）—有國
公路（馬田江）
貞徳—貞室—貞因—貞峩—田雀樹
左逸（反古庵）—天来（反古庵）
芭蕉—清風—芝蘭—尺艾（其日庵）
秋水（其日庵）
桃青—桃妖—桃居（二柳庵 不二庵）—桃慶（不二庵）
桃室（嵯峨山 俳諧詞守）

貞徳霊神（一道宗匠免許 摂国尹丸家）—貞室翁（一義軒 花下二世）—貞恕翁（一義軒 花下三世）—祇敬霊神（竹筒子著書流 有無庵）
季吟翁（拾穂軒）—桃青霊神（芭蕉庵）
正由翁（摂国一世）—貞爲（摂国二世）—松貞（摂国三世）
太石（摂国五世）—蘆乞（摂国六世）
法策（慶五庵 青流洞）—五楼（慶五庵 青流洞）
貞居（慶五庵 青流洞 摂国尹丸家）—貞璵（始名有無庵 桃翁 摂国［判読困難］）
従元祖至貞璵松永氏系昭之

芭蕉—其角—淡々—富天（清得舎）—石鯨（清得舎）
百嬰（清得舎）—呂國（清得舎）
芭蕉—桃妖—鵞左（花屋庵）
二柳（不二庵）—奇淵（大黒庵）
芭蕉—桃妖—二柳—升六（翁堂 蕉花堂）
夜来（翁堂）—吐屑（翁堂）
芭蕉—其角—湖十—漁千（落月舎）—万和（八日庵）
其瓏（八日菴）
貞徳—貞室—貞因—貞峩—田雀樹
左逸（反古庵）—句梅（汝星庵）
芭蕉—清風—芝蘭—尺艾（其日庵）
照女（東籬園）—利斎（其日庵 泉住）

芭蕉—其角—淡々—拷良（無為菴）—千辰
露海（無為菴）—梅左（無為菴）
芭蕉—桃妖—二柳—奇淵
超然（芯花庵）
芭蕉—桃妖—二柳—井眉
井左（芙蓉庵）
芭蕉—其角—湖十—漁千—万和
岱年（遅日庵）
芭蕉—祇空（不二庵 青流洞）—頂秖（松青舎）—祇秋（梅江舎）
杜杖（梅江舎）［杜杖以下草書注記、判読困難］
貞室翁—貞恕翁—祇敬霊神
季吟翁—桃青霊神
法策—五楼—貞居
貞璵—三頼（一義軒 別号拘之家）

芭蕉—其角—乙由（麦林舎）
拷良（無為菴）—千辰
露海（無為菴）—梅左（無為菴）
芭蕉—桃妖—二柳（不二菴）—梅後（三四房）
扇暑（三四房）
芭蕉—其角—巴人（夜半亭）
蕪村（夜半亭）—大魯（芦陰舎）
百堂（歩々［判読困難］）—百堂（芦陰舎 笠斎更）
芭蕉—其角—巴人
蕪村—月居（［判読困難］庵）
其竜（五［判読困難］亭）
芭蕉—丈草—蝶夢
重厚—烏頂（閑［判読困難］庵）
正明（［判読困難］庵）
芭蕉—北枝—希因
闌更（芭蕉堂）—素芯（［判読困難］室）
林曹（［判読困難］城）
貞室翁—貞恕翁—祇敬霊神
季吟翁—桃青霊神
法策—五楼—貞居
貞璵—貞哉（青流洞）

解　題

誹諧作者名寄

寛文年中板　　横本一冊

貞徳の系統を承けた寛文時代の俳諧師一覧といふ可き簡略な系圖である。編輯の体裁から見ると、崑山とか玉海とかの類題發句集の卷末に、作者名を國別に附錄したものから思ひ附いて、その國別を俳系別に變更して單行本としたものであらう。俳系別すなはち貞徳の直弟子か、それとも孫弟子か、その區別を系圖的に記載した点に於て、後世の俳諧系譜に關するこれが嚆矢の書であると稱し得る。貞徳を道統としてそれより罫線を以て、直系に當る三十二名家を一列にかゝげ、その中より重頼・令徳・西武・貞室・季吟・立圃の如く七誹仙と呼ばるゝ者、その他多少とも門弟子を擁する俳諧師は分派的に別箇の取扱ひをして、同じく罫線によつてその門弟子の名を列記してあるが、すべては京都俳壇を中心の系圖であるから、地方に居住する者は普通の名寄の如く、其の氏号を記錄するのみで其の門人にまでは及んでゐない。俳系別の中で注意されるのは道甘の門人仲宗房である。梅盛の著書に見える宗房は芭蕉の初名のように信ぜられたが、梅盛の兄道甘の俳系に同人異人の宗房が本名寄で發見されて、芭蕉の宗房時代の一疑問が苦もなく解決された譯になる。編者は本文の立圃系統に朝江一風子稱寛とある其の人で、別に梅游軒とも号して京都の人、序文に「中比、貞徳・立圃老人のこゝろより誹諧の詞の花盛に成し故、門弟門人多し。」と立圃を其の師貞徳と同格に記し立圃系統の特に詳記されてゐるのも稱寛編であるとすれば不可解な事でない。原本は偶々手に入れた家藏本で、潁竹

文庫の種彦手寫本に狂歌堂の藏書を借覽した事を書いてあるが、その狂歌堂文庫の藏印があるので、これが種彦の借覽したといふものと同一原本であるだらう。古俳書の轉々する不思議なめぐり合せを思はざるを得ない。

綾錦　享保十七年板　中本三冊

江戸の俳諧点者は享保期に入ると、江戸座の一般化と点取の流行とで職業的に安定を得た。お互に分立して相爭ふ事の徒勞と不利益を知つて、江戸座といふ同一暖簾の下に妥協して、点者生活の共存をはかる事に一致した。もともと草創の江戸は文化的に上方の支配を受けたので、俳諧も上方の傾向及び運動によつて變轉した爲め、いはゆる下り点者が久しく優勢力を握つて來た。江戸座は名稱上、地元の点者を中心として成立したので下り点者は疎外されたが、同一の江戸座中にも系統の不明な点者が存在するので、点者の家系に就いての問題を解決する必要が起つた。それと共に点取の對象となる採点の標準卽ち点式に就いて、略その点位を明瞭に知つて置きたい要求が点取者側から聞えた。『綾錦』の使命は点者の家系と点譜と此の二つを釋明し、江戸座の傳統を高める事であつた。編者沾涼は菊岡氏、露沾子の邸中に伺候して沾の一字を授與された俳諧師で、常に考證的の仕事に趣味を持ち、或は古書に求め、或は老俳に接し、殊に老俳に對しては彼の言葉によると、其の牀上の塵を拂つて漸く聞き得たので、本書上卷の連歌・俳諧の諸系譜を編輯するには相當苦心を要したであらうが、彼の主力を注いだ江戸宗匠系譜は、直接その人又は門系に向對して得た材料であるから、正確の點で後人を信用せしむる何よりの強味があり、事實參考になるところが多い。中卷の江戸点者の引譜せる卷々の一部と落款の模寫も興味あるものである。同時代の宗匠の點印譜は今日より見れば無價値に近いが、當時にあつては点取者流を喜ばせる事多大であつたらう。下卷は判詞の代りに古事出典を註した三十六番

句合その他で內容の賑かしに過ぎないが、上中下三卷を通じて古今点者その門人の發句を挿入してあるので、普通の系譜の無味乾燥のものとは相違して、本書の普及した一原因ともなつて居やう。沾涼は享保廿一年『綾錦』の後編として『烏山彦』甲乙二卷を出板したが、『綾錦』の難書『親鶯』の返答が主で、系譜・印譜に就いて多少の訂正追加記事があるばかりなので豫定に入れなかつた。併し享保の江戸座を窺ひ知る爲めには適當な內容であるから、機會があつたら一讀される事を勸めたい。

誹諧家譜　　寶暦元年板　　中本二冊

傳統の力はいろ〳〵の理由及び條件を次々の時代に支へて、たとへ形式的であつても傳統その者の全く亡びて了ふ日はない。貞門の俳諧は寛文を以て既に過去の黑線を劃され當世のすたりものに扱はれたが、傳統的には侮れぬ潜勢力を俳壇に支持し、特に保守的な京都の俳諧生活を支配してゐた。それ故に京都はのち〳〵まで貞門の傳統を稱する者が、依然それ〴〵の門閥をかためて、貞門の規約を唯一の信條として何事も師傳々々といつて外間から窺知する事を許さなかつた。『誹諧家譜』の編者丈石も亦、安靜系統の貞門であつて其の傳統を文献的に確證する爲め、貞門の系譜を研究して本書を編纂したので、『綾錦』の江戸本位に對して京都中心殊に貞門の傳系を考證した結果を呈してゐる。勿論談林並に蕉風の後系も無視した譯ではないが、家譜に載する兩派の点者は甚だ寂寥で誰某と限られた一部の人に過ぎない。京都の点者としては所司代から点業を許免された三十一人衆の事を特記してゐるが、その多くが貞門の傳統者である事も家譜の特殊な目的を裏書してゐるかに思はれる。丈石の知己たる点者を除いて、著名の俳人に就いて家譜の錄する事實は、誤解又は考證の届かざる疎漏が尠くないので、その餘りに甚だしきものは私見を附註して置い

た。それ以外にも杜撰な点があつて一概に信ずるのは危険である。丈石は平川氏、千載堂と号して、一時再興した漢和の連句に通じ、「連歌名目抄」の如き連句用書集などを著述して相當の學識を持つてゐた。家譜の別冊である点譜は「俳錦」の條にも述べたが、点取の對象となつてゐた点式表德で、初期貞門には長点・平点のみであつたものが、十点廿点となり、家譜の刊行された頃には高判千点の印を使用する者があつた程で、俳諧の遊戯化された一證と見てもよからう。

誹諧家譜拾遺集

明和八年板　　中本　一冊

貞門の傳統で故意にその閥を造らうとした京都の点者も時勢には敵し難く、江戸座の西上につれて新点者の文臺を開く事を默認したので、「誹諧家譜」の後十年ばかりの間に新書点者六十人にあまる多勢となつて、新点者は系統の如何を無視してその贔屓目に甚しいありさまであつた。中興諸派の起つたのはこの時であるが、貞門側の点者はせめて其の傳統だけは確保しようとして、その一人意心齋十口の發企で現存点者の系譜を辨別するため、家譜の補訂かたがた本書「誹諧家譜拾遺集」の編輯に着手したのである。十口は青木氏、一に請古散人と号したが、系統は貞德―貞室―貞恕―貞佐―十口となるので、みづから貞門五世と稱したるも嘘ではない。併し貞門中心の系譜にしては人物の採擇が公平で、家譜に漏した三千風の如きも相當詳しく載せてゐる。十口が系譜の別を辨じたものは明和庚寅現存点者の部で、その中に巴人・宋屋の江戸座系統が門戸を張つて居り、淡々・雛人の大坂系統も入り込んで、貞門点者の漸くその壓迫を感じてゐる事實を證して居る。紀逸の直系太祇が既に点者としての位置を認められてゐる事、殊に蕪村が「當春加二点列一由、雖レ未ダ二青來一任二風聞一而記レ之」とある一項は、晩成の蕪村が新点者の文臺を立てたる證左とし

て常に蕪村傳に引用さるゝ原據である。宋屋が門人嘯山・武然を以て、十口の才學に比して語つた事を聞き、嘯山の古選に於ける、武然の書道に於ける、到底その及ぶ可からざるを謙遜して武然の傳に註記してあるが、果して十口の眞意であるか否か、その「與ニレ客ト絶倒ス矣」といふのが何か寓意を存する如く思はるゝので疑問とせねばならぬ。原本は川西和露氏の藏するところで、帝國圖書館本の寫本であるため、覆刻に不安を感じたが、和露氏の原本で校正し得たのは仕合せであつた。

誹諧家譜後拾遺

寛政九年板　　中本一冊

編者は拾遺と同じく意心齋十口である。今日から評すればもし編者が雅量ある人で、當時の俳諧各派に交渉を持つて居たなら、全國的に調査は行届かずとも京都を中心として、鳥瞰的に中興俳諧史に現はれる新舊主要の人物とその門系をほゞ收載し得たであらうが、点者の傳統を主とする固陋な見解に囚はれたので、本書に載する点者は前著拾遺と共に『誹諧家譜』の延長に止まるのは甚だあきたらなく思はれる。拾遺に点列の加入を報じた蕪村に關しての如き、本書にその後の消息及び後系者に就いて記すべき筈であつて歿年と辭世を掲ぐるばかりなので、同じく京都に居住せる曉臺や闌更はその存在を無視されてたゞの一行も記してない。或は本書にさうした註文を求むるのは無理でもあらう。なぜかといふに本書は寛政三年の編者の序はあるが同年故人となり、その子如口と門人五口が校訂して七年後に出板した未定稿に過ぎないからである。且つ又十口の編纂主趣に就き本書の異本「續再々誹諧點業家譜」の四節之興宴の中に「誹諧式例修練して終に點格に入らんと心掛ある人は、時を俟て其師より同業中へ披露し、業家莚支なければ試文臺と稱し、俳席を催し、同業十老の内を招請し、百韻連歌興行の節其人に執筆を務させ、作法の去嫌等を詳にし、

すべて懐紙捌も滞なく一統帰服の上にて、其師より官廳に達して点者の列に加ふるなり」とあるので見ると、その試文章を行はざる俳諧師は、すべて「もぐり点者」であるから系譜に加ふる事を避けたので、中興諸派の新人は恐らくその結果記録されなかつたのでもあるだらう。こゝに覆刻した原本は藤井紫影氏の文庫にあるもので、特に借覧して異本とも對照したが系譜に關しては格別の異同がないので、全文板本にあるまゝに從つたのである。

西山家連誹系譜　　文化二年板　　中本一冊

談林俳諧の開祖梅翁宗因は一方連歌師として、大坂天滿天神で興行する月並宗匠を勤めてその子宗春に連歌の道統を傳へたので、宗因の發句集には連歌に「西山三籟集」があり、俳諧に一炊庵の『むかし口』素外の「梅翁宗因發句集』があつて、連歌と俳諧は宗因に取つて一身兩躰の如き不可解な關係を持つてゐるかのように見られてゐる。その俳諧の道に特に正系者を定めなかつたので一代限りで絶えたが、江戸座の一列に宗因座を稱する者があつて、其の一人素外が江戸談林七世の傳系を再興する事になつたのである。素外は谷氏、一陽井と號して蒼狐の門人であるところから、蒼狐―田宰―過志―才麿―西鶴―梅翁と逆に師弟の順を遡つて談林七世を自稱したので、この『西山家連誹系譜』も連歌は宗因の血統である西山宗家の代々に限り、俳諧は素外が傳系を證するに必要な者のみに止めたのである。曾て『梅翁宗因發句集』の附錄としたもので、こゝには素外の女素壆の補記した分をも書入れて置いた。家藏の異本には文政六年再彫した四世左簾が更に門系を附記して、本文より四十餘人增加してゐるが、その中には明治三年二世素外を嗣いた朝比奈某などもある。併し素外の直系とは見られないので四世左簾以下は掲載を見合せたが、明治になつて後も江戸談林を稱する俳人のあつた事は知つて置いてよからう。

葛飾蕉門分脈系圖　　嘉永年中寫　一冊

江戸座に對抗した五色墨の一人長谷川素丸（後ニ馬光）は關口に芭蕉庵を設けて、その門閥を高くする政略として蕉門の系統なるかの如く見せ掛けたが、終に其日庵一世として葛飾蕉門なる一派を構へた事になつた。彼は決して素堂の適系でなく又葛飾蕉門といふのも借稱である。彼の後三世其日庵を嗣いだ溝口素丸は幕府の御書院番で家柄もよかつた上に俗才があつて續五色墨の發企者となり、蓼太と提携して江戸俳壇を風靡した爲め、葛飾蕉門は半手として拔き難い地盤をきづき上げた。本系圖は九世其日庵の馬場錦江が素丸以來代々の門人牒によつて編輯したので、葛飾派がいかに世間的に勢力があつたかゞ此の系圖を一覧して思ひはかられる。錦江は『俳諧七部通旨』或は『風俗文選通釋』の如き浩瀚な遺書で知らるゝ學識者で、素堂の直系黒露を貶する爲め曲筆した個所もあるが、一世素丸を擁護して其の傳系の箔を落さざる立場に居る彼としては止むを得なかつた事と思ふ。二世素丸と同門二六庵竹阿の門人である一茶を素丸の直系に入れ、「文化年中一派の規矩を過つによつて、白芹翁永く風交を絶す」とあるのは葛飾派の歳旦帖その他に徴して誤傳である。一茶の援助で今日庵を嗣号した一峨、又一茶が老師と稱した元夢に就いても、その今日庵の借号である事を難詰したりして、葛飾派の傳統を支持する爲め事實を枉げてゐる處があるので、系圖全部を無條件で信じられないが、大體正確な記録と見做してよい。俳諧の系譜中或る一派内に限つたものでは本系圖のように詳細のものを他に見ない。全篇八卷を一冊としたもので、錦江の自筆稿本から轉々筆寫する間に誤字脱字を生じて、流布の寫本には至るところに誤寫があるが、本集に收容したものは帝國圖書館本を參照して訂誤を期したけれど、後で見ると不安な文字がなほ數ケ所散在してゐる。葛飾派の系圖以外たとへば月院舎何丸の如き、江戸に來つて風俗の鳩巣庵に

寄食し、その著『俳諧大鏡』は風俗の板下である事、何丸成功の後風俗を誹謗したような側面觀俳書史の材料になる記事も亦ある。

古風談林正風 誹家大系圖　　天保九年版　　中本二冊

純文學としてはいのちの涸れた貞門や談林の古俳諧に、主としてその用語の上から、それに詠まれた生活・風俗の材料中に、研究對象としての興味と價値を發見した江戸末期の好事家、――多くは戯作者の餘技であつたが、――によつて風俗史的の資料としてせんさくされた結果、京傳の『骨董集』種彥の『用捨箱』となつて現はれた。さうした考證的の仕事を本流の俳諧に取入れて、稀覯の古俳書をさがし求めて試みたのが生川春明の『誹家大系圖』である。春明は伊勢津の藥舖で『翁發句助辭一覽』のような俳書も著はして明治年間まで生存したが、点料で生活する俳諧師でないから、系圖に關してもそれを何かの手段にする考があつて著作したのでない。純然たる考證的立場から出發して在來の俳諧系譜を集大成したのである。引用書目錄に載する一百七十三部のうち、孫引と思はるゝのは圏点を施した四十四部に過ぎない。以てその博引旁證の勞苦を察しられるが、本文に就いて直接しらべて見るとたまく見落しとか、思ひ違ひとかゞある程度で、ほとんど誤謬と見らるゝものゝない正確さを保つてゐる。春明が數限りのない古俳人を本系圖に採擇する際の標準は「百人一句」及び『誹諧師手鑑』等によるか、又は著書の有無に基いたのは賢明な方法で、俳諧史研究に必備な良書と稱さるゝのもその用意の賢さによる處が多い。奥附によると本系圖二卷はその初編で古風・談林の部に該當してゐる。正風以後は中編二卷及び下編三卷に記載される事になつてゐて、本文にも隨所その斷り書が見えるので或は脱稿してゐたかも知れないが、今以て稿本の所在を聞かないのは遺憾である。春明

の緻密なあたまで一人々々のせんさくは充分屆いてゐるが、板下に往々誤りがあつて惟然坊の惟が徒となり、季吟が秀吟となり、校合の完全でないのは春明その人も後に悔悟した事であらう。原本は好間亭蔵板とあつて其の遺族の生川鉄之助氏が版權を持つてゐるが、本大系の爲め好意的に覆刻を承諾されたのである。

蕉門諸生全傳　文政年中稿　小本　一・冊

芭蕉の俳諧及び行狀を敬慕する者は其の門人に對してもまた、同じく思慕の情を起してその人物を知らうとするが、蕉門中心の系譜が存在しないので十哲以外の事蹟は明瞭しない。蕉門の俳諧は全國的に分布して七部集の如きも江戸の選集は『炭俵』のみでその他は悉く地方的のもので、作者もその國々に就いて調べなければ姓氏さへはつきりしない。仙臺の遠藤曰人は奇行のある武士であるが、七部集の註釋に關する遺著もあり蕉門研究者の一人なので、蕉門の作者悉くをそれ〴〵の生國に赴いて踏査する志を發し、勤番のをり〳〵先づ江戸から着手して遺族の存する者にはその家を訪ひ、或はその墓にまうでゝ見聞せるところを手記し、芭蕉の生國伊賀にも出掛けたようである。又その國につでのある者は文書で照會して手記するまゝ『蕉門諸生全傳』の稿本となつたのである。曰人の粗笨な書で紋どころ・名・人物書がさしはさまれ、小傳を書いたあとで又旁註を加へたり、餘白がないところは罫の外に横に縱に書き入れてあるので、稿本としても甚だきたなく書き汚されてゐる。杉風の家で「翁の眞蹟二ツヾラ有」と驚き、同家に傳ふる古人の眞蹟は「曰人こと〴〵見る」といつて喜んでゐる。文書で知つたものは成瀬氏來書といふ風に註を入れてある。曰人は凡兆の下獄を大いに罵つて後で氣がゝりしたものか、墨でくろ〴〵と塗抹したあとが殘つてゐる。越人の傳には鶯笠の説に誤られて熊本説をとり、又『翁反古』を過信して梅石や太無の傳を記し、その誤解も多々あるが、伊賀の門人

中、記錄で知り難い歿年などの判然してゐるのは彼の熱心な踏査のたまものである。原本は帝國圖書館の藏書で曰人の自筆に相違なく、黑い罫引の柱に「晴湖庵句集」と刷つた用紙を使つてゐる。卷末に雜錄風のものが交つてゐるが、それは全部省略して本集には載せなかつた。

かゞ見種　安永三年板　小本一冊

江戸座の高点を覘ふには宗匠の好みに投ずるのが祕訣とされたので、明和五年『誹諧鏡』の初篇が出板になつて好評を得た。宗匠によつて好みの違ふ事を記し、高点句を抄記したもので、年々新板が出て約七十篇に及んでゐる。『誹諧鏡』と共に宗匠の所屬及び寓居・別号を載せた住所錄といふ可きものが別に出板になつて、いろ〳〵ある中の一つ「かゞ見種」を採つて覆刻して見たが、江戸座の分布狀態がこれによつて大略窺はれる。それに其角座の野菊庵、深川秋色といふ女宗匠の肩書に「いはしや清兵衞うら」とあるので、若海の『俳諧人物便覽』に二代秋色を茶種屋清兵衞妻と誤り、その茶種屋とは藥種屋である事を指摘して、なほ且つ清兵衞の妻とは同家の裏に居住した誤傳である事を氣付かなかつた事實を知るような傳記資料ともなる。『誹諧鏡』と同じく下谷の花久が板元である。こんな宿所附を懷中して「けふは誰の点を取らう」と相談し、点料を卷に添へて使ひをはしらせた江戸人の安逸な生活氣分、それと共に俳諧が市井の俗に落ちたのは當然の事でないかと考へさせられもする。

歷代滑稽傳　正德五年板　中本一冊

俳諧の變遷をまのあたり見た元祿の人々は漠然とした感慨は抱いたであらうが、その變遷を組織あるものに纏めよ

うとは考へ及ばなかつた。流石許六は蕉門の論客である。この變遷に着眼して『歴代滑稽傳』の中心問題に扱つたのは確に時流を卓越してゐる。許六は俳諧の發生を本式連歌の後「文臺執筆も立ず」また打越の嫌ひ、月花の數もなく「我儘いひがちにして」のあそび本位のものと論じて、守武を開基に擧げ、宗鑑より貞德へ說き及んで時代々々の主要な人物に就き、その發句・附合を引いて批評し、更に貞門より談林へ、その變遷を論ずるに際しての人物も適當であるから、時代の傾向を察して其の說に偏頗の見はない。その師芭蕉に對しては桃青二十哥仙より「日々向上にすり上げ、終に談林を見破り、はじめて正風躰を見屆」て「道野邊の木槿は馬に喰れたり」の一句で俳諧中興の開祖と稱されてより、花屋裏に於ける遷化までの事蹟を傳へてゐる。許六の本心は芭蕉の血脈相續の唯一人である自讃の爲めの著述かも知れないが、芭蕉以前の俳諧史大意として散漫な内容ながら嚆矢の書である事を許容してよい。附錄の一枚記請及び俳諧指南は例の許六の自讃論で割引なしで信ずる譯にいかぬ。許六はこの年死歿したので遺言により追善集を見合せて、門下の者が本書を開板して追懷の料としたのである。

芭蕉翁頭陀物語　　寛延四年板　　中本一冊

寧ろその周圍の人の生活氣分を逸話風に書いたものであるから、芭蕉一人の物語なるかのような本書の標題は不適切である。雅文小說を創始した才人凉袋の著作なので、かなり深刻な描寫を試みて一幕物の材料になる戯的場面でもをり〳〵ある。義仲寺の法莚に出席を拒まれた路通が怒つて、大津の侠客をさし向けた時、其角が文臺を飛び越して十德の袖まくりに啖呵をきつて、いのち知らずの度膽を拔いた話、その路通が貧窮して娘を賣らうとする鬼貫にさゝやいて、それ以後芭蕉の僞筆の流布した事などがその例であるが、凉岱の小說的構想から事實を彩色したのではないか

と疑はるゝところがあつて信じ難い。序文を見ても涼帒のさうした脚色を思はせる。卽ち葛鼠といふ行脚僧が大坂の淺生菴―野坡からの聞書を原稿として、北越の都因坊が金澤や伊勢に傳はる物語を補記したものを、涼帒が再選した如く書いてあるが、いづくんぞ知らんその葛鼠も都因も涼帒の前号なので、彼の「紀行俳仙窟」のように全然架空の物がたりでないが、どこまでが事實かを疑はせる理由のない事はないであらう。許六の癩病説もこの頭陀物語から出たので、許六と涼帒の師事した野坡との不和に想到すれば謎が解けるようで、許六のためその汚名を濺いでやりたい氣にもなる。かうは疑ふものゝ全篇悉く虚構とは見られないのみか、蕉門の逸話としてはこの書を除いて傳へたものに乏しいので、その存在を否定されぬ蕉門研究のこれ又一資料である。

誹諧世説

天明五年板　中本五冊

言行を愼んで人口に觸るゝことを厭つたので、どこを旅しようが、どこで生活しようが、芭蕉には人の意表に出る逸話はなかつた。國々の門徒は師の一言一行の風聞をも逸すまいとしたが、同じような一夕の座談や話柄よりは傳らないので、『行脚怪談袋』のごとき荒誕なものが捏造されたのである。加賀の金澤は芭蕉の行脚の杖を止めたところでその際の二三の教誡が門人の骨に徹して居り、支考や露川が歸國してそれ〳〵聞き知つた逸事を語つたので、比較的に材料がまとまつてゐたと見えて、闌更の『誹諧世説』には多方面な而して確實性のある物語が載つてゐる。闌更は北枝の遺書、希因の聞書によつて同國涌湯の温泉で筆を執り、芭蕉の逸話を主に門人の奇行をまじへて『正風人物誌』と題號したが、出板を望む者があるので「誹諧世説」と改題して與へた事を自序に述べてある。逸話の出所を記してないが『芭蕉翁行狀記』にある智月尼のかたみ乞ひ、『草庵集』の兼好畫賛ぬかみそ壺の句のこと、『草刈笛』に見える

素堂の此蓮の音讀說その他、蕉門の俳書によつた證左があるので、記事に對して信賴を裏ぎるような浮說はない。頭陀物語の路通の寃を雪いで「古人を罪するの咎、豈拔舌のみならんや」と峻烈な論告をして凉袋の筆過を痛憤してゐる。たゞ越人が芭蕉から疎まるゝ因をなした「うらやまし」の發句、その慚愧を後に芭蕉がよみして選集に入れたといふ一項と、何丸が『誹諧小鏡』でその嶋原の妓なるべきを指摘した吉原遊女奥州に就いての一項とは、闌更の誤傳であると思はるゝだけである。全篇五卷、ところ／＼に挿繪があるが、本覆刻には縮寫したので原板の味ひを少しく損じたようで惜しい事をしたと思ふ。奥附に『俳諧世說後篇』とあつて未刻の註がある通り、その後篇は終に出板にならなかつたらしい。闌更には別に『芭蕉翁消息集』の編があり、その俳諧生活の甚だしく俗に落ちて卑しく考へられるとは反對に、蕉門研究の上に好文獻を殘したのは其の人物がどこか篤實であつた故であらう。

花見車

元祿十五年板　中本四冊

京の井筒屋から年々出る三つ物で諸國の風躰を修業した田舍俳諧師があつて入京した。壬生念佛を見物して茶店に立寄り、きり髮の美しい女に誘はれてその家に行き、一日京の点者生活の墮落を聞かされた上、点者の位をこの里嶋原の傾城になぞらへて見るべし」とのすゝめを誠に受け、元祿の俳諧師を悉く賣女に見立てゝ、からかひ氣分でその品定めをした俳諧評判記である。太夫は上の点者で「琴・三味線・小哥は得ねども」みめかたち好ければ「人／＼おもひつきてときめく」のだから、その位に擬せられてもまだよいが、天神となると風俗も落ち「らうそくのひかりもうせて」次の点者とされるのでその位に配された者は小腹が立つて來よう、それ以下附添の禿らるないかこゐ、江戸のかし、大坂のあわざと同格の北むき、さては江戸の惣嫁、京の夜鷹のあさましい稼ぎ、越後のうき身、伊勢のあんに

や、紀伊の現妻など國々の下々の賣女に見立られた点者は、いきりたつて其の侮辱を怒つたであらうが、天神職の團水が誰より先に憤慨し『花見車評判鳴弦之書』を出板して、『花見車』の内容よりか著者に向つて激しく罵倒を浴せ、「太夫職の宗匠には一句に一曲ありて人うやまひなづむ」とある文句に就き、團水がその作者と睨む轍士みづから太夫の位に擬してゐるので、「三十年來マダ汝ガ一曲ト云チウケ玉ハラズ」とあてつけ、「若モ唐人ノ中ニモ紅色人ナドガ面白ガル句ガアルカシラズ、日本人ノ耳ニハ一句モ思ヒナヅム句ハナイ」と、團水その人が阿蘭陀西鶴の門流であるのを忘れて罵つてゐるのが面白い。「或人來テ曰、花見車ハ轍士ガ所作也トカヤ、草書マサシク轍士が、手跡也」とその名をあげ、「西鶴ナ師ノ坊〳〵ト敬タルハ、大坂ノ誹諧師等ガ知トコロナルヲ此タビ頭書ニ宗因弟子ト書タハ、自ラ高ブル不孝ナリ」として轍士攻撃の筆をどこまでも收めない。本書は團水の看破した如く轍士の戯作であらう。一の卷は惣序で点者の樂屋をさらけ出し、二の卷は京・大坂の宗匠で見立評のうちの特殊な用語を頭註し、その發句と著書を添へてある。三の卷は江戸及び諸國の部で體裁前に同じく、四卷は「勝名并編集之作者」として俳名を欄外に書き、賣女の名前らしく假名がきの替名を附け見立評は省いてある。跋の俳諧請狀之事は輕妙な文章で「京や大坂や江戸、いなかの点者ひとけとよみ上げたり」で其の筆を擱いてゐる。

俳諧　京羽二重　　元祿四年板　　中本四冊

元祿は蕉門の俳諧に全く統一された時代である。たゞ〳〵蕉門に款を通じた談林の殘黨が二三命脈を維持したのみで、貞門の徒は殆ど屛息して了つた如く常識的には考へられてゐる。が、實際の勢力は貞門の握るところであつて談林の江戸・大坂に流行した以外、蕉門の如きは地方的に存在を認められたに過ぎないのであつた。元祿四年京の林

鴻がその著「誹諧京羽二重」に登錄した点者及び誹諧師の名簿を見て思ひなかばするであらう。其の点者とは蓋し点料の收入を以て生活する職業者で、誹諧師とは後世の遊俳の如く衣食の途は他に求めて俳諧を餘技とする者か、又はなほ点業を許されざる徒である。住所別によつて京都を七區に劃り、順次点者の俳号幷に住所をかゝげ、特に「毎ニ一人ヲ採リ其傑作一句ヲ」その眞蹟を摹寫して一枚に三名限りを載せてあるが、その点者階級の四分の三は貞門系統で占めてゐる。談林はその一部と及び誹諧師の中に黨與を擁するが、蕉門に至つては誹諧作者の部にちらほら散在するばかりである。「二条通ヨリ下立賣マデ之間」に當時在京した芭蕉が「物すきや匂はぬ草にとまる蝶」の句幷に西洞院二条上ル町の宿所を記さるゝの外、凡兆が小川さはら木町上ルに、去來が中立賣堀川東へ入に別記され「猿簑」選者の二人とも群小作者と同一に待遇されてゐるので、その世間的評判の聞ゆるところ無かつたであらう事が想像されるでないか。「京羽二重」の一、二の卷は住所錄で、三の卷は道統之圖の部に貞德と其の一門の略系と、賦物その他貞門の規約を詳記し、四の卷は同じく作法の一般を說明したものである。編輯の體裁からは系譜の中に扱ふ可きであるが、本書は豫定外の覆刻で、「貞德永代記」の難書になる爲め收容した關係で逸話の部に揭載する順序となつたのである。原本は川西和露氏の藏架で本文中さして必要なき去嫌の詞等を省略した事は本文に註記して置いた如くである。「京羽二重」の題号はその頃流布した買物重寶記に同名の書があるので、それから思ひ附いて誹諧の二字を冠らせたのであらう。

誹諧 貞德永代記　　元祿四年板　　中本五冊

京の談林高政を邪宗門として其の『中庸姿』を論難した隨流の著書で、今度は同一貞門系統の林鴻に對し、「誹諧京羽

二重」に貞德の名を汚した罪科を着せて同書の絶板を申し入れ、書肆寺田重德の仲裁で随流及び門弟五人の發句を板行から削らせたが、喧嘩好きの随流の事とて、それなり默認して居れないので、此の大部の『貞德永代記』を著作したのである。随流の林鴻を非として咎めるのは、「京羽二重」のうちの一部で、貞德の系圖の杜撰なる事、賦物口傳及び木式并發句秘密切レの如き貞門の秘奥を板行したといふので、「貞德の名をかりて御傘違背之句法を出せり」と稱してゐるが、林鴻に強ち惡意があつての所爲とも思はれない。なの攻撃は随流の偏狹である。『貞德永代記』の價値は貞德が俳諧一道の宗匠となつた由來を述べ、且つ寛政六年妙滿寺に於ける俳諧の初會席の事や、西武、正章に批点を許した芦の丸屋の月の會や、例の三つ物の起源を說いた点にあるので、貞門七誹仙の小傳その他通覽すれば貞門誹諧史の絶好の資料となるが爲めである。首卷に林鴻に對する公開狀と見るべき「あらはし衣」を收め、一の卷は貞德一代の俳諧に就いての繪師傳、二の卷は同じく其の續卷と七誹仙品定を掲げ、三の卷は明心居士夢物語及び京羽重の評判で四の卷は同じくその續きである。随流は西武の門弟なので所々に師の德行を稱揚してゐるが、西武苦心の作「萬葉之誹諧」は貞德の孫永三が讃辭を呈したもので、随流が「よみよう望みあらば重而尋ねられよ」と誇示するが如く、當時の俳諧師を驚異せしめたものに違ひない。原本の校合に就いて小宮豐隆教授の好意で、東北帝國大學に藏する旧狩野文庫本を借覽して嚴正を期したのであるから、板下の誤りを除いて本文は正確に覆刻されてある筈である。さし繪もすべて原寸大で省略した個所は一もない。餘事ながら漢文の跋に『京羽二重』を揶揄して「任二雲風一渡ル阿蘭海ヲ是芦月乎宋丸ノ雜似ミル紅毛船一乎」とある雲風は林鴻の別号で、芦月はその師似船の号である。師弟同腹して紅毛流の曲事を行へるを諷したものであらう。

芭蕉翁反古文　文化七年板　中本二冊

肥後八代の正教寺の住持であつた僧文曉が、長崎で發見したと稱する『俳諧芭蕉談』の一部である。活字本は『花屋日記』の題名で行はれてゐるが、原本には題簽に『芭蕉翁反古文』とあり、序文には『芭蕉談終焉實記』また、立みだしには「翁反故 終焉日記」とあるが、「花屋日記」の文字はどこを探しても出て來ない。恐らく活字本の覆刻者が無題簽のものを底本として假にさう名附けたのが流布して、その後の飜刻者も同名を襲ふ事になつたのであらう。文曉の藏せる「芭蕉談」五篇中未刻のものは黒田源次氏が正教寺より得て『芭蕉翁傳』として飜刻したので、全篇文曉の創作である事が判然し、此の反古文の書史的價値は輕視されるに至つたが、文曉の創作としても浪化の遺稿中にある去來より浪化宛の芭蕉の終焉を報じた消息中の事實、及び支考の『笈日記』などを參照してあるので全文虚構の記事であるとはいひ難い。芭蕉に關する逸話の一として見れば興味を以て讀了されるであらう。文曉の作とする說には支考・惟然・次郎兵衛の署名があるが、文體の同一なる事を第一に指摘してゐるが、廿六日園女亭の饗應に園女を稱して「岡西惟中が備前より浪華にのぼりし時惟中が妻となる」の一項の如き『誹諧家譜』に誤られた記事で、これのみを以ても文曉の創作なる事は動かし得ないのである。（勝峯晋風）

日本俳書大系 第十五巻 俳諧系譜逸話集 目次

誹諧作者名寄

種寛著

いそのかみふるきを見るに、公家・武家の系圖は或は高官、和哥の道、其家〻の威徳をあらはさんがためなるべし。今、予が書しるせしは誹諧のすき人なるを集め、作者の名を後世までも殘らましくおもふ故也。上古、宗鑑・守武のころまでは、此道すける人稀なる故、門弟と名付可人なし。中比、貞徳・立圃老人のころより誹諧の詞の花盛に成し故、門弟・門人多し。其枝〱世〻にはびこり、柾木のかづら永き代までも傳はりぬべき師弟、見聞及たるを書付侍ぬ。此外にも有べけれど知ざるはほいなし。田舍の作者は門弟しらざる故、國〱にて聞及たる作者斗、書しるし侍る。

誹諧作者の名寄（寄）

貞徳　長頭丸　逍遊軒　明心居士　松永氏

- 松江　重頼　犬子集　毛吹草　懐子　同追加
- 雛冠井　令徳　撰崑山集　土塵集
- 瀧谷　以重
- 末吉　道節
- 馬淵　宗畔
- 本勝寺　日能　越前ノ住
- 山本　西武　鷹築波撰者　砂金袋
- 要法寺　友閑
- 安達（原）　貞室　撰玉海集
- 端氏　定重
- 池田　正式　氷室守作者　太和ノ住人
- 江戸住　未得　吾吟集
- 北村　季吟　山ノ井　新犬筑波
- 有馬　友仙（寔）　近江ノ住
- 中嶋　貞宜
- 萩野　安靜　撰細布　詞友集
- 荷類屋　政信

撰鷹筑波（玩）　崑山集　淀河　油糟　御傘　久流留

- 西田 元知　撰拾玉集
- 青地 可頼
- 渡邊 氏重
- 高瀨 梅盛　口眞似草　鸚鵡集　捨子集　早梅集
- 東海 正頼
- 寂光寺 泰圓　破暑魘
- 池田 是誰　初懷作者
- 加藤 貫風　歩荒神作者
- 中井 正直
- 岡本 胤及　錦屑撰ス　備前住
- 片桐 良保　雜談集
- 津田 政昌
- 奥西 友三
- 中山 榮治
- 谷口 重以　百人一句

重頼 松江氏　犬子集　毛吹草　同追加　懷子　チチメノト

- 重方
- 重貞
- 重供
- 昌意
- 道二
- 長好

- 久重
- 貞義
- 重好
- 宗隆
- 重昌
- 意敬
- 廣寧
- 重次
- 近吉
- 貞盛
- 貞伸

- 安信
- 重明
- 高明
- 信足
- 元辰
- 重庸
- 淨榮
- 重興
- 恥布

令徳

- 令富　令徳子
- 令清　同
- 妙仙　令清母

- 藤谷 貞刹
- 住田 政信
- 森田 繁秋
- 藤田 友宜
- 藤谷 貞兼
- 高瀨 元晴
- 村上 令敬　旅枕作者

- 石川 鄙哉
- 小嶋 宗賢 鏧鏡作ス
- 一原 友我
- 澤田 由雪 和哥竹
- 清水 不存 尾陽集
- 西村 重俊
- 松井 久德
- 小西 存昔
- 青木 宗員
- 惠昌軒自安
- 高瀬 元親
- 鈴村 信房
- 鳥河 京永
- 村上 令知
- 尾西 朝方
- 小島 重友

西武 山本氏

- 嶋本 正伯
- 法然寺素白
- 小原 正在
- 椋梨 一雪 鋸屑集 アマアカリノリゴシラエ
- 山田 善種

- 硯氏 一武
- 銀竹軒光方 雀ノ子集
- 觀音寺知泉
- 松亭子政山 誹集良材
- 氏不知勝直 水車作者
- 清水 宗秀
- 田中 可雪
- 佐野 敎心
- 松川 春元
- 中村 正近

貞室 安原氏 始ノ名正章 一壼子

- 藤本 惠佐
- 兒玉 貞利
- 清水 言聽
- 中川 喜雲 京童部
- 山本 善入
- 平尾 幸以
- 藤井 秀朝
- 足立 正哲
- 宇都宮由的
- 兒山 隈光
  - 宮川 長之

元次 貞室子

季吟 北村氏 拾穗軒

- 山岡元隣 身之樂千句
- 大村可全
- 下村庚吉
- 文都
- 則常
- 慈仙
- 俺雲
- 宗政
- 朝三
- 友光
- 貞成
- 重信
- 快溫 サツマノ住

安靜 荻野氏 以空軒

- 俊秀
- 重隆
- 宗英
- 吉道
- 友慶
- 重畢
- 滿叡
- 宗貞
- 不水
- 定利
- 玄康
- 政之

元知 西田氏

- 辻氏政義
- 義俄貞友
- 廣田傳之
- 辻珍之
- 芝原好武
- 西田元林
- 西田元以
- 田中一至

良保 片桐氏

- 小谷玄賀
- 半竹庵良元
- 田中正葉
- 豐田元重

梅盛 高瀨氏 佗心子

- 內海安重
- 中嶋貞晨
- 大和田武門 繼子立作者
- 佐ゝ木道繁
- 伊藤信德
- 高梨野也
- 內田平吉
- 光堂愚鈍
- 進藤世址
- 澤田休也
- 顧好軒慈敬

- 依田 酒齋
- 速水 忠榮
- 座尾 重俊
- 懷惠軒離雲
- 座尾 忠俊
- 三井 近次
- 伊東 良里
- 村上 生信

- 坂本 正房 伏見住
- 宮崎 重俊
- 阿形 直入
- 中ノ田 正元
- 藤村 倫員 木玉集
- 吉見 忠次
- 秋津 壽仙

道甘 ヘチマ草 花ノ露撰者 伏見 花盛兒也

- 仲 宗房
- 廣岡 南枝
- 並川 武宗
- 大澤 清長
- 馬場 勝茂
- 吉田 小夜
- 伊丹 愚心
- 龍見 廣次

一雪 椋梨氏

- 自齋

銀竹軒光方 田中氏

- 六條 洩齋
- 會津 知鏡
- 本國寺雲閑

- 前田 正勝
- 六條 尙女
- 友松軒月譚
- 小山 成次
- 藤林 見笑
- 舟木 貞長
- 宮川 盛重
- 端本 清安
- 橋本 勝春

政由 宮川松堅子

- 原― 氏吉氏
- 速水 近知
- 小山 重尙
- 川草子秀延

立圃 野々口氏 始之名親重 松翁

撰發句帳 ハナヒ草 河舟 九百韻 空礫 德万歳 硯誹諧

- 江崎 幸和 底拔日作者
- 池田 常知
- 富田 宗祐
- 福井 知德
- 加納 道與
- 飯田 成次
- 中野 仲昔
- 古筆 一村
- 氏不知 重次
- 蜂屋 宗富

御原正房

服部定淸　尾蠅集作者

辻氏宗順

隼士常辰　撰蘂集　コマザラヒ作ス

竹井嶺利　江戸ノ住

尾關棄言　同　住

境　滿直　江戸ノ住

小野信世　同　住

北村宗利　同

富田畧文　同

好　女　松岡定用妻　犬筑波詞書ノ人數

岩田有次　武州住

岸木友正　同　住

喜多村立以　烏帽子箱　入部集　長カモジ集撰者

青田立賦　大坂住

喜多泰重　同

林氏定親　大坂ノ住

櫻井親十

德成寺知詮　同　住

喜多田爲親　同

河崎方孝　同

同　方女　コキリコ千句之人數ニ入

大坂昨非

川崎宗立友直　若狐作者

佐々木定行　備後ノ住

中山親信　同

井上友貞

岩井來安

松坂知年

木村好与　世話燒草作者

圓滿寺皆虛　土佐ノ住

伊藤宗雅（マサ）

關氏昌房

井ノ口流味

浦井言泰（ヤス）

寺田政之

河口高敦（アツ）

小林三辰（ミツトキ）

等覺寺知秋

法光寺玄古　今ハ大坂ニ住

氏不知久次

後藤光忠

內田正朝

飛田加近（ヨシチカ）　詞之友達作者

今井了三

朝江一風子種寛（タネヒロ）

幸和 江崎氏

- 常倫
- 家重
- 光定
- 重勝
- 有次
- 意信

定清 服部氏 離牧子

- 伊藤氏賴富 立圃門人也
- 正隣
- 三信
- 榮富
- 光雅
- 重休
- 光之
- 通定
- 俊輝
- 可悦
- 信清
- 定供
- 一壘
- 氏一
- 政慶
- 一崇
- 昌春
- 氏友
- 常咋
- 有靜
- 重悦
- 資則
- 重利
- 元純

常辰（ツネトキ） 隼士氏 月菘軒

- 昌成
- 政之
- 氏重
- 貞長
- 宗房
- 親正
- 重則
- 重朝
- 利之
- 元宜
- 重知
- 重次
- 記孝
- 好治
- 祐龍
- 常信
- 知覺
- 行尙
- 咋三
- 正俊
- 未知
- 常長 常辰子

立以 大坂住 喜多村氏 休齋

- 喜多村宗俊 大坂
- 大琳寺光親 同
- 友田常朝 同
- 柴田富平 同
- 古河親太 同
- 茨木重次 同
- 氏不知正長 同

友貞 井上氏

- 玄隆
- 重昌
- 定義

仲昔（中野氏）──友昔（仲昔子）

定川（松訶氏）──好女（定川妻）

方孝（川崎）──方女（方孝妻）

親十（櫻井）──同娘

爲親──吉藏丸／爲親妻

山崎宗鑑法師

五畿內　五ヶ國

山城（作者右ニ在）

(上)太和

池田氏 正式　氷室寺

同 正親　同子

南都住 定之

下市住 正信

河內

清水氏 春奢

息地 良玄

和泉

日暮 重興

八寺村住 秀盛

堺住 慶友

同住 弘永

正法寺 成安　埋草作ス

一正

硯氏 一武

阿知子 顯成　境海草作

水野氏 頼廣

堺 盛之　境海草

淺井 正村

細谷氏 成元

眞光寺 以專

成之

攝津

大坂 休甫

天滿 空存

天滿宗因 一幽

川崎氏 友直　若狐作者

了安寺 夕翁

梶山氏 保友

喜多村氏 立以　烏帽子箱 長カモジ　入望集撰者

山城大椽 貞因

林氏 定親

吉田氏 立賦

靜壽

大津 如貞

喜多氏 泰重

櫻井 親十

蘆山 休安　夢見草

大坂住 意朔　大坂 知詮
喜多田 爲親　佐藤氏 榮甫
川崎 方孝　方孝妻 同方女
大坂住 禾刀　大坂 好道
朝山 是雲　齋藤 滿永

東海道 十五ヶ國

伊賀
松本氏 未友

伊勢
荒木田氏 守武 獨吟千句　望一 獨吟千句 後千句
山田住 正友 長帳　春陽軒 加友
山田住 光有　同住 光貞妻
山田住 光晴　山田 利清
竹内一香軒 三信　山田住 如之 正直集
山田 慈空　荒木田氏 武珍

志摩

尾張
吉田氏 友次　渡邊 有也

三河
伊藤氏 一和　池田氏 ノ身
清水 不存 尾陽集　一原氏 友我
種政

遠江
內藤 顯香
森氏 清長

駿河
久能山 德窓

甲斐

伊豆
下田村住 光舟

相模
小田原 武正

武藏
齋藤 德元 初學抄　高嶋氏 玄札 十種千句作者
江戸ノ住 卜養　野水堂 白鷗 十種千句 獨吟
江戸ノ住 未得 吾吟集　尾嶋 棄言
竹井氏 嶺利　呂雲軒 春清
蝶々子 貞宣 物忘草 思出草　高津氏 令巾
境氏 滿直　西嶋氏 東次
小野 信世　山人 貞宣妻

安房　上總（總）　下總（總）　常陸

富田 譽文
北村氏 宗利
筒井 宣安
岩田 有次
岸本 友正
江戸 立志

東山道 八ヶ國

近江　美濃　飛彈　信濃　上野　下野　陸奥

在馬氏 友仙
大津 宗連
山端氏 塵哉
千村氏 一歩
立木 乾宅
津田 定政
飯袋子 重道 草津住
同住 重軌
大田 可政
正重
會津 知鏡
調和

出羽

常福院 尊爲

北陸道 七ヶ國

若狹　越前　加賀　能登　越中　越後　佐渡

山川氏 無樂
高田氏 正種
柏崎住 杣都
木間氏 重治
本妙寺 日能
大橋氏 可理
塚氏 家規

山陽道 八ヶ國

丹波　丹後　但馬　因幡

安都
横山氏 吉英
小嶋氏 定次
生野氏 安永
多田 正安
不及
長野氏 桑秀
宮木氏 孝庸

伯耆　荒尾氏 直久
出雲　齋藤 高周
石見
隱（岐）波

山陽道　八ヶ國

播摩　池田氏 是誰（破魔初音）　豐隆
　　　武田氏 三吉　垣内氏 交云
　　　內山氏 一イ子（蟲笛作者）　寬政
　　　村山氏 時雨　宮原氏 貞纖
美作
備前　小松原梅要子 時明　汲流子 俊安
　　　岡本氏 嵐及（鋸屑作者）　西村氏 良菴
備中　吉岡氏 信元　馬越氏 元定
備後　正久　丸山氏 定友
　　　佐々木 定行　中山氏 親信

安藝　廣嶋 爲時
周防　可雲
長門　龍清　粉川 定義
紀伊　宗明　定時
　　　日方氏 貞長　正平
　　　高野山 泰雲　橫瀨氏 時秀
　　　高野山 杏山　石倉氏 一入子
淡路　須藤 玄全
阿波　內田氏 正信
讃岐　高松 道政
伊豫　泰氏 一景　廣大居士
土佐　圓滿寺 指虛（世話燒）　燕石子（牛飼）

西海道　九ヶ國

筑前　福岡 見春
筑後
豐前

豊後
肥前 長崎 玄茂　如自
肥後 荒瀬氏 金門　能本 一直
日向
薩摩 太山氏 維也　政重

誹諧書物の名寄

守武千句　犬筑波（元）
波奈比草　御傘
蕟句帳　淀川油糟
鷹筑波　川舟徳万歳
花月千句 人數 立圃常中季吟宗祐 成次榮徳通與藤松
蓉礫　犬子集
初學抄　九百韻
底拔臼千句　貞徳百韻 自註
望一千句　同後千句
崑山集　毛吹草
氷室守　歩荒神
馬鹿集　毛吹追加
土塵集　玉海集

山之井　計布ノ細布
立圃万句　山田誹諧 利清 孝晴 室一
紅梅千句 貞徳 安静 友仙 政信 正章 可頼 秀吟 執筆　安山子集
鹿驚
鵜鷺誹諧 立圃 信世 嶺利 宗利 葉言 好么 満直
若狐千句 立圃徳元玄札 右三吟ノ百韻與ニ在
世話燒草　夢見草
拾玉集　口眞似草
返り花 立圃 定正 常政 和年 昌房 流味 季安 好與 友貞 執筆　牛飼
砂金袋　砂普鹿
物忘草　伊勢長帳
尾陽集　獨言
新（續）犬筑波　イナコ
誹仙　鸚鵡集
吾吟集　和哥竹
錦屑　錦屑集
京童部　誹諧合
十種千句 玄札 白鷗　身ノ樂
尾張八百韻　思出草
拾子集　木間さらひ
蓁蘩集　織子立
へちま　辨説集
懷子 ヲチメノト

こきりこ千句 立圃 常辰 立以 親十 友貞 木安 立款 秦重 和年 定親 知證 方孝 昌房 昨非 方女
烏帽子箱　入聟集
百人一句　正直集
境海草　早梅集
鬢鏡　百韻之註 貞室
雀子集　花の露
鼻笛　埋草
水車　旅枕
誹集良材　長刀
尾蠅集　硯誹諧
初髻　和句解
かた言　木玉集
鄙諺集　茶抄竹
落穂集　さゞれ石
雨アガリ——センダク物
新百人一句　詞ノ友達
のりこしらへ

堀河通二條下ル町　本屋七兵衛板

綾錦（あやにしき）

上・中・下

沾涼

邇今往古無誹諧宗匠者唯有連歌之宗匠添側
誹諧而已自慶長中花咲翁蒙誹林一道之宗匠免
許以來海內靡然爲之誹林權輿矣自是以來其
源洪其流蕩達此道以爲宗匠者如潮之涌
如流之漫連者幽玄誹者寬濶捨其屈樂其伸
一人之心追万人而移者時勢使之然耳遂有宗
匠出連而入誹者混沌不可辯識焉猶
有東都下點者夥其滄區不分明矣因是遂
以古書爲力中躋踞老誹之前拂其舒上之塵
近任其所知覺各遑我持量次第猶蜘
蛛之纏糸綾錦兮縷以爲此書題號云尒
享保壬子夏日武陽江都神田散人崔下菴沾涼叙

印　印

綾錦 巻之上

沾涼輯

○元來連歌と誹諧は別〳〵の物にあらず。上古は今の連哥、今の誹諧混合して其差別なし。建治新式・應安新式より連歌の法さだまり、みだりかはしき言葉をまじえぬ事と成侍る。俗言のまじえたるを狂連哥といへり。されば、ざれごとうたと云誹諧歌の文字をかりて、狂連歌を誹諧連歌と名付たるなり。眞連歌今ノ連哥　狂連歌今ノ誹諧也

○誹諧・俳諧の文字につきて、誹書にさま〳〵の論を記せり。兩品とも八雲御抄九品のうち也。

誹ハ甫尾ノ切シ、ハイノ音なし。俳の字を用ゆべしと決定したる說あり。

俳ハ說文ニ俳戲也。从レ人ニ非聲亦聲也。

徐曰、今言俳優是也。漢書談笑の類、俳倡とあれば、東方朔、或日本の曾呂利などの類ひ、みな俳優なり。優旃といふ人は、秦の侏儒也。郭舎は武帝の倡也。ツ[illegible]俳ト[illegible]テ、共ニ日本ニ云伽ノ者ナリ。されば質を以て辯舌・利口をつとむる所は、

俳にして俳優・俳倡也。又辯說・利口ある者の詞のごとく、水を火にいひなして言葉を以てつとむるは、誹にして是も諧なり。

誹ハ說文ニ誹謗也。从レ言ニ非聲或省作非前鼠錯傳非謗不治　ハイの聲あらずといへども、ヒの聲あるときんば、則ハイの聲に通る也。又誹謗は嘲哢の事にあらず。戲ていふ事なり。誹諧歌をざれごと哥と云は、よくものをいふ人のざれたはるゝがごとしとあり。古今集・拾遺集にも誹の字を用ひられたり。貞德祕決も誹の字なれば、誹道にてはいよ〳〵誹の字よろし。猶ふかき口傳ありとぞ。

諧ハ羽皆切、說文諧詥也。从レ言皆聲廣韻和也合也調也偶也

○連歌舊式曰　人皇九十代後宇多院御宇建治二年に、鎌倉藤谷爲相卿の作。是ヲ大道ト云。

○同新式曰　人皇九十九代後光嚴院應安五年、二條禪閤後普光園殿下。書加玉フ。是ヲ小道ト云。

○新式追加　人皇百三代後花園院享德元年、一條殿下關白兼良公、時の宗匠に議じ書加玉フ。

○新式今案　人皇百五代後柏原院文龜元年肖柏牡丹花勅を請て、逍遙院殿下實隆公合躰し書加玉フ。

○北野連歌出葉元祖は梵灯菴也。天神宮ノ化身ト云　誹諧根元の書は新式を大規矩にして、松永貞德御作を編ム。其後、野々口立圃のはなひ草・松江重賴の毛吹草・北村法師の埋木等也。

○連誹の神に天滿宮を崇む事は、北野宮老人と化し、二條殿下へ來らせ玉ひ、立水・臥水の書を乞、梵灯菴主に授け給ひしと也。よつて北野連哥も立水の出葉を梵灯より受傳る也。禪閤御親筆の書は神殿に納る。連歌の神躰は立水・臥水也。是天滿宮の御雙眼也といふ。誹諧は連哥同躰なれば、同じく天滿宮を崇ム。往古連哥の神は日本武尊を崇し也。

○應安の頃、普光園殿下より侍公に宗匠を給はり、右の兩書祕決・口傳、新在家につたへて、代々連歌の龜鑑となれり。

（應安の頃江州石山にて御會　二條殿下普　同殿

月は山風ぞしぐれに鳰の海　良基公

さゞ浪さむき夜こそ更けれ　周阿

松一木あらぬ落葉にあらはれて　侍公

此時侍公始て宗匠を承る。一座の好士は 敎齋 善阿 昌順 信照 良阿 等也。

○慶長の頃清水金閣殿御會　九條殿下號三藐院 玖山公一

花に猶道わけ添ん行衞かな　兼孝公

春は霞にひかれぬる袖　玄旨

たかさいふ裾野ゝ雉子鳴すてゝ　貞德

此時貞德始て宗匠をゆるさる。一座の好士に、宗養 宗鑑 紹巴 永種 等也。

山風を腰にさしたる扇かな　三條西三光院殿 實條公

山崎の宗鑑かきつばたを折さて、池に望むを御らんじて

宗鑑がすがたを見れば餓鬼つばた　近衞殿下號龍山公 前久公

呑んさすれど夏の澤水　宗鑑

翠からす山ほさゝぎす飛落て　玄旨

有明を待月はまん丸　貞德

御菓子のびわを

颯ゝの鈴なり凉し枇杷の枝　烏丸亞相 光廣卿

太閤朝鮮出陣の時

からたちのその身はやがてきこゝ哉　二位法印玄旨

わかめもや汁のつまごめ出雲苔　救齋

五月雨は峯のまつかぜ谷の水　周阿

秋はてゝ今に山田のいねさてや　侍公

冬は猶奈良のならひで朝茶哉　宗祇

宗祇興行の席へ守武出座ありしに、いづれも法躰の人ゝなれば、

お座敷を見ればいづれもかみな月　荒木田 守武

ひとりしぐれのふり（るか）ゐぼしきて　宗祇

あまごひの句　則雨ふりしと也

そらにしろや雨の望の秋のそら　牡丹花 肖柏

たちばなのかにせゝられて寐ぬ夜哉　宗長

もみぢする蓼やさながらからにしき　仙吟

梅ひとつ苔ミ申さいふ字哉　深甲 元政

むらさきの菊の之上や南禪寺　松花堂 照乘

すりこ木にしらすな蓼の花盛り　宗鑑

すゝきちり花に霜ふる岩根哉　宗養

梅のはな香ながら寫す筆もがな　紹巴

ふる雪をふみつけにするあほう下駄　紹純

四方に雪あけてくばるやかざぶくろ　高野木食 楚仙上人

朝くらや木の丸つぶの青山桝　脩伯子 変友

雪折に引切竹や朝茶の湯　小堀 宗甫

きていはへものゝふのよき具足餅　攝山 道春

此外ありといへども、見あたりたるを記る。

○誹諧宗匠權興

雪月花一度に見するうつぎかな　貞德

○京貞門七誹僊

海棠欤いやさやうにはなしの花　立圃
君つまば茶にも成りたしふんの道　維舟
大上戸ひがしにあるがにしざかな　西武
袖擂の縫か朽葉のつたかづら　令德
きゝたしなけふの雨やまほさゝぎす　貞室
はら筋をよりてや笑ふ糸ざくら　季吟
花生々の水鳥なれやはくてうげ　梅盛

○江戸左群書

何と見ても雪ほど黑き物はなし　德元
おこし置てねられぬ側に炭火哉　未得
うらあかし伊達な人丸頭巾かな　玄札
上を下へえいさう山の花見かな　加友
春たつさ空やゆふげのうら〳〵ら　卜粮

○万治寛文頃

頭寒足ねつう包むや雪の道　蝶々子貞宣
たんざくは臼挽哥かことめばな　松樂軒立志
川音のしぐれの亭や屋形船　未琢
寒菊やあきなき時の酒相手　卜入
哥でひく臼のめまつの子日哉　調和
菁顔のまとふ草履もあにれ也　同
花の風ちぎれたりさも譲葉　不卜
そぼふるや猶傘さして山ざくら　同
よみ聲なたがへそしきの時の鳥　景倚

見廻るは花のりんばんや寺の花　尊明
日々に日にあたらしや三ヶ日　友德
同文
宿のたかさりたしたりさ燕のと屋　水元
詩にすける人の心や花つくり　清春
むしやう〳〵むしやうに喰な青山椒　同　吟市
此句は栗栖卓嗣子所持の詠草にあり。

盛りにはいやがうへのゝはなざくら　一貞
雪折やむかしにかへる笠の骨　松意
花をふんでたゝらうらめし鐘の聲　閑山

○元祿始より享保年中

名のつかぬ所かはゆし山ざくら　河春
伊勢に詣て　たんざくかたに有り
何の木の花さはしらず匂ひ哉　芭蕉
此たんざく沾涼所持、中川文露へ送る。今露牛の手にあり。

西瓜ひさり野分をしらぬ且かな　旦　素堂
霜の後華のにつかに冬牡丹　似春
いなづまや石臼耳にあらたまり　露言
つくしつむ榎を野邊の枝折哉　雑豐
詫なくて舟ながしたる五月雨　前　山夕
耳かゆく耳こそばゆき時雨哉　一晶
はつ草や青みとゞかぬ芝の隅　稻階堂　立志
花ざかり子であるかるゝ夫婦哉　其角

竹の子や兒の齒ぐきのうつくしき　嵐雪
たくましき松も眠るや春の雨　太白堂 桃翁
炭はれて物さはがしき人心　一蜂
包まれて水も延びたるはちす哉　無倫
水さ羽さ合せゆく鵜や夕涼　沾徳
柚の花のその中の其句ご哉　介我
小男にかたじけなしや下もみぢ　秀和
我たけにつもるもあはれからし杭　東潮
うへし田やみごいの底のうは濁り　遠水
入相の鐘きゝつけぬ花もがな　正友
我顏やしぐれてのぼる井戸の中　神叔
たまくに靑き葉もあり歸りばな　素狄
山もゝの落て際づく淸水哉　赤陌
川筋やまき割うしろけしの花　常陽
碇引網そのまゝの氷かな　立嘯
捨石を雪のそだつる春日哉　好柳
草かりの笠のみうごく夏野哉　松水
散る花にさくく戻る淸水哉　盤谷
しら魚の戸田のわたりや郭公　子英

此句奥州須賀川等躬猿一木戸に入たり。ゐらむ頃、いかゞなるか、子英加入せざりしに、おして此句を加ふ。子英はなはだいきまき、和散才の會席におゐて露顯す。そいゝち等躬此事をきゝていふ、今はいかるとも、人も我も亡じて、此書のこらば草の陰にてはよろこぶべしさ、あざわらひて過ぬ。その二たびの席に予ありあひて、ふたりのいふ所を聞たり。等躬が風雅なつかんじて此句を拾ふ。

音やむはいてつくならし夜の笙　和散才 立志
雲の雪花たあへたりけふの月　和英
袖下のあかるき山はつゝじかな　浮生
新田にならで中く汐干哉　學白
死ぬまでは生ゝるはづ也冬の春　蝶々子息 二葉

此句蔵且には罷がたき五もじ也、手柄ありさて其頃ほうびしたり。

屋根をにくしのび草履や時鳥　堤亭
うすものも棚にかけばたにむべし　女 斧鉞
簾下ゲて謡つまならんすゞみ船　女 秋色
屛ふた子に疑なぶらるゝ暑さ哉　女 その女
よし鯛は釣かぬるとも何鱠　佳風
見ばや日な老に引るゝよめ菜摘　前 青峨
何な取船さも見えず初時雨　甘谷

右の外見あたらざるは書もらし侍る。

○寛永頃京大坂宗匠大概

齒朶ならで浦じろなれや濱の雪　安静
本尊ならはれや脇立ほさゝぎす　一雪
廿日草踏ゝ無三七になざかり　定重
七賢も植けん花や藪椿　宗伴

もしあらば雪女もや白うるり　道節
せんたくかたらいの月もすましもの　正山
三夕もさやかさついはさの秋　元隣
松に藤蛸木に登るけしきあり　大坂 宗因
槿花一じつさしぼめる夕かな　同 空存
錦かはもみぢみだれてせう〲ひ　同 休甫
むらさきの一口ゆへや若茄子　同 玖也
風そよぐ奈良風呂さきの簾かな　同 春倫
蚊はあれどせはなき夏の夕かな　天王寺 道寸
さゝがにの糸かけそふる手まり哉　堺 成安

専碩 文明頃
宗長 右同頃
肖柏 牡丹花 文亀頃
　長子 慶友 温野ト號ト云
　半井卜養ノ父也
　二代ヲ慶友又卜養ト云
永仙 右同頃
宗牧 永祿頃
周桂 右同
宗養 慶長頃
　貞徳
昌休 右同 當時宗匠祖
紹巴 右同 當時宗匠祖

連歌花下 新在家代々

侍公 宗匠備具トス
又備具ハ宗砌ト云但シ同シ人歟難レ知入ニ其門ニ尚可レ尋
心敬僧都　専順
◦住外 智蘊 蜷川新左衛門 寛永頃
◦住外 宗伊 杉原加賀守　能阿法師 専順ノ様　行助法師
宗祇法師 文明頃 不言齋 日外齋 自然齋 種玉庵ト云 文亀二七月卒　兼載 文明頃

誹道大系譜 他ハ大略

新在家侍公十代宗匠宗祇門
貞徳 松永逍遊軒長頭丸 吟花鄉 翫花咲翁
慈父松永永種 攝州高槻城主入道孫
悲母下冷泉妙壽院御妹 元亀二生 稚名勝熊 勝熊
ノ聲チカリテ逍遊軒ト云説アリ
哥道ハ法印玄旨ノ門弟 慶長三戌八月
近衛殿下龍山公 九條殿下玖山公ヨリ法印玄旨法橋
宗頼法眼紹巴等ニ御有テ誹諧一道ノ宗匠ヲ免許
承應二癸巳卒 春秋八十三 松永明心居士 有墳鳥羽實相寺
編集
和歌實珠 二十卷　歌林樸樕 二十八卷
戴恩記　御傘　紅梅千句　淀川油糟

儒道

長子 昌三 松永
一切經八千紙書
長子 昌易 春秋館 儒道
季子 永三 懷德堂 儒道

羅山子長男 春齋
御儒學 本朝通鑑書
絅與堂 三竹 野間
順菴 木下
隨有 瀧川
省菴 安藤
由的 宇都宮

誹門人 道春 羅子 林家儒宗
御儒學所
道春昌三兩人ヲ貞德導而入レル門ニ二惺窩先生ー

哥道門人 盤齋 加藤
一華堂
長好 廣澤
三之
儒宗家

貞門七誹仙

(一) 京 立圃 一流祖 野々口親重入道 號松翁 寬文頃卒享年七十有余

編集
はなび草 徳万歳 花月千句
あだはな かえり花 鶴鷺千句
碁打花見 河舟 みこの舞
万句 若狐 小町おどり
ゐぼし箱 片輪車 硯はいかい
詞よせ 大岑 空つぶて
江戸紫 こきりこ つゞら折
雜談集 暮縈集 老鳥千句
すりひ打

京 幸和 江崎 編 若竹 そこぬけ臼
同 和年
同 常辰 隼士
同 重榮 竹山 編 短使集
以下略之

(二) 京 維舟 一流祖 松江重頼入道 右同頃卒 行年七十四

編集
毛吹草 犬子草 時世すがた
浮世長刀 懷子 溜池河ござ
乳母 大井川 佐夜中山
むさしの

京 重方 望月
大坂 弘永
同 鬼貫
京現 言水 池西
以下略

(三) 京 貞室 的傳 安原正章入道 元和頃卒 行年六十四
嫡子 元次 安原

編集
玉海集 同續 悲母追善
百句自注 氷室守 獨吟千句
はい打 片言 五條百句
乾重次作分

京 可頼 青地
同 貞恕 乾 蹈日
同 惠佐 藤本
大津 重次 乾
以下略

(四) 京 西武 又 的傳トモ 山本無外軒入道 哥道ハ一華堂門弟ナリ 延寶頃卒 行年七十三

編集
鷹筑波 くろゝ おはゝ千句
砂金袋 同續 何上草
ついすへ子 はぎの花

京 正在 小原
京 正伯 島本
京 隨流 松月菴 編 永代記
以下略

(五)
御歌學所
京 季吟 北村拾穂軒再昌院法印
本土江州北村
住京松原室町ノ東新玉津島　後ニ被召出
編集
山の井　花千句
むもれ木　師走月夜
いなご　新犬筑波　誹諧獨吟
十會集　廿會集　はいかい合
寶永二乙酉六月十五日卒壽八十二
有墳池ノハタ正覺寺
哥書
万葉集抄　八代集抄
源氏物語抄　枕草子抄
つれ〴〵草抄　いせ物語抄
大和物語抄　百人一首抄
其外品々
嫡 湖春 父季吟同時被召出 元祿十丁丑正月十五日卒 御歌學所
二男 正立 住新玉津島
京 元隣 山岡
同 可全 大村
同 則常 伊豆

(六)
令徳 鷄冠井 又良徳ト書 寛文頃中年ニテ卒
編集
崑山集　誹諧圓十余年
土塵集　親炙
京 良保
京 友三 奥西
大坂 如貞 井口
京 令富 鷄冠井跡目
尾州 友我
以下略

(七)
京 梅盛 高瀬佗心子 元祿頃卒 老年
編集
口まね草　あふむ草　古鏡
落穂集　さゞれ石　山下水
捨子集　はい仙　木玉集
便舟集　類舟集　早梅集
京 安重 内海
同 倫員 藤村
同 道繁 佐々木
同 信徳 伊東
以下略

京 一雪 椋梨柳風菴 延寶頃卒
編集
鋸屑　茶杓竹　雨あがり
糊拵　せんたく物　ふくさ物
作者盡　はれ小袖　言羽織
京 重友
尾州 一和
以下略

京 安静 荻野似空軒 右同頃
編集
鄙諺集　けふの細布
京 俊秀
同 宗英
同 重隆
同 似船 富尾 （蓮）芦月菴 偏苗代水

貞門
馬淵宗畔　末吉道節
端氏定重　宮川正由
是等の門流[illegible]江になし依略之

江都宗匠

安部門 飛雨 號

◎五哲

（一）徳元 齋藤帆亭 寛永ノ頃 住馬喰町二丁目 所持ノ家

編集 初學抄

於石州卒

（二）未得 石田乾堂 住神田鍋丁 所持ノ屋鋪

編 五吟集

寛文九酉七月十八日卒 享年八十有余 有墳淺草誓願寺 自性院未得居士

長男 未琢 石田良堂 是父ノ住所 狂哥ノ達人ナリ

編 一もさ草

調和 岸本壷瓢軒 號土齋 住吳服町

編 是まで草

土齋滅後高弟和朱取立ル

正徳五乙未十月十七日卒 享年八十有余 有墳筑地門跡地中 調和院道鑑士

徳友

養 和英 壷枕齋

元貞 享保二酉二月四日卒 四十有余 父同所ニ葬

水元 万治頃

清春 昌雲軒 右同頃

編 安山來 千句集 鹿鷲集

埋木 住大傳馬丁

好柳 笹井 住京橋

天和二戌三月廿日卒 享年七十有余 墳父同所 隆芳院未琢居士

嫡 意深 菊川ト改 入門吉田意安醫道

門人 未陌 櫻田氏 住中橋邊 元禄頃

不卜 岡村一柳軒 住堀江町

編 つくぐが原

元禄四庚未四月九日卒 有平河山法恩寺墳

現 不角 立羽松月堂 號千翁 住八丁堀

編集 七十五版燒失 其後 百人一句 三卷 はくかせ輪 九卷 同十卷 同十一卷 母思集 清がんな 信貴行 木曾のあき衣

嫡 不扁 立羽安月堂

編 おふのうらなし 風姿集

二男 仙角 立羽松千堂

一貞 服部氏 寛文頃

編 [illegible]德か い記

現 風堂 山崎月嘯軒 住神田

現 艶士 滿田碓谷軒

編集 分外集

常陽 木戸 住京橋

後改ニ根津社職ト 享保年中卒ス

里風 釋氏 住芝三島丁

現 和推 帽屋蔵柳堂

先師點印ヲ傳ル称號 林和 葉ニ 自ニ 和葉ト 又和推附屬ス

息 和全 堀尾 未宗匠

㊂玄札 医 高島氏
寛永頃 住本町四丁目
編 十種千句

踈心

山夕 樋口

現 山夕 桃井鳴蛙井 始仙水ト云 住久保町

嫡 仙水 桃井 現 末宗匠

㊃加友 医 荒木奏花
寛文頃 住両替町
編 綸そら言
同頃勢州松坂ニ同名あり是ハ春陽軒加友と云

友徳

正友 勢州杉木幻當翠一弟 住芝源助橋
延寶ノ頃談林誹諧流布ノ時
合躰ニテ田代松意ト而宗因荷擔

一蜂 河曲田泉舍 號葛仙翁 住神田
於ニ本土勢州山田ニ享保十己巳九月十五日卒。于時八十五秋

吉水 池西氏
又季吟門ト云後住ﾚ京ニ

㊄卜琅 牡丹花樓 半井法眼 御醫 始慶友ト云
父ハ半井慶友是ヲ温軒卜琅ト云拜領屋鋪鐵炮洲明石町ノ裏
寛文頃 狂哥ノ名人
父子ﾄﾓﾆ慶友又卜琅ト云ナリ

琅得

卜一 山州伏見 菊岡氏

卜入 塩原氏
寛文頃

男 卜仙 半井 医 末葉有于今

季吟

●●● 桃靑 號芭蕉菴 松尾氏 泊船堂 釣月軒
中興一流祖 住新大橋
本土伊賀上野ノ士松尾藤七郎菊岡随性軒如幻導而入ニ季吟門ニ正保元甲申生元祿七甲戌十月十二日於大坂卒春秋五十一
葬ニ江州粟津義仲寺ニ
諸國ノ墳
有江戸深川長慶寺
有伊賀上野万福寺
有京東山双林寺
有大坂道頓堀千日寺
有美濃大垣正覺寺
有肥前長崎南京寺
有奥州高舘古城跡碑
有奥州桑折短尺塚
蕉翁のたんざくを埋ム
編集
さるみの　おくの細道
冬の日　二十哥仙
三百韻

兼豊 円田氏法橋 住久保町
元祿初頃

令徳門 一晶 芳賀冥靈堂 號崑山翁
元信徳門 住両替町 始ハ京都
令徳翁ノ崑山ノ印附属ﾚ之在世用ﾚ之此印行方不ﾚ知
寶永四亥四月卒 齡六十有余
編
万水入海　いろつほ
丁卯集　一塵重山
八宗懸隔

斧鉞 藤本羽仙齋 住石町
享保ノ初頃卒

貞室門 蝶々子 貞宣 住鍛冶橋
万治頃
編
思出草　物忘草
朋友集　たちきゝ
松茸 さういくしき
江戸八百韻　詞の友

素堂山口今日庵
始ハ云信章又來雪トモ云
享保元申八月十五日卒
齡七十五
有墳谷中感應寺　住本所

似春小西氏　住本町
後ニ成ノ總州行德ノ
社職ト
編　芝さかな

秀和　大野炭瓢齋
號相水翁
正德四甲午八月卒

嫡 現 秀堂 大野
未宗匠

吟市 釋氏 大德院弟子
安住院尊海和尙
本土江州　居ス銀塘ニ
天和二戌於江州卒
高弟久津見吟市受ニ續
衣德ノ御直參非ニ點者ニ

無倫 志村拾竹軒
號雪堂翁
本土越後　住大鋸町
享保八卯二月廿日卒
有墳舍海山青松寺

正德享保ノ頃本鄕菊坂ニ
同名アリ此門流ニアラ
ズ古人ノ名チカリタル
ノミ

現 貞陸　住品川
佐保介我ノ從弟
今住川越

嫡 二葉子

尊明 服部氏　住本鄕

不入

重頼門 幽山 高野丁ミ軒
住本町ノ河岸
元祿ノ頃藤堂佐口公ニ仕
テ改ム竹內爲入ト
於勢州久居ニ卒　老年

立圃門 立志 高井松樂軒
住本町四丁目
寛永頃
編　樗木集

嫡 立宜 高井松雨軒
若年而卒ス

法名天賓硯壽居士
行年六十三

現 倫里 足立德業軒
住石町

嫡 現 來川 足立
始古鈴

神叔 靑木氏 神道
元祿頃　住石町

浮生 北藤銀塘居
迦樓羅園
編　原俳論
水秤集　鳥跡話　住銀町

芭蕉ノ系
享保二丁酉正月卒四十六春
有墳小日向今剛寺

其角 寶井寶晉齋
號晉子　住茅場町
編　新山家　同續　句兄弟　いつを昔　花つみ　焦尾琴　三上吟　うら若葉
みなしぐり　たれが宗　蠹集　類柑子　雜談集　若葉合　枯尾花

二男 立志 高井和嵩堂
始立詠ト云　住石町
編　みやこの枝折
なにはの枝折
寶永元甲申八月卒齡四十八
高林院立志日藥

子英 岩本氏　後ニ止點者
編　つけのまゝら
住 始淺草 後本所
正德ノ頃卒

現 起波 淸水　住堺町

現 貞佐 桑岡桑々畔
始平沙ト云
住本村 下同

編集　九品

秋色 女 おあきと云
其角點印附屬
居小網町

堤亭 下邑氏
居住吉町
編　梓あふぎ

寛永四丙寅二月廿九日卒
有墳二本榎上行寺 法花宗
有墳深川長慶寺 門人立之

風牛 服部雪山菴
承應三甲午生湯島 稚名久
米助ト云
天神宮銅鳥丹ニ其名アリ
トゾ
編 その袋 若水 住濱町
寛永四丙寅十月十三日卒
五十四秋葬ニ駒込常驗寺 法花宗
有墳深川長慶寺 門人立之
雪山菴不白玄峯居士

その女 女 おそのと云
本土勢州山田渡會氏女ナ
リ依ニ忌ニ法体ノ成ニ檀風ノ
頭ト
編 菊のちり 住深川
有深川靈巖念佛堂墳

桃翁 長野氏白雪吳竹軒
始村隣ト云
本土伊賀上野 芭蕉翁古
朋友なり 居神田

享保二丁酉二月十二
日四十有余
有墳深川法禪寺

現 一漁 鶴海釣月堂 居淺草
編 ふたむかし

嫡 現 傘車 鶴海 未宗匠

現 潭北 常盤百花莊
本土野州那須
編 汐こし
後の月日
反古さらへ
さしのみどり
はい書ノ外民家分量記
分量夜話

現 潤十 曾木岑菴
其角門人也 允師點
印秋色ヨリ附屬ス
依テ此系ニ譜ス

編 むつちどり 粟津がはら
享保四己亥十二月卒 七十有余
葬淺艸新光明寺

現 桃翁 瀨尾大練舍
始杜格ト云 住柳塘
元秀和門
編 雨あがり
冬の日
ひのき笠
さるすべり

嫡 現 陽秋 瀨尾 未宗匠

介我 佐保甘雨亭
始普船ト云
享保三戊戌六月十八日 齢六十七
有墳淺中本願寺

嫡 現 殺我 佐保 未宗匠
編 さぶほたる

學白 草壁氏
編 馬蹄二百韻
元祿ノ頃卒

嫡 現 水機 管

立志 心保利散才
始春水又立詠
編 雪の果 庭のまき
厥中
享保九甲辰十一月廿一日
有淺中常福寺墳

立志二代ノ
點印ハ野州宇都宮住
青山立鴨附屬

現 水國 雲津鶴躋ト
始晴星ト云 住栖町
今沾洲門也
雖然立圃五代相續ノ
宗匠ナキニヨツテ系
ハ譜レ茲

東潮　和田堵中子　號一甫　住西河岸
編　花柄千句　ゑの木
元祿ノスヱニ卒

丹水　住深川
前句ノ判者ニ同名あり

素狄　熊谷氏　住橋町
右同時代

現　周竹　淸水寸松齋
號粥翁
先師點印附屬　住田所町

現　吏登　櫻井雪中菴
始李峨　住深川
嵐雪點印周竹ヨリ附屬
編　和竹聲　或問珍

現　白峰　三田風琴子
元露言門　住神田

嫡　令花　醫

現　今吏　打田十荷菴
始雁行　住神田
編　寄南香

現　陰威　今可
始楓山　住麹町

現　當國　稻川了華亭
元盤谷門　住神田

現　舞山　帶金
始茂麿　住（缺）
元才麿門

風虎公　內藤在京亮義泰公御事
非點者
御集　夜のにしき　信太のうき島　さくら川

現　嫡　露沾公　內藤下野守義英公御事
非點者　遊園室傍池亭
御集　有ㇾ員

露沾公門
露言　福田風琴子
始調也ト云　住南傳馬町
元調和門
御表德ノ兩字一字宛
露言沾德ニ下ル
元祿四未四月十日卒　六十有餘

嫡　言格　福田氏　醫

露言　白堂

遠水　樋口氏
住五郎兵衛町

現　破笠　今止點者
号

露沾公門
沾德　水間合歡堂
始沾葉ト云
元露言門
住中橋
編　一字幽蘭集
餘花千句　同續
享保十一年六月卅日六十有余
有壇平河山法恩寺本理院了德日到

現　嫡　沾吉　水間
幼年　宋匠

露沾公門
沾涼　菊岡崑下菴南山齋
始南仙ト云　住神田
現元一晶門
編　百福壽　同續　百花實
諸著の外
日本道中行程記　日光名跡志　江戸砂子溫故志

現　嫡　布仙　菊岡晴行舍
宋匠

現　二男　梅五　菊岡
宋匠

露沾公門
露牛　赤秋
始花蓼ト云
現ノ濁十門

現　沾洲　貴志行轄齋
始民丁ト云
編（缺）

嫡　現　青條　貴志
宋匠

現　原屑　長坂青苔壁
始仙格ト云

甘谷　長島氏
享保十三卒

青峨　鶴田六峨仙　住茅場町
　立圃門　享保十五戌卒
現　青峨　前田二柳庵　初號東ト云　後奉宝ト改　住薬研堀
現　清山　内田　住淺草
現　百洲　江川琳山甫　始尹督ト云
現　乾什　岩本千亀兒　始呉丈ト云
現　壺月　石川
現　常仙　志村孤鶴汀

●　盤谷　志水泉字　住瀬戸物町
現　尾谷　千足梅堂　北莚塀　住神田
大坂　才麿　椎本舊德翁　始西丸
現　前住ス江戸ニ　大坂ノ門人略
佳風　寶島有紀堂　儒道　始ハ尾ト云　住サカイ町
享保十三申十二月卒　齢四十九　有壙谷中大雄寺
現　逸志　笠家半局菴　住淺草

●伊勢眞光寺昌丞門
　景俊　万治ノ頃　此末門不レ知

●貞德正統松永尺山門
現　貞山　相淵　芦丸舍　湖月亭　住桶町
編　ひらつゝみ　江戸名所集

●●●
　貞門　宗因
　俳諧談林一流之祖　住大坂天滿
　西山一幽　號西翁　又梅翁ト云又梅下翁モ
元達歌師
延寶年中下ニ武江ニ而暫く弘ム談林一流ヲ
同　宗春　逸哥
大坂　玖也　杉山
同　春倫　濱田
其外略
編集
さうがらし百韻　両吟集　獨吟集　ひろあみ
廿日草百韻　四人法師　十會集　其外あまたあり

大坂　西鶴　二万堂　井原氏
日ニ万三千句獨吟ソレヨリ二万翁トモ云元祿六酉秋卒　齢五十二
編　大矢數　はかた百合　胴骨　杉やき　石車　其外うき世物語あまた述作
松意　田代川草子　談林軒
始大坂　後江戸ニ出、ヰ町ニ居
松水　杉本氏
編　虎溪集
（於亀戸天神宮回廊ニ笠着俳諧之發起）
正友ト両人談林風流布宗因衞擔

○古貴人　大略

日も暮ぬはや舟にのれ女七夕　岩城藩主　虎子
花すゝきたれにまかれて炭俵　久世藩主　任口子
明石丸と云舟にのりて、浦あそびのころ
月の船これほのぐ（く）やあかし丸　明石藩主　松葉子
むさし野は趣向はてなき畠哉　日向藩主　風瞬子
これらの御かたにかぎらざるべきなれども

○古人古老　大略　古風

白炭や焼ぬむかしの雪の枝　忠知
長き夜た寐ておかしがたはりまくら　未學
水にうくおもひは沈むこいもみぢ　詠笑軒 イ吟
若葉より名はふるめかし尉が髭　狩野氏 常信

○延寶年中大坂宗因東都にくだり、談林誹諧の流儀を起す。「されば爰に談林の木あり梅のはな　宗因」此句より梅翁と号。談林十百韻の巻頭也。その頃

いざ折て人中見せん山ざくら　雪柴
くつろぐやおよそ天下の下涼　小澤氏 卜尺
皮たびのむかしはもみぢふみわけたり　調和門 三輪氏 一鉄

此外はその書にゆづりて略之。

○元祿年中は正風體に皈ル。其頃より享保まで大槩

縮きしきのふの夢や越後鱈　調和門 釋宗正 金獅
砧かな廬山の雨をまくらもと　同 和葉
中々に鵜舟あかるし五月闇　同 洲蘭
もぎ殘ス茄子はいづらの菊の薗　芭蕉門 嵐蘭
松に蔦片手うちなるしぐれ哉　同 芷色
夢を背跡につがての秋を知れ　同 枳風
綸目のしゆすのさはりや玉柳　同 楓子
置も人もそよめく沖の汐干哉　同 仙花
動きなき岩撫子や星の床　同 晉良

さし木せし人はしら髮か古柳　同 濃州 岩泉
そば切に汲物もなき寒さかな　同 池田 利牛
箕に干て絲にこちふく綿の桃　同 小泉 孤屋
物音は椎の實咲る庵りかな　露沾門 午芋
きのふまで目のまふ谷の若葉哉　似春門 釋 專吟
白妙やうごけば見ゆる雪の人　一晶門 風曝
夕がほや大黒棚にもる雫　同 神尾 虚堂
忠信が打死の日や浦ちどり　同 琴藏
勅學の眞下へこだまほとゝぎす　同 銀葉
その道の汗忘れたり風爐の炭　其角門 岩翁
卯の花や身狹にかほる道祖神　同 石内 似叟
千鳥鳴ク方や留主なる海士が家　同 津村 横几
幕洗ふ川邊の頃やほとゝぎす　同 石内 序令
馬のなき宿に日たけぬ枇杷の花　嵐雪門 古連
やしないにお爪の端のぼたんかな　同 析十
尼寺のすあたますごき凉み哉　同 永花
亭主の夜すこし殘りてほとゝぎす　同 百里
耳かきに貴様になるか花卯木　天王寺近寸門 白雲
梟のねむり落たる柳かな　不卜門 琴風
ぬれ紙をさくやさかずや汐干空　立志門 出紫
琴爪も尼のむかしやけふの月　[illegible] 立湘
日にやけていざ笑はれう山ざくら　清徳門 丁葉

姥ざくら杜が母の名の恨かな　同　双魚

雲水の間もいさへ杓ほとゝぎす　同　徳純

これ等の人く際限なし。これかれの書より思ひ寄る所を拾ふ事、牛の毛一筋。

綾錦　巻之中　沾涼輯

誹名の一字を、露言につかはすさて

色なませ降しなくなる花の露　露沾

南仙、今改て沾涼と呼。百韻ノ序

此一字廣くさかえよもゝちどり　(仝)仝

略レ前ヲ
贈ニ沾字ヲ一時このもかのもの影よりも

十分にうるほふそらや夏筑波　沾涼

露庭へ一字を送るさて

飛石に因めや露の花樗　露沾

露月へ誹の一字を送る。

世の譽れ露す光りかつら人　(仝)仝

○江都當時宗匠　古徳混雑

風凪で隣へ戻す柳かな　千翁

天津橋時の間におい鳥羽大工　周竹

亂れては鬼に降る矢の螢哉　沾洲

見る花にさだまる日なし月今宵　山夕

一筋は瀧のながれやむめの花　桃翁

早乙女よ汚れた鷺は見ぬものを　一漁

花も穂も万葉よりぞ惠方道　倫里
辛崎の松をあらひに天の川　當國
梅が〻やわきてしの〻め非の煙　湖十
冬野〻や断キひさつ雲の上　吏登
鯨の目不便に見ゆるぼたんかな　貞佐
もろこしの吉原捜せ後の月　和推
風鈴の舌打を待あつさかな　不扃
初雪や蔦の細道手ぎはもの　前田青峨
月見野の物さや〳〵て寺ひさつ　今更
はつ雪や佐野二所目に覺え　水國
馬の呑ム側で一口かきつばた　来川
帆柱に一夜は近しあまの川　陰成
山も川も刷毛届く也紅葉鮒　貞山
水鳥に寒さ負なしはつ鰹　超波
菜も踏れ蕊もふまれてけふの菊　百洲
吹上ゲてしぐれのへげる落葉哉　壽角
武蔵野に調へぬ涙や夜の雪　沾山
竹縁や麥の葉そよぐ時鳥　乾什
青梨や雪の下行水の音　壷月
水仙の木隙明ケしみやこ鳥　露牛
けふや猶百合の力菊の露　常仙
萱のさる貝のおもさよ送り菊　尾谷
往に残る田うへや三保が崎　道志
馬埃り佐野の渡りの暑さ哉　舞山

小夜中もさゝぬ門あり郭公　成屋
卯の花の夜さはまたれど鷹の聲　永機
降つて跡火のしかけたり春の芝　沽涼
あやしげや梅水仙の水かゞみ　風堂
名月やみな身にほれて遊び更　淳北

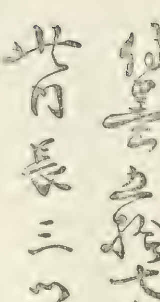
右の句〻は、得たるあり拾ひたるあり。次第は其趣く所にまかせ、前後差別なし。

○古來點取の卷を得たり。其點はすむた・句〻の品を寫して、二三軸こゝに誌。

寛永頃　乾堂未得點

＼露草はひつかく〳〵や筆の虫　可入
＼學のたよりよ秋の螢火　正勝
＼景をおもふ月の入江の哥よみて　幸狼
泉水を見る今朝の徒移
涼み所に似合ぬ奥服おい仕立
はれな座頭にまじる俗人
振舞に料る鯨のにく喰よ
ウ
＼餅つき骨を折はむはツや
＼宗匠のよくする業の机上に　幸狼
＼見廻ていだき愛す俳諧の子
＼旅出ゆく船のさもへをはひ毛猫　求音

四吟百韻　末略之



●墨印



廿五句迄

幸狼　點十六句　内長貳ツ
何入　點十五句　内長壹
正勝　點十六句
求肯　點十句

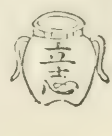
寛文頃　松樂軒立志點　九唫

花〵 花を包む霞や家の風寝ひ　怒流
春〵 や雨しのげ庭の笠松　全久
〵 あたら雪殘りすくなに景もなし　卜入
〵 よみたる哥はふるめきにけり　由宜
著〵 蘭める小袖な旅の罷土産　春重
〵 汐の出船にしたしみの友　重次
水〵 や水の面にてる宵月の酒なのみ　勝平
秋〵 秋の最中にさかる市立　叙情
〵 ウ八幡山なべてやあがめ奉る　執筆
〵 親のためにぞ子は寶寺　調和

一順のみにして末略之



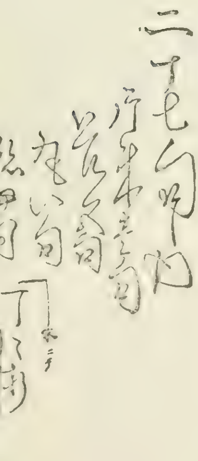
●墨印



三月十四日

〵 玉鉾の道草喰ふや春の駒　有岡氏 行尙

自勝略

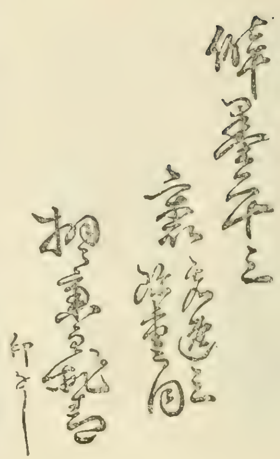


●墨印



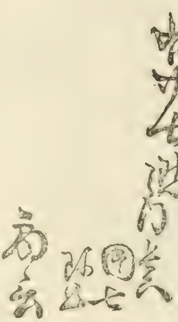
や〵 切蓼や小町がつくるかき鱠　岡村門 風堂

自筆唱之



鶯の瀧氷らぬものを山水鶏　露言門 尺草

此句は此卷の發句にてはなし。露言宗匠ふかくほうびせられたるよし、尺草老人の物語なり。よつて此句にかへてその卷の長點をうつす。此卷の發句は芦水とありて平點也。



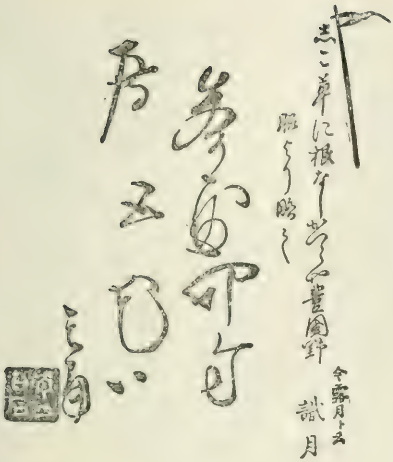
印不見

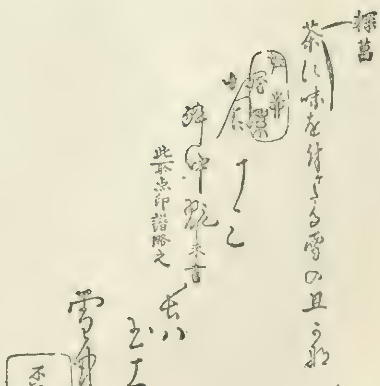
元祿頃 續二百韻　初 調和 末 不角評

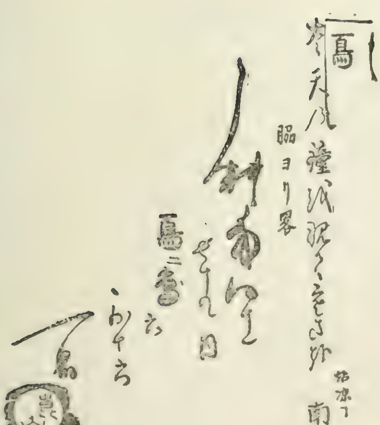
雨の夜やさだける鹿は就中　唐紫

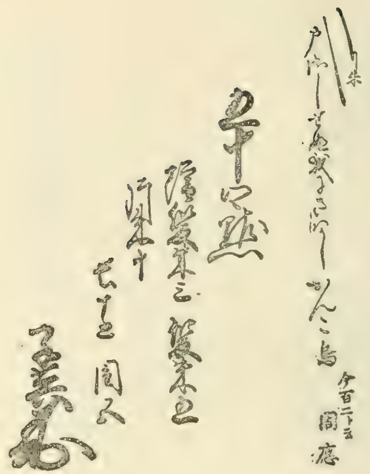
六點 衣は槌に腸を断ッ　今當ヿ 瓦鐘
五、詩に煉レし大サクワン日の秋に部閑て　白峰
五、萩の野人と侘る淑ヨシ望モチ　浮生
長 新月に酒たづさへて膝栗毛　桃翁ヿ 桃隣
五、慈悲した猿が救ふ賊ー難　大ノ立志ヿ 立詠
四、斧持たぬ庵の薪は手にて折　周竹ヿ 舟竹
八、ない餅出せさいふ殿を剃ッ　子英
四點 和尚そと利休が數寄を我儘に　花笠
綿子雪より先の景色
衣類うらら超の氣味
十、一塩の鱚キスで病後を音信る　一鶏
四、師のたらちねとおもふ貞室　駿和
五、雨眼なさちていの字の二柱　詠居
長 往昔の智を傳ふ日ヤ本マト　節士
四、永樂と名付る稻も自然にて　和英
長 君の仁こそ万物の雨露　蓬雨
十二、行月の富士川に船瀬多に偏　幽闇
四、戀歌を謡に帶る寄談　丈唇
座付 金獅 長雅 相志
一順而已にして末唱

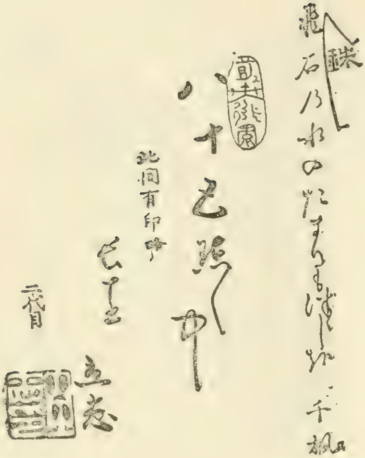

此所有印略
朱印



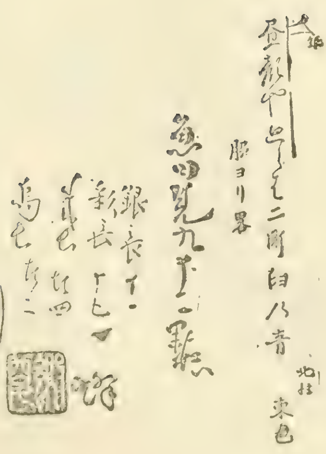

此歌点印諸略之
朱書
不見
辻
呉竹

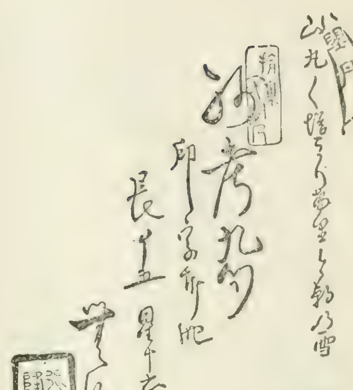

臨ヨリ寫







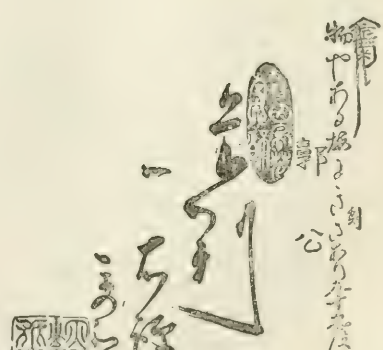




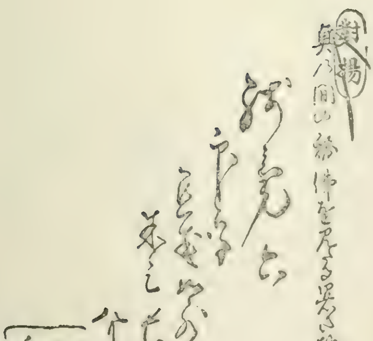
調柯



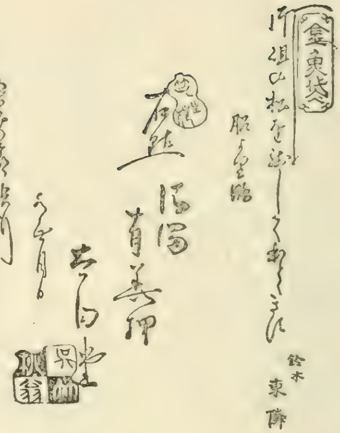
道之

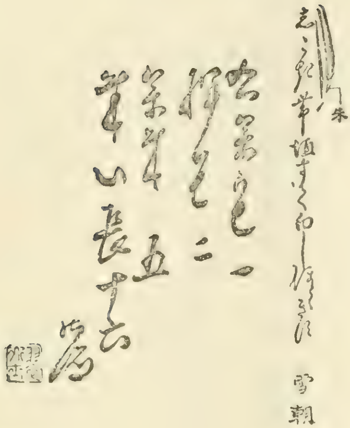


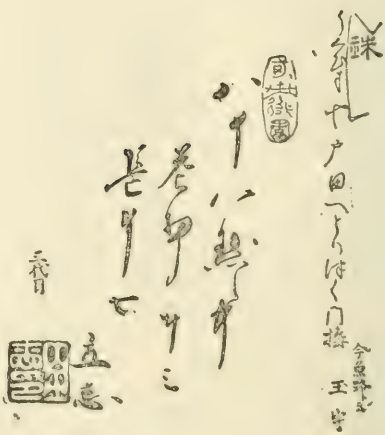
川添
文公



宮川
千風


鈴木


雪朝




百千鳥
中田川
末石

此集を

瓜の蔓に奈須の與市も系やもし　千翁

人比て云、和哥に師匠なしと云り。

無徐の系譜なりと。

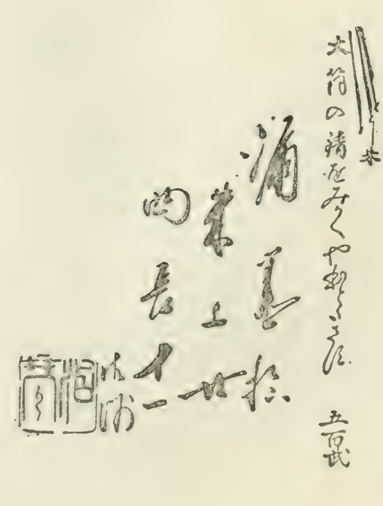
道に師はありの實の花人の花　沾涼

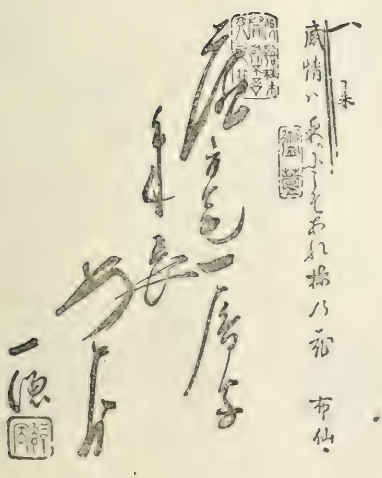
和歌。無ニ師匠一唯以テ舊哥ヲ爲レ師。深心古風習ニ詞於先達一ノ　下略

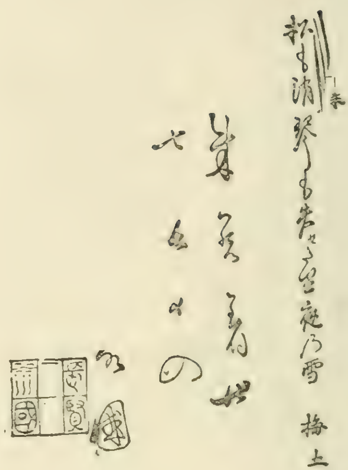
注云和哥は自然の發得の境界なれば人の敎によらす。中略　習詞於先達とあるは、上の詞に自語相違あるに似たり。しかれども詞を先達に習の外には師なしと云義也と云々。

○當時宗匠の添削一兩卷、机下にありしを、さちにして茲に彰。











當時宗匠點印譜 次第不同

調和印 獅子□ 以靜爲用十五 雨朱七 長三 (かくし點 紅絲石十 朱五 丸二	堀尾和推
玉姿十八 同文錦字詩十五 新月色七 (かくし點 花影上欄干十 同雪五 長三	桑岡貞佐
筑波山二十 琲比磨利十五 異玖用加十 彌菟流七 朱五 長三	桃井山夕
彈夜月二十五 天壽十八 金氣狼精十 丹頂五 「かくし點 立夏清風至十五 君子鳥七 長三	鶴海一漁
金精二十 映朱十八 銀輪影斜十 朱五 「かくし點 玉夫弄桂花十五 廣寒月七 長三	桐淵貞山
五更二十 四更十五 二更七 かくし點 三更十 一更五 長三	內田沾山
神物護持賸レ句 丹鳳十五 壽中詩十 鳳檣七 長三 簷花雨二十 宗玉韻十二 玉彪八 孔彰五	稻川當國
無上寶准句 天心月廿三 貴玉二十 千珠十七 神妙十五 秀逸十三 無極十二 大極十一 銀漢十 九曜九 若漢八 龜背七 俊六 豪五 英四 朱三 長一	立羽千翁
羅浮夢十八 東閣詩情十 朱五 「かくし點 月黄昏十五 江南梅七 長三	貴志沾洲
水調歌十八 春江花月夜十五 清平調詞十 「かくし點 長相思七 朱五 長三	江川百洲

太白堂印
一種風流推國色十六　色與香無價十三
有玉聲十　神虚感二十二　乎一乎七　白字留利五　長三　瀬尾桃翁

頌滿耳十八　崑崙玉餘十五　麗水金十
「かくし點　千載觀七　朱五　長三　雲津水國

花車錦管城　楊彩二十　三光十五　車輪玉十二　黄鶴十
錦管城　曲譜八　行帆七　朱五　長三
兩點五倍點　三田白峰

無盡青准句　天高月二十　化玉十七　神龍十四　秀光十三
華德十二　有隣十一　文殿十　螢雪九　梵書八
鶏窗七　順六　樂五　好四　朱三　長二　立羽不扃

其角印
半面美人[]　一日長安花十　洞庭月七
かく｜點　滅雪五　長三　丸二　會　湖十

天地陽花二十　清奇加五字二十五　壽陽公主十
（かくし點　笑桃李七　朱五　長三　笠家逸志

翰林賜錦袍廿五　玉堂雲霧濕二十　金榜題石十五
一枝桂十　黄甲七　朱五　長三　帶金舞山

寶鼎八十　龍七十　鳳五十　祕曲三十　簫廿五　磬二十
三籟十五　呂律十三　宮九　角七　羽五　長三　足立來川

屋敬十八　金銀[]十五　四字十
（かくし點　三字七　朱五　長三　長坂成屋

風雪印
醉中翫[]　喫玉笙二十　百花一加之　翠蓋十五　同上　採荷[]
百花嬌語十　弄晩涼七　採菖五　長三　櫻井吏登

夜／梅二十　睡海棠二十　睡起美人十　國色五
かくし點
桂＼二十五　未央柳十五　美麗人七　朱四　長三　菊岡沾涼

仰高鑚堅准九　愼其獨二十　明德十七　志學十五
景星十四　慶雲十三　道樞十二　峻德十一　至善十
齊家九　修身八　誠意七　藝六　常五　能四　省三　長二　立羽壽角

九龍館十八　璧玉簫十五　洞裏神仙十
「かくし點　大乙壇七　朱五　長三　志村常仙

花生二十　泥書十八　五字十五　四字十
砂中玉八　夜光六　朱五　長二　打田今更

古青峨印
かくし點　薫風自南來十五　海棠七
（金聲十八　高山流水十　朱五　長二　前田青峨

二妙二十　万斛香十五　月明美人[]　朱五
（かくし點　花千天下春十　雪玉條七　長三　岩本乾什

沉香亭　月雲十五　三字月七　長三
（かくし點　五字花十　二字雪五　丸二　會　永機

五字顯ゝ句　彭澤二十　孤芳十五　金玉錢十二
寒英十　晩節七　獨秀五　長三　今村陰威

隨唐十八　花街簫鼓月十五　露往霜來十
（かくし點　支機石七　朱五　長三　石川壺月

蘭客符十八　千鳥十五　蓬山一樓雲十二
（かくし點　金玉翠珠十　鷓鴣斑七　朱五　長三　千足尾谷

鳳街十八　德高比君子十五　朱五
かくし點　石瀧山郎十　長州英七　長三　清水超波

●季吟法印 ─ 門人 吟市 尊海和尚 ─ 門人現 吟市 久津見氏 御直參隱居

一僕さほく〳〵ありく花見かな　季吟
家つさや散〻な荷にする山櫻　古吟市
一筋は木の葉ぞうれる獸道　今吟市

其角——門人堤亭　下邑氏——現苔翁　右莽衣氏
（堤亭齋點印附屬）

東坡贊
わが雪とおもへばかるし笠の上　其角
かいわりの瓜の葉むなし秋の末　堤亭
人は梅遊びはさくら松のはの　苔翁

人日
揖小木も遠里小野の薺かな　露沾

早春
しら魚や(日註)礙坐頭淋しき夜の色　扇風
明て今朝のこんの名あり宵の雪　溶〻

歳始　二句　越前丹生郡西田中領
初霞松年の荷や琴の海　沾涼門北仙閣　南花
赤椀の匂ひや春のはじめなる　梁氏　貞株
寄せ算の達者な見たり若菜摘　沾涼門　沾橋
よし富士は失ひたりさはつ霞　同門　魚路

初寅
辨當なそらへ分るや戻り谷　秦姥婦　不水

梅　おめやしきの句四句
梅活きて伊兵衛が黄楊は非情也　芭蕉門　卜宅
門番に海月はなきか梅の晝　雲朝
うき立や花の鱗のしのゝんめ　沾涼
正氣散吞〻で又來んむめの花　千翁門南方堂　強角
娘の名ほのかに聞や窓の梅　有林
吹通す梅や橋立中押へ　露公門芳泉亭　沾賀

初午
午ぞけふさるがふごさの稻荷守　一漁門　梅宇
手にさるや初午日和筑波山　沾涼門　五百武
もみぢなら中たゆる名の稻荷山　布仙
はつ午や外のやしろは無神月　露公門　露人

上巳
桃坐〻ソヾロ鱸子うひて御溝水　露沾
大内は隣にもあり紙雛　太平　竹裏
訛ドサ國は神代のまゝの雛哉　賀朝
汐干かな女の耻ぬ手一束　一漁門　樗律
汐干哉せめても蜑の墓參り　貞佐門　有佐
汐干かな鼻帋投し所まで　麦月人　調山
打櫂のよこにながれぬ汐干哉　快山
わさ〳〵しくれなぬよりも桃の花　蝦夷八父　臣女
龍宮の大津に至〻汐干哉　沾涼
けふの汐品川ちかし安房上總　魚路

柳　すみだ川にて
時津風加えて草の偖むしろ　紀逵

あはれさな掃除過たる柳哉　芭蕉門 卜宅
知盛も出ッべき浪や風柳　雲朝
青柳の梢な濟ゞや岸の結　沾涼
去年の荷なおろして動く柳哉　紀州若山 一瓠
風て朝ふさころ廣き柳かな　沾涼門 倫仙

花

夜櫻よ留守する妻の心もて　蓮之
水桶の裏干ス日和さくら哉　宇田川氏 未石
垣間見に美女の素顔や朝ざくら　北尾氏 青里
でなければ袖もはらはず花の酌　加島氏 好夕
花見かな櫻を枕の甲斐越後　夕佳
櫻咲遠矢殘して詠めかな　和散才門 立鳴
千金は直限にちかし花の暮　イセ津洪水堂 靖青
遊べ今地主のさくらは眞盛り　水戸住雲綠亭 落霞
汲ム花は何所らの風な水車　千壽門 分角
沙糖氣の過て聟達櫻狩　李條
三ヶ月を包みて暮るさくら哉　井角門 一風
雲は退ノキ日は儀なへるさくら哉　英松

左谷上野の吟

見付から通れさかけし花の雲　改春庵 僂川
花には是吉野に覚うへのゝ香　沾蓮門 千洸
大佛のたりは季白山ざくら　猪飼 亞棘
花や見ん爰に下谷の切通し　扇的

門な入ば乞食もつかず山ざくら　卜宅
けふひさ日仁王な本尊山ざくら　梅五

清水寺納

就中また花の春はさくら哉　魚路
山門も花にゆするや雨大師　五百武

白魚

しら魚や既に吉野の五月雨　雲朝
しらうなや山に見ゆるは八王子　北尾氏 千洸
星を焚ゝしら魚船や一つくれ　才麿門 一臈

生植

藤棚や是は譜部屋古衣桁　琴月
氷柱なら風も惜まじ藤の花　遷ヶ氏 梅宇
むら雨に更紗た絞るつゝじ哉　賀朝
美人には力瘤なし獨活の肉　安祖
武藏野や土筆にほれし磁石借　露公門水戸 沾姪瑶
（原註）腰帶
くさずりの臂な見せたる木の芽哉　秦 丈岳

名所のなの花

菜の花や箔に殘りて和田屋敷　沾徳門 沾津
夥多の夜な爰に菜種の花盛り　沾涼門 東沚
菜のはなや余所には離れ井手の里　梅五
菜の花に照り替りけり三輪が崎　伊賀菊岡氏 記之

氣形

あゆむともなくて田にしの夕日哉　笠家楽竹軒 逸志

うぐひすや人は鼻筋晙馬鼬　調柯

井戸掘のいよ〳〵高き雲雀哉　雲公門 露庭

業の戸は虎溪にあらぬひばり哉　和州郡山 云ゝ

巣の空に聾の闇鳴くひばり哉　孤中亭 其悠

歌屑の紙屑と成ル歸雁かな　快山

香扇宜さくれかぬるもの胡蝶かな　雲公門水戸 沾渡

何事の蝶のやどりや牛の鞍　希聽

當世の寝そろへは、漢家のむかしもなどか

むかし譏涙ちなに下駄のつばくらめ　稿科氏 菊千

雑春　題こんくわい

田鼠の手づま只今うづらかな　未石

けふ春買ふ雛や和泉の篠田まで　周皎

賤の女の笠おもしろき霞かな　江戸バシ 只口

長閑さは牡丹の名ある野飼かな　賀朝

出かはりやうきには洩れぬ抄子摺　信州松本住 三省

よき友は席まく畑の茶かな　夕顔亭 云ゝ

大名の春道中やうき瓢べ　水音

春雨や相手尋ぬるれち上戸　鄙探

やぶ入や待草臥の魚千里　於前表候住散才円田下井氏 立几

天満宮法楽　武ノ片立郡更清進

筆談に術行梅や明り取り　桃舟

神垣に五教賢しむめの輪　万里

大國の味や青物破の梅　李冠

御鎮座や百大功のさしの梅　李角

貞德門　松永貞德門　和泉才竹　調正興

○正勝 宮邊氏 ― 正辰 長子 同苗 ― 正興 二男 同苗 現 ― 正全 長子 同苗 現

山姫の紅こぼすらん秋の庭　正勝

此句は京都にてたつとき人の御はうびありしよし。

しらべなば音のあるべき柳哉　正德

鳥も起き雪をつなぐや渡し守　正興

花や實やもどかぬものを梅もどき　正全

○西武 山本氏 ― 卜雪 門人 喜多村 諱傳ナシ 長子 現 ― 郭月 同苗 現 ― 東巴 長子 同苗

源氏句合巻

螢火は我居どころのあかし哉　西武

苦藤さきなくやうぐひするが梅　卜雪

炎天の海をさますや鐘の聲　東巴

謂仙

名月や客なき家の奥津涙　賀朝

蜀江錦をうらむ鶏頭

感宮に風情しらず濱さ鳴りて

籠にもたれる舊人の腹

汐風にあゝおもしろの松の意地

芝生に躬ぶらり道中
ウ
見てくれい水晶輪の化ゲ仕舞
やぞの返哥の心笠着セ
去ほどに一城築クころび合
悋氣の味噌にから車押ス
くらべこし戀の秋さ夏たばこ
さつても月じや羽蟻わき出ル
混沌に逆鉾入ル川口屋
布袋の淺瀬わたる産土（ウブスナ）神
相惚のけふはなやきそかくれ里
瓦硯の減らす若後家
頁將の意味な開や花盛リ
わらへば山に藏王堂浮ク
ナ
法華經吹切うちが命也
あかぬ間はさむつても鋼
口說手に辛味しぼれば惣身死ヌ
小町の果な十月の菊
世の上なぬかばたらきの爲替宿
井さらひの繩三上山這
番町に坤皆斷にぶらさむり
酒呑童子の並ぶ大部屋
義盛の荷荷で一家の定器椀
鐙に積き戸なもたてぬ代
爼板に万兩躍る十三夜

氣に入座頭賓も飛は蓮
ウ
頓（トミ）の舌わきまへ功者水ふくべ
煎藥臭し檽柄の鼻
寬永の繪品の殘ル屋敷風
芝居など見ればやぶ入ぬ分ン
花なれや人は草冠（ザツカ）なれや花
いはぬ仲間に菜種山吹

●共角――杉尋 久米田氏 柳塘――嫡 賀朝 同苗
藤堂家ノ醫 享保十四酉十二月卒 法號三晞組　同家醫 法號三竹組

長閑さは彌生の海の表がへ　古人 杉尋
馬工郎の身はかけながし時鳥　賀朝
葛の葉もうら見ぬほどの暑さ哉　不角門吉田氏 賀角

未得老人は祖母の慈父たり。沾涼于今其系を譜す事あり。因て未の一字をさりて誹名を改るのみ。

其顏を洗ひて出たる新樹かな　邑里堂 未石
汗にほどよき藍の蟬ぬき
底なしの床から山たつれて來て
雲でゑんやといふはからし酢
水際なになるゝ月の京男
あたらぬ芝居雀二タ役
ウ
鷄頭の實は雨さ降ル窓障子

女房の落精兵を見せ
強しない鰐もおもひも寒替り
貰ひくさめに夢はやぶるゝ
（頭註鷹）高直さ日本で知ルわらび餅
つむぢの紙の先途見屆ヶ
釋迦に提婆太鼓に巴月の松
さゝげ畑にて幾年の馬鹿
白髪なき老はごこやら水嗅き
ふたつに折て單笥いつばい
よれ給へ喰たをさるゝ花の主
鬼のかしらをむしろ染おご
涙の植る山も笑ひて惠比須島
時斗の音に知是我聞讀
夕立の拍子はぬけゝる葛宗にて
駕籠のすだれのはては飯次
漬茶屋は太左衛門橋から大桂馬
千瀉を見する水のごか打
句ひなご假りなるものに壹歩百
多葉粉入より折レ不榊ぞ
深更に鐵槌めさる解毒丸
いつの手番をふたつ投また
風に樂屋の素面三ヶ月出ル
犬のぐるりを置あへぬ霜
蒼荒に初音ぬれ鷺潰さるゝ
物の雨家は菓子で埋られ
暮る場を鳥の迷ふ白大津
晴嵐た根唐ラの付キ合
人麗の雲さ御覽じ勸學屋
水からそつさ三ン月の湯氣

貞徳門 未得 ─ 子 未琢
未得 ─ 門 可曉 宇田川 歌學 ─ 可信 同苗 歌學 ─ 現 未石 同苗 邑里堂

或夏のくれ、そこもに夕すゞせらしに、下坂市之亟といへる刀鍛冶の住所をたづねける人に　下坂に縮屋町ニ住

これよりは一町ばかり下坂の
門ンの脇ざし鍛冶は貞國　未琢

垣に冬瓜のなりしを
垣越て我なさうぐはのやさしさよ
今宵ちぎりて汁人にせん　可曉

あさがほをおくられし人に
朝顏を使にたびし折からに
湯谷の留主にて御返事もせず　可信

朝顏もおなじ蔓草冬瓜哉　未石

郭公
初聲は火加減ぬるし時鳥　吟市

ほとゝぎす蛙手近水になし　當國
星を呑む釣瓶落しつ時鳥　賀朝
雲に消へ雲におりてやほとゝぎす　沾涼門 乙風
ほとゝぎす城のなだれの吉田橋　鶴史
あれ聞な鐘は物かはほとゝぎす　李條
偽りは人間にありほとゝぎす　洞畔堂 古竹
髪結に腹を立せつほとゝぎす　不扇門好文堂 不忘
ほとゝぎす投ゲは枕か老角力　露圓齋 有佐
是悲わかぬ難波ぞ五人蜀魂　夕佳
うゝかりと待郭公乳房かな　扇的
余もたぬ一樹の陰や時鳥　太平 竹裏

素性は通昭の子たる事を

うぐひすゝ通昭素性ほとゝぎす　沾涼

芝石千日醉

扨は我戻つて寐たか子規　秦姓 丈岳

市中郭公

聞人やきく時鳥二重店　松濤齋 魚路
駒形に水の底行ほとゝぎす　沾涼門 凉之
おかさるゝ茶にも德あり時鳥　未ノ立志門 如夕
聲に書て聞せつ望帝　同門 愚斧
雨雲や岑へふけゆく郭公　同門 風志
曉を朧にすゝかせほとゝぎす　風女齋 杏白
杜宇又鳥おなじ冥途の鳥ながら　不局

たゝく戸は余所の更行ほとゝぎす　梅五
近江より美濃へ美濃より杜鵑　布仙
薮越しの海は晴たりほとゝぎす　伊賀上ノ 倫仙
いたゞきに水ありしかも時鳥　宗匠 原松

鰹

今降ふう雲の端涙やはつ鰹　五百武
通し矢のかみに立也つり鰹　沾涼門 凉字
藍の色は京に極るかつを哉　布仙
まだ涙に夢を殘すやはつ鰹　周皎
鰹かな沖津塩(原註)潮たる朝すがた　露公門水戶 沾鱗
納屋の戸のあかつきはやし初鰹　古竹
海を出て海よりはやしはつ鰹　沾涼門 乙風
宇治川は佐々木梶原はつ鰹　沾涼

螢

色買ふは八百屋が紫蘇の螢哉　丈岳
身あがりの吹亮ばかりほたるかな　露公門古屋 露英
雲水の砂子働くほたる哉　快山
夫さおもふ尼の樂寐の螢かな　志村氏 聯志
秋の暮ならで深夜のほたる哉　沾涼

蟬　ふか川にて

帆柱に蟬の音遠し驥尾千里　桑田 賀朝
降くさし糠よろこびや蟬の晝　英松
燒石に水の木陰や蟬の聲　水戶住 沾鱗

端午

はまぐりの珠喰あてん柏餅　梅字
笹粽丹後の母の便あり　沾涼

夏日

印肉のはみ出すほどの暑さ哉　琴月
薄すんで礫に音なきあつさ哉　沾蝶
風凪て風呂な吹する暑さ哉　琳角
あつさかな牛のつかへる切通し　市車
堤行歩行荷の息や油照り　沾涼
ちんまりと比丘尼のあるく暑さ哉　照仙
一日は雲に乗る氣のまつりかな　乙風
一柄杓岩根なたゝくあつさ哉　菊千

蓮

からかさのはじめ終や千々の蓮　東巴
咲た見て根は賣られまじ蓮の朝　鶴史
風さめて星の居はりの蓮かな　好夕
十ヵさここそ折から開く蓮の指　周午
欠びする蓮の卷葉に睡覺哉　沖而

生植

五文字は最ヮ地に落つけしの花　一漁
筍や届きかねたる牛の鼻　調柯
日々の峠泊りや時斗草　答推
いかならん牡丹の蕾に獅子あらば　梅至

宵は雨明六ッ七ッ花あやめ　市紅
晝顔や清水坂のまきばしら　其角門 一風
姫百合の日まけいさふや懐子　楚烁
去年見し道にまよふや若葉山　調山
麁朶賣れて洗ひ上たり花葵　沾涼
埃捨る人も人也かきつばた　丈岳
こすこすの水の水よし朝青田　宗立齋門 志諷

いせ、みや川にて

卯のはなや神慮に叶ふ水の底　安祖
卯の花や眞田が丸の朝ぼらけ　露喬
初瓜や綴はきれて西京　沾橋

薙髮の砌　羽織を十德の暑さも晴至りて

僧でなし俗で猶なし夏あたま　萬丁

雜夏

これはこれは道子立たり衣がへ　宗瑞
さみだれやふる事ながら夜着の足　五山
起し合隣は遠し丹波蚊屋　東隣

莊子に胡蝶の夢あり

硝子の魚さ化したり蚊屋の夢　莊鹿
絹ぬきや世も虫貝の塩加減　壺周
ゆかたにて世に馴て來る扇かな　常樹
しぶ柿を喰て止たる鵜飼哉　隣角

浄請た錐子のたさへな枕蚊屋　同門枝月堂 葉角
最清く鳴さり蝶の綴かな　同門鶏日堂 柳雪
其影に浄土は出て田子の不二　同門江月堂 氓角
蚊ばしらや打ッ手に澳んゝる市相場　浮月
五月也二十四孝で見た男　江戸舟田氏 沾隣
功徳池のふくぼな寫す清水哉　同 沾瑞
澄わたるさはなめくじり須磨明石　宇都宮青山氏 立鴨
果報には美人の笑ふ鮓の醫　蝶水
天地のなりはじまりやさころてん　和歌山 紫筍
それかあらぬ冠なたしは田植共　未石
業の戸は笑ひにうごく田植哉　梅五
水眼の彩色で來ゝ田うへかな　布仙
そら錠いはなれ味あり夏なる夜　五百武
夏の夜やなかばにかはく洗ひ髪　服部氏女 臣女
議庵ぞ松にも薫て琴の風　涼之
虫干や鳳凰麒麟出ぬばかり　乙風

神ノ森ニ此ハはゑびすとのとそ　千翁
神祇　鯛があらう神の留主居い挟箱
釋教　一文で難陀投陀な一杓
鬼一口にくひてけり
戀　業平も大仕の譚たらよもやよも
無常　かまぼこゝ轡い あるに蛇蛇の笠
述懐　女房にも袴ゝれ見せて春の夜の

夕の遊　四季　梅澤 巴雲

松 すいかん　解て來ゝ折目流しや松の雪
柳 まり　月くれや鞠なもてなす夏柳
櫻 くずばかま　葉の秋な散るも櫻は葛ばかま
楓 くつ　水鳥や沓のことろな楓浮

題冬川　哥仙

いなさいふ舟の情ッなし冬の川　五百武
きびしき夜半の雪ほどに置ク　沾涼
見送りの鐘も尾上も有明て　倫仙
茶の煙遊くひさつひよ鳥　梅五
宮年も此辻番の葉鶏頭　五百武
詩も作ルべき顔の案内　倫仙
春日にはかれて大工のかし烏帽子　仝
洗濯川で出はじやれる身に　五百武
紅猪口に四国な残す指ビの跡　仝
問屋は長者五尺まな板　仝
湯げがたつ亡者に逢ふたうそ六部　倫仙
むかし作りの歯にはかき餅　仝
御油赤坂岡崎池鯉鮒鳴海宮　五百武
饒譯なする紅毛の蝶　倫仙
雪さなる花に雪踏の匂ふなり　梅五
けさなきのふさおもふ春かな　倫仙
月おぼろ芹生の里もはやり髪　仝

袖にあやかし付たので留メ　仝

ナ田楽に十ツヨきく鼻をみぢんにし　五百武

下手な額に中へ一日　仝

白に成松の輪切りに庭鳥の　倫仙

時代ばなしの眠い道行　仝

逝ッものはかく歟索麪ぞろりぞろ　五百武

馬鹿作茂菴さしが参った　倫仙

辨慶は遠里小野の油買ィ　五百武

不破さは漏レど事かきの傘　仝

雲吹は梶原施餓鬼の音　仝

下タへくるりさびようたんの露　倫仙

懸衣矢切りに月はちゃんさ乗　仝

三日行背は嫁のはつ汐　五百武

ウ能因の孕句おもふ此風は　仝

伊駒は晴れて盆に飯粒　梅五

舊跡は水くさいのにむまみあり　五百武

苔もそろ〳〵秡ィ堂形タ　倫仙

酒しほもならぬ男か花の宮　倫仙

春の匂ひに今朝からの鐘　梅五

師不知　得入（澤氏）――季吟門　卜尺（長子　同沓）始號吟卜云――現　卜尺（長子　同沓）

昔襟にぼつさりものゝ衣かゞみ　得入

秋の雲富士ないふ〳〵になぶりけり　古卜尺

一雫一足しざり菖蒲かな　今卜尺

芭蕉翁東都において始て履をとかれしは、古卜尺のやどり也。

梅留社　沾凉門 富山氏

伊勢小町式卩も梅のふり合せ　沾師

沾凉万句享保十二丁未三月十七日
湯島天満宮社地におゐて興行　禮物 座料不受

賀

いたゞくや北斗の下の若みどり　魚路

藤咲や伸べて千尋の風の色　五百武

芦雨子は万句興行の拙立

花に見よ今年万葉百千鳥　湖十

蔓甚し北の藤涙神の池　佳風

花に見て苗の千もさや菊の杣　潭北

香久山や神代の梅に道つくり　露牛

あめ清き千岡に鳴ルや舞雲雀　吏登

連翹はさきても坊主中間かな　一漁

十二座のおどけや花の神處　丈堂

莣よろづ藤江のはなの據　様翁

笠塚やこのてかしわの露の霜　當園

松よろづ中にかひあり花の門　沾山

卧な疊む簾影越せほさゝさす　白雲

手欄あり花の下ふく人の風　百里

世に鳴れさ助攀多し花の時　雨橋

種かしく失から鳥の口いは井　篤士

國寶にこたへはありつ舞雲雀　東巴
やがて名な不二にくらべよあづま菊　露月
花や今不二の襟もさ翁草　丈岳
目がよればこれも千筋の玉椿　未石
種はいつ一雨滿花時津風　八十曆
大鳥の息もさくらの日和哉　巾車
蕁の牙の力な見する入江哉　東閤
うぐひすのささそふ雲水園な出　仙杏
愛敬や夜も舞曲の花ざかり　吳竹
松が根い腰にぎやにしはなざくら　凉之
芳しき草におよぶや名の光ッ　倫仙
舞廣げ業にうへなし鶴の松　紅夕
雲に入ル鳥さ並ぶや筑波山　雪朝
當代に鴻の影さす水みどり　貫十
機によれば小しりなひたす視取　曙漸
永き日や一尺二尺鶴の足　出紫
花の口万句の席なよし野山　孤舟
今日の衣紋明るし雛子の輦　林潭
末久し錢さひらくも蓮の幅　仙魚
かしづくや龜の玉子の岡絲　沾友
植かへて菊や壹万三千句　わらび桃舟

（當日ノ席見百余人、おの〳〵賞翫ありけり。賞へだより、たんざく見えす、闕より見出しおゑ十六一句ス。）

あやにしき中卷軸

綾錦　卷之下

沾涼緝

三十六番句合

一番　左　首巖不二

蓬萊やある歌の山山の山　露沾

「はこれ路なけさこへくれば山の山
やまよりうへのやまはふじの根

右　卷不二

名な問はで知る山かづち花の雲　沾涼

○新勅撰　「ふじの根はさはでもそこにしられけり
雲よりうへに見ゆるしら雲　仁和寺法親王

○身延の道の記ニ云。あら井のわたりより富士の山な見て。

碧天雪白白雲ノ間　走卒兒童モ亦タ仰グ顏
東海初テ遊多少客　富山ニ不敢テ問ハ何レノ山ゾト

二番　左　舊

煤びずばおかしからじの薺籠　吟市

○枕草子　なまめかしきもの　柳のもえたる、青きうすやうにかきたる文つけたる、ひけこのおかしうそめたる、五えうの枝つけたる。

○世俗問答　正月は少陽の月也。又七日は少陽の數

也。よつて朝庭を始め、私の家に至まで宴會を
催也。

右

かみにたゝん露のすゝきも雲蕣　　沾涼

○古今集序　人丸は赤人がかみにたゝん事かたく、赤
人は人丸がしもにたゝん事かたくなんありける。

三番　左　梅

（原註）聞
きゝしめよ人なそらさぬ夜の梅　　東鱗

○異堂論話　梅花ハ悟入ノ師。

右

ひさ蟲かき立て來ル闇の梅　　布仙

○碧巖集　隔テレ山ヲ見ルニ煙ヲ早ク知リ是レ火ナルコヲ
隔テレ墻ヲ見テレ角ヲ便チ知ル是レ牛ナルコヲ

四番　左　初午

一日は水にも拍子けふの午　　魚路

○杜詩曰　魚吹テ細浪ヲ搖シ歌扇ヲ燕蹴テ飛花ヲ落ス舞筵ニ。

○千載「三室山谷にや春の立ぬらん雪の下水
岩たゝくなり　中納言國信

右

はつ午や一日見する秋の森　　沾涼

諧教ニ計會一時秋ナノ
風吹テ枯木ノ晴天ノ雨　　月照ス平沙ノ夏夜ノ霜

五番　左　はな

なのさ雲なんぢが雲歟花盛　　溶く

○夫木抄「風ふけばなのが雲よりなのが雲なちら
して見する山ざくらかな　後京極

○徒然草　花のさかりは冬至より百五十日とも、時
正より後七日ともいへど、立春より七十五日お
ほやうたがはず。

右

花ちるや遺ふ子の拾ふ毬の上　　女臣女

○枕草子　三つばかりなるちごの、いそぎてはいく
るみちに、いさちいさきちりなどのありけるを、
めざとに見つけて、おかしげなるおよびにとら
へて、おとなゝどに見せたるいとうつくし。

○未ダ有ニ學ニ養フ子ヲ而後ニ嫁スル者ノハ也。大學

六番　左　さくら

今朝さむかしある日や山ざくら　　水戸相田氏 沾鱗

○新古今　後鳥羽院
「櫻さく遠山どりのしだり尾のながくし日も
あかぬいろかな

○またや見ん花に朝露夕がすみ　宗祇

右

きのふ見た日に珍らしき櫻哉　　梅五

○詞花「年を經てよしのゝ山に見なれたる目にめづらしきけさのはつ雪　藤原顯忠

七番　左　ふぢ

藤の跡さては松にてありしよな　琴　夕

これはかみつけにての句たるよし。

○金葉集「松風の音せざりせば藤の花何にかゝれるはなと見てまし　良暹法師

○續古今「五月雨にみかさまさりて浮ぬればさしてぞわたるさのゝ舟ばし　祐盛法師

右

底匂ふ鮓鱇見せん藤疊り　沾　涼

○拾遺「多古の浦の底さへ匂ふ藤浪をかざしてゆかんみぬ人のため　人丸

八番　左　山ぶき

山吹や又拭ゐる水煙ノ　東　巴

○新後拾遺「山吹の花こそ波も口なしにうつろひゆくか非手の玉川

○無名抄　非堤の大臣の堂はひさゝせ燒侍りにき。そいまへにおびたゞしく大きなる山吹、むら〳〵見え侍りき。その花のりんは小かはらけの大さにて、いくへさもなくかさなりてなん侍りし。

右

山ぶきに犬のあくびの日脚哉　沾　涼

○過鄭山人所居　寂々タル孤-鶯啼ニ杏園ニ寥々タル一-犬吠ニ桃源ニ

○夫木抄　おもひくま人は中〳〵なきものを哀にいぬのぬしをしりぬる　慈　圓

九番　左　ひばり

九万里を竪にして今落雲雀　正　與

○歸去來辭　鳥倦テ飛而知ル還ヲ

○花子内篇　北冥ニ有リ魚其ノ名ヲ爲レ鯤　鯤ノ之大不レ知ラ其ノ幾千里ナルコトヲ也。化シテ而爲レ鳥ト其ノ名ヲ爲ス鵬ト　下略

右

よいほどに人家も近し夕雲雀　沾　涼

○新明題「住すてぬいほりも見えて小山田のそなたにほそく立煙かな　國　豐

十番　左　郭公

戀塚のあたりに降かほとゝぎす　千　洗

○後拾遺「時きぬと鳴ほとゝぎすうち羽ふき鳥羽田の早苗今やとるらん　津守國基

○新續古今「夕立のなごりの雲をふく風に鳥羽田の
　さなへすゑさはぐ也　攝政前太政大臣

○ほとゝぎすは異名多し。ひとつふたつあげてい
はゞ、

昨鳥　郭公　子規　勸農鳥　杜鵑　鳴鳥　鶗鴂（クヒラヒソキ）
杜宇　鶗鴂　蜀魂　望帝　別都頓宜壽　鶪（クヒラ）　三月
須巨鳥（スコドリ）　網鳥　童子鳥　沓直鳥（クノテ）　沓乞鳥
無常鳥　不如歸　四手ノ田長　過昨不熟鳥
妹脊鳥　常詞鳥（トコトハ）　五露鳥（イツユ）　鏡暮鳥（ウミクレ）　百聲鳥（モヽコヘ）
夜轉鳥（ヨタヾ）　玉迎鳥　早苗鳥　田哥鳥　草津久鳥（ツク）
賤鳥　誰彼鳥（タソカレ）　邂逅鳥（タマサカ）　宇津田鳥（ウツタ）　田長鳥
佐ゝ目鳥（サヽメ）　兎津良鳥（ウツラ）

右

橋裏の灯はしらけたり郭公　沾涼

○拾遺　いづかたに鳴て行らんほとゝぎす淀のわた
　りいまだ夜ふかきに　忠見

○袋草紙　俊頼ノ云。折ふしに叶ひたる哥を詠する
はこむにまされると也。前斎宮歸京の時、供奉の
人船中にい祢ずしてある間に、郭公一聲鳴わた
り、万人あたらしき哥なよまばやとおもふに、
女房の聲して、淀のわたりのまだ夜ふかきにと
吟じたり。人ゝかんじて、わすれがたかりける
と也。

十一番　左　田うへ

脊中の子泣ばなかせて田植かな　信州松本　三省

○枕草紙　加茂へまうずる道に、女どものあたらし
き折敷のやうなるものを笠にきて、いとおほく
たてりて、うたをうたひ、おきふすやうに見え
て、何すともなくうしろざまに行は、いかなる
にかあらん、おかしと見るほどに、……いかな
りし人かいたくなきてぞといひけん。下略

右

朧明りの袖ひくばかり田うへかな　布仙

○千載「廣瀬川あたりの小田にせき入て袖ひくばか
　りさるさなへかな　法印定圓

○催馬樂　澤田川袖つくばかりあさけれどはれ。あ
さけれど國のみや人たかはしわたす。あはれそ
こよしやたかはしわたす。　註云、袖つくばかり
は、水の袖にひたるばかりあさきを云。

十二番　左　夏の夜

明やすし一入一ト夜御油の夢　吳竹

○大和物語「ふたながらおもひ（し）よりも夏の夜の見は
　てぬ夢ぞはかなかりける　右京督藍の命婦

○西遊紀行　羅浮子云、美濃國青墓・遠江の池田・す
るがい手越、いづれも長者・遊君ありて、むか

しは往還の武夫・輕薄の少年、鞍馬を門につなぎ、千金に笑ひを買ふ所なれば下略。今は御油・赤坂なしてこれに准ふ。

右

もろこしの一里も夏の夜明かな　沾涼

○拾遺「夏の夜はうら島が子の箱なれやはかなくあけてくやしかるらん　中務

十三番　左　竹亭

鴻門の手に筍の勢ひかな　野州宇都宮　立鴨

○山谷詩　竹筍初テ生ズ黃犢ノ角。

○漢楚軍談　門ヲ閉ル、樊噲コト能セズ。力ヲ出メ門ノ閫ヲ推。陣門タチル。

たけのこや今雪折れを盜む音　沾涼

○夫木抄「それが名は花ぬす人さたゝばたてたゝ一折はおりてかへらん　和泉式部

十四番　左　野渡

五月雨や船さりに行跡の船　倫仙

「五月雨ににやなのつなはくちはてゝしほにひかるゝ舟ぞあやうき

○船取に行　大和物語ニ云。下野の國におとこ・女住わたりけり。としごろすみける程に男。女まうけて心かはりにて、此家にありける物どもを、今の女のがりかきはらいもてはこびいく。心うしと思へど猶させて見けり。ちりほどの物ものこさず、みなもていぬ。たゞのこりたるものは馬船のみなんありける。それなこのおとこのずさ、まかぢさいひけるわらはつかりけるして、此舟さへとりになこせたり。下略

右

屆いた歟して漕で來る樗陰　沾涼

「はなちてやさなりの川の朝則堤むかひに舟よぶやたれ

○楝　歲時記云　自ニ初春一至テ初夏ニ有ニ二十四番ノ風一。始テ於梅花ニ終フ於楝花ニ。謂フ之ヲ花信ノ風ト。

十五番　左　すゞみ

むすぶ間も水新らしき涼み川　紅夕

「このごろは流るゝ水をせき入て木かげ涼しき中河の宿

○方丈記　水のながれはたえずして、しかももとの水にあらず。

右

涼しさは足駄を越ぬ流れかな　沾涼

○徒然草　ふかき水はすゞしげなし。あさくてながれたる、はるかにすゞし。

十六番　左　夕立

夕立や瀧のふさりて草の湯氣　越前西田中北信閣　南花

○若紫卷云　雨すこし打そゝぎ、山かぜひやゝかに

ふきたるに、瀧のよごみもまさりてたかくきこゆ。

右

夕立や一ト隅しらぬ野ゝ武藏　沾涼

○菅家御集　露おかぬかたもありけり夕立の
雲よりひろきむさしのゝ原

十七番　左　あつさ

獸の耳に骨なき暑さかな　一麐

○走獸の中チ象ノ耳ハ異ナリ。異物志ニ云、象ハ身數牛ニ倍ス。鼻。口ノ役チナス。馴良ニシテ教チ承。言チ听トキハ跪ヅク矣。

右

石煮へて牛のあなのく暑さ哉　梅五

○夏ー日極ー熱天　爍レ石。活法

○格物論云　牛ノ母チ牸ト云。父チ牯ト云、子チ犢ト云。

○人つく牛なば角をきり、人くふ馬なば耳をきりて、そのしるしさす。つれ〳〵草

十八番　左　蟬近茅屋

簷はれて夢を遠ゐや蟬の聲　水戸　沾梅

うちたゆむひるねの夢の俤は雲にもあらず雨にもあらず

○智度論云　春ノ末夏ノ初以レ時熱。故小シ眠ー息除レ食ー患。

右

夢吹や蟬にゆらるゝひさつ家　沾涼

夏山の椎の葉ごにさり付て耳のまもなくゆする蟬哉

十九番　左　鵜川

人の手のかゆき所も鵜縄かな　逸志

此川にさ夜ふけぬらしかつら人鵜なわ手にまき舟みだすなり

○智度論云　一切ノ寶ノ中ニハ命ヲ爲ニ第一ト。諸罪ノ中ニハ殺生ノ罪ヲ爲第一ト。諸善ノ中ニ、不殺生戒ヲ爲ニ第一ト。

右

白ー髮にいかさまはあり鵜飼船　涼之

○莊ー雜篇漁父　有ニテ漁父ナル者ー。下レ船ヨリ而來ル。鬢眉交ー白。披フリ髮揄レ袂行レテ原以テ上ル矣。

いつのまに霜の翁さなりぬらん菊なば花のおさ〳〵おもふに

二十番　左　夏の坂

かはらけつ投もやられぬ暑さ哉　水戸　沾渡

○拾遺　なき名のみ高雄の山といひたつる君はあたごのみれにやあるらん　八條おほい君

○土器投　廿二三丁目より五六丁目まで〳〵の間

右

(原註)生
いきたりな廾波見おろす汗拭ひ　沾涼

○神社考云　王城ノ西ノ山名ニク愛宕山ト。秀ニ出ス於嵯-峨万-仭ノ之上ニ。

○三十二三丁目笹原と云所より丹波國眼下に有。

廿一番　左　一葉

關越へて荷札を落す一葉哉　秩父ノ小川　沾橘

○淮南子　一葉落天下知レ秋。

○千載　都にはまだ青葉にて見しかども紅葉ちりしくしら川の關　從三位頼政

○東鑑ニ云　文治五年七月廿九日、白河の關をこへ給ふ。關ノ明神に御奉幣。此間景季を召し、當時は初秋なり。能因が古風思ひ出さるやのよし仰出さる。景季馬をひかへて一首を詠ず。

「秋風に草木の露をはらはせて君が越れば關守もなし

○不破　普光院殿、富士御らんにおもむかせ給ふ時、御もてなしのため、關屋も民家もあらたに作りかへたり。よつて御きげんはなはだあしかりしに、

「ふきかへて月こそもらね板びさしさゝ住あらせふはのせき守

右

うらふかく包は鮭の一葉かな　沾涼

○東鑑云　文治六年十月十三日、遠江國菊河宿におゐて、佐々木三郎盛綱小刀を相副、鮭の楚割を折敷に居、子息小童を以御宿に送り進ス。申て云、只今削レ之食せしめ給ふ所、氣味すこぶる懇切なり。はやくきこしめさるべきか云々。殊に御自愛し玉ひ、折敷に御自筆をそめらる。

「まちえたる人のこゝろもすはやりのわりなく見ゆるこゝろざしかな　頼朝

廿二番　左　野ぎく

風に偃ス類ひにおしき野菊哉　今莎鷄ト云　祖泉

○野分卷云。れいのさしよりもおどろ〳〵しく、そらのいろかはりていづ花どもしほるゝを、いさゝかもおもひしまぬ人に、あなわりなさおもひさはがるゝを、ましてくさむらのつゆの玉みだるゝまゝに云

右

物を縫ふ尼の日うけや野菊原　沾涼

○狹衣　都のかたはらに尼になりてしのびしを、さごろもの中將、そのあさをたづねて、

「尋こし草の原さへ霜がれてたれにとはまし道芝のつゆ

廿三番　左　月

月濡れて椎柴酔り南嵯峨　千楓

「山ざとは物のさびしき事こそあれよのうきよりは住よかりけり

○徒然草　望月のくまなきを千里の外まで詠たるよりも、暁ちかくなりて、まちいでたるが、いとこ心ふかうあをみたるやうにて、ふかき山の杉のこずゑに見えたる木の間のかげ、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれ也。椎柴・しらかしなどのぬれたるやうなる、はのうへにきらめきたるこそ。

右

我池のわれが月也蓮の臺　沾涼

○新明題「月は今宵こよひも今宵見る人も待ちえし宿の池のこゝろは　後水尾院

○與問賢註　只常のごとくの、しかも人の案の及ばぬやうなる事を、いつかよむべきにや。かたはれ月のかた〳〵は落て水にありけるものを、といふ哥は、風情いりほがとて出されけが、貫之の哥に、「ふたつなき物とおもひしをみなそこに山のはならで出る月かげ、と侍る。下略

廿四番　左　冬瓜

かしこきは酔るがごとし浮冬瓜　丈岳

○夫木抄「酒の名をひじりといひしいにしへのおほきひじりのことのよろしき　家持

○詩日　坐對賢人酒。鮮千輪日、醉客謂清者爲二聖人一、濁者爲二賢人一

右

（原註）聽

つむぢにも曾子の形りや大冬瓜　沾涼

○參ハ也得ナリ。程子曰、參ハ也竟以テ魯ヲ得レタリ之。

心を取句　西瓜ひとり野分をしらぬ且かな　素堂

廿五番　　もみぢ

もみぢして一入黒し塔の屋根　豐後府内　左隣

○但祇律云　有ルヲ舍利一名ケレ塔ト無キヲ舍利一名ク支提ト。

右

もみぢより鳴ルやさみづの秋の寺　梅五

○品川鮫サメヅ頭。補陀山海晏寺、もみぢ多し。

○新勅撰「むかし誰かゝる櫻の種うへてよし野を春の山となしける　後京極攝政

○鳴　送孟東野序　以テハ鳥ヲ鳴ラシ春ヲ。以テ雷ヲ鳴ラシ夏ヲ。以テ虫ヲ鳴ラシ秋ヲ。以テハ風ヲ鳴ラシ冬ヲ。下略

廿六番　左　旅泊鹿

笘船に筆を採るや鹿の聲　水戸　沾瑞

○秋夜宿ニ淮口ニ一　風帆幾ノ處ノ客ノ　天地兩河ノ星　樹靜ノ禽眠レ艸ニ　沙寒ノ鹿過レ汀ノ

「わかのうらは多くの人の筆の海沖にもへにももしほかくらし

右

しらぬ鐘鹿に送るや礒まくら　沾涼

○我ふる里にてはきよ見寺の鐘をこそ、常はきゝなれしに。三井寺ニ詣

○日本記　黒主、津の国つは野とおふ所にとまりけ

り。この明がたにきけば、かたはらのやぶの中に、男鹿とおぼしきが云やう、こよひわがせなかに、霜のふるよと夢をこそ見つれ、といひければ、女鹿の云やう、よく〳〵つゝしむべし。狩人などにあひてころされ、皮はがれて、しほをまかれんが見ゆるならんといひて、鹿なきて行けり。ふしぎにおもひ、あさよりしのびつけて見ければ、朝たちするかりうど、このしかを射ころし、やがて皮はぎ、しほうちなどしけりとぞ。是より告野を夢野と云　鹿の因に書侍る。
「兵庫ノ邊也

廿七番　左　秋海棠

待わびや秋海棠の風ないたみ　皓鴎盛 露庭

○擬待眞詩「空閨孤燭ノ夜。羅幌獨リ眠ル時。

○新明題「まてといふそのことのはを頼つゝ
こゝろをつくす花の夕かぜ

右

是もまた杜が母の名ぞ秋のはな　沾涼

○詩云　杜子美ヵ母、名ハ海棠。故ニ集中無ニ海棠ノ詩一。

廿八番　左　落葉

松の脊に嵐をかつぐ落葉かな　巾車

○菅家御集「ちるはなをたきゞのうへにふきかけて
あらしをもたぬ山人もなし

右

今朝ちりし甲斐の木の葉や田子の浦　布仙

○丙辰紀行　富士川は海道第一の急流なり。下略

○新古今詞書　後冷泉院の御時、うへのおのこども大井河にまかりて、紅葉浮水といへる心をよみ侍りけるに、　藤原資宗朝臣
「筏士よまてこととはん水上はいかばかりふく嶺のあらしぞ

廿九番　左　ちどり

海面へひよどり越のちどりかな　賀朝

○鵯越。須磨の北手見ゆる山也。武庫山につゞく。
「さゆる夜のすまのうら浪立かえりおなじかたにも千鳥なく也

○欹レ枕ヲ猶聽ク半夜ノ鐘。

右

ぬか星のこぼるゝ音歟遠千鳥　沾涼

○須磨の巻。れいのまどろまれぬあかつきの空に、ちどりいとあはれに鳴。「友ちどりもろ聲になくあかつきのひとりねざめのとこもたのもしまだおきたる人もなければ、返〳〵ひとりごちして、

三十番　左　こたつ

罪なくてたゞ素男の巨燵哉　イセ津清水村 東沚

○撰集抄　むかし中納言顯基といふ人、後冷泉帝の時配流せらる。あはれ罪なくして配所の月を見ばやと、泪をながし玉ふ。

右

三方は箱に貞女のこたつかな　布仙

○唐詩註云　賈直言坐レ事ニ退ニ嶺山ニ。妻ノ董氏ー云。吾レ死ハ可ニ別嫁ニ。妻不レ答。引レ繩束レ髮。君ガ非ハ手不レ解。直言貶三十年ニシテ還。署帛宛然タリ。

○伊勢物語　ヿふたりしてむすびし帯をひとりしてあい見るまではとかじとぞおもふ

○万葉　ヿゆへなしに我下紐のとけたるは人にしらすなたゞに逢ふまで

廿一番　左　しも

たれもまだ霜に疵なし橋の上　雪朝

○新明題　ヿけさはまだ人もかよはぬ跡見えてふむほどもなき霜の板ばし　道晃

○温庭筠商山早行詩は、はや人の越たる也。

鷄聲茅店ノ月。人跡板橋ノ霜。

右

旅立のもよひの煮ゆる霜夜哉　沾涼

○月落烏啼霜滿レ天。

○新古今　ヿ明ばまたこゆべき山のみねなれやそらゆく月のすゑのしら雲　家隆

廿二番　左　かみ置

笠重き雪のしらがや花元結　青皿

○白氏文集　與レ君結レ髮五歲。

○詩人玉屑　笠ハ重シ吳天ノ雪、鞋ハ香バシ楚地ノ花。

右

髮置やしだりはじめの糸柳　布仙

○若菜巻　みやの御すがたをのぞき給へければ、人よりけにちいさくうつくしげにて、たゞ御のぞみあるこゝちす。にほひやかなるかたはなくれて、いとあてやかにおかしく、二月の十日ばかりの青柳の、わづかにしだりはじめたらん心ちして、うぐひすの羽かぜにもみだれぬべし。さくらのほそながに、御ぐしは左右よりこぼれかゝりて、

廿三番　左　かれの

我ひとり枯野に照るや丸合羽　涼宇

○いざよひ日記　野路と云所は、こしかたゆくさき人も見えず。日はくれかゝりていと物がなしとおもふに、しぐれさへうちそゝぐ。ヿうちしぐれふるさとさむく袖ぬれてゆくさき遠き野路のしのはら

右

野は枯れておの〳〵高し三ッの富士　沾涼

○するが富士郡　爲家

ヿふじの根は冬こそ高くなりぬらめ分ぬみ雪に時をかされて

○むつ岩城山
「ふた見てもふしとやいはんみちのくの岩城の山の雪のあけぼの　西行
○さつま穎娃郡
「さつま瀉えいの郡のうつほしまこれやつくしの富士といふらん
山のすがた高き事も駿河にひとしく、雪また巓（トコシナヘ）にありとぞ。

卅四番　左　つらゝ

方圓のすがたを借らぬ銀竹かな　紀州若山　一狐

○夫木抄「つゝ井筒いづゝのたるひとけぬまにはやくもくるゝ冬のかげかな
○水ハ随フ方圓ノ器ニ

右

風に研ぐ堂のちりけのつらゝ哉　梅五

（原註）身柱
風磨ク氷ノは寒鬼
○文選宋玉ガ風ノ賦　其風中（アタ）ル人ニ状直（カタチタヾ）ニ憯悽（センセイ）惏慄（リンリツ）。（スサマジク　サムシ）
○新勅撰　みよし野ゝ山井のつらゝむすべばやはなの下ひもおそくとくらん　藤原基俊
○宗[illegible]方角　此坂口より嶺筋を、一里あまり東へ上りて坊々あり、藏王堂ちかくにかねの鳥井あり。坊々は嶺筋の北にかけつくりに立たり。藏王堂は東向也。

卅五番　左　ゆき

月に花に暮てことしも雪白し　未石

○無門關云　春有リ百花秋有レ月。夏有リ涼風冬有レ雪。
○枕草子　ころは正月三月四五月七月八九月十二月、すべておりにつけつゝ、ひとゝせながらおかし。

右

まち〱と雪の榎の荷取馬　沾涼

○延喜式　凡諸國驛路邊ニ植ヘ菓樹ヲ令ム往來ノ人得テ休息セ。
○一里塚は、織田信長。地の三十六禽を表して、一里を三十六町にさだめらる。塚のうへには松杉の類ひを植べきやとうかゞふに、余の木をうへよと也。かしこまりて榎をうへたり。余の木、榎のきゝたがへ也と云り。

卅六番　左　歳暮

人もよし我も花見てとしの暮　五百武

○荒木田守武世中百首に、
「世の中の人をあしともおもふなよ我だによくば人もよからん
○西行賦ニ云　花ハ依テ風ニ散リ。人ハ依テ友ニ知ル情ヲ。

右

信濃なる歳暮車やうみの上へ　沾涼

○諏訪湖は、氷のうへを狐わたつて後、人馬往來すト

云。

○述異記　河水始テ合ス。狐先行テ後、渡ルコトヲ得ル。狐河氷渡ラントシテ、水聲ヲキイテ后スグルト也。

○此三十六番の句合は、いづれか錦さし綾さするにあらず、たゞ古詩・古哥・古語を以て、句の心にさりあはせたるのみ。

○他國宗匠大略

貞德—良德—良保—常距（又季吟門ト云）
　　　　　　　　—和及—竹亭（現）—暮四（石壽菴）

物たえて落葉鐘打太山哉　和及

けふの月勢至と聞ぞうらみなれ　竹亭

下萠や小春の麥の腕まくり　京　暮四

貞德—梅盛—信德—信安（棹哥齋　去亥卒）

はかなしや捨子にふくむむら時雨　信德

ほとゝぎす淀の筧の濁るまで　京　信安

露沾公（現）—沾德—仙鶴（現）

壁に耳生るものなら五月雨　京　仙鶴

貞德—季吟—芭蕉—其角—淡々（現）

糸ざくらすなはちこれが花の雨　京　淡々

雪雫我に寐よさの晝間かな　芭門　大坂　路通

名月や眞杉杉原庵はしら　同門　同　野坡

ほとゝぎす雲踏はづし〳〵　同門　尾ノ名古屋　露川

宗因—西鶴—才麿（現）（舊德翁）

鯛は花は見ぬ里もありけふの月　古人　大坂　西鶴

麥の穗にみがゝれ行や小山伏　大坂　才麿

貞德—重頼—鬼貫（現）

吉野氣のはなれて白し秋の雲　大坂　鬼貫

盃も降て來そうなさくら哉　正秀門　大津　松琵

○伊賀上野連

貞德—季吟—芭蕉—其角—原松（現）（猩々菴）

不意なしや女な入ぬ山ざくら　猩々菴　原松

行春を何さおもふて鍛仕事　猩々門　笑鴎

寒梅は茶うらにうさし朝ぼらけ　同　蕭而

菜のはなや木賃泊りの膳のさき　同　斧仙

熊蜂に蹴れてもろし鹿の角　同　桐雛

三芳野や花にかぶれし雲の色　同　省我

神鳴を耆むちからや紅牡丹　同　松市

籠ながら根芹をさらす流れ哉　同　記之

天正年中伊賀久米郡主菊岡丹波行任四代
行宣 菊岡滴性軒行尙 書程舍 號有斐如幻 別當名號法名ト
和歌ノ達ス
世諺一統三百卷編著其外述作有多
─房行 沾涼 實竹東三悅男
─行重 記之
─行■(マヽ) 有隣
現二男

伊賀久米の袖合九品寺に存命のうち
碑を立すへきなうへて 隨性軒如幻
けふよりは袖合山にかげかくすかり生の薄かたみさも
見よ

五十歲の春、沾凉かたへ書こされし
齡百そのかひおりの今朝の春 菊岡 行尙
題曉鷄
うぐひすや鷄の八聲の間より 伊賀菊岡 記之
享保十三申の初夏、布仙故鄕に趣くに、はじめて面を對する親屬多し。一類會する時。
爾稱を見せむさかりの夏木立 伊賀菊岡 有隣
故園今右も左りも若楓 布仙
(勢州山田
芭蕉──支考 美濃──乙由 山田──
影落て筏に枝や靑あらし 乙由
雲さなる峯のはづれや時鳥 團友門山田 蘆本
○紀州之連
山里や獨味口借しはつざくら 須原垣内 環山

或人なにはよりこのかみを尋、きべかりしに
ひきよせて枝さくを柳かな 同所 冬嶺
日に煩惱あたらさくらに被かな 湯淺千田 鷺舟
吹溜て雪の夕べやはなの酒 垣内 守株
嬋娟に勒をうけたる柳哉 豐山
山を越えて海近き所に至れば
若草や轡の重き原づたひ 梅ヶ瀬 山茶井
むし干やむかしの袖は奈良の京 鷺舟
梶の葉に筆あやまらず洗ふべし 環山
名にしおふかつら男や髮の照り 守株
鱸釣ル竿に成るほど客もがな 豐山
海邊にて
名月や魚にさられし釣ばりも 冬嶺
船に女琵琶を抱て月夜かな 山茶井
さるおがせは深山の產物也。
積ッては山に時雨のさるおがせ 雪朝
一段天の高きうらがれ 沾凉
塩魚の荷より夕日の雫して 布仙
海士の浮場へ鵜がすつさ浮ク 雪朝
鎌を研ヶ次郞馬が袖に暮る月 沾凉
菊さ豆腐は仕やう旁カタく 布仙
藪ウ入の先懸に成ル大西瓜 仝

裏吹毬はこゝろからゆれ　雪朝
むつ言な鶺鴒にきかれ好事門　仝
紙袍の枝へつかふ初瀬切レ　仝
八宗は殿の悟道にへちまくる　布仙
船な押出ス硯屋の肩　仝
儒者頭の唐ヘちかいさ三田へ越ス　仝
けにもはれにもきせる一本　仝
目でいふてつゝかれるのも鱈に昆布　雪朝
ものぬい以上羽扇綸巾　布仙
月の萓花の夜もなし男ぎれ　沾涼
棧敷へむくは七三うぐひす　雪朝
ナ
寺御幸鉄屋富堺いかのぼり　布仙
我がこしらへた水皷自慢は　仝
欠ビした口から小槌かくれみの　雪朝
比丘尼のすがた離吸には洩レ　仝
取得あり鶏は戀からにくめども　布仙
跡附ケへ借ル宿中の鎰　仝
礬に船呼場所なおもひ出し　仝
山からによつさ十三七ツ　雪朝
蓮眞蛍垢離の音頭の鼻へ來ル　布仙
遊びはしまりつけるすゞむし　雪朝
ついさこさ重六ふられ伯母に腕　仝
阿宅覺へた人は茶に塩　布仙
ウ
借馬業の拍子にも合江戸宵チ　雪朝
よい事ひさつ出かす新参　仝
大寺は夏のすくなき心もち　仝
つら〳〵おもん安い蚫蝶　仝
はめ板に五臟のうつる花の京　布仙
世はひよこ助の二月三月　沾涼

題東叡山鐘

霜滿て響きな呑や甚五郎　紋叟

師不知
政則 松木氏 宗因門 ― 青雲 同苗長子 現 ― 蓮之 同苗長子 現 ― 文雅 同苗長子

毛吹草ニ入
花の散ル後やみのりの梅ほうし　政則
江戸八百韻入
相宿り天狗もやさし時鳥　青雲
江戸筏ニ入
何人の戻す座頭ぞ小夜時雨　蓮之
神主に大根漏せて落葉哉　文雅

七夕

七夕や藪の庭にも娘あり　卜宅
棹さめて火繩に達し里の水　梅宇
天の川かみは荒川すみだ川　呉竹
山鳥な今宵は笑へ夫婦星　沾涼
借りて來て星に借し蚊屋出替津　凉之
煩惱な一夜に流せ天の川　秋花 李條
一目な力ぞ渡り天の川　麟石
お徒歩衆の身なら幾夜か銀河　呉竹斬 仙理
牽牛や枕のひだな取おほせ　泰擧

屋根葺に出て知る今宵星の空　ブンゴ府内 沾涼門 左隣
淺瀨去男もいらず星の川　同門 渡邊氏 柳絃

朝顏

あさがほやうがひ茶碗の龍田川　琴月
朝がほや朝綠の人の福の神　蓮之
あさがほや薄着女の提手桶　涼宇
朝顏や壁に點頭四疊半　嘉祥
あさ皃や傘張も垣に干せ　山丹

露さこたへさよみしを

しら玉と呼にあさがほの門ツ下り　千翁門 水光堂 琢角
あさがほや夕べをまたぬ女護の島　一風
朝がほやいづれ若衆の年もそい　有林
朝がほや石にもならず星の花　桃翁門 巾車

夏い所に書おさし侍る。

鶴龜に瀧の風あり土用干　沾徳門 沾津

月

月登る草のはじめや佃島　逸志
暮るほど夜が明ヶにけりけふの月　壽角
今宵かな曉かけてはなれ馬　卜宅
名月やあたゝかならば元結こき　丈岳
星は更る頃に光谷暈中嶽　魚路
世界皆畫を樂屋にけふの月　鶴史
けふの月首に見猿も手を放し　安祖
名月や迯り獸の址も址　夕佳
名月や夜明心の參つき基　有佐
月ひさつ陰なくんだりはれつろべ　大和郡山 云々
有明に哀や虫の朶取り　藥角門人 萩葉

月

百鋪に白際置クやけふの月　竹裏
名月や淋しきまゝに家來の子　吉田氏 琴月
夜目遠目暈着てもよしけふの月　北尾氏 賀角
月澄や武藏手づくり芋の原　千洗
待宵の月は物かは三ツ蒲團　竹田
月なれや仁王の腹に菰かぶり　全
富士もけふおもにゆからう富士の月　信州 藤森氏 三省
感ずるや片頰出たる松の月　沾涼門 仙魚
芋の名も塗桶式部十三夜　芦玉
新月やあられぬ所さかな店　濁尾 陽秋
うたかたの水栗寒し十三夜　仙菓室 五山

秦姓丈岳稿

もろ〳〵の鳥の中に、すぐれて風雅なるは鶯、至つて風雅なきはからす也。聲さへ、かたちさへ、くふものだものたなし。風雅の和訓は、やさしきさよむなり。うぐひすやさしく、鳥にくし。風は諷也。其詩〳〵の善惡を詩に諷也。雅は正也。いさゝか欺ず、直にのぶる也。國風、大小雅、尊卑によらず、人のうへにある也。誠の風雅は仁にかよふ。やさしきは温柑よりいづるもの也。或誹人湯婆にさむきなしのぐ。その隣れるに老翁あり。極めて寒日の夜、我

にははろか年まされば、さぞしのぎがたくやさ、我たんぽを老人におくろ。謝さして老翁より、小豆がゆをおくりけろ。そのふたに、

世さゝもにこそたのしまん今朝の雪

又云、むつびたろ人の子、不孝なろをかなしみ、我むすめの美なろをその子に嫁し、さかくして孝道になしたり。これは連誹なき人なれども、まことの風雅也。歌・連誹は風雅の根元なれば、此道を學ぶ人をすべて風雅人さはいへども、さりが中にもよきをそれみ、おしきをよろこび、かりなる事に角だち、我意あつく我慢にふけりて、鳥におさろ人あり。風雅のみちを學ぶならば、我も人もやさしきさ訓ずる事を、ふかくあぢはふべき事にこそ。

諷僊　丈岳 撰唫

人は無爲月あり風あり遊團扇
外へ通ゥぜぬ冷水の咽
つぶされて戻つて禮のおかしくて
雲をうさんに遣入長持
我家が近うて噺あまるなり
なんでも九文鼻毛まで濟
茶倭をしよ(原註)脊肩つてまんまさ芥川
情にかけてないかしら鶩
夏冬を剃てははやす庭せゝり
御用の外は引ゝな初雪
一軍せんさ丹後の具足下
鐧と鑪の間に床取ル
鋸の中や絶なんきり〳〵す
四角を見せて踊ろ拜殿
そら鞘の屋敷をはづす月の藝
出ル杭さらへくづし擂せろ
ありく花ありかぬ雲や上野頃
結納の香ザもいまだせぬ梅
居風呂も一間臺も駄荷にして
讓ろに至り金の埋(原註)所ご
魚は腹虚は尻から藁がでろ
卵すかせば子よりはじまろ
くらがりを好て遣やろは牛の年
文合点すろ近付の狆
店さきでたばこ御無用千話無用
厨が對の道具もたせろ
涼所へ月を荷擔の水に錠
足で日見へをさせろ角物
同船は蕎麥の給仕のぶちまけろ
日本の鰭は惣領の山
白妙さいふは杜を織事馱
立ッて抱付跳跛くやしき
小さんが湯氣に入ル國をさがす也
糊さへも瓜流紗綾のにぎやか
鋤鍬で鍮へかゝろ花の伊勢
榻さすれば眠りいよ〳〵

調和——門人 風和 江原氏 調和門 同苗長子 壺竹軒 現調柯 壺仙堂

先生と門人、四十年來、かはらぬ席
たゞ求る事今も、

聟返す初音に初音ほとゝぎす　風和

殘るは餘花と月の有明　調和

夜梅

照るや梅たとへば星の有ル夜にも　調柯

介我——門人 我侑 砂岡氏 總州結城住 現 周午 同苗長子 同所

神〱な中おろさば花野かな　介我

雛や二月の寒さおし移り　我侑

見そめたは稽古の星とほとゝぎす　周午

良夜

名月や顏は節句の人通り　咫尺

朝鮮へ富士に見ゆるとけふの月　沾涼

名月やちいさくなりぬいせの海　伊賀宮氏 猩々

秋の野

さゝ浪の一里は近き野ぎく哉　魚路

倒れさよ落穗なしごく鶯の首　東巴

明にけり紅葉焚野の鏡茶屋　倫仙

虛無僧の下駄より暮る花野哉　三輪氏 農肴

手を當る花野な雨の土足哉　吟園

百姓の隣といへごにな野かな　有含

一城な見上ル裾の花野かな　ブンノ存内 多賀氏 沾涼門 沾雲

重陽菊

大隱ぞ千種の中の翁草　千翁門 雷龍堂 龍角

しられけれ菊にしてこそ親の恩　感牛齋 鶴史

長き根や花に流れて菊の尺　向井氏 卜宅

きらほしの皆遊なりきく畠　絳莓舍 英松

墨を吞ム魚友達やきくの酒　笠翁甘 雪 沾涼

名のために鳥井越べき菊兼脚　一漁門 雪朝

九年酒の日にもさやかにけふの菊　笠山

生植

沈む日や詠めすてゝも葉鷄頭　素丸

落栗や隣の耳に小夜衣　賀朝

かます縫ふ里はあれけり椎の風　五山

中〱に論語のはしや梅もどき　其遊

色かへぬ松に兎ト絲子の朱引哉　甫角家主 句角

所化衆に玉章讀るもみぢ哉　交月人 調山

駕籠かゆるふり分ヶ坂や蔦かづら　沾涼

氣形

鴈の擘寺に二階もあるものを　調柯

鴈落す瀨田に摸樣の夕日哉　五百武

鈴虫も笠に一夜のぬけ參り　曾十

待宵の枕かしこしむしの聲　紀州若山 一狐

はつ鴈や氣違見たる夕原　水戶住 如水

雑帙

暮行ば墨繪になりぬ秋の山　吟市
つれて退ク袖はさがめそ放生會　露門 泉舍 露岳
飛廻芦邊なささそふ躍かな　須貝氏 露庭
ぬけて出て乳はあまれども躍哉　小野氏 鵜史
人まれの人眞似なするおどりかな　千翁門 右月堂 左角
大イ文字や終の薪のめつたくべ　露門 美女堂 沾光
牛島な見るに罪なし明の霧　加島氏 好夕
新酒や雲の勢ひのひさつ星　快山
小夜碪遠く聞えて明はやし　千翁門 壽月堂 善角
いかにせんやき米俵金林寺　如雲
秋風に海士も糊するいさ間濵　市紅
木鋏に陰に來にけり菌の露　水戸住 仲山氏 沾橋
野すまふの崩れし跡や石地藏　沾凉
秋情な鐘に殘すや松一ト木　雪朝

相州湯本より

貴翰忝拜見仕候。先以御賢固被成御座珍重奉存候。野子儀相湯仕候間御心易思召可被下候。然ば樂〻之御編集、大方ならず御成就之旨、大悅此事ニ御座候。隨而致かけ候哥仙読草之吟則御跡、雨中いつれ〳〵よき樂仕候。花・畢句は貴翁被成可被下候。且又旅行之愚吟、懸御目申候。近日歸府し萬〻可申上候。恐惶謹言。

閏五月十二日　笠井魚路

菊岡沾凉樣

尙〳〵布仙子・梅五子へ宜奉賴候。愚妻もよろしく申上候以上。

荒藺崎（古哥によまれしは、すゞの森の汀なりと。）

よしきりの耳なこすりて石に音　魚路

もろこしが原（こがねの札ある鍋、今有。）

五百歳の立夏な鳴クや千代の鶴　〃

鴫立澤（歌こゝ本意の所か。）

此澤の風景若しほとゝぎす　〃

湯本（鹿の声〳〵と貢に江都に耳なれず。）

小男鹿の戀し落貢角の聲　〃

二子山

夕立さわたくし雨のやま二子　〃

箱根社（富士のみかりの釜とて、水たゝへて池のごとし。）

水やそら九尺の釜に若葉かな　〃

謁偲

雲さきへ九輪引ぬく霞かな　魚路
麥も菜にも香梅おろす風　沾凉
寒だけに大かた立に庵寒て　〃
來ル舟テまちのたまる四五人　魚路

寐あく夜の朝日はでゝも月も有　、
拍子はなけれ白ィ鷄頭　沾涼
湯ごうふの生田やぶれて庵の秋　、
拙者が富士をおめにかけうか　魚路
はくらんと覺えても匙花あやめ　沾涼
經と一度に味噌大豆の古語　魚路
秋葉からごたりと打れ悋氣止ム　魚路
禰すんがりは吹上の松　沾涼
塩曳の半-身淋し月の泒へ　魚路
いさゝに師走抹香から白　、
隅〻へ飯の息キのゆづり金　沾涼
みれ梅干じや町中ナカの勒　魚路
物いひの花に着たり海七里　、
永すき通る六ちよぼ五ちよぼ　沾涼
佐保姫の末へは姊家は嫁　、
ほれたほれぬの證據ほころび　魚路
草鞋なつくりしつみも一もつこ（原註）簣　、
茶酒餅飯とこなつの花　、
青によろり顔が間に合ふ天氣あい　、
日見に日見え日見へ迄らせ　、
月額ひしんとろ〳〵は蠻の光澤　、
何ンじやか匂ふ駕籠にむらさき　、
そろりつと誓願寺から四條通リ　、
棒でほむるは匁のかるい水　、
饅頭の裏は馬さくり草の骨　、
荷ふて直す村の軒並　、
學者にてじやみろ女街の養子沙汰　、
ふたつ下タなる伯母もふり袖　、
ゆらぐ手の膝にかなはぬ薪ざつぱ　、
籬を投出スはた（原註波多野）の大根　、
こきまぜてむさしの京の花の人　沾涼
あやのにしきの春の一時　、

兩國の橋束。山本春帳、或日茅屋に來り、此道に入らんに何はいかゞすべきにや。答、その言葉則はいかい也。春帳とみに得心す。

はいかいはかくいふものかほさゝぎす　春帳
秋來ぬと見えて樂屋のうしろ道　（介我門涼枝-）梁枝

五常

仁　相傘の六分ブは我に時雨けり　千翁
義　いかな〳〵目にも喰せぬ蕨哉　千翁息 不扃
禮　先ツ坐着捨ずつかはぬ扇かな　同 玲角
智　蒸ムス文字は鷺な鳥に明の梅　同 壽角
信　君が門下-車てふ闇の時鳥　同 辰角

支猪

渡リ初橋の長しれ支猪人　露沾

小春

擴入の代さはなりけり神無月　伊賀上野宗匠 猩々
一休の袖下臭し惠比須講　調柯

時雨

簾卷まで鴛の羽音やさよ時雨　雲朝
仝盛の座ぶりを見する時雨哉　賀朝
菩樹の實のみ聲すれ北しぐれ　板垣 柳塢
雨足も鷺の格なるしぐれかな　千翁門 虎月堂 千里
飴賣は得たり顏なるしぐれ哉　善角門人 善珠
草堀し跡にも灘や一しぐれ　調山

霜氷

はつ霜や馬さへ喰はぬ草の上　穀我
着てもく蚯蚓に問ん霜の照り　英松
むさしのゝ眺望
明る野ゝ霜から産むや富士の雪　周皎
立鷺のにづかしからぬ氷かな　竹裹

冬川

入相なあびつゝ行や冬河原　丹志
勢ひなき水のさむさや渡し船　イセ清水村 吳竹
よこ雲は釜の蓋なり冬の川　東沚
川面ラのぬれ鵜は寒し杭の上　沾涼
白鷺の殊更長し氷り川　服部氏女 臣女
牧方の呼聲寒し夜食舟　池ノハタ 泉龍

落葉

果は皆佛の道に落葉哉　蓮之
入相に撞のこされて落葉かな　雲朝
頃日の下駄に音なき木の葉哉　佳風門 莎鷄
落葉訪ふ治郎老にき小倉山　梅宇
起て寐て殊に木の葉のしぐれ哉　佳風門 東閣
枝晴れて木兎一羽おち葉哉　吳竹
枝さ枝なのれなふるふ落葉哉　涼宇
見所はかゝる菴りのおちばかな　一漁門 紅夕
豆腐にも尾上越れば落葉かな　漁光
小庇に休んで通る落葉哉　千翁門 臘月堂 錦角
一しめり今年の外のおちば哉　李條
けし飛ンで見れば足駄の木葉哉　簡鉤
友ずれの音なき竹のおちば哉　郡山 夕顏亭 云々
きぬくの堤八町落葉哉　落々
天に不測の雲あり。人に盛衰の質あり。今塵芥にまぜられて
落葉は上戯下タかの雀かな　玉全
禁には宵の雨焚ク朝茶かな　沾涼
溜リ江の底な添へたる落葉哉　千本

雪

うつくしや初雪の降ル牛の角　長水
白妙やすべて七景水の音　賀朝
白炭は音なし雪の料理鍋　千洮
きぶひ酢の山な越たり雪催ひ　雪朝

きり幕や五ッうちなば雪おろし　江戸バシ 其孫
はつ雪になびく姿や比翼柳　扇的
はつ雪や屋根葺笑ふ釘のむら　有林

初見世

顔見せや方十町に正月氣　魚路
あたり打冬至の梅の初舞臺　露庭
顔見せや宵から嬉かゝみ山　夕佳

枯野　うつの山にて

冬がれは蔦にも逢すうつの山　卜宅
さくら踏夢まださめぬかれ野哉　東隣
枯野行群や墨繪のうしろつき　和散才門 百二
乗行ヶ笈の油のかれ野哉　布仙
宮ひさつすゝぎ出したるかれの哉　呉竹

千鳥

蒔錢は神慮に叶ふちどり哉　五百武
眠るなよ琵琶習ふ夜の濱千鳥　傘車
さればこそ撒彌で打ば濱ちどり　改齋軒 樓川
鳴て居ル物ならやもめ小夜千鳥　楚烁
安房な見せ上總な隱すちどり哉　沽涼門 紅夕
蚊ばしらのきのふた見たる千鳥哉　布仙

寒

枝しごく音の更行さむさかな　未石
黄檗の鯉のひらきもさむさ哉　五百武
雪よ氷同根生の寒さかな　下里堂千翁門 鵬角

秋の所に書べかりしを

蓮の實や飛んでもおなじ池の中　露言門 尺草

當集発端の詞、尺草老人に一集の旨趣をかたりて、ふるき事をとふ。老人はなはだかんじ、古人にあふ心地ありと感涙せらる。二十六年はいかいに遊ぎかりしかども、これにおゐては句をも加へてんなど約しぬ。句を得んと卯月の比まかりしに、八十余歳のかげろふとともに古人の部に入て、約もむなしくなりぬ。よつて自前集の去此不遠の句を拾ふ。猶花が心なれば現世の部に入ル。

生植

水仙や馬より横に抱きおろし　京宗匠石露庵 暮四
茶の花や見知たやうな梅の花　沽梅
につこりと笑ふ手入の梅寒し　云々
枝な葉に見から分ッ水仙花　露門沽葎軒 吟竹
水仙のみさほ立なり女武者　洛々

雜冬

障子には綴子なのこして冬構　莎鷄
足跡のそれより答ふみぞれ哉　豐後府内 左隣
鷺飛ッで松の腕出ス冬の瀧　沽涼
炭俵あさくや人な八王子　加島氏 好夕
さりあへず楠兵衛蕪汁　千露
こがらしや宮のわたしの一里杭　安祖
こがらしの色や厩のうしろ道　梅五
貰ふよりこと言嬉し衣配り　有佐
汲にごす蝶のひさ日や淀の霜　布仙

年尾

明日咲ん氣色を見せて福壽草　沾涼

宗祇法師恭敬像
杉白木御長五寸五分
人丸大明神聖像
頓阿法師ノ作　住吉奉納ノ一軀
御筆ヘ後ニ以岸ノ姫松作之

此正一位の尊像は頓阿法師の作、宗祇法師尊敬の靈像にして、宗牧につたはる。伊賀國上野飯束氏喜三(生國尾州清洲、織田家ノ士、後爲レ醫蟄居伊賀國)は、宗牧の門人たるによつてこれを附屬し、息政安(稱左衛門落髮ノ號ニ悅沾涼ガ父)に譲る。而後服部土芳(半左衛門ト云 芭蕉高弟)にあたへて年あり。二十余年以前寶永のころ、予故郷に趣くの砌此像を尋るに、土芳も早古人也。妻なし子なし、誰によるべき便あらず。政安の云、土芳の甥木津宗七郎こそしるらめとあるに道づきて問ふ。宗七云、土芳在世の時、行脚來て廿余日とゞまり、連誹などの沙汰ありて後、彼像を咨嗟して賍請し、笈にうつして去ル。その人のとゞめ置たる天神の寶號ありとて出す。そのうへの紙に、

天滿宮寶號一幅　山崎宗鑑筆　山口不貫所持

と記して雲路をごひてゆくかたをしらず。長門國の人なるよし也。予時享保十四己酉の春。道芝と云小さりつかひのわざ人、北爪倫仙(桜之助ト云 沾涼門人)にいはく、我に人麿の像あり。是はこれ芝にありし連歌師の所持にして、謂ある像也。連歌の會ごとに、杉を以あらたに筆を削り、御手に添し也。今の我に應ぜずとて終に與へてけり。おなじき年五月廿二日、倫仙此像をもりきたり、これまた我にありて益なし。職分の家にはありたきとて、予に(シテ)許してしかじかの事をかたるに、心とゞまる所有。そのもち人の名を問ふ、是山口不貫也。(生國長門國萩刈。享保十巳七月卒ス。于時七十二。住所八芝)門人丹野絮柳(道芝ノ事也。)受之と云々。予が家にふたゝび歸影なし給ふ事尊く、信ふかし。穢たる茅屋にとゞめ奉る事そのおそれあれば、當所鎭守神田宮の境内に遷座なす事となりぬ。

崔下菴謹書

人麿大明神法樂

影うつすことも新樹の高角ノ山　崔下菴沾涼
硯より石見の出て朝清水　菊岡布仙
涼しさやほのぼのの帆は松の肩　同　梅五

造立の連各法樂

この神の烏帽子ながらや白牡丹　宇田川来石
帆がくれの海や茂りや神の磯　笠井魚路
しらゆふの同じ塵也花卯木　中島五百武
初島井木立に浮クや雲の峰　河津玉風
みづ垣も若し若葉の蜒作リ　小森笛之
みたらしやみがきて通す花さうぶ　岩田凉之
時さてや雲とはびこる神樗　北爪倫仙
ゆふしでや歌の神路のこさし竹　久米田賀朝
神詠はさめて凉しほとゝぎす　北尾千洸
似るそらに明石の薫ル木々の風　栗木雪朝

時來り唯今在ゝさくらの實　川勝　丈岳

○柿本人丸　七ヶ（古ヶ）の大事の内なり。石見國戸田郡の人。家の柿の木のもとより童形にて出現と云り。
石見國より化生すと云事　口决。
神龜元年　三月十八日卒ス　口决。
持統帝・文武帝・聖武帝・平城帝等の御宇に哥あり。或人の云、其御家にては古今の事・その集の中の哥も、みだりに露顯は遊されずと也。たとへて云、古今集の中の、月やあらぬ春やむかしと云哥の事を承はるに、大切の事とて仰られず。伊勢物語の中の、月やあらぬ月やむかしと云哥と申てうけ給はれば、つゞ〳〵にあふせある事也とぞ。ありがたき御事なり。
人麿四人有。柿本人麿　山田人麿　玉手人麿　押海人麿　おの〳〵別々の人なり。

此一部三巻　沾涼みづから書ぬ。

沾涼子の綾錦、彼機を建るの始、誹祖以来當世に至迄、門弟を携る宗匠の統々を糺し匡し、其系譜を詳にして以て縦とし、次々に古往の明師より累世の先達、及現在作者の發句、集てこれを緯となし、最後に句合・歌仙等、徴よの雜叓を紋として、摸様こゝに盡したり。古風の公道なる、中比の伊達なる、今の物好キ洩る事なし。吟嘯の徒、眸を轉らさば、取に足る物なからましやはと云爾。
　涼子の請に應て、野叟卜宅漫に跋す。頗鄙陋を耻る而已。

享保十七壬子年六月吉祥日
京堀川錦上ル町
西村　市郎右衛門
江戸本町三丁目
西村　源六
書肆　梓行

誹諧家譜

丈石編

誹諧家譜序

儒に道統あり佛に血脉あり。皆邪路に迷はん事を恐てなり。其邪路に陷るを、異端といひ外道といふ。我誹諧は敷嶋の道より出て、祕事を道とす。故に正しき師を得て誓盟し、祕書を授り口訣を受て、道の奥祕を習ひ其道を明かにす。たとへ聰明睿智の人たりとも、傳はらずして知べき道にあらず。其正しき師傳なくんば、霧海に南針なく、闇夜に燈炬なきがごとく、惽然として行所を知らじ。臆見を以て想像すとも、何ぞ正理を悟らむや。今正統もなき闇師、自宗匠と稱し、誹諧を道路に賣んとす。此師に隨ふ誹人、彼の邪路に入て、生涯を恍惚の中に終る。早く過を悔ひ、正しき師に隨ふべし。千載堂主人、常に此道を任とし、これを患る事久し。終に此道の正統を正し、其系統を改め、後進を導むとして書を著す。名て誹諧家譜といふ。其志厚く大にして、此道の棟梁たり。予七十有餘、耄して辭讓を忘れ、禮儀の外に放縱して、心の欲する所にしたがひ、妄に胸臆を筆す。

寛延辛未六月望

蘆花翁門下

湖東の風狂人

秋蛙述

夫誹諧者雖係和歌連哥之餘殘而以之立一家者非無權輿也吾花咲翁忝蒙玖山藤公之命爲誹諧宗匠是其始也故一時詢之者莫不與翁之添削矣先是荒木田守武出於連哥而專嗜誹諧有飛梅之什其後有西山宗因其先出宗鑑法師以連歌之遷誹諧有番椒之句雖似立一流而鑑沒後入重頼之門得翁之編輯也抑翁之之在世也既向百載未流錯侈而世人不知濫傷於其源也遣青林綺枝堂主欲備余刊

行セント誹諧家譜上ノ余固モトヨリ有ルガ好古之癖故ニ諸レス之或ハ由リ古書ノ所レ記スル或ハ聞キ古老ノ所レ傳フル輯テ以遂ニ斯ノ書成ンヌ矣惜ラクハ往年有テ其名存セル諸家ノ集中ニ今也門葉絶シ親族亡テ無キモノ傳フルコト者亦多シ矣其レ若ハ斯ノ後人有ラバ所レ勘フル加ヘテ筆ヲ以補ヘト余ガ疲勞ノ之餘ニト云レ爾時ニ寛延辛未夏五月鼻祖六世ノ後學生平安城下千載堂丈石自敍

印　印　印

凡例

先キニ有リ綾錦トモノ者南仙齋沾涼ガ所レ編スル而東府点者ノ之家譜記ルコト之ヲ審也故ニ今除テ東府ノ之部ヲ不レ立レ之

京師点者ノ中曰ノハ廿一人ノ之一ト者嚮サキニ享保年中　召シテ諸点者ヲ於　官廳ニ乃シ　命シテ定ム其數ヲ登時有ル廿一人是也

物故ノ点者雖レ失スト家譜ヲ而存セルノ傳系ヲ人ハ者列シテ某所ニ而加テ不レ詳之字ヲ以俟ツ後人之勘考ヲ

雖レ非ト点者ニ而有テ由緒或ハ高名不ルノ能レ除クコト之人ハ者載レ之終リニ採テ浪華ノ之點者ニシテ而名アル于都鄙ニ人ヲ附錄ス之纔ニ十ガ之一ニシテ而未ダレ及ニ全記スルニ

追加ノ一巻所レ載ル系譜ニ之人悉ク記ス其發句ヲ故人之句ハ者以テ愚意ヲ撰テ而載レ之今人ノ之句ハ者各任ス其ノ所ニ相贈ル並ニ現存點者ノ之印譜記レ之

凡此書雖レ記スルニ以スト眞字ヲ而和歌發句等ノ在ルハ譜之中ニ者皆用ニ國字ヲ欲レ使ント人ヲシテ易カラ見

京師點者家譜

鼻祖並直弟譜

○貞德 松永氏、幼名熊、壯歲薙髮號曰松友軒、名逍遊、晩年復東髻、而着童服、自呼曰延陀丸、後改號長頭丸。父永種（攝州高槻刺史入江九郎義重之男五郎政重之長子、後改氏稱松永）、母播州宇野氏女。以元龜二年辛未生于京師。蚤寄心於歌林、受業於名範。玖山之崔嵬、細川之清洌、中院入道之潭府、菊亭右府之芳園、飛鳥井亞相之芝水、皆擧之掬之。凡博聞約學之師五十有餘人。尤得其精微。於殊承嚴父之志、究筑波之道。於法眼紹巴始取式、連歌定格、於誹諧編分國字（名クルノ之義）。四十七終成十卷、名曰御傘（見自序）。翁初繙兼好法師徒然草於三條大路之宅、蓋講此書翁爲之權輿也。洛下雄家某氏嘆服、於龍騰之機謂不出王畿之下、附今花開之地（五條松原之北）（東洞院之東）。以開講誹之恩、當時唯有社趾、而京人不知制名也。翁移學書於此、偶詠和歌。

曰 しづかなる住居なれども出はてぬ浮世の中の身こそつらけれ 此夜有夢、異丈人威儀肅々立中庭之社趾上、口誦歌人のこの花さきの蔭に來て云云。翁謂、神祠可以興、吾道可以弘之靈告也。於是結構小祠、神稱花開稻荷。又以花咲自名、昔之舎也。其賀詞曰 万代なみつのやしろの春秋は花さき實なる言の葉の道 共載在翁之家集（號逍遊集、自詠二千首）。翁平日之希望有三。一者於洛之上下街巷造一舎、欲令迷途之兒女止而還迯親戚之歸上。二者於便宜之地安置一切經、又建倭歌會處、並營學校之旅舎、欲令遠邦四方之學徒不擇緇素止宿。三者東西野外之荒地多植果樹、欲令乞兒之病者扶養。既告於京兆尹（板倉氏 [illegible]）、每話與翁善。雖然所望不小事、許容經歲月也。翁以屢陪於法院宮堯然親王、會告宿意。王即賜廬舎那殿之南之地方幾許。翁自種果樹、署榜名柿園。中有藏、名報恩、納以妙法之印本千部（趙子昂之書跡）。藏戸之外著篇、壽六歌仙（[illegible]）之像（[illegible]）。前有今花廊（[illegible]）。一時好士所題詠者直通芦之丸屋（[illegible]）。[illegible]偉關、京師之諸

名哲時會於此園爲詩歌誹諧之翰墨場云云

承應二年癸巳十一月十五日壽八十三而没于花咲舍唱辭世詞曰　露の命きゆる衣の玉くしげふたゝびうけぬ御法ならなむ　葬於洛南上鳥羽邑實相寺謚號明心居士　家書有御傘・淀川・油糟（謂之三部書）紅梅千句・百韻自註・逍遊集・歌林樸樕・和歌寶珠・戴恩記・徒然草大意・同慰草・前車集等　所謂柿園者宮河松堅得翁之讓而住久後有故爲他之有遊此道之人無不歎惜之者　余亦深念之歲于茲矣門生貞右於彼地有小由緣於是與余同腹心欲棄財得其舊墟以再興之而未果也故圍方域東西廿間南北卅間四圍種以竹東面有門所謂蘆丸屋報恩叢吟花廊等在於其中今有畫圖存其模形而已

—親重

野々口氏離俗號立圃　背鼻祖之旨私定誹式自爲一点自稱松翁善書又善畫圖皆學畫探幽亦學書於立圃云云後仕於土岐家　書有＼花火草＼徳万歳＼若狐＼片輪車＼花月千句＼歸花千句＼阿太花千句＼小町子＼碁打花見＼河舟＼小町踊＼烏帽子箱＼硯誹諧＼江戸紫＼發句帖＼九百韻＼空礫＼人眞似＼天神法樂＼車誹諧＼九折＼作良歌仙等　寛文十二年壬子三月十七日没行年七十一辭世曰　月花の三句めを今しる世かな

—重頼

松江氏剃髮號維舟　或曰重頼得師翁之勘當而後爲里村家弟子學連歌自立而爲誹諧点者云云　家書有＼毛吹草＼犬子集＼今様姿＼浮世長刀＼懐子＼佐夜中山＼大井川＼藤枝＼武藏野等　延寶八年庚申六月廿九日没　行年七十四辭世曰　秋禽もや菩提樹のたつまくむ清水　或曰親重作歳旦句未得翁之許可間以示重頼々々謂甚遜也速偷所聞之佳趣而爲元日之句卒告貞徳翁々可之而施長点來日親重以己之句請合点翁曰此與前所聞重頼之句趣意同親重其剽吾哉親重懼而謝以豫示重頼之事自是二子相乖不同席且爭論時起二子遂翁之命也蓋緣于此乎

—西武

山本氏西武之字謂仁志太計俗名也剃髮而以俗名爲法名曰佐以牟曾自蚕歳給師家之執筆故融決故實等悉傳習之矣翁與

正章西武每歳組三物而不許他翁以二子為得意之人乎　家書有〈鷹筑波〈砂金俗〈同後集〈久留々〈何迄草〈阿波々千句〈津以居兒〈萩花等　延寶六年戊午二月十八日没齢七十三號無外軒　辭世　夜の明て花にひらくや淨土門

―令徳
鷄冠井氏初良徳後改令字　家書有〈土塵集又依師之命撰〈崑山集　延寶二年甲寅三月七日没行年六十八

―正章
安原氏號貞室又曰一壽軒(マヽ)　家書有〈玉海集〈百韵自注〈獨吟千句〈續玉海集〈五條百句等　延寶二年甲寅二月七日没行年六十四　辭世　今迄は目見えせれども主人公はつ〳〵さいひし年もあきけり　言者以六十四之數為秀句乎　或曰正章巧詠詩誹諧且能達諸藝故翁之顧変異予他親重頓等候之太正章亦不善二子重頼著毛吹草後撰當於是　池田正式著氷室守雖冒正式之名而實者正章作為之而雖判毛吹草自是二子倍相水火矣翁以家傳之正統許正章之年正章自識而作歳旦句曰　梭とめて今ぞめいぼくの花の春　重頼試作斯句戯

日つきさめて今ぞめいわくの鼻ひしげ　正章前年為重頼損鼻故嘲之若此　又朝兒道水等之悪口傳在于人口

―季吟
北村氏號拾穂軒又稱呂菴曽居京師新玉津嶋之社中（在五條萬寺之南烏丸之西）後依台命參仕東武叙法印號再昌院仰為歌學所　家書有〈山井〈師走月夜〈埋木〈花千句〈鉋屑〈新犬筑波〈雛合〈十會集〈歌仙發句〈二十會集〈續連珠〈祇園奉納誹諧合〈三物記等又和歌集古物語等之諸抄物不遑枚擧其多手書而細字者也　寶永二年乙酉六月十六日卒齢八十六

―梅盛
高瀬氏號佗心子　家書有〈口眞似草〈鸚鵡集〈捨子集〈便船集〈山下水〈七十二物合等　元禄十二年己卯四月八日没壽八十九　以上謂之七誹仙　或曰梅盛者翁之存日未得引墨之許可而没後自立云云

―安靜
荻野氏號似空軒　家書有〈[illegible]〈[illegible]布〈如意寶珠等　貞享二年乙丑年二月十九日没壽八十

正由　宮河氏後ニ号ス松堅ト又曰ニ松亭ト又号ス道柯居士ト有レ甚名ノ棒園ト在リ于大佛殿ノ南ニ若是鼻祖興立ノ之遺跡ナリ而甘ンズ侘ビ許ツツマシクアリ多シ 松堅没シテ後門人傳フ之ヲ矣 家書有リ〈三林良村〉〈陶和漢千句〉〈和漢千句〉〈歌仙自注等〉 享保十一年丙午二月廿三日没壽九十六 或ノ曰正由約シテ而若テ親シム師翁ニ々ノ曰嘗テ有リ何耶正由對テ曰有リ之同書ノ以テ是ス几上ニ其句曰 ほいくにさく朝がほや垣の本 翁歎ジ其秀逸ヲ而施ス長点ヲ誘フテ之以テ爲ス弟子ト也翁辭世ノ之後正由漸ノ二十歳随テ木瀬三之ニ而傳ヘ習フ其遺事ヲ兼テ學ブ和歌ヲ而深ク究ム其奥ヲ故歌道ノ之門人モ亦多シ于諸國ニ矣 又曰此翁病將ニ死ント之時欲レ書カント辭世ノ詞ヲ而不レ能レ起ルコト使下扶狀ノ人ヲシテ撤サシアゲ中料紙ヲ而臥ナガラ持チテ筆ヲ書ス其詞ヲ曰 おはりまで筆なはなたずゆく水に数かくよりも我ぞはかなき 又有リ狂詠曰 かり置し地水火風もかへすなり何にもたねば残念もなし 如月廿三日夜半 云云 書シ畢テ忽ニ瞑マタタク

貞紙　藤谷氏初ノ名ハ号ニ貞好ト後改ニ紙ノ字ヲ号ス仰雲軒ト又自稱ス椎翁ト 元禄十四年辛巳十月廿七日没壽八十七 或曰貞紙ハ者令徳ノ門人ナリ也人訝ル其ノ號ニ貞ノ字ヲ矣レ是令徳許ス之以テ使レ親シテ師翁ニ而傳ニ貞字ヲ云云 辭世 月は彌陀にさつや二十御来迎

正式　池田氏和州郡山人也著ニ氷室守ヲ

日能　越前本勝寺ノ僧

道節　末吉氏攝州平野ノ人

貞宜　中嶋氏号ニ蝶々子ト初ハ季吟ノ門人ニシテ而後ニ爲ル直弟ト移リ住ス于東府ニ 家書有ニ〈思出草〉〈物忘草〉〈門友集〉〈立聞〉〈松茸俵ザウ〉〈伊古志岐〉〈江戸八百韻〉〈詞友等〉

宗畔　馬淵氏

元知　西田氏撰ニ拾玉集ヲ

未得　石田氏号ニ乾堂ト東府ノ人也撰ニ五吟集ヲ

可頼　青地氏　紅梅千句ノ之作者

是誰　池田氏播州姫路ノ人家書有ニ〈破暦覚〉〈初蕾〉

八四

―貫風　加藤氏号ニ空門子一家書有ニ歩荒砰一

―良保　片桐氏　或曰元ハ合徳ノ門人ナリ家書有ニ〈獨歩集〉〈千句〉〈辨説集〉一

―重以　谷口氏撰ニ百人一句一ヲ

―友仙　有馬氏江州ノ人　紅梅千句發起ノ之人

―胤及　岡本氏備前ノ人　著ハスニ釣暦一ヲ

―正在　小原氏　元ハ西武ノ門人

右正式以下ノ數人皆鼻祖許可ノ之点者ナリ也其家譜不レ詳門人傳系絶テ無シ但貞室未得ノ之孫弟在テ于東府ニ今ニ存セリ矣　又有ニ和歌ノ門弟加藤磐齋和田以悦號一ス礼堂廣澤長好木瀬三之等一不レ與アツカラ此書ノ之所ニ一レ事トスル故ニ不レ贅

荒木田支流譜

○守武　伊勢山田ノ神官荒木田氏号ス岡田長官ト善クシ連歌ヲ兼テ嗜ム誹諧ヲ家書有二〈獨唫千句〉〈世中百首等〉一于文十八年己酉八月八卒　私曰卒去ノ年紀有ニ異説一荷ノ由テ一説ニ而識シ之又不レ審ニセ行年幾何一トカコヲ（晋風曰ク、家系甚表ニ因リ没年疑アルナシ、行年七十七、）

―望一　杉田勾當伊勢山田ノ人也達ノ嘉ニ守武之誹風一ヲ雖レ異ニスト世ノ同スルコ道ノ如シ師弟ノ老後毎ニ受ク貞徳翁ノ之添削一ヲ家書有ニ〈獨吟千句〉〈同後千句〉一寛永七年庚午六月二日没壽八十三　非ニ点者一

―美津女　伊勢山田ノ人杉木吉太夫光貞ガ妻也　正保四年丁亥七月二日没行年六十五　諸家ノ之集中記スモノ光貞妻ト者此ノ女ナリ　非ニ点者一

―惟中　岡西氏備前ノ人也初号ス一有ト後改ム惟中ト号ス一時軒ト後為ル宗因門人ト家書有ニ〈誹諧蒙求〉一元祿五年壬午八月十日没ス于浪華ニ行年不詳

―園女　伊勢松坂ノ人也不レ審其菌氏ノ或ノ曰驛亭ノ娼ナリト曾テ師トシテ美津女ヲ學ブ誹諧ノ雅趣不レ恥ニ丈夫ニ惟中去テ歸ノ住ム于浪華ニ之日迎ヘテ之為レ妻ト

中ガ沒後移住シ東府ニ屬シ其角ニ學ビ蕉流ヲ後經ニ廻ノ京師難波華ノ間ニ復タ皈ル于東府ニ享保十一年丙午四月廿日沒齡七十四（晋風曰、園女ハ斯波一有ノ妻也、雅中ノ歿年亦誤ル、正德三年十月廿六日歿、七十三ナリ、妻ハ斯田氏園女ト云フ。）

宗鑑家譜

○宗鑑

支那氏江州ノ人佐々木ノ黨也号ス彌三郎範光ト善クス連歌ヲ故ニ仕ヘテ足利家ニ浴ス恩澤ニ後薙染ノ居ス于城南山崎ノ巷ニ其庵跡今マノアタリ見ニ在リ頃年趣テ于西國ニ皈路暫ク止ノテ讃岐國琴彈山之邊ニ而假ニトレ居ヲ号ニ一夜菴ト今爲ツテ寺ト尚存セリ家書有ニ〽竹馬狂吟集〽犬筑波集等一寛永二年乙丑十月二日寂ス齡イクハクトセフヲ不ㇾ審ニセ幾許一辭世　宗鑑はごちへこ人のさふならばちさ用ありてあの世へさいへ

宗因

世ニ傳フ宗因學ブト誹諧ヲ於宗鑑ニ云云或ノ曰鑑ガ之誹諧ハ者獨樂ム耳其徒宗因隨テ重頼ニ而得ニ其道ノ非ニ鑑ガ之傳ニハ也

宗因家書用ニ浪華翁ト

貞德翁孫弟譜

○野々口立圃

常長

村田氏号ス松風軒ト又自ヲ稱ス德翁ト貞享二年乙丑二月九日沒　非ニ点者ニ

幸和

江崎氏号一翁家書有ニ〽底拔臼〽鵜鷹千句等一沒年不詳（晋風曰、正保元年三月歿）

鷺水

青木氏号ス白梅園ト又曰フ三省軒ト家書有ニ〽誹諧新式一享保十八年癸丑三月廿六日沒行年七十六

幸佐

高田氏号ニ幽竹堂一善クス漢和ノ家書有ニ〽入船〽大湊〽灯下集等一沒年不ㇾ詳

常矩

田中氏号ニ眞齋一不ㇾ好マ師父ノ誹風ニ新ニ作テ一風流ヲ而鳴ル世ニ後宗因ガ之檀林鬼貫ガ之伊丹皆此ニ出ヅ家書有ニ〽破帯〽塵取〽雑巾〽拾舟等一或ノ曰矩ハ者常長ガ之㓜ニノ而長養テ爲ㇾ子ト沒年不ㇾ詳

常牧

繁田氏号ニ圓化堂ト又稱ス雲峰子ト家書有ニ〽木花〽冬籠等一沒年不ㇾ詳

和及

俗姓高村氏号ニ露吹庵ト唱法師ト隱ル于洛西ノ壬生村ニ有ニ水菁花之句一家書有ニ〽雀森一巻一元祿五年壬申正月十八日寂ス齡四十四辭世

我さしも四十四の花のあげ句かな

長年　号ニ柑拾子ト家名亜ニ
没年不レ詳

酉生　山口氏始ハ鞭石門人号ス優生ト後有テレ故續ニ和及
二世ノ号ス露吹菴ト又曰ニ喜鶴堂ト優改レ西ニ　寛
保二壬戌正十五日没ス七十一　辭世　六の道めぐり
〳〵てけふこゝに安養界の月ぞながむる

文推　宇野氏号ニ群雀寮ト　享保十六年辛亥七月廿日
没ス五十一

定武　服部氏父ハ号ス定清ト立圃門人ニシテ而著ハス〈尾蠅
集〈花笙等ノ之書ノ武ハ者常矩門人元祿年中ノ
之点者也没年不レ詳

助叟　号ニ椿木亭ト　家名没年
不レ詳

正業　田中氏号ニ滌葉軒ト常矩ガ之親族也　正德五年乙
未八月十二日没六十一

竹亭　溝口氏自ニ蚤歲好ニ誹諧ヲ與ニ和及竹翁ト友トシ
善シ毎ニ携テ行厨ノ遊ニ遠近ノ之勝地ニ坐シ吐キ行ヨ
吟ズ日トシテ無レ不トイフコト句アラ家書有ニ緒手卷　元祿五年
壬申六月廿九日没行年三十五　非ニ点者ニ

謌流　石黒氏号花[illegible]堂
卅一人之一

○松江維舟

重榮　竹山氏家書有ニ〈短綆集
没年不レ詳

宗因　家譜出ニ浪華ノ部ニ

言水　池西氏号ス紫藤軒ト家書有ニ〈京拾遺〈毛登
柏等　享保四年己亥九月廿四日没ス壽七十三無ニ
辭世之吟昔シ有ニ木枯ノ之句没後及ト依テ遺言ニ葬中
葬ヲ於京極誠心院ノ中和泉式部ガ之塔ノ傍ニ門人等議シ
而以テ件ノ句ヲ爲レ銘　云云（晋風曰、享保七年歿、四年ハ誤ナリ）

我黒　中尾氏号ス青白翁ト家書有ニ〈橋立紀行　寳
永七年庚寅十月六日没七十一

兒水　瀨山氏号ニ芳樹軒ト
没年不レ詳

金毛　芳澤氏言水没ノ後屬シテ方山ニ号ス方設ト後再改ム金
毛ト又稱ス芳元翁ト家書有ニ〈海音集　延享三

年丙寅十一月廿六日没ス壽八十　三十一人之一

─青石　下村氏号ハ紫藤軒ト始ハ鞭石ノ門人ニシテ而号ス優士ト後属シ青水ニ改ム名ヲ没年不レ詳

─西鶴　家譜出ニ渥華部ニ

─高政　菅谷氏此ノ人於テ京都ニ立ツ宗因ガ之誹諧ヲ号ス總本寺ト蓋對スルノ東府ノ之檀林ニ之意也依レ之與ニ古風ノ誹士ト争論交々起ル所謂ル〳〵破邪顯正〳〵猿猴〳〵賴政〳〵三人片輪〳〵芝居狂言等之闘書多ク出ヅ　家書有ニ〳〵絵合ト没年不レ詳

─才麿　譜出渥華部

─只丸　号ハ寿松園ト又ハ稱ス鶴水子ト高田宗ノ之僧京師本誓寺ノ中楯呂菴　住職法名号ス覺印ト後移リ住ス于渥華谷町欣淨寺ニ　正徳二壬辰年十一月二日寂ス壽七十有餘諡ノ日樹心房ト　辭世　陸なおもふ鴫やなにはの水ばなれ

─團水　北條氏　号ス白眼居士ト　寶永八年辛卯正月四日没ス齢四十九　一生涯清貧ノ之人也　辭世　おぼろ〳〵引べく胸に月清し

─丈竹　田中氏号ハ縣月堂ト　享保十六年辛亥十月廿七日没ス行年六十七　三十一人ノ之一

─百合　淺田氏号ス團扇堂ト　三十一人ノ之一　享保十八年癸丑四月六日没ス齢六十八

○山本西武

─一雪　椋梨氏号ス柳風軒ト　家書有リ〳〵雨何賀利〳〵行事板〳〵晴小袖〳〵糊拵〳〵茶杓竹〳〵鋸屑等　延寶八年庚申九月二日没ス行年六十

─貞木　出口氏号ス花香堂ト　家書有リ手松明ト　元禄九年丙子十月二日没ス七十一

─随流　中嶋氏号ス松月菴ト　家書有リ〳〵水車〳〵廻文〳〵破邪顯正〳〵鶯笛〳〵百千鳥〳〵永代記等　寶永五年戊子二月十一日没ス壽八十

─定之　神戸氏号ス東林軒ト　家書有リ二挺鼓ト　元禄十二年庚辰九月六日没ス行年（マヽ）　辭世　朝がほは久しきものよ五十年

─柳水　中路氏住ス神輿岡ニ　没年不レ詳

○雛冠井令徳

—令富　令徳息　没年不詳

—常春　服部氏号眠柳亭　正徳五乙未年八月十二日没行年七十二

—常英　常春息号眠柳亭　三十一人之一

—延清　志水氏号恕近子後出家号日柳　享保十九年甲寅五月十六日寂寿六十九　非点者
辭世　いつこても息引とるが身の歳暮

—安山　河野氏号鶴毛翁　元文三年戊午七月三日没行年六十五　三十一人之一

—暢好　平岡氏号文蛤子　享保十六年辛亥十月二日没齢四十六　辭世　すゝ一季見にてぬ夢のほつれかな　三十一人之一

—經定　山本氏号規矩蛤子　享保十九年甲寅二月廿六日没行年四十八　三十一人之一

—歌島　隱僧号春朴　享保十六年辛亥正月十六日寂齢四十六

—和吟　別所氏

—之水　細井氏号咸江堂

—愚堂　人見氏号芥且軒　享保十五年庚戌七月十七日没行年四十八　三十一人之一

—虚舟　黒瀬氏号不識亭

○安原貞室

—喜雲　中川氏藝州廣嶋人後住京師号山櫻子家書有「貞童部」「同後編」　没年不詳　非点者

—貞恕　[illegible]氏俗名重次雛屋而号貞恕初貞室之息有元次而早世故養重次為子云云　家書有「闇太郎千句」「縄打等」　寶永二年乙酉十月三日没壽七十　或曰重次者重頼之徒有故爲貞室門人也而木春澄昔有幽援故後屬恕云云

—春澄　青木氏初ハ重頼之門人後爲恕之弟子落髪号貞悟又称之乎翁　正徳五年乙未年七月晦日没行年六十三　昔聞重頼之徒有重栄重

方重好重貞等稱四重爲門弟之長春澄欲入其列重頼不許故破門而屬貞恕云云

―貞佐　中川氏後改永原號一十軒又自稱短頭書初ハ幸佐門人後爲恕之弟子嘗學垂加流之奥神書延享四年丁卯十二月六日沒行年六十八家書有　御傘集解　四鉾辻等　三十一人之一

―八百彦　淺田氏百合之息父沒後爲佐之門人號十合齋又號後扇翁　家書有　百合追善集

―引牛　中川氏喜雲之息元祿年中之点者　沒年不詳

○北村季吟

―湖春　季吟之息從父參仕　東府而叙法橋　元祿十年丁丑正月十五日先父卒去行年五十有餘號花果院息湖元續家業　湖春之弟正立亦仕在東府

―元隣　山岡氏　家書有　身之樂千句　誹諧式　諸國獨吟集　吉野山獨案内　新百人一句等　沒年不詳

―桃青　松尾氏伊賀國上野之人也嘗仕藤堂家壯年之而薙髮號風羅房又稱芭蕉翁一時檀林之誹風横行於世翁憎之出異躰而獨唱正風躰其風流日盛其徒弟月加矣或曰此翁變壯氏之詩而句々撰其物情者　家書有　猿蓑　炭俵　二十歌仙　冬日　春日　曠野　瓢　俗論語　深川　奥細道　別座敷　三ケ月日記　有磯海　砥波山　笈日記　田舎句合　常盤句合　草刈笛　曠尾集等　元祿七年甲戌十月十二日沒齡五十三（野風曰、家書ニ載ルモノ多ク門人ノ著ナリ、信ズベカラズ）

―其角　寶井氏號寶晋齋世人稱晋子家書有　新山家　虚無栗　句兄弟　類柑子　雜談集　焦尾琴　若葉合　枯尾花　東若葉等　寶永四年丙亥二月廿九日沒行年五十五

―千那　江西堅田本福寺之十二世法名號明式退隱之日感應院自稱蒲萄房顯性風靈學世稱蕉門之迦葉家書有白馬紀行　享保八年癸卯四月十七日寂壽七十三

許六　森河氏江東佐和山ノ之家士也号ス五老井ト家書有ニ ＼韻塞 ＼篇突 ＼十三歌仙 ＼注千句 ＼入日記（二冊） ＼南部誹祭集 ＼風俗文選 ＼宇陀法師 ＼歴代滑稽傳等 正徳五年乙未八月廿六日没齢六十号ス南阿彌陀佛ト辭世ニ曰 一時ニ打破ス屎嚢ノ臭芬々タル臭氣供ス梵天ニ 下手ばかりしぬる事ぞとおもひしに上手もしねばくそ上手なり 或ノ曰許六善クス戲畫ヲ句ハ則芭蕉翁ノ之弟子ニシテ而畫ハ則爲リ芭蕉翁ノ之師ト也（曾テ芭蕉翁以テ奥義書二巻ヲ授ク許六ニ令レ續ニ世ノ流脈ヲ云云）

孟遠　山本氏ニシテ而許六同郷ノ人也後住ス京師ニ又行ニ關西國ニ名區富邑無ニ所トシテ而不ト云コト遊止セ矣 享保十四年己酉閏九月晦日没ス於備前ノ岡山ニ行年六十一 家書有ニ ＼奈末須橋 ＼不舍利 ＼木工團扇 ＼木葉濱 ＼獏鼻 ＼七九集 ＼一日芝居 ＼長樂會等 別号夢明房又号ス須彌佛ト（奥義書二巻傳フ之ヲ續ニ三世ヲ云云）

去音　高屋氏号ス好々舍ト又稱ス端雲佛ト家書有ニ ＼句經（芭蕉五十回忌追善） ＼追込棧敷 ＼六玉川 ＼青表紙 ＼京豆腐等 又欲シ編ント鶴ノ栗集ヲ而半シテ之寛延二年己巳十一月十日没行年六十三 辭世 夢葉かちるしやらくさし最後の屁（奥義書傳來四世云云）

文鳴　戸田氏号ス好々舍ト又稱ス九皐子ト家書有ニ ＼蛤節供 ＼潮水紀行（奥義書傳來自リ許六今至リ文鳴ニ及ニ五世ニ云云）

角上　本福寺十三世ニシテ而千那ノ之甥也法名号ス明因ト 退隱ノ日ニ號ス清涛院ト 幽ニ栖ス於洛東鴨水邊ニ号ノ日ニ瞬七亭ト 々類燼ノ之後皈リ湖南ニト居ス於三井寺ノ傍ニ日ニ荷庵ト（二十七） 家書有ニ瞬七亭ノ記 嘗テ芭蕉翁關西行脚ノ之日初テ到ル大津本福寺ノ別院ニ師資同席ノ入門也 延享四年丁卯五月八日寂ス行年七十三

角々　角上ノ之次子也法名号ス明架ト栖ニ遲ノ於洛東ニ而爲ル点者ト号ス二休亭ト 千那角上ハ者非ス点者ニ

淡々　家譜出ツ浪華部ニ

巴人　早野氏初ハ号ス竹雨ト後改ム巴人ト号ス郢月泉ト 元ハ東府ノ人也後ニ住ス京師ニ而爲ス点者ト老後復皈テ東府ニト居ス号ス日ニ夜半亭ト法名号ス宋阿ト家書有ニ ＼一夜松 ＼繧讀鳥 ＼桃桜等 寛保二年壬戌六月六日没行年六十六 辭世 こしらへてありさもしらず西の奥

—原松　加藤氏常陸國笠間人也後遊止于伊勢國阿濃津一遂至于伊賀上野住剃髮而自稱虚翼居士老後出京師而爲点者號猩々菴嘗妙心寺僧來而請髑髏畫之贊時會寛保二年壬戌正月五日夜贊成而書之曰　草原や秋の螢のふたつみつ　擲筆而卒死行年五十八門人等以件之句爲辭世吟云家書有〽星月夜〽正風論等

—宋屋　望月氏號百葉泉又稱富鈴房居曰机墨菴家書有〽梅鏡〽小春笠（西国紀行）〽西奥（巴人善）〽大和笠（和州紀行）〽杖土（奥州紀行）等

—要利　長嶋氏號松下菴其後閑居平津國能勢郡倉垣邑寛延元年戊辰十月廿二日沒於其邑行年六十八家書有造化[illegible]

—壺角　吉田氏號杵月泉

—錦山　人日氏號宋泉堂寛保三年癸亥十一月十一日沒齢三十四

—鉄鐸　廣瀨氏號富月菴

—松江　山本氏號歡泉舍又曰梅机菴

—大圭　兒嶋氏號錦綾室其宅在于四條室町菴所謂左右錦綾街之意乎或曰先有四條道場金蓮寺號錦綾山此人何爲犯之哉云初正宜門人而後爲半時菴享保十九年甲寅六月三日沒於浪華行年四十後有手書數紙門人等輯而鏤梓號捜文三十一人之一

—松泉　坂上氏而松春之弟也初號松洗後改泉字號池流亭又自稱小僧三十一人之一元文元年丙辰九月三日沒齢五十三

—竿秋　松木氏號香稻菴元橋本氏也淡々退京都之日讓印章家譜以爲系嗣而改松木氏家書有〽二月回〽五十八一句〽春庭樂等頃年秋使門人等出難題一席不及日暮吐千發句而下稱之

—雞人　山口氏號蛭牙齋又自稱佃射山翁蓋田居佐之地名也元文中六月曾補鄙誹士於白菴而催一晝夜万句古來未曾有之壯觀也後改號曰老桂窩以蛭牙之號與門人雞江云

九二

家書有ニ＼嘉定諸簀＼花紅葉＼廣葉鳥＼獨吟百韻＼太郎百句＼万句抜萃等又家ニ有テ父祖之傳書門人等受之

―貞至　中嶋氏号ニ覗兒菴家書有ニ＼机勝手曾テ三井氏崇濤與至友トシ善シ濤没後厭塵雜染而入山ニ

―五始　中嶋氏号ニ烏巾園ト家書有ニ＼提燈＼福一満＼雲濱

―慶山　河畑氏始ハ号ニ櫟山ト後改大牙ニ又改慶山ニ号三射園ト又曰ニ遥香菴寛延三年庚午八月廿四日没行年四十四　辭世　國ざかい左右の杖や月の竹

―風狀　正木氏初ハ号ニ長牙ト居ヲ曰ニ新綾軒ト宅地在ニ于新町綾小路之南ニ故也又稱風雲齋家書有ニ＼五手船＼志賀竹阿州行脚之記＼飯富士甘州紀行＼卅吉備＼予州紀行＼御盃等

―馬乳　片岡氏号ニ朱羅樓ト初名曰ニ葉賦ト

―波光　林氏号ニ万來亭ト

―千徑　中井氏号ニ春里菴ト

―來川　田河氏号ニ烟舟亭ト

―好春　坂上氏号ニ向陽堂ト貞享元祿中之点者ナリ也没年不詳（晋風曰、寶永四年八月十一日歿、）

―松春　好春ガ之息而寶永中之点者也号ニ池流亭ト没年不詳

―竹翁　橋部氏号ニ耕齋ト寶永五年戊子三月五日没行年六十二

○高瀨梅盛

―道甘　高瀨氏ニシテ而梅盛ガ之弟也或曰兄住ニシ于伏見ニ号ニス樂々菴ト家書有ニ＼花露＼絲瓜草等元祿四年辛未二月十五日没壽八十

―信德　伊藤氏号ニ梨柿園ト家書有ニ＼七百＼浮世窓＼白重＼江戸三吟＼五戲言等元祿十一年丙寅十月十三日没行年六十六　或ノ曰信德幼ナル時視ニ鼻祖ニ々許スニ以ニス徳ノ字ヲ鼻没ノ後隨ニ西武梅盛ニ

而學道武没後一向爲事梅盛也毎有家事之障而年反于東府數會檀林之徒而蹤師風之風而句多異躰後復飯正風

信房　鈴村氏初ハ合德門人也德没後爲梅盛之弟子云云　没年不詳

如泉　齋藤氏初名ハ日朝後改如泉結菴於四條道場中而号眞珠菴善達和漢家書有＼狂連句式＼和漢千句＼松囃子等　正德五年乙未八月十七日没壽七十

重德　寺田氏初ハ爲馬淵宗畔門人後屬信德　没年不詳

信安　植村氏号棹歌齋　家書有＼花拾遺　善狂歌時示香　元文二年丁巳八月十七日没行年六十八　三十一人之一

隆志　北村氏号錦花堂又自稱信安齋　家書有＼草結＼笆木＼合鏡＼百杜鵑等

豐供　長村氏号皐鶴齋

春雄　杉本氏号青々館

○萩野安靜

似船　富尾氏初名ハ日首隆後紹似空軒之二世而改似船家書有＼苗代水＼堀河水＼勢田長橋＼芦花集＼隱笠等　寶永二年乙酉七月十六日没壽七十七（或曰七十六）

鞭石　稲田氏号井蛙軒後改而一堂自稱法兒　享保十三年戊申二月十五日没壽八十辭世吟

終にゆく岸の柳や法の兒　三十一人之一

林鴻　堀江氏号烟月堂自稱雲風子又曰宋林鴻家書有＼京羽二重　没年不詳　或曰昔日下林鴻所編集之京羽二重京師一時宗匠悉加手書以稱之唯隨流慣之太乃著永代記謗鴻其詞荒唐矣噫林鴻者好衆鳥之人而隨流者不隨風流之人乎

友扇　佐藤氏号桂花菴　享保十五年庚戌十一月三日没齡七十　三十一人之一

舟露　佐藤氏而方扇之弟也元祿年中之点者　先兒没年不詳

滴水　村山氏号一流子元祿寶永中之点者　没年不詳

方山　瀧氏而東六條御門主之家士也号招鳩軒弱冠視重頼入道聞道繋舟没後爲似船之門入且有由縁得荒木田守武之傳書初名号峯山後改芳山復改方山自稱應々翁身長六尺有四寸疾歩一日盡三百里髭長尺餘白如苧前年遊行上人在京之日山詣其會上人見其髭長戲視之都下謂賞之云云家書有＼曉山集　享保十五年庚戌五月廿二日没壽八十　三十一人之一

雲皷　堀内氏自稱千百翁隱棲於五條橋東号迎菴又名曰助給家書有＼宿松＼家風＼鹿開等　享保十三年戊申五月二日没行年六十四　三十一人之一

風山　谷口氏号東白軒又曰天聰堂元祿中之点者　没年不詳

雲堂　川勝氏号睡甘舍又曰吹松菴　享保十五年庚戌五月七日没壽七十　三十一人之一

雲鈴　吉井氏号吹簫軒家書有＼二日月　寛延四年辛未二月五日没壽七十八

雲峰　居初氏号都塵舍自稱年々翁家書有＼頭陀袋＼峰風＼御傳授＼傳授車等　三十一人之一　寛延元年戊辰十二月十六日没齢七十一

乾峰　雲峰之息也初名松鼓外舅乾貞門翁以鼻祖之傳書讓與之故以乾字爲名云云又号貞五堂　延享三年丙寅十月四日先父没行年三十四

乾峰　雲峰之外孫而乾峰之出也初名扇峰号貞六堂

海德　山本氏号万龜堂　延享二年乙丑三月十三日没行年四十四

皷山　中村氏号琴松堂　延享四年丁卯九月廿日没行年四十六　辭世　ありがたや月の舟哥なむあみだ

和汐　北村氏号一陽堂初曉來之門人而没後爲吹簫軒之門弟

雲扇　井上氏号[illegible]木峯元如泉之門人而住伏見号丈水後續睡甘舍之二世改今之字

貞扇　北川氏元ト浪華ノ人ニシテ而為ニ才麿ガ門人一後移ニ居ヲ於京都ニ属シテ雲扇ニ而列ナレ点者ニ号ス東園舍ト　寛延三年庚午五月十六日没齢六十四

[illegible]高　山崎氏号ス杏花亭ト　享保十五年庚戌十二月廿七日没行年六十四　三十一人之一

梅塵　山中氏号ス西翁堂ト

練石　福田氏ニシテ而練石ノ之孫ナリ也練石没後門人等憂ニ師家ノ系緒断絶センコトヲ於テ是ニ芦花翁使ム其嫡孫練石ヲシテ輔ケテ之以テ立ニ二世点格ヲ続テ旧号ヲ即チ日ノ而笑堂ト家書有ニ〈岸柳 法見翁追善〉〈糸柳 同上〉〈高低窟〉等一

知石　吉瀬氏其ノ先京東吉田邑ノ神官家ナリ也弱齢ニシテ而入ニ而咲堂ノ門ニ翁令ム之ヲ役ニ執筆ノ故ニ得タリ翁ノ之顧眷ヲ而密蔵日決傳レ之無レ遺スコト家書有ニ〈野馬臺集〉初ハ号ス寸松堂ト老後自称シ芦花翁ト以テ寸松ノ之号ヲ與フ息某石弘ニ其道ノ傳ニ於師祖ニ凡六十餘州ノ中道ニ其ノ学ヲ信ズル者ノ五十七箇國ニ矣　有隣藤公ノ管ニ折ニ謂詞ノ知石毎ニ随ヒテ御前ニ敷蒙ル恩恵ヲ　元文五年庚申十二月十三日没壽六十　三十一人之一

暮四　石井氏元ハ和及ノ門人ニシテ而号ス亀林ト後属シ而咲堂ニ改ム暮四ト号ス石寿菴ト又自称ス五橋翁ト由リ宅地ノ之所ニ在ル也　享保十九年甲寅二月廿五日没壽六十九　三十一人之一

芳全　赤井氏号ス清水軒ト初ノ名ハ日ノ可令ト能ク達ス執筆ニ故ニ一時ノ雅會必ズ不レ無キニアラズ斯人ニ老後患ヒテ聾ヲ而息ム其業ヲ寛延元年戊辰十月二日没壽七十四

羽紅　竹田氏号ス芝々堂ト　寛保三年癸亥閏四月三日没行年五十七　辞世　ゆく雲にまでつれだゝんほとゝぎす

市貢　大山氏号ス音璞室ト　元而咲堂ノ門人也暮四没後貢継ニ其名跡ヲ号ス石寿堂ト家書有ニ〈彼岸 暮四追善〉或ノ日市貢ガ之ハ阿貝ハ者鬼貫ノ門人也故ニ市貢モ亦時ミ親ニシテ鬼貫ニ而傳フト誹意ヲ云云　寛保三年癸亥正月四日没行年五十三　辞世　我きえて窟にのこるや鷲の雪　此句按ニ貢ガ之居在ニ于洛東鷲峰山下ニ之故カ乎

市[illegible]　松原氏号ス石寿堂ト初名ハ日三、木ト家書有ニ〈乗合舟〉〈鷲雪 市貢追善〉等一

一茶石 知石息初名曰知丸号寸松堂生質穎敏而且篤實最爲風雅之器家書有〈千里雲亡父追善父没後不幾歳而寛保二年壬戌六月廿七日没行年三十八人甚惜之 辭世 終にゆく水無月涼し胸清し 父知石者與水原貞佐同學而善神道茶石亦聞道於父雖然至其奥祕未許之茶石病重心念聞神籬磐境所傳則死可矣遂告貞佐々憐其懇志而於病牀傳之茶石乃有悦豫色即求紙硯書辭世之句記上所而忽氣絶云云

一知木 鈴江氏号寄松堂 元文五年庚申五月廿八日没行年四十四 辭世 ゆく水とゝもに涼しく石川や

一蘭石 中村氏号雲竹齋 元文三年戊午七月二日没行年五十五 辭世 荻の聲彌陀ときく夜なかぎりかな

一丈石 早川氏号千載堂初名曰和雄爲師家之執筆曾因四時堂主而學和漢師袖田如水翁（宮川松堅門人後爲烏丸光榮公御弟子）而學和歌又親石井氏而習連歌每陪有隣藤公之御筵而候筆役師没後剃髪而号宗順後參風早家爲和歌御門弟家書有〈筆舞臺〈長樂寺千句獨吟〈兩吟百歌仙〈續手卷拾遺〈橘々紀行〈菅蓑日記〈北國紀行〈狂歌百首〈南紀々行等

一蘆中 古澤氏号芸暉堂初名曰牛麿此人亦每往于四時堂學和漢而多佳作家書有〈袖鉋〈園塵立等又有下與丈石兩吟所作〈狂連千句上 寛保四年甲子十月六日没行年四十四 辭世 我のみかおもへば霜のはしら立

一林石 甲良氏号伏龜堂初名曰愚候又自稱都齋往年茶石没後寸松堂之号絶練石丈石相與議而使此人續舊号故改曰寸松堂家書有〈松梅林

一因石 三谷氏元丈石門人而号君李後屬林石曰松養軒

一都牛 高橋氏号蟲々齋又曰千蝶子元貞佐門人而佐没後屬丈石寛延二年己巳八月十五日没行年四十四 辭世 何のまゝ残る葉もなし秋の風

一艫船 橋本氏号松江堂

柳水　佐野氏号ス桃林菴ト

共梅　野村氏号ス伴松菴ト初ハ荃石ノ門人後屬ス丈石ニ

普求　山本氏初ハ四時堂ノ門人ニシテ而号ス不求ト其諱沒後爲リ知木弟子ト改ム普字ヲ号ス松門亭ト又自ミ稱ス雪莎翁ト

翠柳　山中氏号ニ花木亭ト

一四　西川氏号ス明月菴ト又自ミ稱ス蚊齋ト　延享三年丙寅九月十四日沒行年三十八　辭世　何悟る鳴さ一聲秋の蟬

觀丸　前川氏号ニ蛇我勇ト居ヲ曰ニ芦荻菴ト

○宮河松堅

晩山　爪木氏号ス咲花堂ト又曰ニ二童齋ト初ノ名ハ曰ニ永可ト家書有ニ千代ノ古道〵橋立案内志等ニ　享保十五年庚戌八月十五日沒齡六十九　辭世　まめで居よ身はならはしの草の露　門人等依テ遺言ニ立ツ碑ヲ於雙ノ岡長泉寺中兼好法師ノ之墓ノ傍ニ

貞爲　梅原氏号ス和海軒ト　享保三年戊戌七月十四日沒行年六十

正宜　香田氏初ノ名ハ曰ニ朋水ト後改ム人于ト居ノ号ス堪忍軒ト又曰ニ松ノ戸ト自ラ稱ス褁翁ト家書有ニ松ノ戸集麻木合等ニ　享保三年戊戌五月十二日沒行年五十八　或ノ曰正宜初ハ芭蕉ノ門人後爲ニ松堅ノ弟子ト傳ヘ誹諧ヲ且ツ學ブ和歌ヲ

拾女　丹波國氷上郡柏原ノ人田氏ノ女也自ニ弱年好ミ和歌誹諧ヲ爲ニ季吟門人ト後屬シテ松堅ニ專ラ學ブ和歌ヲ嘗テ嫁シ宗族田義園ニ壯歲ニシテ爲リ寡ト剃髮ノ而号ス妙融ト學ブ淨土律ヲ後皈シ禪法ニ參シテ大法正眼國師ニ而開悟ス創メテ一草廬ヲ於播州網干ノ邑ニ号ス不徹菴ト　元祿十一年戊寅八月十日於テ彼菴ニ示寂ス壽六十五諡ヲ曰ニ嶺雲貞開尼首座ト　非ニ点者ニ

共諺　圓山正阿彌ノ住職隱ニ棲ノ於五條橋東ニ号ス四時堂ト又自ラ稱ス省菊翁ト嘗テ隨ニ貞珠菴北泉ニ學テ和漢ヲ而尤多ニ無敵ノ之詞鋒ニ泉ヶ之誹漢及テ此翁ニ倍ト與ニ奕家書有ニ御傘執柄抄十有五巻〵滑稽雜談廿有四巻〵金衣鳥獨吟和漢千句〵獅莚子等ニ　元文元年丙辰八月廿二日寂壽七十一　辭世　七十一年ようはも

つたる露の玉　三十一人之其一

—流石　三輪氏号鬼角堂初住東府為不角弟子而得鬼角之字後皈京入菊翁之門列点叅三十一人之一　延享初年没乎云云不詳

—懐董　安田氏号珍松舎三十一人之一　没年不詳

—袋河　三宅氏号蝶々舎善誹漢且巧書畫　元文元年丙辰五月十七日没行年四十一　師翁惜河甚而遂発病終命

—米史　隠岐氏初名如牛後改阜澄又改米史続師家二世号四時堂　延享四年丁卯十二月廿七日没行年四十四　辞世　心から地獄は敷居高かりき生れてゆかん銀持の家

—百花　松本氏号荃葉堂初荃石門人荃石没後属米史為点者

—松貞　加藤氏篤柿園四世　享保十五年庚戌四月七日没　三十一人之一

—周篤　大塚氏号荃石翁松白没後受柿園五世之譲非点者

—鳥道　徳田氏号伊蒿齋　此二人雖非点者之列宮河翁傳来之秘書什器綴等貫而蔵故無心漏而較之

—清佐　北田氏　享保十七年壬子九月十八日没行年四十七　辞世　木まもりさなりて益なき此身かな　或曰佐生得多病而毎遇親族之助扶見日暮故有此句乎

—晃山　爪木氏而晩山息男也三十一人之一　後去京師而住津國長柄邑廢雅業為醫云云　生没不詳

—道山　井上氏号櫻戸　享保五年庚子八月十五日没齢六十四

—白鵠　大矢氏初名虎竹我黒門人也黒没後為晩山弟子号蘆隠軒老後罷業而住于島辻馬丸東清香菴自称茅齋　家書有＼四季大全＼俗根源等　延享三年丙寅九月廿七日寂行年七十九　三十一人之一

—旭水　井狩氏号晩林堂

―晩來　野々山氏初名ハ桃隣号ニ招花堂ト　享保十八年癸丑八月八日沒行年五十八

―蓉山　豊田氏号ハ寄吟居ト初ハ淡々門人後屬ス白鶴ニ　著ス同安一郎座　吐ク數句ヲ家書ニ有リ青海波ニ同ス全篇　享保十八年癸丑三月二日沒行年三十八　曾テ聞ク臨ムノ則之夜窓下ノ梅樹花纔ニ殘ル偶ミ有リ鵬ノ來鳴ク山ガ口吟將ニ終ラントス即チ取リテ筆ヲ書ス辭世ノ句ヲ　香やひらき法さく鳥のきらびやか　書シ已テ閉ヅ眼ヲ云云　可シ憐ム年來ノ習情及ビ末期ニ猶ヲ作ルコトヲ回文ノ句ヲ矣

○藤谷貞兼

―西角　寺井氏号ス輪花堂ト自ラ稱ス村雲翁ト又号ス要心居士ト　享保十五年庚戌八月八日沒壽七十一　辭世　月影たかつて今ゆく十万里

―一方　北川氏号ス西角菴ト又曰ニ滴塵軒又自ラ稱ス鵜鶴ト家書ニ有リ鳥篭　師沒後隨テ松下菴ニ傳フ芭蕉津ノ之評ヲ云云

東府合歡堂孫弟譜

○水間沾德　祖系家譜ニ委シ故ニ略ス之

―仙鶴　堀内氏元ハ東府ノ人也寛永中出テ于京都ニ爲ス点者ト号ス化笛齋又曰ニ長生菴ト家書有リ忘草十二月箱水精宮入鷹千年忌法樂等此翁有リ下嗜ム茶ヲ愛スルノ古器ヲ之癖故ニ遊テ其道ニ之人識ルモノ此翁ヲ者多シ又善ニ戯畫ノ其奇巧不レ滅セ野立圃英一蝶ニ卷中有レバ可キ描之句則畫イテ之ヲ以テ相贈ル借テ名ヲ於俳宗ノ故事ニ日ニ之ヲ壽及第ト　寛延元年戊辰閏十月廿一日沒行年七十四　三十一人之一

―鶴人　森川氏号ス亞笛齋ト　寛延三年庚午三月朔沒行年五十二

―奇仙　楠野氏号ス芦翁舍ト初ノ名ハ龜仙後改ム今ノ字ニ

浪華點者家譜

明心居士孫弟譜

○鼻祖貞德　家譜出ス前

―重頼　家譜見ユ前篇ニ故略

―貞室　同上

季吟　同上

桃青　芭蕉翁　家譜見ニ前篇ニ

其角　家譜見ニ京師部ニ

淡々　松木氏元浪華ノ人也初遊ニ止ノ東府ニ而入ニ其角門ニ學フ有レ年後出テ京ニ為ル詞宗ト自稱ニ勃窣翁ト結テ菴ヲ於祇林ノ南菊水ノ傍ニ号ヲ曰ニ半時庵ト英名鳴ル都下ニ吾ガ師芦花翁與ニ此翁善シ毎ニ會面スル談ニ其肺肝ヲ知テ淡子ノ之不ルヲ凡數ヲ歎ス美スル之ヲ蓋点印用ル青肉ヲ者ノ此翁為リ權輿ト實ニ當世ノ之一風流家也　享保中以ニ点印家譜ヲ與ニ奪ノ門人竿秋ニ而退テ京師ヲ去テ再赴ニ東府ニ復タ皈ル浪華ニ　家書有ニ＼月鶴＼安達太郎根＼樫柏＼鹿嶋紀行＼三个一＼東仁波＼五歌仙＼六藝＼十友館＼花月六百韻＼其角十七回＼梅若菜＼神笛＼廿哥仙〔附ニ紀行／六詠〕＼其角卅三回＼歳暖斗等ニ　京師三十一人之一

富天　浦川氏号ニ清得舍ト　家書有ニ＼押花宴＼栗飯＼民哥行等ニ

雪泉　森氏号ニ大黒菴ト又稱ニ酉貞翁ト　家書有ニ＼熱田日記ニ

田鶴樹　淺見氏号ニ江霜庵ト又曰ニ之呼齋ト又自稱ニ硯漁夫ト又有ニ姫介也扶一山人蓑身者蝸鼠居士鵬橋子等ノ之稱ト家書有ニ＼西海春秋＼四方錐＼續四方錐＼素前来＼小槌＼瓦後抄＼陰徳抄＼花月禅＼閑庭要話等ニ

舍梈　堀氏号ニ深茂亭ト

作方　好三氏号ニ倒枕舍ト

御風　淺見氏号ニ鳥角堂ト

雲砂　樋口氏号ニ九泉閣ト

貞因　榎並氏以レ造ニコトヲ菓子ヲ為レ産ト号ニ鋼屋ト住ニ山城大掾ニ貞室以ニ天水鈔ヲ授レ因ニ其本ヲ為ニ家珍ト　元祿十三年庚辰三月廿三日沒壽八十

—貞柳　貞因長子。師豐藏房信海、善狂歌。初名言因、後改貞柳。家書有〈家土産〈續家土産〉。享保二十年乙卯八月十五日沒、壽八十一。曾聞家有古唐墨徑尺余、柳獻之於官家。後達仙洞御所之。叡聞被召。其墨柳聞之、乃詠狂歌曰　月ならで雲の上まですみのぼる是はいかなる油烟なるらん　官家以聞、有仰賜油烟齋之號云

—貞峨　貞因次子。曾爲僧、屬黄檗悅山和尚。後還俗、而立滑稽家之號契因。後改貞峩。家書有〈師布袋〉。寛保二年壬戌十月四日沒、壽八十

—潘山　塘氏、號百子堂。娶貞峩之女爲甥、而續其道脉。家書有〈橋柱〈仙家杖〉等

—啓字　號文桂舍

—竹夏　號南泉舍、又曰不黑菴

—宗因　西山氏、號一幽、又號梅翁、又號西翁。江北天滿人也。嘗慕宗鑑法師之風流、往學連歌。後師里村祖白、而倍究其蘊奥。晩年以連哥遷誹諧、遊于東府、與立檀林一風（俳諧興之）。家書有〈蚊柱百韵〈雨吟集〈獨吟集〈落花集〈青葉〈廿日草〈四人法師〈十會集等、其外數部。天和二年壬戌三月廿八日沒、壽七十三

或曰、宗因師新舟、而學誹諧、後倣常矩之新樣、立檀林風（師家記同之）。又或曰、宗因出自連歌、而立誹諧、實是一派之鼻祖也云云。二說鑾觸未決。案、維舟與長頭丸不快之後、入田村家、專學連哥、自立以爲誹諧之宗匠。因亦爲里村之門人。然則時々相會、而與共可知其涯底。也世人以之推謂入重賴之門者乎。又實因依維舟而得誹諧之道、亦不可知。苟且記兩說、以俟他之支證

—鬼貫　平泉氏、津國伊丹人也。幼而入重賴之門。十八歲初交梅翁之席。後作一風流、爲伊丹流之祖。家書有〈獨言〈七車等。元文三年戊午閏八月二日沒、壽七十八

—西鶴　井原氏、號二萬翁。曾一日獨吟吐二萬三千句、故有此名。家書有〈大矢數〈博多百合〈胴骨〈杉炙〈石車等。又著述俗文許多。就

レ中一代男十二巻當時ノ之絶筆幽美高賞先キニ無ク若キレ斯文一後未タ見ニ有レル出ルコ者ノ也又有ニ近松何某ト云者一善ク編ニ淨瑠璃ノ文ヲ其適ナル者數帖或曰近松ハ者西鶴ノ之門人也ト　元祿六癸酉年八月十一日没行年五十二

―由平　前川氏　後入ニ釋門一号ニ自入一　寶永年中没ニ
　　　　于津國北野邑ニ云云　年紀不レ詳

―才麿　椎本氏字ハ少文号ニ舊德翁一和州宇陀人也家書有ニ〽千葉集〽伊丹句合（月尋興行 才麿與之）等一　元文三戊午年正月二日没ニ于浪華江北ニ壽八十有三　或日才麿初ハ爲ニ西鶴ノ弟子一ト号ニ西麿一後爲ニリ宗因直弟一トト改ムトニ才ノ字一

―芳室　椎本氏号ニ甘泉庵一家書有ニ續（マヽ）〽千葉集〽石霜菴追善集〽白玉様集〽著（菩）花集等一　延享四丶卯年三月四日没壽八十四

―三惟　菊谷氏後号ニ菊叟一
　　　　没年不詳

―五風　山國氏
　　　　没年不詳

―員丸（九）　兒嶋氏後号ニ書房一　家書有ニ〽厚顔記〽通俗志〽奥小日記等一　没年不詳　非ニ点者一

―才鷗　原氏　没年不詳

―何中　十河氏　家書有ニ〽土餅〽松之梅等一
　　　　没年不詳

―大立　竜田氏号ニ水足軒一家書有ニ〽毛登乃水〽又毛登乃水一　延享元年甲子四月廿六日没
　　　　辭世　花は廿日我は六十九夜の明　句意言フ其行年ヲ一者ノカ乎

―梅門　稻木氏始号ニ房暁一　家書有一〽霜折〽小倉塵〽布恩川ノ〽月乃月〽倭多羅尼〽象山陀等一

―了雨　吉田氏号ニ戸樞亭一　家書有ニ〽梅朝〽此君〽波入日〽梅手本〽二日影等一

―蛸兒　梅原氏
　　　　没年不詳

―馬周　園氏
　　　　同上

- 枕欒　久保田氏　同上
- 渓尼　山田氏　同上
- 一菊　鵜野氏号ニ采綠齋ー
- 遠山　村田氏　没年不詳
- 瓦長　土井氏　同上
- 千四　長谷川氏　同上
- 鳳洲　河野氏　同上
- 扇尺　矢追氏　同上
- 徳水　金森氏　同上
- 政麿　淺川氏　同上

- 馬骨　櫟谷氏
- 左橋　水足氏号ニ荷旃齋ー　家書有ニ〳〵天香集〳〵古硯屏等ー
- 矩州　椎本氏号ニ五彩堂ー初ノ名ハ桐麿元ト舊徳翁ノ門人ニシテ而継ニグ芳室之後ヲー家書有ニ〳〵哀些集〳〵清逸集〳〵四日桃等ー
- 少室　矢野氏　没年不詳
- 執中　山口氏　同上
- 宗卜　栗山氏　号ニ峯雌花ー
- 著阿　石崎氏　没年不詳
- 馬城　山田氏　同上
- 舎鳳　河合氏号ニ九苞堂ー　家書有ニ〳〵龜尾集ー

如招　筒井氏号ニ三竿堂ー
陶壺　飯田氏号ニ下方菴ー
春耕　千葉氏号ニ石橋麟ー家書有ニ無盡藏ー
梨雲　山河氏号ニ花調齋ー
東楊　速水氏没年不詳
貫虹　中尾氏号ニ後日菴ー
文直　原田氏没年不詳
李坡　中村氏同上
鼠耳　鹽川氏同上
文水　中村氏号ニ壽道舘ー

其十　中嶋氏号ニ瓦竹堂ー
嘉辰　村井氏号ニ花葉洞ー
烏裙　寺町氏号ニ松風軒ー
龜文　長谷川氏号ニ子霜屈ー
蘭古　岡本氏号ニ陶々舍ー
皎々　光枝氏号ニ鷺毛齋ー
茶瓜　山河氏号ニ左禮門ー
魯紅
來山　小西氏蚤歳喪ニ父母ヲ爲ニ親族ノ育ハレテ而成レ人ト性敏質直平日只好ニ讀レ書ヲ由平曾テ與ニ兒之宗族ー善シ強テ請テ以テ爲ニ門弟ト教ルニ一ヲ悟レ十ヲ由平愛スルコト之如レ子齡未レ滿ニ二十ニ縮レ案ヲ爲ニ詞宗ト

号ニ十萬堂ト又自稱ス湛々翁ト　享保元年丙申十月三日歿ニ于攝南今宮邑ニ行年六十三

—布門　井上氏号ニ五流齋ト又自稱ニ桑老父ト　家書有ニ〈小三月 湛翁七回〉〈手束弓 同十三回〉〈葉蔓 同十七回〉〈同卅三回忌〉〈躁之能〉〈若葉井戸〉〈有馬日記〉〈桑老父等其外小册許多〉

—婆東　布門長男号ニ鳥哉樓ト

—撲川　林氏号ニ東江閣ト　家書有ニ〈擊鼓樓 一日三千句〉〈櫻道〉〈雲峯 一日二万五百韵加判〉〈菊苞 東武紀行〉〈藍乃手等〉

—青牛　梅原氏号ニ中岳齋ト

—燕雀　小寺氏号ニ結甫齋ト

—社笛　柳原氏号ニ梧桐泉ト

—雁臺　田中氏号ニ林積堂ト

—西吟　住ニ于津國櫻塚邑ニ云　沒年不詳

貞徳翁ノ孫弟ニ有ニ弘永道寸昨非ニ宗因門人ニ有ニ玖也春倫等一其後有ニ轍士伴自路通野坡文十等一皆浪華人也家譜追テ可ニ勘考ス一

東府合歡堂孫弟譜

○水間沾徳

祖系見ニ綾錦ニ故略之

—沾洲　貴志氏号ニ行軒齋ト

—紹廉　小野氏号ニ銀竹堂ト後改ニ一炊菴ト

—白羽　鹿嶋氏号ニ十南齋ト往ッ延享中催ニ獨吟万句ノ一席ヲ張ニ於備後町徳成寺ニ　終日ニシテ而滿座ス其雄名鳴ニル坂中ニ一家書有ニ〈舞山香〉〈有紫〉〈五文字 一日万句賀〉〈半摸 獨吟千句發句〉〈難波筏等〉

—魚江　田中氏　寛延庚午春沒

—祇羅　木川氏

—藤角　木澤氏号ニ文イ舍ト　寛延戊辰年沒

魚輔　藤井氏　没年不詳

李原　山本氏号ニ鶯鳴齋ー　同上

怺橐　瀧澤氏号ニ杞柳齋ー

芳萱　木村氏泉南堺人　号ニ亞歳齋ー

茶雷　山縣氏号ニ東居齋ー

稲人　錦氏号ニ永草齋ー

午影　勝見氏号ニ五曲菴ー

流羽　石丸氏号ニ桐君舎ー

桃滸　木田氏号ニ露仁齋ー

孚窕　築沼氏号ニ桑中亭ー

佛庵　原氏号ニ木堂ー

浦丈　豊津氏号ニ午晴亦ト又号ニ鹿吼子ー初在ニテ予東府ニ受ニ業ヲ於行軒齋ニ後出ニ浪華ニ属ニシ一炊菴ー為ニレ点者ト家書有ニ〈壽賛集〈五百仙等ー

謝大　長濱氏号ニ朝巣軒ー

棋北　上田氏号ニ向陽舎ー

徑烏　朝田氏号ニ生白齋ー

烏調　橘氏号ニ鋏鏑庵ー

敬雨孫弟譜

○祇空　稲津氏浪華人也初号ニ青流ト感ニ慕シ宗祇法師ノ之風流ニ經ニ廻諸國ニ至リ予相州箱根湯本ニ於テ祇法之師冥前ニ落髪シ自号ニ祇空ト遂ニ赴キ東奥羽越ノ境ニ暫ク遊ビ北ス江府ニ一宵有レ夢ミルコト敬ノ字ノ依レ之更ニ稱ス敬雨ト後住ス予洛北紫野ニ又寓シ浪華ニ復赴ク

東府ニ之途中沒ス於箱根ノ湯本ニ享保十八癸丑年四月
廿三日壽七十一遺偈ニ曰　擧手動足平生神通鉄牛破
裂音信不通　此世ならばぬらりくらりでしぬるなり
地獄つぶしの極樂の介　門人立ニ碑ヲ於祇法師ノ之
墓ノ傍一追ニ号ス玉笥山人一ト後又合ニ祭ル靈ヲ於深川八
幡宮ノ末社ニ

法策　仲上氏号ニ蟻磨菴一ト又稱ニ馬田江一ト家書有ニ＼朽
葉＼時雨塚＼神佛等一

千鹿　竹野氏号ニス唧山閣一　家書有ニ＼櫻名月＼早苗
鷹＼卯花月＼筑紫琴等一

鳥窓　阿賀氏号ニ秋聲館一

五樓　(原本缺氏)号ニ沙鷗亭一

追加大津南都點者譜

芭蕉翁孫弟譜

○桃靑　芭蕉翁譜
見レ前

尙白　江左氏名ハ三益号ニ木翁一ト大津人也或曰初者不
卜門人ト　ガ沒後爲ニル芭蕉ノ弟子一ト　享保七年壬寅
七月十九日沒壽七十三

松琵　窪田氏号ニ負月翁宗心一ト大津人也初ハ爲ニリ正秀
之弟子一（正秀ハ膳所人）後爲ニ直弟一ト家書有ニ＼水友
＼不斷櫻＼雪乃奈太禮等一　寛延三庚午年八月十
五日沒壽七十八

之白　津田氏号ニ便翁一ト住ニ京東一ニ
沒年不詳

宰陀　小宮山氏号ニ百老齋一　元文三年戊午九月七日
沒行年六十四

菊峰　武田氏号ニ景富堂一曾聞不卜所レ讓ニル尙白ニ之文
臺自ニ宰陀一傳ヘ來ヲ在レ家ニ云云

宗因孫弟譜

○小西來山　家譜出レ前ニ

古道　村井氏号ニ無名園一ト南都人　寛延二己巳年十月
四日沒行年六十九

誹諧家譜追加

逸韻句狀元

次第隨系譜列行
不論前後

鳳凰も出よのどけき酉のとし　貞徳
薄雲にまたれし月や光君　立圃
花のかへさ我にしらせよ草履取　維舟
水鳥かそれかもあらぬ鷺かな　西武
馬合羽雪打はらふ袖もなし　令徳
これは〳〵とばかり花のよし野山　貞室
地主からは木の間の花の都哉　季吟
東より世はおさまるき初日かな　梅盛
千金の價に春のたちれかな　安靜
はなやかやいはゞ櫻の伊勢踊　松堅
染つけて花野やうつす桔梗皿　宗畔
山万歳よぶこさぶきや御代の春　貞継
膓もたつぞよ花の衣がへ　正式
しら壁や空にしられぬ雪の宿　日能
薄霧やむかしの京の引殘し　道節
木毎なる雪と梅とや咲こくら　貞宜
種ゝ薩埵の花にまさるや普賢象　元知
雲の帯やゆふだちたはく山の腰　未得
みんつりと見ゆる若木やはたちばな　可頼
松に時雨鹿の角さす蜂の宮　是誰
つほろほんになるや柳の神無月　貫風
花にいはゞむべ山風やあらしんき　胤及
舟のり姫梶の葉にかくやさほの哥　貞保
四方山の雪なうづむや富士の景　重以
白虎か竹のはやしのまだら雪　友仙
やかずとも草はもえなんわらび餅　正在
青柳の眉かく岸の額かな　守武
なのづから鶯籠や園の竹　望一
右ひだりしれぬ蕨の手さき哉　美津女
後家に見せんたてりと思ふ女郎花　惟中
山ふかみそれにたつ名よ姫くるみ　園女
まん丸に出ても永き春日かな　宗鑑
親の杖よはりし果や此廊木　常長
芦の穂は波の枕のはんや哉　幸和
ゆふがほにおもたき蟇のあゆみ哉　鷺水
五月雨にしめらぬものは噂かな　幸佐
姫瓜に三千の林檎顔色なし　常矩
日ざかりの岩よりしぼる清水哉　常牧
中わろき人なつかしや秋の暮　和及
ぬすみした佛は何と蓮のはな　長年
いなづまにつゝこまれけりかいつぶり　酉生
清水にはさかぬ蓮のこゝろかな　文推
夏冬と元日やよきあり所　定武
棹そへてなかぬ舟ありかきつばた　助叟
石井筒にも似ず落る一葉かな　正業

かへるこにうつすなのがふつゝかさ　竹亭
うしろ紐つれて乳のはる花野哉　諦流
けふの月花に申さば名こり草　重榮
桑摘のゑくぼに落る雲雀かな　言水
其くせに雨さへふりぬほさゝぎす　我黒
すゞ風や晝寢の夢の雪の色　兒水
出かはりや此季も闇をしらぬ者　金毛
おさないの取付たつや藤の花　言石
都見む小桶に泥鰌はなかつみ　高政
むつかしや柳が門の縄すだれ　只丸
ほた〳〵と椿の落る朧月　團水
都には不自由はなきな郭公　丈竹
我も其ばけもの仲間年ぞゆく　百合
ほさゝぎす淀にや人をつなぎ鯉　一雪
野のためし根芹ほこへて今朝にあり　貞木
ゆがみ木の老のもすそや花の春　隨流
白鷺にゆふ影はづかしや須磨の月　定之
錢もなうて鳴門をわたる千鳥哉　柳水
蠅はさぞ内やゆかしき櫃すだれ　令富
起る事萩にははやし意の前　常春
うぐひすかよむもや花のえんの哥　常英
蛙さへあはれになくな十五日　延清
濡川へふみかふりけり鳴雲雀　安山
菩提子は樹にあらぬ細工かな　暢好

五月雨や橋ならぬ石の音　經定
むしくりのかたち見えたり雲の峯　歡鳥
はつ雪や脇息柢の誕生日　和吟
我宿の道わすれけり美人草　之水
筆の雲に乘ばや庭の松の月　愚堂
三線になじみはうすし梅の花　虚舟
うはさしや月の弓射るうつぼ草　喜雲
うぐひすが聲の綾にはもいくはかな　貞恕
後戸にあく迄花のさかりかな　春澄
風ほそしうつぼ柱の小夜時雨　貞佐
あすさいふ人には死ありあまの川　八百彦
京の雪こかしてたくや比容愛宕　引牛
京なる哉京たり四方の花の頃　湖春
ぬひものゝかすり針山の木々の色　元隣
ゆふがほや秋はいろ〳〵のふくべ哉　桃青
よき衣のみどり賤しやすまふとり　其角
あふ坂のかたまる頃や初ざくら　千那
寒菊に鄰もありやいけ大根　許六
蕣つむけふはなやきそ鳥部山　孟遠
魂棚へかた身かゝるや中風病　去音
腸に染る紅葉や猿の聲　文鳴
つばくらのうかべてすべる柳哉　角上

寒夜尊門樓にのぼる
霜ながし夜の都のさばかり也　角々

物毎のみつるはいやじ十三夜　巴人
氣がむけば杖に翅あり庭の春　原松
しら魚のいかであそばぬ京の水　富鈴
藻の花やひつくりかへる後夜の鐘　嬰利
蕭然と雨に音なしほとゝぎす　壺角
稲づまは草にはらむやふたつ星　鈴山
所〲花もながれて衣がへ　鉄鐸

はつ午の句に
松風や汐干にまさる三の峯　松江
田の人はいきてもどるか涸清水　大圭
世をわたるものとは見えず螢賣　松泉
照所かぞふる富士の時雨かな　竿秋
夜櫻は火のなき伽羅のにほひ哉　羅人

四十になりける元日に
かくしたる年ぞさし玉老の春　貞至
人麿に影や赤人十三夜　五始
くつさめが雲にかけたかほとゝぎす　慶山

行脚に出るとて
簑を着てねぢ向我も角黍哉　風狀
菴せばしせめて柚味噌を釜の数　馬乳
加茂川の濁らぬほどよ春の雨　波光

引墨免許かふむりける時
月に雪上なきけふの花心　千徑

苦熱
ひとしきり瓜のあつさのしづかなり　來川
山寺は薺たゝくかたゝかぬか　好春
京にさへ茶をもむ人はもみにけり　松春
赤土のくづれて暑し山の腹　竹翁
かすかなは身の卑下したる螢かな　道甘
冷まじや女の眼鏡さしの暮　信德
駕籠かりて淡路にのらん汐干哉　如泉
かざり竹藤のおぼろより猶おかし　信房
ふらずとも傘さして見んかきつばた　重德

名月陰晴
はゝき木や此夜を月の物くるひ　信安
降なをし日も照直しむら時雨　隆志
藻の尺に流れくらぶる柳哉　豊秋

望十峯
峯は雲野をゆく笠のあつさ哉　春雄

重陽
けふといへば山紅粉つけて菊しろし　似船
夜の雨仕合いかゞあじろ守　聴石
我秋の泪とがめそ鼻けぬき　林鴻
此ぬくささうないものか淺しもり　友扇
碓はとしの暮ほど音高し　舟露
のび〲てゆがまぬ松のみどり哉　滴水
照ば桃ふれば柳の節供かな　方山
錦木の闇を喚なりほとゝぎす　雲鼓

うつくしき物生れけり日の始　風山
道風に似たり鳥の筆はじめ　雲堂
　箸といふ題にて
末然しる易にも萩の咲にけり　雲鈴
三千させの盃さくや岸の上　雲峯
初雪やむざ〳〵けぶるかはら竈　乾峯
おもふほど句はぬ獨活の盛かな　乾峯
途笠は男の物ぞ花もごり　海德
竹あめる垣や一うれ荳畠　皷山
五月雨やあらはれわたす木工の橋　和汐
金魚にには藻のくもりあり杜宇　雲扇
順禮の菁や杷の路の鰹舟　貞扇
長哥やぬるみ初めし京の水　攀高
當水や飯くふて居るは頁さ見ゆ　梅應
名月や松をこぼるゝ風の隈　練石
鶯やまだ臺所火もうたず　知石
はつ午やこはたの料理綿も着ず　暮四
花な見る人のあまりや繪馬堂　芳仝
そだてたる汗幾粒ぞ菊の露　羽紅
萍の種に殘れや散花火　市貢
室蛙か昨日にかほる梅の花　市楓
辛崎の晴な見る日や御供舟　荃石
ひらく帆やよせては富士の袖扇　知木
酒に三里酔に二里鹿の帯近し　闇石

雪の神おそろしやけふの月　丈石
餅突や是にうつぶく天文者　芦中
蓬生は菖蒲ばかりな葺ぬべし　林石
水茶屋に香はなきものな梅の花　因石
大橋さ小橋の間のあつさ哉　都牛
日に眠り雨にさめたる柳かな　鲈船
目は眼鏡耳なば何さ郭公　柳水
雲ごけや火のこもりたる峯の塔　其梅
花に風月に雲見す生身魂　普求
森の日やさていたいけな酒の酔　翠柳
元日や親につく手な穗長にも　一四
寢もやらず聞ての後の郭公　脱我
唐崎や今朝は穗長に松三本　曉山
頓杖に暮行年やおしまづき　貞爲
盆さぶもしや䕺木の杖の音　正宜
虫聞の果は小倉の鴉かな　其諺
來る秋のきりぎは見する一葉哉　捨女
棚經や草臥たゝく朝烏　流石
鐘つきもなのれささはぐ櫻かな　懷童
名月や西北角の影長者　娑河
先涼ぬ半すかして松の風　米史
合歡の葉も寢ぬ夜さなりぬ秋の空　百花
印籠に妻もこもれりけしの花　松貞
春なまれき秋なうなづく柳かな　周爲

世な秋のはなし相手や松の聲　鳥道
藤蔓かあまつ小屋根のかざり繩　清佐
濱松にたゞの風ふく汐干かな　道山

卜居吟

語も花さもにちる住居哉　白鶴
名所へ魂いくつけふの月　旭水
晝の蚊の夜半業して逃にけり　晩來
上さ下二水かゞみ伊勢ざくら　梧山
日はそれさ照わかれにき紅の花　西角
背戸畑や萱も折〳〵事かき葉　一方
海鼠腸に秋風ぞふく海雲賣　仙雀
寝るた旅寝ぬた旅寢や郭公　雀人
順禮のよき衣着たるさくらかな　奇仙

涙蓮部

片腕にひろまぬ梅の老木哉　富天
騎すてし鞍に留守あり梅の花　雲泉

端午の句に

伊丹にも祝ふや餅の薮かぶり　田雀樹
鶏にあそび馬おごろかし明の菊　含梓
唐になし一夜た神の思ひ草　佳方
桑の花やかい玉川の外さても　御風
茶のはなや太円何某こりもせず　雲沙
破魔弓や一度はなせば千世の春　貞因

花さ見て手折ば雪の小柴かな　貞柳
ゆふ日やな大つごもりの天王寺　貞義
ゆふぐれや踊の蓮咲そむる　潛山
有明のあぶらぞ殘る郭公　宗四
蛛の巣はあつきものなり夏木立　鬼貫
ある據こゝらに茶屋があつたもの　西雀
山姿がいたらぬ山や雲の峯　山平
しぐれそめ黒木になるは何〳〵ぞ　才麿
よいほごに棚うごくやにつ袷　芳室
業にもなる一汗のたゞりかな　三惟
梅がすくめぐらし文や暦の雲　五風
夜の有に卯花頃や村がらす　青房
さびしさなやう〳〵めぐむ柳哉　何中
高砂や花はひさへの長者哉　大立
事たるやあふ夜た星の玉椿　了雨
柴の葉の文で見はやせ梅の花　蜻見
犬牽て手いれぬ雪の使かな　馬周
慾吹や筏にうたるゝこぼれ梅　枕樂
我妻を内にわすれてさくら哉　溪尾
千鳥皆かよいしまふて枕かな　一匇
牙さいで梅なこぼすな猫の垣　遠山
卯花や雲に一聲若ゑぼす　瓦長
ゆふがほや花さへ實さへ闇の夜の　千四
芦の葉の筋やわかれてふたつ星　鳳洲

鷹狩に水仙さけん秋かな　德水
やまぶきの岸に竝せる肌繻絆　扇尺
山ぶきや扉はこだまに鯉たゝく　政麿
あつき日に覺ゆる水の寒さ哉　馬骨
年毎に鐘なき夜半や郭公　左橋
名月や人定まつて秋の月　矩州
室に得て沽めや〳〵玉つばき　少室
山口は袷もはやしさくらの實　執中
笛あげて有明ばかりほとゝぎす　宗卜
煤はきや余所のあふ瀬な疊打　著阿
木鋏の日買ゆるぐや梅雨あがり　馬城
先輕しあすはさもあれ初袷　舍鳳
鯖の火の沖に涼しき夜更哉　春耕
寒き夜や風にいぢばる水の音　棨雲
空はしる鐘のゆくゑも氷かな　東楊
刈手には麻こばかりやさくら麻　貫虹
山家にも醉は此日ぞ菊の花　文直
若竹の力はじめや星の哥　李坡
潮風に蟬のこぼるゝ夕日かな　鼠耳
しむる野の男に名なしあらひ苗　文水
石になる誓もあらむ星の戀　其十
孥抱て來る人またん明の桃　嘉辰
日に眠る鶴は幾もさぞ宇治の窻　鳥岧
みじかきな我に日の德富士の山　龜文

片意地もかくるゝばかり暑さかな　闌古
降底に石の干あがる暑さ哉　蛟々
寐た猪の淵へ落るや大文字　茶瓜
秋の山女ばかりのわらひかな　魯紅
見かへれば寒し日暮の山櫻　來山
罪深き女日出たし土用干　布門
手に取て見ればつめたし春の草　婆束

紀行の句に

東大寺しぐれぞ終る西大寺　樊川
世の姿積ては若し今朝の雪　青牛
玉だれさよぶ名は暑し青簾　燕雀
日の本やさりさては又五月雨　社笛
きさらぎの人にちびるや土筆　雁臺
我軒に長柄の菖蒲ふきにけり　西吟
寐かへれば雄島なりけり春の月　沾德
朝起の若葉のうへや初瀨七日　沾洲
若水を幾たび頰へひきがへる　紹廉

苦熱

打向ふ城の烹かへす瓜つくり　白羽

彌生なかば都にのぼり、東山にあそぶ。ほとゝぎすはいまだ耳にゆるさずして

蚊のはつ音桃に聞けり神樂岡　烁葉
三五夜中念佛の出る古若衆　芳書

いきらるゝ命なりけり夕すゞみ　茶雷
鯉鮒の聲聞そめつ杜宇　稻人
千聲きく里はづかしや郭公　桃滴
灯ばかりは風の吹しく暑さかな　孚窕
蔓いちごあちらへぬける石の穴　彿菴
群鳧を射てはたすくる時雨哉　蒲丈
降うづむ葉に縺がへるや牛の聲　謝大
髪の氣も糸のけもなし枯柳　棋北
見て居ればうごく雲あり山櫻　徑烏
篠打の白川ざくら誰住居　祇空
いつはりのなき日なりけり夷講　法策
云なづけ日をまつ花の茄子哉　千鹿
あそばるゝ日あり師走の玉椿　烏窓

遅到來

一くもり到らぬ山のさくらかな　如招
しぐるゝかへだての薮の動きやう　陶古

松花を服して延壽するといふ事を

春いくつふるや彭祖が若みどり　烏調

大津南部部

鳴たつて日は薄墨に暮にけり　尙白
盃も降て來さうなさくらかな　松琵
男をみな分ていけてよ二重切　之白
はつ雪や日和に成て花の雨　李陀

靜さやしぐるゝ中の野の仕事　菊峰
あさがほや人間貢に起るはず　古道

誹諧家譜終

印譜

往古誹諧家施スモノレ点ヲ者做ニ和哥連哥一唯有ルノミ二平点長点ノ之二一而已又不レ及ニ長点一而勝レルモノ二平点一者何ノ傍ニ書ニ珍重ノ之字一ヲ以分ツレ之ヲ爲ニ一点半一ト又長点ノ之中尤モ秀タルモノ者加ヘテ二朱圓一ヲ以褒美ス之此ノ爲ニ二点ト也近世五点七点ニハ則彫二刻ノ花鳥之形一ヲ印シレ之ヲ爲レ催サンガ二其興一ヲ潤色ノ之出シ二十点廿点百点一ノ逸ニ至ル二高判千点之印一ニ抑ヽ古ヘ者百韻誹諧有ルレ点モノ者纔ニ十廿ニシテ而未ダレ及ニ卅句一ニ也今ハ者百韵ノ之中無キモノレ点者纔ニ以テ二一二ヲ一計フレ之皆ナ一黑ナル者モ亦多シ故ニ古ノ之爭フモノハレ点ヲ者以レ有ルヲ二無点ノ之句一爲レ輸マケト今ハ者以レ有ルヲ二高点ノ之句一爲レ贏カチト矣或ノ曰何爲ゾ若レ斯ノ過一大ナルヤ哉今ノ人偏ニ貪テレ獲ルコトヲレ点ヲ不ルガレ欲レ嗜ムコトヲ何ヲ故也噫アヽ此ノ道衰ヘタルカ乎余ガ曰否シカラズ是レ時世ノ之風俗ナリ也以レ今ヲ擬スルニレ古ニ何ンゾ有レ異ナルコト今出スモノハ二千点ノ之高判ヲ一者此レ古ノ之朱圓ナリ也亞デレ之ニ五百点二百点アルモノハ者古ノ之長点ナリ也百点以上ノモノハ者古ノ之平点ナリ也其レヨリ下不ルモノレ至ラ二百点一ニ者ハ古ノ之無キモノレ点者也勿レ謂フコト二過大一ヲ

福田練石	好雨十点 知時節廿 當春乃卅 發生閻五十 風潜入夜八十 潤物百 細無聲百五十 雲俱黒二百 江火船獨明三百 曉看紅濕處四百 錦官城五百点
井上雲扇	長五点 鶴首十 松媒廿 黄雀卅 藻鱗五十 南江七十 常碧漣百 翠滋櫻百五十 錦秋階二百 白菊殿三百 月宮館五百 滿涸曳七百点
北村隆志	吳竹十点 雪梅廿 驪山宮卅 花清宮五十 鳳七十 龜龍百 湖海百廿 松島百五十 住江二百 和哥浦三百 橋立四百 田子浦五百 雲上八百 天瓊矛千点
井狩旭水	龍十点 雲客廿 丹塗矢卅 仙客四十 雁來紅五十 青海波六十 麒麟七十 仙遊霞八十 山鵲九十 鉢叩百 凝階矣百廿 黄葵百五十 治國平天下百八十 柳花苑二百 天浮橋三百 寿筒雄四百 久堅山四百五十 優鉢羅華五百点
松木竿秋	一字七点 二字十 三字十五 五字廿五 笙四十 如意六十 龍八十五 必知麟百 南風百卅 雷澤百五十 万國衣冠百七十 大庾嶺三百 四神相應五百点
山口羅人	珍重五点 一字八 東富廿 玉界尺卅 文中虚五十 如傾河七十 鸞八十五 吐鳳百 震翰百廿 芙蓉殿百七十 廣葉栢二百 瓜臺三百点

早川丈石
珍十点 長廿 英卅 鉋屑五十 井手蛙八十 三船百 佐國百五十 西樓二百 細良香三百 在羽林四百 宇治山五百 神妙八百 筑波千点

黒瀬虚舟
晩鐘廿点 夕照卅 暮雪五十 晴嵐七十 石山百 矢橋百卅 堅田百五十 唐碕二百 白髪二百五十 敷島三百点

望月富鈴
丸五点 倭十 住江廿 鴨河卅 勝嶋五十 稲荷山八十 花下睡猫百 三笠山五十 鳩峯百卅 二見浦百八十 此君二百五十 獅子丸三百点

山中梅應
珍重一点半 長二点 陰朱丸二点半 陽朱丸三点 花三点半 泥丸四点

甲良林石
裾十点 布衣廿 纓卅 笏四十 奴袴五十 烏帽子六十 冠七十 魚帯八十 遍昭百 業平百五十 康秀二百 小町三百 喜撰四百 黒主五百点

細井之水
屑十点 狩衣廿 鶏卅 太鼓五十 鶴八十 羯鼓百 琴百五十 琵琶二百 笙三百 笛四百 鳥冑五百 面八百点

山中翠柳
朱丸五点 柴戸十 松風卅 哥枕六十 石遊八十 和田原百 鄙百五十 湖上二百 六玉川三百 敷嶋四百 野馬臺五百 神代濱八百点

山本普求
花十点 賞十五 芝園廿 貫道器卅 顔回五十 臥龍七十 達窩八十 猛虎百 莘狐百五十 金翅二百 獅子三百 鳳四百 麟五百 千代古道八百 本分田地千点

淺田八百彦
寵十点 未見文卅 傾見月五十 百千返鳴六十五 門外音八十 中濱百 葛城大君百五十 大鵬鶲二百 衣通三百 衾被四百 浮橋五百 大元八百点

吉田壺丹
節化十点 筆下香卅 姑射山人五十 蜀錦七十 鹿笛八十五 支窪高洞百 仙菓百廿 楊補之百七十 瑞鳴二百 伯顔三百点

北川一方
團扇五点 響十 白馬廿 花陽市卅 松直蘇曲六十 江河百 太高生百卅 橋中百六十 万雷二百 南朝三百 鳥四百 五老峯五百 金花山七百点

長村畳秋
巣十点 東寺廿 泊瀬寺卅 吉野嵐山五十 花園八十 鈴鹿百 宇治撫物百五十 目津嵐川二百 四季辰山三百 納會利四百 扶桑日五百 蓬萊八百点

松原市楓	駒馬十点 香炉峰卅 紅葉橋五十 香代鳥八十 桃花水百 鷓鴣百五十 鸚鵡舌二百 鳳凰毛三百 頻伽鳥四百 岷江五百 不老門八百 大極千点
中井千徑	珍重五点 竹雀十 紅葉鳥十五 柳燕廿五 鶯四十 杜鵑六十 玉佩八十 芦雁百 松雀百卅 於呂能鏡百六十 桃林二百 秦臺二百五十 聖衙三百点
廣瀬鉄鐸	丸七点 匳十 鉛花廿 燕脂卅 厳器五十 佩香八十 横目扇百 常磐百卅 消綱母百五十 小野小町百八十 光明子二百 衣通姫三百点
中嶋五始	珍重五点 辰八 社日廿 油花卜卅 來禽花五十 長命縷七十 赤壁八十五 菊花宴百 冬至百廿 傀儡棚百七十 獻生子二百 大白星三百点
山本松江	丸九点 扇十 入境廿 福壽増卅 兔字久和五十 地福圓満七十 千也八十 賀也百 九字百卅 南杖百五十 元亨利貞百七十 一千歳二百 七字二百五十 麟鳳龜龍三百 曲水宴五百点
正木風牀	丸三点 帚五 由祀十 御生日廿 葵楓蔓卅 未日五十 放兔附物七十五 申日百 酉日百五十 赤馬二百 内蔵寮御幣三百 使軍五百点

三谷因石	石芝五点 瓊田草十 含秀廿 九畹卅 酌英五十 国香七十 香風畹百 知其芳百五十 函徳殿二百 甘泉宮三百点
僧角々	藻五点 浴兎十 江誉走十五 浮白鷗廿五 暮雪四十 晴嵐六十 晩鐘八十 落雁百 秋月百卅 夜雨百五十 琶湖百七十点
居初乾峯	韮十点 蟬羽卅 耳梨山五十 野飼駒七十 長柄橋八十五 花色衣百 隣雪百五十 廿日月二百 田長鳥三百 渉星四百 春告鳥五百 御幸車八百点
松本百花	鶯巣廿点 曲笠卅 蘇老泉五十 小聖童八十 逸少百 柳葉百五十 東陵瓜二百 仲由三百 子猷四百 鳳女五百 李衛八百 西湖千点
植野奇仙	雀舌九点 鷹爪十八 仙人掌卅 白花浮光五十 鳳團七十 龍團九十 方蕉百四十 瀛洲百六十 蓬萊山一百 三仙家三百 麒麟閣七百 蕭及第九百点
北村和汐	金花山十点 帥八木廿 摩姑手五十 千種里八十 競馬百 舟鷲百五十 遊水二百 村與三百 忘草四百 玄象五百 玉蔓七百 月宮八百点

橋本鱸船	菊十点 竹葉廿 化名草卅 淺香山五十 華清宮八十 曲水百 松樹百五十 廬橋二百 仙客三百 鳳凰四百 麒麟五百 龍門八百点
杉本春雄	舒雁十点 以剣投魚廿 黔驢之枝卅 燕巣于幕五十 腐草放[illegible]八十 假虎威百 生龜脱筒百五十 志在千里二百 蜀帝化三百 錦褪子四百 五德五百 兩部鼓吹八百 驪龍珠千点
片岡馬乳	可十点 姫萱廿五 雀隠五十 猩々血七十 羅九十五 蕁百廿 金玉錢百八十五 芝蘭二百五十 一捻紅三百 優曇華五百点
林　波光	長三点 珍重五 竹十 雲頭廿 丹桂卅五 一撥白雲晩五十 四絃一聲六十 龍首八十 雙鳳百 借谷百卅 崑崙百八十 遠道怨二百 如雷三百点
田河來川	一字七点 二字十 三字十五 五字廿五 左五字四十 左二字三字六十 龍八十五 青二字 朱三字百 朱二字 青三字百卅 朱一字 青三字百五十 朱三字 青齒百七十 青二字 朱五字三百点
佐野柳水	刀五点 書十 格物廿 致知卅 誠意五十 正心八十 脩身百 齊家百五十 治國二百 止至善三百 親民四百 明々德五百 三綱領八百 天下平千点

戸田文鳴	粧鏡 玉欄干 流酒客 恩澤風 顚雀 江南宮 歳寒盟 黄金臺 隱君子 王者香 右倍數依時不定
前川脱我	村笛十点 翠頭廿 絲竹卅 錦流五十 雁門八十 百尺樓百 飛泉二百 文風丕振三百 五雲五百 天介壽齡八百 連城玉千点
野村其梅	青丸十点 朱丸廿 平湖卅 蘇堤五十 斷橋八十 雷峯百 南屏百五十 麴院二百 花港觀魚三百 柳浪聞鶯四百 三潭印月五百 西峯插雲八百点
浪華部	
小野紹廉	梅六点 陵王十 納蘇利廿五 紫子四十 不秋草六十 司書鬼八十五 狐齊百 刀布百三十 傘華百五十点
井上布門	朱丸六点 那爾波津十 淺香山十五 芦田雀廿 早止能阿万卅五 安佐津久日五十 兎久波峯七十五 志保賀滿百 葉二百廿 母呂歌徒羅百五十点
吉田了雨	烏十点 樂只廿 山間卅 生計四十 江上六十 弗子八十 海老百 花楼百卅 春色無高百五十

仲上法策	丸五点 玉十 龍十五 青天廿五 秀峯四十 別天地在有六十 藏淵八十 文庫錦百 一雙青鳥百廿 金鍋百五十点
塘　潘山	粥杖六点 珊杖十四 鳩枝（マヽ）廿口 鵜坂杖廿三 西行杖五十 宗祇杖八十 俊成杖百 蟬丸杖百廿 小町杖百五十 遍昭杖二百点
鹿嶋白羽	著六点 月十 弓十五 矛廿 太刀三十 其桐四十五 南華六十 弗子八十 君子百 栢葉百三十 鳴玉百五十点
林　樊川	丸六点 水雲十 遊宇友風廿 白日依山卅五 麟次五十 翔業庭七十五 象百 報金百三十 青鞋百五十 玄楞精百八十点
浦川富天	珍半点 丸二 長三 一字七 二字十 三字十五 四字廿五 白璧四十 歳寒六十 龍八十五 斗牛百 金銀閣百三十 覺裳百五十点
竹野千鹿	

水足左橋	叙五点 月印水十二 北溟鯤廿 肆筵三十 白鷺五十 半窗月六十 花串園八十 吟風一樣松百 古往今來百三十 海草花百五十点
椎本矩州	丸三点 鳥十 白雨十五 紅葉廿 塞下曲卅 少年行四十 老婦嘆鏡六十 望帝魂八十五 三芳野百 芙蓉峰百廿 峩眉山百五十 無盡藏二百点
森　雪泉	丸三点 珍重五 一字十 二字廿 三字卅 金粟五十 潤地七十 龍八十五 玉笛百 百媚百廿 銀世界百五十 百花魁二百 玄裳三百点
淺見田在樹	一字七点 二字十 三字十五 無情廿五 機婦四十 管絃六十 老松八十五 飛梅百 宵間百五十 噂々二百 伶人二百五十 離家三四月三百点
豐淮蒲丈	丸三点 鎖七 無心十 環坐十五 雙日壁廿五 半牀霞四十 欸乃櫓聲低六十 麟八十五 彩雲百 崑崗百廿 秋風百五十 麟龍百八十五点
瀧澤烋藁	壽六点 簫十 平樓廿 逍遙遊三十 半潭水四十五 青海へ謡有六十 飛龍八十 春日百 暮寒百卅 金鳳臺百五十点

堀　舎椁	丸四点 玉七 松花十 雲中橋十五 枯野薄廿五 君子愛財四十 舌上有龍泉六十 龍八十五 千 古羽衣百 春風桃李百卅 日出乾坤百五十点
好三佳方	丸三点 一字七 二字十 三字十五 四字廿五 沙棠四十 鏘金六十 師子八十五 青牛百 白松 百卅 紫府百五十 郢國二百点
梅原青牛	幣六点 榊十 川社廿 三日之沖三十五 安樂 居花五十 芝ノ雛嚢七十五 初卯神樂百 衾鉾 百二十 葵蔓百五十点
小寺燕雀	卯花垣十点 萩下露十五 荻上風廿 遠鹿音 廿五 木葉時雨五十 山郭公七十五 雲暖百 更 科月百廿 吉野花百五十点
柳原社笛	丸三点 丁渡十 糸魚川廿 眞稲原三十五 万 木森五十 名越岡七十五 雄琴里百 正立百廿 降臨百五十点
櫟谷馬骨	長五点 扇十 楊花舞卅(マヽ) 百都廿(マヽ) 握眞玉印 四十 風月詩酒趣六十 酒國長春八十 揚德玉 清百 山華稱意紅百三十 明德百五十点

阿賀鳥窻	丸三点 一字七 二字十 芙蓉鏡十五 万世同 浩廿五 長安華四十 秋霜志六十 幽谷佳人 八十五 寶鶯百 胡姫年十五百卅 天保百五十点
木村芳韮	丸五点 一字十 二字廿 三字卅 四字四十 五字五十 對花六十五 問青天八十五 自由身 百 梨花春百二十 南山壽百五十点
山縣茶雷	丸五点 紫鳳十 石鼓十五 一碗廿五 二碗四十 三碗六十 四碗八十 五碗百 六碗百三十 七 碗 百五十点
錦　稲人	桃印符五点 乞巧針十 御髮上廿 岩戸關三十 時雨亭四十 加茂葵六十 田吉登乃月八十 山下水百 右近橋百廿 左近櫻百五十 印松 百八十点
木田桃渏	丸五点 洞笙十 紅葉賀十五 胡蝶廿 横笛 三十 河圖四十五 白雲六十 羽衣八十 泰平樂 百 地雷復百廿 地天泰百五十点
簗沼孚窕	丸五点 魯魚十 帝虎十五 十姉妹廿五 金龜 換酒處四十 小娘子六十 一龍一猪八十 麟百 漉酒百三十 黒花百五十点

原　佛菴	長三点　月六　其駒十　得選子十五　諸學廿　蘭花卅　壽考四十五　杜若六十　如意八十　鼎玉百　天賦百三十　來章百五十点
栗山宗卜	五羊五点　九十九十　宮詞十五　高山流水廿　邊詞卅　從軍行四十　白頭吟六十　千里江山八十　褰鹿百　洞庭湖百卅　看劍引盃長百五十　墨擬二百点
嶋野一菊	陰三点　陽十　華亭十五　入翠微廿　歌吹海卅　紅人桃花嫩四十　青皈柳葉新六十　玉臺觀八十五　雲骨百　淨琴百廿　春星百五十　騷香山二百点
河合舍鳳	式六点　興十　杯中十五　昆明廿五　不妨疑四十　長天六十　南山壽八十　華玉百　巫山百三十　秋山百五十　白雲二百点
田中雁臺	丸六点　下瀨十　鳥呼花間廿　三千尺卅五　永綏吉劭五十　鳶飛魚躍七十五　青玉百　造物百三十　一間人百五十　長烟一空皓月千里百八十点
千葉春耕	丸三点　易十　東雲十五　滿四澤廿　不如歸卅　欲氷酒四十　時飛則飛六十　毛群長八十五　金谷百　洞庭百廿　玉英百五十点

山河黎雲	丸五点　珍重十　南薰十五　雁聲廿　山水趣卅　秋塘寒玉四十　小春雷六十　嵩嶽松風八十五　混沌材百　碧天風吹百廿　蒼龍嘯月百五十点
中尾貫虹	丸三点　高皇十　玄黃十五　及苗裔廿　夢浮橋卅　御生所四十　泰山府君六十　白峯八十五　北闕百　玉盤百廿　銀臺百五十点
中村文水	丸三点　一字七　二字十　三字十五　四字廿五　花裏四十　神仙六十　北至京口八十　訪古人百　倚枕百廿　雁聲百五十点
中嶋共十	丸五点　一字十　二字廿　三字卅　四字四十　五字五十　照青苔上六十五　龍八十五　映江百　北流百廿　問童子百五十点
村井嘉辰	丸二点　長三　一字七　二字十　三字十五　五字廿五　月四十　花六十　龍八十五　雲幹百　仙家百卅　長生殿百五十点
寺町烏裙	圏三点　晨十　南山廿　白雲卅　春草生四十五　清風万里六十　廣陵秋八十　我思故人百　長安道百二十　九重天百五十点

長谷川龜文	長五点 丸十 風鳥十五 一片月廿 九馬卅 錦字四十 百蠻米六十 玄又玄八十五 南斗外百 白雲飛百廿 刀筆百五十点
岡本蘭古	丸十点 野錦十五 仙郎廿 齋七政卅 伊南於保世登利四十 乘操貫氷霜六十 生涯一片青山八十 草尺玄經百 春山一路百廿 牛窓梅竹百五十点
淺見御風	丸三点 千栗太七 六十四座十 天眞井十五 戸岩谷廿五 乘六龍四十 聖八大寶六十 浪花八十五 人舟百 作吉出現百三十 七重包百五十 紫庭二百点 榮箱三百点
樋口雲沙	丸七点 天明十 富松竹十五 河南河北廿五 上酒樓四十 魚行水濁六十 雨聲八十五 閑百 玉壺百五十 五馬二百点
長濱謝大	心三点 酌七 飯霞十五 一簾月廿五 朕々長飯四十 賴有西山色六十 占春八十五 松蘿百 絲竹百卅 傾盞如故百五十点
上田棋北	丸三点 都鳥七 三才成十 紅葉賀十五 蜃氣樓廿五 天下長者四十 請嬰繫南粤六十 鹿八十五 赤壁百 平安百三十 月人男百五十点

朝田徑烏	柳三点 節五 月毛七 野十 梅花十五 八重雲廿五 玉貫四十 山路醉眠六十 馬八十 遠巡百 雨龍百三十 谷有百五十点
光枝皎々	丸十点 白虎林廿 四象櫻卅 五運六氣車四十 五大倫五十 阿積山井六十 龍八十五 筑波麗龍百 富士神峯雲百五十点
山河茶瓜	丸三点 文十 東門十五 弄花廿 南山壽廿五 金水色四十 風飄蓬飛六十 聖人出八十五 恩千里百 觀古百廿 雲卿百五十点
□五樓	丸三点 雲七 柴立十 雲水環十五 一丘一叡(マヽ)廿五 一片氷心四十 秋霜志六十 洞獅八十五 綠水百 杖頭枕月百卅 一簾華雨百五十点
筒井如招	鐶六点 朔風十 山齊十五 浦柏廿五 日本學四十 江城如畫裏六十 賓客八十 捲簾山陰令百 万里豐旗雲百三十 白兎朱鉛官中百六十点
飯田陶古	島六点 針原十 東野十五 長柏廿五 波爾守四十 夏麻引海上六十 吾妻八十 青山五手船百 離々樂々浪百三十 白藏葛蕩早稻百六十点

橘　鳥調

丸三点　詩風雅七　籩豆十　圭瓚秬鬯十五　琴
瑟笙簧廿五　干戈戚揚四十　雜佩六十　啐八十五
殳矛百　管籥祝圉損篪百卅　袞衣繡裳百五十点

後附　京師點者門弟發句

故蘆花翁門人

寵さめし湯婆が後や竹婦人　蘆水
手まはしは里よりはやし山櫻　松仙
青柳や枝から枝へつなぐ糸　江州新庄　秋蛙
影さくや後の名の月遲ざくら　丹波鴨庄　衆石
ちりせぬは筆の染たる紅葉哉　同福智山　李蹊
雪にさへうづまぬ谷なさくらかな　同梶原　園石
吉野紙茶器に宜なり朧月　大津　嘉石
海は鈎陸は最中さくらかな　豐中津　知友
卯花や紺におかしき白あかり　遠州植松　冷石

故瓦璞堂門人

たなばたの織物見たし切鑑　蟬秀

故鄙月泉門人

義仲寺槐翁の墓に詣て

涼しさを世にほごこすや風の洞　盛澄

故瀟香菴門人

蓮の實や泥より出て泥の中　林鵠
時守は夢の數さふ月見かな　世征
鶯のなく日は低し斧の音　白翔

故好々舍門人

本願寺にて

各自ゝ曾風義僊來

ほさゝぎすなけ一ぺんの四句の文　歌童
佛法さ萱屋の雨さ郭公　一瓢
ちからなき秋のゆくゑや散すゝき　虎童
ほんのりさ比叡からあかし杜宇　藻鹽

而咲堂門人

傾城はごふ買物や秋の月　沖成
ふられては梅に香もなし大夫買　歸厚

不識亭門人

梅が香や口ほそ鳥けふも啼　東籬

富鈴房門人

星合のぬけ道はなし空に河　仙滌
月さいふつにもの得たり夜の道　志樂
片足は折ても名のれきり〳〵す　子園
おごろくは犬ばかりなり柳太刀　片路
人心たらぬればひや糸車　寬留
鶯い戲る池に水あり天の河　顧山
につ雪や柳にむすぶ若白髮　長流
待宵や雲の波間のかいつぶり　其蝶
織女の返事待間た野伺かな　鳥曉

五月雨のさやみな貴る蛙かな　嘯山
大空のひさつになりぬ花の雲　鶴里
梟の何かせぐらんけふの月　桃苔
星を射て鉾にすがるや杜鵑　稻太
名月や稻の穗をよむ法師原　羅織
大さしや殿のさまりは東山　富隆
踏わくる山は幾重ぞ雲の峯　个之
明がたの氷室だよりや春の音　可候
名月やいよ〱くらき藪の陰　故卿
初午や乳母がさいたる鍬づくり　婦 松睡
涼風を宿へたもたん河合道　楚雀
草枯やまだ船頭のひさへもの　魯州
人しらぬ初音もあらん北野領　一樂
こよひしも外の雲なし銀漢　朧舟
一させのつかれやはらす菊節供　可慮
鴨の立かくれけり雁來紅　富染
人心雲をわくるやさくら狩　川曉
雨雲のひつたて行やことし竹　夏夕
漁火さわかれて啼や小夜衞　淡水
初雪や日枝も老行綿帽子　連玉
秋たつや夜を賣ものゝ好嫌　武然
雪見とて醉をすゝむる友もがな　出羽 東々
峯〱やしら齒もまじり更衣　同 汶水

さもし火は木間にもあり紅葉時　同 梅魚
梅さくやにほひの屆く京だより　同 掬雨
名月や塵もしづかに有の儘　備後三原 生山
鹿戀し紅葉はいまだ染ねども　江州大溝 岸花
風なくて德のかほりや宮ばしら　同 高島 梅菴

閏六月晦の句に

山雀のふたつぬけたる茅輪哉　因州 瑩路
木母寺を狂ひ出したる時雨かな　高松 山挑
初雁やきのふにかはる肌心　笠岡 一鷺
花の戸は雪にもさはん月今宵　東存 雨柳
替駕籠の膝に羽たゝく螽かな　九亀 夕静
行雲や朽木の花とさく螢　廣島 富流
はつ雪や埃も見えず藥屋勝　仙臺 莎州
あささきに時雨の音や荷ひ稻　同 富連
牡丹見や皃に照ゆく夕日影　秋田 風之
七種を先備ふべし二見形　同 淵而
象浮のさくらは今か瀧の音　同 宇香
織女に手向て見ばや糸柳　豊後竹田 巴雲
行燈を鵜飼が妻や山かづら　同 梅舟
色かへぬ松をなを代〱の根ざし哉　江村 麥露
奥山も春は來にけり谷の音　同 墨水
白妙や明暮さなく花二十日　同 富人

寸松堂門人

實さは田から也けりほんだはら　白宜

谷河のしがらみさなる落葉かな　加竹

名月のくもりはいかに鏡さぎ　駿河玉川 芳石

花の香や埴生に箏のはした糸　江州小谷 半化

雪莎齋門人

木がらしや人なき宮の鈴の音　子英

在す事柳にしろし杜の風　蟻丸

六義もさ梅が香にあり哥枕　闌水

產聲の唯我ぞ士田の田長鳥　淀 里屯

雪持てしばるは竹のちから哉　石甫

ぬしはたぞ着捨の鎧牡丹畠　其石

秋來ぬさ目にこそ見えね茶の花香　花鈴

ひさへづゝ竹も肩ぬぐ暑さ哉　可靜

誰袖や梅に柳に大和風俗　水計

手紙にはそのたさもなし芥子の花　梅風

柳見む風に辭讓の禮儀あり　松偲

のらといはゞのらさ答へん櫻狩　義金

影ひたせかつらの花の下河原　芦江

骨くばり四方に依怙なし月の傘　百蝶

御惠吾國津日や拈頭草　如竹

盧生いかに覺てもさの夢見草　其秋

蔵はまだ雪のしめりや初櫻　百非

又種にもされば蔘も錦哉　萬流

青柳や代〲の呼吸の置所　可明

十合齋門人

梅にきる指なし花の憂つさめ　百一

義經に飛かつ舟の蛙かな　在乙

重陽淵明を題して

是もまた人の子なりと菊使　千別

かづらきや日も寢て戻る雲の峯　左右在

何國さも秋はしらじな花使　呉彦

割て見よ根に有花も暮の鐘　賀鳥

西角菴門人

長橋や馬乘もどす雪の暮　坂本 志津

蟬の音や筧のもろゝ捨ふくべ　買友

軒つたふ雨の畫たる柳哉　樂商

芳明の尊きに與じ、吞吐に我をわすれ、うつそりと空向て

拜む事いらで見るなりけふの月　江州大溝 夕浦

千歲亭門人

あまへたる聲こそなけれ子万歲　凉花

霞霧其外海やしぐれ空　玉芝

燈よりしろ人もなし山ざくら　貞右

あだし野の雪にあとあり鉢扣　可行

松虫よ汝も常磐に聞まほし　守大

鐘に咲鐘に散けり露の花　巨江
偽のある世うれしや紅葉狩　英丸
あらひ髪雨夜の曙の柳哉　如鴛
霜葉をはらひあぐむや庭たゝき　塵生
澁もせで水草にさまる螢哉　百尺
雪ならばあす見む夜はの初時雨　兎角
梅を發句春のあげ句や藤の花　曉雪
一綱手青田の海の出嶋かな　左右
谷河の湯にながれたるさくら哉　閑我
蚊の聲もおもしろう聞蚊帳かな　馬逸
こゝかしこ牛はくふても花野哉　四青
夢にさへ野守は聞や雉の聲　馬十
茶の花や霜はをけどもをのが色　書林新井 丈士
彫あげてしるやさくら木の花心　丹波鴨庄 石鎧
京からは桂へわたるちどりかな　白子 魚光
（原本闕句）　國友 友之
鏡見て我あつさしろ肥滿哉　扇計

上野に一中侍る

たゝみかけてなけ郭公屏風坂　東府 以文
折たあさ見せぬ若葉のきほひかな　長濱 蘿婦
しづけさや菊に名のなき片山家　同 南飛
數入やあるいて見せる京せきた　坂本 淨寸
月花に一筋道やつくば山　江州松村 只兮
梟も月見がほなり枝の上　同中河内 鹿帆
溜息の風鈴に届く暑さ哉　丹波新郷 佰石
雲に入鳥の出所や花ばたけ　江米原 犬麿
にぎやかさ京にやなかぬ郭公　同樋口 玉馬
夕立やけふも人參五匣ほど　津輕 杏悦
人兒はうろみて明る月見かな　江州中郷 澤鷲
拍子にもあやある京の礎哉　同顔戸 醉月

自是遲來之句任到來不拘座次

故濟香菴門人

しらけたる月軒にありほさゝぎす　可笑
鳴て行あさに名はあり郭公　鵲義
降さうでふらぬ雨まつ蛙かな　逸風
日の笑にこそぐりあふや雪の竹　青蘽
ゆふがほや澁谷道も雪踏音　梅鼓

香稻菴門人

李夫人やたちまち世界今朝の雪　秋娥

故園扇堂門人

衣を通す花のかほよや綟障子　八鹿

故石臺翁門人

なめて見んけふを盛の菊の土　蝶之

而咲堂門人

はつ雪や京をつゝんで景さ成　一狐

十合齋門人

たまさかにあふ夜はこぼれ水土圭　百婁

石洲堂門人

月花い先うちつきに雑煮かな　桃水

後序 印

冀北ハ者馬ノ之所レ群スル也。伯樂臨ンデレ此ニ。一々指-點ノ以定ム品-題ヲ。而-後天-下ノ人。皆知ルト下其ノ騏-驥-騨-駵-騮-駱黃-皇-綠-耳白-鼻ノ之骨-相技-能各々有ルコトヲ上レ異ナルコト也云。丈-石-翁ノ輯-錄スルヤ此-編ヲ也。共レ類セル之ニ哉。夫レ京-師ハ固-滑-稽者-流ノ冀-北也。蓋シ彼-徒ノ之於ケルヤ斯-技ニ也。甲ガ所ハレ得ル乙ガ所レ失スル也。丙ガ所ハレ長ズル丁ガ所レ短キ也。而レドモ亦各々有リ所レ擅ニスル以テ旗-鼓タルトキハ于一-方ニ。則將ハン何レヲ取リ何レヲ舍ンヤ哉。猶ホ下騏-驥-騨-騮-駱-黃-皇-綠-耳白-鼻ノ之骨-相技-能各々有ルガ上レ異ナルコト也。或ヒト難ジテ曰。彼レ則品-題此レハ則收-錄而已。豈ニ敢テ與レ之ト比センヤ哉。予之言無ク-乃チ所ロレ老スル乎。余-曰ヤ不レ然ラ。收-錄ハ卽チ品-題也。蓋シ翁ハ伯-樂也。一-ビ顧レバ則價イ從テ倍ス。今ヤ也。所ハレ錄ニ此-編ニ皆-異騏ニ驥-騨ニ駵ナル於斯ノ技ニ者也。若シ夫レ凡-馬ハ措イテ而弗レ取ル焉。然レバ則チ非ニヤ收-錄ハ卽チ品-題ニ乎。故ニ云フ翁ノ之有ニヤ此ノ舉ヲ也其レ類セル之ニ也者ト。非邪カ。難ンズル者稱シテレ善シト去ル。遂ニ以テ爲ス後序ト。

伏水九々鱗子撰　印　印

（諸國 蕉門）俳諧家譜後篇　全二冊 近日出來

寶曆元年神樂月吉日

書林

京　二條通富小路西へ入町　野田藤八

京　二條通寺町西へ入町　金屋三良兵衛

江戸通本町三町目　西村源六

大坂北久太郎町心齋橋東へ入町　梁瀨傳兵衛

誹諧家譜拾遺集

十口編

俳諧拾遺譜自序

大海不厭於細流故能成其深矣夫滑稽不
厭於貴賤故能成其廣而稱万世不易工
案無窮機以茲俳林繁茂盛常盤風景也遊
此境界人幾許剩抽其中而爲詞宗者以月
增以年益猶下瓶江入楚浮船筏上而溯洄
其源流求濫觴文祿頃吾貞德翁忝蒙
九條殿下玖山尊公之命爲俳諧一道之宗匠
是其權輿也於戲宏哉翁功餘光輝海內且
敞御傘於天下在其下詢者無一人出
駢外者也盡末葉俳諧者流及存亡其計之
百餘歲遠近其行輩既向五百人尚非其
家人以不所及數量至發点業者俱無
不屬師於華洛今時卒業徒凡滿六十有
餘家委欲知其傳系勞心纔現存人如斯
況再於經百歲乎其源區々豈分明哉
因之余發溫古之意將辨同業之系譜故受師
說或聞諸書漸記一隅止焉背享保壬子
夏在東府神田散人者織綾錦穠其國而
后寬延辛未夏於吾平安宗順者盡疲勞綿
家譜詳在京條理且坂陽分文理當其時
爲設博覽如綾錦爲之祖述也視此兩
書頗超吾不足三隅矣然今亦所載家譜
舊友零落半皈泉或及集後有更加詞宗之
數人遺漏最多以是思彼雖家譜委曲經
星霜而今時如闕一隅故吾以一隅有
奇補之識物故學後生以號拾遺譜亦此
後在續業者雖如涌書記累葉顯然而道
呱直明一日矣予後來望時如(加)再補是幸
耳明和庚寅季春念鳥阜祖五世晚學洛下意心齋十口
柳羊子兌庵識書

（印）（印）

凡例

謂洛下千載堂主編宗譜成誹諧宗傳之要而行予
世既經二十有餘霜及集後有爲句故人及集後有
加点者人故今更訂其沒則拾其遺漏耳
擧誹名無詳細者譜註於宗譜不贅于茲是
乃欲先輩之原書不存往々也然近世知沒則
辨焉
系行粗有處顛頑全不拘巧拙偏數牒數所
以也
元祿年中在京之点者在滿數而不詳傳系者故於
家譜除之余未審因擧其數名以俟後士之勘考
近世好事譜人墓錯古人之發句短冊或遂今時之
師家而錯句之發毫以賞之人最多爲某雖傳
義不詳有加之者欲使知古人之名多耳
家譜以後知尚点列人惟有存亡於前系附命期
如現存之人更尚旁註然知現存之部隨聞
傳全以載面之見記之各於某係下附住處者
欲今曉其現存且爲便用之助而已

今時現存之点者悉列句加卷末蓋於古人之句出家
譜及諸書故略之
今時之点者於年臈順次從吟行之次第可視最於句
前辨其旨趣焉
東武之点者欲加訂正隔行程不忍認故闕之
適有所述假綾錦之識耳尚欲將追考矣
浪華之点者嘗雖附家譜是亦露往霜來代謝難分存
亡故欲訂之有故不加諸尚須嗣出矣
鼻祖出和歌連哥爲俳諧之基本故始雖至
連哥家傳系備參考成書後有訝繁者由省于茲
充嗣出之編云爾

鼻祖家系

○入江九郎盛重（播州高槻城主其先駿州入江郡）　九郎兵衛政重（長男）

—永種

改氏稱松永母者妙忍冷泉爲純女永種幼而聰穎七歲時東福寺爲喝食漸二句而法華經全部暗誦因勝其智惠世人稱之文珠喝食其餘多能而最善臨池之流屬宗祇學連歌秀逸鳴于世一日會玖山公伺問和歌之讀方公曰先莽連歌而乃酒掃茶塵須跡必澄水也聞之種甚堪感嘗欲生貞德頃得夢想之句今亦公所示謂如合符節歎息其瑞夢句曰　おのこ子の塵かき流すあくた川

—○○誹諧元祖　貞德翁

松永氏天質穎悟季世之優曇華絕倫之神童鳳兒鳳雛也十歲而讀六經能書而爲連歌之執筆十一歲而盡讀歌書寄心於歌年十一爲慶長初（十口謂恐ラクハ爲文祿乎其故ハ慶長ハ公ハ文祿三年ニ讀去也可考）卯月下旬於京極殿有連歌之會奉始九條殿下玖山公近衛龍山公列玄旨宗鑑宗祇永種紹巴貞德及諸卿等其席滿座（此時龍山公有戯號淨波多乃興試）於其席可爲誹諧之道興隆者

當貞德其器忝兩公命玄旨紹巴而許覓貞德誹諧一派之宗匠也故世人稱花下尊信貞德翁者猶稻麻竹葦而后翁之德化日日厚月月盛也於和歌之門人在其間人不少誹門一道之元祖於吾朝誰可遺背此翁乎噫命哉時哉終臥病於花咲亭寂承應二年癸巳十一月十五日春秋八十三諡號明心居士曾所著書行于世者有若干卷蓋謂牡丹花老人之作有九六新註書流布于世然僞書而非翁之撰故翁更加再註訂舛謬此書山汚本而傳祕道統家且有堀川百首鈔（翁ノ眞蹟ノ之書ヘ十口傳ヲ祕セリ焉）又有連誹切紙等鼻祖之行狀稱讚之辨至家書悉載家譜雖然實歎倘有僅幾回稱之不能盡筆頭矣

此以下於門人之部際旁註欲委視者須家譜與此書互參考之蓋於鼻祖之門下在稱京七仙江戶五哲人上自重至于春鹿稱之京誹七仙德元至卜狼稱之江戶誹五哲尤雖爲江戶住以有五哲之稱加之耳

―親重　後改ム立圃ト
―重頼　後ニ改ム維舟ト
―西武
―令德　初ハ良德後ニ改レ字ヲ
―正章　後ニ改ム貞室ト
―季吟
―梅盛

―安靜
―正由　後ニ改ム松堅ト
―貞恕　初名ハ貞好後ニ改ム衆ノ字ニ
―德元　齋藤氏稱ス帆亭ト寛永頃ノ人ナリ著ス初學抄ヲ住ス江戸馬喰町二町目ニ後於テ若州ニ卒ス貞門稱スル五哲ト其ノ隨一也
―未得　石田氏稱ス乾堂ト著ス五吟集ヲ住ス江戸神田鍋町ニ寛文九己酉年七月十八日没ス八十餘　五哲之二

―玄札　高嶋氏醫ニシテ而善ス連誹ヲ寛永頃ノ人ナリ住ス江戸本町四町目ニ著ス十種千句ヲ五哲ノ之三
―加友　荒木氏稱ス蓉庵ト醫ニシテ而善ス連誹ヲ寛文頃ノ人ナリ住ス江戸雨替町ニ著ス萬空言ヲ最モ同時ニ同門ノ之中ニ在リ同名謂ハ春陽軒加友ト者ハ勢州松坂ノ人ナリ而非ズ點者ニ是レ同名別人也荒木氏ハ五哲ノ之四
―未琢　石田氏稱ス良堂ト未得之長男善ス狂歌ヲ

〇卜養　五哲之五牡丹花老人ノ之孫ナリ傳ハ見タリ別以テ五哲之内ナルヲ賛ス之ヲ

―是誰
―貫風
―良保
―重以
―以重　遊谷氏

―友仙
―胤及
―正在
―望一

―美津女
―惟中
―正友　延寶頃ノ人住ス江戸芝ノ源助橋ニ誹林誹諧流布セル時合ス田代松意ト與ニ宗因ヲ荷擔ス
―園女

―正式
―日能
―道節
―貞宜
―宗畔
―元知
―可頼
―友閑　洛要法寺ノ上人

―昌三　松永氏貞德ノ之長子ナリ非ズ誹諧師ニ儒家博識也書ニ一切經八千紙ニ尤ナリ採相承ノ而洛陽堀川講習堂今尚顯然タリ矣
―道三　林氏稱ス羅山ト東武ノ爲リ學校ノ儒宗ニシテ而叙セラル法印ニ豪傑博覽ナリ事難レ盡シ短毫ニ常ニ嗜ム誹諧ヲ翁ノ爲リ門人ニ羅山一世之書作有リ都合一百四十七部ニ題号見タリ羅山文集ノ附祿(錄)ニ矣

- 盤齋　加藤氏非誹諧点者、随翁究歌道鳴于世、所著書有新古今増鈔・徒然艸鈔・伊勢物語抄・同初冠三部鈔増註等
- 以悦　和田氏於哥道高鳴、稱一華堂
- 長好　廣澤氏善和歌
- 三之　木瀬氏専長歌宴
- 昌易　松永氏昌三之長男、儒道俊才、號春秋館、書誹諧崑山集之序
- 永三　松永氏昌三之季子、繼儒道、號懷德堂
- 春齋　林氏羅山之長子、學校二世、書本朝通鑑、其餘所著書尤多
- 三竹　野間氏東武典醫、所著儒醫書刊行最多
- 順菴　木下氏
- 隨有　瀧川氏
- 省菴　安藤氏
  - 由的　宇都宮氏述作書往々鬻書肆者多

右自昌三至由的、數人不誹諧者流皆共爲翁之門而秀和歌、或聞儒學所知于世、不堪漏也、觀者勿訝繁矣

○鼻祖之裔流七子之門葉、倶如出家譜、不贅于茲、雖他鄕之住人、雅聲高騷不堪省、故聊補之、委欲知古義可據前書、可考、如今時此編於現存之部矣

○三千風　不載家譜、然名聲有聞世、無心漏加之

大淀氏、名ハ部字ハ友翰、勢州射和邑之産、稱大箭數、亦號寓言堂或無不非軒、十五歳而傾誹道、通神根儒枝釋實老葉之言、善文筆、然於和歌誹諧一生不入師園、不登學山、而生質穎敏頓悟之人也、三十有一而爲浮居、號呑空法師、起日本舊地勝景徑（經）徊之志、先趣于仙臺、卜居徑十五年、爲延寶之頃一日之内獨吟吐三千句、片時書數幅紙牋、故以爲名、後大和癸亥之春發足、於仙臺至元祿二己巳之夏首尾七年、而成就行脚、皈于射和、後又赴相州、止茲再建圓位之舊跡鳴立澤、自稱東往居士、蓋行脚之首途者四月四日也、以此日可定命期旨、嘗遺言矣、所著書有松嶋眺望集・田鳥集・行脚集等

辭世　けふそはや見ぬ世の旅の衣更

一加之　仙臺ノ住人ナリ號ハ和風軒ト三千風附與セリ之レニ文臺ヲ矣

一助叟　洛陽ノ人ナリ號ニ椿木亭ト見ユ家譜ノ叟ハ出セリ常矩ガ之門人部ニ然ニ考フルニ三千風之書ヲ爲レ風ガ門人ニ明カ矣故ニ出テ于茲ニ按ルニ矩沒シ而後屬セル風ニ乎カ

一松軒瀾外　李樹堂松遷　林也
矢野東河　有明軒良詮　則風
幽賞軒立植　春花堂松笛　夏夕
女鶴山人芝翠　竹葉軒風子　谷崎谷遊
菅原琢石　吐雲閣天竜　鵜殿心咲
惠風軒立吟　董種菴淳竹　橋祥軒薄古
撤谷松月　三軒陽川　秋香軒丁常
河副宗量　二竹軒生西　市村殘石
八木如水　吟燈子雲水

右元祿年中ノ雛ト爲ニ在京之点者一（傳系未レ考）

○雛冠井令德

一品　芳賀氏稱ス（莫）窗堂ト號ス昆山翁ト元ト信德門人ニシテ而在リ京師ニ後移シ居ヲ於東武ニ住ス兩替町ニ嘗テ令德附ニ屬ス昆山之印ノ一品在世ニハ用レ之沒後失ニ此印ヲ焉所レ著書有ニ万水入海以留累保　丁卯集一蘆軍山八宗懸圖等ニ寶永四丁亥年四月沒壽六十有餘

一友三　洛陽ノ人（誹）
　奧西氏沒年不祥

一如貞　大坂ノ住
　井口氏沒年不祥

○桃青

一素堂　山口氏稱ス今日菴ト一名信章又號ス來雪ト住ス東府ニ享保二丁酉年八月十五日沒齡七十五

一嵐雪　服部氏稱ス雪中菴ト住ス東武濱町ニ承應三甲午年生ス於湯嶋ニ稚名云フ久米助ト天神宮之廣前ニ有リ銅鳥居ニ銘ス幼名ヲ焉所レ著書有ニ其袋若水等ニ寶永四丁亥年十月十三日沒齡五十四

○其角

一貞佐　桑岡氏稱ス桑々畔ト初曰ニ平沙ト住ス江戸木材木町ニ沒年不レ詳

○貞木

一重友　洛ノ人沒年不レ祥

○其角

―淡々
寶暦十一辛巳年十一月二日於浪花没壽八十八葬於難波瑞龍禪寺諡高源朔水居士
辭世　朝霜や杖で畵たるふじの山

―雛人
寶暦二壬申歳七月廿九日没齢五十四

―風狀
明和元甲申歳八月廿七日没齢五十二
辭世　起上りゆかむつ道の露清し

―荷杖
北川氏明和六年己丑十一月十七日没壽七十
辭世　影裏の霜も消らん霜月も

―夕靜
岸氏歸故里讃ノ西府

―紙隔
板羽氏明和四丁亥年九月廿三日没五十三
辭世　草に來て艸にかへるや露の玉

○延清

―和吟
別所氏或人曰常英ガ門入ナリト寶暦八戊寅年正月三日没壽七十三　辭世　癖になつて西おがみけり初日

―之水
細井氏寶暦十一辛巳年六月二日没行年七十三
辭世　隨縁の涙たちやみぬ夏の霜

―之水
細井氏之水ノ息明和六己丑年九月九日没四十四末期門人等請句書圓形投筆死ストエフ

○暢好

―虛舟
黑瀬氏号不識亭虛舟ノ字類尊貴之諡號故憚後改去舟明和六巳丑年六月十六日没壽八十　辭世　不來不去佛祖戲論末後一句日日日新
底ぬけやかへらぬ旅の頭陀袋

―蘆管
安達氏初日牛洞号不識亭一時離寓舍謂行脚退京師不聞其ノ所止焉

○巴人

―宋屋
或曰爲原松ガ之門人明和三丙戌年三月十一日没齢七十九　辭世　西へちる彼岸ざくらや道案内

―壺角
寶暦中壯點業或謂給居停主人

―不堅
金子氏止點者專行醫療

―吾桂
松井氏後改千浦春那号富竹房明和六己丑年八月廿七日没五十三　辭世　消て行野も

うら枯の佛かな

○貞恕

貞佐

家譜に脱す辭世之句を故に擧ぐ于茲に

跡は水さしの瀨を行衞哉

鈍永

菅田氏稱す九如館と非ず点者に發して與歌を鳴る于世に嘗て屬す貞佐之門に學ぶ誹諧を然れども浮吟悉く不誹躰ならず一日師謂つて永に曰く汝が句意全く有所別なる學びを狂常を堪んと其の道に永感じ師命に謝して而乃ち謁し自然軒に專ら止む志を於謠曲に追日令む佳詠以て感ぜしむ衆情を而后開きて雅席を北風流日々に盛んに其の徒月々に加はる焉蓋し當り上大人丘乙巳の時に因んで十口と但に勵み唔咿の或は雖も學ぶと謠曲を不異ならせ師の而互に善し然れども口は鈍才にして而一つも不發永は多才にして而沒んで觀世臨池之流を傳へ及ぶ他に且つ有り剞劂之巧一歲應じて官家之命に彫り額を蒙りて賞を賜はる名を讃岐と後換へて筆流を專ら雅なり也明和四丁亥年八月九日沒行年四十五　辭世

死さむないさ書か辭世のおり言葉うそつき仕舞の今日只今

○信安

隆志

明和元甲申歲九月六日沒齡七十辭世之詞書云

鳥將死鳴聲悲人將死言善して誹諧に雖一体有れども常不用之一生の筐に云殘す誰か命期の月日を忘れ哉　身は

ほさけわれさいふ日は暮にけり

豐秋

寶曆六丙子年十一月廿九日沒五十七

忝雄

鹿雄

齊藤氏明和戊子夏居す淡路國に

○知石

丈石

蘆中

林石

寶曆二壬申年四月廿六日沒

齡六十三

因石

明和二乙酉年三月廿八日沒行年六十七　辭世

名もかへず花の淨土へ宿はいり

梨風

奥村氏稱す芸暉堂と寶曆十三癸未十月六日沒五十餘

一すじに嬉しき霜の臺かな

－鱸船　寶曆九己卯年二月十三日沒行年五十一

－柳水　寶曆八戊寅年五月十五日沒行年六十七

－此道　八木氏明和二乙酉年三月廿八日沒亨(享)年五十八

○市貫

－市楓　沒年不詳

－蝶之　人見氏号ス茅艸亭ト明和五戊子年八月廿五日沒
行年五十一　辭世　極樂の道を西へとわたり鳥

○去音

－丈鳴　戸田氏　辭世　言の葉や動ぬ山も秋の色
明和三丙戌年九月七日沒齡六十一

○巴人

－几圭　高井氏後改ム几圭菴宋是ト寶曆十二壬午年十二
月廿三日沒行年七十四

○竿秋

－來川　改ニ移竹ト寶曆十庚辰九月十三日沒
辭世　たん／＼の色も侍るぞ種ふくべ

－春堂　萩原氏
去テ京師ヲ趣ニ東武ニ

○仙徑

－徑童　號ニ一睡菴ト修驗道ニシテ而稱ス和合院ト寶曆初頃壯
歲而沒　辭世　死る日は尙面白しかんこどり

○攀高

－梅應　山中氏寶曆二壬申年十二月沒

○仙鶴

－奇仙　寶曆末頃沒

○知木

－翠柳　山中氏稱ス花木翁ト明和元乙酉年十月十二日沒
行年七十五

○練石

－鞭丸　寶曆十三癸未年十一月廿四日沒行年五十五

－臣石　木村氏號ニ桂花亭ト明和元甲申年十月十三日沒
享年五十二　辭世　さだめなし時雨の道のむ
かひ傘

○乾峯

乾峰　居初氏號貞六堂貞五堂之姪明和七庚寅年四月廿七日沒行年四十七

○○明和庚寅在京現存点者

於是不論前後如列行順次於何下可觀

○福田鞭石

練石　福田氏稱而咲翁薙髮號支兒往昔其諺貞佐發起而屢屯同業之人每季四會合之節會而后都下之爲点者無閑雅宴之号之漸此會席往々相承然中頃有故數罷退之或物故既欲爲間隔及其時練石嗟舊例之爲廢勞同士約二節而不屏會合故近日在陪加人近世以三節於壬生守樸亭行至今連續年盛也最從古稱四節會世俗謂之宗匠會奕們辨義家譜詳故於是略住居松原通室町西入町

楚杏　矢野氏号遊月菴寓舍上立賣小河半町西南側

○松木淡々

竿秋　松木氏号香稻庵都下雖以点業打成一片十之二三大率有家職且加点業耳秋点格一片而不設餘業爾乃如本納句選辭不諾然每有雅宴來客逼迫其庵奕們辨義家譜詳故於是略寓舍富小路通四條下町

修古　宮木氏號亦肯宮住居　四條坊門通小河東入町

几山　横田氏住居　四條通御幸町西入町

仙徑　中井氏号春里庵住居　一條通千本西六軒町

來之　早川氏号春鷗舍寓舍　小河通今出川上町

○鈴鹿知石

丈石　早川氏稱千載堂名宗順連年稱花宴月宴而每歲兩時有定日於金玉山內閑岡彌亭催雅會徒弟至非衆著禮服正席不混座次

專闘紋之前意焉蓋往々登千載堂之門人尤多故欲石下使中其徒弟不上展於雅筵之法則所以乎其會合以體實陪非衆又不少矣至近世所著書有名目鈔思出草紙後霜歎誹諧集等備辨義家譜詳故於是略
寓舍室町通綾小路下町

―共梅　野村氏号伴松菴能達執筆故師家春秋之雅席無闕斯人　寓舍高倉四條上町

―葵足　澁谷氏頃日專發行監工無間日因之嘗負誹事焉　寓舍高倉通二條下町

―車川　村田氏号輻湊亭　住居五條櫛通遍仁寺町西入町

―麥里　永田氏号四種園僑屬九如館善狂哥頃剏加業屬書　寓舍烏丸通錦小路下町

―五株　八木氏屢舊業而慕誹道屬千載堂爲点者　寓舍河東新道上柳町

○四時堂其諺

―普求　山木氏號雲夢翁蓋有入知木門故於宗譜自知木引系而初謁其諺授家書因之從其舊恩自稱四時堂之門派誹事專修而不闕餘業隨門之徒且盛也所著書有種袋備辨義家譜詳故於是略
寓舍東洞院通五條下町

―雪堂　宮原氏号貞松軒能達執筆故於四節會究掌其役　寓舍小川通御池下町

―來々　河合氏稱五湖庵初映島洞午湖之門弟而曰湖貫午湖非点者家職婦科而稱[illegible]庭仲條醫名鳴予世午湖沒後改今名屢普求爲点者家書有志賀之余花　寓舍祇園新地末吉町

―賦泉　石田氏　寓舍七條南魚店堀川西入町

―友水　宮原氏号虚船堂嘱普求爲点者然非徒弟其前爲何派不詳藉虚鈴以爲業　寓舍佛光寺通柳馬場西入町

―梅慶　關口氏号鵬翔堂　寓舍富小路通二條下町

―應隨　松本氏号悠月菴　寓舍鍛冶屋町松原下町

―可靜　戸田氏　寓舍右同町

○中川貞佐

朝田氏稱後扇翁ト善ス及選句ノ撰ニ其ノ句意ヲ以テ先ノ褒ニ尤セ点格二代連續ノ而風流家ナリ也倘辨其家譜ヲ詳ナリ故ニ於是ニ略ス　住居　油小路御池下町

―八百彦

―左舟　川村氏初メ曰ノ紫燕ト所レ著書有ニ反古文庫一　寓舍　油小路通二條下町

―令五　吉田氏号ス茶良亭ト　寓舍　知恩院新門前中橋

○望月宋屋

―丁派　廣瀨氏初メ日ニ鉄鐸一ト一時去テ皇都ヲ不レ聞レ所ニ其ノ往ク故ニ不レ知ニ雅名ヲ人多シ後再ニ京師ニ改ニ今ノ名ニ蓋シ寶暦年中大佛門前ノ令ニ代テ松樹ノ爲ニ民家ノ傳聞ヲ謂ヘリ斯人其ノ最初爲リト發起主ト也　寓舍　大佛ニ丁門前北筋東入新建

―宗專　山本氏初メ日ノ松江ト蘿堤ノ改メ今ノ名ニ稱ヘ松江房ト　居住　二條通油小路西入町

―鈴賀　池田氏号ス九河翁ト改ニ白嶺ト　寓舍　三條坊門通大宮西入町

―嘯山　三宅氏号ス葎亭ト所レ著書有リ古選一　住居　上御靈南門前馬場町

―武然　望月氏号ス蓮日庵ト有リ入木之譽一自ラ稱ス方壺山人ト且ノ善ニ篆鐫一屋沒後爲ル之ガ鬮廊ト焉蓋ノ及レ編ニ此書ノ或日客來日嘗テ宋屋餘話ニ有レ言ヘハ吾ガ門下嘯山武然學士ニシテ而博シ佐ガ門下十日乃チ比類セリト云云十日聞テ之ヲ太ダ赤面シテ曰　屋何爲ソ謂ヤ予ノ哉如キハ兩生ノ可レ然アル其ノ奈ソ　山閣ニ古選ノ頗ル有リ幼茂卿ノ之遺風一然ガ於ケル翰墨一粗有テ二士ノ之風味一最モ其ニ爲ニ博識一可シ謂ツ學士ナリト也非ス以テ媚ルニ於兩生ニ予レハ又知レ足下ニ謂ノテ積勞ノ之薄識ナリト也與レ客ト絶倒ス矣　寓舍　御幸町通丸田町下町

―買友　小谷氏号ス鈴山堂ト　住居　小川通武者小路上町

―文誰　岡田氏　寓舍　寺町通二條上町

―馬南　司氏号ス月下菴ト　寓舍　釜座通下立賣上町

○寺井西角

―行雲　此川氏初メ日ノ一片ト剃髮ノ改ニ今ノ名ニ号ス西角庵ト　寓舍　西堀川通元誓願寺上町

—貞猗　長谷部氏神道行家ナリ傳聞頃日眼精衰テ而不レ堪ヘ爲ニ人ニ引墨ノ　寓舍　下立賣通智惠光院西入町

○山口羅人

—五始　中嶋氏稱ス春要齋ト　寓舍　西洞院下立賣上町

—波光　山口氏稱ス老雄窩又号ス茂堂ト　寓舍　小川通二條上町

—羅院　中井氏号ス蟻步齋ト前キニ有テ故黜ラレ京師ノ在ル壹岐ノ嶋ニ數年郡吏憐テ院ノ厚シテ而不レ如キニ自餘之囚徒ノ故ニ不レ廢ニ風雅ノ之志ノ專ラ於テ彼ノ地ニ擴ムト誹諧ヲ云明和丙戌ノ年蒙テ免許ヲ皈洛ス而后戊子ノ夏加ニ点列ニ矣　寓舍　松屋町通一條下町

○北村降志

—春雄　杉本氏号ス青々館ト卽吟之達人能ク吐ニ一興ヲ　住居　綾小路通烏丸東入町

—文也　山本氏号ス梅園ト　寓舍　醒井通高辻下町

—花里　速水氏号交鵒翁明和七庚寅年三月十六日没六十七　辭世　憂しや花我か迎へる雲と成り

—隆雅　北村氏隆志之息ナリ初曰フ錦志ト分没後爲ニ点者ト所レ著有リ宵月夜亡父追善集也　住居　醒井通松原上町

—鼠公　辻氏號大黑庵明和七庚寅年八月二十五日没享年四十四　辭世　梨の身の丸〳〵さして果にけり

○隱岐米史

—百花　松本氏号ス荃葉堂ト家譜ニ詳ナリ故ニ於是ニ略ス　寓舍　祇園町壇之下

○中井仙徑

—柳坡　堀木氏嘗テ羅院ト友トシ善ク訪ヒ院ノ漂泊ヲ竟ニ有リレ趣ニ彼ノ地ニ故ニ所ノ見ル遠景所ノ聞ク奇談有ニ著話之興ニ焉　住居　今出川通千本東町

—吟霞　堀内氏号松風亭　寓舍　今出川通千本東町

○中村蘭石

—蘭石　中村氏蘭石之息ナリ初曰フ如蘭ト後改ム父ノ名ニ尤二代之点格斧ニ作ノ　寓居　白山通松原上

○菅原飛良　号ス二三居菴一ト濃州大垣ノ人ニシテ而紬都麥林舍乙由ガ之門人ナリ寶暦十二壬午年三月四日於洛下没齡五十一

―古菅　大倉氏飛良之息初メ曰フ二飛士一ト後ビムニ今ノ名一ニ家書有二近道換子鳥等一

住居　四條通鍼屋町西入町

○中川貞佐

―十口　柳氏號ス二意六齋一ト初メ曰フ二廣瀨貞恕一ト弱年ノ之頃隨テ師ニ趣ク二于讃岐國一ニ稱ニ名シ佐德一ト立テ二誹席ヲ一在讃凡テ經ル二星霜ノ九年ニシテ寶暦癸酉歸レ二京師一ニ有テレ故繼ニ柳氏ヲ一再改ム二十口一ト自ラ以テ爲ス短才ヲ一而不レ堪ヘ犯スニ師祖ノ緣語ヲ故ニ遵テ二貞佐德之諱ノ字ヲ一易ユ二今ノ名一ニ曾テ授リ下好ム二音韻之學ヲ一而尤弄羅文傳及ビ於乎止点譜ヲ於連哥上ヨリ欲ス二將ニ續ント一古義之餘意ヲ一家書有リ二四季之出合旅亭話秩穗伊勢兩賀武生補遺禽獸解行事祿蔭之雛開居ノ友拾遺譜等一ヲ蓋シ營ンデ二先師之十七回忌ヲ一而後隱ル二而咲翁ニ一及ビ二此時ニ一師家ヨリ散在之傳書悉ク納ル二吾手ニ一故ニ而咲翁命シテ二予ニ一ノ爲ス二貞佐ノ之道統一ト也

寓舍　綾小路通大宮東入町

―五口　長谷川氏号ス二嘯月齋一ト

寓舍　膏藥辻子

―南冥　關氏号ス二搏飛軒一ト

寓舍　四條通油小路西入町

○田河移竹

―由至　小川氏号ス二來川庵一ト

寓舍　油小路通上長者町上町

○早野巴人

―隨古　湯淺氏号ス二長松菴一ト弱年ノ之頃在テ二東府一ニ從ヒ二路道一ニ學ブ二誹諧ヲ後属ス二巴人一ニ後登リ二洛ニ爲ス二点者一ト

寓舍　上長者町通油小路西入町

―可焉　上坂氏

住居　葭屋町通中立賣下町

―盛住　筒井氏

寓舍　下長者町通釜座西

―蕪村　与謝氏當春加ラレシ二点列一ニ由雖レドモ未ダ二告來一セ任ニ風聞一ニ而記レ之ニ

寓舍　室町通綾小路下町

○山中梅應

―梅應　山中氏梅應息
居住　本阿彌圖子

―テイキ　和田氏初日柳高於今ノ名以國字書三字謂所賜或官家而無中正
字奏其旨何不審　寓舍　新町上立賣古木町

―和周　未謁見和田氏以告記之
小關氏号山陳亭　寓舍　西陣西千本町

○一睡庵徑童

―徑童　佐々木氏初日湊竹睡庵沒後繼師名而號
一睡庵　住居　黒門通出水上町

―鉄卅　小澤氏　寓舍　上京高臺院町淨福寺西町

○山本宗専

―艸古　南部氏号守川菴初書宗古後改今ノ字
寓舍　佛具屋町通松原下町

―李琳　田中氏号岡有菴
寓舍　衣棚通下立賣下町

○（東武）四時庵紀逸

―太祇　炭氏東武ノ之産初雲津水國之門人而
日水語後膓之逸改今ノ名實暦ノ初登洛其ノ后
爲点者号不夜菴由居地ノ所在乎又稱徳
母所ノ著書有夏秋集鬼貫句選等
寓舍　不夜城上之町

―五雲　岡氏
寓舍　知恩院門前那波屋橋

○板羽紙隔

―鵜江　正木氏誹名訓湯桶稱乎古字何有故乎
寓舍　白山通三條上町

○望月武然

―共然　草野氏号荷月菴
寓舍　塔之壇十念寺横町

○奥田吟松

淡々之門人而号花月菴松沒而久
然不過乎三十年故知松人今尚
存雖然不詳松之沒年再應求之不得
不共門人或曰延享乙丑ノ年沒

―橙雨　左橋氏
（寓）隅舍　油小路通下長者町上町

○速水花里

―澄里　上山氏
寓舍　綾小路通猪熊東入町

誹諧拾遺譜

今時點業六十有餘家 年﨟順所

始立点格人携自己之名紙有廻先輩之同業家往々如斯是乃可爲謁見之禮義也然近世雖有如点列人無告來或告不過其隣邊盡有不順歩人如是等各脱同業家之名簿故雖同業有無其聞人因之此後於無通達羅記之其以及聞時或以謁見之期列行準之可定其次序於四節會衆議爲一决矣今於此書今時爲詞宗人悉任聞無遺漏然如年髙從衆議不無其例觀者察焉

追加閲各自短册之句擧之

浮瀬や器量くらべさ菊の酒　綠石
楽の花や嵯峨をかぎりの東山　竿秋
見初けり冬木せぬ木に冬の色　丈石
露やゝ露見る露の置所　普求
五月雨も染ぬではなし紫蘇の紅　八百彦
たらぬ足で蝿追ふ牛い哀なり　行雲
浪の花ちるや奥津の初茄子　仙徑
蝶〳〵のこけつまろびつ風の上　了派
鯛しらぬ國はあらじな櫻時　宗專
何の日ぞ親のゆるした天の川　五始
鶯や平野へ來るは梅の後　百花
戀はいざけふもまたるゝ夕立哉　春雄
むらさきにしろいやよせ木萩の花　茂堂
木枯の吹とばしたる鴉かな　其梅
柚の酢には紅の移らぬ時雨哉　白嶺
葉のしなへ蝸牛も共に投入む　蘭石
三越路やくず家產出す水の音　文也
地の外に魚も築けり兵庫灘　雪堂
手枕の夢もさくらぞ春の雨　友水
精出せば暖になる砧かな　嘯山
初雪や薄彩色の香づゝみ　武然
まかせぬぞおかし火燵の明所　修古
極樂へゆけば蓮より櫻かな　葵足
鉄槳ふくむ頬しほらし花茄子　徑童
水音も咲潤したり陵〔マヽ〕雪花　來々
ひるがほや五條あたりの門ちがへ　賦泉
筍や往れぬ所にふさ〳〵さ　山至
心にて世に住吉の田植かな　買友
手にすへてさす盃や山ざくら　艸古
股火すな錦折たく茶碗酒　左舟
舞雲雀みやこの富士に下に見る　古音

こゝ二日三日が花ぞ上三里　楚杏
薬王の晉案も盡て涅槃哉　十口
節附には神代のまゝ歟田植哥　車用
今かけた橋なわたるや夕涼　隨古
行燈あれさいはんも獨かな　太祇
石川やしばしは夏をわすれ水　几山
忠臣もしれぬ御代哉さくらかな　梅應
春雨や夢にも登る東山　文誰
日には斜なれやこほりの歸り花　柳坡
隱居加賀删にたつるや蕗臺　盛住
むし干や兜頭巾のあつくろし　可焉
常住の山まだ青し初がすみ　貞鴬
藤蒲萄霜置架さ成にけり　參里
月影のうつにかたぶく砧かな　梅慶
しかも秋刹夜より後の水の音　五株
しらす情これらな露の浮名哉　テイキ
まがふ火の草をはなれて螢かな　鵜江
紫陽草や咲くたぶれて青う成　令五
篠で落す葉の染しるや村時雨　羅院
凉しさの床机たゞすの酢貝哉　李琳
七夕や女あるじのひさり言　五口
陽もはや一葉づゝ散紅葉哉　南冥
さればこそ能好なり桃の花　應隨
何ざくらけふ九重ににほひ菊　陸雅

雪雲は稻のもやうや冬衣　和周
ゆふがほや大工の建ぬ家ひさつ　馬南
日にかすみ摂にのぼるよ老の坂　五雲
星さならば上なき梅の學哉　鉄舟
雨裙の性根もぬける寒哉　可靜
身なよぎて通す風あり土用干　其然
龍門の瀧へ飛いく蛙かな　吟霞
折る時に痛く覺ゆるさくら哉　橙雨
兀山や何にかくれて雉子の聲　蕪村
傘かるも口惜かりし時雨かな　澄里
風に庭木の虎の吹れけり　來之

後序

文は貫道の器にしてしかも道を離ず、迹を成とかや。鼻祖貞徳翁の誹風代々不絶、廓然と備り侍りて、千山万水をへだつれども、心のかよふ道あれば貴賤のわかちもなく、是をもてあそぶは其徑界の正しきが故成べしといふも今さら也。こゝに意心齋の主、兼て先哲の述作せる誹諧家譜の遺漏を補て、其糸筋を亂さずして志をつぐの趣は、自序に委侍ける。予いとゞ動かぬ老馬の歩行を耻て、窓下に筆を嘴事しかり。

昔明和七年冬晩穐　而咲翁　漫書　印印

明和八卯孟春良辰

書林
京都　二條通富小路西入　野田藤八
江戸　通石町三町目　西村源六
大坂　北久太郎町心齋橋東入町　梁瀬傳兵衛

誹諧家譜後拾遺

十口編

ども二十年前の事なれば、舊友なかば黄泉の客となり、又新たに加ふる点業家も多く侍れば、より〳〵補て全からしめんと志侍れども、老情嬾隋(嬾惰)にして其家〻に趣り問ふ事もなく、唯故友にたづね、そこはかとなく書記し侍れば、さたんて闕𨷻脱失も多からん。去ながら今一隅の趣意を貽さば、後の好士三隅を全ふせん歟。是予が幸ならんと云尒。

寛政三年如月　　意心齋十口

誹諧家譜後拾遺序

夫誹諧也者本是和歌之一體而出於縉紳家而追今弘於海内矣蓋如其尋常之句也嬰兒亦能可作焉至其絶(絕)妙也雖老成才士亦有所不及也予先人十口性質好之常詠不倦也嘗著誹諧家譜拾遺而既行于世矣近又欲補其遺漏而輯此篇稿既脱也嗚呼無何去秋罹病不果其志而沒矣一日友人五口來謀斯書公于世而畢老師之功也因乃與五口倶訂校之而鋟于梓後見者倘止其不逮是予所願也

寛政四年壬子九月日　　桂如口識

家系よゝの月花序

誹諧の興風は崑山よりも高く起り、風雅の月花は滄海よりも廣く漫れり。されば梟祖花咲翁の詞花日〻にさかんに、枝葉月〻に繁茂して、其芳香邊鄙までいたらざるはなし。京師詞宗家の傳系は既に初編に見へたり。されど

よつの海静に礒邉の漁夫も誹諧を興じ、深山の木樵も戯言を發し、其口すさびにしはしはうさも打忘れ艸、牧笛の唱哥も附合の種となるも皆是自然の和風、誠にやさかたなるべし。聖の哥はいふも更、愚盲の野夫・幼稚の兒女も時に應じ其機に感じ、終に誹諧を好むより、其執心にいたりては誹諧の字の篇あらそひ、言篇はあたらぬの、いや人篇が蕉門のと、いたらぬ内から文字穿鑿もおかしけれ。畢竟は二字の穿鑿より、句作の修練こそ肝要なれ。去ながら誹・俳の二字、音義深説なきにしもあらず。芭蕉翁の人篇によられしもより所ありての事也。鼻祖貞德翁は古今傳授の人にして言篇に傳へおかれしものなれば、貞門の支流は言篇にしたがふべし。他門は何篇に書とも、何ぞあへて是を論ぜんや。只誹諧は人に交るの和なれば、かりにも偏倚邪曲あるべき事にあらず。故に泰平の哥とも稱し、誠に時の興に乗ずるの風德也。表にてはいさかひ、裏にては人をそしり杯する事つゝしむべ事也。人には和し我心に楽み深きこそ誹諧の文義妙用なれ。何ぞ句を吐く事をのみ誹諧といはんや。日夜の動容(チイ)・周旋(フルマイ)皆誹諧にあらざるはなし。よく得て思ふべし。さあれば鼻祖の美德、尊豈からずや。故に開巻に肖像を摸し、御傘の末廣く天が下のさし合を覺、誹諧の基をしるときは、其恩澤も又淺からんや。唯。

誹諧鼻祖松永逍遙軒長頭丸
貞徳明心居士九十三齢肖像

皆人の
晝寐の
たねや
秋の月



〇平安点業者流家系　席次不同

〇福田鞭石

—練石　福田氏号ニシ石々翁ト称ス支兒ト性純和ニシテ有ニ識量一幼ヨリ好ニ誹諧ヲ詠言常ニ不レ倦マ尤窮ニ其蘊奧ヲ而、行フニ点業ヲ六十有二年衆歳ナ寄トス之ヲ又遊ニ其門下ニ者夥シ也蓋誹諧四節會至テ今而不レ懈タラ者是兒翁ノ之功也此會ナ也毎歳四月十五日於ニ東山雙林寺中閑阿彌亭ニ部下点業ノ雅與ニ諸家門人等ト俱列坐ノ而行レフ之ヲ也俗謂ニ之ヲ宗匠會ト猶詳ニ也于初編ニ宜ニ参考ス矣寛政元年己酉七月六日没ス行年八十八

住居　松原室町西ヱ入町

—寄石　福田氏支兒男也初名野童号ス而咲堂ト是舊号也

—吟石　山田氏号ニ井龜軒ト初就テ央吏舍住山ニ而学ブ誹諧ヲ又適ニ東都ニ遊ニ存義ガ之雅筵ニ既ニ反テ而使ト吟ガ門人二世住山ノ續中蘭石之統ヲ自從ニテ練石ニ而行フ点業ヲ矣井龜軒ハ蘭石之号也練石授ニ與ス之ヲ

住居　烏丸綾小路下ル町

〇早川丈石

—五株　八木氏号ス化龍舘ト天明八年戊申六月廿八日没行年六十六　住居　川東新道上柳町

—麦里　永田氏号ス四穗園ト所レ著有ニ四穗集轍之流二葉艸等ノ安永九年庚子七月二十一日當ニ師ノ之小祥忌ニ因テ設ニ法筵ノ自薙髪ノ而改ニ名ヲ貞也ト

道のため菩提の爲や身のためを
ひんまるめたるあたまなりけり

住居　衣棚押小路上ル町

—丈士　早川氏字ハ道一千馘堂之看主也非ニ点者ニ

住居　不明門通下珠數屋町上ル町

—子鳳　澤井氏号ス観魚堂ト寛政元年己酉十月十六日没

住居　祇園町

〇野村其梅

—慶士　林氏号ス瓊林齋ト　住居　上京曼多羅辻子

—幾風　人見氏号ス作松菴ト是師ノ之号也寛政六年甲寅二月二日當ニ師ノ之七回忌ニ因設ニ追悼法筵ヲ自薙髪ノ而改ニ名ヲ宗盈ト

手向には何惜からじ柳髪

住居　高倉二條下ル町

一城之　柳生氏号ニス大佛庵ト　住居　大佛脊屋町五條下ル町

二世
一五株　八木氏号ニス化龍館ト　住居　知恩院古門前三吉町

○望月宋屋

一嘯山　三宅氏号ハ葎亭ト幼ニシテ有ニ異才一尤善クス艸書ヲ所レ著有ニ俳諧古選五巻一　住居　中長者町新町東入町

一買友　小谷氏号ハ鈴山堂一　住居　小川武者小路上ル町

一文誰　岡田氏今改ム望月ニ号シ机懸庵ト稱ハ寓嶺ト善クス篆刻ヲ所レ著有ニ俳諧彼岸櫻一巻一　住居　新烏丸二條上ル町

一都雀　高城氏号ニス菊溪菴ト　安井御門主ノ之家士也所レ著有ニ法之水溪之水心之友一寛政五年癸丑三月十二日當ニ蕉翁百回忌ニ因テ爲ニ報恩ノ自薙髪ノ而稱ニ宗一賀房ト

墨染の袖にも吹そ春の風

住居　祇園下河原

一坡堂　森氏号ニス桃李仙ト　住居　小川蛸薬師上ル町

一月峯　稱ニシ義亮ト号ニス長喜菴ト洛東雙林寺中西阿彌亭ノ主人也

一志諺　其諺ノ孫也号ニス四時堂ニ乃其諺ノ之号也稱ス智觀ト圓山正阿彌亭ノ主人也所レ著有ニ五月抄一巻金毛属一巻一

一如洋　三宅氏嘯山男也号ニシ柏亭ト一ニ号ス踞海山人ト

一閑空　佐々木氏初名寄節　住居　中長者町新町西入丁号ニ冠芳齋一

一一鳳　木村氏号ス佛狸菴ト　住居　新町丸太町上ル町

一斗雪　入江氏号シ弄時菴ト一ニ号ス五章堂ト　住居　室町出水上ル町

○中川貞佐

一十口　青木氏号ニシ意心齋ト一ニ号ニス清古散人ト所ノ著之書目見ニ予初編ニ乃此書其所レ撰也　住居　猪熊四條上ル町

一五口　長谷川氏号シ嘯月齋ト一ニ号ニス一樓軒ト所レ著有ニ鯨要一巻花譽一巻一　住居　西洞院綾小路下ル町

一士口　長谷川氏五口ノ男也号ニス一應軒ト

○黒瀬去舟

黛山　黒瀬氏號ハ竹花ト一ニ號ス柏漏下ト　住居　日暮下長者町下ル町

呂蛤　西村氏號ス山鳥房ト　住居　新町丸太町下ル丁

○山中梅應

テイキ　和田氏號ニ柳高軒　住居　新町頭清藏口

雨柳　長谷川氏初名有柳號ス冠木亭ト寛政元年己酉六月沒　住居　上立賣小川東ヘ入町

○松木竿秋

來之　早川氏家在ニ小川今出川上町ニ家ニ有テ圓窓一而向フ寂居ニ故ニ號ス四明窗ト一ニ號ス春鷗舍ト又號ス北亭ト嘗閲ニ蕉翁印譜ノ中有ニ萬國印一而門人相ニ承スト之ヲ今ヤ也之得ニ其印ヲ於秋ニ矣テハ伺撰秀逸ニ必用ニ其印ヲ矣所レ著有ニ燈ノ之親一卷猿利口一卷廣原海一卷一

○板羽紙隔

鵜江　正木氏號ス水光亭ト及テ臨ニ沒ス傳來ノ家書悉ク授ク與フ于江ニ　住居　鉄屋町二條上ル町

○貞六堂乾峯

百秀　藤村氏號ス貞六堂ト　住居　松原室町西ヘ入町

九重　高谷氏號ス峯雲舍ト　住居　松原堺町西ヘ入町

三世乾峯　居初氏貞六堂乾峯ノ男也初名乾雅號ス貞七堂ト幼ニシテ失レ父ヲ獨與レ母居テ習ニ誹諧ニ長テ續ク父ノ統ヲ矣所レ著有ニ婦太津臼一卷一　住居　松原烏丸西ヘ入町

○堀内吟霞

仙之　戸川氏號ス松雪堂ト　住居　今出川千本西ヘ入天隼辻子

○松本應隨

爲角　安井氏初名鈴山又三調號ス一圓堂ト　住居　富小路五條上ル町

左牛　奥野氏號ス玉露堂ト　住居　建仁寺町五條下ル町

右考　安藤氏號ス松壽亭ト　住居　大佛下新ノ町

○神澤杜口　傳見ニ于末ニ

牛行　中西氏号御射山亭所著有誹諧行潦一巻
住居　東洞院六角下ル町

○二世
中村蘭石

佳山　中村氏号央更舎一号蘭石齋従而咲翁而學誹諧尤續点業凡三世也天明八年戊申九月廿一日没

二世
佳山　中村氏初名佳夕号央更舎従山田吟石而學誹諧及蘭石齋没譲得蘭石齋之印譜於吟石而續央更舎之統也寛政辛亥之春有故而除点業之列矣

○中井羅院

五仙　井上氏初名廣入号方圓室　住居　内野六軒町

○中井仙徑

柳坡　堀木氏号梧桐菴一号春里庵
住居　今出川千本西入町

仙雅　中井氏仙徑男也号富雲菴　住居　北野今小路

文虎　中林氏号旌尾舘称忠蔵　住居　上立賣淨福寺西入町

○山本普求

尼
倭泉　石田賦泉妻也及泉没而修引導非点者

杜口　神澤氏号其蜩菴一号可々齋幼而好誹諧始遊晩山之門山没後又從半時菴而窮其蘊奥也性閑雅博物不同於俗眞一風流之雅人也所著有翁艸五巻行于世矣雖非点業家有盛名於世矣故載之

伏見撞木町にて
山河在春深草の荒廓　　可々齋　八十八翁

湘南　木崎氏号日々菴称得玄護國寺司官也嘗就晩山學誹諧後従而咲翁而究其奥儀旁遊如信之門而嗜茶道性温雅不售名惟愛風月耳雖非点業家其名聲尚高矣故載之

あれほどの美女なれど此暑哉　　日々菴　七十三翁

○和汐

魚千里　大野氏号花樂山人此号所授得于師也又自号春晒翁雖非点者其風格

(83) 施ヘテヨリ實スルニ

芍藥や牡丹なくばの花心　魚千里

丈士　十日前、思へば久し。過にし月日、此人前髪結し頃より師の机邊にありて、予も折々丈石子を訪ひ、誹話せし事も、今はむかしとなれるも理ナル哉。いつしか此人も剃髪して千載堂の看主とよぼふ。舊友なれば句をこふに辭せず。身も健かに、句も速に、到來せし短尺の句を爰に記し侍る。

時雨月日の照る所は落葉哉　千載堂看主　丈士

○辭世ノ詠吟

心よし秋の日和と死出の旅（明和八年辛卯七月廿一日沒年七十九）　普求
名月の跡にも胸の光りかな（同九年壬辰九月十一日沒年七十八）　竿秋
うら藪や夕日に向ひ萎ミぬる（同年同月十三日沒年七十五）　可焉
うら寒し無常の風に照らぬ木も（同年十一月廿一日沒年四十五）　織雨
肉眼を離れて見たし蓮の花（安永四年乙未六月六日沒年五十二）　鉄舟
覇王樹の何共なしに秋暮ぬ（同年七月廿九日沒年七十一）　仙徑

散飛ぶは花と親子や風の虫（同年八月四日沒年五十七）　修古
生涯の襃しやひがし向（同年九月十三日沒年六十六）　五始
今ぞ着る法の旅路の花ごろも（同五年丙申三月廿八日沒年六十一）　雪堂
蓮の實の飛所あり心自在（同年六月廿八日沒年八十二）　宗專
ごつこいと留つた所で南無あみだ（同年同月同日沒年五十八）　車用
しばらくも殘るものなし木々の色（同年八月十五日沒年七十五）　盛住
東へも西へも往かじ花の空（同六年丁酉三月廿日沒年八十一）　八百彦
けふといふ今日ぞまことの雪佛（同年十一月廿九日沒年五十七）　賦泉
極樂のたれぞ草花南死阿彌陀（同七年戊戌八月十六日沒年四十五）　金映
まよやせぬ通ッ切手の南無あみだ（同年九月廿八日沒年五十七）　化來
嘘に散る葉もなし四方の鐘の聲（同年十月十九日沒年三十九）　澄里
氷解行水きよし胸きよし（同八年己亥二月廿日沒年六十四）　百花
極樂に誕生日はけふなれや（同年七月廿一日沒年八十五）　丈石
水筋をうけて異なる青田かな（同年八月廿八日沒年六十六）　二世盛住
身の秋ぞ絲瓜の皮のだんぶくろ（同年十月十三日沒年三十六）　羅院
帷子はわれが秋去衣かな（同九年庚子九月十七日沒年五十四）　來々
無に數そふ日となつて枝寒し（天明二年壬寅正月十二日沒年六十九）　二世蘭石
世の縲ひへきる我ミかたちなし（同三年癸卯正月十日沒年五十二）　應随
白梅の明る夜斗と成にけり（同年十二月廿九日沒年六十八）　蕪村
借錢の淵から天上辰の秋（同四年甲辰八月一日沒年六十一）　吟霞

胸の月はれたぞ親へ花がつほ　同年十月廿一日没年七十三　鳳原
けふは吾名のみはし妙や雪佛　同五年乙巳十一月廿八日没年六十四　橙雨
古郷へのはれや卯月の花鳥毛　同七年丁未四月七日没年七十　徑童
ねがはくば無爲の都を住所　同八年戊申二月十二日没年七十　其梅
枯枝やはかなく殘る蟬の殼　同年四月七日没　花街
いさふ世をのいた心ぞ蚊帳の中　同年六月廿八日没年六十六　五株
はらひ洗ひこゝろの月の鏡かな　寛政元年己酉七月五日没年八十八　練石
親類へ留者がさゝやく袖しぐれ　同三年辛亥七月廿一日没年六十九　十口

此書上木之時加二此句一

○茗話

或夜朋友予が閑居に來られ、誹談しば〳〵爐邊に集り、小巵二三獻の興に乘じ、与風古人達の辭世の句など彼是互に思ひ出し、感涙を催しぬ。實に主はむなしくなれども、惟耳底に止まるは句の意味也と。去によりて無事の内より、辭世の句の用をせらるゝ人も有よし。是等はあまり手まはし過るやうなれども、逃ものがれぬ無常迅速、まして死の緣無量なれば、死期を待て云殘すべき言も斗りがたければ、常に其心がけも理リならん歟。又誹諧俗語を厭はずとて、けやけき事を云のこし、後人の嘲とならんも益なし。誠に名人達は其終りをよくし、風雅の情意平生に違はざりとて笑話もつきず、夜も闌に及ぬ。

或人の辭世とて

笑艸のこさんよりも常〳〵に
　興じ置つれ今は苦もなし

○夢裡得句

十口謂、予が門生搏飛軒南冥、嘗テ京都を退き、江州八日市の邊へ引こし、年月經れども雁の音信もなかりけるが、或夜夢中に彼南冥、予が机前に來て云、家譜編集の事ほのかに聞傳へり。何卒此一句を加へ給はれかしとて、短尺を出しける。予其句を吟ずるとおもへば、冥忽去て夢覺たり。短冊はむなしくなれども、句は正しく覺へぬ。虚夢歟、思夢歟、はからざれども此集成て後、もし南冥此冊を見ば其いらへを待んと、九万里の闇雲搏飛軒が句と覺へしを爰に記し置ぬ。

今ごろは花ぞゆかしき都空　南冥

癡人の夢をかたるは拙けれども、夢裡に胡蝶の戲をいひ、又は名聲の精魂、黒牡丹等の典故はいづれも思夢の情ならん乎。予がおさは思夢妄相なるべけれども、筆の因の書そへ侍る耳。

茶にうかされねぬさおもへどしばらくは　意心齋
　夢にも好きの道は行けり

○未ㇾ聞ニ辭世句一ヲ分

太祇　明和八年辛卯八月九日沒年六十三
波光　同年十一月九日急死
艸古　出ニ予行脚一ニ明和九年壬辰七月廿三日死ニ於越後國邑松城下一ニ
鶴秀　明和九年壬辰八月廿四日死ニ於伏見京町一ニ
鈴賀　安永元年壬辰十月九日急死
隨古　同二年癸巳四月廿一日沒年五十四
几山　同年六月九日沒年七十五
李琳　同三年甲午九月七日沒年五十一
又市　同四年乙未十一月十五日沒年四十四
了派　同年閏十二月廿八日沒年七十一
化来　同七年戊戌八月廿九日變死
文也　同八年己亥七月廿九日沒年八十五
隆雅　天明二年壬寅四月廿四日沒
丈可　同四年甲辰三月十五日急死
可靜　同五年乙巳十一月六日沒年五十八
米路　同六年丙午九月十日沒
梅應　同七年丁未五月四日變死年五十一
野士雄　同八年戊申正月十二日沒年三十三
佳山　同年九月廿一日沒
雨柳　寛政九年己酉閏六月十日沒
子鳳　同年十月十六日沒
楚杏　左舟　冷五　和周　外面　馬南
　以上六人未ㇾ知ニ沒年一ヲ

○廢(ヤメル)ニ点業一ヲ人

友水　武然　梅慶　共然　五雲　古音
壺文　由至　羽白　梅香　一方　葵足
貞柴　冷五　以上十四人

○除ニ点業之列一ヲ人

普聞　壽石　二世佳山　以上三人

○移ニ於他邦一ニ点者

但州豐岡 青牛　江州八日市 南冥　大坂 慶士　丹州篠山 黛山　以上四人

○當時詞宗家之發句　席順如レ左

空寺に終日風の柳かな　嘯山
心にて世には住吉の田植かな　買友
葉ざくらや喰たる顔せぬ小町寺　文誰
鹿聞て心の角もおれにけり　柳坡
船乘に酒屋へかよふ千鳥かな　貞也
笋あやめ萌黄おどしの祝かな　テイキ
短夜や寐よさの鐘はつかれども　鶴江
すゑ茂る藥深し蓮の花　五口
飯時に祇さりも聞や時鳥　來之
忘たる夏た五條の橋の月　百秀
蛇穴へ入相凄き野寺かな　九重
垣間見やちらりと花の皆咲　仙之
きぬ〴〵や椿にしてさめん窓明リ　仙雅
冬の月尖に風も吹夜かな　爲角
二もとに樹た接ぐ人の心かな　牛行
月花にいづれも雪の氣色かな　乾峯
煤掃や昔從者なる勝手知リ　如洋
葬やかぞへ置たる外もさき　都雀
現なの魂よばひせんくれの春　寄石
此外へ出ゐであらふ蚊屋の夢　寄節
起て見よ眠れる山の薄化粧　五仙
此家も竹で取燈や小夜きぬた　一鳳

いや高し霞の中に華頂山　志諺
禮いふて柿は捨たる淺さかな　幾風
眼はふらじ花た宛所の丸木橋　吟石
板橋に覺束なさや刻深雪　坡堂
田螺ひとつ堤へにじり上りけり　斗雪
せめて香に留たし花の荷茶店　文虎
早松茸出て見る道の木陰哉　呂蛤
不二の雪は降るさ聞日も暑サ哉　士口
霧洩るゝ幾數の兒凄し小鐘懸　城之
松はまゝ椿も櫻も紅葉かな　二世左牛
杜氏のみは古きを譽る新酒哉　五株
春の雪ねぐらの鳥に亂れけり　月峰
月涼し斷の更る店のさき　右寄

家系代々の月花跋

湯盤の銘に曰、日々にあらたに又日々にあらたなる誹諧家譜の源流、往昔鼻祖長頭丸、元禄・承應に中興し、　九條殿下の尊命によつて、はじめて誹諧一道の宗匠をかふむり給ひしより、其葉代々に連綿して、今將綾錦の集鑑、千載堂の至功、年積て其絲口の亂ん事を悔て、花何意心齋、明和七の秋、捨れる木の葉を拾ひて家譜の道を明らかにす。其すゑ猶ら年かはり代うつりて、誹諧の花おなじといへども人おなじからずして、かいくれうと〱しきをかなしみ、天明のすゑ再び其絲の緒ぎゝせんと、老師の爪木もてるに、予もともに心そひせるもむなしく、去年の秋師も黄泉の道にかくれぬ。且枕に殘る反古の一ッ二ッを其まゝにやみなんもほいなく、息如口子に筆を合せて先師の志を續ぐのみ。

壬子菊月　　茶淀翁　五　口

（貞門五世十口末流）（嘯月齋五口印）

寛政九丁巳年季夏

平安書林　二條富小路西ェ入町

野田　藤八

西山家連誹系譜

素外編

西山家　代々攝天滿ニ住シテ連歌家相續ナリ

昌琢門
宗因―忘吾齋　向榮菴　有芳菴　初學祀後ノ羅將寺豪信法印ヲ師トス

―宗春―昌察―昌林―昌森（現）
　　　　　　　　　―宗珍（同）

江戸誹諧傳系

梅翁―始メ一幽後ニ西翁又梅花翁又野梅翁世ニ知ル梅花ノ一章ヨリ此翁ヲ誹諧談林ノ祖トス　又他流ニテモ芭蕉常ニ此翁ヲ以テ此道ノ中興開山也ト賞譽セシ事去來抄ニ見ユ。天和二壬戌三月廿八日沒歲七十八葬大阪西寺町西福寺

西花―井原松壽軒攝住吉於社頭獨吟二万三千句興行夫ヨリ二万翁ト号元祿六年癸酉八月十日沒歲五十二

才麿―推本狂六堂別号宥德始メ谷松堂軒 或云ニ佐々木又生駒ヲ氏トス和泉ノ人 初學ハ西武門ニテ則武ト呼又西丸ト改ム後梅翁ニ因ミ松壽軒ニ從ヒ故アツテ上ノ文字ニカエオ麿ニ改ム元文二年丁巳正月二日歿歲八十二葬大阪西寺町万福寺

佳風―曾鳴有紀堂始メオ尾享保十二年丁未二月六日歿歲四十九葬江戸谷中大雄寺

逸志―笠家致曲庵始メ半局菴其頃ハ江戸點者諸流一列ナリ此翁ヲ以連名ノ卷頭トス　延享四年丁卯五月廿七日沒歲七十三葬江戸淺艸田原町報恩寺中高德寺

舊室―笠家活々坊後活井　始メ鶉衣江戸點者派ヲ別ツニ及ンデ宗因派中興ノ筆頭ナリ明和元年甲申十一月廿八日沒歲七十二葬江戸築地誓澄寺

左簾―笠家古道 故有テ退席ス　安永八年己亥十一月廿三日沒歲六十六葬江戸上野山下啓運寺

點思―笠家圓雲齋始　沒ス年月不詳

二世左簾―メ株義師沒後素外ニ屬シテ師ニ払ス寬政五年癸巳五月廿一日沒歲六十五葬江戸淺艸榧寺

蒼狐―小笠柳前齋始メ笠菴舊丈管神本納獨吟一日五千句興行五千堂ト号明和三年丙戌十一月六日沒歲五十五葬江戸駒込德性寺

良雨―沒ス其時ヲ同セザレバ年月不詳

沾凉―for東巴菴所緣有テ菊岡沾凉ガ名ヲ繼天明三年癸卯二月二日沒歲八十五葬江戸增上寺中昌泉院

萬丁―者後甲州ノ故園ニ移ン

眠牛―增田甸何庵　明和八年辛卯三月六日沒歲五十三葬武州禮壁驛成就院

五璉―足高梅鄰庵安永八年己亥九月二日沒歲七十六葬江戸小石川一音寺

寶馬―始メ吉成島通渭一タビ素外ニ屬シテ友右ナ開ク蒼狐沒スル時ハ旅ニアリテ其期ニ遂ス後素外來爾ニ乞テ一列ニカヘシ其親族ト議シテ小菅ノ姓ヲ繼シメ先師ノ例ニ倣テ本納

現素外
獨吟一日五千句興行ヨッテ後五千堂ト号ス
寛政十年戊午二月十九日没歳七十二葬江戸
駒込徳性寺

谷一陽井別号玉池又三本蒼狐終焉ニ望
テ一派ノ事ヲ修シ祖翁譜林ノ傳脈ヲ授
残リナク道ノ正統ヲ讓リ與テ繼シム
抑ニ林ノ但統此翁ニ至テ七世ナリ翁蕉翁ニ尤精シ
故ニ著述ノ書顧多シ刻メ世ニ行ル丶者凡ソ四十余
部又梅翁及ヒ哲ノ発句碑并ニ發句額ヲ四方ノ靈場
ニ建立スル事數十ケ所其外ハ詳ニ譜諧梅祭祀ニ見ユ
文政六年二月八日没歳九十葬江戸浅艸今戸慶養寺
同寺中ニ又翁ガ古跡ノ發句碑アリ

素塵
谷氏女民後落髪シテ素塵ト名ヅク又父ノ齋号ヲ
襲ギ一陽窓ト号ス

津富
島师齋別号君山蒼狐没スルノ刻未ダ几
ヲ立ルノ免シナシ素外ニ屬シ學ンデ其
傳ヲ得テ文臺ヲ開クヨッテ素外ヲシテ
師ノ如クス寛政九年丁巳十二月廿一日
没歳六十七葬江戸今戸慶養寺

花曄
山内春秋齋寛政十二年庚申閏四月七日
没歳六十五葬江戸麹町嵐法寺

木丹
常生白菴天明七年丁未正月十六日没歳
四十九葬江戸下谷廣徳寺中圓照院

現壺外
乾一龍井別号峨谷文政三年庚辰十一月廿四日
没歳七十葬江戸牛込高田寶閑寺

素健
袖取力陽年文化元年甲子八月四日没歳
三十五葬江戸深川万年町支信寺

現規外
洛一東井

素粒
黒部一万井

千頂
仲日在庵吉祇徳妻

米明
一宮氏別号書道

九井
太田五耕堂享和二年癸亥六月三日没歳
七十葬江戸下谷海藏寺

髪々
賀名伊波菴寛政九年丁巳七月十日没歳
七十二葬江戸青山千駄ケ谷仙壽院

現得兆
得器ノ婦妻ナリ素外ノ直
弟ト成リテ印譜ヲ免サル
号與方圓井

現徳器
鳥方圓菴別号吉狐近來痞癆スル事
有ニヨリ素外ニ告テ栖隱シ業ヲ心
ノ儘ニス

欄舟
島總渓菴寛政十年戊午十二月十二日没
歳三十七葬江戸牛込圓福寺

五世現立志
關寺松菴白徳器其初ハ立志ノ門也志没
シテ後津富ノ門人トナル故ニ我門人雨
雪ニ立志ノ名ヲ繼シム文化甲子ノ秋前
ノ立志ノ男市匠直圓ノ劂ヲ立ン事ヲ器
ニ乞フ仍テ其意ニ任セ其派ヲ立志ニ與
立セシム

現古梁
黒部一圓井師得器思所アリテ素外ニ屬
セサシム仍テ素外ヲシテ師ニ比師ヲ
立ルニハ思外ガ文トス

器觀
鳥不染菴享和元年辛酉八月十九日没歳
五十葬江戸増上寺中林松院

現白英
山方一鶴堂

- 現 得　友岡倫菴
- 現 李　門田葛菴
- 現 一　芳島陽秀菴
- 三世現 左簾　笠東雲齋始メ燕志門社來二世左麗没後寛政五癸丑八月素外ニ屬シテ左簾三世ヲ繼外ニ道ヲ學ニ師ノ如クス
- 萬成　笠孤雪齋寛政十二年庚申正月三日没歳五十一葬江戸三田綱坂下幽藏院
- 現 社　來井透雪齋
- 現 井　器伊藤九洞菴師没後器ニ屬シテ師ニ比ス

九井宗

右之外梅翁之支流雖多都鄙隨當流之學一系而已

文化二乙丑春

（校訂者曰、本文、小字ニテ記セルハ文政六年素外ノ女素園ノ附記セルモノニテ、梅翁發句集ノ附錄系譜ニヨル。）

葛飾蕉門分脈系圖

錦江編

葛飾蕉門分脈系圖巻之一

葛門大祖

●素堂　其日菴　葛飾隱士　山口官兵衛信章又素道と云

始甲斐國巨摩郡教来石山口に住し山口市右衛門と号し頗る家富り。櫻井孫兵衛攻能に屬し蓬澤の水利に功有、後東都東叡山下に寓居し儒を専門とし詩歌を事とし茶香連俳を樂しみ、天和中世外の思ひを發し家を葛飾阿武に移し芭蕉翁の友人たり。寛永十九年壬午五月五日生れ享保元年丙申八月十五日死す。谷中感應寺に葬る。

我なつれて我かげ歸る月見かな　素堂

此句は素堂園中にての吟なり。遺言して辭世とす。

別號

信章齋　是は素堂の實名を以て齋号とす。

蓮池翁　是は素堂庭上に一泓の池をうがち、白蓮を植て蓮池翁と稱せらる。芭蕉翁に對するの号なり。黒露云、蓮の君子なるを愛して東叡山下に住す。人蓮池翁と稱すと云。しかれば其時よりの号にて、深川にうつりて又其本情を捨られざるなるべし。八世蓁々翁蓮池を稱せられ、九世錦江また庭上に一甕の蓮を植て蓮池主翁を号す。其時

我池は一と葉うきてもはちすかな　錦江

素仙堂　是は素隱士の堂号なり。後仙の字を略して素堂といひ、俳名とす。栖隱の後呼名を素道といふ。其音同じければまた素堂を以て通稱俳名とはせる也。蓁々翁門下の高弟蓁嘅、其年功あるを以て此号をさづけ、始て二世素仙堂を稱す。後俳号蓁阜三世を稱す。又蓁嘅の俳嫡木我四世を稱す。

今日菴　是は千利久の孫宗旦の号なり。素隱士茶事をよくし、宗旦の号をつぎ、宗偏傳來三世を稱する也。葛門三世素丸翁俳諧にも今日庵あるべしとて、三篇五色墨の作者梢翁に命じて、素堂二世を稱せしむ。松唯に傳へて今六世を稱す。餘は梢翁は譜に委しくす。

來雪　是は素堂の俳名なり。後專ら素堂を稱すれども、其實は堂号なり。此俳名素隱士の姪に傳へて來雪庵と号す。其後に絶たり。

子晋　是は字なり

山口靈神　是は甲州蓬澤にまつる處の号なり。

●馬光　二世其日庵　長谷川半左衛門直行

幕下の士小十人組をつとむ。廩米百五拾俵を賜はり本所石原元御藏屋敷跡に住す。享保十六年辛亥九月宗瑞・蓮之・咫尺・長水等と五色墨集を著し、兄弟の交を結び、門下世々懇情を通ずべきよしを誓ふ。雪中庵蓼太又馬光翁の補傳をうけたり。延享四年丁卯三月十六日致仕し、剃髪のち泥山と改む。寛延四年乙未五月朔日卒す。辭世

ふりかへる谷の戸もなし時鳥　馬光

本所原庭東盛寺に葬る。

別號

絢堂　素丸　馬光翁五色墨集を作る時の号名也。詩の素以爲絢といへるより出たる成るべし。元文年中此号名を溝口氏に附屬す。傳來して綿渡梢翁八世を稱す。

夕可庵　是は絢堂素丸の号名、並びに其日庵を溝口氏に授るの後の別号にし、、此時名を馬光と改

む。朝聞道而夕死可矣ときこへし其詞をされるにや、畢竟は馬の眼の光りによれるなるべし。寶子馬泥是をつぎ、傳來して葛哉五世を稱す

曇華齋　是は馬光翁いまだ素丸を稱するの時一号にて、櫻を白雲と見たる故人の塞情にならへるなるべし。溝口素丸また是を別号とし、門人石瀬に守護せしむ。傳來して素丈五世を稱す。葛門下に絢堂・夕可菴・曇華齋を二祖の三号とし、尤貴重す。

萬里齋　是は萬里船のおしものによりての号なり、三祖の譜に詳にす。

如是菴　是は東盛寺のおく、芭蕉翁参禪の一室也。馬光是が主となり、月連に會合して其号を稱す。溝口素丸門人德布に其事を託し、又其号を稱しむ。洪翠其四世を稱す。

一練窓　是は顏子が吳門の眼力をなぞらへて、馬光の一号とせられし也。後年溝口素丸是を稱し、門弟貫風に傳來して、恕丸号を稱して死せり。

素法閣　是は東登の撰するめか袋の序に見へたり。享保年中の別号なり。八世藻々翁是を稱し、桂露に傳ふ。

玲瓏閣　是は白芹翁の頃孤竹に授く、後竹牛四世を稱す。

老茄園　是は馬光翁崑崙瓜を愛し、園中の標号とす。溝口素丸門人藍水にさづく、鼠夕に傳來し五世を稱す。

林術舍　是は馬光翁本所林町に、栖隱を設けられし時の一号にして、自畫賛の印に是を用ひらる。寥葉二世を稱するといへども、いまだ法券の列に至らずして罷みぬ。

白芹　是は素丸以前の俳名なり。溝口素丸に與へられ、後五世其日菴桂洲是に改む。

竹光　是は別名なり。溝口素丸是を稱し、二世蛙水にさづく。後莪樹亭号に與へられ死して絕へたり。

泥山　是は致仕の後の隱名なり。馬白是を稱し路一に傳來せり。

半蟄居　是は致仕の後の号なり。門弟法雨是を稱し、後其音便をもて半竹居又反竹居に書改め、嗣号するものありといへども、死し絕たり。

遺梅翁　是は本所梅莊へ供奉の時、

此軒や梅に遺はれて跡しさり　馬光

かく吟じて台命に應じ奉る。よつて門下遺梅翁と崇尙す。自ら別号とはせるにあらず、

△松答忌　是は馬光忌を稱する也。辭世の和歌に、

なつかしともしやとひくる人しあらば空ふく風も松と答へん、とありし故に名とせる也。墓碑に此うたを刻し、又松を植られたり。

溝口素丸翁句あり

觀すれば松答へけり馬光の會　素丸

――黑露　稻田菴　素隱士の姪なり

摩訶十五夜・秋七草・連俳睦百韻等を著し、素隱士の墓碑を小石川嚴淨院に營す。

按ずるに、黑露は素堂の血緣の姪にあらず。少年より素堂に仕へて坐右に教授をうけ、終に山口氏を冒して素堂の姪と稱し、其系具をうくる。是予が先哲にきく所、古集に考へて知る處也。他日其證を記すべし。今爰に略す。

二世
素堂　來雪庵

俳自素堂血縁の姪たり。甲陽山口に住し、歿後來雪庵二世素堂と稱す。隨百韻の主たり。又葛飾の隱士と稱し、寶暦二年門人雪令ふたゝび其の形を撰し、俳祖の遺稿となす。是が序を書す。雪令は水府の人なり。

稻後　起早庵　甲陽に住す

起早庵の号は、天地菴素丸翁より附屬する處也。門人幸松園利躬後可霊庵尺五門人となり、許可をうけたり。其子利躬八世藥々翁の門人たり。

二橋　甲陽に住す。

稻中庵の門人、甲陽に住するもの稻後・二橋死するの後きこゆるものなし。三祖の時素丸翁の門人に入りて、葛門に遊ぶもの多し。文化・文政の時甲府に素橋あり、雨柏・素牛・雨梧あり。葛門を慕ふといへども死して又きこへず。

三世其日庵　溝口十太夫勝昌

素丸

幕下の士御書院番をつとむ。采地五百石を賜り、本所長崎町に住す。寛延四年丁未春二世宗瑞・夢太・竹阿・斑象と續五色墨集を著し、其交りを修む。明和九年壬辰四月十日致仕して、剃髮の後龍齋と改む。正徳三年癸巳八月廿六日江府に生れ、寛政七年乙卯七月廿日病て卒す。年八十三、芝青松寺に葬る。

初名　白芹　馬光翁より傳來す。

別号　絢堂　曇華齋　一漁窓　竹光　共傳來して是を稱す。萬里齋の事は後に見へたり。

別號

天地菴　天明二年辛丑前年長崎町の後園に樓を建て、樓上に俳諧あれば、樓下に義可の連中集りて其風雅を樂しむ。よつて天地菴と號す。後此号を我泉にさづけ、傳來して里扇に及ぶ。

向旭樓　同年其樓に標する所の号なり。又青蚨の一号あり。白芹翁向旭樓を書錦にさづけ、傳來して蘂峨に及ぶ。

青蚨　是は荘子秋水篇に、陷井之蛙の還ニ(カヘリミレハ)蚶蟹與科斗ニ莫ニ吾能若ニ也(ニクク)、といへるによりて、謙退の一名にせられしなるべし。蚨は井中の赤蟲にていもりの事なるよし。後野逸翁青蚨下を稱し、其後、絶へたるを起して、錦江與へて由猗に号せしむ。

謙虚道人　是亦謙退の名にして、易の謙の卦より出たるなるべし。向旭樓、青蚨と同時に別名とする處也。錦江與へて木我に稱せしむ。

萬里齋　是は天地菴樓上の一号、畢竟は萬里船の印おしものによつて起す處也、馬光翁より傳來の印なれば、馬光翁をそのおこりとせられし也。世々別号とし、列山是を宗泉にさづけ、葉々翁又是を稱し、藥雨に與ふるといへども、披露に及はずして死せり。

兩儀菴　是は天地菴の一号なり。冬松にさづく。傳來して藥東是を守護す。

五味堂　是亦天地五味を下せるより、天地菴の一号とせらる。桂洲是をさづかり、其子又五味堂桂洲といひ、判者にすゝまずして死す。然るに桂洲買藥の看板に五味堂を刻す。よつて此号大いに其筆格を失ふ。文政中彼れは彼れにして是は愛に稱

すべしと列山叟の遺託もあれば、天保六年にいたり井山に五味堂なさづく。又発判に及ばずしてやみぬ。其後葛哉のさづかりとなれり。

亭　堂　是又天地菴の一号にて、萬物亭通の義にとれり。門弟菊露にさづく、後素雄門下蒿旭に傳來せり。

宜春園　是又天地菴園中の名とす。門人文龍にさづけ、吟路に傳來す。

枸杞菴　是また同じ園中によりての名なり。門人李風にさづけ、德砆に傳來せり。

晦近舍　明和六年始て号する處なり。

　有明も晦日に近しもちの音　芭　蕉

此句によりての号にして、其實は其日菴の一稱日との風流なこゝろさせらるゝなるべし。篁阿此号か得て稱せり。

竹蘇堂　是又古き一号なり。松平作左衛門に傳へ猿江一閑人と号す。素雄の父なり。蘂風是な稱す。

與足軒　是は素丸翁吉夢によりて、其姿な以て号させらるゝ也。白芹翁是な稱し、素芹にさづけ、與足軒先机と改めしむ。先机又素丸翁の一名なり。

完　故　是は素丸翁の一名、吉夢によりて稱す。

寶机菴　是は天明元年二巻の傳書な以て、葛門の與儀な傳へらるゝにより、是な机上にかざりて寶机菴と稱す。後起筴是な守護し、白扇に傳ふ。

潺〻菴　是は其堂の賞旦に

　潺々の水揺かばきまぜ初茶の湯　素　堂

此句によりて別号とし、後法雨にさづけ、傳來して素月是な守護す。

蘭溪堂　是又一号なり。後鼠夕にさづけらる。

荷　葉　是は蓮池翁によりて稱する處、列山與へて素泉の齋号とせしむ。

爺婆亭　是は老後の一号、扇波にさづけ、秀眾にいたる。

活道耳　素丸翁六旬に及びて稱する處、蛙水にさづけらる。

渭濱菴　是は素丸翁濱町に住居ありし頃の号名にて、寛政六年始て元除通覽に見ゆ。渭水に釣なたるゝ風な慕はれしにや、後蛙水にさづけ、傳來して大旭に及ふ。

果日庵　是は素丸翁末年の号、其日菴の別稱たり。敬林にさづけ、素凡相續するに至れり。

龍　齋　是は隠名にて俳諧いまだ嗣事なし。按するに素丸翁青蚪の一名は、愚痴問答の稿に出て、正しくしるされし事を知らず。野澠翁秋顏子の序に青蚪ドと書す。蚪は井中の赤蟲にして青蛙にも劣れり。然るに青蚪ドと稱する事、其理り更にきこへず。恐らくは青蚪は青蚪にして、一角ある龍の名とすれば、龍齋より出たる素丸翁の別名にや、四祖は才學高からざれば、かゝる過ちもなしとも、いひがたし。然れども秋顏子は素丸在世の集たり。素丸翁在世ならば、其誤なば正さるべき事なり。疑ひ少なからず。青蚪に是謙退の一名として、風雅なれば暫く蚪の字に從ふ。

▲嘯月會　是は翁の法号な嘯月院鐵翁素丸居士といふより、素丸忌の名とせるなり。

—竹　阿　二六菴　又北窓菴

　二代五色墨と稱す、大阪にて沒す。素丸翁悼の句あり

　江戸へ植てちるや枕の山櫻　素　丸

馬光翁々句集の跋を書す。後竹栗北窓菴を別稱す。

―嗛　堂　巨富園　始和晧　又兼堂

後満口素丸翁が門弟となり、許可をうく。寶曆九年己卯三月、青あらしの跋を書す。其時謙堂と稱す。但絢堂と謙堂と同音なれば、はゞかりて号を改ん事をこふ。其時門下悉く過ちて、絢堂をしゆんたうとよべる故、謙堂といふとも可なりとて改められず。葛飾の文盲、百姓よみによみ定めたりとて、素丸翁笑ひ給ひしとなり。されば青蚪、青虷の違ひも珍らしからずとせん歟。文化六年某月謙堂死す。後泉布巨富園を稱す。

―東　川　下總國に住す。

―陶　雅　右に同じ

―探　翠　下總布川に住す。

―法　雨　菴茄園　半螢居　滑々菴　素花坊　赤岩洞

始名秋光　山崎與惣兵衛詮明

武州赤岩に住す。寶曆二年壬申五月、三世の時誓狀に其名あり。一子素壷追福に句集を撰らみ、松のしなりと名づく、大川戸新方領葛門の起立なり。文化八年辛未正月元日死す。男素壷百材あり。滑々菴は門入杉司にさづく。

―馬　泥　二世夕可菴　長谷川半左衛門直敷

寶曆七年丁丑九月二日卒。年四十一、圓相院諦道と号す。馬光翁の嫡也。

―南　臺　白花園　浦野新九郎

又鄉鷽

說叢大全の跋を書す。其外諸集に多く見へたり。男秋日菴孤螢と云。其子文房六世の門葉、深川六間堀に住し、評定所の書物方をつとめ、某年卒す。

葛飾蕉門分脈系圖巻之二

三祖素丸翁門人上

―素　白　元日菴　菊池伴兵衛庸辟

寶曆二年壬申五月初見、某年許可をうく。

去來菴　垣見郡次郎寛信

―青　楓

右に同じ

四世其日菴　加藤富右衛門勝照

―野　逸

寶曆二年壬申師に見へ、名を素又と授かる。素丸翁濱町の邸中に居り　台府の御材木石奉行の僚屬となり、後藥研堀にうつり、師跡をつぎ、文化四年丁卯正月十五日死す。年八十、辭世

注連かざりくゞれば月の浄土かな　野　逸

婆婆郎寂光士

わが菴に寢て花を見る浄土かな、おなじく

本所小梅常泉寺に葬る。春正院野逸居士と謚す。

別　號

其夜坊　是は其日菴に對するの号なり。既に素丸句集の跋に其号見ゆ。後門人桀圃にさづく。死して後厚和嗣ぐといへども、法会にすゝまずして死す。深川靈岸寺前、山口屋安兵衛といひ、潤濱庵蛙水の門人、嗣号の後逸山と改む。其後有計の兼号とし、又素有に傳ふ。厚和・桀圃共に世數に加へず。

竹凉舍　是は藥研堀へうつりし後、數竿の竹を愛して号となせるなり。故山号を嗣ぎて死す。

青虷下　素丸翁の旧名を以て号とするなるべし。

秋顏子の序に記せるなり。故山是を嗣ぎて死す。撥するに青蚶下の義甚疑ぐし。野逸翁竹を愛し、既に竹冷舍の号あり。青蚶下は青玕下の誤にて。竹を琅玕といふよりの一稱にや、蚶はいもりの類なり。思ふべし。

默　窓　享和二年壬戌會頭を桂洲にゆづりての後の号なり。花王日素行預い、後萬舞つぎて死す。

素　丈　是は初名なり。叢阜門人素路、素丈菴を号し、其後花王田諸一、是を名とす。

一　馬　是は一名なり。曾て門弟にさづけ万事樓と号せしむ。後錦江圃号とし脇蔵にさづく。

五　元　是は默窓と号するときの一名なり。万舞是を與へられて卒す。

是　空　一名なり。野逸翁法華を信ずるにより空諦の眞意として稱するにや。花王田百雄是を名とす。（艮朱鍈）年を以て菴号とす。晩年に別号を稱せず。七五菴・七六菴の類ひを稱し、八十に及びて死せり。

▲**梅華莚**　野逸忌の名とす。辭世の句其時節によりての稱也。

―**素　風**　日夜菴　鷹野喜右衛門知雄
黑斎門管い序者なり。

―**石　潮**　曇華齋
野逸翁の兄なり。よつて曇華齋を嗣号す。

―**素　願**　蘭這舍
安永三年申午法券に列す。

敬　林　果日庵　關根宗七元恭
武州新方領備後村に住す。子孫一篤藁く翁より果日庵をゆるさる。敬林新方に於て葛門唱導の功多しとす。

―**元　夢**　二世今日庵　栢翁又安袋　後老我と改む
森田秀安秀重
三代五色墨の作者某年死す。

今日菴は素隱士茶宗の号にて、宗旦三世を稱せらる。素丸翁の時俳諧にもあるべしとて、栢翁を俳諧者流の今日菴二世と号すべきよしをゆるされたり。其後少時嗣号の事なかりしが、文化の頃今日菴一峨と稱するものあり。白芹翁より尋られしに自稱也。一峨いはく、今かつしか今日菴と稱するゆへ、世に用ひられて頗る世業の助となれり。かまへて正風の文臺にあらざれば、甘らざる分にして玉はらば幸ひ甚しからむ。もし葛門下に今日菴を号する人あらんには、速に罷玉べしと乞ふにより、彼れも葛門なしたへばこそ、しかなれとて、其望みにまかせおかれしが、一峨死して後、今日菴元夢といふもの自稱し正風の會席にも出來れるにより、何れよりも更に免判の事もきこへざれば、毎に法券の席より追ひ返されたりしが、其後も寛山又今日菴を号す。寛山は時々菴梅山の方に執筆役いたせる奉公人にて、故ありて菴中を追ひ放たれしもの也。斯く無頼のとゝがら俳祖の一号を汚すの憚りあればとて、萬舞に今日菴の号をあづけられ、三世を稱せしむ。柳條菴國甫又千宗い茶事をたしみ、さあるべき事也と申合へるにより、葛門の今日庵發に再與せり。元夢門人多しといへども、きこふるものなし。おしむべき也。但萬舞は若年の頃元夢に見へ、俳名を芙川といひ、後藥

々翁の門下に列せしなり。

萬舞　始芙川　有隣舍　三世今日菴
木造主計俊武
元栢翁門人、後素々翁の門に入り、三世今日菴をつぎ、素岐に譲り與ふるの後野逸翁の旧号をつぎ、默窓五元といふ。嘉永元年申十月廿日卒す。祖心院と号す。

素岐　四世今日菴　始紅日菴　後竹庭と云
木造五郎兵衞俊國

莚若　緑水舍
安永七年四月野逸翁、栢翁と共に五色墨集を作る。三篇と稱す。後錦江此号を別稱とし、芦洲に授け絶へたるを興す。

貫明　乾坤菴　醍醐小平次　後勝山新兵衞と云。
房州勝山に住す。房總葛門の起立の一更ならい。當貫風此門より出だしむ。

風葉　飛塵窓　淺井半左衞門
安藤對嶋守藩臣なり。道寧菴桐門取立にて、後素丸翁の門に入りて、修行の功積りて、再び杉家に入り四世白兎園宗瑞となり、其後日山人の望に應じ、号名を東園に譲り、咫尺齋寥和となり、五色墨咫尺の一派を再興し、享和三年亥五月死す。栁門は二世白兎園門人、三篇五色墨の作者也。

蛙水　柴田多宮
安永三年甲午春既に法分に列す。野薔の父也。古誓狀に詳ならず。

移文

右に同じ

羽白
右に同じ

仙燕子
右に同じ

雲五
右に同じ

白芹　次弟菴
右に同じ

桐長
右に同じ

浙江
右に同じ

蓮之
珪琳齋　始迎月菴逸窓と云　又衆乙亭
始衆乙　又金英　山路彌七郎盛房　又佐野右衞門と改
御金奉行組同心を勤む。
初代蓮之は芭雀翁の門人雪雲の門弟也。珪琳齋、又卯畔菴と云。宗瑞・馬光と共に五色墨集を作る。是をいへども、初代五色墨と稱す。蓮之の門弟因齋・雞口・秦里ありとも、秦里は後存義と改め、浮世の文藻となり。因齋・雞口の門人も聞ゆるものなく、中絶したりければ、逸窓其俗縁あるを以て老師に乞ひ、珪琳齋蓮之の跡をつぎて別派となる。明和元申年素丸老師の門に入り、一派となり、其年死す。
但初代蓮之追善集蓮の糸と云。雞口・秦里是を撰す。天明五巳年五十番句合作者、其時逸窓と云。

珪琳　卯畔菴　山路十次郎
始金英

始漆方手代をつとめ、後御金奉行組同心となる。文政八酉年春嗣号し、天保九戌年閏四月十七日死す。男金英嗣ぐといへども罪ありて放たれ、其行方を知らず。金英は壯吉郎といひ漆方手代をつとめ、父珪琳追善の小集を撰す。其集中其菴護付によると故に葉々翁是をよろこばず、其元を知らざるの所爲なり、風交に及ばずと申されしなり。

我泉　天地菴　湛堂　高畑善次郎轉次

又有友菴と号す

明和元年甲申三月素丸老師の門人に列す。善次郎はもと江戸音羽町に住し、娼樓の厮役業とすといへども性風雅を愛し、終に素丸翁の小者に抱へられ、其篤實にして雅なるを以て撰せられ、俳席に列る事を得て、弟子の簿帳にも加へられしが、其わざ忽進みたるを老師是を褒し、是れ我が園中より穿ち出せる泉の如しとて、名を我泉と授けられ、天地庵の号を賜はり、葛門の一巨擘とはなれるなり。文化四年丁卯十月七日死し原庭の東盛寺に葬り無底居士といふ。

宗泉　始萩川　有友菴　天地菴　絢堂　又萬里齋

小出甚太郎　隠名麗山

幕府の士高五百石を知行し、本所南割下水に住す。某の年宿衛の職を辭して小普請に入る。文化のはじめ我泉死して、其妻無告なるを憐れみ、白岸翁萩川に乞ふて月俸二口を授け、文化六年巳正月天地菴の号をおくり三世とす。宗泉もとより其業に忍にあらずといへども、寡婦の口腹の爲に顧ふにより、嗣号する處也。よって當時判者連とす。其玉里扇桃江法劵にすゝむのとき、始て一列に加はるといへども猶末座とす。他門にも多々ありといへども葉々翁法劵に加はるの後、宗泉いまだ致仕せざるの先なれば、判者披露のはゞかりありて、普く告るに及ばず。既に一列に加ふるよし、葉石宗瑞に演説ありてより、世にはれて一列に座する事を得たり。月次の會合欠く事なく、門人も多くすゝみ、天地庵を里扇にさづくるの後有友菴を稱し、致仕の後剃髪して麗山と改め、宗泉を俳名とす。其實は法号道号なり。文政中古老たるにより、列山居士より絢堂の号をあづけられ五世を稱し、文政十年丁亥七月卒す、心光院と号す。

其玉　一地菴　始璃堂　加藤長次郎

武州葛飾郡一之江に住し、鶴飼付の公役をつとむ。文化十二年乙亥四月廿一日判者に列す。門人巣鳩等判者にすゝむの時、葉々翁に乞ふところの口氣を、いさゝかたのしとせられず、許狀も夫々に授けられざりし也。某年死す。

里扇　四世　天地菴

其國の村里を同ふし、名主役をつとめ、佐右衛門と云。萩川より天地菴の号をさづかり、文化十四年丁丑五月十七日判者にすゝむ。末年中嶋勝左衛門と乞ふによりて、私に天地菴の号をさづく。勝左衛門は宗泉の甥なり。萩川といひ其始巴雪といふ。俳諧は自己の意を以てし、更に葛門の教をうくる事なき一狂客也。錦江翁より風交を絶す。勝左衛門死して次男某又天地菴を自稱す。殊に俳諧を知らざるもの也。素丸老師の旧号地に落るといふべし。嘆息するに絶へず。弘化年中里扇死す。天菴地の旧号を汚す事、是誰れが爲す所ぞ。

桃江　二世湛堂

同所椿村に住す、里扇と同じく法券にすゝみ、我川より乞ふて我泉の一号湛堂を稱せしむ。某年死す。

―巣鳩　淺間菴　木村彦右衛門

武州葛飾郡小松川村淺間前に住す。文化十三寅年九月十六日、下總國八幡宿中村屋興兵衛亭にて判者披露す。錦江嗣号の時、七世の戸の集に賀章遲滯す。よつて他邦の一列に加ふ。其後中絶す。

―里栢　不易菴　栗山三郎兵衛

下總國葛飾郡國分村に住し、名主役をつとむ。巣鳩と同じく法券にすゝみ、某年死す。

―英止　一枫菴　藤谷喜左衛門

武州葛飾郡の一の江に住し、大工を業とす。巣鳩・里栢とゝもに法券にすゝみ、錦江九世相續の時、巣鳩に同じ。

―有計　始見山　有計庵　又老龜堂　鄕渡三郎兵衛
七世絢堂を号す　後其夜菴續号

始逸窓門人にて葛門のをしへをうけ、逸窓死するの後、宗泉の門に列して、文政三辰年十二月法券にすゝむ。同十年丁亥向旭樓の号を、蕣々翁よりおくらるといへども、辭して老龜臺を稱し、月朶死するの後天保四巳年三月九日七世絢堂をつぎ、名を有計と改む。幕下の士廪米百五十俵五口を賜はり、本所石原に住し、錦江翁九世相續の時は、一派の宿老として門下に其事を達す。又宗泉は葛門傳來の趣旨も疎濶にして、一派の法則を守らず、却而列山居士の門下にありて、誹諧する事多し。然るに有計はもと逸窓の門下にありて、葛門の嚴重なる事を知り、能く一派の法式を唱へて門中に教諭し、附合發句の點ぶりも、白芹翁以來の規矩に應ず。されば九世相續の頃も旧式を守り、其後の法莚にも老衰の勞をも厭はず、二三里に杖をひきて其席をかゝく事なし。實に古老と稱すべき也。嘉永三年庚戌四月六日卒す。本所に葛門の連綿は此翁の力なり。

―月朶　始有穎菴　六世絢堂　大澤孫七

御蔵六尺をつとめ、本所長岡町の組屋敷に住す。宗泉卒するの後、文政十年丁亥九月絢堂をつぐ。性酒をたしみて磊落也。天保四巳年二月廿五日死す。宗泉より傳來葛門代々の肉筆の軸物、此時失ひて有計に傳らず。恐らくは狂客の手に落るなるべし。

―杏雨　如夢菴　始桃次庵

元餘月菴東烏の門人にて俳諧を稽古し、宗泉の門に入り、文政六未年八月廿六日法券に進み、駿州芙蓉峰下の一列に不信ものあるにより、蕣々翁より擯撥をうけ、天保三辰年閏十一月一派の風交をとゞめらる。某の年飢饉て死すといへり。

―馭六　朽木菴　木村樵翁　町醫師

元我泉門に入りて學び、頗る酒狂を發するにより連中の風交を絶せらる。文政七申年宗泉より乞ふにまかせ、列山居士より是をゆるされ、宗泉の門人となり、其年の秋法券に進む。宗泉死する後、酒狂往々相發し、天保三年に至り彌甚しく、他門の會頭其外自門にも非禮の事有るにより、其年一月終に破門をうけ、諸侯へ通達せられ、某年死せりといふ。本所吉岡町に居れり。

―萩川　初名　円雪　中嶋勝左衛門

幕下の士、小十人組七番をつとめ、故ありて小普請に入る。宗泉の坊本所石原片町に住す。宗泉卒するの後、絢堂を月衆に相續せしめん事をこふ。宗泉門弟一致の怨望たるよし申せしにより、蘂々翁其乞ふにまかせ、兎山は宗泉の高弟にして、師の號を嗣がざるは本意なくおもてふせなるべしとて、素丸老師の旧號向旭樓を與へられんとの芳意をもて、折紙を萩川に附託す。有計は是を辭するにより、其折紙を掌握して返さず、月衆より度々催促すといへども終に出さず。弘化中里局を離隱して天地菴の號をうけ、判者にすゝみ、別派たらん事を求む、錦江是をゆるさゞるにより、私に判者披露の摺物を上木して、孤月・宗瑞の春季の句を巨幕峨叉は短冊にしたゝめし拾ひて是を加へ、他門へ披露す。其事露顯して孤月より是を責るといへども更に答へず、押して判者披露せりとて、天地菴の月次定會の句合等をはじめ、頗る狂人の沙汰なりしが、嘉永年中卒す。此系に加ふるに及ばずといへども、其事横行すれば書して後人の記憶に備ふ。

|有嶺　八世　絢堂　始湖鴈　後暁堂と号

錦漢寿五郎

幕下の士、有計の婿士たり。家をうけて、小十人組七番をつとめ、廩米百五十俵五口を賜はり、本所石原に住し、後深川大和町に住す。嘉永元申年四月立判。有計卒する後、八世絢堂をつぐ。

|素有　二世蕣草庵　始丁栞　北島園次郎

一世其夜坊

御徒衆行手代をつとめ、本所吉田町に住す。弘化四年未六月執筆にすゝみ、素園の号あり原巷を称し、嘉永元申年四月立判をうけ、素園の門人素磐のあづかる庭の点印をうけとり、有計卒するの後、其夜坊を号する事をゆるさる。但其夜房は野逸翁の旧号、菜國に與ふる所なりといへども、菜國は蛙水、稗山と共に列山居士より擯せられ、風交をとゞむるをもて其世數を省き、有計を其夜坊の一世とし、素有に三世を稱すべきよし錦江より附託す。嘉永六年丑の春死す。

|有白　二世　桂洲菴　有計と改む　田井孟節

本所法恩寺前に住し、町醫師を業とす。素有と同じく執筆にすゝみ桂洲菴の号をさづかり、白芹二世を稱し、又素有と同じく判者にすゝみ、有計卒するの後、有計に改むべき事をこふてゆるさる。

|有恭　素水菴　武田操次郎

本所法恩寺前に住し、貸本を業とす。素有・有白と共に執筆にすゝみ、又判者となる。素水菴を号し、白芹二世と稱し、嘉永二年夏死す。

|有寛　二世巻雄菴　小谷野豐次郎

本所北割下水新町に住し、西丸御鳥六尺をつとむ。有計の遺言せるにより、其年執筆をゆるさる。

|素水　日々菴　始春甫　岡田友盛

同所に住し、寅坊主をつとめ、有計遺言せしにより其年執筆にすゝみ、素風の号日々菴をこひ、有恭の号をもて名とす。白芹二世とすべし。

葛飾蕉門分脈系圖巻之三

三祖素丸翁門人下

徳布　三世綱堂　又如是菴　初名窓吟　佳日庵と号す　横山重右衛門重政

安永の初年、素丸老師の門に入り、奥儀を授けられ三世綱堂を嗣ぐ、本所石原に住し、米穀を鬻ぎ、山田屋と号す。天明五年辛巳五十番句合の作者とし、同六年丙午三月桑梓三河國に趣く時、旅のひとつを撰す。又東盛寺中如是菴の會吏を司り、如是菴を稱し、葛門下有名の俳士なり。寛政八年七月素丸句集を撰し、文化のはじめ死す。

百丸　白地菴　吉田長右衛門　又長太夫と改む

安永二年巳十二月二日日老師の門に入り、武州大川戸に住し、百丸太夫といふ。野逸翁其傳をつくり、頗る游戯の文章を認む。

序跋　宇呂菴　始素瓶坊茂楓といふ　小林茂吉

武州大川戸に住し、後江府に出、安永三年午正月老師の門に入り、素瓶と云。同五年四月茂楓と改。寛政四年壬子判者にすゝむ。同七年素丸翁の病臥に候し生前に記念となるべきものを乞ふ時に、馬光老人よりおくられし素丸の折紙を與へられしとて、老師歿後に葛飾素丸と自稱す。よつて一列を擯けられ、浮世の文臺となり、猶葛飾素丸といふ。時に浮世の俳士馬光あり。是を赤馬光といひ、茂楓を宇呂素丸と呼ぶ。序跋は擯せられざる前の名なり。一ニ云、茂楓俗稱を川越屋七郎兵衛といひ、江戸宿を渡世とす。中葉此事をなせしなるべし。

野叟　下總布川に住す。

天明二年壬寅判者に列し、寛政五年癸丑死す。

壘二

右に同じ、寛政六年甲寅の後見へず。

黑丸

右に同じ

逸雅　白雲菴　吉濱久右衛門

右に同じ、房州吉濱に住し、寛政十年以後其名見へず。

咫徑

右に同じ、享和二年以後其名聞へず。

橘賀

右に同じ

藍水　二世老茄園　枩伏居　近月菴　川邊藤助

武州松伏領松伏村に住し、紺屋を業とす。安永三年午二月廿六日老師に見へ、雲鶯と云。文化元年甲子判者に列し、藍水と改め、後老茄園を不干に讓り。近月庵を号し、又年齢を以て其号とす。寛政十二年七月死す。

扇波　二世渝漣亭　大海忠兵衛

豐後の國杵築の藩臣也、安永三午年四月十二日老師の門に入り、後判者にすゝみ、老師の号を授りて二世を稱し・某の年死す。

白鷗　三世渝漣亭

文化十癸酉年五月十二日嗣号、いまだ臺をゆるされずして、其後を知らず。

—龍丈

寛政五年癸丑の春、既に判者に列す。九年以後見へす。

—素甲　后也白と改

右に同じ、九年の後をしらず。

—馬裔

右に同じ

—素山

右に同じ、翌年其名見へず。

—信阿　二世　一練窓

寛政八年丙辰春既に判者に列す。文化元年甲子以後諸集に見へず。既に物故するにや。先に見ゆる處の蛙水・移丈・羽白・仙燕子・雲五・白芹・桐長・浙江・野波・壺六・里丸・適徑・思徑・橘貫、爰に出す處の龍丈・素甲・馬裔・素山、入門誓状に詳ならず。今に考ふる處し。しかれども其名古くよりきこへて、判者にも列せしなれば、明和・安永間の初見なるべし。信阿又天明六丙午年に向旭楼の執筆として、徳布・適窓と友としよし。よつて系を夫〻に次第をなして書す。

—篁阿　望汰欄　晦近舎　三好日向

本所回向院向に住し、神職たり。神前に神馬を置、往來より殊に目立ければ、篁阿を呼て同門中に馬と稱す。安永八年老師の門に入り、寛政三年辛亥春既に法券に列し、老師より三世晦近舎の号を賜はるといへども、望汰欄を以て表号とす。蓋上總國望汰郡其桑梓なるにや。列山居士七世の正統をつぐの時、大岳ともに看傍するを以て一派にこれを稱す。然るに篁阿世業に不便なる事あるにより、暫時休俳せるを以て、文化十一年甲戌より、蛙水の次に坐する事ありといへども、此時七世看傍の任にあたり、且蛙水より先輩たるを以て蛙水の上に復座す。蛙水また其下に坐する事を心よしとせず、是によつて蛙水に一老里と稱す。其事は蛙水の傳にあり。文政中白芹句集を撰するにあづかり、後序を書す。其後幾程もなく死す。

—買風　三世　一練窓　初名恕丸　僧了忍　權大僧都法印圓諦

安永五年申二月老師の門に入り、後房州大崩蒲藏寺の住僧となり、文化六巳年一練窓の号をつぐの後、素丸翁の句碑を境内にたて、稲碑集を撰す。天保二卯年七月二日化す。山中の恕丸句集及追善の俳諧あり、二日月集と号す。文政十亥年買風七十二才、其時晴月翁門人、乾坤菴宜明・白雪菴適雅（千葉氏）・千里園素鶴（布井貞右衛門と云）・光亭素玉（向井要右衛門）・喘々菴兒石（石毛新村勘兵衛）・寶机菴素來（夢山長三郎宝机窓の舊号を與へられしにや）・買風と共に七人の内、買風一人存命せりといふ。其他は後に出ゆるものなく、又法券にすゝむにもあらざれば、宜明・適雅の外に系に書さず。

—恕丸　四世一練窓　始猿三　盧一菴と号す　高梨甚兵衛

上總國山中に住す。買風没後一練窓をつぎ、老俳となり、其後死す。

—鳥嗣　初日菴

房州大崩に住す。老俳に列す。

菊露 二世亭堂 始芝雀 又素雀又眉雲 後不窮壽
万化ト云 金井亥助
安永五年申九月老師の門に入り、天明二年既に判者に列し、天明五年五十番句合の作者、寛政八丙辰年素丸句集の跋を撰す。文政のはじめ蛙水に黨し俳諧し、後風交ゆるさるゝの後、某年死す。海保半兵衛が手代にして、金銀の融通よろしきが故に、同門に用ひらる。俳諧はさしての手巧も少し。

不二賀 又不二谺 雀嶋俊哲正芳
安永五年十一月老師に見へ、寛永二年判者にすゝみ、享和元年死す。深川佐賀町中の橋積通りに住す。

素水 後正統をつぎ、白芹と改む。後に詳なり。

雲知 迎雪菴 中野佐四郎 后忠右衛門と改
武州葛西郡東葛西領小岩御番所町に住し、名主役をつとむ。安永七申年十月十四日門に入り、文政二卯年判者にすゝみ、幾程なくして死す。

孤竹 二世 玲瓏閣 小柴四郎七
上總國天羽郡長崎村に住し、安永八年亥四月六日老師の門に入り、後文化六巳年嗣号して老俳となり、其後死す。

都静 二世 向旭樓 安中左近
秋元但馬守藩臣たり。安永九年戌十二月入門し、文化元年三月判者にすゝみ、十葉士と稱す。其後死す。

二世蛙水 二世 渭濱菴 始野蒿 後有無菴
柴田多宮勝範

柴田出雲守家臣、深川六間堀屋敷に住す。天明三年卯九月六日老師の門に入り、野蒿といひ、後父の名に改めて蛙水といふ。寛政四年壬子判者にすゝみ、後渭濱菴の号をさづかる。文化元年甲子能く白芹翁の補助して十葉士に列し、文化十四年白芹翁死するの時、己れ正統六世を繼ぐべき内志ありといへども、人の需に應じてつがん事を欲す。蓋蛙水の心に、己れ白芹翁に用ひられ、古老の坐にあれば、我が外に又つぐべき器なしと、自ら許す處なり。然るに白芹翁遺言して南臺の嗣号あるべきよしを言。此時南臺は若年にして筆末なるが故に、万化・樗山・棠國等も又其内志ありて、蛙水と共に南臺の下に立事を樂しまず、時に五世白兜園宗瑞、蛙水にいへらく、白芹叟の遺言として一列南臺を立るに於て、是と爭はんもおとなげなし、又葛飾の正統は馬先・素丸と連綿して幕府の士たり。又野逸も台府に仕へたるの下吏たり。正統は昵近の武士にて嗣ぐべき先例となりたるに、其人なきをもて暫く白芹翁つぐといへども、必其人を得て幕府の士に讓らんとの素志、嘗てきく處なり。南臺子は幕府の士にあらずといへども、略拜謁の士に近し。是白芹叟の遺言する處、吾子を讓んするにあらず。吾子は葛飾一老叟と稱し、其會下に列らず、飄然として去り、其事に拘らざらんには又其徳を損するに及ばず、其志豈高からずやと。蛙水其詞に應じ、嘗て是と爭はず、然るに南臺亦死して列山居士七世嗣号をするに及ぶ。居士は白芹翁の男たるを以て、樗山等も是と爭ふ事をやめ、志を下して是が一列となる。蛙水は猶一老叟と稱し、一派の規矩を失。爰に於て文政三辰年十月十六日列山居士

より、近來白門の法を不庸諸事一存に任かせ、同門の愚意打絶るを以て白門の一列を除き、社中の儀も永く風交をたち、其よし他門へも通達するのよしを申送る。桼國・樗山も蛙水と同意なるを以て共に一列を除き、万化は其罪少しとして休俳せしむ。文政二年己卯　四家蕉門贈答に限り、雑家蕉門と風交を遠ざかるにより、終に咫尺齋雪山・寶雪菴閑山等と共に十家蕉門と号し、睦みをなす。然れども蛙水に其父より素丸翁の門下たるを以て、其日菴に遠ざかる事を本意とせず、絢堂・宗泉・大前・一賀などいへる人々にたより、列山居士と和融をなさん事を求む。列山居士も又其志を感じ、風交をゆるし、葛門別派とし、其日庵一列の次に列せしむ。實に文政八酉年三月なり。是より其日菴別派滑稽菴と稱し、永久兄弟の和義をなす。文政十年丁亥八月六日死す。其別派となれるも、一老叟と稱するよりの起りなり。五世宗瑞緒息の援を憾る處多し。しかればこそ蛙水の本を思ふの心あるをもて、爰に及ぶなるべくや。然れども己れが立るの志操し、そは然らんや、然らざらんや。

―雪竈　野蒿亭

蛙水の令をもて素丸翁の門弟となる。蛙水別派たるの時、野蒿亭を捨て葛廬と号し、無竹と改む。後に見へたり。

―素雛　應日菴

文政三辰年三月十六日葛師一老叟の門人を以て判者にすゝみ、蛙水撰ばるゝの時風交を絶し、同八酉年三月風交をゆるさる。

―素英

後葉と改、正統八世をつぐ。後に出す。

―蘭梼　紀伊國屋武兵衛

江府の北新川四日市に住す。天明四年甲辰七月十六日入門、其他を詳かにせず。蓋老俳に列する歟。

―鶴月　内田元精

東海道神奈川新町に住す。蘭梼に同じ。

―素柏　陽鳥樓　宮井左右衛門

相州浦賀に住し、天明八年申三月十五日老師の門に入り、一夢・梅一と共に判者にすゝみ、文化年中老師の遺稿問答の上梓の事を扱ふ。某年死す。

―一茶　二六菴　小林菊明

信州善光寺に住し、寛政二年戊四月七日入門、後判者にすゝみ、竹阿の号を稱し、文化年中一派の規矩を過つによつて、白芹翁永く風交を絶す。奥羽紀行あり。

―素絃　西村佐兵衛

江府京橋具足町に住し、柳居と号す。寛政三年亥十一月十五日老師の門に入り、寛政十年一馬・旦雪と共に文臺をゆるさる。

―大岳　綠竹園　朝倉大岳　裸問答の序者たり。

江府中橋桐河岸に住し、儒生たり。箕岡と共に列山居士を看傍し、後明を表し、文政の末死す。雲嵩・大岳・雨相・巣居・樗山・素[illegible]・[illegible]・寺龍共に、文化四年丁卯春判者にすゝむ。是を八人判者といふ。大岳、野逝句集・白芹句集・杏漢子の序を著す。其文只有るべきさまにて味薄し。

―光[illegible]

葛菴　始野蒿亭雪竈　依田新兵衛　又豊年

本所北割下水に住す。大岳と共に判者にすゝみ、元蛙水の介なうくるにより、野萵を以て亭号とすといへども、蛙水の跋扈をうれいて祝髪に託し、是を捨て葛庵と改め、文政元年寅年三月廿日薙髪して名を光物と改む。蓁々翁葛門に復するの時、光物の門に列し、法券にすゝむ。文政三辰年二月廿二日死す。没後句集あり。本所靈山寺中徳壽院に葬る。光學光物照顯居士と号す。

―蓁々　桃葉菴

元素丸翁門人素英といふ。没後獅子門に入り、後葛門に復す。法券にすゝむの後、八世の正統をつぐ。譜後にあり。

―絮羽　二世葛菴　始竹笆亭　木村代藏

御廣敷御用部屋六尺を勤む。廩米拾五俵一人半扶持を賜はる。本所林町喜常小路に住し、天保三辰年十二月判者にすゝみ、天保六年未三月十日死す。光物傳來、素室、青梅の軸此時任せたり。錦江門人山橋絮羽殁後嗣号し、三世葛菴を号す。後に見へたり。

―素園　葦原菴　始素海　森太吉　又太郎兵衛と改む

江府木挽町二丁目に住し家主をつとめ、寛政六年寅七月廿四日老師の門に入り、大兵と同じく法券にすゝむ。

―白志　以上菴　伊勢屋甚兵衛

江府横山町三丁目に住す。寛政六年寅八月十五日門人に列し、文化元子年三月判者にすゝみ、十葉士とし、同十二年亥正月九日死す。

―不于　四世老茄園　南藏院

武州岩槻領内牧村に住し、修現たり。文化十二年亥三月法券にすゝみ、老茄園をうく。

―文龍　二世　宜春園　始起竹庵

寛政十年戊午十二月十日判者にすゝみ、宜春園をつぐ。武州大畑村に住す。

葛飾蕉門分脈系圖卷之四

○野逸　葛門四世　四世其日菴

安永七年戊戌四月椿人・柳門・元夢・楚者と三篇五色墨集を作る。其時其日菴を嗣号し、素丸老師殁後八年其日菴を桂洲に譲り、文化四年丁卯正月十五日死す。春正院野逸居士と号す。

―一馬　萬年樓　始岸松　中村清兵衛

安永七年野逸翁の門に入り、一馬の名をさづかり、寛政九年丁巳二月判者にすゝむ。

―旦雪　花月菴　始野夢　大塚彦次郎

一馬と同じく判者に列す。

―逸山　其夜坊　始貫丸　又菜園　雲堂　如水菴　越後屋庄之助

一馬・旦雪と同じく判者にすゝみ、後其夜坊を附屬せられ、三代五色墨に用ゆる處の黏印を與へらる。文政元年蛙水に黨し、同三辰年蛙水・博山と共に一列を除き、風交を絶せらる。後十家蕉門の交りを結ぶ。某の年死す。逸山風交を絶するにより其夜坊の世代

を除く。

―去　水　　旦堂　后百八　舍九六と改

常州水戸に住す。一馬・旦雲・素弦・菜國と同じく判者にすゝみ、五人判者と稱す。文化十三年丙子休俳の後を知らず。

―素　梅　　灕水館　又暮山窓　齋藤儀左衛門

寛政十年戊午十一月十三日入門、同十一年己未判者にすゝみて幾くなくして死す。駿州庵原郡岩淵の庄官三庄屋を兼たり。

―格　二　　雪竹窓　齋藤常右衛門

素梅と同じく門に入り、共に判者にすゝみ、文化の中葉に至りて死す。同所に住す。

―梅　彦　　麥中庵　手嶋平吉　又一夢と云

素梅・格二と同じく門に入り、共に判者にすゝむ。駿州松野に住す。享和三年癸亥死す。素梅の實兄なり裸間谷上梓の事を扱ふ。

―梅　市　　雪花亭　黒田村　中野與十郎妻

駿州富士郡に住す。寛政十年九月十五日入門、格二・梅彦と共に假判なりけり。文政十二丑年十一月廿日死す。裸間答上梓の事を扱ふ。

―馬　白　　二世泥山　大嶋藤大夫

豐後國杵築の藩士たり。梅市と同じく門に入り、判者にすゝむ。曾て泥山を副号せり。

―青　杏　　林々菴　久米庄助

馬白に同じ

―故　山　　二世竹凉舍　佐藤新之亟

杵築の藩、寛政八年丙辰五月入門、文政十二丑年十一月十三日判者と成り、天保四年癸巳十二月廿九日死す。

―文　江　　三世宜春園　長野惣右衛門

武州新方領大當村に住す。寛政八年丙辰十月三日入門、文政二巳年判者となり、宜春園をつぐ。後死す。

―汝　泉　　荒井源藏

同所に住し、同じく門に入る。

―和　水　　四世宜春園　海老原喜七

同所に住し、同じく門に入り、文政七年申の春判者にすゝみ、宜春園をつぐ。

―起　笑　　寶机菴　三風舍　上原安五郎

同所大場に住し、起笑と同じ、弘化四年六月死す。

―樂　山　　無障菴　多賀出雲

同所中野村に住し、神職を兼たり。起笑と同じく判者にすゝむ。

―樗　山　　時々庵　始一星堂　河内屋安右衛門

神田和泉橋通りに住す。藥店の主人たり。寛政九年丁巳十月廿六日門に入り、文化四年丁卯判者にすゝみ、文政三辰年蛙水に黨して擯せられ、十家蕉門を号して某年死す。

―吟　壽　　五世宜春園　海老原左平太

武州大畑村に住す。寛政十一年己未九月廿七日門に入り、天保十年亥三月四日判者にすゝみ、宜春園をつぐ。

―巣居　柳下菴　始墨市　又白龜　嶋田與十郎

本所菊川町に住す。文化四年丁卯樛山と共に判者と成る。

―百觀　如意堂　始花渓菴葉潤

東都出生、元白兎園門人たり。白芹乞ふて門人とし、駿河へ遣はし、松野に在住せしむ。享和二戌年十二月判者と成り、其地に於て死す。

―素桃　始花頂　二世聽水觀　齋藤義三郎　儀左衛門と改

素梅の家をつぎ、又聽水觀をつぐ。岩淵の會頭たり。享和元年辛酉五月判者にすゝむ。

―蘿蘿　永日庵　望月重右衛門

駿州岩淵に住し、素桃と同時に判者にすゝむ。幾程なくして死す。

―素因　二世雪竹窓　齋藤儀右衛門

同所に住し、文化十酉年六月朔日判者にすゝみ、天保三辰年七月十三日死す。格二の弟なり。

―朶雲　狴花園　始松風　望月恭平

寛政十一未年二月廿三日入門、素因同時に判者にすゝむ、同所に住す。

―共丸　宜照庵　後平日庵　望月權左衛門

朶雲同時入門、同所に住し、文政七申年判者にすゝみ、弘化二巳年四月死す。

―安徑　梅堂　大須右膳

文化元年甲子十葉抄の一士たり。其時法券にすゝむ、后一枚起請の難論によつて一列を除かる。本所に住し、幕下の士たり。其孫右膳小十人組を勤め、俳名呉菌といふ。風谷にたより安徑の追慕をいとなむ。

―風谷　鳩來菴

安徑擯けらるゝの時、其會下を去りて白芹居士に隨身す。後判者にすゝむ。判系にあり。

―是空　四世蟲華齋　始和日庵百雅　増田角左衛門　後素后と改

豐後岡杵筑の藩臣、國人より中老にすゝむ。五世より免判の沙汰ありといへども、其勤めにさゝわる事あるたも〻辭す。列山居士蟲華齋の旧号をおくり、野逸の一名是空に改めしむ。男百雅・泉布あり。皆篤重の俳風を學ぶ。

―柳壽　三世素信齋　后綾瀨居　庄兵衛

武州綾瀨領戸塚村に住す。文政九年戌三月四日判者にすゝむ。孫柳栞あり。

―烏林　長無合　始鼎林　中山忠藏

野逸翁の男なり。文化元年甲子判者にすゝみ、十葉士の一人なり。翁句集の跋を書す。文政中本所入江町に住して死す。

―茶十　煙雨軒

上州高崎の藩士たり。文化元年甲子十葉士に列す。

―指尺　寸陰堂

文政元甲子年十葉士に列す。

―呉陸　午炊庵

右に同じ

葛飾蕉門分脈系圖卷之五

葛門五世
●白芹　五世其日菴　關根三右衛門昭房

安永六年丁酉九月十九日素丸老師の門に入りて、名素水と與へられ、天明元年辛丑執筆となり、後判者にすゝみ、五味堂柱洲といふ。享和二年壬戌野逸菴の讓りをうけて正統五世をつぎ、白芹と改む。文化元年甲子蛙水・安徑・白志・月旦・鼎林・風大・指只・都靜・奥陵と十葉抄を作る。東都馬喰町に住し、百姓宿を渡世とし頗る富めり。文化十四年丁丑の冬辭世

水や空ほどけてしまふ枯すゝき　白芹

此句を殘し十月廿一日死す。年六十二、法名珠允白芹、深川靈岸寺中稲旭寮に葬る。

別號

黄鳥亭　是は素芹と稱する時の号なり。三男にさづけ、黄鳥亭素芹と号せしむ。

素信齋　是は文化年中の一號なり。葛飾の名と共に門佳岡にさづけ、今武蔵綾瀬に相續す。

素水　是は初名なり。有恭、素水菴を與へられ二世とす。後亦素水あり。

素后　是も一名なり。一桂・素后菴をさづけらる。

東呂子　是は昔の名をもて一名とす。后業研東呂の二字をさづけられ、東呂視といへり。

素芹　初名也。前に見へたり。

葛哉　一名也。桂岡に與へらる。

桂洲　法弟にすゝむとき此名に改めらる。男三右衛門に與ふ。後右白桂洲庵を稱せしむ。白芹翁傳來の旧号を用ゆる絢堂・五味堂・奥足軒・万里齋・又旧名先故を稱せり。

―唐和　月洞菴　西嶋善右衛門

江府橋本町四丁目に住し、文化四丁卯年雲靄・大岳等と共に判者にすゝむ。

―桂洲　五味堂　關根三右衛門

江府馬喰町三丁目に住し、父白芹の家業をつぎ、又俳諧の号名を與へられ、老俳に列し、病多くして死せり。

―列山　七世其日菴　關根甚右衛門

白芹翁の二男なり。始祖栗又花洲といふ。南臺居士世を早ふするの後、文政元年戊寅四月七日其日菴を嗣号し、馬喰町に隱室をもふけ、又淺草にうつり、剃髮して後文政九年八月廿五日死す。年三十七、辭世

雪の世をさとる其夜を鶯かな　列山

東の淺草本願寺中眞福寺に葬る。禪靜頭

別號

曉峯園　列山と改るときの号なり。

峯雲堂　右に同じ。

花洲　初名なり。松暁、花洲園を稱す。

祖栗　右に同じ。春宜、祖栗堂を号とす。後柳哉・祖栗堂を嗣号す。

―桂岡　素信齋　葛哉　山口清之助

江府馬喰町に住し、号名をさづけられ、老俳たり。

―成貫　木居菴　始楚十　野村源藏

同所に住し佛師たり。文政三辰年十二月判者にすゝ

み、後代俳を唱へて狂句を專とす。某年死す。東嶺寺、野逸・列山の木像は成貨の作なり。源光法橋といふ。

—菴鄕　弦藻菴　秋元喜太郎

江府高木町四丁目に住し、文化六年辛未三月廿八日判者にすゝみ、天保七年丙申十月二日死す。

—葉山　二世々哉菴　松本庄左衛門

江府住吉町に住し、香具渡世をなし家富り。月旦の男成貨と同じく判者にすゝむ。

—先哉　鹿足軒　始黃鳥亭素芹　鹿島屋

白芹翁三男也。幼名幸之助、後鹿島屋をつぎ芝口に住す。翁傳來の号名を與へられ執筆とす。男又素芹といふ。古調菴社中となる。

—万岳　皓月菴　田中隼人　又道悅

武州金澤六浦に住し、文化十四年三月判者にすゝみ天保二辛卯年三月十三日品川妙國寺中に寓居し、又相務浦賀に移り、醫を以て業とせり。

—秦賀　雨儀菴　始赤松園南道　正福院勇目

武州新方領七左衛門新田正福院の住職たり。文政十一年子五月十五日嗣号判者にすゝむ。

葛門六世
—南臺　六世其日庵　鹿野十郎兵衛

台府の御鳥見見習をつとめ、本所松井町に住す。浦野南臺に其祖父なるなり、白芹園南臺を嗣ぎ、白芹遺言によつて六世をつぐ。文化十四年丁丑十二月廿四日卒す。淺草今戸慶養寺に葬る。法名南臺院岳哲自休居士と名す。

辭世　絲てなき身こそ安けれ雲の道　南臺

別號

林堂　其はじめ林堂莎鳥と号す。葛門に其号名を稱するものありといへども、秦鶴を以て林堂の二世とす。

白花園　六世血緣あるをもて、先南臺の号名をつぐ。是を山里にさづけ、三世を稱せしむ。

登鳥　初名也。

—文房　秋日菴　浦野新九郎

評定所書物方をつとむ。後孤壘と改む。故南臺の孫なり。執筆となり、某年卒す。

—鶯谷　尾花庵次郎

・執筆にすゝみ、後免判の事ありといへども辭せり。

—仙瓢　六道菴　村壽兵衛

對務の藩臣たり。元伊勢蕉門長水の流也。二世秋瓜の門人、判者にすゝみ、柳門を再興し別派となる。

—菜泉　二世荷葉齋　后小時庵　鳳岡田安五郎

武州越谷尾ヶ崎新田に住す。文政九年戌十月四日判者にすゝむ。

—呑醉　養元庵　鈴木網右衛門

文化十二年亥三月十一日入門、武州新方領大道村に住す。弘化四年春判者にすゝむ。翌年三月九日披露。

—吟和
呑醉に同じ

—槳山　無隣菴　多賀出雲正

武州中野村に住し、新方領の會頭なり。弘化四年六月判者にすゝむ。

—有 中　清水四郎兵衛

同所大場に住し、老俳とす。戊申三月也。

—一 力　大塚龜藏

同所釣上に住し、執筆となる。

—德 甫　錦花園　園恭平

文化十四年丑六月入門、文政九戊年十月十二日免判

駿州岩淵に住し、嘉永中の會頭たり。

—艶 之　三世聽水館　齋藤五郎兵衛

德甫と共に門に入る。同所に住し、素桃の長子なり。天保八酉年十月廿五日判者にすゝむ。

—仙 竿　二世雪雀亭　中野與市

德甫と共に門に入り、駿州黒田梅市に養はる、艶之の弟也。同じく判者にすゝむ。

—素 石　古來菴　六有と改　關雄平

駿州岩淵に住し、門に入る頃は、后木町に住し、望月玄勇と改む。同じく判者にすゝむ。

—素 三　三而菴　始月下菴三和　三國和助

下野國安蘇郡佐野鑓名村に住す。文政二年三月入門、同四年辛巳三月判者にすゝみ、天保九年戊戌四月素三と改む。

—吳 蘭　大新伊兵衛

本所石原新町に住し、文政四年二月入門、安經の嫡子なり。

—白 扇　寶机菴　於靑㵎堂　齋藤德三郎

武州新方領西新井村に住す。文政五年壬午正月入門、天保九戊年九月九日判者にすゝむ。

—玄 龍　素信齋　彩雲居　[illegible]支涯

武州足立郡戸塚村に住す。文政五年午七月入門、白扇と同じく判者にすゝむ。某年死す。

—三 省　永日菴　[illegible]幸次郎

駿州岩淵に住し、塩問屋を業とす。文政六年未五月入門、天保八酉年十月廿五日判者にすゝむ。

—雅 光　池谷幸之助

文政六年未五月入門、天保四年癸巳老俳となる。

—谷 水　谷田次郎左衛門

武州足立郡戸塚村に住す。同年九月入門、天保九戊年九月二日執筆にすゝむ。

—蘭 陵　芳堂　小手三右衛門

武州岩淵領長宮村に住す。其地の會頭たり。同年八月門入、天保八丁酉年八月二日死す。

—其 葉　萩葉菴　平野茂兵衛

江戸元濱町に住し、紫染を業とし木屋と号す。文政六年未九月入門、同七年甲申四月九日判者にすゝみ、天保元年十二月廿四日死す。門弟曾羽二世萩葉菴を[illegible]ぐ。執筆に列するに及ばず。伊勢町西側目大坂屋太助といへり。

—白 融　晴雪堂　西村伊之助

兩國東岸大德院門前に住す。文政元年六月入門、執筆となる。

―奇　山　　映松亭　　眞間田雄助
素素の悴也。文化八年三月入門、天保九戊年九月執筆、某年死す。

―木　淵　　不梔菴　　會田源藏
同所釣上新田に住す。文政八年六月入門、天保九戊年九月九日判者にすゝむ。

―如　繡　　荷葉齋　　金子吉右衛門
武州長宮に住す。蘭陵の子なり。文政八年九月入門、天保十亥年三月四日執筆にすゝみ、荷葉亭をつぐ。嘉永元年戊申三月十九日判者披露。

―秋　里　　穰亭　素信齋　　中山利右衛門
武州綾瀬彌兵衛新田に住す。文政八年九月入門、谷水と同じく執筆となる。弘化四年丁未春判者にすゝむ。

―素　中　　　中山吉次郎
同所藤八新田に住し、秋里と同じく門に入る。弘化四年丁未の春老俳となる。

―素　東　　日出菴　雨儀菴　　中山政右衛門
素中に同じ。秋里と同じく執筆となる。弘化四年丁未春判者にすゝむ。

―龍　正　　始洲園　　山村祐藏
同所安行村に住す。嘉永元年執筆となる。

―桃　英　　　景月長兵衛
駿州岩淵に住す。文政八年酉十月門入。

―南　陝　　青陽庵
甲州大野宿に住す。門入右に同じ。判者にすゝみ、行衛を知らず。

―道　舊　　黒樹園
元金令舍道彦門人、文政八酉年十一月十一日其日菴に隨身、附答にて判者披露、本所元町に住し、后深川に移居し、中絶す。

―榎　松　　碎路園　　原田新八郎
武州綾瀬長嶋村に住す。文政九戊年正月入門、天保九戊年九月執筆、弘化四年春老俳となる。

―窓　曉　　　厚川文次郎
同所戸塚村に住す。同年三月入門、弘化四年春執筆となる。

―野　月　　　米野粂次郎
同所同村に住し、同時入門、弘化四年春執筆となる。

葛飾蕉門分脈系圖卷之六

八世蓁々錄門弟法券之分

八世其日菴　文政七年申正月々可菴を繼ぐ

蓁々

天明四年甲辰三世溝口素丸翁門人となり、素英と稱す。時に七才、後一窓下梅者に從ひ俳子門を學ぶ。文化十年癸酉葛門に歸り、宅物の會下に列す。文政元寅年三月廿日桃葉菴蓁々と号し、法券にすゝむ。文政九戊年九月四日列山沒後、旧菴に於て其日菴嗣号、八世を稱す。天保十四年己卯年九月十三日賞

を易へ、其日菴を錦江に授く。會頭を嗣ぐ事都而十八年。

別號

桃夭菴　文化中庭上に桃あり。其實熟する事早く、六月祇園會の頃甚美にして枝葉殊に繁茂す。依て桃葉菴と号し、名を蓁々と改む。是周南桃夭の詩によれる處なり。點印の文字又桃夭の詩と小序とをとれり。

周南四点　華實五点　無鰥民七点　婚姻以時十点　蕡實一点等

昔拔のかた后妃之德、おしもの明鏡如心、但鏡のうらに彫する圖なり。

其後光物乞ふて會頭傳来の点印の襍印を用ひ、此印をば錦江に與へらる。

貫湖堂　是は本國近江なれば号とする處、是を堂号に用ひられしなり。

庭賞　庭上に老樹あり、梅花常に早く、歳寒より馥郁たり。よつて庭賞の号あり。

素英　天明中より号する處は初名なり　錦江の筆園是を名とせり。

業々菴傳来の田号・ゑ可菴又素達園・方里齋・蓮池主人を稱せり。

―素峨―　二世素仙堂　三世向旭樓　桃丘菴　梅居七

初名諸石　又成器　矢島敬義行篤

台麻布小普請太田内蔵頭組なり　廩米五拾俵二口を賜はる。蓁々翁へ入門の時、青山甲賀町に借地住宅し、夫より淺川町邊にうつり、小日向大曲り上野氏の長屋に居り、小石川車子橋に移り、富坂上に居し、

下谷金杉にゆき、某の男子を養ひ、天保六未年致仕し、下谷忍ばず池の近きあたりに住し、又同じあたりに住かへて、文政三年庚辰十二月判者にすゝみ、庚寅向旭樓をつぎ、天保二卯年素仙堂を與へられ、同十四卯年七月七日下谷池の端に於て死す。

辭世　うら盆や死して行には能い時分　月阿

―木我―　二世桃丘菴　四世素仙堂　謙虚道人

初名蒸齋　加瀬崎十郎

天保三辰年三月執筆となり、六月廿七日桃丘菴をつぎて判者となる、安政元寅年十二月、四世素仙堂を嗣。

小石川鐙坂に住し、後に本郷御弓町に移る。御天守番を勤む。

―我蔦―　來賀堂　坪山銀之助貞平

天保十四年十二月八日執筆と成、嘉永五壬子年十一月廿日法筵にすゝむ。

―梨岳―　夙夕菴　六時菴　初号葵雀木芳

初名蒸齋　雪鶴　岩瀬長之介隆吉

文政十二年己丑六世白兎園杉風舍菽翁門人となり、杉丘と稱す。菽翁歿後葛門木我の舍下に列す。天保十四年十二月執筆にすゝむ。嘉永五年壬子十一月判者にすゝみ、夙夕庵を稱す。

―其石―　初月丘庵我醉　后号時雨菴　二世陽烏樓　平山兵作久翰

右我蔦に同じ。

―一瓢―　初名我童　竹堂　山本粂吉

弘化二巳年十一月執筆、嘉永五年十一月判者にすゝむ。

─我　山　　津隆亭　后少林軒　津川俊榮高政

右に同じ。

─瀑　牛　　沌ゝ菴

右に同じ。

─柳　哉　　紅雪庵　二世祖栗堂　小野藤五郎母

嘉永二酉年十月老俳、同五年法券披露。

─梅　居　　古梅庵　東條精一郎

橋府につかへて徒目付をつとめ、小石川小原町の邸中に住す。始梅菴青蘿といひ、文政十二丑年十一月十三日執筆となり、天保七申年十月判者にすゝみ、芦蕉堂修復の事により不信多く、暫時休俳して嘉永二酉年死す。

─峩　梅　　竹光亭　淺見與曾次郎

武州秩父我野南川に住す。天保九戊年執筆にすゝみ同十一年子三月免判、某年死せり。

─梅　友　　竹外菴　安藤由輔

同所北川に住し、峩梅と同じく執筆にすゝみ、同じく免判をうけたり。

─二世 蓁　峨　　初名峩月　五世向旭樓　始素秋園　黒木閑悦

紅葉山御靈屋附をつとめ、麴町二丁目裏隼町に住す。天保十四年已卯秋執筆となり、嘉永二酉年十月判者にすゝみ、五世向旭樓を嗣号す。是蓁峨歿後錦江直弟となれるの後、免判たりといへども其名をつけたるが故に爰に附す。

─錦　江　　二世桃葉菴　九世其日菴

系、後に出す。

─蓁　阜　　三世素仙堂　梅曉菴　小田切淸十郎

台府の御徒目付をつとめ、四ッ谷ひしや横町に住す。文政八酉年四月判者にすゝみ、天保十四年癸卯秋三世素仙堂をつぐ。

─菊　路　　二世素丈菴　尾崎善太郎

台府の小普請組たり。父新八郎奥火之番をつとむ。天保六年壬七月廿四日素丈菴をつぎ老俳となり、同七年丙申十二月判者にすゝむ。

─松　曉　　花洲園　二世桃曉菴　后圓翁と改む　熊切惣右衛門

御膳所六尺、御製薬所出役をつとめ、青山山岸に住す。菊路と同じく嗣号し老俳となり、同じく判者にすゝみ、天保十四年癸卯秋師の号桃曉菴をつぎ、後圓翁と改む。

─阜　月

三世素仙堂蓁阜の男、安政二卯年　四世夕可菴　始蓁星菴　中田庄左衛門

─冬　史

神田条之丞家筆たり。四ッ谷荒木横町に住す。文政八年酉五月十二日判者にすゝみ、天保十四年癸卯秋夕可菴をつぐ。

─雪　史　　皓雪菴　二世蓁星庵　西塚德左衛門　仁兵衛と改

野州小山在下石塚村に住す。天保九戊年執筆にすゝみ、天保十四年癸卯秋判者にすゝみ、師の号をつ

ぐ。

―徳甫　錦花園　關恭平

駿州菴原郡岩淵に住し、醫を業とし、白芹翁の門に入り、文政九戊年十月十二日判者にすゝむ。列山居士既に許可の事を命ぜりといへり。

―杜亮　水哉樓　后若水と改む　齋藤源右衞門

同所に住し、列山居士の門に入り、德甫と同じく判者にすゝむ。

―利躬　幸松園　又走川亭　坂本藤藏利豫

甲州巨摩郡竜輪新町に住し、名主役をつとむ。天保十亥年三月十五日判者にすゝむ。利躬又幸松園は稻後の門人也。素丸翁の門に入り、後柳家尺五の門に遊ぶ。利躬其旧をしたひ葛門に入れるなり。某年死す。

―淇翠　四世如星菴　始脩竹園　佐藤十兵衞

二丸御留守居をつとめ、今川小路に住す。文政九年戊二月執筆となり、同十亥年七月廿日判者にすゝみ、如星庵四世をつぐ。嘉永四年辛亥四月朔日登庸の後一列の席を別にせり。

―葛哉　五世夕可菴　三世素泷閣　五味堂
初桂露　始窓　又蓁川菴　月可園
石川市左衞門一尉

大御番をつとめ、廩米三百俵を賜ふ。文政九年戊六月執筆と成り、同十二丑年五月判者にすゝみ、三世素泷閣をつぎ、天保十四年癸卯葛哉をつぎ（原文缺）五世夕可菴を相續せり。裏六番町に住、後本鄉御弓町に移る。

―泰賀　五世雨儀菴　弄花園　釋勇日

武州足立郡七左衞門新田正福院の住職なり。白芹翁の附弟、文政十一年子五月十五日嗣号、判者にすゝむ。

―故山　二世竹凉舍　佐藤新兵衞

豐後杵筑の藩臣、江府花王山に住す。四世の時入門し、附弟として文政十二丑年十一月十三日判者にすゝみ、竹冷舍を号し、天保四癸巳年十二月廿九日死す。

―艷之　三世聽水觀　齋藤儀左衞門

白芹翁附弟、天保八酉年十月廿五日判者にすゝむ。素桃の男也。

―三省　二世永日菴　瀧幸次郎

駿州岩淵に住し、列山居士附弟、艷之と同じく判者にすゝむ。

―仙笙　雪花亭　中野藤吉　后與市と改む

駿府富士郡黒田に住し、素桃二男なり。梅市孫女聟となり、中野家相續、今川家の旧臣にして今に陣屋と唱ふ。艷之と同じく執者にすゝむ。白芹翁附弟也。

―六有　古今菴　始素石　望月玄勇

駿州庵原郡木嶋村に住し、醫を業とし、艷之と同じく判者にすゝむ。白芹翁附弟なり。

―白扇　寶机菴　始青漣堂　齋藤德三郎

武州綾瀨領西新井村に住し、名主をつとむ。列山居士附弟、天保九戊年九月九日判者にすゝむ。

—玄龍　彩雲居　橘玄逵　素信齋

武州足立郡戸塚村に住し、醫を業とす。白扇に同じ、某年死す。

—衛來　六世爾餓菴　始俗山軒

武州新方領俗山村に住す。桒泉弟也、泰賀死するの後、嗣号して白扇・玄龍と同じく判者にすゝむ。某年死す。

†木淵　不極菴　始青鳥舍　會田源藏

武州綾瀨尾ヶ崎村に住し、白扇と同じく判者にすゝむ。

—鼠夕　老茄園　增田與兵衞

武州葛飾郡大川戸に住し、蘭溪堂と号し、老佛に列し、天保十亥年三月四日判者にすゝみ、老茄園をつぐ。四世附弟也。

—吟路　宜春園　海老原左平太

武州新方大畑村に住し、鼠夕と同じく判者となる。

—素月　累日庵　又杉滴舍　南藏院式部

武州岩槻領内牧村に住し、修驗にて百姓を兼たり。老茄園不于の男也。天保十亥年三月四日鼠夕・吟路と共に判者となり、また得々庵を号す。

—素丈　壘華齋　始泥山路　大河内定衞

豐後杵築藩花王田に住す。七世列山居士附弟たり。文政十亥年九月執筆、天保十一年子五月判者と成り、素行死する後壘華齋をつぐ。

葛飾蕉門分脈系圖卷之七

九世錦江門弟法券之分

∴錦江　九世其日庵

文政元寅年父葉々翁、名錦江、号を紅日庵と賜ふ。同三辰年列山居士執筆とす。同八酉年四月判者にすゝみ、桃曉菴桼阜とゝもに許可を得る。

花よりも實に風いとへ桃ざくら　列山

父の号桃葉菴二世をつぐ。此列山居士の一章を太白堂孤月一覧して、今度法券披露は叟も滿足ありしなるべしといへり。天保十四年癸卯壬九月葉々翁易簀の後其日菴をつぎ會頭たり。其はじめ天保五午年葉々翁日光登山の後は、すべて一派の事を本行す。

紅日菴　初号なり。葉岐にさづけ又葉收にさづけ後其風に與ふ。

練水舍　楚茗の号を以て一号とす。後練水舍芦洲に與ふ。

竹庭　葉峨・錦江・葉阜・洪翠・一時に四君子と稱す。其時の假稱なり。葉岐にさづく。但葉峨を梅居とし、葉阜を闇齋とし、洪翠を菊窓とす。

一馬園　野逸翁の一名を園号とす　後、駿哉に授く。

桃葉庵　父の号をつぎて二世を稱す。後其曉を三世とす。

玲瓏閣　馬光翁の旧号中絶する故、再興のため別号とす。後竹堅に與ふ。

陪仙郎　桃によりての一号なり。松唯に與へて乞ふに任す。

絢星樓　是は書樓の号なり。
桃所　桃葉庵といふより一稱とせり。
葛長者　是は葛門の長たるをいへり。
蓮池翁　素堂の物數寄をしたひ、一時庭上に蓮をうへて
　我池は一葉うきてもはちすかな　錦江
是より蓮池を稱す。即、藥と翁又一号とする處なり。
秒光齋　是は菜集の序にしるす處、光陰を愛するの義なり。
引考堂　是又菜集の序にしるす處の堂号、老者を迎ふるの微意、且長生を祝するなり。
藥咖　一時の名とす。藥哦入蓮の後是を用ひず。
膝六丈人　雲の小集に狂名とせり。
向旭樓　藥哦物故の後樓上の号とす。二世藥哦にさづく。

｜芦洲　三世練水舍　始桃晁庵　青木富八
幕下の士、小十人組をつとむ。市ヶ谷長延寺谷鼠坂に住せり。文政十亥年九月執筆、同十二年丑十一月練水舍嗣号、天保二卯年十月判者にすゝむ。
三世葛庵　始桃水菴　橋本増太郎

｜山橋
青蚪
尾藩徒士をつとむ。文政十二丑年十一月十三日執筆、天保六未年閏七月十五日葛菴嗣号、點印を翠羽田菴よりうけ、獅子の押物を藥々翁よりさづけらる。光物用ふる處也。天保十一年癸子五月判者にすゝむ。門人多し。

｜錦曉　今日菴　始農中菴　長田理介守信
幕下の士、六百五十石を知行し番町厩谷に住す。南番之徒士なり。山橋と同じく執筆にすゝみ、天保三辰年八月廿七日判者にすゝみ、藥岐より今日菴を乞ひ五世を稱す。

｜竹雫　玲瓏閣　始玲月菴　石谷隼太郎
北窓庵
幕下の士石巻三左衛門の嫡たり。麹町清水谷に住す。天保三辰年八月廿七日執筆となり、同七申年十月判者にすゝむ。

｜藥雨　江曉菴　嶋野遜齋
始橋府の近習番をつとめ、大野幸三郎といひ、後剃髮して嶋野遜齋と改め、牛込中御徒士町西木戸の外に住す。天保五午年十二月執筆、同十一子年五月判者にすゝみ、十月廿日万里齋の号をゆるさるゝといへども、いまだ披露するに及ばず、弘化五申年春病て死す。門人可椎・雨夕あり、直弟となる。

｜其曉　三世桃葉菴　丸七文平
小普請の世話取扱をつとめ、稟米百俵十口外御賄料を賜はり、牛込御用屋敷に住す。天保十一子年四月執筆となり、同十四年癸卯十月判者と成り、藥々翁桃葉菴の時の點印を授けられ、燕齋書の額を傳ふ。

｜松唯　六世今日菴　陪仙郎　始桃和亭　内山定七
四ッ谷箪笥町に住し、鞘塗師を業とす。後南伊賀町にうつり、又大德寺門前代地に居る。其曉と同じく執筆にすゝみ、同じく判者となり、今日菴を稱す。

｜秀翠　翁婆亭　竹中万藏
豐後杵筑の藩たり。

｜素東　兩儀菴　中山政右衛門

武州綾瀬藤八新田に住す。列山居士附弟也。天保九戊年執筆となり、弘化三年未春冤判、兩儀菴を嗣ぎ摺物を作る。

―秋里　素信齋　中山利右衛門
同所新兵衛新田に住す。右に同じ。素信齋をつぎ、すり物を作る。

―呑醉　養老菴　鈴木綱右衛門
武州大道に住す。新方綾瀬の中間なり。後專、起笑に取立らる。五世附弟也。天保十亥年三月執筆と成り、素東・秋里と同じく判者と成る。同甲年三月九日披露す。

―如舗　三世荷葉齋　金子吉衛門
武務岩槻長宮に住す。列山居士附弟也。天保十亥年三月四日執筆となり、荷葉齋をつぎ、嘉永元申年三月九日判者と成る。

―長丸　三世鑵花園　望月孫右衛門
詩雲と改。
駿務岩淵に住し、嘉永二年酉十月判者にすゝむ。

―格二　三世　雪竹窓　池谷喜三郎
机月と改
右に同じ。

―素篤　二世林堂　齋藤彌惣太
始泰徑　行日菴
右に同じ。渡舟場役人なり。一時其日庵に來り家章と成る。林堂の旧印をおくる。

―一陽　方長園　水哉樓　望月清助
右に同じ。

葛飾蕉門分脈系圖巻之八

八世九世門弟執筆老俳嗣号之分

蓁々―八世其日菴―蓁峨―三世素仙堂

―和秀　芝雪庵　井出良助
文政十丁亥九月執筆

―木我　四世素仙堂　二世桃匠菴
天保二辰年三月執筆

―青蘿　古梅菴　后栎居
文政十二丑年十二月十三日執筆

―二世語石　芙蓉菴　鈴木定五郎　本郷元町御書物師
天保四辰年三月執筆　同七申年破門

―峩梅　貫玉菴　淺見興曾次　武島我野南川
天保九戊年執筆

―梅友　物外菴　安藤由輔　同比川
右同

―我蔦　米賀堂　坪山勘之助　御弓町
天保十四年十二月八日執筆　寺町余谷に住す

―梨岳　夙夕庵　初六時菴
右同

―其石　陽島樓　初時雨菴　平山兵作　御屋敷鍋門前　本郷九山衆坂町住
右同

―一瓢　錦月菴　初竹堂　山本兼吉
弘化二巳年十一月執筆

―我山　達磨亭　津川俊糸
右同

―瀑牛　沌々庵　山口安三郎
右同

一守
梅質齋山田榮藏 武名小杉名主
天保十一子年五月披露 某年死

梅彦
玉鱗堂 莪梅倅
貞興
右同

月雄
板行村鵜井山神主 鶴水庵 朝
日隼人
右同

柳哉
祖栗堂 初名紅雪菴
嘉永二酉年十月老俳
小野藤五郎母

錦我
雨中庵 淺見孫兵衞

我柳
鶯眠居 小川恒作

錦江
九世其日菴
文政三辰年春執筆

蓁阜
三世素仙堂

冬史
四世夕可菴

古史
皓雲庵
天保九戌年執筆

菊路
二世素丈菴
天保六年壬七月廿四日嗣号老俳

松曉
二世花洲園
右同

寒葉
二世林宿舍
右同
細工同心青木傳藏
四ッ谷南横丁に住す

洪翠
如是菴
文政九年六月執筆

桂雲
三世素遠門葛
哉と改
右同

露竹
如意二世緑雪菴
桂山と改 重松辨左衞門
松平隱岐守家臣天保三辰年八月廿七日執筆

蓁峽
桃中菴 飯塚
彦三郎 御殿数寄屋
文政十年丁亥九月執筆

悟尺
二世寸陰堂 太田
忠右衞門
幕府之士
弘化二巳年十一月嗣号
老俳

桂露
阿香庵 石川辰之丞
同年同月執筆

秀翠
翁婆亭 竹中
万藏
五世附弟杵筑藩
右同
同年四月嗣号

路一
泥山 大河内定衞
杵筑藩 七世附弟
右同
後壘華齋

泉市
巨富園

一篤
累日庵 關根與兵衞
天保元寅年正月嗣号老俳

蓁風
二世竹鮮堂 成田與八郎
天保六年壬七月廿四日嗣号老俳

李風
三世梅柁庵 和田瀬兵衞
天保四年老俳杵筑藩

萬舞
三世今日菴 木造主計
文政十亥春老俳嗣号 後試窓丘元卜改
嘉永二年十月廿日卒 元柏翁門入

啓宜
祖栗堂 中田左右平
冬史之父なり
文政九年丙戌十月嗣号

清歌
芦葉菴 清吉
甲州若神子宿に住す
同年老俳天保八酉四月文臺を免さる

白扇
清漣堂 後寶札庵
天保四癸巳年九月執筆、呑醉の次なり 五
世附弟

茶光　南薫舍　菅沼德右衛門　文政十亥年春老俳　元光物門人
藤蘿　芝崎幸藏　深川奥川町に住し後喜常小路に住す　光物弟　同十一子年老俳に列す
馬山　古稀菴　太田元右衛門　天保四年癸巳秋老俳に列す
素海　武州鳳戸に住す　同年老俳　六世門人
共完　尙菴　野州佐野越名同年老俳
恕丸　一練窓　一名猿三　上總峯上に住す　右に同じ　買風取立
桃英　望月長兵衛　列山附弟　駿河岩淵に住す　右に同じ
吟路　老圃菴　武州大畑に住す　右に同じ
醫　良山　一棕舍　同所に住す　右に同じ　五世附弟
圃遊　近月菴　武州增林に住す　右に同じ　五世附弟
一力　竹節堂　大塚永藏　天保四癸巳年執筆　武州綾瀬釣上に住　五世附弟
蘇水　靑々舍　五世附弟　右に同じ
香醉　養元菴　武州大迫に住す　五世附弟　右に同じ
玄龍　彩雲居　橋玄達　右に同じ　列山附弟　武州足立郡戸塚村に住す
脩榮　岱山軒　武州新方領袋山に住す　右に同じ　素泉弟也。
木淵　春鳥舍　會田源藏　武州綾瀬尾ケ崎新田に住す　右に同じ　列山附弟

奇山　映松亭　嵐間田雄助　武州　所に住す　素泉男也　右に同じ　同斷
谷水　凉々舍　足立郡戸塚村　谷田次郎左衛門　天保九戊年九月九日執筆　同斷
秋里　醸亭　新兵衛新田　中山利右衛門　右に同じ　同斷
素東　日出菴　中山政右衛門　武州藤八谷新田　右に同じ　同斷
榎松　畔路園　原田新八郎　武州　嶋　弘化四丁未三月老俳　右に同じ　同斷
松溪　採菊菴　關根岩之丞　武州埼玉郡谷中村に住す　右に同じ
南木　楠菴　同　石神　天保四年八月十八日入門　右に同じ
東峨　北原堂　右に同じ。　右に同じ　弘化四年丁未ノ春老俳
宗銘　春鳥舍　右に同じ　武州岱山　右に同じ
如繡　荷葉齋　金子吉右衛門　天保十亥年三月四日執筆　同長宮

芦洲　桃晃菴　練水舍　文政十亥年九月執筆
　└春朝　后菊山
村父　桃曲菴　一尾內藏助　右に同じ
山橋　葛庵　桃水菴　橋本增太郎
錦曉　文政十二丑年十一月十三日執筆　霞巾菴　桃霞園　二世霞巾菴　右に同じ　長田理介
　└曉園　牧村仁十郎

｜蘂研　二世東呂硯　錦峨園　木造七十郎
天保三辰年八月廿七日執筆

｜竹雲　右に同じ
玲月庵　石卷隼太郎
｜靜雨　三世北窓菴

｜蘂收　三世紅日庵　木造脩三郎
天保四巳年三月執筆同八丁酉年十二月卒す

｜蘂岐　四世今日菴　二世竹庭　木造五郎兵衛
天保元年嗣号　後錦曉に讓り竹庭と云
其後出奔

｜蘂雨　江曉菴　大野幸三郎
天保五午年十二月執筆
｜雨夕　二世江曉庵　小林彌三郎
嘉永二酉年十月執筆

｜錦和　玲枝菴　渥美藤太郎
右に同じ

｜井山　四世五味堂　櫻井鎌五郎　新御番櫻井傳次郎父隱居
天保六未年五七月廿四日嗣号俳老　後柳隣庵入門と也甫天喜云

｜駿甞　一馬園　有竹居　桑鳴新五左衛門　始素笠
天保十一子年四月執筆同十四癸卯年十月一馬園嗣号

｜共曉　黄鳥亭　桃醉園　丸毛文平
右に同じ　後三世桃葉庵嗣号

｜松唯　桃和亭　内山定七
右に同じ

｜枝月　桃露菴　茶正母なり
同年老俳

｜松綠　桃老菴　並木平兵衛　麹町十三丁目に住す
同年老俳

｜菊山　文貫堂　川名鱗之助
天保十四癸卯年十二月八日執筆

｜文瓊　大道舍　武蔵大道名主元兵衛　吞醉取立
弘化四年丁未三月廿日老俳

｜原棠　廿香舍　同所大場　起笑取立
右に同じ

｜有中　一瓢舍　同所清水四郎兵衛五世附弟起笑取立
右に同じ

｜素中　武州藤八新田　中山吉次郎　七世附弟
右に同じ

｜龍正　白淵堂　武州安行　山村祐藏　七世附弟
右に同じ

｜壽石　翠葉舍　同無久保
右に同じ

｜五雲　荷沼舍　同
右に同じ

｜閑里　竿谷園　同　内野
右に同じ

｜白枝　弄花園　大道
同年執筆

｜春龍　大場　古嶌春藏　竹露に同じ
同斷

｜竹露　曙蓉菴　同　萩原伊宗治　文政十三年寅二月廿一日入門
同

｜翫水　招茶菴　同　萩原佐之助　同
同

｜吾樂　反竹窓　德力
同

｜笑山　起竹庵　埼玉郡末田村　葉山卯之助
同　天保四年八月廿八日八世門人となる

陽花	無塵亭	同　銚子口庄右衛妻さく
檀雪	綾塡亭　長しま	同
柳雫	綾巴居　平沼戸塚柳壽孫	同
松颯	米月菴　長しま	同
野月	松雫亭　足立郡戸塚村原川文次郎　七世附弟	同
窓曉	梅香菴　同　前野粂之助　七世附弟	同　嘉永六年癸丑八月廿日五世素信齋之許状をさづく
珠山	開蓮舍　武州長宮	同
壽水	雀聲堂	同　老俳
松鼠	翠粧菴　大川戸濱婦まつ	同　老俳　素月取立
茶正	煙雨軒　麹町十三町目家主彌三郎	弘化二巳年十一月執筆
三笠	紫山亭　近藤吟次郎	右に同じ
豊雨	翠篁菴　四ツ谷傳馬町一丁目さしまや卯兵衛	右に同じ
谷西	桃流舍　麹町十三丁目　西村	同年老俳
素英	梅旭舍　馬場庄次郎	嘉永二酉年十月執筆

宣有	二世六平菴　山邊継助　駿州岩淵	同年同月老俳
素山	五友堂　同じ	同老俳
花曉	宣照菴　同じ	同執筆
桂山	脩竹園　同じ	同じ
里曉	青陽庵　同じ	右同じ
虎勇	風竹庵　同じ	右に同じ
徳硬	枸杞菴　若山大作	嘉永四年執筆
馬六	芳草菴　武州袋村　八世附弟	同五年壬子三月老俳
井泉	芳堂　同長宮　田中伊三郎　八世附弟	同じ
白鷺	興來堂　同　銚子口	同じ
柳工	淳風館　又捲心堂　粕壁宿牛頭天皇神主　柳内匠	同じ
序國	柳貢下　武州大場村菊藏	同年月日執筆
昇月	吸光軒　同谷中村鈴木善次郎	同じく執筆
杏齋	春于菴　同所	同じ

山里　白花園　天野良次郎
　　　弘化二巳年十一月執筆
山遊　晩翠園　宮崎嘉内
　　　同年老俳
一桂　素后庵　幸野久右衛門
　　　同年執筆

素丸―我泉―宗泉―有計

白芹―列山

三和　三面庵素三と改

里麥　景棋堂　佐野小屋町住井伊家代官村上半次郎
　　　嘉永元年八月老俳

三和　月下堂　佐野越名河岸名主千國利右衛門
　　　同年同月執筆

三山　一二庵　同所町年寄　三關半藏
　　　右同じ　素三悴也

素有　葦原庵
　　　弘化四年未九月執筆
有白　桂淵庵
　　　右同じ
有恭　素水庵
　　　右同じ
有克　二世老泉堂　小谷野豐次郎
　　　嘉永三年庚戌執筆
素水　日々庵　岡田友盛
　　　右同じ

葛飾蕉門分脈系圖卷之九

渭濱庵一派

葛飾三世素丸翁門人

二世渭濱庵　柴田多宮勝範

蛙水　始野蒿　後有無庵　又泊平坊　道耳

柴田出雲守家臣深川六間堀に住す。天明三年卯九月六日老師の門に入り野蒿といひ、後父の名に改て蛙水といふ。寛政四年壬子判者にすゝみ、後渭濱庵の号を授る。文化元年甲子十葉抄の作者、文化十四丑年白芹没後葛師一老叟と稱し、文政三辰年十月十六日七世其日庵列山より風交を絶し、同八酉年三月其日庵別派渭濱庵一列と稱し、永く兄弟の和義をなす同十年丁亥八月六日死す。

渭濱庵は素丸翁濱町に住居ありし頃の名也。寛政六年始て元益通覺に見ゆ。

素雄　始鵬日庵　二世渭濱庵　大河内風之助

本所猿江に住し松平作左衛門厄介たり。素雄の父猿江一閑人と号し又素丸といふ。其傳來のよしなしらず、蛙水門に入り、文政三辰年三月十六日判者にすゝみ、蛙水没後嗣号し、嘉永元戊申正月卒す。

菊露　亨堂　淺井清右衛門

川井長門守家臣たり。文政四年巳正月廿九日判者にすゝみ、某年死す。

嵩旭　亨堂

荒尾土佐守家士なり。菊露の姻族なり。嘉永元年戊申二月廿一日判者にすゝむ。

—竹我　風拳舎
菊踏と同じく判者にすゝみ、某年死す。

—渭泉　斜椈園
右に同じ

—渭橋　餘慶庵
文政七甲申年九月十六日判者にすゝむ。

—予來　翠日庵　小出園六
逸見甲斐守家士也。文政八年酉三月十六日判者にすゝむ。

—逸山　三世　其夜坊　始深川舍厚和
深川靈巖寺前に住し、山口屋安兵衞といひ厚板煎餅をうる。如水菴逸山文政八酉年死す。逸山歸門のこと、蛙水沒後一列たり扱ひ、葉々翁許諾の上其夜坊逸山を嗣号し、文政十一子年九月廿一日蛙水大祥忌の時披露、但免判するにあらず、嗣号せるのみなり。

—松有　二世有無庵　始其松
龜島に住し米屋庄助と云、逸山同時嗣号披露、判者をゆるされず。

—三我　千日庵　始渭水
渭濱菴下の古老判者披露の沙汰なし。大旭嗣号のとき一列に加ふるよし、予來より其日庵へ通ず。元より自己の我意より出るなるべし。

—三市　二世千日庵　始鯤齋
下ふさに住す。文政四年巳三月廿二日判者にすゝみ某年死す。

—大旭　四世渭濱菴　布施孫兵衞
深川五本松に住し、西城の御書院の番士たり。元白眼臺杉雨の社中たり。素雄の門に入り、嘉永元戊申年三月廿三日嗣号せり。

鳩來庵一派

葛飾五世白芹居士門人

風谷　鳩來庵
始野逸の門人、十葉七梅堂安從の門に入り、安從撰の後白芹門人となり、文化八年辛未三月判者にすゝみ、其業に便なるを以て別派たらん事を列山居士に乞ふ。終に我沒後鳩來菴を相續せしめ、永く別派を立る事あるべからず、只一代を限るべしと、堅く誓約して文政五年壬午九月別派となり披露す。是よりしてはれて位五點を出す。風谷始淺草御藏前通りに住す。其頃雪門律雪庵午心沒して其連社中多く、皆風谷に隨從せんとす。よつて午心の風調點ぶりに粗類し、又別に一見識を立つる。是によつて位五点なき時は連中よろこばざるをもて、潛に位五點を出し、其葛門の規矩に違ふをもて別派を望みしなり。月院社何丸、信陽より出てしばらく風谷に寄食し、俳諧を修行し判者となり、大宗匠と号す。七部集大かゞみは風谷の板下也。何丸得意の後に却て風谷を誹る。風谷常に人を知らざるの過ちを悔ゆ。後淺草新堀ばたに移り、天保七年申三月六日死す。年五十九、深川靈巖寺中寮風察に葬る。鳩來庵閑叟風谷と

號す。

―井梧　米齋　鵜野市兵衞
御代官の手代をつとむ。文政五午年九月鳩來庵一派起立の時判者にすゝむ。

―蓬交　黄鳥舍
右に同じ。

―漁樂　銀花亭　杉浦丈四郎
右に同じ。御代官手代をつとむ。

―起一　萑齋　常陸屋六兵衞
右に同じ。淺草新堀端酒肆なり。後亂心して出家し破門せらる。

―梅夕　玉鳩菴　山田甚五左衞門　后東初と改
小普請の組也。小石川鷹匠町に住す。文政九戌年三月廿六日判者になる。

―波女　草鳩菴
天保二年卯三月廿七日判者、同四巳年四月死す。

―藻鯉　有穀庵　芳村淸三郎
右に同じ、淺草花川戸杵屋いよ同居。

―江聲子　玉呂樓　堀内藏頭
天保五午年六月七日法券とす。

―大澤　午月庵　菅沼氏
御留守居與力の父なり。本所表町淸光寺横町に住し手跡の指南をなす。天保五午年六月十一日判者にすゝむ。

―一雅　曉池菴　柘植顯之助
元猿江御材木藏同心をつとむ。大澤と同じく判者となる。

―共文　洞玄舍　柘植彦八
元堀内藏頭家臣　右に同じ。

―雨谷　双鶯菴　石黑輪二
右に同じ。共に判者となる。

新編

古風
談林
正風

誹家大系圖（はいかだいけいづ）

上・下

春明編

御裳濯川や加茂のながれ、巷にわかれ曠野に溢る。其末を手に掬むで其源の浄きをしらば、御秡の棚の胙を酒ぎ、幣ふきそよぐ風の余りかと心を清す。また木枯風のゆふべ、落葉栅むながれには、かしこくも神路の山の宮はしら、ふとしき建る軒の茅の雫とも尊むべし。されば倭歌の道六合に漲り、外が濱の外なる國までも、其八重垣の朽せぬ事を仰ぐ。こゝに、かみつ世の片歌てふもの、二はしらの神、えをとめを・えをとこをと宣ひしより、つぎうたといふ事ありて、そのながれつらなり來りしを、守武の卿に至りて、栅をふり堰を搆て、俳諧連哥の格式を立られ、それより中興貞徳翁に凄じくも淀川の淵ともなりて、波濤をあぐる高名の師連ゝたり。其のち宗因、檀林の一流時に行はれ、亦、芭蕉不易を愛し正風を發し、終に此翁に、恰もあふ海の廣きに流出たる如く、幾千の從弟を導く。されば此門に此道の聖とも敬ふべき師多かりければ、たゞ是より古き人のかくれてまどへる名の今に至りて、いづれの門いづれの流なるを混雜して、わきがたかりけるを同好の友生川春明、喧き市の中にありて、ひたすら此道の古きを愛し、埋れたるをあきらかにせんと、普くその人ゝの水莖のあと、家〱に祕るを集め、姓氏・事蹟・沒年等を詳にし、編て俳家大系圖とすと。予しみづ流るゝ柳かげに此綴れるを見るに、よしの川龍田の洋ゝ濱ゝと林巵樹葡萄の際を潜り、翠のいはほに灑ぎ出たる名家の數〱、咽を潤すばかりこまやかにかいつけ、世に廣うなさむの志まめやかなり。誠に古へ今此書の如きは亦もあらじと、其勞をいさゝか慰せんがため、おろかにも筆を躍りて、硯の海のなん〱とひぬ事のなきをよしを述て、面なく耻をふるふになむ。

天保九戊戌のとし　　安濃の津　春樓寫峯

みづからのはし書

俳諧の道に名だゝる人數かぎりなくおほかめるを、今の世にはなべてたゞ芭蕉の翁、および十哲のをしへ子など

のことのみ常にさだすめれど、そのほかの人々はふるきはもとよりにて、近きよに聞えたる人ずらおろそかなるはいかにぞや。かの花開の翁とよばれし貞徳のうしは、守武・宗鑑の油火をもと〻して此道をあきらめ、はた宗因・桃青の翁はその餘光によりて、おのれ〳〵が譽をあらはされたり。されば石上ふるき人とてよそげに見むは、まことの風雅男とはいはれまじくや。おのれとしごろ此とをうれたき事におもひ、いかで埋れたるいにしへ今の人々を淺茅原つばらにいはまほしく、もろ〳〵のふみどもよりくさ〳〵つみいで〻、そゞろに此一書とはなしぬ。しかはあれどながれのすゑより、はるかなる源をしもうかゞふがごと、くま〳〵のよどみありて、さやかにはわきがたかりけるを、心のおよぶかぎり考わたし、さも有ぬべくおぼゆるは、おしはかりに沙汰めたるもあなれば、あやまれることもやとおそる〻になむ有ける。もとよりたどりあさき若人のわざにしあれば、ひがごとはおほかりなむ。

天保九年彌生五日　　生川春明

初集前後二卷引用書目錄

犬筑波集　發句帳　淀川　底ぬけ臼　紅梅千句　郡山　花月千句　玉海集　築子千句　鶴鶯千句　●土塵集　三十六俳仙　●砂金袋　●常盤草　鸚鵡集　絲瓜草　片言　續山乃井　初元結　浪花三十六俳仙　●到來集　●拾玉集　●蒙啓集　入船集　和歌竹集

守武千句　鷹筑波集　毛吹草　北野試筆　正章獨吟千句　●口眞似草　崑山集　玉海集追加　木玉千句　立圃諸國万句　祇園奉納誹諧合　歸花千句　砂金袋後集　古盤　●道連集　●境界集　○さゞれいし　●落穗集　十種千句　●根なし草　●小町をどり　●名取川　百人一句　形見草　公界集

犬子集　初學鈔　毛吹草追加　●二方(マヽ)二千句　氷室守　山乃井　美濃郡　●鼻直集　慈父追善九百韻　立圃郡万句　●埋草　懷子集　○五條百句　○尾陽句帳　佐夜中山集　○續境界集　増山の井　山下水　●唐人をどり　●遠近集　●早梅集　●鄙諺集　新百人一句　世話燒草　古今百句集

物忘草　肩入奉公　大長刀
柾木葛　大海集　•捨子集
雜巾　ちりこり　思出草
玉くしげ　新續犬築波集　十會集
詞友集　續詞友集　續獨吟集
新續獨吟集　釋教百韻　•誘心集
吉野山獨案內　紙屋川水車千句　大坂獨吟集
俳諧小式　寬倍集　•雀子集
西行谷一万句　伊勢山田六人六百韻　加友判百韻
鹿驚草　御傘大全　•武藏野集
•鋸屑　•鉋屑　大和順禮集
續大和順禮集　狂遊集　誹諧蒙求
一時雨百韻　太郎五百韻　次郎五百韻
宗因句集　檀林十百韻　破邪顯正
河內名所集　延寶二十歌仙　十歌仙各盃
ごさく　•櫻千句　•四名集
アタ花千句　•誹諧師手鑑　•イスカノ觜
中庸姿　•短綆集　重榮歌仙發句
御田扇　寶ぐら　•今樣姿
•大井川　涙花色紙百人一句　あらむつかし
俳諧京羽二重鉄本　ごさひ牛　京の水
藤波集　縄すだれ　江水百人一句
一橋　時代不同發句合　苗代水
陸奥千鳥　鳥日記　歷代滑稽傳
誹諧秘密　餞別五百韻　家の風

類柑子　枯尾花　荒野集
桃青一代記　行狀記　袿姿
源氏鬢鑑　塗笠　日本行脚文集
三番續前句附　万歲樂附合　三河じろ
和漢文操　たつのうら　杷管
皮籠すれ　初心毛登柏　鬼貫獨言
本朝文鑑　木花集　小傘
鳥山彦　不角百人一句　綾錦
花摘　其傘　手挑燈
一騎打　空栗　續空栗
ぬけ參　幸佐品定　風俗文選
雜談集　家譜　拾遺家譜
拾遺家譜補　後拾遺家譜　今宮草
山水付合　江戶土產　杉群立
男振　漢和付合　後集綸合千百韻
橋屑　江戶紫　吉慶獨吟集
籠ぬけ　似錦集　而形集
•芦花集　諸國獨吟集　幽山江戶八百韻
•如意寶珠　•空林風葉集　誹諧新式
新玉海集　•住吉をどり　•櫻鑑
雅延醉狂集　•かくれがさ　載恩記
一華堂選逍遊集　類從本逍遊集　古今夷曲集
後撰夷曲集　つれ〳〵草直解　曾呂利狂歌咄
卜養狂歌集　卜養狂歌拾遺集　貞柳家土產
貞柳後家土產　勢陽里言　買物調方三合集覽

可笑記　山州名迹志　都獨案内（案内者トハ別ナリ）
京羽二重　京羽二重織留　正德板京羽二重
浪花雀　浪花雀　浪花雀跡追
浪花鑑　東海道名所記　國花万葉記
江戸鹿子　江戸圖鑑綱目　人倫訓蒙圖彙
本朝武士鑑　武道傳來記　顯傳明名錄
平澤系圖　知譜拙記　多我身之上
義人錄　雍州府志　奈良名所八重櫻
俳人名錄　古集作者盡　俳人無名書
江戸桒俳諧藏書目錄　古今短册集　京童跡追
怪談諸國物語　貞德永代記鉄木　俳論
道枝折　俳諧古選　俳諧近選
東順子　寛文十年書籍目錄　延寶三年書籍目錄
天和二年書籍目錄　貞享二年書籍目錄　元祿（マヽ）五年書籍目錄
元祿九年書籍目錄　寳永六年書籍目錄　正德五年書籍目錄
享保十四年書籍目錄　寳曆四年書籍目錄　合類書籍目錄

通計二百七十三部

引用スル所ノ書名、コノ限リニアラズトイヘドモ、ムゲニ近キモノハ是ナ擧（アゲ）ズ。
又書名ノ首ニ●ナツケシハ、俳諧古集作者盡ノ引書ナリ。

初集引書目錄終

鼻祖守武長官之神像

渡毘烏賣耶迦路耆侶師玖母
荷美乃皤留
宇虞比珠能年數百架難箇奴
裒鄧力蟻秀




松永氏逍遊軒貞德翁
又長頭丸明心居士
寫花波集
寛永十五年撰同
十九年印本二巻
長頭丸の壽像とうつせる次
百よびいるみ給ひられども年
月かけりく所望せしま
貞德
秋がいくハ我がはの世ハ風とうて
月とへなりし花ハちりうさし

守武獨吟誹諧千句之奥書

右の誹諧は（イニナシ）、其かみ獨吟の千句立願（イニナシ）打まぎれ、又は成がたく過しけるも空おそろしく、いかゞはせんのあまりに御（イニアリ）闔を取べきに、一ならば本より、二ならば誹諧のあらましどにて、哀二おりよさ念じければ、二おりぬ。有難さ限りなく、大かた千句は三日なれど、是はわづかに二日にもたらざらんに、おもひの外ながびき、夜はねざめがちにもよほし、庚申には二百韻にて五日につくりぬ。其折節にやありけん。周桂かたへ、此道の式目いまだみず、都にはいかゞさ、大形のむね尋しかば、かゝる式目は予こそさだむべけれ、定子（イニ定る所を口用ノ字ニツヾク）それを用べきのざれたる返事くだりあはせ、さらば此度心にまかせんさ、所にいひならはせる俗言私びれたる心へ詞一句彷彿（ホウホツ）、うつゝたき事のみなれど、あまたの中なればうすくこく打まぜけり。さて誹諧さてみだりにし、わらはせむさ斗は如何、花實を備へ、風流にして然も一句たゞしく、さておかしくあらむやうに、世々の好士のをしへなり。此千句はそれをもさぢめず、さく滿したき一念ばかりに、春秋二句むすびたる所もありぬべし。されど正風雅人の耳にも入まじきに、いさゝかも聞へんははからざるさいはひならんや。其上粉骨妙句なきにしもあらず。又さしあひも時代（イニ時トアリ）によるべきにや。しいてなほさんも執心いかゞ也。然に誹諧なにゝてもなき跡なしどゝ、このまざるかたの言種なれど、何かまた世中言ならんや。本連歌に露かはるべからず、大事なり。本連歌兼載このみにて、心ものび他念なきとて長座には必ずもよほし、庭鳥啼（イニナシ）かうつぼになるさ夢をみせむ。蟹入に一橋を打わたり（イニナシ）、宗硯は文かよはしの自讃に、入相の鐘をこしにさし、宗鑑より度ゝ發句など下し侍り、ちかくは宗牧一二座忘がたく、こゝらをたよりにておもひよる事侍るなり。追加五十韻おほければど、祇公も三島にて千句二折をおもひ出る物ならし。扨古來まれなる獨吟の千句成就、松の葉の正木のかづら、目出度やはべらん。以上

○

一初學抄　寛永十八年印本　帆亭德元編

聲なくば鷺こそゆきのひとつくれ　　宗鑑

一犬筑波集　永正年間撰　古印本寛永ノ頃歟

卯月きてねぶとになくや時鳥　　同

右時鳥ノ句ハ本春ガ俳仙ヲ以テ證トス

一犬子集　寛永十年印本　松江重頼撰下之巻

稱遊院殿へ宗鑑法師始テ伺候の時、宗長法師伴ひてまかり出けるに、稱遊院殿御當座

宗鑑が姿を見ればがきつばた
のまんとすれどなつの澤みづ
蛇におはれていづちかへるらむ

右脇ハ宗長第三ハ宗鑑云々以上犬子集ニ載

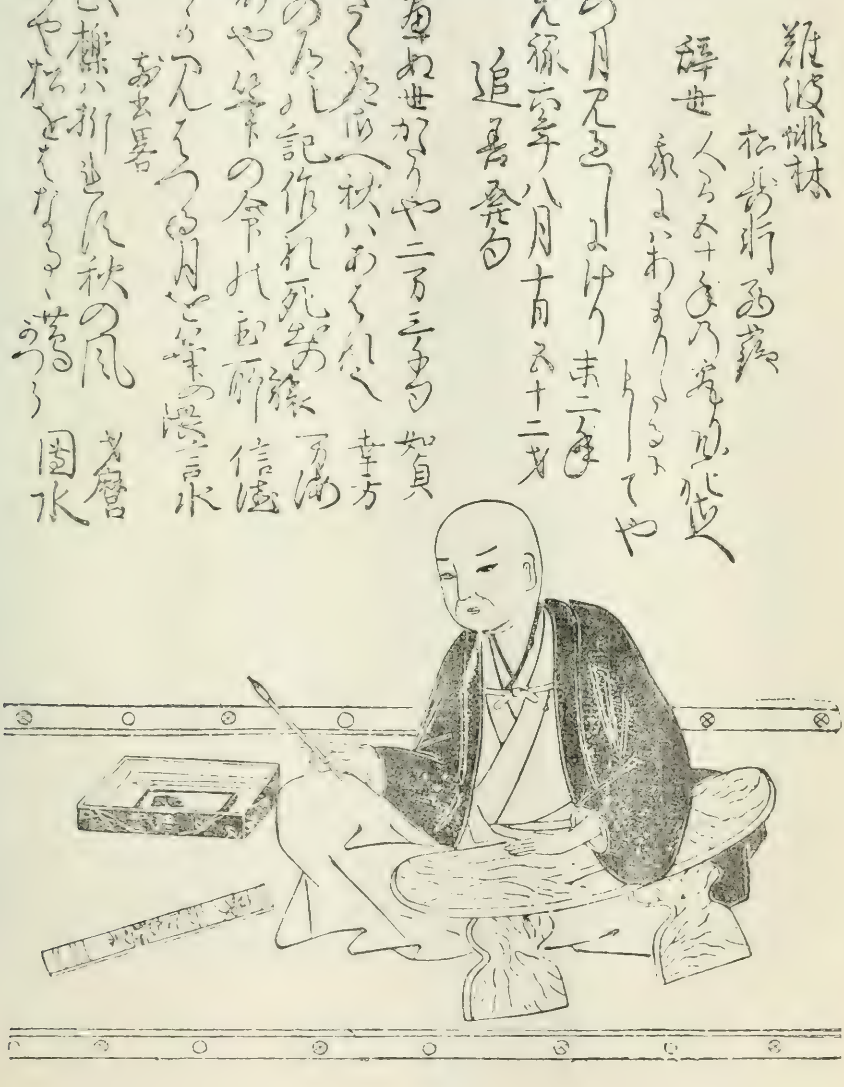
稱遊院ハ逍遙院ノ誤ナリ。三條西内大臣實隆公御コトナリ。

○

一崑山集　慶安四年撰明曆二年印本　長頭丸より天水と云誹の道の一卷ゆるされたるひらきの會に

天水のもじやかたじけ梨花　　鷄冠井良德

一玉海集　一之卷春ノ部、　いにしとし先師長頭丸より、誹諧ゆずりはの名を得しを、人げなき身のか


難波俳林
松壽軒西鶴
辭世 人間五十年の究り、それさへ我にはあまりたるに ましてや
浮世の月見過しにけり末二年
元祿六年八月十日 五十二才
追善發句

ざり葉ともおもひなし侍る心を

接とめてけふぞめいぼくの花春　安原　貞室

○貞徳翁ノ名句ハ諸書ニ出テ人ヨク知ル所ナレバ略ス。

前ニ摹寫スル花咲翁ノ壽像ハ、元祿六年京師ノ俳士堀江林鴻ノアラハセル永代記返答あらむつかし上卷ニミエタリ。又後拾遺俳諧家譜ニモ翁ノ像アリ。コレハ洛南上鳥羽邑實相寺傳フル所ノ木像ヲ摹寫スル所トミユレド、麁畫ニテ微細ナラズ。ヨリテ爰ニハモラス。

[玉海集]　明暦二年印本　安原貞室撰冬ノ部三之卷

先師貞徳居士の像をうつし侍りて、霜月十五日の忌日にかけ、追善の會を催しける

霜月のかほに御影やいきうつし　澁谷　安明

[京童跡追]　寛文七年印本

俳の好人長頭麿の像をかゝせ、うるはしき表補褙にて興行のときのかけ物なるに、予に讃せよといへり。いなみ侍るも聞うけず、おしていへるにのがるゝかたなく、畫圖を見るに末廣をもてるかたなり。その禮紙にかきつく

末ひろや詞の花の御からがさ　中川　喜雲

[續連珠]　延寶四年印本　夏之部五卷

花咲翁の像に蓮葉をもたまへるを

葉にもしろ詞のはなの君子かな　北村　季吟

西山宗因翁ノ壽像未レ得。コレニヨリテ元祿六年平元堂團水ノ刻セル [置土產] ニ見エタル西鶴ノ肖像ヲ臨寫シテコヽニ載。

[宗因句集]　古寫本　當世の風躰、年々日々處々(トコロ)にうつり更る。新しく珍(メヅラ)しく、かなはぬ老の耳にだも、おもしろく羨(ウラヤマ)敷しながら、初學人いづれをよしと思ひ定むるかたなくやとおぼへて

今筑波や鎌倉宗鑑が犬ざくら　宗　因

[檀林十百韻]　延寶三年印本　左ノ句宗因江戸ニ下リテノ吟ナリ。コレヨリ談林風ト云。又日梅翁ト稱ス。

されば爰に檀林の木あり梅はな　同

[破邪顯正]　延寶七年印本　中嶋隨流編「去年の夏大坂宗因を高政宅へ請じ、一會有しに

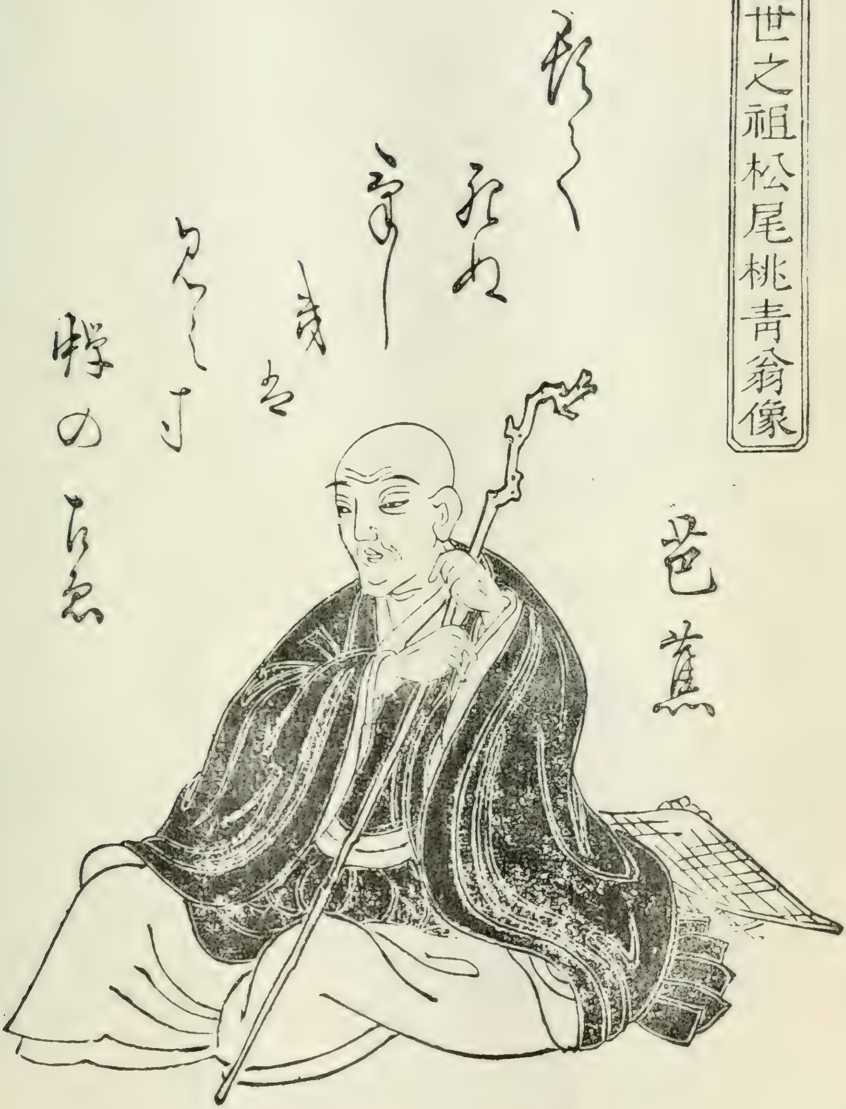
末茂れ守武流の惣本寺　同

○春明云右ノ句ヨリ高政、惣本寺半運傳社ト号ス。

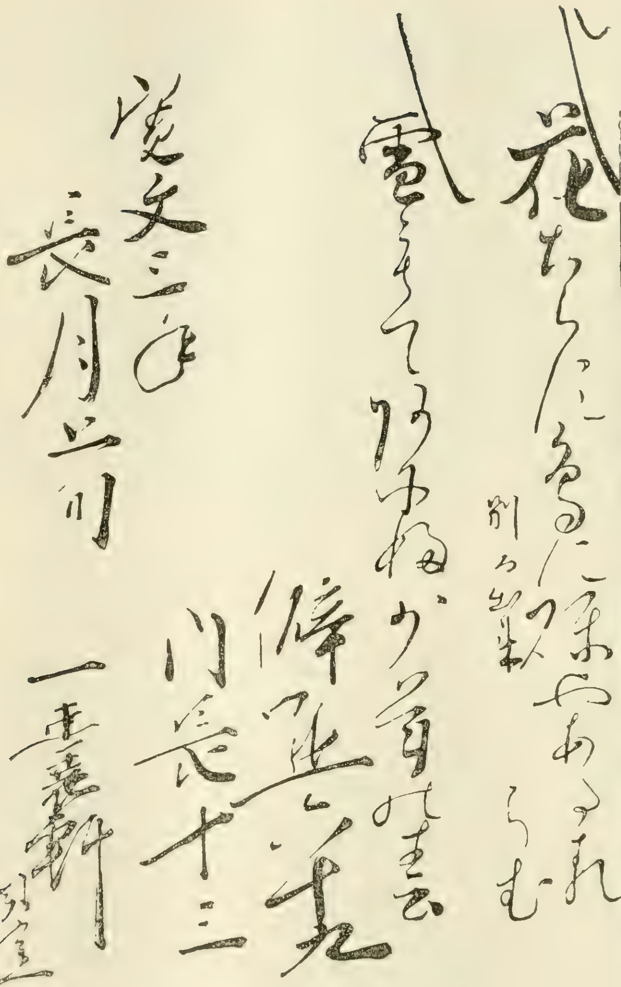
○

左ニ抄出スル芭蕉翁ノ壽像ハ、江戸ノ俳林太白堂天野桃隣ノ元祿九年刻行セル [むつちどり] 二之卷ニ載タリ。

近世之祖松尾桃青翁像



蕉翁ノ秀吟諸書ニ載テメヅランカラズ因テ今爰ニ畧スコノゴロ貞室判セシ川路素謙ガ獨吟百韻一軸出ヲ得タリ餘帋アルヲ以テ摹シテ好古ノ諸君子ニソナフ



年暮ノ其キニ貞室自詠ノ狂歌及長文アリ帋面セマキニヨリテ畧ス

誹家大系圖　上之卷

伊勢津　生川春明著

○誹諧權輿

∴守武　正四位上荒木田神主　五十鈴大宮ノ長官ナリ。幼歳ヨリ明悟識量有テ、師木嶋筑波ノ二道ニ貫通シテ、種玉菴宗祇法師ノ［新撰筑波集］ニ選ミイレラル。復誹諧ニ委シク、其頃マデハ二句三句ノ言捨ノミニテ定タル格ナカリシヲ、天文九年ノ冬初テ獨吟ニ千句ヲ連ネテ此道ノ式ヲ定ム。後世仰テ誹諧ノ祖神ト敬フ。又大永五年一夜ニ百首ノ和歌ヲ詠ジ、一首ゴトニ世ノ中ノ二字ヲ讀イレ、諸人ノ教誡トス。傳テ伊勢論語ト云。天文十八年己酉八月八日卒ス、七十七歳。

辭世　神路山我こしかもたゆくすゑも峯の松風〳〵

發句　あさがほにけふは見ゆらん我世かな

○天文九年庚子ヨリ、天保八年丁酉ニ至テ三百九十八年

復曰、鼻祖ノナガレヲクム杉木望都。松田利清。ノ雅及孫弟等中編ニ委シ。

∴宗鑑　志那氏、俗稱ハ彌三郎、名ハ範重、薙髪シテ宗鑑ト更ム。元佐々木ノ黨ナリ。幼歳ノ頃足利義尙公ニ仕テ恩澤ヲ蒙ル。後津ノ國尼ヶ崎ニ住シ、又西國ニオモムク。歸路暫ク讃岐國寺引山ノ邊ニ止テ假ニ居ヲシム、一夜菴ト号ス。晩年ニ及テ城南山崎菴關戸ノ院ノ傍ニ閑居シテ專誹諧ヲ修ム。家集［新撰犬筑波集］［竹馬狂吟集］等アリ。天文廿一年寂ス、八十九歳。京師天瑞寺ニ墓アリ、宗鑑上座。○行風法師ノ撰メル［古今夷曲集］九之卷哀傷部曰、背に癰瘡出來て身まかる時詠る。

辭世　宗鑑はどちへと人の問ならばちと用ありて
　　あの世へといへ

○

梵益　姓氏詳ナラズ。山崎菴宗鑑ガ遺跡ニ住ス。正章（貞室。宗名）季吟。梅盛。重頼。等ヲ友トシ、專誹道ヲコトヽス。承應年間ノ人也。

除風　姓氏詳ナラズ。百花坊ト号ス。宗鑑ガ旧跡讃岐ノ一夜菴ニ住ス。東花坊支考［梟日記］（元祿十一年印本）オヨビ［和漢文操］ニ出タレバ、美濃風ノ人ナルベケレド因アルヲ以爰ニ載ス。

○中興鼻祖　井直弟

∴貞徳　松永氏、幼名勝熊、壯歳薙髪シテ松友ト号シ、軒ヲ逍遊トナヅク。晩年復髻ヲ束テ官服ヲ着シ、自ラ呼テ延陀丸又長頭丸ト云。父ハ永種（攝津州［illegible］刺史入江）

九郎盛重ノ男五郎政重長子後氏ヲ改テ松永ト稱ス 母ハ播州宇野氏ノ女ナリ。元龜二辛未年ヲ以テ京師ニ生ズ。蚤歲ヨリ師木嶋ノ道ヲ好ミ、九條殿下玖山公。菊亭右相卿。細川玄旨法印ヲ初トシテ師トスル人五十有餘人。尤其精微ヲ得タリ。殊ニ嚴父ノ志ヲ承テ連歌ヲ法眼紹巴ニ究ム。始テ式ヲ連歌ニ撮リ、格ヲ誹諧ニ定メ、編集シテ名ヲ御傘ト號ス。始ハ三條大路ニ住シ、後五條松原ノ北東洞院ノ東ニ移リ住ス。花咲舍ト云。家書

御傘　淀川 一名増犬筑波集ト云
油かす 以上ヲ三部ノ書ト云　紅梅千句
百韻自註　前車集　天水鈔
源氏竟宴　堀川百首鈔　和歌寶珠
逍遊集　戴恩記　徒然草大意
同慰草　貞德文章

承應二年癸巳十一月十五日行年八十三歲。洛南上鳥羽邑實相寺ニ葬ル。牌面ニ曰、逍遊軒貞德居士
辭世　露の命きゆる衣の玉櫛笥ふたゝびうけぬ御法ならなむ

親重　野々口氏、俗稱ハ雛屋庄右衛門、イ市兵衛 薙髮シテ立甫ト號ス、又白松翁ト稱ス。弱冠ヨリ才智衆人ニ秀デ、殊ニ紫女ノ源語ヲ好ミ、著ス所ノ册子文義ヨク通ゼリ。一年重頼ト爭論ニオヨビ、師翁ノ氣色ヲ損ジテヨリ烏丸亞相卿ノ學窓ニ參リ、教ヲ受テ一流ヲ起ス、世ニ立甫風ト云。家書

發句帳　花火草　德万歲
若きつれ　片輪車　花月千句
歸花千句　阿太花千句　筑子千句
碁打花見　河ふね　江戸むらさき
硯はいかい　追善九百韻　口(マヽ)誹諧
老鳥千句　空つぶて　都万句
万句　すりひうち　人眞似
九曲折　花鳥千句　休息哥仙
鵜鷺千句　袖中記　美濃郡
三十六歌仙句合　明鑑　源氏繪鈔
十帖源氏 等アリ。寛文九年酉九月晦日沒ス行年七十一歲。法名日祐居士或ハ日莫 家譜曰 寛文十二年壬子三月十七日沒ストアレ𪜈誤ナリ。形見草ヲ以テ改ム。
辭世　月はなの三句目を今しる世かな

重頼　松江氏、俗稱大文字屋治右衛門・廣誹子又乳父子ト號ス。晚年薙髮シテ維舟ト改メ、自江翁ト稱シ法橋ニ敍ス。天性剛正ニシテ誤ヲ見テ止事ナシ。是ニヨリテ諸彥ト交ヲ斷コト尤多シ。師翁ノ席ヲ退キテヨリ里村懷惠菴ノ門人トナリ、連歌ヲ學ビ歌ヲ專ニシテ一流ヲ立ツ。家書

犬子集　毛吹草　同追加

梅千世菊千世懐子　同とぎ今様姿　名取川　佐夜中山 附リ鼻欠猿　大井川　沼池河御座　維舟随筆　武さしの　浮世なぎなた　等アリ。延寶八年庚申六月廿九日沒ス、行年七十四歳。

辭世　林禽もや蓍揺樹のたつまくむ清みづ

○再曰。親重・重頼ノ二叟破門トナリシ事別ニ委シキ論アリ。

正章

安原氏、俗稱鎰屋彦左衛門、一囊子或一囊軒ト号ス。三條通梅忠町ニ住ス。一年芳野山ニ遊ビ、コレハ〳〵ノ句ヲ吐テヨリ其名ヲ四海ニ轟ス。承應元年八月点業ヲ免サレ、薙髪シ貞室ト号シ、正傳ニ世花ノ本ヲ續グ。師翁沒シ後遺書 玉海集 七卷ヲ補選ス。晩年病ミテ沒シトスル期、我カキステシ筆蹟ヲ集テ火中スト。家書　玉海集　同追加　百韻自註　獨吟千句　氷室守　五條百句 一名 雪月花集　片こゝ　附合大全　此一書寫本ノヨシ、池田是誰(コレタダ)寛文二年印本 玉しけ ニアリ。延寶元年癸丑二月七日沒ス、行年六十四。實相寺牌面曰、一囊軒貞室。寛文又延寶二年ノ沒トスルハ誤ナリ。

辭世　今までは目見えせれども主人公はつくさい
　　　　ひし年も明けり

○再曰 歴代滑稽傳 ニ「安原貞室ハ中年迄はいかいをしらず。一とせ加州山中の湯本和泉屋又兵衛といふものに耻しめられ、歸洛して貞徳の末の門人と成。志あつくして終に此人に花の木を譲り、貞室となのると云々」此說誤ナリ。貞室、正保四年 獨吟千句 ノ跋ヲ見ルベシ、自ラ明ナリ。

令徳

雛屋井氏、通稱九郎衛門、初良徳、後令ニ改ム。陀隣軒ト号ス。貞翁ノ愛弟ニシテ誹式天水鈔ヲ譲リ賜フ。京師ノ人ナリ。崑山集 ニ崑山舘トアルハ別号ニテ道可トアルハ法名歟、尙考ベシ。家書　崑山集　土塵集　學直集　親炙　四十餘年　等アリ。延寶二年甲寅三月三日沒、行年六十八。或云、延寶七年九十一。

西武

山本氏、俗稱綿屋九郎左衛門、剃髪シテ西武(ニシ)(タケ)ナ音ニ號ヘテ法名トス、無外軒ト号ス。三條東洞院蛸薬師ニ住ム。曾テ蚤歳ヨリ師家ノ執筆ニ給ス。故ニ祕決・故實等悉ク傳習セリ。翁ト正章・西武ト每歳三物ヲ組テ他ニ許サズ。家書　鷹筑波集　砂金袋　同後集　久々留々　萩花　何迄草　阿波々千句　津倒居兒　御傘西武補

沒年不詳。家譜ニ曰、延寶六年戊午二月十八日沒、行年七十三トアレド、貞享二年印本京羽二重俳諧師ノ條ニ此叟出タレバ、貞享ノ頃マデ存命セシ歟、同書元祿二年ノ織留ニハ不レ見。

辭世　夜の明て花にひらくや淨土門

季吟

北村氏、通稱久助、蘆菴ト号ス、又拾穗軒湖齋七松子ト号ス。父宗龍（遺部香道ヲ能シ醫ヲ以テ業トス。江州北邑ノ人ナリ。）初ハ京師山伏町ニ住シ、後新玉津嶋社中ニ居ス。晩年台命ニ依テ東武ニ參仕シ、法印ニ敍ノ再昌院ト号ス。仰テ歌學所トス。弱冠ヨリ國史歌集ヲ熟覽シ、ワキテ源語ニ會通シ、著ス所湖月鈔註解精密ニシテ後世龜鑑トナル。家書　御傘大全寫本ニテ十卷

山の井　增山の井
續山の井　師走の月夜　花千句
錙集　埋木　同增補
新續犬筑波　十會集　哥仙發句
二十會集　續連珠　三物記
誹諧合　室咲百韻　万葉集鈔
八代集鈔　土佐日記抄　伊勢物語鈔
大和物語鈔　湖月鈔　春曙鈔
百人一首抄　徒然草鈔

寶永二年乙酉六月十五日沒、行年八十二（イ六）。池ノ端七軒町正慶寺葬。

梅盛

高瀨氏、俗稱太郎兵衛、薙髮シテ宗入居士ト号ス、又佗心子ト稱ス。二條油小路ノ人ナリ。一時檀林世ニ横行スト雖、師風ヲ改ズシテ門人ニ示ス。家書

口眞似草　鸚鵡集
捨子集　山下水　七十二物爭
使舟集　類舟集　古かゞ見
木玉集　さゞれいし　落穗集
道連集

等アリ。元祿十二年己卯四月八日沒、行年八十九。

○立甫ヨリ梅盛マデ貞門ノ七俳仙ト云。

德元

齋藤氏、通名齋宮、濃州岐阜ノ人、織田秀信ニ仕フ。後薙髮シテ德元ト号ス、又帆亭ト稱ス。江戶馬喰町二丁目ニ住（或云江戶丁尺）寬永十八年或人ノ需ニヨリテ初學抄ヲ編ス。コレ江戶ニオイテ俳書ヲ刻スルノ始ナリ。晩年若狹ニ於テ沒、行年詳ナラズ。法名齋入ト云。

辭世　今まではいきたは事な月夜かな

> 懷子集ニ上五文字へしぬまでハトアリテ休甫ガ句トセリ考ベシ

未得

石田氏、通稱又左衛門、乾堂ト号ス。江戶ノ人ナリ。故アリテ相州ニ隱ル。再江戶神田鍋町ニ住シテ未得ト改ム。後京ニ上テ合德ニ親（シタシ）ミ貞翁ノ門人トナル。誹諧ノミナラズ狂歌モヨクス。慶安中吾吟我集ヲ著シテヨリ芳名高シト。寬文九年己酉七月十八日沒ス、行年八十有余。淺草誓願寺ニ墓アリ。牌面曰、自性院未得居士

玄札　高嶋氏、通名詳ナラズ。江戸本町四丁目ニ住シ醫ヲ業トス。一年上京シテ門人トナル、沒年未考。明暦二年十種千句二卷アリ。

安靜　荻野氏、似空ト号ス、又似空軒トモ云、貞翁ノ末弟ナリ。家書　介不廻細布　御讃集　如意寶珠　等アリ。延寶四年沒、行年不レ詳（延寶四年ノ俳諧連歌アリ）家譜ニ貞享二年乙丑二月十九日沒、行年八十トアレドモ誤リナリ。

休甫　津田氏（本姓宇喜田氏）江齋ト号ス。大阪生玉ニ住ス。俳腸オノヅカラ一風アリテ、堺ノ弘永、蕉門（惟）徒然坊ト伯仲ス。平日物ニ拘ラザルノ一奇人ニテ、人モトムレバ俳句ノ下ニ休甫居士キト戯ニ書シトゾ。明暦ノ頃カ、六十三ニシテ沒ス。

辭世　我命とはゞ七九の鐘（マヽ）木杖金はもたでも南無阿彌陀佛

承應元年立圃選メル万句集ニ、榾屋休甫ト云人アリ、別人ナリ。思ヒ惑ベカラズ。尚此叟行狀等ハ東甫子ニモ見エタリ。

日能　越前敦賀本勝寺ノ住職ナリ。ハヤクヨリ翁ノ教ヲ受テ秀吟尤多シ。寛永六年霜月下旬京妙満寺百韻法式ノ開筵ニモ連座セリ。實ニ七俳仙ト雖上ニタヽン事難シ。沒年詳ナラズ。

正式　池田氏、通稱重郎右衛門、大和國郡山城主本多内記政勝ニ仕フ。初ハ貞室ニ隨ヒ後直弟トナル。狂歌ヲヨクシテ名ヲ古田造。平郡實柿、二

入トス。寛永ノ頃重頼毛吹草ヲ選スル時、此叟ノ句ヲ巻頭ニ置ントヤクシナガラ、我徒ノ春可（同書奇人ノ中ニ浪花若靈ニ誤ル。）句ニカヘタリ。式叟ソノ誓ヒノ變ゼシヲ憤リテ、毛吹草ノ批言　氷山（同書ニ次室守ニアヤマル。）トイヘル書ヲ著ス。コヽニオイテ兩人ノ間大ニ相水火セリトゾ。沒年詳ナラズ。寛文七年ノ印本京童追加ニ「日蔭者さなり侍りて」ト前書シテ

へあたゝかな日なやせなかに老の春

トイフ吟アレバ、寛文中ニモヤアランカ。

道節　末吉氏、通稱詳ナラズ。父増重（通稱太郎兵衛　貞翁ノ門人ナリ）攝州平野ノ人也。寛永中徒然草成親僧都ノ事ニヨリ

へもしあらば雪女もや白うるり

トイヘル季吟ヲ吐テヨリ、人稱シテ白禹流里（シロウルリ）ノ道節ト云。又西武ノ筆ヲ執リシ鷹筑波集ハ節子ノ骨折ヨリ成就スル所ナリ。承應三年沒スト。

宗恵　内海氏、通稱長右衛門、又久重、六字堂ト号ス。京師ノ人ナリ。誹諧頗高シ。曾テ居所梅盛ト近キガ故、寸隙アレバ相共ニ誹事ヲ談ズト。家書　松葉集アリ。

定重　端氏　通稱ハ長兵衛、風船子ト号ス。京師ノ人ナリ。秀逸ノ詠尤多シ。就レ中寛永ノ頃「山の口おほきな月の餅くらひ」ト云句ヲ吐テ、貞翁ノ高点ヲ得タル事アリ。其時（ソノカミ）ノ句調思ヒツベシ。

成安　泉州堺北ノ庄正法寺ノ住職、法名詳ナラズ。泉國ノ魁首タリ。初ハ慶友ヲ師トシ後貞翁ニ教ヲ授ク（マヽ）。家書　うづ見草アリ、沒年詳ナラズ、寛

文ノ「後撰夷曲集」ニ〽親もなし子もなし跡に金もなしからだ斗りはからりちむなり」ト云世ヲ辭スルノ詠アリ。

○以上親重。ヨリ成安。ニ至ル十八人ニ宗武。宗鑑。光廣卿。法印玄旨。氷鐵。法橋由己。貞德。忠直。慶友。春可。利清。嘉隆。望一。弘永。幸和。昌意。空存。宗因。十八人ヲマジヘテ誹仙三十六人トスト、萬治三年梅盛門子野田本春ノ册子ニアリ。

|是誰　池田氏、通稱詳ナラズ。落葉堂秋風子ト号ス。播州姫路ノ人ナリ。一年上京シテ青地可賴。住田正信。ノスヽメニヨリテ貞室ノ門人トナリ、聖廟獨吟百韻ヲ連ス。後翁ノ直弟トナル。家書「破習魔」「初元結」「播磨姫路」「玉くしげ」「呂玖呂」等アリ。

|友閑　京師要法寺住職、法名日躰「上人」或書ニ云日禮。

|素休　京師妙滿寺中成就院ノ住職、法名日如。

|定時　太田氏、通稱多兵衛、紀州若山ノ人ナリ。家書「塵嚢集」四卷アリ。

|可理　大橋氏通稱新之亟、加州金澤ノ人ナリ。

|定之　南部氏、通稱清右衛門、「　」

|可賴　青地氏、通稱市郎右衛門、京師ノ人ナリ。貞室ト親ムヿ深シ。

|宗明　板原氏、通稱三郎兵衛、紀州若山ノ人ナリ。「犬子集」ヨリ秀吟多クイレリ。沒年詳ナラズ。寛文ノ「古今夷曲集」ニ辭世〽ほつくりと死なば脇より火をつけてあさはいかいさなして給はれ」云々。

|加友　伊勢松坂樹敬寺中法樹院住職、般舟菴又は陽軒ト号ス。初ハ望一門人タリ、後貞翁門子トナル。晩年同國山田ニ轉住ス。家書「伊勢たどり」アリ

|守榮　京師五條寺町養泉寺ノ住職。

|氣求　大和田氏、通稱又三郎、名氏滿、弱冠ヨリ廣ク和漢ノ書ニワタリ、殊ニ字義ニ委シク著述數編アリ。コヽニ略ス。誹道ノ書ハ「繼立集」三卷アリ。沒年不レ詳。或ハ云、貞翁沒後西武ニ隨トモ。

|貞利　藤谷氏、通稱吉三郎、恂節ト号ス。京師ノ人ナリ。貞兼ノ兄。

|一雪　椋梨氏、通稱三郎兵衛、牛露軒又柳風菴ト号ス。京師ノ人ナリ。江戶。阿波。處々ニ歷廻ス。貞翁沒シテ後西武。梅盛。等ニ遺事ヲ傳フ。家書「雨あがり」「行事板」「晴小袖」「糊こしらえ」「鋸屑」「茶抄竹」「せんだくもの」「ふくさもの」「言羽織」「作者盡」等アリ。沒年詳ナラズ。「家譜」ニ曰、延寶八年庚申九月二日沒ス、

行年六十トアレ氏不審アリ。イカントナレバ元祿九年刻セシ本朝武士鑑ト云ル册子アリ。コハ舊作ヲ後ニ印行セシ物カト思ヘド、序ノ文ニ武道傳來記ノ事アレバ、サニモアラズ。尙ヨク考ベシ。

—友仙　有馬氏、通稱意菴、號壽白、江州坂本ノ人ナリ、醫ヲ以テ業トス。紅梅千句發起ノ人、沒年詳ナラズ。

—卜養　半井氏、泉州堺ノ人ナリ。父ハ温野慶友牡丹花肖柏ノ末流ヲ汲ミ誹評ヲヨクス弱冠ヨリ和漢ノ書ニ眼ヲサラシ、連誹ノ二道ヲアキラム。又狂歌ヲヨクシ、自詠スル處ノ歌二卷アリ、號シテト養狂歌集トイフ。家業ハ醫道ナリ、是又衆ニ秀ヅ。晩年台命ヲ蒙リ幕府ニ給仕ス、延寶六年沒ス、行年詳ナラズ。或書ニ一號ヲ云也トアリ、或ハ又父慶友一號トモ云、是非ヲシラズ。

—泰園　京師寂光寺中圓光院ノ住職、師翁沒後、貞室・季吟ニ屬ス。

—貞傘　藤谷氏、通稱甚吉、名貞好、仰雲軒ト號ス。又自ラ桂翁ト云、京師ノ人ナリ。或云、傘叟ハ令德ノ門人ナリ、貞ノ字ヲ犯スコヲ許ル。是ニオイテ令德、誘ッテ以テ師翁ニ見ヘ使テ直弟トス。元祿十四年辛巳十月廿七日沒、行年八十七。
辭世　月は彌陀ほさつや二十御來迎

—正頼　東海氏、通稱茂右衞門、京師ノ人ナリ。

—松堅　宮川氏、通稱宇兵衞、名正行、後正由ト改、又松亭子・松亭軒トモ號ス。薙髮シテ松堅ト號シ、道栁居士ト云、菴アリ梅園ト名ク、大佛殿ノ南ニ在リ。蓋シ是師翁興立ノ遺跡ニメ、堅叟沒後門人コレヲ傳フ。家書　誹諧良材　あはな千句　和漢千句　歌仙自註等アリ。
享保十一年丙午二月廿三日沒、行年九十六。
辭世　かり置し地水火風もかへすなり何ももたねば殘念もなし

—靜壽　川崎氏、通稱源太、攝州大坂ノ人ナリ。

—胤及　岡本氏、通稱仁意、醫ヲ以テ業トス。備前ノ人ナリ。後季吟ノ門人トナル。家書　鉋屑　角柱　千句等アリ。眉入奉公返答大長刀ニ延寶四年沒ストアリ。

—一村　平澤氏、通稱古筆勘兵衞、薙髮シテ了任ト號ス。法名無二、了佐男ナリ。今出川新町ニ住ス。書ヲ能シ、立甫發句帳四卷此子ニ筆ヲ執シム。慶安三年庚寅十月廿八日沒ス、行年詳ナラズ。

—元知　西田氏、通稱三郎兵衞、京師ノ人ナリ。家書　拾玉集アリ。沒年不レ詳。

—宗畔　馬淵氏、通稱詳ナラズ。名重治、京師ノ人ナリ。性稟閑雅ニシテ言語スクナシ。ヨリテ武陵ヘ居ヲ移ストイヘ氏用ヒラレズ。承應四年中風オコリテ沒スト云。

—保友　梶山氏、幼名ハ多吉、後吉左衞門ト改ム。薙髮シテ宗吾居士ト號ス、海嶽菴無心子ト稱ス。攝州大坂鍋町ニ住ス。人ト成淳朴ニシテ諸賢

子ト爭事ナシ。朝暮誹句ヲ吟ズルヨリ外ノ業ナシ。是ニヨリテ此叟詠吟撰集ニ入ラザルハ、甚モッテ稀ナリ。家書 古今誹諧百句集 獨吟千句 大砥集 根なし草 沒年詳ナラズ、案ニ元祿ノ末カ。

不存　清水氏、通稱孫三郎、薙髪シテ春流ト号ス。尾州名越人也。尾山集ニ名越トアルハ名古屋ノ誤カ。後浪華ニ移居ス、尾陽ノ魁首タリ。一号吸月堂ト云。家書 尾陽句帳 徒然草新註 續つれ〲 等アリ。沒年詳ナラズ、案ニ貞享ノ頃カ。

友次　吉田氏、通稱六左衞門、一醒ト号ス、或ハ一水又無能子ト稱ス。尾州名古屋ノ人ナリ。家書 邀香物 和漢兩吟 阿波手集 八百韻 等アリ。沒年詳ナラズ。

ノ身　池田氏、通稱又三郎、尾州名越ノ人ナリ。沒年詳ナラズ。○不存。友次。ノ身。ヲ尾陽三哲トス。

燕石　富永氏、通稱治右衞門、土佐ノ國ノ人ナリ。或書ニ浪花ノ人トス、誤ナリ。安井燕石トテ別人ナリ。家書 牛飼集アリ。

政公　五十嵐氏、通稱忠右衞門、京師ノ人、沒年不レ詳。

道甘　高瀨氏、通稱彌三右衞門 名正代、薙髪ノ道甘或道甘盤ト号ス、椿盛ガ見ナリ。城南伏見ニ住ス、樂々菴ト号ス。家書 絲瓜草 花の露 人員側 是まで草

等アリ。或書ニ云、立甫門人氏、元祿四年辛未二月十五日沒、行年八十二。

之次　伊勢村氏、通稱九兵衞、薙髪ノ意朔ト号ス。招鳩齋ト稱シ、大坂鵬堀ノ住、翁沒後季吟ニ屬ス。

正哲　足立氏、名元信、京師ノ人ナリ。

顯成　山井氏、通稱林菴 名定宣、阿知子ト稱ス。泉州堺南ノ庄ノ人ナリ。醫ヲ以テ業トス。家書 境界集 同後集 手くり舟

正平　黑田氏、通稱源左衞門、南紀若山ノ人、沒年不レ詳。

正盛　今西氏、通稱與二兵衞、大和國今井邑ノ人ナリ。家書 耳なし草

淨久　三田氏、通稱不詳、河内國柏原ノ人、家書 河内名所記アリ。

重春　野田氏、通稱彌兵衞宗二ト号ス。京師二條寺町ニ住シテ、物ノ本ヲ鬻グヲ業トス。

良保　片桐氏、通稱清右衞門、三夢ト号ス、又亡元子ト稱ス。京師ノ人、始メ令徳ニ隨ヒ後直門トナル。家書 獨歩集 千句 辨說集 風俗集 たはむれ草 破枕集 等アリ、沒年詳ナラズ。

蟬吟　藤堂氏、通稱新七郎、名良忠、藤堂侯ノ臣、師翁沒シテ後季吟ニ屬ス。

三信　竹内氏、通稱市左衞門（或ハ吉左衞門トモ）、一葉子ト号ス。勢州松坂ノ人、師翁沒後季吟ニ屬ス。

加友　荒木氏、通名泰菴、江戸ノ人ナリ。家書「綸そらここ」アリ。

一入　石倉氏、通稱三郎兵衞、容膝軒ト号ス。紀州黒野長嶋ノ人ナリ。

玄賀　小谷氏、俗稱喜太郎、名久惠、薙髪シテ玄賀ト号ス。又自立軒子ト稱ス。京師ノ人ナリ。家書「四季ノ友」「道つれ」等アリ。

重勝　筒井氏、通稱井筒屋庄兵衞、京師二條寺町ニ住ス。俳道ノ册子鬻ヲ業トス。

貞晨　山嶋氏、通稱内藏之亟、初名貞義又改貞宣ト云、京師ノ人ナリ。近世刻行スル册子ニ蝶々子貞宣同人トセリ。今「鸚鵡集」ヲ以テ改ム。

貫風　加藤氏、通稱詳ナラズ、空門子ト稱ス。京師ノ人ナリ。貞室ト親ミ深ク重賴撰集ノ批言「歩行神」ト云ル書二卷ヲ編ス。或曰、名勝明トモ。

以重　瀧谷氏、紀伊守、京師ノ人、父ヲ淨安ト云、連誹ヲ能シテ貞翁友タリ。

氏重　渡邊氏、通稱吉兵衞、京師ノ人、沒年詳ナラズ。

一正　柏井氏、通稱多左衞門、泉州堺ノ人、沒年不詳。

屋勝　津田氏、通稱二郎兵衞、後道意ト改ム。攝州池田ノ人。

毎延子　橋本氏、通稱善四郎、尾州熱田ノ人、沒年不詳。

如貞　大津氏、通稱勘兵衞、名ハ良弘、攝州大坂ノ人。

種政　佐枝氏、通稱傳兵衞、幽泊子ト号ス。尾州名古屋ノ人ナリ。

盛庸　藤本氏、通稱七郎右衞門、薙髪シテ了因ト号ス、或存舟軒笨山子ト稱ス。攝州大坂ノ人、京師ニ住ス。平澤了佐ノ門弟トナリ、古筆鑒定ニ達ス。家書「顯傳明名錄」「好色大鑑」等アリ。沒年不詳、或人ノ云、元祿年間七十有余ニシテ沒、法名古室了因居士ト云々。

貞衹　伊藤氏、通稱八十郎、伊勢桑名ノ人ナリ。

安明　瀧谷氏通稱四郎、貞門ノ老弟ナリ。大坂ニ住ス。男ヲ長藏ト云、是又俳諧ヲヨクス。

言當　岡村氏、通名淀屋某ト云、薙髪ソケ菴ト稱ス。茶道ヲ善ス。浪花ノ豪福ナリ。

正直　鈴木氏、俗稱平野屋重兵衞、京師ノ人。

一景　松平隱岐守定行、薙髪シテ直昌ト号ス。本姓秦氏、幼名十太夫、伊豫ノ松山ノ城主。

元正　柴田氏、通稱半左衞門。初メ名知心、京師ノ人、後季吟ニ屬ス。家書「天神奉納集」アリ。

臨淵　加藤氏、名等空、冬木翁ト号ス、又磐嵜ト稱ス。攝州ノ人ナリ、京師ニ住ス。師木嶋ノ道ヲ翁ニ學ビ、旁ニ俳諧ヲ善ス。歌道ニ名アルヿハ普ク通ズトイヘド、俳諧ヲヨクスルヿ知ル人マレナリ。

―滿足　岡田豐前守、名善政、美濃ノ人、或書ニ近衞殿應山公ニ仕フト云。【歴代滑稽傳】ニ曰、「岡田將監ははいかいに名ある人なり。美濃ノ國の産、一とせ近衞殿へ御見舞申されければ〽五月雨によくこそきたれ美濃の者　とあそばしければ〽あのえこのえに探す鵜づかひ　と云脇を付て申上られたり云〻」トミエタリ。沒年詳ナラズ。

―文明　影山氏（或蔭山ニ作）、通稱七郎左衞門、大坂ノ人、後休安ト改ム。浪花俳仙ノ一人タリ。

―久次　田中氏、通稱伊大夫、淡路侯ノ侍臣、家書【ますかゞみ】アリ。

―三保　堀江氏、通稱八郎右衞門、京師ノ人、家書【百頭集】アリ。或ハ伊勢松坂ノ住竹内三保選スル書トモ云、イヅレカ是ナルコトヲ知ラズ。

―長吉　福岡氏、通稱加左屋吉兵衞、京師ノ人。

―宗利　高田氏、通稱吉兵衞、京師芝之圖子ノ人、或曰、後薙髮シテ宗賢ト改メ、師木嶋ノ道ヲ專門トシ、【伊勢物語秘訣抄】【徒然草大全】等ヲ著スト云〻。

―玄康　栗田氏、名字詳ナラズ。城南伏見ノ人、荻野安靜ト友トシ善シ。連俳ニ達シ、都下ニ鳴ル。（男ヲ玄賛ト云、此道ヲヨクス。）

―定次　小島氏、通稱爲三、丹後ノ人。

（貞德翁ノ添削ヲコフテ、風下ニ隨フ騷人幾計ガ々カリ、爰ニ鈔スル八十有余人ハ、就中貞門ノ博識タルヲ擒ム。尤引用スルトコロ【百人一句】【新百人一句】【三十六俳仙】【古今百句】【手鑑】等ヲ以テ本據トス。然レ𪜈尙遺漏多カルベシ。後人ノ補正ヲ俟。

【追考】

貞室條ニ【かたこと】（慶安三年印本五之卷ニ）曰、「上略下京のそこ〳〵に茶湯に侘たる翁の侍るが、雪の夜は蓑笠のしたに古袴襲につけてたゞ獨り、あかつきがたに友たづね侍ると聞しこそおかしかりけれ。。。。。わらはべにて侍りしなり、親たちのせいしたまふも聞いれずして、雪こう〳〵さ庭に出つゝそばれあそべりしに、花開のなにがし〽芭蕉葉にふらせてしがなたびら雪　とのたまはせしも、まだきのふけふの心地ぞする云〻」トアレバ、貞室弱年ヨリ翁ノ教ヲ受シコト論ナシ。【滑稽傳】コレノミナラズ外ニモ謬トオボユルコトマヽミエタリ。

〽わらはべにこ云〻ハ貞室已ガヲサナカリシトキヲ云

〽花開のなにがし云〻ハ貞德翁ヲサス

◎貞徳翁孫弟系

野々口立圃

○正壽（野々口氏）庄兵衛　○親善（同苗）市左衛門　○頼永（同苗）仁右衛門

二世
立圃　野々口氏、通稱詳ナラズ。立圃ノ孫ナリ。正徳享保中ノ人、北邑立似撰[入船集]及[形見草]ニ勝宣ト云人アリ。是立圃ノ男カ。

幸和　江崎氏、俗稱太右衛門、薙髪シテ春學ト号ス、又白一翁ト稱ス。四條通油小路ニ住シテ醫ヲ以テ業トス。性質酒ヲタシム。一年文月十三日酒手ニツマリテ料錢ヲ濟サズ。酒店ノ下僕シバ〻來ル。無爲方シテ一首ヲ詠ツテ僕ニソドス。其歌ニ曰「五月雨や天のさかてにふりつまり雨のあしほどかうわめいはく」トナン讀ミケルトゾ。寛文十二年印本雑水子沒非了盜作[狂歌はなし]ニアリ。已往ノ風流思ヒヤルベシ。寛永年間底抜臼千句ヲ著ス。沒年詳ナラズ。

[万治三十六俳仙ノ一人ナリ]

幸佐　高田氏、通稱治兵衛、幽竹堂ト号ス。御幸町三條下ル町ニ住ス。漢和ノ能クス。家書[灯下集][入船][大湊][俳諧品定]（寫本ナリ）等アリ。沒年詳ナラズ、案ズルニ寛永中歟。

幸忠　山森氏、通稱三郎兵衛、京師ノ人、沒年詳ナラズ。

定清　服部氏、通稱喜三郎、離欽堂ト号ス、又鸚鵡子ト稱ス。京師ノ人ナリ。初ハ貞徳翁ノ批判ヲ受ケ、後立圃ノ門弟トナル。家書[櫻千句][根なし草][尾蠅集]等アリ。沒年詳ナラズ、案ズルニ延寶中歟。[百人一句]一人ナリ。

定武　服部氏、定清ノ男、通稱詳ナラズ。元祿四年[當世百人一句]ノ一人ナリ。[家譜]ニ曰 定武父ハ号ヲ定清ト、立圃門人ニメ、著ス尾蠅集。花車。等之書。武ハ者常矩門人、元祿年中之点者也云云トアリ。予古書ヲ按ズルニ常矩門人タル丁明證ナシ。

由的　宇都宮氏、通名遯菴、頑拙齋ト号ス、又三近ナド稱ス。儒學ヲ尺五堂松永昌三ニ受ケ、著述スル所ノ書釐訂メリ。俳道ハ定叟ヲ師トス。防州當國ノ人、後京師高倉通椹木町ニト居シテ、儒學ヲ以テ業トス。家書[花見亂][日本人物志]等アリ。

重似　谷口氏、通稱十郎兵衛、同和ト号ス、又栄山子ト稱ス。後季吟ニ屬シ、檀林ノ黨ニ交ル。家書[百人一句]（寛文一年）[新百人一句]（寛文十一年印本）等アリ。沒年詳ナラズ、[家譜]ニ貞徳翁直門トスルハ非ナリ。

有靜　非狩氏、通稱二郎兵衛、春夕子ト号ス。京師ノ人ナリ。中頃ハ季吟ニ屬シテ[増山乃井]ヲタスク。後又檀林ノ黨高政ニ隨ヒ、屢雅筵ヲトモニス。沒年未ㇾ詳、[新百人一句]ノ一人ナリ。

流味　井口氏、通稱新右衛門、京師ノ人。

頼富　伊藤氏、通稱小左衛門、京師ノ人。

小哉　矢木氏、通稱理兵衛、李齋ト号ス。京師ノ人ナリ。

榮富　速水氏、通稱市兵衛、富竹ト号ス。京師ノ住、没年不レ詳。以上四俳士【百人一句】一人ナリ。

正隣　松木氏、通稱詳ナラズ○立圃直門弟トモ云、一榮子ト号ス。東武ノ人、【新百人一句】ノ一人。

易延　平井氏、通稱八左衛門、京師ノ人。

友貞　（百人一句ノ一人ナリ）井上氏、通稱重右衛門、渺字子ト号ス。京師ノ人、家書『唐人なごり』『天神法楽集』『神子のまひ』『花いくさ』等アリ。没年詳ナラズ、【家譜】花筆ヲ定清トアレド非ナリ。

友資　井上氏、友貞男、通稱詳ナラズ。

國信　三澤壹岐守殿、京師ノ人。

長式　池田氏、俗稱詳ナラズ。京師ノ人、『馬鹿集』作者、○同時ニ池田常清ト云俳士アリ。此人トハ別人歟。

玄隆　後藤氏、名字詳ナラズ。京師ノ人、家書『闇夜舟』一卷アリ。

常辰　（百人一句ノ一人ナリ）隼士氏、通稱長兵衛、松風軒ト号ス、又自徳翁ト稱ス。立圃ノ高弟ナリ。家書『慕啓集』『柾木葛』『木間ざらひ』等アリ。貞享二年乙丑二月九日没、行年詳ナラズ。

常長　隼士氏、常辰男、通稱詳ナラズ。京師ノ人、【家譜】ニ隼士氏ヲ村田氏ニ誤リ、辰ヲ長ト誤ル歟。爰ニ記セル如ク常長ハ常辰ノ男ニシテ、北村立以ノ撰メル【入船集】ノ時、十三歳、（此集予ガ本年号ナ 案ズルニ寛文）始歟ナリ。又【家譜】ニ田中常矩ヲ載テ曰「常矩云、不レ好ニ師父誹風一（自明云立圃 常長ヲサス）新作ニ一風流ニ而鳴レ世。或曰、矩者常長之甥、而長養爲レ子云々」トアリ。是常辰ヲ常長ニ誤リ、且常長ヲ亦常矩ト混亂セシナルベシ。常矩ハ宗因ト雁行シテ一流ヲ起シ、寛文ノ末ヨリ延寶天和ニ及テ四海ニ鳴ル。サレバ常長トシルセシ軒号没年等ハ常辰ガ傳ナルベシ。倚『慕啓集』（寛文十一年印本）【柾木葛】（延寶四年印本）等ヲ見テモ時世ヲ知ラム。予此士ノ傳ナヲルサキマデ辯論ヲタツルト、人アヤシムベケレド、丈石【家譜】ニアヤマレルヲ後人改正セズシテ、近世刻スル所ノ【書畫一覧】ヲヨビ【書畫便覧】【書畫集覽】等ニ載スルニヨリテコヽニ及ブ。

常牧　繁田氏、名ハ宗雅、蘭化堂ト号ス、又雲峰子ト稱ス。京師油小路魚棚ニ住ス。家書『木はな』『冬ごもり』『道おろき』

万歳□集　等アリ。没年詳ナラズ。當世百人一句ノ一人ナリ。予所案スルニ、常牧ハ常辰門弟ナリテ常矩ガ弟ニ鉄ト延寶七年印行セシ田中常矩　塵取集ニ秀吟多クイレリ。

由卜　遠藤氏、俗稱詳ナラズ。名ハ元重、室町今出川下ル町ニ住ス。或曰、始ハ常矩門人ニシテ、矩死没シテ常牧ニ屬スト、可考ベシ。

和及　俗姓ハ三上氏（或曰村氏トモ云）雪吹菴直昌法師ト号ス。洛西壬生村ニ隱栖シ水青ノ句アリ。
家書　雀森　水ぐきのなか　藤波集　ひこばえ　等アリ。當世百人一句ノ一人。
元禄五年壬申正月十八日寂、年四十四。
辭世へ我こしも四十四（ヨハシ）の花のあげ句かな

西生　山口氏、始號右門人、後生ト号ス。後故アリテ和及二世ヲ續ギ、雪吹菴ト号ス、又喜雲堂トモ、後ニ西ニ改ム。寛保二年壬戌正月十五日没、行年七十一。
辭世へ六の道廻り〳〵てけふこゝに安養界の月ぞながむる

文推　宇野氏、嶽雪堂ト号ス。享保十六年辛亥七月廿日没ス、行年五十有一。京師ノ人ナリ。

長年　姓氏詳ナラズ。柑拾子ト号ス、京師ノ人、没年詳ナラズ。

卜圃　関氏、通稱五右衛門、名昌堅、京師ノ人、立圃男ノ書弟ナリ。家書　濱荻

小町なぞり　塵塚集　等アリ。没年詳ナラズ。新百人一句一人ナリ。

知徳　福井氏、通稱長右衛門、初名ハ未徳ト号ス。京師ノ人、寛永十年ノ發句帳ヨリ始トシ秀吟多クイレリ。寶ニ立圃下ノ高オナルベシ。○幸和。定清。安貞。知徳。卜圃。常辰ノ六哲ナ立圃門ノ六点者ト、朝江種寛ガ集冊ニミユ。

種寛　朝江氏、通稱小左衛門、名ハ忠榮、梅庭軒一風子ト号ス。京師ノ人、家書　詞友集　同續　謠（謡）心集　俳諧大概　彩見草　等有リ。没年詳ナラズ。○種寛ガ兄ナ種榮ト号ス。貞翁門下ニシテ小發句帳ナアラハス。或云、舎弟トモ、

貞之　谷崎氏、谷遊軒ト号ス。家書　海士釣舟
京師ノ人。

道弘　家書　赤紫
氏、南都ノ人

如谷　姓氏詳ナラズ　明窓散人京師ノ人

無文　家書　備後表
山田氏、備後鞆ノ人

如琴　津田氏、京師ノ人　當百人一句ノ一人ナリ。

由健　澤田氏、通稱ニ郎左衛門、名ハ正成、友雪ト号ス。京師ノ人ナリ。或曰、幸和門弟トモ
百人一句ノ一人ナリ
家書　都草　若竹集　寛文十年印行セシ書籍目録ニ幸和著述トアリ、等アリ。没年詳ナラズ

予此書ヲ識ストイヘドモ一巻カケタレバ考ガタシ

春清　井上氏、通稱次左衛門、昌雲軒ト号ス。家書「鹿鷲集」「千句」等アリ。又貞室・季吟ニ善(シタシ)ミ深ク、「玉海集」オヨビ新續犬筑波ニ秀吟多クイレリ。「俳諧家譜」ニ井坂氏治郎左衛門又昌雲軒トス。予ハ承應元年刊行セル「誹諧万句集」ニ随フ。又「同書」ニ承應四年没ストイヘドモ是モ又不審アリ。イカントナレバ、自撰ノ「鹿鷲集」ハ明暦三年ノ刊行ナリ。尚ヨク考ベシ。「百人一句」ニ一人ナリ。

忠知　神野氏、通稱長左衛門、東武ノ人ナリ。此士古風中ニアリテ出藍ノ譽アリ。一年(ヒトヽセ)〽白炭ややかぬむかしの雪の枝」トイヘル秀吟チ叶テヨリ、人稱シテ白炭ノ忠知(タダトキ)ト云。白炭ノ句ハ寛文四年松江重頼カ撰メル「中山集」ニハノ部五十六丁ニ出タリ　其角ガ「雜談集」上巻三十六丁オモテヨリ「上略、されば白炭ときこえし忠知が〽霜月やあるはなき身の影法師と辭世して腹きりける。いかにせまりたる浮世にはなりけん哀也。かの作木なき〽忠知が子也といへば、人も憐み見かはしけり。五十年來の正風なしれるもの胸(獨)也。〽元日や何にたさへん朝ぼらけ 忠知〽双六な世のさいたんやおほ日出た などの聞ゆうこましき堀句する世には、何にたさへんと思ひ定めし死活の境、未來記也。云々」トアレバ卒(ツハリ)ナヨクセザリシニヤ。尚白炭ノ句ニハ先哲ノ異論モアレド、コヽニイハズ。

皆虚　家書「世話燒草」「四名集」　土佐ノ國[illegible]蒲寺ノ住職、角茄軒ト号ス。

等アリ。没年詳ナラズ。案ズルニ延寶ノ末ツゴロ歟。

土牛　京師本正寺住職、法名日達、「新百人一句」一人ナリ。漢和ヲ能ス。

定親　林氏、通稱市右衛門、名ハ久勝、器水子ト号ス。浪花ノ人ナリ。
　――長女　定親姝

定用　松岡氏、名字詳ナラズ。東武ノ人。
　――好女　定用妻ナリ。通名ハ於好、女六俳仙ノ一人。

清長　森氏、通稱小左衛門、遠州掛川ノ人、家書「しのぶ草」アリ。没年詳ナラズ。「新百人一句」ノ一人ナリ。

成次　飯田氏、通稱又左衛門、初名ハ家次、京師ノ人ナリ。

正春　由良氏、通稱八郎左衛門、江戸人ナリ。歌道ニ達シ、連俳ヲ善ス。寛文中九十歳ナマヽズシテ没ス。○元祿三年其角ガ印行セシ「花摘集」四月廿日條ニ、此叟ノ辭世ヲ載タリ。左ノ如シ。

辭世　〽夢なれや花は昨日けふの風

又同人ノ文集「類柑子」上巻曰〽由良正春といへる人、歌連俳にほまれあるよや、生涯の瘵さし、身にそふ病さし給ふに、世の人深くおもひしみて侍りけり。寛文年中九十の賀せおもして身まかり給ひぬさかや。氏性(マヽ)ハ浮田家の外戚といひ傳へたり。住所はもさよりさどろける藥屋にて、軒は藥うる家にむかへり。門は鰮魚いきれたるに、鼻なおほふあたりにして、下司女などもなく、手みづから炊しき、うち

くらひ、いさけうがる交りなり云々」トアリ。

東順　竹下氏、通名─赤子ト号ス。江州堅田ノ人、醫ヲ以テ其侯ニ仕ヘ、辭シテ後隱者トナリ、江戸ニ移リ住ス。元祿六年八月廿九日没、行年七十二。二本榎上行寺ニ葬ル。晋子ノ父。

宗順　辻村氏、通稱勘右衛門、初名ハ長運、薙髪シテ［　］ト号。京師ノ人。

常知　池田氏、通稱九郎左衛門、名ハ常久、京師ノ人。

立志　高井氏・俗稱詳ナラズ。松樂軒ト号ス。江戸本町四丁目ニ住ス。家書［樗木集］［思出千句］等アリ。没年詳ナラズ、案ズルニ延寶・天和ノ頃歟。

立宣　高井氏、立志長子、初名立儀ト云、松雨軒窗梅子ト号ス。家書［女夫草］［櫻かゞ見］等アリ。没年未詳。

二世立志　高井氏、立志次男、名吉平、幼名犬松、初松雨軒立詠ト号シ、後薙髪シテ和階堂ト号シ、父ノ遺徳ヲ續。家書［都の枝折］［浪花の枝折］等アリ。寶永元年甲申八月［　］没、行年四十八［　］［　］葬ル。法名ヲ高林院立志日乗ト号ス。

三世立志　高井氏、二世立志男心保、初春水又立詠、家書［雪のはて］［庭のまき］［厥中］等アリ。享保九年甲辰十一月廿一日没・淺草常福寺ニ葬ル。行年詳ナラズ。

四世立志　淺見氏、通名詳ナラズ。初ハ如格ト号シテ介我門人、後ニ三世立志ノ後ヲ嗣デ和樂園ト号シ──ト改ム。一世立志点印、和散才立志ヨリ附屬ス。飯田町坂ニ住ス。没年未レ考。

立和　三世立志門人、姓氏詳ナラズ。兎睡堂ト号。○立路　高井氏ニ世立志男歟［山形集］ニ出タリ

水國　雲津氏、鶴隣ト号ス。始ノ名ハ晴星又立舞、橋町ニ住ス。享保年中若年ニテ没ス。肖像ハ享保十九年印本岡田青瓐著ス［たつのうら］ニ出タリ。○門人ニ梅國ト云人アリ。

立吟　小野川検校、糸耕軒ト号ス。江戸銀町二丁目ニ住。家書［餞別五百韵］アリ。

信親　森氏、通稱七郎兵衛、東武ノ人、家書［信親獨吟千句］アリ。

重親　西村氏、通稱善右衛門・薙髪シテ可玖ト号ス、又苦竹軒或愛子ト稱ス。浪花大手筋ニ住ス。家書［遠近集］［たへき集］［湊舟十万句］等アリ。又元祿三年［物見車］トイヘル鬪書五巻ヲ著述シテ、別派薫ヲ難判ス。因テ是西霍團水^{トモガラ}甕怒テ［石車］［こさび牛］等ノ册子作ル。没年不レ詳。

古根　飛田氏、通稱伊右衛門・後貿近ト改ム。京師ノ人ナリ。家書［詞の友］一巻アリ。［新百人一句］ノ一個。

重軌　大津住、鉄砲鍛冶國友、家書［嗚呼立千句］アリ。

定門（イ英）

平澤氏、了佐男、幼名源六郎又三郎右衛門、薙髪シテ了榮ト号ス。日利第二世トス。延寶六年午十月八日没。行年七十歳。法名即心菴直截了榮居士。

香定

平澤氏、定門男、通稱八郎兵衛（イ平兵衛）。薙髪シテ了祐ト号ス、又香藏ナト稱ス。日利第三世トス。貞享元年甲子四月廿日江府ニテ没。行年四十歳（イ三十七）。法名、郎性菴直空了祐居士。

重光

平澤氏、了佐男、通稱次左衛門、薙髪シテ了雲、古筆賞鑒ヲ以テ業トス。延寶三年乙卯閏四月十四日没。行年六十四歳。法名、無心菴古雲道撲居士。西王譚寺葬ル。

立似

喜多村氏、通稱休齋、名宗甫、大坂備後町ニ住ス。初ハ令徳、貞室ニ從ヒ、後立圃ノ門弟トナル。家書［入聟集］［烏帽子箱］等アリ。没年詳ナラズ、案ズルニ元祿中歟。

［新百八一句ノ一人ナリ］

秋月

片山氏、通稱清右衛門、名正朝、浪花ノ人。

廣得

藤井氏、通稱鉄屋與一郎ト云、備後ノ國ノ人、没年詳ナラズ。

友直

川崎氏、通稱源左衛門、薙髪メ示立ト号ス。浪花人、始貞翁ニ随ヒ、後立圃ニ屬ス。

家書［獨吟］アリ。同門同名ノ俳士アリ。

中村氏、通名内藏丞ト云、正親町家ノ臣トイヘリ。

川崎氏、浪花ノ人、書

方孝

風立圃叟ト伯仲ス。

方女

方孝妻ナリ。才智衆人ニ秀デ女六俳仙ノ一人ナリ。立圃・方孝三吟ノ百韻［筑才千句］ニアリ。

和年

半井氏、通稱長兵衛、名ハ松宣、京師ノ人、没年不詳。

立和

境氏、通稱善五郎、名ハ満直、江戸人。

元定

馬越氏、通稱重郎右衛門、備中東卿原邑ノ人ナリ。

長女

元定妻。

鷺水

青木氏、通稱詳ナラズ。歌仙堂ト号、又白梅園、三省軒ノ數号アリ。翁湖ヨリ才智衆人ニ秀デ、殊ニ俗吏（ウキヨ）ノ調ニ妙ヲ得テ、著ス所ノ册子、井ノ両雀ニモ劣ラズ。家書［誹諧新式］［俳諧指南］［俳諧良材］［糸屑増補］［万歳樂付合］［万葉假名遣］［春のもの］［つれづれ草集説］［絵事要言］等アリ。没スル年詳ナラズ、［家譜］ニ享保十八年癸丑三月廿六日没行年七十六トアレ氏オボツカナシ。

乘言

尾關氏、通稱長右衛門、江戸ノ人

爲宣

喜田氏、初名爲親、京師ノ人

立歟

吉田氏、浪花人

山石

肥後八代宗雲寺ノ住職、漢和ヲ善クス。

來安

岩井氏、通稱源助、京師ノ人

親十

櫻井氏、名ハ正友、浪花人

吉泰

酒井氏通稱甚右衛門京師人

照星

森原氏、京師人

仲昔

中野氏、久右衛門、京師ノ人

信世

小野氏江戸ノ人

常倫　東氏、名家軍、京師ノ人

嶺利　竹井氏、通稱勘右衛門　江戸ノ人

有次　岩田氏、通稱二郎兵衛　薙髮シ有哉、江戸ノ人

知許　浪花德庵寺住職、法名詳ナラズ。

宗利　北村氏、通稱市右衛門、江戸ノ人

紅圃　寒川氏、江戸ノ人

屑子　庵原氏、通稱十藏、江州彥根ノ人、「百人一句」ノ入

見袖　庵原氏　通稱久右衛門　名朝則、彥根ノ人

定圃　稻熊氏、通稱十右衛門　浪花ノ人

吉隆　久保寺氏、通稱源左衛門・東武ノ人

是雲　朝山氏、浪花人

通親　森氏、同

泰重　喜多氏、大坂ノ人

共文　富田氏、通稱助之進、江戸ノ人

好與　木村氏、京師人

痴白　法橋、美濃人

宗富　蜂屋氏、京師ノ人

宗雅　伊藤氏、通稱三右衛門・京師ノ人

富平　柴谷氏、大坂ノ人

圓立　今井氏、了三、京師人、或曰小川氏、家書「花火草綱目」

○

同水　西洞院　權大納言時成卿、享保七年薨、八十。

一止　正親町權大納言公通卿、白玉翁ト号シ、風水軒ト稱ス。享保十八年薨、八十一。　御選「誹延酩狂集」

曲　七條院　正參議隆豐卿　貞享三年薨、四十七。

●●●

松江重頼

（近吉、松江氏、浪花人、書ヲヨクス。維舟叟ト伯中、）

弘永　姓氏詳ナラズ。夕陽菴ト号ス。泉州堺ノ人、後天王寺邑ニト居シテ導ト改ム。晩年師風ヲ變ジテ異躰ヲ吟ズ。或曰、弘永ハ重頼ガ門葉ナラズ、友ナリトモ云。家書「獨吟集」アリ。沒年詳ナラズ、案ズルニ寛文ノ末歟。

春可　姓氏詳ナラズ。朝生軒又織雪齋ト号ス。重頼高弟ニシテ、鶯ノ句ヲ吟ジテ「毛吹草」ノ卷頭ニ出ス。寛永年中世ヲ早ウセシニヨリテ知ル人スクナシ。或書ニ俗稱鹿野文八トアリ、考ベシ。

呂意　北岩倉ノ桑門、後壬生村ニ居ヲ移シテ唯梅ト改ム。或云、重頼門弟ナラズ、友ナリトモ云。沒年詳ナラズ。

（以上三士ハ萬治二年野田本春ノ「三十六俳仙」ノ内也。）

重榮　竹山氏、俗稱詳ナラズ。燕游軒ト号ス。竹山定通稱善三郎從弟ト云。京師ノ人也。家書「短綆集」「哥仙發句」等アリ。（「綾錦」ニハ立圃門人トス。「家譜」青木春澄ノ系ニ曰「曾聞重頼之徒有ニ重榮。重方。重好。重貞。等、稱ニ四重、爲ニ門弟之長ニ云々」トアリ。予古集ヲ參考スルニ、重頼ガ

此士「當世百人一句」ノ一人ニメ重方。重貞。トトキヲ同ジウセシ人ニアラズ。

徒タル叟（叟）ナシ。又〔あやにしき〕ニ立叟門弟ト定ムルモ據アリヤ。

—重方　望月氏、通稱八右衛門、紹佐ト号ス。初貞徳ノ批判ヲウケ、後重頼ノ門下トナル。復藪内ノ門人トナリ、茶叟ヲ善ス。

—重貞　望月氏、通稱庄兵衛、重方從弟ト云。京師ノ人、兩士トモ没スル年詳ナラズ、寛文ノ頃五十有餘タルヿ古集ミエタリ。

—重好

—重山　櫻井氏、通稱詳ナラズ。櫻井軒ト号ス。勢州久居藤堂侯ノ家士、本土ハ伊賀上野ノ人ナリ。寛文年間〔嚔草〕〔くるゝ〕〔御傘〕ノ三部ヲ合（アハ）シテ一書ナシドル、號ヅケテ公界集ト云。

—重供　望月氏、通稱藤兵衛、初ハ貞翁ニ從ヒ後重頼ノ門下ニ飯ス。望月重貞兄ト云。

—重種　福井氏、通稱新右衛門、京師ノ人、没年詳ナラズ。

—重昌　福井氏、通稱七右衛門、重種從弟、京師ノ人。（以上永。可。意。方。貞。山。供。種。昌。ノ九人前後〔百人一句〕ノ一人ナリ。

—千之　大原氏、（後望月氏ト改）通稱詳ナラズ。露分軒、近隣子ト号ス。京師ノ人。後宗因ガ檀林風ヲ吟ズ。母ヲ子盈ト号シ、誹諧ヲ善ス。

—千春　大原氏千之從弟、通稱彦四郎、高倉二條上ル町ニ住ス。千之ト倶ニ貞檀林風ヲ吟、後復正風体ニ飯ル。家書〔武藏曲〕〔俳諧塗〕等アリ。没年詳ナラズ。ハ或曰、兩士モト江戸人ナリ。北村季吟門人ト云、是非ヲシラズ。倘ヨク考ベシ。（復曰、千春ガ妻ヲ綾戸（アヤコ）ト号、俳句ヲヨクス。

—行風　浪花高津ノ隱僧、生白菴ト号ス、又懷中ト稱ス。狂哥ヲ善ス。門弟、コブル多シ。家書〔古今夷曲集〕〔後撰夷曲集〕等アリ。没年詳ナラズ。〔大坂俳哥仙〕（延寶元ノ印行）ノ一人ナリ。

—徳懷　岨田氏、通稱詳ナラズ。名ハ重政ト云、浪花ノ人、或人曰、徳懷ハ檀林ノ俳士宮野谷高政ガ初名ナラントイヘリ。考ベシ。

—重長　松江氏、通名無菴、字玄丹、宗眠ト号ス。醫ヲ以テ業トス。京師ノ人、案ズルニ重頼親族ナルベシ。

—宗隆　中井氏、通稱四郎右衛門、家名ヲ笹屋ト稱ス。京〔新百人一句〕ノ一人師ノ人、没年未レ詳。

—鬼貫　上嶋氏、通稱惣兵衛、名ハ治房、槿花翁ト稱ス。晩年囉々哩（囉哩）居士郎翁ト号、○維舟門弟ニシテ宗因ガ檀林ヲ吟ジ、一風ヲ起シテ世ニ鳴ル。伊丹（丹）風ト云。家書〔犬居士〕〔大悟物くるひ〕〔悪のたから〕〔西瓜三ツ〕〔ひとりごさ〕〔有馬日書〕〔七車集〕〔句選〕〔獨吟百韵〕等アリ。元文三年戊午閏八月没。行年七十八。伊丹墨染寺ニ葬ル。牌面ニ曰、仙林則翁居士。

或人ノ云、鬼貫ノ二字ヲ高貴ノ御方キコシメサレテ、句ハイト風流（ミヤビ）タルニナドテカクオソロシキおヤツケ、ントエマセタマヒヌトキ、テ佛兄（サトエ）ト改メリトイヘリ。

―言水　池西氏、通稱八郎兵衛、名則好、紫藤軒風下堂ト号ス。南都人、始江戸ニ出テ檀林ノ黨ニ交リ、後京師ニ登リ室町椹木町ニト居ス。ヒト、セ木枯ノ句ヲ吐テヨリ英名四海ニ轟ク。（木枯のはては有けりうみのおと）晩年ニ及テ自ラ洛下童ト稱ス。家書　新道　江戸辨慶　蛇のすし　東日記（以上江戸ニテ撰ナリ）後様姿　都曲集　京日記　京拾遺　毛登我志波　等アリ。享保四年或七己亥九月廿四日沒、行年七十有三。門人塋ヲ京極誠心院中和泉式部ガ塔ノ傍ニ築ク。（晋風曰、言水歿年、海音集ニヨルニ享保七年正シ）

―言石　下村氏、紫藤軒ト号ス。始瀬石ノ門人ニテ優士ト号ス。後言水ニ屬シテ言石ト改ム。

―金毛　芳澤氏、言水沒ノ後、方山ニ屬ノ方設ト号ス。後再金毛ト改ム。又芳充翁ト稱ス。家書　海音集アリ。延享三年丙寅十一月廿六日沒、行年八十。

―兒水　瀬山氏、芳樹軒ト号ス。京師ノ人、家書　ひたち帯　一巻アリ。

―我黒　中尾氏、李洞軒ト号ス、青白翁ト稱ス。晩年白舟叟翁ト改ム。家書　橘立記行アリ。和及法師ト友トシ善シ。寶永七年庚寅十月六日沒、行年七十有一。

―幽山　高野氏、俗稱ハ孫兵衛、名ハ直重、丁々軒ト号ス。江戸本町川岸ニ住ス。元祿ノ頃藤堂

任口君ニ仕テ竹内爲入ト改ム。家書　江戸八百韻　俳枕　歌林名所追考　等アリ。沒年詳ナラズ。或書ニ寶永年間勢陽久居ニ於テ沒スト云。

―一三　姓氏詳ナラズ。牛孤軒泉耶子ト号ス。讃州人

―宗甫　林氏、大和郡山ノ人。自筆ノ短冊　古今短冊集ニ出タリ。（右手鑑ハ寶暦元年ノ印本大夢庵手鑑作）

―貞盛　駒井氏、泉州堺ノ人、或曰、玉手貞直（稱九郎左衛門道古ト號 貞門歌道六哲ノ一人）門人ナリトモ、

―正春　神田氏、京師ノ人　家書　かつら川

―好道　尼島氏、通稱四郎兵衛。攝州大坂ノ人。寛文ノ初ツコロ沒ス。或云、貞翁直弟。

―道清　坂口氏、林松軒發句翁ト号ス。京師ノ人、後浪花ニ移ル。家書　二見ばこ

―好永　日永氏、通稱吉十郎、可敬ト号ス。江戸ノ人、古筆鑑定ヲヨクス。或曰、貞翁門人。

―夏夕　山中氏　京師ノ人

―長治　川邊氏、通稱彌右衛門、薙髪シテ瑞運ト更ム。泉州堺ノ人、始ハ貞翁ニ隨ヒ、後重頼ニ屬ス。

―空存　江北天満川崎街川崎坊ノ住僧。家書　夢見草アリ。寛文年間沒ス。後撰夷曲集ニ名斗をこゝにのこして本國へかへるや地水火風空存　重信　行年詳ナラズ。懐子伽ニ空存ノ吟ニ　目がね求て　としよりのかすお目がねやかけぐすり　トアレバ、若年ニハアラザルベシ。

○或云、門人ニアラズ。友ナリトモ、

青雲 松木氏、通稱詳ナラズ。松木政則男ト云、或云、宗因ノ門下ニシテ幽山ノ友ナリトモ、

蓮之 松木氏、青雲男歟、

宗瑞〔初代長水素丸〕等友タリ家書[水ぐるま]

文雅 松木氏、蓮之男。沒年詳ナラズ。

八千夜 洛西嶋原奥村家ノ遊女、名ハ章子ト云。吉野ニツヾキタル名妓、殊ニ書ヲ善クス。萬治・寛文中、萬治三年ノ印本[ふところ子]ニ季吟ヲ載タリ。又同ジ頃ノ書[可笑記]オヨビ[東海道名所記]等ニ八千夜ノ事見エタリ。

[可笑記]ハ元本ハ京板ニテ大本ナリコヽニ引用セシハ再板小本方、

武珍 榎倉氏、通稱新八、沒年詳ナラズ。伊勢山田師職、或云、杉木望都門、[百人一句]ノ一人。

夏虫 伊藤氏、通稱詳ナラズ。大和國長樂邑ノ人、或云貞室門人

夏虫女 夏虫ノ妻、狂歌ニ名アリ。

方救 平山氏、通稱孫兵衛、名ハ直之、家名ヲ奈良屋ト号ス。大坂本町ノ人、後薙髪シテ方石アルヒハ不琢ト号ス。[難波色紙百人一句]入。

方山 瀧氏、通稱詳ナラズ。東六條御門主ノ家士ナリ。招鳩軒ト号ス。弱冠ヨリ法橋維舟ノ門弟タリ。維舟沒後似舟(マヽ)門人トナル。且ツ由緣有テ荒木田宗武ノ傳書。ヲ得タリ。初名峯山、後芳山ニ改、復方山ト改ム。自應々翁ト稱ス。身長六尺有四寸。疾(トク)歩(アユム)ヿ一日ニ三百里ヲ盡ス。髭ノ長サ尺餘、白キヿ如レ雪。前年遊行上人在京ノ日、山其會上ニ詣ス。人其髭長ヲ見テ戯ニ覩(ミケラフ)レ之。都下コレヲ賞談ス。家書[此箱][枕屏風][暁山集]等アリ。享保十五年庚戌五月廿二日沒、壽八十。

雲鼓 堀内氏、自ラ千百翁ト稱ス。五條橋東千觀松片陰ニ寓メ、迎光菴ト号ス。本土大和ノ人。後剃髪シテ法名ヲ助給ト云。家書[家の風][鹿聞][宿の松][夏木立][西國船][赤烏帽子][側かけ]等アリ。享保十三年戊申五月二日沒、行年六十四。拜按ズルニ、吉野ニ堀内閑節北邑季吟門人ト云人アリ。此士ノ男歟。

雲堂 川勝氏、畔廿舍ト号ス、又吹松菴ト云。享保十五年庚戌五月七日沒、壽七十。

雲扇 井上氏、俗稱詳ナラズ。枯木菴ト号ス、元加泉門人ニシテ伏見ニ住ス、犬水ト号ス。後畔廿舍二世ヲ續テ、今ノ字ニ改ム。

貞扇 北川氏、元浪花ノ人ニシテ才麿ガ門人タリ。後居ヲ京師ニ移テ雲扇ニ属ス。東園舍ト号ス。寛延三年庚午五月十六日沒、六十四歲。

雲鈴 吉井氏、吹簫軒ト号ス。家書[二日月]アリ。寛延四年辛未二月五日沒、行年七十六。

―雲峰　居初氏、都塵舍ト号ス、自年々翁ト稱ス。京師ノ人、家書「頭陀袋」「峰風」「御伽櫻」「傳授車」「雲の臺」等アリ。寛延元年戊辰十二月十八日沒、行年七十一。

―海徳　山本氏、万龜堂ト号ス。延享二年乙丑三月十三日沒、行年四十四。

―鼓山　中村氏、琴松堂ト号ス。延享四年丁卯九月廿三日沒、行年四十六。

―和汐　北村氏、一陽堂ト号ス。初曉來ノ門人ニメ來沒後、吹簫軒門弟トナル。

―則風　組氏、通稱詳ナラズ。京師ノ人、家書「千八百韵大矢數」アリ。或云、「大矢數」ハ紀子ニテ、多武峯内院ノ僧トモ云。

―一見　永崎氏、通稱詳ナラズ。三樂ト号、肥後熊本ノ人、家書「かゞ見まく」「眉入本公」等アリ。沒年未ㇾ考。

―元綱　岡部氏、通稱十左衛門、岸和田人或云、江戸ノ住、「新百人一句」ノ一人。

―正恒　松村氏、通稱又左衛門、後吟松ト改ム、東府ノ人。

―正甫　北峯氏、通稱詳ナラズ。土佐家ニ入テ繪ヲ善クス。泉州界(堺)ノ人。

―塵言　江口氏、通稱三郎右衛門、奥州二本松ノ人、「新百人一句」ノ一人。

―延貞　高瀬氏、通稱詳ナラズ。伊勢ノ國安濃津ノ人。

―任口　城南伏見東本願寺門下、西岸寺ノ住職、歌道ニ達シ連俳ヲヨクス。拜北菴里村昌程

景益トモ云寛文六年没五十五歳門人ナリト云、俳道ハ維舟叟ニ隨ノト、沒年詳ナラズ。貞享中ノ「釋空集」ニ曰〽新年の御慶とは申けり八十年ト云吟アリ、時代ナシフシム。

―林元　水野氏、奥州二本松人「新百人一句」ノ一人。

―好元　日野氏、奥州二本松ノ人「新百人一句」ノ一人。

安原貞室

○正好　安原氏、通稱彌兵衛　○諸西　十左衛門。

―元次　安原氏、貞室男、通名詳ナラズ。蚤歳ヨリ英細ニメ出吟尤高シ。「玉海集」ニ多ク出ス。承應中十五歳ニ滿ズシテ沒、衆人元次ヲ惜ヿ甚シ。

―貞恕　大井氏、俗稱ハ治郎兵衛、名重次、薙髮ノ貞恕ト改メ、一蝨軒ト号ス。四條東洞院ニ住ス。本土ハ越前敦賀ノ人ナリ。万治ノ頃、江州大津ニ寓居ス。一年〽いまだ遠くはのびじ落入　トイヘルニ〽道ばたにいきりこそたて馬糞(ウマノフン)　ト云句附テヨリ、大津ノ馬糞トイフ名ヲ得タリ。室叟病テ死セントスルニ及テ、恕ヲ以テ花ノ本正傳三世トス。家書「蠅打」(貞室千句批言 茶杓竹返答)「阿太知千句」「新玉海集」等アリ。元祿十五年壬午三月四日沒、行年七十歳。上鳥羽邑實相寺墓アリ。「家譜」ニ寶永二年乙酉十月三日沒、行年七十歳。又「同書」ニ「重次者重賴之從

爰ニ記スル附合ハ寛文七年印本「玉海集追加」ニシタガフ。許六輯録スル「歴代滑稽傳」ト異同アリ。

有レ故爲二貞室門人一也青木春澄。嘗有二幽契一故後屬二恕ニ一」此說甚イブカシ。貞恕若年ヨリ室叟ノ門葉タルコト崑山集 玉海集ノ二集ヲミテモ明證タリ。松江重頼ガ集冊ニ恕ノ句一章モミエズ。

―重満　大井氏、貞恕男、案ズルニ家譜、安靜條下ニ重門ト云人アリ。コレ重満壯年改名スル所歟。暫ク新玉海集延寶七年印本ニ家譜ノ說ヲ交テコヽニシルス。後人ノ考ヲ俟。

―乾峰　居初氏、雲峯ガ息、初名松鼓ト云、外舅乾氏大井トモ重門翁鼻祖貞德翁ヲサスノ傳書ヲ以テコレヲ讓リ與フ。故ニ乾ノ字ヲ以テ名トス云々。又貞五堂ト号ス。延享三年丙寅十月四日沒、行年三十四歲。

―二世乾峰　雲峯ガ外孫ニシテ乾峰ガ甥ナリ。初扇峯ト号ス、貞六堂ト稱ス。明和七年庚寅四月廿七日沒。四十七歲。

―三世乾峰　居初氏、貞六堂乾峯ガ男、初名乾雅、貞七堂ト号ス。幼ニシテ失レ父獨母ト居テ俳諧ヲ習ヒ、長ジテ父ノ統ヲ續グ。家書 二ツ臼 一巻アリ。住居ハ松原烏丸西ヘ入町。

―祖順　青木氏、通稱詳ナラズ。享保十六年辛亥九月十一日沒、行年未レ考。上鳥羽邑實相寺ニ牌アリ。法名、力堂貞眼居士。

―春澄　青木氏、通稱庄右衛門、薙髪シテ貞悟ト号ス。又印雪軒素心子ト稱ス。晩年自ラ之乎翁ト号ス、高倉二條上ル町ニ住ス。正德五年乙未七月晦日沒、壽六十三。

―貞清　藤本氏、通稱詳ナラズ。延寶ノ新玉海集オヨビ歷代滑稽傳等ニ出タリ。案ズルニ藤本氏トアレバ、惡佐男カ。幼名ヲ久松ト云。

―貞佐　中川氏、後水原ニ改ム、一十軒ト号ス、又自短頭翁ト稱ス。初幸佐門人、後恕ガ弟子トナル。家書 御傘集解 四鉢辻 等アリ。延享四年丁卯十二月六日沒、行年六十有八。

辭世　跡はみづとしの瀨を行千鳥哉

―八百彥　朝田氏、百合ガ息ナリ。父沒シテ後貞佐門人トナル。十合齋ト号ス、又後扇翁ト稱ス。書ヲ善セリ。油小路通佛池下ル町ニ住ス。家書 百合追善集　安永六年丁酉三月廿日沒、行年八十一。

辭世　東へも西へも往かじ花の空

―十口　青木氏始満口後倒氏ニ改メ又青木ト更ム。意心齋ト号ス。始ノ名ハ貞心又佐德ト云、後今ノ名ニ更ム。晩年清古閑ハト云。家書 四季出會 旅亭記 秋穗 いとまがき 生植箋 禽獸解 行事線 陸のまび 閑居友 拾遺家譜 後拾遺家譜 等アリ。京師綾小路通大宮東入町ニ住ス。寛政三年辛亥七月廿一日沒、行年六十九。

辭世　親類へ醫者がさゝやく袖しぐれ

喜雲　中川氏、通稱吉左衛門、名重治（或云重德）薙髪メ一ト号ハ、又山櫻子ト稱ス。室更高弟ナリ。藝州廣島ノ人、京師ニ住ス。家書「京わらべ」「跡追」「都案内者（二本アリ）」「鎌倉名所記」「私加多咄」等アリ。没年詳ナラズ。案ズルニ延寶中歟。寛文七年「跡追」ニ高年ナルヨシ見エタリ。

引牛　中川氏、喜雲ガ息、元祿年中ノ点者、没年不レ詳。

貞宣　神田氏、通稱左兵衛、初名貞頼、花樂軒或紅葉軒ト号ス、又自ヲ蝶々子ト稱ス。江戸ノ人、家書「思出草」「物忘草」「たちぎゝ」「松茸草」「いこしき」「當世男」等アリ。没年不レ詳。（享保十七年印本前句附「江戸筌」ト云冊子ニ、蝶々子ノ名アリ、此人トハ別人ナリ。又諸書ニ中島貞宣ヲ同人トス。名ノ同ジキニヨリ混合セシ誤ナリ。今「鸚鵡集」ヲ以テ改メ正スコト、中嶋貞辰。條ニイヘルガゴトシ。

山人　神田氏、貞宣妻、女六俳仙ノ一人ナリ。

二葉　神田氏、貞宣男、通稱詳ナラズ。一年歳旦ニ「死ぬまではいきるはづ也千ゝ春」ト吟ジテ當時（ソノコロ）、上ノ五文字歳旦ニハ忌ガタキヲ、善クイヒオヽセタリト衆人嗟歎セシトゾ。

尊明　服部氏、通稱猪兵衛・江戸本郷ノ人。

是計　関井氏、通稱八郎兵衛江戸ノ人

頼直　藤本氏・通稱詳ナラズ。河内綿郡ノ人。

定信　玉木氏、通稱伊兵衛、江戸ノ人

右ノ外「物忘草」（明暦三年印本）「思出草」（寛文元年印本）等ニ門人多ク出タリ。コヽニ略ス。

善入　山本氏、通稱善兵衛・京師東洞院ノ人

小督　善入妻、貞室門弟「玉海追加」秀吟多ク入。

○同時同名ノ俳士有リ。宇治ノ住ニテ村山氏意計ト号ス、又一号ヲ喜斎ト稱ス。茶道ニ達シ連俳ヲ善ス。寛文十二年印本桑折宗臣ノ「大海集」ニ秀吟多クイレリ。

再按ズルニ山本氏村山氏同人歟。寶暦十年印本「茶吏談」下巻ニ吉見氏云、初祇園ノ下山伏社ノ傍ニ住ストアリ尚考ベシ

榮春　井岡氏・喜之ガ母ナリ。「　」ノ一人ニメ杉木光女栢原（ミツメカイハラ）ノ捨女ニモ劣（オト）ラザルノ才女タリ。夫ニオクレテ尼トナリ、一尼ト号ス。其前（ソノサキ）ノ名没年等詳ナラズ。案ズルニ寛文ノ末延寶ノ始歟。

喜之　井岡氏通稱彌兵衛、友硯ト号ス。性質淳雅ニシテ人ト交ラズ、同時ノナガメゴトニ、批刀自ト共ニ行キテ俳句ヲ吟ジ、刀自ガ樂（タノシム）ヲ見テ己ガ喜トスト。實ニ深草ノ元政ニモ耻ザル風人ナリ。

德憲　駿州久能山德音院住職・法名、没年未レ詳。

和俊　延澤氏（本姓ハ荒井氏）通稱詳ナラズ。破扇軒ト号ス。江戸ニ住ス。本士ハ尾州熱田人ヘ「書畫便覽」

ニ延澤ヲ名トス、大ナル謬リ也。

惠佐 藤本氏、通稱久兵衛、名ハ久惠、京師ノ人、初貞翁批判ヲウケ、翁沒シテ後貞室ニ屬スト云々。「新百人一句」ノ一人。

素謙 川地氏、通稱久兵衛、名正量、後妻謙ヲ妻軒（ノチツケン）ト改ム。大佛妙法院「　」ノ家士。「俳諧師手鑑」（延寶四年印本）ノ一人。

貞因 榎並氏、通稱鯛屋善右衛門、菓子ヲ造ルヲ以テ産業トス。曾テ山城大掾ニ任ズ。貞室天水鈔ヲ以テ因ニ授ク、因机上ニ置テ朝夕コレヲ珍愛ス。一号ヲ白后齋ト云、元祿十三年庚辰三月廿三日沒、行年八十歲。「浪花俳仙」ノ一人ナリ。

貞柳 貞因男、通稱善八或忠兵衛、初名良因、（「家譜」ニ言因トアルハ誤ナリ）後信乘、薙髮シテ貞柳ト改ム。油烟齋鳩杖子ト稱ス。又助榮亭。長生亭。珍菓亭。圓果亭。清雲洞。等ノ諸号アリ。復豊藏房信海ヲ師トシテ狂歌ヲヨクス。家書「家土産」「續家土産」等アリ。享保二十年乙卯八月十五日沒ス、行年八十一。大坂下寺町「　」ニ墓アリ。

辭世へ百居てもおなじ浮世に同じ花月はまん丸雲ハ白妙

〇再日、狂歌ノ一道貞德。未得。卜養。信海。行風。等專詠ズトイヘドモ未ヒロカラズ。此叟出テ大盛ストイフベシ。

（柳叟辭世ノ吟ハ萬土産ニ肖像トモニ出タリ。）

貞峨 貞因次男、曾テ僧タリ。黄檗悅山和尚ニ屬ス。後還俗シテ滑稽家ヲ立契因ト号ス。後貞我菴貞峨ト改ム。家書「躍布袋」アリ。寬保二年壬戌十月四日沒、壽八十。

（古書ニ初名呂因トアリ。）

再日、元祿ノ頃印行スル「金平物語」「槐久米松山」ナドイヘル淨瑠璃節ニ、紀ノ海音トシルセシハ此叟ノ隱号ナリ。

潘山 塘氏、百子堂ト号ス。貞我ノ女ヲ娶テ其脉ヲ續グ。浪花ノ人、家書「橋ばしら」「仙家の杖」「猫築波」「猿つくば」「餅月夜」「時雨の橋」等アリ。沒年詳ナラズ。

貞富 榎並氏、貞因從弟、花實菴ト号ス。家名ヲ鯛屋ト稱シ、菓子ヲ造ヲ業トス。南御堂前ニ住ス。曾テ生白菴行風ト友トシ狂歌ヲヨクス。正德二年壬辰五月六日沒、行年七十有余。

言聽 清水氏、通稱四郎左衛門、京師ノ人、沒年詳ナラズ。

兼吉 廣瀨氏、通稱喜三郎、北勢富田ノ人、始貞翁ニ教ヲウケ後貞室ニ隨フ。沒年不レ詳。富田政雄（鬮友齋兎冠名）京ガ撰メル元祿十二年ノ「皮籠摺」下卷ニ日、富田廣瀨氏のもとにてへからうすの五條に似たり壁の蔦（京苑）ト當座ノ吟アリ。

萬跡 關氏、通稱久兵衛、丹州福知山ノ人

永吉 野澤氏、通稱與兵衛、越前ツルガノ人

兩士貞室ノ「五條百句品定」ノ一人ナリトイヘリ。

—路春　隅田氏、大坂ノ人、〔浪花俳歌仙〕ノ一人ナリ。

—交云　垣内氏、通稱新太郎、播州姫路ノ人、沒年未詳。

—世耻　逆藤氏、通稱理右衛門、名ハ利政、京師ノ人、貞翁直弟ナリ。翁沒後貞室ニ屬ス。

—春丸　田井氏、通稱七郎兵衛、京師祇園ノ社人、沒年詳ナラズ。〔百人一句〕ノ一人。

—貞陸　姓氏詳ナラズ。江戸ノ人、菊岡沾涼ノ〔綾錦〕ニ曰「貞陸、貞室門人、品川ニ住スト云々佐保介我ノ從弟ニシテ後川越ニ移ル。」予案ズルニ〔同書〕(アヤニシキ)ニ介我ヲ載テ曰「介我云々　享保三 戊六月十八日齡六十七ニテ沒云々。」トアリ。又皐月平砂(桑岡貞佐門人)著ストコロ〔而形集〕ヲミルニ、貞陸寛延元年一百歳ナルヨシ、賀ノ吟アリ。今介我ノ沒年ト參考スルニ年紀不レ合イカヾ。

—信光　吉岡氏、丁貞男、通稱七郎右衛門、備中小田郡ノ人ナリ。始メ貞德翁ノ門弟タリ。師翁沒シテ後貞室ニ屬スト云。

—本也　支竜甚右衛門ト云、名ハ正安、又支竜軒ト稱ス、復自是ト号ス。大坂御堂筋唐物町ニ住シテ筆ヲ製シテ業トス。沒年詳ナラズ。

●鷄冠井令德

(妙仙尼　令德妻女六俳仙ノ一人始名不レ考)　(良忠　同氏令德弟歟)

—良次　鷄冠井令德長子、通稱清右衛門、早世カ。〔鷹菟玖波〕以後集ニミエズ。

—令富　令德二男、幼名清次郎、壯歳ニ及テ作兵衛又牛七ト改ム。初ハ良富ト云、歌道ヲ善ス。元祿末頃沒、六十有余。

—令清　令德三男、通稱詳ナラズ。

—令敬　村上氏、通稱詳ナラズ。名ハ正孝、京師ノ人家書〔旅枕〕四卷アリ。○或云令慶

—宗賢　小島氏、通稱總兵衛、京師ノ人ナリ。鈴木信房ト計リテ〔源氏鬘〕(カ)二卷ヲ著ス。(元祿五年書目錄ニ撰者業柏トアリ大ナル誤リナリ〔句合〕又ハ〔道芝〕ナド同本別刊ナリ)〔源氏〕貞享 年〔京羽二重〕ニ小島德右衛門ト有ハ別人歟。

—信房　鈴木氏、通稱庄兵衛、今出川大宮西ヘ入町ニ住ス。令德沒シテ梅盛ニ屬ス。家書〔茄子喰ふし〕〔三ツ物〕等アリ。

—如貞　井口氏、通稱詳ナラズ。貞竹堂ト号ス。浪花間サ堀ニ住、連歌ヲ以テ職トス。家書〔小川千句〕アリ。沒年詳ナラズ。

—一晶　芳賀氏、通名順益、名治貞、(イ有)冥靈堂崑山翁ト号ス。京師ノ人、令德沒シテ後常矩ニ從ヒ、後東武ニ下リ、芝、又兩替町ニト居シ、醫術ヲ以テ業トス。初令德翁ヨリ崑山ノ印ヲ附屬ノ在世コレヲ用ユ又繪ヲ能ス。予ガ藏スル所ノ一軸、菱川師宣長子師房ガ風アリ。家書〔如何〕〔万水入海〕〔いろつぼ〕〔丁卯集〕〔一塵重山〕〔八宗懸隔〕等アリ。寶永四年卒ス、行年六十

有余。

釜鉞　藤木氏、羽仙齋ト号ス。江戸石町ニ住ス。享保初頃没ス、行年未レ考。

虛堂　神尾氏、江戸ノ人。

伊人　古跡氏、通稱久米之助、尾州ノ人、慶安四年印本［尾陽句帳］ニ秀吟多ク入レリ。没年詳ナラズ。

友我　一原氏、通稱詳ナラズ。尾州名古屋ノ人、或云、貞翁直弟トモ云。［新續獨吟集］（印行年号ナシ 案ズルニ延寳歟）ニ貞徳翁判ノ百韻アリ。

夕翁　攝州大坂初瀨町東本願寺ノ末寺、了安寺ノ住職、法名單念、復單信ニツクル。或云、貞徳翁直弟トモ、没年詳ナラズ。案ズルニ延寳ノ末、天和ノ初頃歟、［俳諧師手鑑］ニ出ス。

友三　奥西氏、通稱市左衛門、名ハ義茂、京師ノ人。

谷風　中村氏、通稱詳ナラズ。家書［廿日貝］一巻アリ。

瑞竿　石川氏、京師ノ人。

常春　服部氏、通稱詳ナラズ。眠柳亭ト号ス。元祿四年印本江水撰メル［當世百人一句］ノ一人、正徳五年乙未八月十三日没、行年七十二。

常英　服部氏、常春ノ息、父ノ後ヲツギテ眠柳亭ト号ス。没スル年詳ナラズ。

延清　志水氏、通名詳ナラズ。恕近子ト号ス。後出家シ日柳ト云、享保十九年甲寅五月十六日寂ス、行年六十九。

安山　河野氏、通稱詳ナラズ。鶴毛翁ト号ス。元文三年戊午七月三日没、行年六十五。
辭世　へいつとも息引とるが身の歳暮

和吟　別所氏、名字詳ナラズ。或云、常英門人ナリト、寳暦八戊寅年正月三日没、行年七十三。
辭世　癖になつて西ながみけり初旦

暢好　平岡氏、文蛉子ト号ス。享保十六年辛亥十月二日没、行年四十歳。

經定　山本氏、規矩妙子ト号ス。享保十九年甲寅二月廿六日没、行年四十八。
辭世へすゑ一季見はてぬ夢のほつれかな

歌鳥　隱僧、春朴ト号ス。享保十六年辛亥正月十六日寂ス、齢四十有六。京師ノ住。

之水　細井氏、成江堂ト号ス。寳暦十一年辛巳六月二日没、行年七十三。
辭世　隨縁の涙たちやみぬ夏の霜

二世之水　細井氏、之水息、明和六己丑年九月九日没、行年四十四。末期門人等請レ句書ニ圓形ニ投シテ筆死スト云ヽ。

重俊　西村氏、通稱次右衛門、初名重直、京師ノ人、家書［名所付合集］アリ。

恖堂　人見氏、俗稱詳ナラズ。芥耳軒ト号ス。享保十五年庚戌七月十七日没、行年四十八。

虚舟　黒瀬氏、不識亭ト号ス。虚舟ノ字、尊貴ノ謚号ニ觸ス、故ニ後去舟ト改ム。明和六己丑六月十六日没、壽八十。辭世　不來不去佛祖戯論　未後一句日日日新　底ぬけやかへらぬ旅の頭陀ぶくろ

定房　磨岡氏、俗稱ハ紅屋彌兵衛、薙髪シテ宗信、柳雨軒ト号ス。浪花ノ人、[浪花俳歌仙]ノ一人。

白安　姓氏詳ナラズ。眞笑軒ト号ス。京師ノ人。

行誓　京師勝滿寺住職　[新百人一句]ノ一人。

富長　橋本氏、京師ノ人。

滿重　福地氏、

京水　鳥川氏、

誹家大系圖上之卷畢

誹家大系圖　下之卷

伊勢津　生川春明著

◎

山本西武

光方　田中氏、通稱詳ナラズ。名ハ信光、銀竹軒ト号ス。京師ノ人、西武叟高弟ニシテ後一家ヲナス。朝江種寬ト友トシ善シ。家書　[雀子集]　[常盤草]　[そらう曾]　等アリ。

佳種　星野氏、通稱六左衛門、家名ヲ山田屋ト号ス。京師ノ人、後剃髪シテ宗以ト改ム。西武叟老弟ナリ。

瑞信　北岩倉桑門、甫菴ト号ス。家書　[連俳合掌]　一巻アリ。沒年詳ナラズ。

正在　小原氏、名隆光、京師ノ人、沒年詳ナラズ。[家譜]ニ直弟トアリ。案ニ[崑山集]ニ谷野正在ト云人アリ。此人ヲ誤歟。

隨流　中島氏、通稱源左衛門、名ハ晴直、松風菴ト号ス、薙髪シテ隨流ト改ム。（隨流ノ二字ハ佛書ソレノ經文ニヨルトモ又水車千句ヨリ起ルトモ云）三條川原町上ル町ニ住ス。郎吟ニ逢シ囘文

詩人傳ニ金勝慶安トアリ、歌人トミエタリ。

ヲ善ス。家書 紙屋川水車 寛文元年獨吟千句全篇同文ナリ 破邪顯正 菅野谷高政ノ中庸姿批言 鶯ぶえ百千鳥 貞德永代記 二ッ盃 或書ニ曰二ツ盃ハ金勝慶卷任依ト云人ノ作トアリ、蕉流下葉ノ人歟考ベシ。 等アリ。寶永五年戊子二月十一日沒、行年八十。

―隨有　瀧川氏、昌樂ト号ス、復恕水子ト稱ス。儒學ヲ松永昌三ニ隨ヒ、俳事ハ梅盛ヲ師トシ後隨流ニ屬ス。宗因風犢行スルヲ憎ンデ批言ノ書ヲツヾル、号シテ猿さりもちト云。

―文瓜　洛東鷲峯ノ桑門、法名詳ナラズ。家書 夢物語アリ。

―隨風　姓氏詳ナラズ。書風隨流ト伯仲ス。

―素伯　京師法然寺ノ住職、法名詳ナラズ。一号滿郭ト云、元祿五年印本ノ 書目錄 ニ 源氏鬢鏡 一巻著ストアリ、謬タルヿ上巻ニイヘリ。

―正長　島木氏、通稱七左衛門、正伯ト号ス。京師ノ人、 崑山集 ニ田中正伯ト云人アリ、貞翁直ノ門人歟。又廣澤長好ガ 家集 ニ同名ノ人モミエタリ。

―貞木　出口氏、花香堂ト号ス。家書 手松明 一巻アリ。元祿九年丙子十月二日沒、行年七十一。

―柳水　中路氏、神輿岡ニ住ス。家書 大元式アリ。

―紹節　籔内氏、紹春ガ男、忠岳ト号ス。京師ノ人、茶事ヲ以テ業トス。沒年詳ナラズ。 茶人大系圖 ニ忠岳ノ二字ヲモラセリ。

―定之　神戸氏、東林軒ト号ス。家書 一挺ノど見 一巻アリ。西武晩年門人ト云、元祿十三年庚辰九月六日沒。

辭世　朝がほは久しきものよ五十年

―乘秀　疋田氏、通稱十一屋市兵衛、始名養壽ト云、京師ノ人。

―道可　山本氏、名字詳ナラズ。京師六條ノ人ナリ。或云東本願寺ノ家司トモ、 扨或説ニ曰、西武叟撰スル 砂金 俳後集 四巻、師ノ名ヲシルストイヘドモ、實ハ此士ト一雪トハカリテ撰スル所ト云、イマダ是非ヲ知ズ。

―月潭　清水氏、通稱詳ナラズ。友松軒ト号ス。宇治ノ人。

―尙榮　杉山氏、通稱嘉兵衛、京師ノ人。

―重晴　田村氏、通稱甚太郎、不雪子ト号ス。江嶋大津ノ人、和歌連俳ニ達、寛文年間京師ニ出テ俳道ヲ專門トス。或云、安原貞室門弟トモ。

●北村季吟

―湖春　北村氏、季吟長子、幼名休太郎、名ハ季重、薙髮シテ湖春ト改ム。書ヲヨクス。間ノ町二條下ル町ニ住ス。父ニ從テ東府ニ參仕シテ法橋ニ

敍ス。元祿十年丁丑正月十五日父ニ先テ卒ス、行年五十有余。池之端七軒町正慶寺ニ葬ル、花巣院ト号ス。

湖元 湖春息子、始湖源ト号ス。寛延二年己巳五月四日没。「　」二「　」日宗寺ニ葬ル。

湖外 姓氏詳ナラズ。一松軒ト号ス。富小路五條上ル町ニ住ス。元祿年間ノ点者、「百人一句」〔追加〕ニ載タリ。或書曰、「　」

正立 北村氏、季吟次男、幼名權三郎、名季次、新玉津島ニ住ス。後又仕ヘテ東府ニ在リ。家、書「はしら立」アリ。元祿十五年壬午八月廿一日没、「　」瑞輪寺中玄妙院ニ葬ル、成等院ト号ス。

玄水 山岡氏、通名玄隣、抱甕齋ト号ス。京師六角通ニ住シ、醫ヲ以テ業トス。吟叟ノ高弟ナリ。家書「烏梁千句」「誹諧仕樣」「諸國獨吟」「誹諧小式」「吉野山獨案内」「隨筆集大全」「たからくら」「方丈記頭書」「徒然草鉄槌補」「多我身の上」「水鏡抄」「今川抄」「風月往來抄」「腰越狀抄」等アリ。延寶三年ノ夏疫病ニ冒サレテ没ス。年記詳ナラズ。

好春 兒玉氏、向陽堂ト号ス、或汲谷軒ト稱ス。京師ノ人（或南都ノ人トモ又室町ノ人トモ云）、家書「新はな鳥」アリ。〔家譜〕坂上氏トアリ、謬ナリ。

松春 兒玉氏、好春ノ息、池流亭ト号ス。家書「祇園拾遺物語」（未達両作）「誹諧小傘」同等アリ。没年不詳、案ニ寶永・正德ノ頃歟。

松泉 兒玉氏、松春ガ從弟、初松洗ト号ス。後泉ノ字ニ改ム。松春没シ後池流亭ト号ス、又白小僧ト稱ス。元文元年丙辰九月三日没ス、行年五十三。○松春ハ元祿五年印本「四十三番時代不同發句合」ノ一人也。

未達 西村氏、通稱「　」名久重、京師堀川「　」ノ人ナリ。書物鬻ヲ業トス。家書「關相撲」三卷アリ。

竹翁 橋部氏、耕齋ト号ス。寶永五年戊子三月五日没、行年六十二。京師人、「當百人一句」ノ一人ナリ。

元恕 山岡氏、元隣從弟、名字詳ナラズ京師ノ住、家書「續俳諧仕樣」アリ。寛文・延寶中ノ人。

可全 大村氏、通稱彦太郎、家名ヲ白木屋ト云、京師室町ニ住ス。和歌連歌ニ達ス。元隣。可全。ハ吟叟羽翼ノ門人タリ。

立卜 牛井氏、通名詳ナラズ。一六ト号ス。始名ハ文都、京師ノ人、後浪花ニ移リ、醫術ヲ以テ業トス。浪花「三十六人」一人ナリ。

桃青（正風ノ祖） 松尾氏、俗稱甚七或ハ忠左衛門、名宗房、伊賀國上野ノ人、始京師ニ出テ吟叟ニ隨ヒ、師木嶋筑波ノ道ヲキハム。後東府ニ下テ談林雅ニ交リ、勘破シテ正風ノ一道ヲ開ク。其風日々ニ盛ニ、其徒弟月々ニ加ル、凡二千有余人。薙髪シテ風羅房

トヲシ、芭蕉翁ト稱ス。深川ノ菴室ニ芭蕉一株ヲ植テ雨中ノ吟「芭蕉野分して盥に雨を知る夜かな」芭蕉ノ名コヽニ起ル。

家書　二十歌仙　延寶八年次庚申初夏杉杦町本屋太兵衛開板ト古印本ニアリ。

貝おほひ　むさし千句　三百韻

奥の細道　以下集ハ門弟ノ條ニ抄出。元祿七甲戌十月十二日没ス、行年五十有三。（マヽ）粟津義仲寺ニ葬ル。終焉記ハ晉子其角ノ枯尾花ノ卷首ニ載、開キミルベシ。尙翁ノ傳ハ路通ノ行狀記許六滑稽傳及一代記其外諸書ニ委シケレバ、コヽニ不レ贅。尙門人等中編下卷ヨリ下編ニ云ベシ。

素堂　山口氏、名信章、字子遠、來雪ト号ス、復自蓮池翁ト稱ス。庭前ニ蓮池ヲ作リ朝暮愛之、故此名アリ。天和三年其角カ撰メルみなし栗ニ、素堂ガ荷興十唱アリ。其一章ニ「うきはなきは此は古風晴すぎたらん」又同集其角蓮池ヲ臨ムノ句「風秋の荷葉に扇をくゝるなり」ト云ヘリ。繪ヲ善シ、松尾桃靑翁ト友トシ善シ。

家書　さく〳〵の句合アリ。享保元年丙申八月十五日没ス、行年七十五。谷中感應寺中瑞音院ニ葬ル。

黒露　山口氏、素堂甥、宗齋ト号ス　稲中菴ト稱ス、

家書　硯　澤　老　山　集

駿河百韻　等アリ。寶曆年間八十有余ニテ没ス。

似春　小西氏・通稱詳ナラズ。大坂ノ人ナリ。江戸本町ニ寓シ、後總州行德ノ社職トナル。

家書　芝さかな　山の端千句　等アリ。

扨或書ニ曰、似春ハモト里村家ノ門人ニテ連歌師ナリ。通稱加右衛門ト号シ、家名ヲ奈良屋ト云。又一説ニ奈良屋加右衛門ハ湊ノ俗名ニシテ似春ニハアラズ。似春ハ加賀屋三郎右衛門ト云、イヅレカ是ナルヿヲ知ラズ。

秀和　大野氏、通名詳ナラズ。炭瓢齋ト号ス、又自相水翁ト稱ス、始集和ト号ス、後今ノ字ニ改ム。江戸ノ人也。弱冠ノ頃某侯ニ仕ヘ、辭メ後隱士ト成、正徳四年甲午八月卒ス、六十有余。元祿九年むつ千鳥ニ肖像ヲ載タリ。○男ヲ秀堂ト号ス。父ノ後ヲ續デ家聲ヲ隕サズ。

無倫　志村氏、拾葉軒、雪堂翁ト号ス。江戸大鋸町ニ住ス。本土ハ越後ノ人也。

家書　紙文夾　二卷アリ。享保八年癸卯二月廿九日没ス、行年六十三。含海山青松寺ニ葬ル。法名天質硯壽居士。

辭世　すはさらば水より水へ行の道

倫里　足立氏、穗葉軒ト号ス。石町ニ住ス。享保中ノ点者。

來川　足立氏、倫里息、始古鈴、又水軒ト号ス、家書金華錄　夢物語　等アリ。元文元年丙辰十二月没。

讀糟　村松氏、孤松軒ト号ス。紀州若山ノ人

吟市　東武大德院弟子、安住院住職、法名寧海和尙、後本土江州鉄塘ニ居ス。天和壬戌年卒ス。或書　始ハ高野山蓮花寺ノ住職トアリ。○或ハ隨心院トアリ

吟市　久津見氏、初名詳ナラズ。江戸ノ人、二世吟市ノ後ヲ續テ吟市ト云。

浮生　北藤氏、銀塘居或ハ迦樓閣ト号ス。江戸銀町ニ住ス。家書　原誹論　水秤集　鳥跡話　等アリ。享保二年丁酉正月廿三日没、行年四十八。小日向金剛寺ニ葬ル。

水雲　姓氏詳ナラズ。名安朝、丹州ノ人、或阿州德島ノ人トモ、晩年ニ及テ京師ニ寓居ス。誹諧鳥合　大長刀　等アリ。當世百人一句追加ニ出タリ。

可常　丹波國氷上郡神池寺中中姓院ノ住職、法名不レ詳。家書　法のはな　二卷アリ。（又以隱。入玄。倫和。意友。四僧神池寺ノ住可常門人歟）

如春　伊藤氏、名字詳ナラズ。京師ノ人、延寶三年乙卯夏没ス。新百人一句ノ一人ナリ。津田如春トハ別人ナリ。

友吉　櫻井氏、通稱甚右衛門、京師ノ人、或人云、友吉ハ山岡元隣門人ニテ、吟叟ノ直弟ナラズトモイヘリ。イマダ是非ヲ知ラズ。

素雲　佐治氏、通稱詳ナラズ。晩年吟鳥ト改ム。京師ノ人、茶ヲヒサギテ業トス。

康吉　下村氏、通稱利兵衛、京師ノ人、新百人一句ノ一人ナリ。

道伯　青木氏、名字詳ナラズ。浪花ノ人、醫ヲ以ニ業トス。延寶三年乙卯年没ス。　辭世
つみものやなくて淨土へ月の舟

白悦　濱川氏、名ハ行中、後師風ヲ變ジテ一風流ヲツクル。家書　空林風葉集　二日三百韻　花洛六百韻　等アリ。

久武　大鹿氏、名字詳ナラズ。京師ノ人、家書　弘誓舟　アリ。

則常　伊豆氏、通稱小兵衛、京師ノ人。

宣休　中村氏、俗稱詳ナラズ。淨貞ト号ス、又一安子ト稱ス。浪花ノ人、家書　浪花草　四卷アリ。息子ヲ宣居ト云。

卜琴　柴垣氏、一下ト号シ、松風軒ト稱ス。城南山崎巷ノ人、繪ヲ善ス。梵益ト友タリ。家書　越路草　四卷アリ。

卜尺　小澤氏、踞齋ト号ス。始名孤吟ト云、後蕉翁ノ門人トナリ、今ノ名ニ改ム。蕉翁東都ニ下リ、始テ履ヲトキシハ卜尺ノ家戸（ヤドリ）ナリト、綾錦ニアリ。寛延四年辛未九月卅日没、行年詳ナラズ。淺草誓願寺ニ葬ル。（父ヲ得入ト号ス。稱太郎兵衛、本舟町坊正、寶永六年十二月廿四日没、行年詳ナラズ。誓願寺ニ葬ル。）連俳ヲヨクス。

自笑　上林氏、通稱竹菴、淨雲ト号ス。城南宇治ノ人、茶ヲ製スルヲ以テ產トス。晩年白川ニ閑居シテ俳諧ヲ專トス。寛文始ツ頃沒ス、行年詳ナラズ。

安親　川並氏、通稱不レ詳。江州ノ人　吟叟門子
安親 ─ 宣爲　安親男、
　　└ 孝女　宣爲妹

靜山　浪花大文寺ノ住職、法名詳ナラズ。（同ノ俳僧アリ、比叡山無量院ニ住ス。書ヲ善

ス。筆法定家樣ニ似タリ。

―橋泉　姓氏詳ナラズ。□松軒ト号ス。京師ノ人、醫ヲ以テ業トス。十會集ノ一人ナリ。

―貞度　高氏、通名詳ナラズ。背醉子ト号ス。尾州侯ノ臣、寛文中ノ人。

―木因　谷氏、白樓トト号ス。又自ラ杭(□)□川翁ト稱ス。後蕉翁ノ門弟トナル。美濃大垣ノ人、弱年ノトキハ木端ト云。家書　俳諧祕密

―胡兮　坂部氏、彌兵衛ト号ス。豐前中津ノ人。家書　到來集アリ。

―良典　舘氏、意行子ト号ス。江戸ノ人、家書　むさしの集アリ。

―古益　桑折氏、通稱左衞門、名ハ宗臣、青松軒本水居士ト号ス。伊豫宇和嶋侯、家書

―本水　大海集七卷アリ。

―賴邑　桑折氏、宗臣君息、隣松軒、嗅三居士ト号ス。

―福富　水野氏、通名牛内、名勝種、備後福山侯、或云、梅盛門トモ、家書　はりぬき千句アリ。

―任口　名高通　□　嘗テ連俳ヲ好ミ其頃延寶中ヲサス洛ヨリ季吟父子ヲ招キ專行ハセラル。續連珠七之卷冬ノ部「季吟に始てあいて一染にやとまつに北村時雨かな　久居八百五十韻アリ。御秀詠ハ續連珠集ニ數多載ミリ。聞キ見ルベシ。(晋國曰、藤堂氏、佐渡守、伊勢久居ニテ五万石ヲ領ス、元祿十年八月九日歿、年五十四、伏見ノ任口トハ別人也。)

―無端　ヘ氏續山の井集ヲ覽ニ江戸ノ住、或ハ伊勢津ノ住トアリ。苗氏ニヘヲ印シハ故アルベシ。新續獨吟集季吟判ノ詞ヲ拔レバ江戸ノ人トミエタリ。

〇

千丸　一條攝政兼道公、後淨明珠院ト号ス。後中院昭實公男實忠榮公ノ八男、寛文六年丙午七月廿八日薨、六十。

白話　東本願寺御門跡　大僧正琢如上人、淨寧院ト号ス。寛文十一年辛亥四月十四日寂、四十二歲。

暫醉　東本願寺御門跡　大僧正常如上人、靈瑞院ト号ス。元祿七年甲戌五月廿二日寂、五十四歲。

旧族　東本願寺御門跡　大僧正一如上人、忍見院ト号ス。元祿十三年庚辰四月十二日寂、五十二歲。

〇右之御方々、吟叟ノ門人ナラズ。十會集ニ出ルニヨリテ爰ニ錄ス。

∴高瀨梅盛

元晴　高瀨氏、稱太右衞門

元親　高瀨氏、稱仁右衞門

伊藤氏、通稱助左衞門、梨柿園ト号ス、又日

―信德　竹犬子或ハ□□ト稱ス。新町通川ニ住ス。幼時貞祖ニ見ユ、祖翁許スニ徳ノ字ヲ以テス。翁沒シ後西武・梅盛ニ從テ道ヲ學ブ。武沒シ後一向梅盛ヲ

師トス。毎ニ家事務有テ東府ニ往反シ、數檀林ノ徒ニ會ソ師風ナ學ズ、故ニ句異躰多シ。又蕉翁ニ親ムヿ深シ。翁東府ヨリ書ナ洛ニヨセテ曰、近上都ノ風體何如。信德 和及 我黒 數人ト日々相會ソ討論ス。不覺至飲酒數斗終ニ、へ雨の日や門提て行かきつばた 此句ナ作テ以テ贈ソ。宜ナルカナ、其音節ノ佳ナルヿ。其角「雜談集」及「俳諧古選」ニ記セリ。

家書 「江戸三吟」延寶六年、信德東府ニ下リテ桃青・桑々ト三吟ノ三百韻ナリ。「十百韻」「五戲言」「白重」「浮世姿」「七百韻」「胡蝶判官」「徒すがた」等アリ。元祿十一年丙寅十月十三日沒、行年六十六。

信昌 伊藤氏、信德男、通名・沒年詳ナラズ。按ズルニ元祿四年印本「なわすだれ」ニ「信德孫の身まかりける時に へ御身分の蚊を追はれたと聞もうし」ト畔非ノ吟アレバ、弱年ニハアラザルベシ。尚信由ト云次男モアリ、後世通セズ。

去留 寺田氏、通名詳ナラズ。若州小濱ノ人、家書「青葉山」アリ。

重德 寺田氏、通稱詳ナラズ。「見山集」ニ寺田次郎右衛門正安、寺田清兵衛休也二人アリ。兩士ノ内ノ一人カ、又別人カ詳ナラズ。元祿五年印本「[illegible]すがた三之卷」ニ[illegible]初秋ト前書シテ、「わすれても今朝の一葉に驚かれし」ト云吟アリ。家書「獨吟集」「續獨吟集」「ちりづか」「新獨吟集」「花見辨慶」等アリ。

琢石 菅原氏、京師ノ人「百人一句」ノ一人

可心 三宅氏、若狹小濱ノ人

江水 姓氏詳ナラズ。流木堂ト号ス。江狹柏原ノ人 家書「柏原集」「當世百人一句」等アリ。

信安 植村氏、棹歌齋ト号ス。始名芥舟ト云、江狹水口ノ人、後京師ニ住ス。狂歌ナ善シ茶香ナ嗜ム。家書「あくたぶれ」「花拾遺」等アリ。元文二年丁巳八月十七日沒、行年六十八。

一醉 姓氏詳ナラズ、老山子ト号ス。越後新潟ノ人。

蠡海 姓氏詳ナラズ 京師ノ人。

楊々子 丹後宮津沙門、法名不詳、家書「浦嶋集」アリ。

隆志 北村氏 錦花堂ト号ス、又自信安齋ト稱ス。家書「合鏡」「笹本」「百杜鵑」「草むすび」等アリ。明和元年甲申歲九月六日沒、齡七十。辭世ノ詞書云、鳥將死鳴聲悲人將死言善誹諧雜一体有常不用之一生篭云殘誰命期月日忘哉 身はほとけわれといふ日はくれにけり

隆雅 北村氏、隆志息子、初錦志ト云、醒井通松原上ル町ニ住ス。父沒ソ点者トナル。家書「宵月」亡父追善集也 天明二年壬寅四月廿四日沒、行年詳ナラズ。

豊秋　長村氏、阜鶴齋ト号ス。寶暦六年丙子十一月廿九日没、行年五十七。京師ノ人。

春雄　杉本氏、青々舘ト号ス。綾小路通烏丸東エ入町ニ住ス。聞吟ノ達人善ク數句ヲ吐ク、没年詳ナラズ。

文也　山本氏、梅園ト号ス。醒井通高辻下ル町ニ住ス。安永八年己亥七月廿八日没、行年八十五。

里公　辻氏、大黒菴ト号ス。明和七年庚寅八月二十五日没、享年四十四。辭世　梨の身の丸く〳〵さして果にけり

順也　内田氏、幼名平吉或云、稱トモ、俗京師室町ノ人ナリ。家書［五節句］アリ、

本春　野田氏。通稱［　］重春舎弟ト云、家書［三十六俳仙集］アリ。

倫員　藤村氏、名ハ忠久、茶丹菴ト号ス。薙髪シテ如堅ト改ム。京師ノ人ナリ。家書［木玉集］アリ、藤村庸軒男。

秋風　三井氏、名ハ時次、京師ノ人、家書［狂遊集］二巻アリ。没年詳ナラズ。

［古澗］ニ鳴瀧住トアルハ別人歟。

宜安　筒井氏、通名平三郎、名良以ト云、後百之ト改ム。東府ノ人、始ハ良德ニ隨ヒ、後梅盛ニ屬スト。

一イ　内山氏、通名正菴、播磨姫路ノ人、始ハ貞翁ニ從ヒ、後梅盛ニ屬ス。家書［早梅集］六巻アリ。

離雲　隠僧・姓氏詳ナラズ。洛陽東山清水寺ノ麓ニ一草菴ヲ結ビ、懐蕉（イ惠）菴ト号ス。和歌及狂歌ヲ善ス。

行貞　［　］内海氏、通稱治兵衛、名光重、不求子ト号ス。

安重　内海宗惠ガ從弟ナリ。没年詳ナラズ。案ズルニ寛文中頃歟。［山下水］春之部下ニ安重追善〳〵世なくらし浄土の春に入日哉」ト梅盛ノ吟アリ。

如泉　齋藤氏、始ノ名朝三ト云、後今ノ名ニ改ム。菴ヲ四條道場中ニ結テ眞珠菴ト号ス。善ク漢和ニ達ス。家書［重寶記］［狂歌句式］［漢和千句］［松ばやし］［池心亭］［番匠童］（其角がヱラミシ［いつを昔］ノ番匠童トハ別本ナリ。）等アリ。正德五年乙未八月十七日没、行年七十有余。（始ハ香山氏ト云。）

如雲　姓氏詳ナラズ。京師ノ人、家書［五百三歌仙］

如風　姓氏詳ナラズ。京師ノ人。

秀朝　藤井氏、通稱吉左衛門、梅遊子ト号ス。三條油小路ノ人、梅盛及貞室ニ隨フ。明暦年間没、行年詳ナラズ。［鸚鵡集］ニ見エタリ。

竹翁　西村氏、通名良菴・瑞竹軒ト号ス。肥後國熊本ノ人、始ハ貞翁ニ從、翁寂シテ後梅盛ニ屬ス。家書［松花集］［肥後名所］等アリ。没年詳ナラズ。案ニ延寶・天和ノ頃歟。

|不力　齋藤氏、通稱玄眞、浪花内本町二丁目ニ住シ、醫術ヲ以テ業トス。没年不詳。

|一歩　千村氏、通名詳ナラズ。濃州ノ人ナリ。父ヲ東樹林喜右衛門、貞德翁ノ直弟ニシテ、秀吟寛永ノ[鷹筑波集]ニ多ク出タリ。

|一笑　小椙氏、名ハ味頼、加爲金澤ノ人、梅盛及秀吟(マヽ)ニ隨フ。後蕉翁ノ門弟トナル、翁ノ風ヲ吟ズ。元祿元年没、行年詳ナラズ。寶晋齋其角ノ[雜談集]ニ曰「加爲金澤の一笑は、こゝに俳諧にふけりし者なり。翁行脚の程は宿申さんとて、遠く心ざしなはこびけるに、年有て重勞の床にうち臥しければ、命のきはもおもひさりたるに、父十三回にあたりて哥仙の誹諧を十三卷、孝養にとて思ひ立けるも、人〴〵さゞめて息もさだまらず、此願のみちぬべき程には、其身いかゞあらんなど氣づかひけるに、死すとも悔なかるべしとて、五歌仙出來ぬれば早筆とる事かなはず成にけるも呼(カタイキ)に成ても猶やまず、六巻こさなく滿足したれば、我肌にかけてこそさらにおもひ殘せることなしと、悦びの眉重くふさがりて〳〵心から雪うつくしや西のくも　臨終正念と聞えけりト云ミエタリ。尚同名ノ俳士數人アリ。委ク[俳家人名類聚]ニ云ヘシ。

|野也　高梨氏、通稱丈菴、京師ノ住、醫術ヲ以テ業トス。和歌連歌ニ達ス。又書ヲヨクス。

明暦・万治年間ノ人、[新百人一句]ノ内。

|重道　木村氏、通稱詳ナラズ、飯袋ナト号ス。江東草津ノ人[書畫便覽]ニ三十六人ノ内ヲモヲシテ此士ヲ載タルハ、穿鑿(センサク)オロソカナリト云ベシ

|政時　原田氏、卜有子ト号ス、京師ノ人、後命政ト改ム。

|吉頼　坂倉氏、不驕軒ト号ス。濃州竹ヶ鼻ノ人ナリ。

|重尙　小川氏、拙心子ト号ス京師ノ人

|良三　一村氏、藪竹子ト号ス京師ノ人

|樂園　京師觀音寺住僧、法名詳ナラズ、一号知泉ト云。

|可政　大田氏、通名勘十郎、貞松子ト号ス濃州竹ヶ鼻ノ人ナリ。

|道繁　佐々木氏、京師ノ人。

|以專　泉州堺眞光寺ノ住職、法名詳ナラズ。

石田未得―可曉　雲宇田川氏　歌道
　　　　　―可信　同苗　同
　　　　　―未石　同苗邑里　堂、俳家

|未琢　石田氏、未得男、艮堂ト号ス。居所父ト同ジ。家書[一本草]　[和句解]或云、未得著トモ等アリ。天和二年壬戌三月廿日没、行年七十有余。淺草誓願寺ニ葬ル。法名隆芳院未琢居士、[新百人一句]ノ一人タリ。

|意深　石田氏、未琢男、菊川ト号ス。吉田意安ニ醫道ヲ學ブ。

未陌　櫻井氏、未琢ノ門人ナリ。中橋通ニ住ス。

|不卜　岡村氏、通稱市郎右衛門、一柳軒ト号ス。東府ノ人、家書[江戸廣小路]　[向のたかつゞきの原]等アリ。元祿四年庚未四月九日没、平阿山法恩寺ニ墓アリ。

不角

立羽氏、虛雲齋ト号ス。或ハ南々舍、松月堂ノ數号アリ。薙髮シテ法橋法眼ニ任ズ。後自千翁ト稱。書畫ヲ善ス。江戸八丁堀ニ住ス。此士才學スコブル高シ、故ニ師風變ジテ一家ノコトヲ成ス。化鳥風ト云。家書

（「あやにしき」ニ著述七十五版燒失トアリテ「かくかせわ」ヨリ「百人一句」マデ載タリ。）

「笠の蠅」謙谷紀行全部三巻　「わくかせ輪」九巻　同　十巻　同　十一巻　「木曾の麻衣」「清かむな」「母恩集」「二葉松」「信順行」「百人一句」三　「一騎打」等アリ。寶暦三年癸酉七月廿一日沒、行年九十二。本願寺中淨勝寺ニ葬ル。「墓所一覧」ニ寶永トアルハ筆工ノ誤リ也。

辭世　空蟬はもさの裸に返しけり

再曰、「綾錦後集」「鳥山彦」享保廿一年印本上巻　誹風變化ノ辨ト云條ニ「元祿のすゑに晋子其角、洒落誹諧といふ付合の一体を起す。岸本調和。阿曲一蜂。大野秀和。岩本子英。等の宗匠合体して當時の洒落ト云、誹諧は謎字の体に似て、しかも一句の訣別なし。當流正風体と云は、是に過ぐべからずと、「黄楊枕」と云書を編す北藤浮生。「原誹論」といへる書を以て其返答をして、正風を化鳥はいかいと誹謗しけるより、華江の誹諧二流にわかれぬ。中略立羽不角今千翁ト云その頃より今以流儀かはらず、息不扃・壽角の三士は益々一流を立て、他の誹風にかゝはらざる也。云々」トアレバ、不角ノ流義ヲ化鳥ト云ハ謬歟。

不扃

立羽氏、安月堂ト号ス。不角ノ長子ナリ。家書「おふのうらなし」「風姿集」ノ不角門士巍々トメ群ヲ成ス。雖レ然後世ニ聞ヘタル人ナシ、ヨリテ略ス。

壽角

二男、松千堂ト号ス。

山夕

樋口氏、江戸ノ人

二世 山夕

桃井氏。鳴蛙井ト号ス。始仙水ト云、久保町ニ住

仙水

樋口氏、山夕ノ男、江戸住。

∴荻野安靜

〔追考〕或書ニ、安靜初名ヲ荻田九郎兵衛重和トアリ。此說ウタガハシクテ直弟ノ條ニ洩セシニ、上巻刻ナリテ後、「道遊集」貞德翁家集也ヲミルニ荻田安靜トアリ。是ニヨリテ同人ナルヿヲ知レリ。

似船

富尾氏、通稱彌一郎、名重隆、芦月菴ト号ス。後薙髮メ似空軒二世、續テ似船ト改ム。五條堀川ノ人。家書「隱れがさ」「芦花集」「堀川水」「苗代水」「勢田長橋」「大上戸」「安樂音」「火吹だけ」「入相鐘」此ノ書寶永おかけ詣ノ吟ナルベシ。當時火吹竹ノ唱哥流行セリ　等アリ。寶永二年七月十六日沒、行年七十七。

加計

姓氏詳ナラズ。京師ノ人、家書「口說草」四巻アリ。同名俳士勢陽松坂ニアリ、別人ナリ。

林鴻　堀江氏、通稱［　］名ハ重則、烟月堂・雲風子ト号ス、江州大津ノ人、後京師ニ寓ス。戯文ニ達シ、畫ヲ善ス。［うふ手］ナドヨク知ル所ナリ。　家書［あらむかし］［京羽二重］等アリ。

鞭石　福田氏、井鶴軒ト号ス、後面壁堂ト改ム。晩年自法兒ト稱ス。京師ノ人、　家書［礒なれ松］一卷アリ。享保十三年戊申二月十五日没、行年八十歳。
辭世　終にゆく岸の柳や法の兒

有扇　佐藤氏、桂花菴ト号ス。享保十五年庚戌十一月三日没ス、行年七十。京師ノ人、［當世百人一句］ノ一人タリ。

舟露　佐藤氏、有扇ガ從弟、名字詳ナラズ。元祿年間ノ点者、先レ兄テ没ス。［當世百人一句］ノ一人。

滴水　村山氏、風流子ト号ス。京師ノ人、元祿寶永中ノ点者、没年詳ナラズ。

鉤軒　若江氏、通稱詳ナラズ。名合之、京師ノ人。［　］

擧高　山縣氏、杏花亭ト号ス。享保十五年庚戌十二月廿七日没、行年六十四。京師ノ人。

梅應　山中氏、西翁堂ト号ス　梅應　山中梅應息、寶暦二年壬申十二月没　天明七年丁未五月四日没、行年レ不詳。　五十一。

練石　福田氏ニメ鞭石ノ孫ナリ。鞭石没メ後、門人等師家ノ系緒斷絶センヿヲ憂、於レ是芦花翁其嫡孫練石ヲメ輔テ二世点格ヲ立テ、舊号ヲ續テ即チ而笑堂ト号ス。晩年石々翁ト改メ、玄兒ト稱ス。松原室町西エ入町ニ住ス。家書［岸柳］（法兒追善）［糸やなぎ］［高低窟］等アリ。寛政元年己酉七月六日没、行年八十八。
辭世　はらひ洗ひ心い月の鏡かな

一四　西川氏、明月菴ト号ス、又自蚊齋ト稱ス。京師ノ人、延享三年丙寅九月十四日没、行年三十八。
辭世　何悟る喝さ一聲秋の蟬

羽紅　竹田氏、玄々堂ト号ス。寛保三年癸亥閏四月三日没、行年五十七歳。　辭世　ゆく雲にまで連だゝん時鳥

知石　鈴鹿氏、寸松堂ト号ス、自芦花翁ト稱ス。弱齡ニメ而笑堂門人トナル。翁コレヲメ執筆ヲ役セシム。故ニ顧寵ヲ得テ家秘口決傳レ之無レ遺。家書［野馬臺集］三卷アリ。元文五年庚申十二月十三日没、行年六十歳。

茎石　知石ガ息、初名ハ知丸、寸松堂ト号ス。生質穎敏ニメ且ツ篤實、最モ風雅ノ器ナリ。家書［千里雪］（亡父追善）父没後幾バク歳ナラズメ、寛保二年壬戌六月廿七日没、行年三十。人甚惜レ之。
辭世　終に行水無月涼し陶淸し

知木　鈴江氏、寄松堂ト号ス。家書「橋立松」元文五年庚申五月廿八日没、年四十四。
辭世　ゆく水とゝもに涼しゝ石川や

翠柳　山中氏、花木亭ト号ス。明和元年丁酉十月十二日没、行年七十二。京師ノ人ナリ。

蘭石　中村氏、雲竹齋ト号ス。元文三年戊午七月二日没、行年五十五。
辭世　荻の聲彌陀さきく夜を期哉

二世蘭石　中村氏、蘭石ノ息ナリ。初知蘭ト云、後父ガ名ニ改ム。尤二代ノ点稽益佳シ。京師白山通松原上ル町ニ住ス。天明二年壬寅正月十二日没、行年六十九。
辭世　無は數そふ日となつて枝寒し

佳山　中村氏、央虫舎ト号シ、一ニ蘭石齋ト号ス。而咲翁ニ從テ道ヲ學ブ、尤点業ヲ續ク。天明八年戊申九月廿一日没、行年詳ナラズ。

丈石　早川氏、千載堂ト号ス。初名ハ和雄ト云、師家ノ執筆タリ。嘗テ四時堂ノ主ニ因ンデ漢和ヲ善ス。師没シ剃髪シ宗順ト号ス。家書「筆鋼臺」「長樂寺千句」「菅蓑日記」「雨吟百歌仙」「緒手巻拾遺」「橋立紀行」「南紀紀行」「狂歌百首」「俳諧家譜」等アリ。安永八年己亥七月廿一日没、八十五歳。
辭世　極樂に誕生日はけふなれや

蘆中　古澤氏。芸暉堂ト号ス。初名牛鷹ト云。家書「狂連千句（附文和）」「袖鑑」「園莖立」等アリ。寛保四年甲子十月六日没ス、四十四歳。
辭世　我のみかかもへは霜の柱立

梨風　奥村氏、芸暉堂ト号ス。寶暦十二年癸未十月六日没、行年五十有余。
辭世　一すじに嬉しき霜の臺かな

林石　甲良氏、伏龜堂ト号ス。初名ハ愚候ト云。又自都齋ト稱ス。後荃石ノ後ヲ續テ寸松堂ト云。家書「松の林」「梅の林」等アリ。寶暦二年壬申四月廿六日没、行年六十三。

因石　三谷氏、松養軒ト号ス。初名君李、後今ノ名ニ改ム。明和二年乙酉三月廿八日没、行年六十七。
辭世　名ミかへす花の淨土へ宿ばかり

都牛　高橋氏・蟲々齋ト号ス、又千蝶子ト云、寛延二年己巳八月十五日没、行年四十四。
辭世　何のまゝ残る葉もなし秋の風

五株　八木氏、化龍館ト号ス。洛東新道柳町ニ住ス。天明八年戊申六月廿八日没、六十六。
辭世　いさふ世ないいた心ぞ蚊帳の中

其梅　野村氏、作松堂ト号ス。天明八年戊申二月十二日没、行年七十歳。京師ノ人、
辭世　ねがはくは無爲の都を住所

調和　岸本氏、通名猪右衛門名ハ友正、薙髪シ―ト号ス、又壮齋ト稱ス。江戸呉服町ニ住ス。「江戸点者」及「俳諧綱目」第二ハ芝トアリ旧所舅　本土ハ奥州ノ人也。始京師ニ出テ

安静ノ門人トナル、側ニハ梅盛ノ教ヲモ受クルト。家書「是まで草」「富士石」「題林一句」等アリ。正徳五年乙未十月十七日沒、行年八十有余。築地門跡中ニ葬ル。法名、調和院道鑑居士ト号ス。肖像ハ太白堂桃隣ノ「陸奥千鳥」ニ載タリ。

二世 調和　堀尾氏、敲柳堂ト号ス。初名ハ和推ト云、調和二世ヲ續テ師ノ名ニ改ム。木芝ニ住ス。寛保三年沒、行年詳ナラズ。

艶士　横田氏、壺谷軒ト号ス。東府ノ人、醫ヲ業トス。家書「分外集」アリ。

風和　江原氏、正六位佐渡守ニ任ズ。出羽國社司梅樹軒ト号ス。家書「梅の露」「杷菅」等アリ。正徳二年壬辰二月十八日於テ京都ニ卒ス、行年六十一歳。

（立羽不角撰「百人一句」ニ最上郡大谷ノ人トアリ。）

辭世　梅ちらし旬の土な故郷へは

心友　中田氏、通稱詳ナラズ、鶉巴軒ト号ス。始東府ニ住シ、後伊勢國山田ニ來ル。神風館足代弘氏（神風館ノ祖傳系中編ニ委シ）ト親ミ、檀林風ヲ吟ズ。秀吟「杉の群立」ニ出タリ。又自ラ撰シハ「御田扇」四巻アリ。沒年不レ詳。

和推　堀尾氏、始名ハ和專（或ハ全）ト号ス、敬而菴ト号ス。二世調和ノ息子、芝濱松町三町目ニ住ス。沒年詳ナラズ。

和三　藤田氏、名字詳ナラズ。麻布土居君ノ侍醫、元祖点印二世調和ヨリ附屬ス。寶暦六年丙子秋沒ス。

常陽　木戸氏、通稱詳ナラズ。醫術ヲ以テ業トス、後根津權現ノ社職トナル。享保年間ニ沒、「むつ千鳥」ニ肖像ヲ載タリ。

一鉄　三輪氏、名字詳ナラズ。宗因ノ門人ニメ調和ニ屬ス。（或云幽山ニ屬トモ）池西言水ノ句集「毛登柏」ニ「江戸八百韻」（寄羽云古印本奥書延寶六年）と云集撰し侍りける時、素堂さ打つれ歸るさの夜いたく更ぬ。所は本庄一鉄が許、家まばらにして、かきねうの花咲り云トアレバ本庄ニヤ住ケン。此文往時ノオモムキ眼前ニミルコヽチス。

喜得　石橋氏、名字詳ナラズ。伊豆ノ國人、家書「青柳千句」アリ。

宗英　内本氏　京師ノ人

俊秀　村瀬氏、京師ノ人。

定利　徳永氏　京師ノ人。

高嶋玄札

及加　高島氏、通稱善大夫、勢陽山田ノ師職、玄札ノ從弟ナリト云。家書「嘲哢集」アリ。或不在菴加友法師ノ門人トモ云、是非ヲ不レ知。

一蜂　河曲（カハワ）氏、俗稱詳ナラズ。田泉舍ト号ス、又自葛仙翁ト稱ス。江戸神田ニ住ス。晩年本土勢陽山田ニ皈ル。享保十年己巳九月十五日沒、行年八十有余。「陸奥千鳥」ニ肖像ヲ載タリ。

∴正法寺成安 ―― 成政　池嶋氏、
- 宗吟　池島氏、通稱庄右衛門、名ハ成之、泉州堺ノ人、成政從弟也。○古短冊ノ裏書ニ池西言水ガ伯父ヲ宗吟ト号ス、大和郡山ノ人トアリ、同名別。
- 正重　多木氏、俗稱ハ京屋満兵衛、泉州堺ノ人。
- 柳夏　細谷氏、通稱詳ナラズ。名成元、泉州堺ノ人。

∴池田正式 ―― 正親　池田氏、正式男、『玉海集』及『源氏鬢鏡』五十四人ノ一人ニ撰ミイレラル、郡山侯ノ臣ナリ。
- 正辰　岡村氏、通稱詳ナラズ。大和國郡山ノ住。家書『大和順禮集』三巻『續大和順禮集』五巻アリ。寛文年間ノ人。

∴法樹院加友 ―― 加連　伊勢松坂ノ人、姓氏詳ナラズ。樹敎寺中僧歟。『毛吹草』『山井集』ニ秀吟多クイレリ。『山ノ井』ハ正保四年印本、大本ナリ。慶板安ハ横本ニテ再刻
- 氏守　『荒木田氏』

- 子英 ―― 岩本氏、通稱忠兵衛、伊勢松坂ノ人、後江戸ニ下リ淺草ニ居住ス、後又本所ニ移ル。家書『黄櫻』『枕』『花時鳥』等アリ。貞享・元祿年間ノ点者、白魚ノ句ノ美談アリ、爰ニ略ス。
- 乾什　岩本氏、子英『　』千歳兒ト号ス、滿呆菴ト稱ス。初名ハ吳丈ト云、淺草竹門ニ住シテ一号チ竹婦人ト稱ス。戯文ニ達シ『水調子』ト云院本世ニキコエタリ、寶暦九年己卯二月十七日沒、淺草寺境内人丸ノ祠前墓碑アリ。
　辭世　雪ごけや八十年の作りもの

再日、加友撰集『伊勢なごり』イマダ閲セズ。此外門弟多カルベシ。

∴椋梨一雪 ―― 丈西『或書』ニ延寶四年ノ『言羽織』ナ引用シテ此名ヲ出セリ、椋梨一雪ガ一号歟、又親族歟、予未ダ此書ヲミズ。
- 一貞　高田氏、通稱傳兵衛、京師ノ人、後東武ニ移ル。家書『貞徳誹諧記』アリ。寛文中点者。
- 友意　渡邊氏、通稱八彌、尾州名古屋ノ人ナリ。或人云、友次門弟ナリト。家書『旅衣』四巻アリ。万治・寛文中。
- 春昔　姓氏詳ナラズ、獨辨軒ト号ス。京師ノ人。

∴藤谷貞兼

貞頼　藤谷氏、通稱三右衛門、貞兼父歟

貞則　藤谷氏、通稱彌右衛門

貞勝　藤谷氏　通稱彌七郎

西角　寺井氏、輪花堂ト号ス、白村雲翁ト稱ス。又要心居士ト号ス。京師ノ人ナリ。享保十五年庚戌八月八日沒、行年七十歳。

辭世　月影はかつて今行十万里

一方　北川氏、西角菴ト号ス、湖鷹窟ト云。白鵠翁ト稱ス。後薙髪シ行雲ト改ム　西堀川通元誓願寺上町ニ住ス。家書　鳥　宿アリ。

∴宮川松堅

○松之　宮川氏、通稱三郎右衛門、松堅兄歟。

晩山　爪木氏、暁花堂ト号ス、又二童齋ト稱ス。初ノ名ハ永可ト云、富小路加藤盤齋ガ舊宅ヲ購ヒモトメテ居所ス。家書千代古道　橋立案内等アリ。享保十五年庚戌八月十五日沒、行年六十九歳。門人等遺言ニ依テ鳥羽長泉寺中槃如法師ノ墓ノ傍ニ立。

辭世　まめ〱とよ身はならはしの草の露

再日、元禄五年　舌日録　ニ山太郎返答　挨物語　ヲ著タル門人石柱ト云人アリ、是レ晩山ガ祕号歟。

晃山　爪木氏、暁山ノ息男ナリ。後京師ヲ去テ津國長柄村ニ住シ、雅業ヲ廢メ醫トナル。沒年詳ナラズ。

道山　井上氏、樱戸ト号ス。享保五年庚子八月十五日沒、行年　十四歳、京師ノ人。

白鵠　大矢氏　初名虎竹、我黒ノ門人ナリ。見沒ノ後晩山ノ弟子トナル。蘆隱軒ト号ス。老後薙髪シ高辻烏丸ノ東清香菴ニ住ス。自第齋ト稱ス。家書　四季大全　俗根源　等アリ。延享三年丙寅九月廿七日寂、行年七十九歳。

梧山　重田氏、峯石居ト号ス。初淡々門人、後白鵠ニ嗣ス。回文ヲ善クシ即座數句ヲ吐ク。家書　海波（全篇回文）アリ。享保十八年癸丑三月二日沒、行年三十八。曾テ聞ク、臨レ期ム窓前ノ梅樹花纔ニ發ル。偶鵩ノ來啼アリ、山ガ曰、吾將レ終一即取レ筆辭世ノ句ヲ書ス。香やひらき法さく鳥のきらびやか　書シ已テ眼ヲ閉ヅ、可憐、年來ノ習情末期ニ及テ猶作ニ回文句一ヲ。

晩年　野々山氏、初名桃隱、招花堂ト号ス。享保十八年癸丑八月八日沒行年五十八。京師ノ人。

貞爲　梅原氏、和海軒ト号ス。享保十三年戊戌七月十四日沒、行年六十歳。京師ノ人、柿園ノ三世トス。

松貞　加藤氏、通稱詳ナラズ、柿園ノ四世トス。享保十五年庚戌四月七日沒、行年詳ナラズ

清佐　北田氏、通名詳ナラズ、享保七年壬子九月十八日沒、行年四十七。

辭世　木ともりとなりて益なき此身哉

周爲　大塚氏、雲石翁ト号ス。松百没後梅園五世ヲ續グ。

鳥道　德田氏、伊吉齋ト号ス京師ノ人。

捨女　丹波國氷上郡栢原(カイハラ)田氏ノ女ナリ。弱年ヨリ和歌・俳諧ヲ好、吟叟ノ門弟タリ。〔貞室─書山〕〔季吟─秀吟〕多クイレリ。後松岡ニ隱シ、專和歌ヲ學ブ。女六俳仙ノ一人ナリ。嘗テ宗族田義園〔田打克玄ト云フ。俳諧ヲ善ス。〕ニ嫁シ、壯歳ニシテ寡トナリ、剃髮シテ妙融ト号シ、淨土律ヲ學、後禪法ニ皈シ、大法正眼國師〔江戸麻布天龍寺開山盤珪禪師ノ諡リ名。〕ニ參ジ開悟ス。一草扁ヲ播州網干(アボシ)邑ニ創メ不徹菴ト号ス。元祿十一年戊寅八月十日於ニ彼菴ニ寂ス、壽六十五歲。嶺雲貞閑尼首座ト諡ス。

正宣　香田氏、初名ハ明水ト号ス、後人子ト改ム、居ヲ堪忍軒ト号ス。又松戸ト云、自在翁ト稱ス。家書〔松戸集〕〔麻木合〕〔かりばし〕等アリ。享保三年五月十二日沒、行年五十八歲。

共諺　圓山正阿彌住職。五條橋東ニ隱棲シ四時堂ト号ス、又自得菊翁ト稱ス。嘗テ眞珠菴知泉ニ隨ヒ漢和ヲ學ブ。尤無敵詞鋒多シ。泉ガ誹漢此翁ニ及テ倍(マスヽ)々興ル。家書〔御傘執柄抄〕〔潮冠子〕〔金衣〕〔鳥羽雨漢和千句〕〔滑稽弁疑抄〕〔廿四卷寫本、此書俳諧ノタスケノミニアラズ、好古考トナルベキ事多シ。〕元文元年丙辰八月廿二日寂ス、行年七十一歲。
辭世　七十一年ようはもつたる露の玉

流石　三輪氏、鬼角堂ト号ス。初東府ニ住ス、立羽不角ガ弟子ト爲テ鬼角ノ字ヲ得タリ、後

阪京菊翁ノ門人トナル、延享初年沒ス。

袋河　三宅氏、蝶々舍ト号ス。誹漢ヲ善クス。且書畫ニ巧ナリ。元文元年丙辰五月十七日沒、行年四十一歲。

米史　隱岐氏、初名ハ如牛、後阜遊ト改ム、後又米史ト更ム。師家ノ二世ヲ續テ四時堂ト号ス。延享四年丁卯十二月廿七日沒、四十四歲。
辭世　心から地獄は敷居たかゝりき生れてゆかん銀持の家

普求　山本氏、初名ハ不求、松門亭ト号ス、又日雪莎翁ト稱ス。東洞院通五條下ル町ニ住ス。家書〔種袋〕〔火ともしびらき〕〔磯のうみ〕等アリ。明和八年辛卯七月廿一日沒、行年七十九。
辭世　心ちよし秋の日所を死出の旅

來々　河合氏、五湖菴ト稱ス。初名ハ湖貫、祇園新地末吉町ニ住ス。家書〔志賀の餘花〕アリ。安永九年庚子九月十七日沒、五十四歲。
辭世　雛子は我が秋ニる長かな

賦泉　石田氏、名字詳ナラズ。七條西魚店堀川ニ住ス。安永五年丙申十一月廿九日沒、五十七。
辭世　けふさいふ今日は眞の雲佛

倭泉　石田賦泉妻、泉沒シ後引器ヲ修ス。普求門弟、沒年詳ナラズ。

應隨　松本氏、宗月菴ト号ス。鍜冶町松原ニ住、天明三年癸卯三月十日沒ス、五十三。
辭世　世の纏(マツハ)ひへきる我も形なし

—可静　戸田氏、瑞雲閣松亭ト号ス。寓居ハ隨ト〔後拾遺家譜〕同所、天明五年乙巳十一月六日没、行年五十八。〔拾遺家譜増補〕ニ十一月五日五十五歳トアリ。

辭世　寂は雨暮て□ぬ日の時雨哉

●半井卜養——器水　半井氏、濕野慶友次男、泉州堺ノ人、又云、立圃門人定親一号ヲ器水子トアリ、考ベシ。又云、〔綾にしき〕ニ卜養門人ニト入。卜一ナド載タレドモ故アリテ爰ニ略ス。

—卜仙　半井氏、卜養男。

—兼豊　門村氏、通名詳ナラズ。薙髪シテ高橋ニ住ズ。江戸久保町ニ住ス。晩年ニ及テ居ヲ京師ニ移ス。本土ハ南部ノ人、書ヲ善ス。

●吉田友次—流水　吉田氏、友次ノ男カ、尾州名古屋ノ人、梅盛門ニ遊ブ。家書〔つゝ見井〕一巻アリ。

●高瀬道甘——見性　伏見藏之坊ノ住僧

—間加　伏見藏之坊ノ僧、案ズルニ後年間隨ト号スル〔當世百人一句〕ノ一人ハ此僧ノ後名歟。

●片桐良保　〔追考〕良保ノ二字ヲ名乘ナラント思ヒヲリシニ、青木鷺水ノ〔俳諧新式〕ヲ見ルニ政恒トアリ、上巻貞德直弟ノ條ニアヤマリテ洩セルニヨリ爰ニ識ス。

—常矩（一流ノ祖）　田中氏、（始ハ瀧氏トモ云）俗稱ハ甚兵衛、名ハ忠俊、薙髪シテ眞齋ト号ス。少シテ識量アリ。始ハ貞翁ノ風下ニ從ヒ、眼ヲ開テ一流ヲ起ス。一年、蛇之助が　うらみの鍼や花の暮　ト吟ジテ、蛇之助ノ号ヲ得タリ。後宗因ト交會シテ専一雙ノヿヲ吟ズ。家書〔花見三吟〕〔雜巾〕〔捨舟〕〔破帚〕〔ねざめ〕〔塵取〕〔五百番〕等アリ。没年詳ナラズト雖モ、案ズルニ天和年間歟。清風ガ著ス〔打曇紙〕ト云書ハ宗因常矩追善集トヤケリ、未閲。

—如川　高松氏、通名龍助、京師ノ人、醫術ヲ以テ業トス。始ハ梅盛ニ隨、後常矩ガ手ニ屬ス。没年詳ナラズ。案ニ延寶ノ頃歟。〔百人一句〕ノ一人也。

—蚊足　和田氏、通稱源七郎、圍常ト号ス。上代風ヲ好テ筆道ニ達ス。嘗テ聞、常矩撰スル集物、多クハ此人ノ筆ナリト云。〔書畫便覽〕ニ一号ヲ寛車トアレドモ謬ナリ。延寶七年ノ〔塵取集〕ヲ閲キテ惑ヲトクベシ。

―薄古　明田氏、通名玄菴、橘祥軒ト号ス、京師ノ人、醫ヲ以テ業トス。後似舟ノ門下ニ屬スト、没年詳ナラズ。

―一味　北田氏、通稱詳ナラズ。一号逹雄ト云、京師ノ人。

―正業　田中氏、通稱作助、二條堀川ノ人、渓葉軒ト号ス。始西武・貞室ニ随ヒ、後常矩ニ屬ス。没年詳ナラズ。家譜ニ正徳五年八月十二日没、六十一歳トアレモ誤也。古集ニアハズ。尙常矩ガ親族トスル丆覺束ナシ。

―生西　小野田氏、名ハ［　　］二竹軒ト号ス。京師ノ人。

―竹亭　溝口氏、蚤歳ヨリ誹諧ヲ好ミ、和及竹翁ト友トシ善シ。毎ニ行厨ヲ携テ遠近ノ勝地ニ遊ス、坐ソ吐キ行々吟ズ。日トソ句アラズト云丆ナシ。家書 なだまき 二巻アリ。此書俳士ノヨク知ルトコロナリ蔵版アリ
大司小巽 元祿五年壬申六月廿九日没、行年三十五歳。

―澤女　姓氏、居所詳ナラズ。常矩ガ集ニ秀吟多出ス。

―助叟　片山氏、名字詳ナラズ、椿木亭ト号ス。洛陽東山ニ住ス。本土ハ肥前長崎ノ人、家書 京の水 二巻アリ。没年詳ナラズ。案ニ宵永頃歟。サテ 拾遺家譜 ニ大淀三千風ノ門弟トセリ。予自撰ノ 京の水 ヲ閲スルニ三千風ニ隨フ丆據ナキニシモアラズ。

―可俊　森氏、名字詳ナラズ、京師ノ人ナリ。家書 大路車付合集 アリ。

―尙白　江左氏、大津ノ人、後蕉翁門派ニ皈ス。委シク中編ニ云ベシ、爰ニ略ス。

―暮四　石井氏、始名鵺林、後――ト改ム。石壽菴ト号ス、又自五橋翁ト稱ス。享保十九年甲寅二月廿五日没、六十九歳。

―市貢　次山氏、巨璞堂ト号ス、又石壽堂ト号ス。洛東鷲ケ峯ノ麓ニ住ス。家書 彼岸集 暮四追善ナリ 寛保三年癸亥正月四日没ス、行年五十有三。
辭世　我きえて窓にのこるや鷲の雪

―市楓　松原氏、名字詳ナラズ、石壽堂ト号ス。初名、木シュト云、家書 乘合舟 鷲雪 市貢追善 等アリ。

―蝶之　入見氏、芳草亭ト号ス。明和五年戊子八月廿五日没、行年五十一。
辭世　極樂の道な西へさ渡鳥

∴松永尺山

―貞山　相淵氏、名字詳ナラズ。芦丸舍ト号ス、又湖月亭ト稱ス。京師ノ人、後江戸ニ移リ補町ニ住ス。家書 ひらつゝ見 手挑灯 江戸名所集 其 糸 親 鶯 閣 礫 抄 寛保元年辛酉［　　］没、七十有余。○再日、貞山師トスル松永尺山ト云人、古書

ニミエズ。或書、天和・貞享頃松永未春ト云人アリ、此人歟。傳系ナシラズ。

—貞賀　相淵氏、貞山ノ男
—貞至　星川氏、遊柿菴ト号ス。「机勝手」　家書
—貞橋　姓氏詳ナラズ、江戸ノ人、「笛わらへ」　家書
—貞岸　熊谷氏、旭淵洞ト号ス。京師ノ人。

・岡村言當—重當—齋當

重當　岡村言當男

齋當　重當男、通稱三郎右衛門。

○以上遊蕩軒松永貞德居士孫弟

○檀林風祖 而直弟

・宗因

西山氏、通稱次郎、名豐一、始一幽ト号ス、後宗因ト改ム。〔慶安治ノ頃〕又西翁ト稱ス、又梅翁ト号ス。〔此外西翁、宗因、梅花翁、野梅、忘吾等ノ号アリ〕元肥後國加藤家ノ侍臣ト云、正保年間浪花ニ來、滿天神ノ社地ニ住シテ、向榮菴ト号ス。其後社地ヲ去リテ、天満菅屋町内ニ移リ寓ス。〔寛治ノ頃〕初ハ懷惠斎里村昌琢法眼〔一号竹…寛永十二年二月五日卒ス六十五歳〕ノ門ニ入テ連歌ヲ善シ、天満天神月次宗匠タリ。後長子宗春ニ讓リ、己ハ宗鑑ガ「犬筑波」守武神主ノ「獨吟千句」ヲ慕テ滑稽家トナル。一年西國ニ遊ブ。其頃何某禪師ノ法嗣法雲和尚ト云、俳諧ノ習ヲ好マス、則門弟子ト成テ禪意ヲ受ク。マタ歸テ江戸ニ下リ、都ニ登リ、專狂意ヲ吟ズ。依テ之門下ト成ル人潮ノヨルガ如シ。

寛文ヨリ下、天和・貞享ニ至テ名ヲ海内ニ轟ス。此一流ヲ稱シテ當風トモ、又檀林風トモ云。家書「蕃椒百韻」「獨吟千句」「後五百韻」「後千句」「兩吟集」「鎌倉三百韻」「し百韻」「花落百韻」「十會集」「釋教百韻」「天滿千句」「廿日草三百韻」「四人法師」「一時雨」「ひろあ見」「高野紀行」等アリ。天和二年壬戌三月廿八日沒、行年七十三歳。天満寺町西福寺ニ牌アリ。

—宗春　西山氏、宗因息、父ノ業ヲ續テ連歌ヲ善クス。天満菅原屋町ニ住ス。延寶年間慈公連歌獨吟集ヲ上木ス。沒年詳ナラズ。

—西鶴　井原氏、通名詳ナラズ。初ノ名ハ鶴永、薙髮シテ——ト改ム。松壽軒ト号ス、鎗屋町ノ人、延寶年間、一日二万三千句ヲ吐テヨリ、稱シテ二万翁ト云、又戲文ニ妙ヲ得、著ス所幾許ナリ。

家書「大矢かず」「後大矢かず」「博多百合」「胴ほね」「杉屋き」「石くるま」

○以下戲文

「一代男」「二代男」「三代男」「一代女」「大かゞ見」「武道傳來記」「櫻隱祕事」「永代記」「武家ぎり」「ひがんざくら」「文反古」「西鶴にをし」「置土産」

[西鶴織留] [浪花大鏡] [點算用]
[名殘友] [一日玉鉾] 等アリ。ケシハ天和ノ浮世本ニテ、サシ畫ハ吉田半兵衞ノ筆ナリ。甚珍シキ册子ナリシヲ、表目ヲ忘失セシ故、暫思出迄アケオク。元祿六年癸酉八月十日没、行年五十二歳。辭世ノ吟ハ上卷ニ抄出 浪花八町目寺町誓願寺ニ葬ル。碑面曰、仙晧西鶴 門人莚平。團水、建レ之。

―松意

田代氏、本姓ハ高木氏 名ハ秀延、琴風軒・川草子ト号ス、後檀林軒ト改ム。大和ノ人、大坂ニ住ス。寛文末東府ニ下リ、宗因風ヲ弘ム。衆鉢トテ日々ノ變化ヲアラハス。是ヲ江戸檀林ト云。 家書 [虎溪集]（宿雀ニ鶴吟）有リ、没年詳ナラズ。

―宗旦

松井氏、通稱詳ナラズ。也雲軒ト号ス。攝州伊丹ノ人（或曰池田ノ人トモ） 家書 無分別（「宗因ノ点ニ白露ヤ無分別よるおきどころ」立句トセシ所以ナリ。） [籬のけ錦]（本兵、百丸・鬼貫・露留ノ五吟ナリ。） 遠山鳥 [鶉眞似] [加様にい物に] [無盡經] [野梅集] 等アリ。伊丹風ノ祖ナリ。[當百人一句]ノ一人。

―高政

菅野谷氏、薙髮シ法橋ニ任ズ。於ニ京師ニ宗因ガ誹風ヲ立、總本寺半傳道社ト号ス。蓋シ東府ノ檀林ニ對スルノ意也。友靜・仙菴・如泉等高政ニ與シテ梅翁ノ風ヲ弘ム。因レ之古風ノ俳士ト爭論交起ル所謂ル[俳諧破邪顯正][俳諧ちりもち][頼政うたひ][三人かたわ]等ノ國書多ク出ス云々。又ハノレガ著ハ集ハ [中庸姿] [繪あはせ] [同後集]

[是天道] [三百韵] [江戸蹤] 等アリ。没年詳ナラズ。[當百人一句]ノ一個也。

―惟中

岡西氏、通稱詳ナラズ、名ハ勝 字赤子、一時軒、或閑々堂ト号ス、因幡ノ國取鳥ノ人、弱冠ヨリ博物多識ナリ。故アリテ因州ヲ去テ備前岡山ニ寓シ、醫儒ヲ以テ業トス。延寶五年再備前ヲ出テ浪花高麗橋ノ側ニト居ス。和歌道ヲ園寺兵部盛貞（中院通茂卿ノ門人、圓菴ノ人）及鳥丸資慶卿ニ教ヲ受ク。一年西翁西國ニ遊ブ 則門人トナリテ滑稽家トナル。 家書 [太郎五百韵] [次郎五百韵] [俳諧蒙求] [十百韵] [近來風體] [俳諧三部抄] [遠州扇返答] [破邪顯正返答] [自評判返答] [いつれ都の] [徒然草直解] [續無名抄] [徒然草眞名] [枕草紙旁註] [和歌俳稽] [一時隨筆]（外題カエ全 一時隨筆トモ云）等アリ。元祿五年壬午八月十日没、行年五十四歳。[家道]ニ一門下ノ條ニ曰「惟中岡西氏備前ノ人也初メ号ス一有ト後改ム帷中ト云々。又[同書]園女ノ條ニ惟中去テ都ニ住シ、于浪花ニ久シ日逝レ之。園女爲レ妻、中没後移ニ住于東府ニ屬ス其角ニ云云」此説誤ナリ。一有ハ斯波氏ニシテ伊勢山田ノ俳哲ナリ。惟中ガ初号ニハアラズ。[岬田鶴]（天和二年刊 西山宗因心友撰也ナリ）[當世百人一句]（四平 園女）[日本行脚文集]（伊勢ニ於 三千風著）等ニ兩個トモニ出タルヲ以テ惑ヲ氷解ベシ。カツ園女ヲ惟中ガ妻ナリト云モ

オノヅカラ明日ナルベシ。尚蕉門ノ條ニ委シ。

半幽 前川氏、名ハ由平或書ニ云通稱由兵衛トアリ 夕舟子ト号ス。浪花平野町ニ住ス。晩年釋門ニ入テ自入ト改ム。寶永年間北野村ニシテ没、行年不レ詳。

梅朝 林氏、名字詳ナラズ。西鵬齋ト号ス、大坂ノ人、延寶年間俳學ノ爲ニ東府ニ赴ク。宗因已ガ梅ノ一字ヲ讓テ梅朝ト改ム。其以前ハ西鵬ヲ以テ号トス。家書 精進膾 通し馬 等アリ。當百人一句ノ第二ニ出ズ。

似仙 高瀧氏始ハ山崎氏、通稱正左衛門、名安之、薙髪ノ後似仙ト改ム、又自笹翁ト稱ス。泉州堺ノ人、後大坂江戸堀竹屋町ニ住ス。初ハ令徳門人タリ。家書 落花集 犬ざくら 兩吟千句 濡がらす 等アリ。没年詳ナラズ。大坂俳歌仙ノ一人。

玖也 松山氏、名字詳ナラズ。大坂ノ人、季吟門鳴戸水雲ノ作セシ 大長刀 ニ曰「玖也は大坂の人、季吟先生旧友にて俳諧の參會度々なりしに、其會のさばき筆先生にまかせし人と也。殊に俳諧の風躰大坂の濁流にもそまず、心にくき作者なりし。且亦去年延寶四年の四月にうせし人なり云々」トアリ、コヽニ大坂の濁流ニモ染ズトアレバ、別派ノ人タリヤ、尚ヨク考ベシ。浪花俳哥仙ノ一人。

昨非 乾氏、名字詳ナラズ。藥香軒ト号ス。備前岡山ノ人、酒ヲ鬻ヲ業トス、後浪花江北天滿橋ノ側ニ寓シテ点者トナル。初立圃門子タリ。家書 縄すだれ 悲の巻 根合 ほしぼし 等アリ。

定直 木畑氏、通名玄佐、備前岡山ノ人、醫ヲ以テ業トス。家書 五ヶ國 兩吟集 宵戸曙 朧月夜 等アリ。

幾音 中堀氏、柳和軒ト号ス。始器音、後幾ノ字ニ改ム。浪花尼崎町ニ住ス。家書 家土産 アリ。○兄ヲ初知ト云、狂歌俳諧ヲ能ス。何人ノ門タルコヲ不レ知。

西國 豐後ノ國ノ桑門、或ハ西海トモ云、家書 相腹中 花見數寄 兩吟十歌仙 等アリ。没年詳ナラズ。

如自 石井氏、鶴鵬子ト号ス。肥前佐賀ノ人ナリ。始立圃梅盛ニ親ミ、宗因西國ニ遊ベル期門弟トナリ、則兩吟二百句ヲツヾラヌ、一時雨 ト云册子是也。

萑宿 那波氏、通名江雲、初名志好、樸軒ト号ス。又自萑翁ト稱ス、京師ノ人ナリ。季吟門弟ニシテ檀林ニ皈ス。虎溪橋 作者。

方山 南氏、通名元順、泉州堺ノ人、醫ヲ以テ業トス。寛文年間堺天神社前ニテ、始テ編笠着誹諧十万句附合ヲ催ス。騒人爰ニ集テ其ノ風流未聞ナルヲ感ズ。私ニ云江戸亀戸社前ニ於テ開莚セシハ是ヨリ後也 家書 寛伍集 二日千句 等アリ。晩年ニ及テ正風ニ皈ス。没年詳ナラズ。○按ズルニ元祿二年尾陽ノ俳士、櫨木堂荷兮撰メル 曠野集 ニ辭世ノ吟アリ、左ニ抄出。

辭世 南無や空たゞ有明のほとゝぎす

瓢界 北村氏、名字詳ナラズ。始瓢海ニ作ル。大坂ノ人、後江戸ニ移居ス。家書 犬滿呂

難波順禮 等アリ。或書云、名宗俊。

一得 牧野氏、名字詳ナラズ。始西鬼ト号ス、又自鬼翁ト稱ス。浪花上町ノ住、家書 たかばやし 一卷アリ。

盤谷 志水氏、名字詳ナラズ、泉千ト号ス。江戸瀬戸物町ニ住ス。或云、本土越前ノ人トモ、家書 桑梓格 アリ。匝日 三番續 寶永二年印本大和不水著 ニ木村盤谷大坂住トアリ、同名別人歟。

遠舟 和氣氏、名由貞、――ト号ス、浪花ノ人、筆道ヲ以テ海内ニキコユ。門人ニ永井走帆堂ト云人アリ。家書 浪花辨慶 姿 哉 八重一重 等アリ。○或書ニ和氣仁兵衛、堀詰ノ住トアリ。

豐流 岩橋氏、名豐春、攝州天王寺邑ノ人、家書 天王寺名所彼岸櫻 アリ。

重安 伊勢村氏、通名宗善、浪花ノ佛匠ナリ。始ハ古風ヲ吟ジ、後宗因ガ門弟トナル。家書 糸屑 集 東鯛從高島轍士ノ著ス糸屑トハ別也 アリ。

悅春 岡田氏、通稱大文字屋二郎兵衛、浪花ノ人、始ハ令德ニ隨ヒ、後宗因ニ屬ス。浪花俳諧仙 一人タリ。

三ケ 木村氏、通名宗玄、不水子ト号ス、後三箇ト改ム。又再三ケト改ム。始ハ安靜ガ門ニ入、後檀林ニ屬ス。晩年蕉門ニ皈スト。

六翁 黑川氏、名字詳ナラズ。大坂ノ人、昨非ノ撰メル 紕すだれ 元祿四年 ニ「病してこゝち死ぬべく思ひ侍りければ、書付て ふたりの娘に のこし侍りける。

「あらそはで形見さみなせ我後の花のあしたと月の夕を」云々 辭世

旨恕 片岡氏、通稱庄三郎、松舟軒、或松門亭ト号ス。浪花堂嶋ニ住ス。始ハ季吟門弟ト云。好旅日記 五卷ヲ著ス。俳書ニアラズ

清風 鈴木氏、――秋風子ト号ス、羽州尾花澤ノ人、京師ニ屬ス。家書 由加多擲廊 稻むしろ おくれ双六 吐 授 鷄 あやしき 打曇り砥 等アリ。○此士別傳ニ論アリ。

治平 城越氏、或城氏 通稱詳ナラズ。攝陽平野邑ノ人、後大坂備後町八町目ニ住シテ古筆賞鑒ヲ以テ業トス。家書 古今俳諧師手鑑 アリ。

均明 苗氏詳ナラズ。通稱龜屋德右衛門ト云、浪花ノ人、櫻 千句 十歌仙各盃 吟者。

春倫 濱田氏、名字詳ナラズ。浪花ノ人、○從弟ヲ春良ト号ス。俳諧ヲヨクス。和歌明題部類抄ヲ著ス。或云、維舟門人トモ。

宗靜 土橋氏、通名以慶、後以計ト改ム。大字軒ト号ス、又春林子ト稱ス。攝州平野邑ノ人、後長堀十町目ニ住ス。筆道ニ名アリ。家書 浪花色紙 アリ、沒年詳ナラズ。案ズルニ正德ノ頃歟。

秋香 井上氏、通名昌海、名貞則、大坂高麗橋筋島屋町ニ住ス。筑波ノ道ヲ以テ業トス。里村

家ノ門人、俳諧ハ宗因門弟タリト。

―鷗一　苗氏詳ナラズ。越後前國丸岡ノ人、大坂ニ寓ス。家苗『八景集』アリ。

―正友　遠藤氏、通稱詳ナラズ。江戸ノ人、『綾錦』荒木加友系ニ曰「正友ハ勢州杉木勾當望一弟子ニ芝源助橋ニ住ス。延寶ノ頃檀林流布ノ時合ニ蘇田代松意ト而宗因荷擔ス」トアリ、此說誤アリ。松意ト合躰セシハ杉木正友ニハアラズ、別人ナルヿ苗氏ヲ見テモ論ナカルベシ。タヾシ加友門人ト云ニ考アリ、望一門ニ云ベシ。

―無卜　平田氏、蠏翁ト号ス。江戸ニ住ス。本土ハ越ノ國ノ人ナリ。享保五年庚子十月廿日、門人京橋柳町忠次宅ニテ沒、行年六十二歲。
辭世　其心その期になりてそのかくご先それ迄はそれよ世の中

―宗貞　淺沼氏、贇也ト号ス、又望山軒ト号ス。浪花鳴屋町ニ住ス。書ヲ善クス。

―隣鶯　白江氏、通稱玄秩、醫術ヲ業トス。始ノ名ハ自云ト云、浪花御靈前ニ住ス。筆道ニ名アリ。

―正案　大坂西道寺住職、半捨軒ト号ス。家苗『淨土珠數』アリ。

―未次　苗氏詳ナラズ。通稱ハ堺屋治右衛門、攝夥住吉ノ人、『ごさく』吟者。

―四友　土屋氏、通稱外記、松平出羽守『　　　』君ノ家臣、江戸『　　　』

―雪柴　小坂井氏實由比氏トモ通稱庄左衛門、江戸ノ人、『檀林十百韵』吟者。

―荏友　荻原氏、阿波德嶋ノ人、家苗『四國猿』

―如見　樋口氏、浪花ノ人名字詳ナラズ。

―西隨　早川氏、同

―一禮　中村氏、始名志計ト云、『檀林十百韵』ノ一人、居所上ニ同ジ。

―夕烏　深江氏、同

―素敬　苗氏詳ナラズ。同

―櫻花　松井氏、名重寅、同

―百丸　森氏、名一勝、白鷗堂ト号ス。伊丹ノ人。

―本兵　岡島氏、名豊常同

―鐵幽　上島氏、鬼貫親族、同

―鷺丸　苗氏詳ナラズ。同

―昨雲　笠原氏、通稱牛左衛門、江戸ノ人

―柴舟　苗氏詳ナラズ、大坂ノ人。

―夕扉　船橋氏、同

―夕扉妻

―榮倫

―紫硯　内藤氏、左京亮、名義泰、風鈴軒、白藤子ト号ス、又風虎ト号ス。奥州岩城侯、御集『夜のにしき』『櫻川』『信太ㇾきしま』『六百番俳諧合』等アリ。『　　　』

―露沾　内藤氏、義泰君ノ嫡、下野守、名義英、遊園堂、又傍池亭ト号ス。父君ト倶ニ宗因ガ門弟タリ。享保十八年『　　　』十四日卒『　　　』

○

◎西山宗因孫弟系

井原西鶴

―東鶴　北尾紅翠齋ノ繪本ノ序ニ此名見エタリ、西鶴孫ト云。

―西吟　水田氏、通稱詳ナラズ、落月菴ト号ス。津國櫻塚ノ人、書ヲ善クス。師ノ「一代男」八巻ハ此士ノ筆ナリ。家書「西吟ざくら」「鬼の目」「やよひ山」「浪花ざくら」「菜のはな」「塩味集」等アリ。「當世百人一句」ノ一人ナリ。元祿年間点者。

―鶴平　下山氏、通稱喜右衛門、大坂心齋橋筋北久寶寺町ニ住シテ、物ノ本ナヒサグナ業トス。

―炭翁　姓氏詳ナラズ

―團水　北條氏、俗名詳ナラズ、□橋堂又平元子ト号ス。薙髪シテ白眼居士ト云、一條堀川ノ人ナリ。後浪花ニ下リ、西鶴ガ遺跡ニ住シテ西鶴菴ト改ム。家書「逢」「登」「秋津しま」「たゝ人袋」「彌之助」「獨鈷鎌論西鶴ト團作」「特うし」等アリ。「家譜」ニ一生涯清貧之人也トイヘリ。寶永八年辛卯正月四日没、行年四十九。

辭世　おぼろ／＼引べく胸の月淸し

再曰、正德二年印本（年号ヲ末ニ細書）「怪談諸國物語」ニ團水ノ名アリ、別人ナリ。

―貞上　姓氏詳ナラズ。文イ舍藤角ガ「橋立」ニ西雀菴山田溪尾ト云人アリ、此人ノ後名歟、又ハ西雀ガ初名歟。

―才麿　椎本氏、始谷氏ト云、名則氏、字少文、松笠軒ト号ス、又舊徳翁ト稱ス。初名西丸、八千丸ト号ス。南都ノ人、或云和泉ノ多ノ人ナリ 始江戸ニ住シ、後難波父市町又天滿七町目ニ寓ス。家書「千葉集」「伊丹句合」。元文三年戊午正月二日没、行年八十。或曰、宗因直弟。

―只丸　弄松閣ト号ス、又自鴨水子ト稱ス。高田宗ノ僧、京師本誓寺中福見菴ノ住職、法名覺印ト号、後浪花谷町欣淨寺ニ住シテ、「　　」ト改ム。家書「三阿じろ」「小松原」「おのがひかり」「足ぞろひ」貞徳永代記批言「明題集」等アリ。正德二年壬辰十一月二日寂、七十有余。諡樹心房ト云。

辭世　陸み思ふ鴨やなにはの水ばなれ

―佳風　豊島氏、通稱平治右衛門、有紀堂ト号ス。始才尾ト云、江戸堺町ニ住ス。家書「夢想扇」アリ。享保十二年戊申十二月十四日没、四十九。谷中大雄寺ニ葬ル。法名日好ト云。

―逸志　笠家氏、素竹軒ト号ス、晩年半局菴ト稱ス。江戸淺草竹門ニ住ス。家書「犬桜集」アリ。延享四年丁卯五月廿七日没、行年詳ナラズ。報恩寺中高德寺ニ葬ル。

芳室　椎本氏、甘泉菴ト号ス、舊室翁ト稱ス。浪花ノ人、家書「難波鶴續千葉集」「追善集　石霜庵　白玉椿」著「花集」等アリ。延享四年丁卯三月四日沒、行年八十四。

矩州　椎本氏、五彩堂ト号ス。初名桐麿、元舊徳翁門人ニシテ芳室ガ後ヲ續グ。家書「哀些集」「清逸集」「四日桃」等アリ。沒年詳ナラズ。

春耕　千葉氏、石橋隣ト号ス。浪花ノ人、家書「無盡藏」アリ

皎々　光枝氏、鷺千齋ト号ス

魯紅

員丸　兒嶋氏、吉房ト号ス。浪花ノ人、家書「厚顏記」「通俗志」「小日記」等アリ。沒年詳ナラズ。

何中　十河氏、通稱詳ナラズ。家書「松之鳥米」「土餅」等アリ。沒年未考、大坂ノ人。

大立　竜田氏、水呆軒ト号ス。家書「又もとの水」「毛登能水」延享元年甲子四月廿六日沒、六十九歳歟。
辭世　花は廿日我は六十九枚の明

左橋　水足氏、蓿旃齋ト号ス。家書「古硯屏」「天香集」等アリ。沒年詳ナラズ、大坂ノ人。

梅門　稻木氏、始房瓷ト号ス。家書「小倉塵布」「恩川月の月」「霜なれ」「倭多羅尼」「象山陸」等アリ。沒年詳ナラズ、浪花ノ人。

了雨　吉田氏、戸楄菴ト号ス。家書「此君」「波入日」「梅朝」「梅千本」「二日影」等アリ。

田代松意―松水

杉木氏田代氏歟於二龜戸天神宮回廊一笠着誹諧之發起「めやにしき」ニアリ。

延寶三年「江戸談林十百韵」一座セル野口在色　出來松臼　豐後一朝ノ三士ハ宗因直弟歟、松意下葉歟、未考。

管野谷高政

京　川合氏　正定

正長　以上二人延寶ノ「中庸姿」ニ出タリ、門人ナルベシ。

前川由平

來山　小西氏、蚤歳父母ヲ喪シ、親族ノ爲ニ育ハレテ人トナル。性敏、質直、平日只書ヲ讀ムヿヲ好ム。由平嘗ニ兒ノ宗族ト善シ、强（シヒ）テ請テ門弟トス。一ヲ敎ルニ十ヲ悟ス。由平愛（スルヿ）レ之如レ子。齡未二十ニ滿ズシテ案ヲ植（タテ）

詞宗タル。十萬堂ト号、又滋々翁ト稱ス。平野町ニ住ス。晩年ニ及テ攝南今宮村ニ移住ス。享保元年丙申十月三日沒、行年六十有三。一心寺ニ葬ル。
辭世　來山はうまれた咎で死ぬる也それでうらみも何もかもなし

家久　長井氏、通稱詳ナラズ。蚊市ト号ス、又伴自軒ト稱ス。後伴自ナ以テ号トス。家書「ひばり笛」アリ。

文十　高橋氏、攝州鷺森ノ人、浪花淡路町中筋ニ住ス。家書「夜ひる」アリ。

古道　村井氏、無名園ト号ス。南部ノ人、寛延二年己巳十月四日沒ス、行年六十九歳。家書「花日記」

布門　井上氏、五流齋ト号ス、又自桑老父ト稱ス。家書「小正月」「手束弓」「葉壘」「卅三回忌」「律之能」「若葉井戸」「有馬日記」「桑老父」「南無きさらぎ」「呼子鳥」等アリ。大坂ノ人、沒年詳ナラズ。

攀川　林氏、東江閣ト号ス。浪花ノ人、家書「擊鼓樓」千句「一日三櫻」「道雲峯」一日二万五百句高判「菊苟」東武紀行「藍の手」等アリ。沒年詳ナラズ。

高瀧似仙

万海　武村氏、通稱詳ナラズ。名昌敷、曳尾堂ト号ス。師ノ益ノ一字ナ受テ益友ト号ス。大坂一丁目筋ニ住ス。「浪花色紙百人一句」ノ一人。

志水盤谷

二世盤谷　千足氏、梅堂ト号ス。始尾谷ト云、神田ニ住ス。家書「園圃錄」「まきかやま」等アリ。寛延元年戊辰十一月六日沒、行年不レ詳。

内藤露沾

概純　松賀氏、通稱伊織、紫塵ト号ス。風虎君ニ教ナ受ク。仙臺岩城ノ人。

露言　福田氏、風琴子ト号ス。初調和門ニテ調也ト云、江戸南傳馬町ニ住ス。元祿四年辛未四月十日沒、六十有余。

露言　自堂ト号ス。江戸ノ人。

雨言　寶生氏、通稱左太夫、江戸ノ人、後蕉翁ノ門ニ徹シテ沾圃ト改ム。

沾徳　水間氏、通稱治郎左衛門、名友兼、合歡堂ト号ス、又友齋ト稱ス。始ハ露言門弟ニテ沾葉ト云、東府ノ人、後一家ナナシテ四海ニ鳴ル。家書「餘花千句」「同續」「一字幽蘭集」後年名古屋ノ士朗カ著述ニ同名アリ　等アリ。享保十一年丙午六月卅日沒、行年六十有余。平岡山法恩寺ニ葬ル。法名本理院了德居士

沾洲　貴志氏、行輪齋ト号ス、又白五千叟ト稱ス、始名民丁ト云、東武ノ人、家書『雨吟集』「西行菴」「芭蕉菴」「梅日記」「七十子」等アリ。元文四年、行年七十歳。

子葉　大高氏、通稱源吾、名ハ忠雄、播州赤穗淺野家ノ義士。死スルトシ三十三。
辭世　梅でのむ茶屋も有べし死出の山

春帆　富森氏、通稱助右衛門、名ハ正因、淺野家ノ義士、死スルトシ三十四。
辭世　寒鳥の身はむしらるゝ行衛哉

竹平　神崎氏、通稱與五郎、名ハ則休、淺野家ノ義士、死スルトシ三十七。
辭世ノ吟不知。以上三士ノ傳諸書ニ出テヨク知ル所ナレバ爰ニ略ス。

青峨　鶯田氏、六畹仙ト号ス。江戸茅場町ニ住ス、享保十五年沒、行年不詳。
青峨　前田氏、二栩菴ト号ス。始双泓或泰室ト云。

沾山　内田氏、通稱不レ詳、薙髮シテ桂二房ト号ス。江戸淺草ニ住ス。家書『蘆の道』『濱松枝』『東千句』等アリ。寶暦八年沒。

仙鶴　堀内氏、化笛齋ト号シ、長生菴ト稱ス、又白鶴翁ト稱ス、元東府ノ人、寛永中京師ニ出テ点者タリ。此叟、茶ヲ嗜ミ古器ヲ賞スルノ癖アリ。故ニ其道ニ遊ノ人、此叟ヲ識ルモノ多シ。又戲謔ヲ善ス。家書『忘ぐさ』『十二月箱』『永精宮』

『人麿千年記』等アリ。寛延元年戊辰閏十月廿一日沒、行年七十四歳。

鶴人　森川氏、並笛齋ト号ス、京師ノ人、寛延三年庚午三月朔日沒、五十二。

甘谷　長島氏、名字詳ナラズ。享保十三年沒、
甘谷　月坪嶋氏、通稱詳ナラズ。宗久、寶暦七年沒、八十二。

壺月　石川氏、江戸ノ人、享保中ニ沒。

浦丈　豊津氏、午嘯菴ト号ス、又與吼子ト号ス。初東府ニ在テ業ヲ行輪齋ニ受ケ、後浪花ニ出テ一炊菴ニ属シ点者トナル。家書『畫賛集』『五百仙』等アリ。沒年詳ナラズ。

謝大　長濱氏、朝巣軒ト号ス。大坂ノ人。

常仙　志村氏、孤鶴汀ト号ハ、或ハ二橋菴、青麥堂ト号ス、又長鶴子ト稱ス。家書『續の筏』『鳴むかし』『千々の秋』等アリ。延享元年甲子二月沒ス、行年詳ナラズ。

幸德　今村氏、不泉ト号ス、始名ハ魚八、江戸和泉町ニ住ス。家書『寰中倉』アリ。沒年詳ナラズ。

紹廉　小野氏、銀竹堂ト号ス、後一炊菴ト号ス。浪花ノ人、家書『宗因句集』アリ。

白羽　鹿嶌氏、十丽齋ト号ス。往シ延享中獨吟万句ヲ催ス。席ヲ備後町通成寺ニ設ル。終日ニシテ満座ス。其雄

名以中ニ鳴ル。家書 無山香 石紫 五文臺（句萬・句ノ實） 牛墨 難波筏 等アリ。
没年詳ナラズ。

藤角　水澤氏、文イ古ト号ハ。浪花ノ人、家書 橋 屑 蛙ぶくろ 等アリ。

芳書　木村氏、亞齋ト号ス。泉州堺ノ人

茶雷　山縣氏、東居齋ト号ス、浪花ノ人。

露月　豊嶋氏、通稱治左衛門、名ハ貞和、五重軒ト号ハ、始ハ識月ト号ス、東都ノ人、享保十六年薙髮シテ――ト改ム。家書 誹諧宮遷 二子山 倉の粟 名物鹿子 二重染 卯月庭訓 躍のうめ 寄進能 句靈寶 等アリ、寶暦元年辛未――没、行年八十五。

露牛　赤荻氏、名字詳ナラズ。始ハ湖十門人（湖十ハ晋子ノ門人山編ニ委）ニソ花麥ト云、江戸ノ住。

沾涼　菊岡氏、通稱藤兵衛、名房行、崔ト竜又南仙齋ト号ス。始ハ一晶ノ門子ニシテ南仙ト云、江戸神田ニ住ス。本土ハ伊賀上野ノ人、家書 百廳壽 同後集 綾にしき 鳥山彦 百花寶 日光名跡志 近代世事談 江戸鹿子温故志 江戸砂子 同續 本朝俗諺志 誹諧故事談 等アリ。延享四年丁卯十月廿四日没、行年六十有余。淺草誓願寺ニ葬ル。

布仙　菊岡氏、晴行合ト号ス。沾涼嫡子、居父同所。

○軒水　木秋　如昔　西鷹
荷平　似扇　文流　天垂
燈外　幸方　岸紫　芙雀
宗圓

○右之俳士イヅレモ檀林黨タリト雖モ系統考ガタシ。

○

○三千風　大淀氏、名ハ部、字友翰、勢州射和邑ノ人、大箭數ト稱シ、寓言堂或無不非軒、紫石軒ト号ス。（此外只鶴堂・一念堂・挿木亭・無月庵ノ數号アリ。）十五歳ニシテ誹諧ニ傾キ、和漢ノ學ニ通ジ文章ヲ善ス、和歌連俳ニ於ハ師園ニ不入、頓悟ノ人也。三十有一ニソ浮居トナリ、呑空法師ト号ス。日本行脚ノ景徭御ノ志ヲ起シ、先仙臺ニ赴キト居スルヿ十五年ヲ經タリ。延寶ノ頃一日ニ獨吟三千句ヲ吐テ、片時ニ數幅紙上ニ書ス。故ニ以テ稱レ名、後天和三癸亥在仙臺ヲ發足シ、元祿二己巳夏ニ至テ、首尾七年ニソ行脚成就シ、射和ニ歸ル。後又相州ニ赴キ、此ノ國西行舊跡鴫立澤ヲ再建シ、自ラ東往居士ト稱ス。蓋シ行脚ノ首途ハ四月・日ナリ。此日ヲ以テ命日ト定ムベキ旨嘗テ遺言セリ。家書 松嶋一色 獨吟集 同後集 仙臺大箭かず 日本行脚文集（大本七卷） 田烏集 等アリ。

辭世　假に來て眞(マコト)に皈(カヘ)る心衛門うまれぬ前(サキ)の父(テヽ)なし子也

發句　けふぞはや見ぬ世の旅の衣更

加之　姓氏詳ナラズ。和風軒ト号、仙臺ノ人、三千風高弟タリ。依テ香空法師仙府ヲ去ル時文臺ヲ附與セリ。著書｜みゝがしら｜山海集｜蓮の實｜等アリ。元祿年間ノ人。

○

慶長ヨリ此カタ(コナタ)師門詳ナラザル名家、別ニ一卷ヲ屬(ツヾリ)テ稻津敬雨孫弟ノ後(シリヘ)ニ附ス。

(校訂者曾風曰、板本筆耕ノ誤寫尠カラズ、其ノ誤寫ノ明瞭ナルハ正字ヲ旁書シタルガ、幾分不審ノ存スルハ「マヽ」トシテ猶疑ヲ殘シタリ。又編者ガ再刷ノ時マデニ事實ヲ確メテ刻入レンガ爲メ、板本ニ黒ク刻ミ殘セル所アリ。本翻刻ニ□ノ如ク白拔キトセルモノ是ナリト知ラルベシ。)

俳家大系圖下之卷 終

俳諧大系圖後敍

俳諧の集ある事殆四百年、これを積まば棟に充ち車をも碎てん。されど其作者系譜の如きは、寥〱として見るものなし。但享保の比、菊岡沾涼があやにしきあれども廣からず。これはた百年のむかしとなりて、いまはしる人もなき成べし。よりて師流末派混雜して分れがたく、或は名有て實なく、或はその人有て其名聞えざるも多きに、いとをしむべく歎べきにあらずやとて、生川のぬし、年比心を盡し、あまねく諸書を涉獵して、あらたに編めるものすべて三編、名づけて俳諧大系圖と云。いまや梓にものせんとするにあたつて、やつがれにも見、かつはしがきをも加えよとあるにぞ、しづたまきくり返し見つゝ行にまだとし若き人のわたらひ草、事しげき中に、かくまで好古の心ざしをつくされけん。おほよそむかし今末の世までに此道にあらん人のたから、あげていはむもをろか成べし。さるを老曾のもりの老はてぬる身は、はづかしの森のこがらし、いかで是にかゝらん言の葉もあるべき

にこそは、されど浪花女のみつとのみいひてあらむも、心たらはぬわざなればとて、所がらあこぎの蜑のくり言をしも、かいつけてかへし侍るにぞこれ。

天保九年いぬの文月

八十あまり三ゝせの翁

山崎よし故

○生川春明近刻書目

誹家大系圖　中編　二巻　下編　三巻

天保九年戊戌四月彫成

好閒亭藏板

蕉門諸生全傳

曰人稿

蕉門諸生全傳

去來　向井平二郎〔本〕向井次郎左衛門尉藤原兼時、肥前產、父[illegible]軒玄升老人末子、筑紫ニテ長(ヒ)トナル。元升トモ云ヘリ。向〔遠翁〕震軒元端ノ弟ナリ。只玄仲、長崎聖堂祭酒也。魯町ノ兄。千子女ノ兄、洛陽聖護院ニツカウ。嵯峨ノ、宮ノ邊ニ大家ヲ借、落柿舍〔柿木四十本〕ト号ス。寶永元甲申九月十日、五十三歿、猿蓑　有礒海　砥浪山　渡リ鳥　花摘集選、湖東問答　四十七條導歌等選、(畧)

落柿舍ノ制札

一　且我家の俳諧に遊ぶべし、世の理屈〔本朝文鑑〕をいふべからず。
一　雑魚寐には心得有べし、大鼾をかくべからず。
一　朝夕かたく精進と思ふべし、魚鳥を忌には非。
一　速に灰吹を捨べし、烟草を嫌にはあらず。
一　隣の居膳を待べし、火の用心にはあらず。

右條々

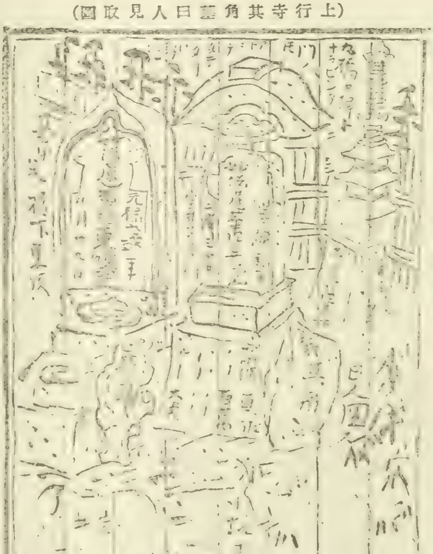
俳諧奉行　向　去來

支考曰、去來きせるそうがいくせ也。是數寄與本朝ノ食を論る也。

妾ノ名在命尼〔去二出ス、元嵯峨遊女ナリ〕。證ナ賢ニテウヶ出ス支草ガ狀アリ、士四臨掛ニ出。去來在生中ニ落柿舍こぼつ句あり。今ハサガ山本村弘源寺の跡ニ、安永年中ニ重居庵ヲ建テ舊跡ヲノコス也。

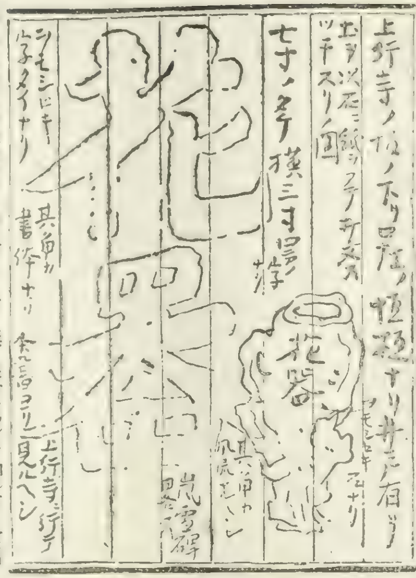
其角　幼名源助、榎下(ヱノモト)氏、〔榎下ハ母方ノ姓ナリト云〕。寶井氏・竹下東順嫡子、醫業、寶晋齋・狂而堂・寶普子・善哉庵・文合庵・六病庵・螺舍・雷柱子・渉川、畫名ハ暮子ト云、武州人、江戸產、茅場丁ニ住ス。貞享中照降町へ移居ス。世ニ嵐雪ト同居セルモ此頃也。元祿ノ頃、芝神明町へ移居ス。〔[illegible]〕庚申ノ夜案寸ト口論且所ノ

(上行寺其角墓日人見取圖)

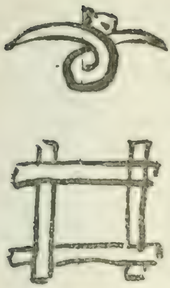


立ノク、詩道其自ラ負テ嘲リ呼ビ去ス、雪中庵へ宅替ス。〔日本橋[illegible]丁後ハ石町十丁目ナリ〕祖徠翁ノ隣へ移ス。其時卯吟、梅咲の隣は荻生惣右衛門ト云句、〔[illegible]〕半面美人、[illegible]ヨリ給ハル点卯也。門人此角ノ溢ミ取テ其角ヶ来ル時、[illegible]ノ中ニ入テ寺ヘシム。其角腹タシク思ヒ、日蓮自作佛ヲ此佛堂ヨリ盜出シ、佛ノ首ニ縄クヽリツケ、厠ニツル

シ歸リケルトゾ。其角寺ハ二本榎木日蓮宗上行寺也。日人、三度行（九檣中瓢ガ石碑アリ、曲亭馬琴ノ上山寺也）寬永四丁亥二月廿九日卒（日人ヨルル石碑ニ八三十四トアリ）四十七歲沒。深川長慶寺ハ門人共建處也。備チ寬齋先生ニ學、醫ハ草刈先生ニ、詩ハ大巓和尚、書ハ佐玄龍、畫、英一蝶、



仰見銀河底（類里公會中ノ會ニ）有ニ金対一無ニ銀柑一（イカン）答如下有ニ金國一無ニ銀國一（其角）選集、雜家、新山家、虛栗、同續栗、句兄弟、蠶集、いつを昔、焦尾琴、若葉合、三上吟、類柑子、枯尾花、うら若ば。



風帯小山三ヲ愛ス
自書遣手日ナシヾルマ

翁ニ句ノ風調無シキトテ勘當受、不和トナル。明星やの句を吐て翁ゆるしぬふ。雜談集曰、翁切字を入てまぎらかし、案ぜぬ句をして世にはいかいさ云。切字なくさも案じて工夫すれば句也ト也。

嵐雪　服部氏、（幼名久馬助 久米助）井上相州公ニ仕頃ハ服部彥兵衞ト云。幼年ノ頃新庄駿河守殿ニ仕、後、井上河內守（相州公ノコト）殿ニ仕ウ。子有リ、梅松ト云、早世、俳名治助（ハルスケ）、今の名、嵐の庭の雪ならでの古歌の心也さ。改名せんさすれど終止けり。雪中庵、不白軒、黃落庵、寒蓼堂、玄峯堂。妻ノ名を烈（レツ）さ云、嵐雪ノ反也トゾ。（嵐雪ノ名ヲ愚サトテ改メタガリシカツキナヲザリニ止シト）世說曰（淡州小榎並村ニ出生ス。幼名久馬助、服部久米助トハ違ウナルベシ、湯島天神鳥井ニ影リシトチガフ異名也）江戸湯島ニ產トモ云ヘリ。妻、唐猫ヲ愛スアマリニ過タリ。妻ノ留主ニ盜ミ出シ、他家猫ヲクレタル處ニ女房歸リ泣サケンデ呼、夫婦イサカヒ猫ノ爲ニ度々、隣家大笑トナリ、へ猫の妻いかなる君のうばひ行（嵐雪妻）いさかひ笑れてよろこびを見よや初音の玉箒 嵐雪。嵐雪禪學ニ入喝多シ。雪片山山埋、什麼孤峯白、濟雲方丈ノ門下、關西行脚歸リニヨレリトゾ云云。略文ス。師云參眼イカン、答觀音境裏古松樹ト答。師曰、松無古今色作麼生ト無ニ古今色一的ノ一句、雪進テ云、春色無ニ高下一花枝自短長、（師云領之休去レ）、雪拜シ參堂ノ退去。四十六歲卒、寶永丁亥四年十月十三日駒込常檢（ゴウケン）寺ニ墓有リ。其角家ニニ居ルニナリテ死スト云ヘリ、柳隣庵園甫ガ言シ。是大風流のなす處ナリ。夫でこそ嵐雪ナルベシ。今ハ雪中庵嵐雪が爲に

富めるもの多し、大徳タリ。
沼津ニスミ六花庵ト云　点印 成石成金 璧　探荷 頭陀笠杖アリ

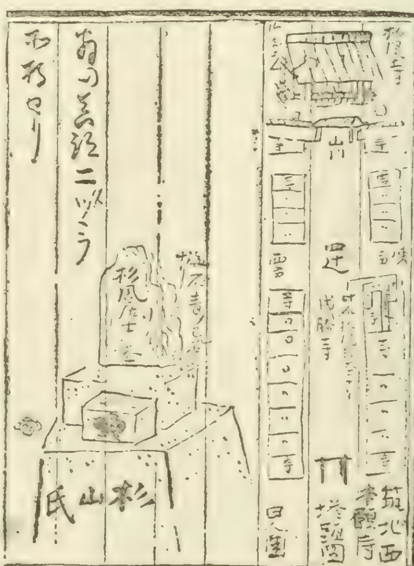


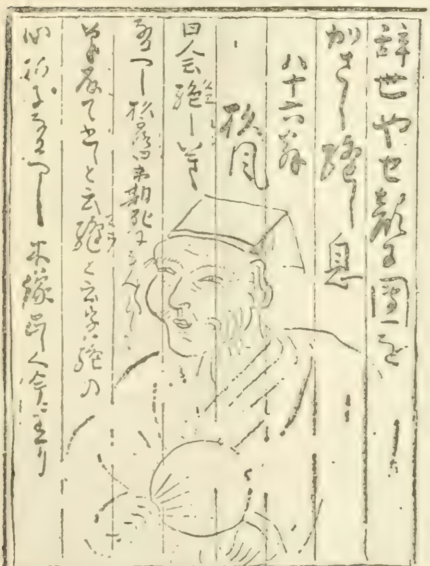
矢ハヅ　服部ノ紋

辭世、一葉ちる咄〱風の上

杉風　鯉屋市兵衞、杉山氏、代々御納屋（ナヤ）御用ヲ勤ムエヘ鯉屋ミミトヨブ。末ニハソノ鯉屋ヲウルサガリ、藤右衞門ト云モノニ株ヲクレタリ。別家ノ如ニ出入セシトゾ。其八代孫伊兵衞直咄也。曰人四五日逗留ス。茶翁（採茶庵ト云ユヘナリ）蓑翁、後ハ衰翁ト云、茶翁ト云時モアリ、衰杖トモ書リ。正保四丁亥年生、享保十七壬子年六月十三日、八十六才没、法号一元居士。西門跡塔頭成勝（ゼウセウ）寺ニ墳アリ。曰人行テ見ル。小田原町（カワラ河岸場也）住、後ハ深川平野丁寺町、此處ニ住ス。鯉ノ籞（イケス）ナ堀ヘ、六間堀元番所ト云處、杉風ガ別莊也。其處籞ヲ藤右衞門ニ譲リテ不レバ用古池同前ニナル、其處ヘ芭蕉翁ヲ置申せし也。折〱ハ杉風、芭蕉庵杉風ゞ云しハ庵地主故也トカヤ。杉風多病ニテ聾ナリ。（翁始聾の句、中茶たりとぞ）遠江戸四大家、其角座、嵐雪座、桃隣座、杉風座、素堂ヲ入テ五色墨ト云、四大家其・嵐・杉・桃也。松平遠江守殿ヘ六間堀御築場御屋敷ニ、御用地ニ被ニ召上ニ芭蕉庵外ヘ引し也。杉山氏、本國参州、先祖生國江戸、小

（築地本願寺中杉風墓見取圖及び杉風木像曰人自寫）





田原丁テ御納屋御用ヲ勤ム。

元祖、一向宗（十七日、法名道右居士）屋市兵衛　二代目（釋宗永居士）俳名仙風、俗名同名、三代目俳名杉風、同名、一名一元居士、八十六才。杉風妻、釋壽之禪尼（享保十七壬子年六月十三日卒）、四代目隨夢（同名、享保十己年十一月廿六日品川南番場大龍寺葬、假ニ好ミ暑ニ葬アリ）。五代丁五、同名、六代早世ス了歴、六代目淨林、鯉屋市兵衛、七代目丁道、同名、八代目俳名杉露、鯉屋伊兵衛、九代嫡子杉夜、今平野町ニ蔦（タバコ）店、古池庵ノ池ノ石一字、此處ニ運ビ來リ家ノ裏ニツツシチク。（因人見之石ノ形異也）翁ハ眞跡二ツバラ有。

古人の眞跡澤山有りしな、曰人ことごとく見る、世に知慮愛にもらしぬ、行て見るべし。

東順　竹下氏、尾州之產也。元祿六癸酉年八月廿九日、七十二沒、其角父ナリ。東順妻妙務尼、貞享四年丁卯五十七才沒、其角母也。始甚右衛門丁ニ居シ、入別帳今存ス、本町ニ在リ。今ハ新材木丁ザシ寶井五郎右衛門（吉五郎ト云テ）ソノ子孫アリ、道具商買ス。

丈草　内藤氏（幼名林之助）林右衛門、万治三庚子年誕生、兄弟八人、實母ハ丈草產ト死タリ、外ハ後妻の子七人也。九歳ノ秋（犬山西春ニテ出生儀右衛門トモ云トカヤ）發句して、笑はれにけりけふの月　熊野山先聖寺玉堂和尚ニ學ブ、黄檗宗也、法號慧民一風ト名ク、又太忠軒ト別号アリ、芭蕉翁ノ深川ノ草庵ニ到而文音ノ句へ招けども屆かぬ空や天津鴈　廿五歳ノ秋八月五日、自ラ指ヲキッテ武門ヲ辭ス。（甲子仲秋五日截自指截ニ指頭）截斷ニ指頭一大同ノ劍。供ニ低端向勢ハ選ニ瞞。血ハ流テ染ル出ス秋林ノ色、咲做空拳紅葉ノ看。へ身をかくす浮世の外はなけれどものがれしものは心なりけり。（此眞跡犬山杉下九郎兵衛所持〇粟津野ハ人足リ）粟ケ義仲寺ノ後、龍ガ岡（レウガヲカト大津ニテトナヘタリ）ニ庵室ヲ結ビ、佛幻庵、懶窩道人ト号ス。蕉翁遷化ノ後三年禁足、法華經ヲ石ニ書寫シ、寶永元年甲申二月廿四日沒、年四十五、當主内藤官八郎（弟ノ家ナリ）代々知行百石、今文政五壬午迄百十九年。

右は成瀨侯臣尾州犬山、酒井佐四郎南窓璟古ニ、曰人直ニ聞ク。外ニ八人、荷兮・野水・杜國・越人（越智ニモキク）、重五・露川・知足・史邦。

荷兮　山本武右衛門、昌達ト号ス、法橋ニナル。橿木堂、こがらしの荷兮ト云ハル、ナリ。（和歌にも物かはの藏人、日頃の正履、あくかれの兼與、白浪の忠岑、さまざまあり。）名古屋桑名町ニ住ス、當代山本太市、なごや中丁ニ今ハ住ス。（尾張ヨリ平定山本へノ家也）

野水　岡田左治右衛門、高津翁ト号ナス、尾州ナゴヤ大和町備前屋次右衛門、野水彦孫岡田備次ト云、今ニ存ス。

重五　同上村木丁、後ハ富街ニ閑居ス。川方屋嘉右衛門、加藤善右衛門、隱居シテ彌兵衛ト号ス。其子養笠ハ越人ノ弟子トナル。

露川　同木町（ナゴヤ通傳馬丁下ル所）藤屋市郎右衛門、商家出生、伊賀國伊賀郡鷹山村ノ產、法名月窓居士ト号ス。（國府氏家書成瀨氏家書）

知足　平氏、尾州鳴海宿、千代倉、下郷（シモサト）金三郎（幼名金三郎、勘左衛門）、寂照軒ト号ス、叔皿庵、蝸亭、寶永元甲申年四月十三日卒、知足菴寂照湛然居士、五十回忌集ナいらこ雲集ト云フ。へ松が根に千代をあやかるのざく哉（知足持）ちどりがけ集、知足子蝶羅出ス、成瀨家藩嫡子蝶羽、二郎太夫、習習軒順宗風和居士、寛保

元年酉十一月十二日沒、二男龜世、二郎八、藏六岡織史道肝居十、明和元年申九月十八日沒。（知足云圖、一知足、二蝶羽（風和尺）三龜世、四如羽、五學海、六傳芳、七葆光、八咫尺、）當代治郎八傳芳（勘右衛門ト云）二郎八葆光、翁所持の笈今羽アリ。

史邦　尾藩寺尾土佐守、醫中村春庵。

杜國　壺屋平兵衛・尾州名古屋伊勢丁、萬菊丸（岩菊丸トモ云）、貞享五年の春、よしの山ニ翁と行時の名也。名主役なする時上より下ヶ金有たる遣ひ込（金ヲ消シ）、知らぬ顏に子ニ讓、勘定立ず、罪死に極る。筋屋なればそこばくの金銀也。律慮（評定ノ上）にて評定あるに、汝が句なるよし、

蓬萊や御國のかざり檜の木山

かゝる名句吐たる者死罪ならず、流罪被ニ仰付ニと也。尾州篠島ニ流罪、三河渥美郡保見の里と云に來る、いらこ崎の邊也。翁の句あり、保見の杜國と云し也。

へ梅椿早咲［牡丹］保見の里　翁
「（眞蹟ニハ早咲つぼむトアリ。）

中山ノ松原ニ墓アリ、一向宗、法名寂照居士ト號ス。（日人遂ヘリテ孫ノ詩也）怨就春風心鴨時。折來梅帶月光枝。草堂爲君迎君處。無恙年々對舊知　文化丁卯春日詠梅　天遊靜書ス。

嵐蘭　松倉ハ義ヲ骨ニシテ實ヲ髓ニス、板倉家ニ仕ヘ（三百石）諫ヲ本テ疎レ速、官ヲ辭ス。（松倉豐後守ニテ綱改易トナル）淺草ニカヽル、鎌倉ニ遊テ死ス。（六月三日死トアリ）嵐闌子闌戎ト云、井上河內守ニカヽヘラル、三百石トナル。嵐竹（下口部平口郎ト云）、嵐闌ハ松崎文右衛門、井上侯ノ家長（イエタサ家老）ナリ灌田天民翁の云也。（嵐子一家ヨリ出也　天民ハ俗名平馬ト云）元祿六癸八月廿七日卒、四十六歲。（雲隹寺ニ其墓命トアリ可考）

桃隣　天野藤太夫。太白堂・吳竹軒、後ハ桃翁ト云。本土伊賀上野、翁古朋友也。神田ニ居ス。享保四己亥年十二月九日八十二沒。淺草光明寺葬。

許六　森川五助、百仲、羽官、五老井、菊阿佛、近州龜城（伊井掃部屋）武士也（家老）黄檗郎心郎佛、馬祖非心非佛、孟那觀李由・汶村・木導ヲ友トス。正德五乙未八月二十五日六十歲卒。寶永ノ末風俗文選ヲ撰了。篇突・木國・うた法師・滑稽傳・祇藏ノ傳書、一草字藤（韓巳ト）アリ。二楊揮豆（毛紈ト）アリ。三雲花園（六ト）アリ。同芭蕉之罔日貢、翁滅後遺愛の櫻樹ヲ伐て肖像ニ彫刻、智月ニ送る文、（十月十三日におくる。）江戸赤坂勸番ノ長屋（伊井家ニ）、許六が部屋ニシタル處、翁も行通ひ給ふ。芭蕉柱ト云有、秋の暮い何翁書付給ふ處あり、其柱今實藏ニ祕しおくと也。此人の古來世の知處略ス。今ハ跡絶タルが如クニテ親類ニアヅカリ、拱棋方ナ被下營ミナルトカヤ。

支考　野盤子・惡々庵（シッコ）、（ヨビニクキニ）獅子庵ト云、見龍・東花坊・西花坊・蓮二坊。美濃産也、中頃伊勢山田ニ住ス。橘ノ庶流也。是佛房ハ先師ノ関号也。寶永辛卯八月十六日自終焉記ヲ作、四十六（イニ七トモアリ）卒。實餘一人外門人無トナリ。山崎ニテ俳人共唐音ヲ用ルヲ嘲り、ちやうちんヲ給るべしと云し

により、各唐音ヲ止しさ也。萬松原集曰、唐崎の松は花より朧にて　此句此坊主解せぬによリ、花の字なからましかばと書けり。大たわけもの也。支考如きの下手の處ニ遊、幽艷自在妙所ニ遊、翁の風致、かれが如きの下手の膽ニ入べきや。花の字なくば句ニ非、大ばかもの也。ゆへに支考が書たる俳書一冊も用立ず、正風のはいかい、かれが如きの短才にて出るものならず、可笑〱〱。かれが集何レも愚痴にて大毒也。再び手にさるべからず、後世翁の妙所世に傳はらず、志やすき下〻段の俗俳のみ傳ふもかれが爲也。

利牛　池田氏、利兵衛此名正しからず。江戸の人、炭俵。三井家支配人、二十四万石松平土佐守殿足輕ト云へり。

尙白　江左氏、名ハ三益、木翁、江州大津人、始不卜ノ門人也享保七年七月十九日沒、七十三歲。寄絕作者、輕ミヲよくす。

野坡　志太氏、俗名彌助、淺生庵・樗木舍、儒學ニ進ム。越前商家ニ生レ江戸ニ居ス、三井番頭也ト云、老後西海日向ニテ死ス。宮崎ニテ野坡ハ後ヲツクト云野翁ト云、老後先師ノ無名庵ヲ高津野ニ移ス。高津の翁ト号ス。元文五庚正月三日七十八歲。野坡句集アリ。翁ノ碑銘野坡文ナリ、出世名人、はせを翁の連句第一ニテ此叟ノ上ニ立モノ一人ナシ。圖南云、淺生庵支孫ハ、大坂うつぼ住百屋久兵衛、俳名八丘。

李東　加賀金城ニテ十村トムラ加賀ニテハ大庄屋ヲ斯ク云村役里正ト云鞠を好む。

越人　佐分利勘左衛門、肥後熊本馬廻リ廣間番、佐分利流之槍術家也、別家也。細川越中守殿近習也。好色人ニテ吉原遊女ヲ請出シ、屋敷ニ置がたく改易せらる。讓し世切時の句あり。尾州從弟ノ知行所知多ト云處ニユカリヲモトメ行カクレ住ム。鵜のうき巢の句あり。尾張野水之耀不便也トテ、紺屋ノ株ヲ世話ヤキニテ、名古屋伊勢町杉ノ丁クワナ丁ナリト云處ニ菱屋重藏ト名ヲ改メ、染物ヲ以自過トス。サシタル告ナラネバ槍ノ家ナレバ召かへされタリ。三年御暇ヲ延被下ト願、染物借貸ヲ片付歸國ス。越中ノ守ノ越ノ字ヲハヾカリ、越人ヲ改メ蕗碩ト改ム。三年ト云時ニ死ス。流長院ニ墓アリ、不借地墓ヲアラハス。ナゴヤ入江丁本通西ヘ入寺ニハカアリ。成瀨來書、三家ノウチ、五百石・三百石二百五十石越人ナリ。鶯笠談也。（普風曰、此說大ニ誤レリ、越人は越智氏、北越ノ人、名古屋ニ於テ享保ノ末年歿セルナリ。佐分利氏ニ非ズ、又熊本ノ士ニ非ズ、鶯笠ハ鳳朗ノ誤リ傳ヘタルモノ、如シ。）

雪芝　山田屋市兵衛、伊賀上野中町角、野松亭、翁の從弟也。

凉菟　伊勢ノ山田神職ナリ、始、團友齋ト号ス。辭世〽合點じや其曉の時鳥其期日を一句聞膈カクノ症を患テ死す。〽今迄ハ人の病ぞと思しにわが身の上にかくの仕合。姬路の寒鴻と云モノ所持ナリ。

惟然キゼン　いねんニ非、いぜん也。始、素牛ト云、梅花鳥落人・辨慶庵、美濃國關ノ里の產、廣瀨氏安通が舍弟、幻住菴ノ椎

の木を伐りて翁の像ヲ百体刻ミ、大坂花や仁左衛門が所方、殘り〳〵蓑笠、旅硯、錢を取集、はりま姫路に行、旧友に与へ、〽雨袖に只何となく時雨哉　姫に与う、書讃〽おもたさの拂へども雪はらへども　つゝみ庵、名トス。姫尼トナレバ關の里に來り同居ス。雜慶庵ト云、來歴世の知處爰ニもらす。句集有〽古池や〳〵蛙飛込水の音ナムアミダ〽いかめしき音や霰の檜木笠　九品淨土冬の日ヲうたい念佛申アリソ。伊丹鬼貫を尋し時七車ニ出、〽秋晴てあら鬼貫の夕やな　惟然脇　いぜんおじやつた時はまだ夏　鬼貫

乙州（ヲトクニ）　江州大津の人、智月尼ノ子也　弟後ナトナル。　父佐右衛門病死ノ後も問屋役ヲうけつぐ也。　孤峯來書

凡兆　始ハ加生ト云、妻とめ女尼、後ニ羽紅ト云、いつを昔、次郎を夫の迎にやろとて　我子ならともにはやらじ夜の雪　加州の産也醫師也。大やましものニ而、相手をもとめわるい事をしてあらはれ、米倉にてクビククヽリ、又洛ニ居。一事罪セられテ終所ヲ不レ知、賀州罪アル人ニ親ミ共連累ヲカウク。獄中ニ年を明して〽猪の首のつよさよ花の春〽陽炎の身にもゆるさぬ虱かな。無レ告事上天に通じ、ゆるされて獄中を出たり。世を淺ましと思、亡名し、行方知レズナリヌ。末ニハ大坂ニ住ス、越野阿圭ト改名ス。又すべてケ樣ノ人翁禁じ給へり。伊藤信德曰、翁曰、孝悌忠信より出たる風流、本旨本情のはいかい也トカヤ。曰人云、誠心動ニ鬼神一、天感じて枯田に雨を降らし給ふ。悪事を心にふくみ、はいかい斗よくしたりとも甚天にくみ給ふ。万人にくむ、後世猶にくむ、恐ろべし〳〵。杜國が罪ハかろし。罪ハバハン蘭名ぬけ船和名ト云へり、士朗が方ゟ申こしたり。

士芳　伊賀上野人、服部半左衛門保英、始ハ芦馬ト云、蓑虫庵ト号ス。後ニ些中庵ト改ム、享保十五年庚戌年正月十八日卒、長田庄西蓮寺ニ葬。國府來書

木節　近州大津ニ住、商家ト見ニ醫ヲ學ノ、翁の病ヲ療ス。十月十日芍藥湯ヲもる、梨を好ミ玉ウ、禁ズレドモシホテ望玉ウ、一片味ヒテ止ミ玉ウ、脾胃ニうくる所ナケレバ死期近ニアリト云へり。

智月　智月尼ハ江州大津驛乙州が母也。佐右衛門妻ナリ、傳馬役也。生國山城宇佐の産、若年ノ頃何レノ御所ニカ御局ニ宮仕ス、歌路ト云へり。孫治也。

曾良　河合氏、惣五郎ト云り、宗悟トナル。信州諏訪ノ産、商家ナリ、今ニ家アリ、東武翁ト隣ル、薪水ヲ助ク。一人ノ老母在リ、釼術指南ス。門人方老母ヲ扶持して奥行脚ヲ頼さ也ト曰人云、此事ウタガハシキコトナリ、信州ニ家今ニアリ。曾良ハ壹岐松本ニテ死ス、元祿六寅年五月廿二日卒、又巳十月廿二日トモアリ。信州素檗方五月ナリト云ヲコセリ。曾良日記、若人スワ家來久保島久左衛門也持傳ウ。素檗が妻ハ曾良ノ家ヨリ來ル、素檗ヨリ翁の眞跡ヲ日人ニ贈レリ。深川庵方二見形文臺、二見形硯箱、色紙廿枚曾良持來、方々ヘクレ、四枚ノコル、曾良碑松島ヘ曰人書テタテタル禮ニ一枚送ル、一枚近江ノ相翠ニ与ツ。（晋聖曰、曾良歿年誤レリ、寶永七年五月二十二日壹岐ニテ客死ス、享年六十二ナリ。）

沽圃　寶生太夫、京亂舞能ノ家也。馬莧ハ二男カ。嫡、俳名里圃、立圃ノ近親朔カ、孫ナリト云ヘリ。

孤屋　小泉氏、小兵衛

利牛　池田氏、利兵衛

探山　菅沼八郎左衛門範元、幻住庵主、曲水ノ伯父ナリ。寺邊村石山ノ寺也庄号也石山ノ國分村ニ隣ル、城下ヲ廿丁南、國分村八幡宮ノ脇ナリ、貞享　五十二出家、六十二卒、法号幻住庵探山居士。膳所本田家臣

卓袋　いが国いせや与兵衛

正秀（マサヒデ）　伊勢屋孫右衛門、ぜゝノ町人。へ刀さす供も連レたし今朝の春　へ蔵焼てさはる物なしけふの月

路通　始乞食、翁ノ爲俳人ナリ、後大坂高きふ後家トナリ諸門人絶交ス、翁、俳諧捨ズバ交セヘシトナリ。

北枝　号薑、加州金澤ノ人也、研師源四郎、磨工（トギシ）ヲ業トス、青ノ能ス、牧童が弟也。酒肆翻脚ト軒ヲナラブ、平生旦夕行通ヒテ酒呑、餘リニ酒呑、加賀ノ町家木綿ノレン一軒モナシ、蓮ノレンノ内ナレバ甚賞ナハヤキ、女子婦人酒ヲ与ヘナ禁シ、北枝来リテモ酒ヲ与ヘズ。北枝下女に向テ云、此家ニぬか味噌やある、我に与へよと云、下女曰、ぬかみそなしと云、なくば一盃飲べしと云フ、家内おかしさいふばかりなく、翻脚モ感じて酒ヲ澤山大ふり北枝ニ振舞しと也。火災池魚ノ難アリ、皆人知處也、略ス。二度めの火災に、氣性いかんといはれて、へもろともに硯も筆もすみとなる烟の中に一句いかん 牧童　へもろともに硯も筆も灰となり其昔の葉なかくものもなし 北枝　と答たり。へさい槌の祝儀にならす水鶏哉 仝　へ鶯も笠きてあがれ小屋の中 仝　へ梅が香や先一番に焼見舞 牧童　発句ひらいにありく　へ髭白きからふ人得たり梅の花　塚ハ卯辰心蓮舎寺中ニ立、北枝塚ト称ス。

鳥巣　三州吉田、加藤玄順、醫者也、鎌倉實記作者、良光散ノ店ノ人ナリ。

曲翠　菅沼曲水、俗稱菅沼外記範義、江州膳所本田家臣、馬指堂、其妻ヲ鏡尼、亨保五百石側用人、享保四巳九月廿日没。曽我治右衛門ト云奸侫ノモノ、国家ヲ政ス。曲水故ニ條書立ヲ認、治右衛門ヲ己ガ家ニ呼ヨセ、ツメ腹ナ切ラセ己モ自害ス、両家断絶ス、今ニ至テ至忠アラハレ、家ヲ取立起サント本田家ヲ探ニ跡ナシトゾ。（原文、此ノ一項ヲ「コレハいせや孫右衛門正秀が事ナリ改建メリ」トアレド日人ノ誤記ナラン。）

之道　大坂人、後諷竹ト号ス、道修町（ドシヤウ）ヨ伏見や久左衛門ト云。今ハさ藤や忠左衛門、跡カスカナリ。

仙花　蛙合作者、名不知。

如行 美濃産、近藤、武士ナリ。

竹戸 ハ貧乏鍛冶也。翁奥行脚の持ありかれし紙衾ヲ得たり。朝暮如行ノ處へ行通て、翁の肩腰あんまとり、深切ニつかへしものなれば也。

不玉 伊藤氏、醫を業とす、潜淵庵、羽州酒田の人、葛松原を選ブ。

荊口 宮崎氏、濃州大垣ノ人、武士、此筋・千川・文鳥三子之父也、東宇ト改ム。

魯町 去來弟ナリ。

木因 美濃大垣、谷九兵衛

白雪 不知 三州新城、大田氏金左衛門、三河小町集出ス。

卜宅 向井氏 不知

在命尼 去來妾。去來死後傳書共、支考ニ賣、乾金拾五兩。今下長者町油小路西へ入町ニ住ス。去來ハ向井玄丹 曰ハ云玄朔字ナリ の弟、向井元桂伯父ナリ、是故ニ去來妾、今元桂孝養ス。

原松 猨々庵ト号、其角高弟也、加藤氏、江戸ノ人、狂名烏鵲坊、又虎翼居士、京ニ住ス。

都不覺 比叡山大善院佛行坊。

句空 加賀金城卯辰山住、柳陰軒ト云。

秋之坊 加賀金城名高大匠者也、我暦作れり聞べしト、〽正月四日万此世を去によしト口ずさみ、うつむき死ス。驚云〽いれつむさ見せて失けり秋の坊 東李

万子 加賀金澤武士、生駒氏、此君庵 八百石 生駒藤九郎ト云、馬廻組。

牧童 加賀小松素生也、彦三郎、金城ニ居ス、研刀ヲ業トス、北枝ガ兄也、始梅翁ニ學、後翁ニ隨フ。

小春 加州金澤片町、宮竹屋伊右衛門、藥店、翁眞筆多ク所持ス、翁の木綿居士衣、同じく頭陀袋、眉山に得たり、今其家ニ存ス。

一笑 加賀金澤片町、茶屋新七、翁行脚三年先ニ死。〽塚も動け我泣聲は秋の風 翁

二川 越中富山産、ソコノ大守高家ニ仕へ、加恩ヲシタラバトヾマルカト聞テ逃出る。甚上ニテチシミ玉ウ。イカヨウニシテモトヾマラズ。〽米くるゝ人には迯て花に鳥 障子ニ殘ス。後咎なければ才をおしみて、富山ノ中ニ庵ヲ建テ一生過サシムトナリ。

正平　紀州若山之人

羽笠　尾州熱田中瀬町、橘屋彌右衛門　成瀬來書

舍羅(シャラ)　大坂、舍羅剃髪ノ前モ舍羅ト云、剃髪の後モ舍羅ト云、此舍羅を捨て、どの舍羅を求ん、舍羅さして更に舍羅なし。
へ一度は瓢の花のかゝる哉　舍羅　盗人盃を取去へ盗人も酒がなるやら朧月　北枝大坂 來て、舍羅が所 米二合を見て歸り、風流我ニハおさ／＼舍羅ハ增りたると感す。

李由　字買年、近州產也、平田村光明遍照寺十四世也、釋名亮隅上人、嘗テ律師ニ任ズ。句集・ウダ法師・篇突アム。四梅廬、豫州河野嫡流也、安藝宍戸ヲ兼合(賓き)タリ。母ナシ止シ垂ナキ藤原ナリ。碁ヲ好ム、茶ヲ愛ス。元祿二年六月下二日猶ニテ死ス、四十五才、近江輿地志ニ云、遍照寺、犬上郡平田村ニアリ、光明遍照寺ト号、西本願寺派の隱家ニテ、近江一向宗ニケ所、本寺ト云、始ハ山脇村ニアリ、後愛ニウツス、開基ハ慶長年中ナリト云、難波ノ役ヨリ以前ト見得タリ、但江國豐岡光明寺木珊(ホクウ)、李由ノ孫ト云。

木導　江州彦城ノ武士、直江氏、自、阿山人ト云。

汶村　同斷、松井氏、字ハ師璽、九重亭ト号、書畫ヲ能ス、許六ヲ師トス。

毛紈　江州彦根武士也、北山氏、大雅堂畫ヲ書、許六ヲ師トス。

程己　同斷、朝倉氏、白日堂、

朱迪　彦根武士也、寺島氏、甘露臺、四十三才死。

厚爲　加賀大聖寺武士也、河地氏、林紅法師ナリ。

ちり　千里　大和國葛下郡竹ノ内村ノ人、又損居士ト云。むつちどり・野ざらし紀行。千里剃髪の時の偈曰、入道偈　又損居士、心日由來無ニ閉關一、本源自性施ニ塵埃一、損之又損損非レ損、是貧是嗔任ニ去來一、へはらへたゞ我もとゆひの秋の霜かゝれとてしも消ずや有鈫へ一筋に思ひ入日の影法師有を有りさもなきなきさも。元祿丙子年七月十七日沒。

任口　城州伏見西岸寺三代住僧、寶譽ト号ス、任口ハ俳名ナリ。

苔蘇　伊賀上野人、岡本治右衛門政次、寶永六己丑三月三日沒、城東於花垣寺葬。

半殘　伊賀上野の人、山岸十左衛門棟重、享保十一丙午年六月十二日沒、佛性山大善寺ニ葬。苔、半殘ハ國府ゟ來書

猿雖　伊賀上野ノ人、意專ト号、延寶三年ヨリ東武ニ一(イツハリカ)カヘルヲ惜、此所ニ集ニ大連ハ內神屋惣七郎、六大夫、入道シテ意專、氏ハ窪田屋、西蓮菴ト号ス、寶永元甲申十一月十日卒、正宗寺ニ葬ル。國府來書

宇古　原田氏、俳名宇古、和州郡山ノ重臣也。少小ヨリ頴悟人ニ超タリ、常ニ城東観音寺ヘ物學ニ通フ。畧ス　杜國ト三吟有、火事ニ失たり。天明年中

梢風　伊賀國上野、梢風尼、小川風麥が娘也、同藩友田氏ヘ嫁ス。夫死シテ薙髪シテ此道ヲタシム、友田良品ガ妻也、萬福寺ニ葬ル。國府來書

如風　鳴海の人

安言　同所

越人　ハ雲溪苦耻居士、寶永元年死タリ、文化元甲子迄百三年ニナル。（晋風曰、前ノ越人溪トハ別ニ聞ケル處ナルベシ、此ノ歿年又誤レリ。）

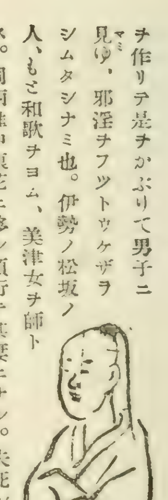
滄波

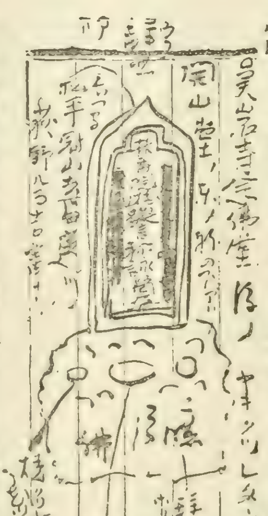
梅員　備前岡山産也

風國　洛去來甥也、泊船集芭蕉句アラハス。

乙由　伊勢川崎生レ、家富、寶ヲ集メ、利ヲ見、事ヲ不レ知、慶徳圖書、伊勢山田ノ社司、性名ヲ變ジテ中川梅我ト云、乙由ト改ム。麥畑ニ庵ヲトテ麥林舍ト云、元文四己未八月十八日卒、世の知る所故事略ス。

園女　本ハ勢州山田、度會氏ノ女ナリ、依ニ法体ヲ忌ニ薙風ニカミヲノコス。深川ニ住ス。菊の塵をあむ。靈岸寺念佛堂に墳アリ、風流ノ鉄肝石心ナリ、男女ノ情ヲ忘レ切タリ。大ィナル籠ヲ作リテ是ヲかぶりて男子ニ見ゆ、邪淫ヲフツトゥケザラシムタシナミ也。伊勢ノ松坂ノ人、もと和歌ヲヨム、美津女ヲ師トス。岡西惟中浪花ニ移ル頃行テ其妻ニナル。夫死シテ東武ニ下ろ、眼料ヲ以テ身過トナシ、世ノナリワイニ至テゥトク、着タル袖ノ下ヲ切テ下駄ノ緒トナシ、張文庫ノフタヲ取、水ながしに用ゆ、世事に疎、天窓丸メ髪眞中に廿本ホド立のこしたり、十筋斗トアリ、唯一の恐たるべし。智鏡ご改、冠里公安藤大和守殿也ノ母君へ仕ヘ享保丙午一年四月廿日、六十三歳死ス。





林香院遊譽秘妙園信女辞世ヘ秋の月春の曙見し空は夢か現かなむあみだ佛　惟中ハ備前人、爺望一ニ學ビ一有ト云、後梅翁ニ從、元禄五年ニ沒、道祐、一時隨筆ノ叙ベ、惟中ハ因州鳥取産トアリ、園女ハ繼室たるべし。身の捨られぬなくやみたスは後妻故也。（晋風曰、此ノ説誤レリ、諸書家譜ニ辨ジ畢タリ。）

介我　佐保氏、甘雨亭、善船ト云、享保三戌六月十八日六十

七歳沒、淺草本願寺ニ墳アリ。

畢白　草壁氏、馬蹄二百韵ヲアム、元祿死。

破笠　小川平助、江戸の人、多能也、蒔細工、始宗宇・露言ニ學。放蕩過テ親族に見放されて家を出、極貧ニ苦ム。乀乞食にも斯ふはなられぬかゝし哉　後津輕家に召出され、食祿を得たり。延享四年八十餘才死。

雲鈴　摩詰庵、佐渡國へ渡、入日記二卷出ス。四年正月十一日大坂出、北國行同五月廿日餘リ。

梅石　みのゝ陽花庵住ス、翁の庵室也。翁の文を集、その庵室の天井張置、翁手習を敎給ふ、別ニ書あり。

太魚　松岡氏、伽香ト号ス、円州產也、大坂住ス。翁の末弟ニシテ終焉ノ枕ニ仕へリ、其時二十五才也。翁滅後ニ陽花庵に行、木導正觀百一絲并みの笠、天井ハ復ニ張シ反古を取集、浪花へかへる。みの笠ハ惟然にゆづる、播州増位山風羅堂ハ蓑塚ニ有、木導ト反古ヲ愛して珍トス、門人大蟻に送る、凡反古三百餘枚、茅家ニ朽を恐れ諸方へゆづり、木導ハ駒込回通寺におさむ。太魚九十才、寶曆九卯年卒、翁反故略傳也。

祇空　稻津氏、青流洞敬雨居士ナリ、石霜庵、初敬雨ト云、信德門人高弟ナリ。一日富岡八幡に詣、末社々々順禮し侍る中ニ新數一社有、祇空靈神トアリ、稻妻宮トアリ、雷ノ驚キタルニテ敬雨トツキタルナリ。

百里　高野氏、魚ヲ鬻て業トス。雪中庵ニ三十六年學ブ、仙風ハ早世十一二才、嵐雪の命ヲ受て廿一年百里ト改ム、始ハ等風ト云ヘリ、雁宕・巴人ナド是ノ跡也。享保十二年五月六十二才死ス、辭世乀死で置て涼しき月を見るぞかし　其子蘭亭ト云。

琴風　其角門人、浪花人、江戸ニ來、如羅架ト号、ちぜい乀一息ニ此味ぞ春の水

全故　素彈齋、江戸の人、是ハ鳥序の書者ナリ

呂丸　羽州羽黑ノ人。

龜　龜世ナルベシ、知足傳ニアリ、但シ別カ。　**杉化**

惣代

右三人延寶七年盡惣俳諧ニ加ル

桐葉　宮宿林氏、**工山**　**東藤**

右三人熱田三歌仙加ハル、尾州ノ人。

雨桐　李風　呂圭　旦藁
冬文ヲハリ有合弟ト云　井泉　鈴髭
利重　犀夕　呑霞　龜洞
商露　柳雨　塵交　呂碧

十六人（マヽ）春の日加ハル。

在也、桑名行道也。

晨風　伊勢松坂人　友五
一井　俊似 尾張津嶋人　胡及
鼠彈 釋氏　長虹 竹葉軒尾張ノ人
卜枝 尾ツシマ　鷗歩　傘下
薄芝　たつ　心苗　冬松
釣雪　松下 尾ツシマ　柳風
落梧　一髪　風泉
杏雨 美濃岐阜人　鈍可　李桃
市山　梅舌　市柳 ツシマ人
任他　文鱗 泉州サカイ人
一泉 イヨ人　鶴聲 三河岡ザキ　是幸
松芳　凫仙　除風 ミノギフ
鷺汀　芳川　桂夕　古梵 釋氏
風鈴軒　元廣　湍水　朴什
防川　呂勝 尾犬山人　夕道
般齋僧　藤羅　素秋　蕉笠
玄察　若風 ミの長良人
一桐 伊賀上野人、京居橋右衛門京へ移居ス、國府來書
夢々 尾州津島人、イセノ方近里西南也、佐屋ノ方ニヨル

奇生　龜助　鹽車　青江
此橋　校遊　生林　不悔
清洞　笑艸　一橋 出羽人梅餌
炊玉　百歳 伊賀ノ人　忠知
燭遊　式之 伊賀上野人濱一右衛門、國府氏來書
襟雪 ミノ岐阜人　蓬雨 同　長之
友里 和州三輪人　幾正　不交 ギフ
竹洞　連巡　吉次
元輔 櫻井人　風笛 風笛ハ山ノ僧カ、姓名不知、唐崎ノ茶店ニ張有短冊ニ「松よ聞我住山の朧月 風笛」
含咕　秋芳　二水　兒竹
一龍 江州大津人、膳所城下ニ茶店助六ト云商家也。孤峯來書
淳兒 同　偕雪　未學　秀正 ギフ
芙水　文潤　李晨　圓解
呂長　林斧　越水　宗和
曉颱　巴丈　千閣 イヨノ人
蘆夕 ミノ　洞雪　勝吉 ツシマ

重治ツシマ宗之　夜舟　村俊
内習　樹水　淵支
隨支イヨノ人　洗悪　夕楓
土年京人　常秀　快宜　嵐蟻
元順イヅミ堺人　白悦　蕉葉
愚益　文里
右百七人曠野ニ入。
野徑　泥土　怒誰　探志
及肩ゼゝノ人　二嘯伊賀
右六人猿集ニ入。
昌房ゼゝ　裾道ゼゝ
車來イガ上野山岸半六、一説五八國府來書大善寺葬、半殘男也、十月十一日卒。
良品イガ上野友田覺左衛門、享保十五庚戌六月卒、万福寺葬國府來書
龜翁江戸人　芥境チハリ
暮年長サキ　野重京
示蜂イガ上野植田權左衛門國府
譜好ゼゝ、本多氏、隱居メ書ヲ好、實才多藝。
卯七号牡年亭長サキ
順琢イガ上の人、　洞木佐治氏

補甫イガ上の神戸屋八郎左衛門、續猿　國府來書
長和　遊女與州江戸丁吉原津ノ國屋内也
仝峰エド　薄芝チハリ　岩翁エド　游力ゼゝ
花紅エド　万乎イガ上ノ大坂屋二郎太夫　國府
田上尼長崎人
槐市イガ上の中尾源左衛門宗重
何處大坂人、享保十六辛亥六月十一日卒、光明山念佛寺葬國府來書
巴山エド
山川エド藤堂家臣寺村彌右衛門、其角門、花橋ノ板下ヲ書、芭蕉翁著聞集、板下を書、炭俵素龍書、いつを昔の序去來書、句は其角書。
杜若イガ上の利作良、土田小左衛門正祇、享保十四丙八月六日卒、正崇寺葬。國府
子尹三河人　千子去來妹
卓袋伊賀上野人、箔屋與兵衛國府來書商人名ナルベシ
塵生加賀小松原人　蟬鼠ゼゝ
支幽國分村寺島村鳥居川村邊ニ住、雲水ト見ユ孤峯來書
溪石エド　魚日上の西澤玄丹　遠水同
一唉同　木白同　觀闌亭國府
楊峯チハリ　元志同
氷固上野松本長右衛門、或ハ權右衛門、非群ト云、享保七壬寅年十二月十一日卒國府

澤雉 伊賀上野人、山内善四郎 國府
荻子 伊賀上野人、辻五平治、或甚六景方、享保十四己酉年十月十日卒、佛性山超誓寺ニ葬。國府
桃妖 加州山中人　園月 イガ　石口 同
山店 エド　板上氏 イセ山本人
利雪 イガ上の人中野与兵衛 國府
長眉 上野人素男　柳陰
朴水 枯ヲ花朴吹、江州膳所人、膳所神職也、城下五ヶ所宮アレモ、ドノ神ニ仕カシンズ。孤峯來書
市陰 ミノト垂井人
扇 女也、膳所人、洛東山邊西國産也、糸竹妙也、柴屋町節席料ヲナス、五十斗、剃髪清壽ト云、瓦屋彦次郎ト云富家アリ、子細アリテ寶暦ノ頃斷絶、此人ノ妾ノヤウニ寄宿ス、彦次郎死後厚ク弔。孤峯來書
等哉 六十人サルミノニ入。
濁子 句餞別連中、中川氏、ちどりがけ、
岱水　仙杖 伊賀上野ノ人大久保茂兵衛、國府
斜嶺 ミノ、人　普全 越前福井人
爲有 城州サガノ田夫　子珊 イガノ人、別座敷
九節 イガ上野人、内神屋源六 國府　探芝 ゼ、
兀峯 備前　北鯤 山店兄也　楚舟 ゼ、
殘香 ミノ　依々僧　支梁　桐實

八桑　我眉　買山
相夕 廿人炭俵入
馬莧　里莧
如雪　一鷺 イガ上の人 京屋重助 國府
尾頭 イガ上の明覺寺コクブ　大丹　遊絲
峯嵐　河瓢　釣箒　圃水
闇指　山蜂　荒雀 サガノ人　拙侯
乃龍　夕可 ミノ　圃箔
已百 同　柳梅　重行 出羽人　雪窓
水鷗　角上 近江
風睡 イガ上の、淺井理右衛門 國府　均水 ミノ
支浪　武仙　蔦雫　排雪
左柳　任行　是樂　妙雪
芦本　野荻　宇多都 伊賀ノ人
至曉　風弦
望翠 同國上野人、井筒屋新藏 國府　怒風
素覽 ヲハリ　我峯 上野　卯若
可誠 木屋助八 國府　胡故　曉鳥
葉拾　如眞 イセノ人　凉葉

嘯　笑　　重　友　　泥　芹
客　牙　枯尾花ニ嘗茅　　宗　比イセ　　木　枝
利　合エド　　丹　楓　　景　桃　　左　次
櫻　隻　　鳥　栗
山　店　石川北鯤弟也、江戸人ナリ
文　鱗　コボドコヤ宗柄、堺の庭の主ナリト云共外ニアリ
トゾ。
 去來書判也。伊賀蓑虫庵ニ状アリ。翁の書判、所々ニテ見及。
杉　下　　圃　燕　　一　東
玄　虎イガ人車　　唐大坂　　斗　従イガ　　哇　止
四　友　　宗　波　　雞　口　　枳　風
一　道イセ　　年　木イガ上ノ原田覺右衞門　　團府
桃　先　　夕　菊　　圃　吟
陽　花イガ上ノ岸寛見　　團府　　路　草イセ　　闇　如ミノ
佛　佛　　草　士　　桃　後　　李　下イセ
圃　仙　　工　谷　　不　撤
百十一人續猿集入。
長　年イガ上ノ酒屋三同郎　團府　　風　麥イガ上ノ小川次郎太夫　〃
配　刀〃　杉野勘兵衞〃　　的　〃　酒屋太ノ衞門〃

佛頂和尚　此和尚在世ハ天和、貞享頃也、大須野雲巖寺翁參禪の師也、播州盤溪禪師ト云、江戸ニ佛頂和尚ト云、天下龍虎ノ名智識也、何レモ風雅ヲ稱エヘリ。武城深川ニ禪刹アリテ、芭蕉菴モソコニ近シ、十論爲辨抄ニ出。

幻呼(呼)　鎌倉圓覺寺大顚和尚、俳名ヲ幻呼ト云、其角師トスル丁新山家集ニ見エタリ。貞享元年甲子正月死、翁卯月ノ頃尾張ノ國ニテ是ヲ聞テ〳〵卯の花拜ムの吟有リ。

千山　紀國屋文左衞門、本材木丁ノ商人富家ナリ。其角常ニ行遊ブ。吉原マデノ道筋本材木丁ゟ一日〆切、惣仕舞セシトゾ。櫻も中ノ町へ植初ト云、種々古事アリ、世ノ知處モラス。

桔槹屋幸八　吉原其角遊所也、紀國や文十郎　同所航楓子のたゝりふし同斷。

是橋　是吉(コレヨチ)也、其角ノ學僕、いつもコレ〳〵ト呼也、ふひ安き爲ニ仕人毎ニ号ストゾ。勸進帖わか旦那鮓を好てくはれけり〳〵しらせばや蛬くふ虫にすしの味　是吉

得入　小澤氏、季吟門卜尺　長子同名始拙吟ト云ト尺長子同名ハ〳〵青柳はほつこりもいゝ水鏡　得入〳〵秋の雲富士色〳〵になぶりたり　得入(古)〳〵一筆一足しさり菖蒲哉　卜尺(今)　翁東都ニ於テ始テ履ヲトカレシハ古卜尺宿也。廿歌仙・躡獦卜尺アリ、小澤太郎兵衞本船丁名主、今ニ在リ。

露沾公　内藤對馬守ナリ、門人沾山・沾德、

冠里公　安藤大和守、

蟬吟　藤堂主計良忠、翁ノ主家、此ノ人ニ仕。

探丸　藤堂新七郎良長、嫡子ナリ。

英一蝶　其角友也、蒙分船讃ヲ書、八丈島ヘ流サル。

素堂　甲斐酒折産也、神職ノ人也。葛飾隱士、信章齋來雪、號山素堂、性巧俳句及詩歌而名品甚矣。享保元年八月十五日沒、壽七十有五、法名廣山院秋巖素堂居士、碑面（本所中ノ郷原町東聖寺杉浦ヒゼン守臨ナリ）

（晋風曰、本文は曰人の随時見聞せる所を手記せるものなれば、文字の脱落あり、後にて書入れたるもの、挿入個所を思ひ違へるあり、文脈の通ぜざるあり、混雑甚しきものあれば、適宜補訂したるが、つとめて原文の俤を存すべく注意したり。）

かゞ見(み)種(ぐさ)

家雅見種

嚮に著せる俳諧觿に搃宗匠の住菴・寓居・別号を載るといへども、轉居のたびごとに改めがたし。依て今小册子に記して年々改正す。懐にしてかさどらず。速覧の便するためにと、觿の序にいふ處の芄蘭の訓をとりて題するのみ。

○其角座

堺町楽屋新道
岩代町
風窗 深川湖十

湯嶋四丁目
御茶の水馬場のきは
釣月堂 鶴海一漁

湯嶋天神裏門・
うへ木町
相應菴 桕浦晋阿

神田はたご町一丁目
たばこ屋のうら
雨三峰 湯川晋如

湯嶋天神前
藤丸膏薬屋うら
四時楼 慶紀逸

本石町三丁目
いはしや清兵衛うら
野菊菴 深川秋色

一漁全菴
堤窗 深川花千

本町三丁目
新道うら
露菊人 深川秦川

根津權現山茶屋
三星屋のうら
五總菴 深川戀稻

本町一丁目
菓子司桔梗屋うら
露竹舍 深川實非

淺艸福井町
梅若吉之丞向うら
昆路亭 閑澤來

一漁全菴
松窗 鶴海堤亭

淺艸かや町二丁目
鼎屋酒屋のうら
芙條園 石川雨林

當時上京
三都菴 郭春堂

○古來座

麴町五丁目片町
三爪菴 內田柳尾

本町二丁目
奈良櫻の向うら
規矩菴 邑樂涉十

芝口露月町
東うらとをり
夜雪菴 東金羅

金羅全菴
珍齋 酒井夜鶴

○平砂側

日本橋二丁目
十九文横丁
新花林 皐月平砂

れいがん島湊橋通
茶碗店うら
天目庵 明田秀億

八丁堀磯卩太神宮
むかふ
徳山齋 榎本牛吞

石町二丁目
筬力菴 桑岡貞喬

秀億全菴
和氣菴 藏羽貫

○古流座

市谷田町二丁目
御堀はた
素湯菴 笠家左簾

大根はたけ与左衛門葛
稲荷のうしろ通り
菴 勝李門

來爾全菴
手枕菴 三上寸松

湯島三組町横丁　黒門より南へ入　正月菴　野木本來爾

瀬戸物町飛脚屋の　嶋屋向うら　楠藏菴　埴桃義

水戸住居　取次所來爾菴　而已菴　溪山來恕

○沾德座

芝新門前　さつま屋半右衛門地内　來笑菴　高橋偕貝

赤坂田町三丁目　石橋近所　合觀堂　内田沾山

赤坂表傳馬町一丁目　醤油屋のうら　是花坊　堤風導

平川天神表門　むかふうら　柳下菴　行不言

淺艸元鳥越三筋町　表通り中程　柳あり　啣花園　垣紫鳳

麻布雜式町横丁　末廣稲荷向小路　六花坊　村松子鷹

日本橋品川町河岸　廻船問屋錢屋の隣　古旗菴　越谷吾山

かはらけ町　熊野横丁　丘帆　島田朴路

淺艸元鳥越三筋町
西丁岡田久米吉仝居
四曙菴　岡瀾臺

神田鍛冶町一丁目
不動新道
風古菴　菅百輅

青山熊野横丁
松平兵庫頭樣御門前
李下菴　岡村石鯨

西窪紙屋町
光明寺向裏
西峡菴　中村社麥

本町一丁目横丁
金吹町
午時菴　駃連尺

木挽町六丁目
津婦人　津下犬養

番町法眼坂上
小菅新五左衛門樣御屋敷内
黒釜菴　田口芳竹

○宗因座

神田竪大工町
東円菴　北沾涼

小石川白山權現裏門梅林菴
足高五璉

市谷田町二丁目
御堀端通
万歳洞　小菅寶馬

神田お玉が池
横瀬樣向角
一陽井　谷素外

長谷川町荒木うしろ新道　妍齋　島津富

櫻田久保町御堀端鍛冶町　田東菴　山内花縣

淺艸諏訪町紅粉屋横丁　霽月菴　岸田爸梁

牛込榎町池田新五郎樣內　長白亭　機乙雉

和泉橋通佐久間町大通り　生白菴　常木丹

○冬　英　側

麴町十丁目米屋のうら　桂窗　牧冬英

牛込揚場中野左兵衞樣內　珍重菴　大塚雪齋

麴町四丁目藥種屋小西うら通り火見の下　無由菴　高夜庭

近國行脚　平生菴　間官道

品川新宿入口稻荷前たばこ屋のうら　拘井菴　武英鵠

麴町十三丁目新店　春待菴　中村玉龜

麴町三丁目はやふさ丁　鴻月樓
挑灯屋のうら官道仝菴
三木灌河

麴町六丁目横丁
善國寺谷加藤豐之助様内　月尺菴
多遲楞雲

冬英仝菴　一巣菴
牧雨澤

赤坂湯屋町きの國　鳳居字
坂行當茶屋平吉前側
淺井々

二番町新道　鼠嘲菴
小笠原内藏助様御屋敷
角田爲裴

○獨立

尾張町竹川町東
三十間堀七丁目　一石房
渋珠來

珠來仝町　五眠菴
上田鷹吉

增上寺片門前
中程　澄月菴
岩本芳水

芳水仝菴　桂下坊
桂琨阿

芝中門前突當
土手跡　隱里軒
今井立鼠

立鼠仝菴　銀花齋
立賀

湯島五丁目 ゑりかた町 宇宙庵 淺岡雞冠

鶴岡全庵 宇虹庵 荻原祇報

北八丁堀 永澤町 摩訶窗 林珪山

芝中門前一丁目 横丁 雲片庵 楠田瑤臺

本郷二丁目西側 たはこ屋と菓子屋のうら 箇箇庵 東燕志

○存義側

銀座三丁目裏通 鎗屋町新道 有無庵 馬場存義

和泉町 玄治店 獨歩庵 麦買明

柳原土手下 富田様前通 木雁庵 谷口樓川

八丁堀矢場の近所 武士地 伽維庵 小栗百万

樓川全庵 獅子眠 谷口雞口

茅場町坂本丁 植木留 深月庵 三上祇丞

銀座二丁目西側 新樹菴 花隈多少

荒和布橋貝杓子店 樂成菴 藤中温克

神田多町一丁目雁金紺屋むかふ 露哉 北在轉

橋町一丁目新道木戸際 自在菴 仲祇徳

神田小柳町仕出し茶屋伊勢屋四郎右衛門隣 神田菴 木村小知

櫻川全菴 眉斎 田女

中橋上槇町二丁目紫屋と云染物屋向ふ 石壽觀 壽秀國

當分京橋松川町彫物師野村久次郎方 凡夫菴 大葦原可因

神田旅籠町一丁目横丁 連葉菴 志村當仙

神田新石町合羽屋ゝ菓子屋のうら 丙辰夫 木村金洞

淺艸御門外第六天裏門通 西月菴 笠家宗梅

両國米澤町錺店うら 戎王子 北村葵足

小石川上餌指町
雨夜菴 峽田菊堂

麴町平川町一丁目
蛤店
星霜菴 熊谷白頭

神田紺屋町茶屋
藤十郎新道の表通
三呼菴 河野芙天

元飯田町御火消
屋敷内
矩久齋 本間保牛

中橋かど茶碗屋
うしろのうら
無極菴 坊城留倫

安永三年歳
東叡山下竹町
星運堂 花屋久次郎判

歷代滑稽傳

許六撰

歴代滑稽傳

五老井選

一日本俳諧の始り、伊弉諾尊・伊弉冊尊天の浮橋のもとにて、

あなうれしにえやうまし乙女にあひぬ　男神

あなうれしにゑやうまし男に逢ぬ　女神

此末段ミ口傳。

一俳諧の連歌は、もと本式連哥百韵濟て後、文臺執筆をも立ず、打越あざりをも嫌ず、尤月花の數もなく、我儘(マヽ)いひがちにしてあそびけるとぞ。其後百韵一卷・一座千句など書付侍る事は、伊勢の守武(モリタケ)の比より始りたり。今世に守武千句とて是あり。擧句(アゲ)に天文九年時雨降比とあれば、大形年數百七十年余に及ぶ。

一伊勢の守武は神職の人也。俳諧に長じて末世高祖と稱す。

千句巻頭
飛梅やかろ〴〵しくも神の春
青柳の眉かく岸のひたいかな

名乗てや抑今宵秋の月
鐙ふんばりはちかりの聲
くつは虫ゆるす手綱やなかるらん
そよやあちこちかけ廻りつゝ
竹よりもなをつれなきは膝のふし

附句
七夜といふは今の事なり
五日より六日に成るは程もなし
ヌ
きらりと見ゆる春の夕ぐれ
雁がねやめつきをさして歸らん
兀(ハゲ)たる太刀の燕なくころ
ヌ
手習はなどあまさがる物ならん
あがりなんとや〳〵

其比は前句の噂并躰用のせんさくもなし。

一山崎の宗鑑は、支那彌三郎入道しての名也。連歌の達人、能書にして色紙短冊おほし。後俳諧師と成て犬筑波集を撰す。

天神ぞ梅にましたる花もなし
手をついて哥申上る蛙かな

月に柄をさしたらばよき團哉

附句　春の野にいんぎんかうの始りて

　まづつく〳〵し袴をぞ着る

又　日本のもの〻口の廣さよ

大唐をこがしにしてや呑ぬらん

又　吉野の山をこゆる商人

春立といふばかりにてかねかけて

一伊勢山田の望一は盲人也。古き俳諧の名あり。大むね守武・宗鑑を學ぶ。

天神奉納獨吟　梅ならば南の枝や北野殿

　飛うぐひすの跡を老松

長閑なる光に鶴の羽をのべて

　月にほこりを拂ふ高まど

怺風の吹まくりたる古すだれ

一洛の松永氏貞德老人は逍遊軒と号す。又みづから長頭麿といふ。父永種の道をつぎ、連哥を好み、哥學に長じ、九條玖山公の奥儀を傳授す。後俳諧師と成、世に廣め、門人あまたあり。俳諧御傘ヰ撰集おほし。行年百二十餘にて死す。井筒や故庄兵衛、此人につかふ。貞德命じて三ッ物所に定む。

嫁ならば見とりにせばや柳髪

雁がねは秋-風-樂のことぢ哉

獨吟　涼さのかたまりなれや夜半の月

　一にぎりある夕立の雲

かた撥で太鼓打ほど神鳴て

附句　一日晴の春の行幸

眞白な雪は繼尾の鷹ばかり

　たゞ黑〳〵と燃し野の原

新増犬筑波に　碁盤の上に春は來にけり

鶯の巣ごもりといふ作り物　宗鑑

貞德が曰、此句今ならば作り物といふ字入べからず。是は同意に成也。此作者是程の事を辨ぬにもあらざるべし。其比は連歌の爲の狂言なれば、噂付・用付もかまはず、一二句にてどよみにして、あそぶと見えたり。此句に、

まづは似せたり雪の梅がえ　貞德

是は檜物師が嶋臺のつくり物をいふ。

又
瓜をもひやす猿澤の池

夏の日に行〳〵汗をかきつばた　宗鑑

貞徳が曰、ひやすに此句暑き心なれば、今は同意也。

旅の衣をかゆる業平　貞徳

一雛屋立圃は野々口氏也。貞徳門人にして撰集數多あり。書を能す。京童と云名所記、自畫也。立圃發句あり、花火草の作者。慈父追善九百韵の獨吟に、

巻頭
雪と消し跡の光や彌陀如來

巻軸
手向ぬる花や九品の淨土經

春の日寺へまいる兄弟

きる物の塵（ちり）も霞もはき捨て

一洛の松江氏重頼は後維舟と号す。毛吹草の作者。撰集あまたあり。談林の比まで長生して今様姿を撰す。

長崎にての二句
花に行心やかごに桐の棒

もめん帆やもろこし船も雲の峯

今様姿の比
阿蘭陀の文字か横とぶ天津雁

談林のころ
峯入や雲に起臥す頭巾（トキン）もあり

獨吟　貞徳時代
富士の雪見のつけに返す麓哉

旅を師走に吸筒の酔

幾もとゝらつかふ鷹の羽手にすゑて

一洛の山本氏西武は貞徳の門人、かくれ簑・かくれ笠・紗巾袋等の俳書を撰す。

紿合に
持はこぶとしや息杖けふの春

一洛の高瀬氏梅盛は貞徳末の門人、撰集數多あり。

紿合に
落にきと人に語ん嵯峨の鮎

木玉千句巻頭
花一木先に立たる千種哉　梅盛

外山の霞あちの野邊まで　倫員

いぬる雁も入日の影もおしまれて

一洛の安原氏貞室は中年迄はいかいを知ず。一とせ加州山中の湯主いづみや又兵衞といふものに耻しめられ、歸洛して貞徳の末の門人と成。志あつくして終に此人に花の本を讓り、貞室と名乘る。一生書置ける短尺を、みづから買取燒捨たり。是にて世に自筆稀也。

是は〳〵とばかり花のよしの山

と云名句をしたり。其後琵琶一面をかゝえ、東洛に趣きけり。

　跡の月はみよし野の雲や富士の雪

と吟じ、武藏にくだり、隅田川一見して、

　いざのぼれ嵯峨の鮎喰(ぐひ)に都鳥

獨吟百韻　曙の叡慮(慮)しづけし烁の山

　のぼるお亭の露の玉階

　霧晴る軒端の風鈴音はして

　しめる跡の月のかさぼこ

一いぬゐ貞恕は越前敦賀の産、のち大津に居して貞室門人と成。其比貞室門人あまたのうち、花の本を此貞恕に讓る。其後血脉相續の弟子なくて、花の本は此貞恕にて絶たり。但貞淸といふ弟子有、是に讓歟。貞淸俳諧の沙汰なし。

　水草にいきた花飛螢かな

獨吟百韻　散花は羽や一枚飛胡蝶

　蜘の巣みだす青柳の糸

　門番「が簾に春の雨過て

附句　遠くはゆかじ今朝の落人

　道端にいきりたちたる馬の糞

といふ句して、大津の馬のくそといふ名を得たり。

一季吟老人は江州北村の産、のち洛に居す。地下にあつて歌學に長じ、むづかしき哥書に抄物數多つくる。後世の哥道は此人出生したる故に、末代地下に殘れり。新玉津嶋の別當に任ず。晩年の比、季吟・湖春親子共に江戶に召れ、二男正立に新玉津嶋の別當讓る。貞德老後の門人たり。俳諧に長じて、天下みな此流を習ふ。俳書數多撰す。埋木をあらはし是を傳授す。

　東山かすむやたばこ花の比

　女郞花たとへばあはの內侍哉　季吟

拾合　地主からは木の間の花の都かな

　殘る雪かと見ゆる白壁　正立

　御藏町冬の御方も春明て　湖春

　木の葉降しく人宿の躰

　秋寒き門は荷鞍や干つらん　季吟

　ヌ　笘を敷簾の舟の下冷

走ッ痔はいく夜あかしのうらに行　仝

一岡田将監は俳諧に名ある人也。美濃の國の産。一とせ近衛殿へ御見舞申されければ、

五月雨によくこそきたれ美濃ゝもの

とあそばしければ、

あのへこのゑを探す鵜つかひ

と云脇を付て申上られたり。發句俳諧書ゝに見えたり。

爪紅(ツマベニ)をさすや楓の初もみぢ

尾花の風にふり袖の庭

月夜には踊れと人を催して

一堺の慶友、江戸の玄札・徳元は同時の作者にして、牡丹花の末也。

三吟　夏の季のさかひにきかむ時鳥　徳元

水をうつ木の花に待友　慶友

きれゐにも庭の垣根の掃除して　玄札

一むかし守武・宗鑑以來、興取もの俳諧と心得、

うづき來てねぶとに鳴や郭公

夕立や細首中に大井川

など青葉のつゞくを第一とするゆへに、名鳥に腫物を出來し、科(トガ)なき旅人の首をはねるたぐひ、一句の本情を失へり。後には興取事もふるく盡て、是より俳諧理屈に落る。

白く咲や二十四番の花の兄

三十九の歳旦　着そ初伊達せん老の一つ前　兼豊

如此理屈にいひつめぬれば、次の年の歳旦は何をかいはむ。是盡る事のしるし也。次第にはいかいせばく成り、初ッ元結といふ附合書物を拵、附合を常住さだめ置様に成行侍る。又は取なし附などむかしよりあれど、見る目も高し。

つくり異(コト)なるおとり脇指

と云前句に、

畑あらす雀のはごをこしらへて

つくりに畠、躍に雀、脇指にはごを取なして付たるもの也。四つ手附・噂付、俳諧の付合は是に極る。諷ははいかいの源氏物語ともてはやし、哥のかすり・物語の附合、專肝要(カンヨウ)とす。

一大坂宗因は西翁とも梅翁共いへり。天滿の天神月次連歌の宗匠なりしが、俳諧師と成、古風の俳諧扣(タヽキ)やぶり、天地の間に獨歩す。世擧(コゾツ)て宗因風と稱し、面白がる。

詠むとて花にもいたし首の骨
花見には老若男女きせるとひ
藤さけば蛸木にのぼる氣色あり

(獨吟)
蚊柱は鋸屑(ノコギリクズ)さそふ夕べかな
かはき砂子の庭の凉風
酒ひとつ喉(ノド)通る間に月出て
つぶりなづれば露ぞこぼるゝ
四つ五ついたいけ盛の花薄
まゝくはふとや虫のなくらん
野遊びにかけ廻りては又しては
あの山櫻こゝのかしこの

門人西鶴・由平など其風をうけ取、專(モツパ)らひらめ成事をいへり。後大坂談林と号す。

(上)
下露や無分別なるおき所　宗因

露の發句は古今なき物也。後代これ程の事をいひ出すべき作者有べし共覺ず。又平句に、

何をいふても六十の秋

といふ句などは末代不易にして妙也。

一談林軒松意は江戸の産也。宗因を招(マネ)き、江戸談林と号し、飛躰(トビテイ)と名付。談林十百韻より始り、軒端の獨活までの間、俳書日ゝの變化をあらはす。俳諧は師匠より弟子がすぐれ、其弟子よりは又弟子が上手と成る。一字の働・一句の余情、善ヲ盡シ美ヲ盡せり。此時俳諧天下一統して談林風をせぬ人なし。

(談林十百韻巻頭)
されば爰に談林の木あり梅の花　梅翁
世俗眠をさます鶯　雪柴
朝霞たばこの烟横おれて　在色
駕かき過るあとの山風　一鉄
詠むれば供鑓つゞく峯の松　正友

(附句)
香薷散召上られて御覽ぜよ　執筆
なふ〳〵旅人三伏の夏　在色
並松の聲高ふして馬やらふ　雪柴

磯打波のさはぐ舟つき　正友

傾城をあらそひかねてまくり切　志計

泪の淵をくゞるさいの目　一朝

十百韵
いざ折て人中見せむ山櫻　雪柴

同
くつろぐやおよそ天下の下凉　卜尺

同
夜も明ばけんべき打んから衣　正友

なぞ体又ぬけ共
皮たびのむかしは紅葉ふみわけたり　一鉄

八百韵
花をふんでたゝらうらめし暮の聲　幽山

十百
雪折やむかしに歸る笠の骨　松意

栗うりめ月もれとてや升のすみ　在色

上手の手際は是也。めの一字にて栗賣をいましめたる働、上手出世の最中也。此句にかぎらず、此類おほし。月もれとてやの言葉は、不破の關屋の哥のかすり、此比は名月の發句に、月の哥のかすりを第一賞翫す。月にあらざる哥井物語の言葉は、本意にあらずとて上手はとらず。

宗因餞別
夕立はけふ馬の背の別かな　似春

都には今や衣を馬の沓　作者不知

馬の沓にて宇津の山をぬけたり。是家隆卿の夕霜はらふの哥のかすり也。其後に俳諧かたふなり、長なり、風ー体の變化、日ゝ夜〳〵に變る。

一洛の田中常矩は季吟門弟也。後談林に移し、

五百韵巻頭
蛇之介が恨の鐘や花のくれ

と云句をして、蛇之介といふ号をとれり。破笒・ちり取・雑巾等の集を撰す。洛の談林は大方常矩が門弟也。

ぞゝり子を升に殘して月見哉

五百韵獨吟
馬下駄や引どもあからず厚氷

杖つゝぱりて雪折の竹

木枯や御家老顔を吹すらん

一理屈ある末のうき雲

始メあたまの山摺鉢の谷とたとへ侍れ共、中比は顚山摺鉢谷とおしつけて申侍る。

羽織まく端山奥あり花の時　常矩

上戸梢にさけぶ夕東風　爾木

燒餳繼尾の鷲の引さきて　一味

雑巾のころ、都らながふなり、かたふ六る。
　姫瓜に三千の林檎顔色なし
　といへ共下戸たつ山の花は蛙
　夕蟬や紅葉にかはくなき上戸
附句
遠霞溝わけ小舟棹さすや
　功ー成　名ー遂ヶ鉄　挺　退ク
又
俤の追込むしろ松たちて
　その御心ゆへにこそ霍亂は發給へ
ところてん勸めをきこしめさぬ事
　つるに伍子胥が西瓜はねられ
一惣本地高政は、江戸談林に對して洛の惣本寺の名あり。
江戸躍と云獨吟の百韵あり。
　千代の松かざせり座の神々樂
　　國々きほふ雪の白木綿
附句花前
　親類遠き中納言どの
　合力々花も紅葉もなかりけり
一伊勢足代弘氏は神職の人也、談林の時上手の名あり。
　郭公きゝは聞いたがほとゝぎす

　　寐いるでも夏さむるでも夏
百韻の附味、句作り、宗因に等し。
一談林より次第〳〵俳諧上手に成、手を盡し作をつくしたり。されば長点の句は京も江戸も符ー節を合せたるが如く極る。是より俳諧亂そめて、かたく漢字を集め、詩をきく様に成、又は字あまり、一息にはいはれぬ様なる事に成り、京江戸田舎共にみだれ立て、此時談林の俳諧滅亡のしるし也。
　嶽や〳〵呑手の若もの花修行　松意
　今宵の大將たり抑たはらの芋太郎　松肥
　うなだれしは哥讀ゆかいかに薄感（一字闕）
附句
　天道や人道や女道や惡道や　雅計
　　殊にかなしきは借錢界親仁界　曉夕翠
又
　數平蜘これなん朝敵の始め　仝
　　蝿頭甲を並べて庭上に列す　白溫虎
一洛の信德は、古風より談林に移し、其後正風体の比まで長生して俳諧を好めり。
京三時
　白蓮花盧山の小法師が筆也けり

江戸三吟
物の名の蛸や故郷のいかのぼり
附句
梓の弓に唐綿をうつ
抑怺澁紙おろしたてまつり
千種の色や新左衛門判
又
臺子釜瀧の響をしかけたり
にしめを引て歸る賢人

一江戸山素堂は隱士也。江戸三吟の時は信章と云。幽山八百韵の節は來雪と云。芭蕉翁桃青と友トシ善シ。後正風の体を專とす。

江戸三吟
さぞな都淨瑠璃小哥は爰の花
附句
目の前に嶋田金谷の三瀬川　信章
から尻しづむ淵は有けり　信德
小ふとんに大蛇の恨鱗ウロコ形ガタ　桃青
鉄カナのめしつぎ湯となりしなか　章

一芭蕉翁桃青は伊賀の產、江戸に居して俳諧に鳴る。桃青二十哥仙といふ俳書をあらはす。

二十哥仙蜀吟之内
艣聲波をうつて腸氷る夜は涙
子をおもふ鯨の共聲かなし

第一第二の絃はじよき〳〵として午房を刻む
下女廟ノ花はもみぢよりも紅クレナイ也

前後名を出したる撰集は二十哥仙一部也。談林の時俳諧に長じ、日ゝ向上にすり上ゲ、終ツイに談林を見破り、はじめて正風体を見出シ、躬恒・貫之の本情を探て始て、

道野邊の木槿ムクゲは馬に喰れたり

と申されたり。天下擧コゾツて俳諧中興の開祖、正風の翁と稱し侍る。天下の門人數千人のうち、纔に正風の体を得たるもの少し。初懷紙の比、杉風・嵐蘭・其角・嵐雪・曾良等江戸に在て隨仕す。

敵よせ來る村松の聲
有明の梨打烏帽子着たりけり
又
一輪ひらく芍藥の花
碁の工夫二日とぢたる目を明キて

其ころ故鄕伊賀に立歸ける道の紀を、草枕共野ざらしの紀行共いふ。大津千那・尚白・青亞三人師としたのむ。

辛崎の松は花より朧にて

此時の事也。

名古屋にて、野水・荷兮、いらこの杜國、〱冬の日の俳諧を撰し、次の春〱春の日、打つゞき〱嘖野等のはいかいを勸(スヽ)む。風体、冬の日・春の日は初懐紙に近し。あら野は俳諧やはらかにして少かるし。

[あら野]さいさいながら文字間に來る

いかめしき瓦庇(ヒサシ)の木藥屋

祕藏する子の痩てかいなき

大垣如行・荆口等の門人、招(マテイ)て師とし賴む。野ざらしの紀行の時也。其後おくの細道の時、大垣より伊勢迁宮おがみに別るゝとて、

蛤の二見へわかれ行肸ぞ

又江戸に歸て諸門人に正風の躰を勸(スヽ)む。

又洛にのぼつて去來・史邦・凡兆等をすゝめ、

初時雨猿も小簑をほしけ也

と吟じて猿みのを起す。

[猿みのに]さまざまに品かはりたる戀をして

浮世の果はみな小町也

又

火燈にのぼればくるゝ峯の寺

時鳥みな啼しまふたり

痩骨のまだ起直る力なき

又

稻の葉延の力なき風

發心のはじめに越る鈴鹿山

膳所曲翠・正秀・珍碩等を引導て、ひさごのはいかいあり。大かた趣き猿簑に等し。其後江戸に歸り、深川芭蕉庵をふたゝびむすぶ。許六此時にまみゆ。珍碩江戸に來て深川集の俳諧を撰す。

乘かけの挑灯しめす朝風

汐さしかゝる星川の橋

愚老が俳諧、四五年の後はみなケ様に成と申されけり。

支考・桃隣は隨仕して江戸に下り、桃隣は江戸に止り、支考は松嶋・象潟の旅に趣き、葛の松原を撰す。野坡・利牛・孤屋をそゝのかして炭俵出來たり。

[炭俵]星さへ見えず二十八日

ひだるきは殊軍の太(大)事也

又

納(カセ)買の七つばかりをおとづれて

塀に門ある五十石とり

又
幾月ぶりで越る逢坂
減もせぬ鍛冶屋のみせの店ざらし

又江戸にて保生活圖を勸め、續猿蓑を手傳して伊賀に歸る。

（續猿）八九間空で雨降る柳哉
（閉關句）晝寝の癖を直しかねけり
聟が來てにつともせずに物語
中國よりの状の吉左右
朔日の日はどこへやら振舞れ
ひとへ羽織がうせて尋る

又
見て通る紀三井は花の咲かゝり
荷持ひとりにいとゞ永き日
こち風の又西になり北になり
わが手に脉を太事がらるゝ(七)

杉風餞別に別座敷と云俳諧あり。大概續猿に同じ。はいかいは淺き砂川の流るゝ如くにせよとはいへり。

（別座敷）五つがなれば歸る女房
此際も利上ばかりにいひ延シ
まんまと今朝は輌を乘出す

又
國から來たる人に物いふ
怠しふ一臼ついて供支度
（遺語）糞汲句ひ隣そふなり

大坂珍碩を助け、元祿七戌の十月十二日、痢疾をうれひ、つるに難波の旅店にて遷化す。骸は義仲寺に葬る。僧丈草・惟然（前号素牛）、尼智月は乙州が母、園女は醫の一有が妻也。猿蓑の比より隨ひ、大坂之道（後号露竹）洛にて見ゆ。迁化の時、之道・舍羅・呑舟、心切に看病す。伊賀門人は故郷なればその數おほし。加賀の北枝は、おくの細道の比、金澤より山中の湯まで見送り、万子も早馬にて追かけ、實の道を盡せり。名古屋の露川は、東武下向の時、みやにてまみゆ。越中の浪化は嵯峨の落柿舍にて參會あり。江東の李由も落柿舍にて見へ、東武下向の時四梅廬に漂泊し給ふ。木導・汶村は方達してつるに逢ず。文通に、木導はかたのごくの作者也と、度々稱美あり。路通・荷兮・野水・越人・木因等は勘當の門人也。其餘の門人は一々しるすにいとまあらず。俳諧の

風体は續猿みのに終る。其評相續して年月の變化を察し、時代の費を簡くものは、今江東彦根の俳諧に極る。其角が門人は其角が手筋を殘し、嵐雪が門葉は嵐雪が手筋を殘す。如二焦尾琴一の類 支考は、作あるものは盡ると紛かし、つゐに己が作意は盡て、つれ〴〵讀と變ず。諸國の俳諧も其所の宗匠の手筋となりて、桃青の血脉相續するものは稀也。

一枚記請(起)

蕉門の手筋日夜に滅し、此上いかばかりの事にか成行らむと、是のみ心にかゝり侍る。愚老病衰日夜にせまり、おほくの日數はなし。後代此記(起)請文を枕とし、發明器用の人は師匠もなく、流義もあるまじ。一、最初に是を習ふ事を習ずして闇よりやみにわけ入る。今の殘る門人みな是也。しかるゆへに、十人に逢ふ時は十人の口がたがふ。何を以て芭蕉流と決定せむ。かならず此書を、末代に至ても蕉翁の手筋・口寫といふは是也。輕くおもふ事なかれ。抑當流案ジかた、發句の太(大)事といふは、正風体を宗とする也。これ見聞たる所を句作る也。是にてはおほく面白からず。かるがゆへに、幽玄のさび・ほそみへかけて、人の感ずる事をする也。田家の情をいはゞ、臼に麥を入れたるはつね也。芋を入レたるといふ、さび・細み也。第二に、かけ合といふ事、當流の眼也。今の宗匠達一人もしらず。此かけ合をよく知る人は、日ゝ夜ゝ、行先キ〳〵に發句はある也。是を知らざるゆへに、能キ發句も持ず、つねに發句なきとてくるしむ。先師常にかなしめり。そのかけ合といふは、花にあすならふの木をかけ合し、名月に三井寺の門扣く事をかけ合する也。その中はとり合せよき樣につぎめを合せて發句にする事也。季と季の辭をとり合するも同前、猶以名人の作也。

青柳の泥にしだるゝ汐干かな

汐干に青柳のかけ合、これ名人の作也。古しといへば古し、新しきといへば是より新しき物はなし。泥はむすびにして纏め也。泥と成共、橋と成共、こゝろにためて面白き物を繼合する也。先師の句、一句にてもかけ合のなきはなし。第三番に、動く歟動かぬ歟といふ事をかけて、

最初より案ずる也。春風が陽焰に動き、野菊が撫子に動くたぐひ、ひたものあれ是と動かし、決定の上にて手爾於葉を改め、句作るもの也。又當流にはいかいの讀かたといふ事一太事なり。歴〱の門人是を知らず。一太事の和歌のうへにも、歌の讀かたといふ事あるよし。やんごなき歌仙達の仰られ候。讀かたをしらざれば、人の哥の善惡見えず。自歌たま〱一首讀あてゝも、まぐれあたりのよし仰られ侍ると承る。俳諧には相違あるべけれど、はいかいの讀かたも是也。隨分かゝらぬわるき句にも讀かたあるは上句也。一手柄なき事は上手の句になし。しらぬ人はおのれが心に好キたるばかりを上句とす。此讀かた五十や百習ても知りがたき物也。濱の鵆に袖ぬれてのたぐひ也。第四に、連俳は季節の辭を題とす。秌季・春季を持といへども、發句にならぬ只事おほし。秌の峯・春の山のたぐひ、似た事にて、春の野・秌の野は題也。先師大根引は題にならずとて、大根引といふ事を、と前書にかきて出されたり。一生の秀逸題を撰ぶ。梅・櫻・月・雪のたぐひと心得べし。第五に、當流とて發句する人、おほく皆連哥也。滑稽のおかしみを宗とせざれば、はいかいにあらず。滑稽入レがたき所には、連歌にせぬ言葉つゞきを切込ミ、はいかいにしてする物也。くれて行春の別は連哥也。けふ切の春の別ははいかい也。有明になりて、度〱時雨といふは俳諧也。昔の俳言といふはなけれど、連哥につゞけぬ辭は、みなはいかい也。近年傳授なき人、みだりに切字なしの發句、沙汰のかぎり也。よく傳授して是をすべし。先師の發句仕樣を前後よく知り、俳諧の底をぬきて古今に渡るものは、五老井一人也。惣門人のうちに發句仕樣をよく知りてするものは、其角一人也。されど底をぬかざるゆへに、死さまにはあらぬ事をいひ出せり。百韵の俳諧をする事は、大きに古くして下手也。發句の手筋は右兩人に極る。其餘はたま〱よき事いひ出したるも、寓中（マグレアタリ）としるべし。

俳諧指南

いにしへ守武・宗鑑よりこのかた、はいかいの言葉といふ物一通りありて、上ミへやり下モへやり、それに少しづゝあ

たらしみを付て書付る。宗祇の例の板返しにまかると申されたるも是也。貞室より季吟時代のはいかいを見るに、今の歴〳〵、蕉門の宗匠達のいひ出せる事にさまで變らず。さら〳〵瓢箪から駒も出ず。何が面白しとてする事ぞや。先師、世にはいかいは三合ほか出ず、七合は殘りたりと申されけり。抑先師の俳諧は格別にして、世の中のはいかいとはうらはら也。いにしへより今までの俳諧は、俳諧の道具一ト通りありて、是は人情をけづりたて、組合せて、はいかいとて書並べたる物也。先師のはいかいは、人情平話のよく人に通ずる辭、徒事にてなき事を按じ出し、むかしからの俳諧の形恰合に切ちゞめて出したる物也。後代の學者、世間のはいかいとうらはら成所を、爰にて工夫をめぐらし、眼をあきらかにすべし。一とせ芭蕉庵にて三吟はいかい有ける時、

寒菊の隣もありやいけ大根　許六

寒菊にいけ大根、同季のとり合せ也。

冬さし籠る北窓の煤翁

此句、世間煤を雪とする句也。煤の一字はいかいの讀かたにして、達人の手柄といふは是也。しらぬ人は等閑に見通し、蕉門の不可思議をしらず。第三、嵐蘭にあたれり。數刻案じ申され侍れど出ず。後に宿のよせ馬など、いつも此樣な横小路へ牽入置ゆと申されければ、先師のいはく、よせ馬といふ物今まで何千度出ゆやらしらず、是みな世にある三合のうち也と申されければ、在鄕より宵から馬をつれ來り、寒がらせ申と、嵐蘭かさねて申されければ、眞直にそれがよき第三にて侍る也とて、

月もなき宵から馬をつれて來て　嵐蘭

と先師句作り申されたり。是は人情平話の道具をもつて、はいかいの形恰合に切り合せ出したる物と知るべし。後代の人此句をよく得心したらば、猿簑已後の四五集、明かに埒明べし。又深川のはいかいに、

綿たて並ぶ冬向の里

といふ脇有。世間冬枯の里とする句也。是三合のうち也。平話に夏向・冬むきとはいふ也。はいかいにはつゐにせず。是讀かたの一手柄也。他門にては、夏向・冬向といふは是古しとて、人のいはぬ春向・秌向新しき成といふ。

皆此たぐひ無理にして、正風にはあらず。後にはわれも人も面白き所うせて行也。先師、はいかいのあたらしく面白き所を得心したるものは、東花坊一人也。その餘の門人宗匠達、夢にも知らず。されど此坊不實輕薄にして、先師身まかりて後の上手に成たるもの也。百韵のうち五十句は聞事にして天晴(アッパレ)也。二十句は徒事(タヾ)にて、はなし也。平話のうち、成ると・ならぬとをさとして、はいかいに成る所をしりて用る也。此坊是を知らず、輕みとおもふて居る也。むかし大坂談林とて由平(ヨシヒラ)などおほくし侍れど、はいかい平話とてかつてとらず。殘る三十句は打越前句兩句に付て、おほく前句の噂也。むかし打越の吟味・付句の噂つよくせんさくのある世をしらず。今以て少もむかしに變らず。深川の俳諧に、

奉行の鑓に誰もこはがる

といふ句、翁せられて、後に誰の一字は前句の噂也とくやみ申されけり。此坊發句大下手也。一生秀逸の句五句となし。文章もしさるらしく書つゞけ侍れど、口より奥まで趣意(シユイ)が通らず、言葉つゞき半分なぐり、つゐに決定したる所なし。何の格・かの格と彼がいふは、みな嘘(ウソ)也。惣じて和文に格なし。ましてはいかいの文章には古格として用る物なし。只手短に、持て廻らぬやうに書を俳諧文章の格式也と、先師より慥に相傳したり。此坊がいふ事うけがふべからず。近年二十五ヶ條の祕訣(ヒケツ)など、去來より相傳したりとて金銀をむさぼり、しらぬ人をたぶらかすよし、沙汰のかぎり、僞にて大うそ也。愚老が宇陀法師撰する時、二十五ヶ條ばかりの祕訣あるよし、書くれよとたのむゆへに書記したる物也。俳諧大祕訣といふは、愚老一人に傳へ給ふ二卷の書よりなし。先師のはいかい、口寫を聞ごく、五十韵・百韵卷面(ヅラ)に高低(ヒク)ありて退屈せず、しかも新しく、終に世に出ぬはいかいを並べ、哀なる所はあはれを述べ、さびしき所には淋しきを演(ノ)べ、滑稽のおかしみ、面白み、此等(コレラ)を自由にするものは、五老井一人也。發句の自由を得、はいかいの作意を盡し、文章をたくさんに書ものは、許六が事也。正風血脈の門人、芭蕉翁二代目といはむもにくからむか。于時正德第五乙未の秌八月十四日之夜、病床におゐて識之。

［五老井］　［子三］

辭世

一ー時ニ打ー破ス屎ー糞ノ壺
芬ー々タル臭ー氣供ス梵ー天ニ

下手ばかり死ぬる事ぞとおもひしに
上手も死ねばくそ上手なり

菊阿佛末期書

先生病床におもりて、八月廿日ごろのうつゝ心に、發句の仕様を問ものあり。それに答へて、

まづ啼や東坡が桑に時鳥

東坡は千株の桑畠を持て、世を渡るたつぎとせり。時鳥と歳旦の句は手柄ものにして、桑にほとゝぎすのかけ合、妙々の場所にて、行末此所を忘れざれば、發句は無盡のもの也と示(シメ)して、夢共なくおもへり。そのつぎの夜、夢想に、

花はあれども水に極る

といふ憐なる句を得たり。前の時鳥に對して脇の句共おもふべき歟。此兩句辭世共見るべきなどの給へり。つら〳〵此句を吟ずるに、色ー相(シャウ)をはなれたる所、凡ー心の及ぶべきにあらず。尤有がたき事也。

五老先生、病衰日夜にせまり、ことしの秋八月廿六日に身まかり給ふ。世に師友の死せる時、追善の集つくる事、いにしへより是ある事にして大きに古し。先師遺言にして今追善の集つくる事せず。李由迁化の時もつくらず、汶村卒したる折もせず。只門下打より、ひそかに悼むべきよし、仰おかれけるゆへ追善の集なし。

于時正德乙未秋九月謹書寫之

五老井門人

雲茶店 冶天
桃菓巷 越闌
横斜庵 孟遠
蓼九濱寺 雲鈴

京寺町二條下ル町
野田彌兵衛板

芭蕉翁頭陀物語

涼袋述

むかし武山の葛鼠法師、風雅を難波の淺生菴にちぎりて、しば／＼蕉翁のものがたりをつたへ、稿して洛の重寛に附し、是に東西のむかしがたりを增さばかならずや板すべしとぞ。其後越の都因坊ありて、賀の金城に遺れる事ども、伊勢よりやまと路の物がたりを加へて、西南北越の新語を補ふに、滑稽の世說ともいはむと、卷てふところに喜べども、東武は深川のわたりもゆかしきにや、予が草庵の反古を乞ふに、おなじ意にかいあつめたるを撰り出で、前話に二の町なるは破り、雨夜のともし火ちかふ取ほど、机のうへに一卷とはなりぬ。かくて蕉門頭陀物がたりと題し、かの重寛が子にかへしあたふるのみ。

武城　吸露菴　涼袋之印

寬延辛未九月

芭蕉翁頭陀物がたり目錄

蕉門頭陀物がたり　涼袋述

△おきな北枝がもとにやどる并秋風の句談

はせをの翁、越路を經て秋の半、金城に入、北枝がもとに旅宿して夜すがらのものがたりに、ある夕此句を得たりと、

あか〳〵と日はつれなくも秋の山

北枝聞けるやう、まことに此句意は、今一二里の道をかゝへ、秋の野らはおもしろくべく日は又はやくかたぶかんとするに、霜枯たる禰に夕附日、遠山杳らくれかゝるなるはまばゆき峯の夕日といはむ。されど山といふ字すはり過て、翁の意からねばと云に、翁うなづき給て、さればこそ全城に北枝ありと名に高き其人也。我秋の風と案じたりこそりやこの秋の風は身にしむ夕の情を兼し、あか〳〵と日につれなくも入果てゝ、風ほう〳〵と身にあたる、爰に旅人の愛ならんや。もしはじめより風と

いはゞ、聞得る人なからんかと、しばらく山と斷し、是北枝子をしらざるの罪也。三神ゆるしおはしませと、それより斷金の交に及ぶ。

△翁行脚物がたり井藤の句

ある人おきなにものがたりせるは、貴坊は宗祇のあとを追、雲に別れ水に伴ひ、いづちを宿とさだめ給はず、行脚いづれの日かおかしかりし。翁ほゝゑみ給て、旅せぬ人はさこそおもはめ、行脚は苦樂を冀とす。けふははれて笠輕く、けふはしぐれて袖重き坐(綴)子の夜着・草の枕、ひきかはり移り行も、もとりてこそおかしけれ。奥の細道降つゞきて泥にとりつく杖を力に、曾良はつかれて行べくもあらず。我は笠じまをみんといふ。同行も又腹あしき事あり。況煤掃にゐどころをおはれ、あるは鼾をかきならしてなさけなき日もあるぞとよ。旅はやよひの末つかた卯月なかばこそ、けしき立ておほゆ。一とせ大和路に分入て、負へるものに道をつられ、永き日影をたどり暮し、なにがしの宿をからんとするに、むらがらす森にいそぎ、野山はいたう霞たる、畫によくも似たる哉とゆきあひたゝずむ。かなたの垣に藪藤のおぼつかなく咲かゝりたるをみて、

くたびれて宿かるころや藤の花

かくいふ句のうかみたる、我ながら二なくおぼゆ。これらのけしき、旅の榮花ともいはむ。

△翁古人の句評井いなづまの吟

秋のはじめ、暑さいやまさりて降かぬる雲の、晝はむらがり夜はこゝもりて、おそろしげなるに、稲妻のくだけちる夕暮がたに浴ミしてゆかたながら、物うちしき、椽の柱にもたれよりて、むつまじきどち古きをかたる。いなづまやくだけてもとの入所　よく人のしりたれば、そのころの名句ともいはん。されど發句のけしきをしらず。

談話味アリ　我今此ながめありとて、

いなづまや闇のかた行五位の聲

△翁去來が文通の答

又ある物がたりに、老ても春はまたるゝものから、師走のあはたゞしきに追るゝ身は、ことに指折て明るをいそぐ。春のおもしろきは、山里あるは又田舍にあり。一とせのはかりごとは鋤鍬にうつぶき、いとまなき身の、とし暮てより、まへふかく帶かたうしめて雪駄をならすもとはりぞかし。

　山里は萬歲おそし梅の花

去來へ此句をおくられし返事に、此句意二義に解すべくざふらふ。山ざとは風さむく、梅の盛にまんざいのきたらん、どちらもおそしとや、うけたまはらん。又山ざとの梅さへ過るに、万歲どのゝこぬ事よと京なつかしき詠や侍らん。翁この返事に、その事とはなくて、去年の水無月五条あたりを通りさぶらふに、あやしの軒に看板をかけて、はくらんの妙藥ありとしるす。伴ふどちおかしがりて、くわくらんの藥なるべしとあざ笑ゆまゝ、某答ゆは、はくらんやみが買ゆはんと申しき。翁ノ答味アリ

△翁近江行脚并路通入門

おきな、一とせ草津守山を過て松陰に行やすらふ。かたへをみれば、いろしろき乞食の草枕凉しげに、孤はれやかにけやりて、高麗(こま)の茶碗のいと古びたるに瓜の皮拾ひ入、やれし扇に蠅をひながら一ねぶりたのしめる也。あやしくて立どまり、さしより給へば、目をひらき又ふさぎ、鼾をもとのごとし。さはなにものゝはふれにたる、おして名をきかまほしく、目のさむるまで腰打かけ、

　晝兒に晝寐せふもの床の山

折からの吟も此時也。所は琵琶の海ちかく、比良のねおろし薰りくれば、なみ木の古葉こぼれかゝりて蟬の聲あたりをさらず。凉しと思ふほどに空たけたり。おのこ、ずと起あがり、何夢やみつらん膊を打つて、ひとりゑみゐたる、猶ゆかし。松風聞了テ午睡濃とは、さとれる人の口ずさびなるを、今此人をみる事よと、こゝろをきせられ、ちかく寄て、しかじかのあらましをとふ。おのこ、いとおかしがりて、君の寶を費すものは劒の下

に眼をふさぎ、親のたからを費すものは松原に袖を乞と。我其袖を乞もの也。只今出口の柳をくゞつて襟にひやりとさめたる夢は、鴉の糞にてありし物を、むかしを手枕にたのしむ身は、八珍の舌打より瓜の皮の蟻をはらつて朝夕無味の禪にほこる。御坊もしらざる所也と、白き歯をあらはして笑ふ。翁、荷へる晝筒をひらひて、このめしのいとしろく味とにすぐれたるも、人の食を乞へるは同じ。我も亦乞食也。たとへばやはらかなるしとねに夢み、こまかなるきぬに身をつゝむも、もとより我ものにあらずとしらば、この松がねも相おなじく、かつげる薦もひとしからん。只元をしるとしらざると、實に見ると假にみると、是を迷悟の二義ともいふ。おのこもし我にしたがはゞ、茶碗を旅籠屋の膳にかへ、こもをかり着の小袖にかへ、廓の夢を風雅にかへて、老の杖をたすけよや。樂又その中にあらん。おのこうなづひて翁にむかひ、その晝筒を給らんと、清水にひたして是をくらふ。首を叩て曰、誠に此飯五味を欺き、咽に甘露を通すがごとし。實雪の日は寒くこそと、むまきはむまきにきはまりたれば、けふより御坊のとばにそむかじ。さもあれむかし腰折をこのみ、みそひともじの數をもしる。御坊笑ひ給ふなとて、矢立を乞て扇にしるす。手つたなからずみえて、

露とみるうき世を旅のまゝならばいづこも草の枕ならまし

翁歎じて曰、我伊城につかへし時、洛の季吟がうた枕をたゝき、しきしまの道にいざなはれし、今は俳諧のみじかきに遊んで生涯の計とす。汝に路通の名を與へん。汝に我頭陀をかくす事なし。日も暮ぬ、しりへに來れと、それより師弟のあはれみふかく、しばらく蕉門の人なりしか。（路通絶交ノ事後に見へたり）

△翁小町の附句

倚白に物がたりありしは、うき世の果はみな小町なりと云附句、久しきよりその趣向ありて、むなしくおもひ入前句もなかりし。いつぞや正秀會の席にて、坂ひとつ見上て杖に物おもひ　と云前句あり。是にこそとおもひかへせば、まさしく小町の姿あれど句中の實をあらはす事

かたし。推敲味アリ　そのゝち撰集の思立に、さま〴〵に品かはりたる戀をして　と聞えたれば、うれしとばかりにその句を入る。これぞうき世のあだなるより百とせの姥に色をさましたる我家の寂（さび）といひ、俳中の敎ともいふ。若き二三子よく聞べしと、額うるはしかりしとなり。

△其角 野坡に句を問ふ

炭俵撰集の時、其角が、

　秋の空尾上の杉にはなれたり

と案じて野坡にむかひ、此句いかんかみるやと問。野坡曰、何ともいふべからず。只秋のはれたるけしき、空に一點の雲もなしと。其角喜んで卷頭に定む。

△義仲寺の法筵幷其角俠客（けふかく）に威を振ふ

其角、翁の終を見置き、初七日の法筵義仲寺に聚會す。大津の智月なさけある尼にて、路通が不興をふかくかなしみ、翁終焉ちかきころいろ〳〵と言葉をつくし、ゆるすのひととは得たれども、門人路通を疎んずれば此席に昇る事あたはず、寺の敷居も越がたくて智月・乙州をもて連中をなだむ。其角答けるは、路通が罪かろんずべからず。されど此愁時もとなり、碑前の燒香はゆるすべしとて、すげなう席にすゝめざれば、路通、智月がうしろに忍び、しほ〳〵と庭を過るに、會筵の徒四十余人いづれもつばきを吐てみむかず。路通憤をおさへかねて大津の俠客をかたらひ來り、此席を犯さんとす。其角文臺を躍（越）超て、十德の袖高くはさみまくり、手に短劒をぬひて俠客に立むかふ。支考・丈草たもとにすがれば、洒堂・正秀俠客をふせぐ。其角、聲胴より發してひゞき亂席のごく、我湖中に人となつて今は天下の城府に家居す。抑武城に日本橋あり、日本の人その橋を過ざるはなし。其橋を過るもの其角が名をしらざるはなし。やうやく大津壁の鼠穴に住んで、牛のよだれに命をつなぐさかやきの靑瓜ざね、厠に芽を出す二葉治郎、是を俳諧にはあばれといひ、剃かけにはあくたいと云。汝らさらずんば物みるべしと、いきほひ忠盛の子のごとし。俠客腕のふときをさす

り、我譽にのゝしつて去しとぞ。

△其角三井寺に登る二章

法筵事終て、正秀・洒堂等が亭に遊ぶ。ある夕大津の人〲にいざなはれて三井寺に參る事あり。瀨田の夕日かすかに殘つて、粟津は眞柴たく烟の中に朧〲と暮かゝる。さるは歸れる花をおしむかとみえて、此寺の晩鐘もなし。さゞ波は疊のごとく、うかめる鳥まなく立てこぎゆく舟のあとにかはり、四山落葉して遠きを極ム。煙-波何レノ處ニカ可レキ消レス愁ヲとうちずして、のぼり〲て山門に到。

　からびたる三井の二王や冬木立　其角

なにしをふ撞樓に登りて、

　凩やかはる〲に鐘つかむ

此二章世にひゞきて、芭蕉第二世とはさゝやきあへる。明る日正秀が亭に會す。人〲あつまりて、きのふの二章感にたへず、今宵の卷頭いづれにか定めん。其角是を聞て、義仲寺もあたり近し、我凩の吟においては翁もふたゝび目やひらき給はんといへり。

△支考還俗

支考ひとゝなり他にことなり、氣億(憶)は胸に刻めるごとく、工夫は一默の中にあり。身は俳諧の小技にありて、こゝろは靑雲の外にのぼる。此人ぞ蕉門の逸物也。はじめは許六に睦びふかく、笈日記撰せし比は、彥根の一卷夜光のごとく、天下の俳諧をてらさんなど、許六へ文通もありし也。後才を鬪つて隔る。されば老師のもとに衣鉢をかへし、我は還俗して遊ぶなりと、

　蓮の葉に小便すればお舍利かな　支考

と因果撥無の吟を殘ス。

△支考福壽草の花に觀ず

あるとしの春、福壽草をいけて左右に愛し、此花をみる。はじめ一輪光をはなつて後しほめば次の莖にひらき、その次又さかりをつぐ。支考つく〲觀想して、人間の子孫このごとく、我風流もかくのごとし。されば金剛の色をひらくとも、此花につぐ枝なくんば久しき愛物とはいふべからず。我俳諧はつぐ人もあるべし。文章は傳ふまじ。

さらば東花坊の名を側て其門人に變躰し、師道を廣むる手段あらば、その門人も又我にて注(註)をあらはし解を加へ、三世の變化を盡さんと、しきりに思立しと也。

△支考非亮へ文通并乙由の句評

支考、金城の非亮へ文通せるは、ことしはみのゝ山家にかくれ、東西二花の風流をためす。

芋よりも我名立らんけふの月

ちかづきの顔みなうつる月見かな

かく案じ置候所へ、いせの乙由より文通に、

やがて染る山を晒すやけふの月

と申來り候、かやうの手づま愚老も閉口に及候。まことに風雅はあやしきものにて、次第に理屈に沈淪するや、おほどやかなる吟一向おもひかけず候。定て金城の事に候。聞此句いせより申來候半と存候。

△支考八夕暮の第三を案

支考、八夕暮の集を撰むに、いづくも秋のはしに探幽

と云ワキに第三を案じ入、只月と云句なからましやと、朝にあふむき夕に俯し、食をたち席ワキにつけず。かくする事三日にして、

細ひにはあかぬと月の空に消て

しばらく此句に俳狂して玉を拾へるものゝごとし。又四句め心に入らずと、其夜も臥さず。あくる夕に、

水を一桶汲んでおかばや

凡句を案ずるといふは深く入てあさきをもとむ。下手は無用の工案に入て、王手飛車手を案ずるごとし。句作は捨てとる所あり。はやく取捨の用をしらんにはしかじ。

△支考童平をさしはさんでよしの山に登ル

支考、美濃の草菴にこもり、雪になり行梢をながめて、初雪の句を案じつゞけ、よしの山の一句を得たり。

哥書よりも軍書にかなしよしの山

支考時におもへらく、此吟雜にして、名所の法を違へず。我に一生の句なければ、是を以名句とせんに、天下誰か

舌をくたさむ。されどその場にあらざれば人の信を起す事かたしと、童平へ申遣しけるは、ことしの雪のおもしろさ、しきりによしの山をおもひ出ぬ。春立ば相伴ひ大和路に行脚せん。吾子のかんやいなやといふに、童平も是に同じ、春もきさらぎの末つかた、よしのゝ麓にさかりを待えて、杖をひいてちもとにかゝる。かくれ松は雪間のごく、一日千本の雲井を分て吉水院に登りみれば、南帝の昔今さらにして古戰のあとに涙をそゝぐ。日もこゝろほそく、木の間にかくれ、谷の水音むせぶがごとし。支考・童平立ならんで石上に尻うたけすれば、同者の聲〳〵人家を求め、花のいづこにふすらんとみゆ。支考時に頭をあけて、我天下の絶唱を得たり、聞べしや〳〵と、彼句を高らかに吟ず。童平眉をはつて曰、いみじきぬす人かな、よくも〳〵たぶらかして我を行脚の奴とはなせり。此吟全く孕句也。早くしらば來らじ物を。支考打ゑみて童平が背中をたゝき、あなかしこ、もらすべからずと口を掩て山をくだる。

△支考乙由が附句を奪ふ

園友を評者として支考・麥林會を催す。其夜は点をあらそひしに、

老僧の顔を佛師にみせて置く

といふ句あり。此句に印なからんやと、各きもを冷したるに、釋教のさしあひありと執筆その句を戻したれば、一座よろこびてきをひ出ぬ。すでに一おもて過行ほどに、

ぬぐふてとつた板はかゞみに

といふ前句いでぬ。支考聲をあげて、

老僧の顔を佛師にみせてをく

と付たり。麥林、いとむらいなりといへば、見龍が曰、（支考ガ別号）此句名句也。是吾子がもどりたる句なれば、さもしくも二たびせじ。しかれば一生のすたり句となる。我欲は句をおしむなり。

△惟然坊俳狂幷許六天狗集と題ス

惟然坊俳狂して東西に走り句をうたふ。雪には芭蕉の句

を作て鉢たゝきにうかれ、花には淨瑠璃のふしにかけて西行菴の門にたゝずむ。破れたる襞と笠に筑紫の風雨を凌ぎありきて、所〳〵紀行の吟あり。

水さつと立ばふわ〳〵ふうわふわ

水鳥やむかふの岸につういつい

長いぞや曾根の松風寒ひぞや

彥山の鼻はひこ〳〵小春かな

しぐれけりはしり入けり晴にけり

かくのごとき吟多し。持かへつて彥根にいたり、許六に紀行をあたへて曰、吾子此集に題すべしや。許六けうとくおもひながら、彥山の句を卷頭とせば天狗集と名づくべし。坊うれしがりて立出ぬ。そのゝちの事なりけむ。

名と利とのふたつみつよつ早梅花佛

梅花あかひはあかひはあかひはの

此二章はことさらに世に聞ふ。

△惟然坊むすめにあふ井時雨の吟

あるとき誓願寺の門にふして朝霜に雞皮居たるを、其子なるものあゆみかゝり、此ほどたづねあたらざりしが、こゝに狂ひおはするよとて、めでたき夜のものをかさね、すそをかこひ、枕をかゆ。坊こゝろよくあたゝまりて、日のあかきまでねつき、みかへりもせずぬけ出しが、我娘の嫁し居ける尾城へ入て、其町を過ければ、娘たもとにすがりてはなさず。このほどのおこたりをわび、おそろしきありさまをなげく。坊そのかほをつく〳〵まもり、硯おこせよといひて、

兩袖にたゞなにとなくしぐれかな

△奈良の梅月おもとが戀

奈良の京に住るける元梅がゆかりに、おさなき時はおもとゝよびて、あでやかに、いとらうたし。としたけ、なさけふかう人にもしのばるゝ比より、糸竹の道はこゝろしづかならずと、元梅に風雅を學び、翁の行脚をも見送りしが、おなじ所に軒をならべて梅月といへるおとこ、是も元梅にかしづきて、としいまだ若く、すきたる心もかしこう、女のあはれむべきがらにて、たがひにかくす事な

く行來し、あるはまがきを隔て物がたりす。いつしか心うつろひけれど、くちなしの色にだも出ず。うら〳〵と過るほどに秋になりにけり。女、

おもふ事星には遣らじ梶の文

と、ほ句して垣ごしに吹やりつゝ、はづかしうてかたぶきゐたり。おとこうれしくおもひながら、そのうらにものかきて女の心をぞためしける。

なら坂やこの梶の葉のうらとはむ

女すこしうらみたるさまにて、蕣のつぼみたるをひききり、短冊にそへてをくる。

きるからにこのあさがほを小指とも

おとこうなづきあひて、こなたにおもふかぎりをもかたり、ふかくなり行ほどに、うらむるわざのいできて、たがひにはかなくなりしともいひしか。

△丈草　去來　支考　野水　越人石山に會ス

五輩打つれて石山にのぼる。やよひのつもごりなれば、京の花ざかりはみな過にけり。山の櫻はまださかりにて、霞のたゝずまひもさだめなく、鳥むしも心してともに暮行春をおしむ。去來曰、俳諧はよしなきものかな、風景の奴となつて心上のほだし止時なし。さればそれもしらずこれもしらず手を拱て閑居する人には、はるかにおとりぬべきわざならん。丈草が曰、法すら捨べし。いかに況や非法をやと金剛經に說をかれて、捨よとは教也。森羅萬象みなまぼろし、爰に至て何をか捨ん。捨んとするものゝ又一物、捨んとするに一物なしと、捨たるは金剛の体也。我は捨たるうき身ならねば、念佛もよし、俳諧もよし。漕來る舟も觀念ならば、このさゞ波の春のけしき、ほだしともなれ、痼疾ともなれ。我は山石をたのしむ者也。野水・越人いかんかおもへる。兩人たゞうなづく。支考が曰、風雅は名聞の器也。我はうき世を相手にして俳諧の名に狂はん。

△杉風翁の喪をつとむ并支考と絶交

杉風は蕉門の子貢也。よくつかへよく敬て、翁の赴音(訃)を

聞とひとしく、我職の魚鳥をうり捨、門を閉、簾をおろし、中陰おごそかにつとめ、長慶寺に發句塚をいとなみ、其後支考と交をたつ。かれは芭蕉の名を傳て風雅を錢にす。あさましの坊也。もし東武に脚を入ば、兩脚をきり折らんと老を嘲て訇しとぞ。

△嵐雪以下四輩を評ス

嵐雪は其角にももれず、東武の人の程を知て、又蕉風をもうしなはざれば、よく（原本缺字）うへならん。

史邦・正秀よくつとめたり。

孤屋、野店（坡）がゝたに組じて幸に名を得たり。

曾良もしかなり。

△野坡流行

野坡は壽を全して、浪花に野坡ありといはれたりしが、西國の俳風に化し、しばらくは流行す。

△野坡盗人にあふ并發句

ある夜雪いたうふりて、おもての人音ふけゆくまゝに衾引かづきて臥たり。あかつきちかうなつて障子ひそまりあけ、盗人の入來る。娘おどろいて、たすけよや人〳〵よや〳〵と打なく。野坡おきあがりてぬす人にむかひ、我菴は青氈だもなし、されどめし一釜・よき茶一斤は持得たり。柴折くべあたゝまりて、人のしらざるを寶にかへ、あけがたをまたでいなば我にも罪なかるべしと、談話常のごとくなれば、盗人も打やはらいで、誠におもてより見つるとは、貧福金と瓦のごとし。さらばもてなしにあづからんと、ふくめんのまゝならびゐて、かず〳〵の物がたりす。中にとし老たるぬす人、机の上をかきさがし、句のかけるものを打廣けたるに、

草菴の急火をのがれ出て

我菴の櫻もわびし烟りさき　野坡

といふ句を見付、この火いつの事ぞや。野坡が曰、しか〳〵の比也。盗人手を打て、御坊に此發句させたるくせ

ものは、ちかき比刑せられし。火につけ水につけ發句して遊び給はゞ、今宵のあらましも何にならん。願くは今きかん。野坡が曰、苦樂をなぐさむを風人といふ。今宵の事ことにおかし。されどありのまゝに何に作らば、我は盗人の中宿也。只何事もしらぬなめりと、かくいふ事を書てあたふ。

垣くゞる雀ならなく雪のあと

△野坡早春の吟をしらる

野坡、ひとゝせ初春の吟に、

ほの／＼と烏くろむや窓の春

此句世に鳴事ありて、いみじきほまれとはなりぬ。

△李由笠塚を築ク

李由は許六とむつびふかく、翁行脚のたすけともなり、四梅廬の風流をよび笠塚の追福こゝろのまゝなり。いでやその笠は、よしのゝ行脚に狂筆せし檜木笠に櫻の吟也。

△許六癩を病ミ万子に見ユ

許六はじめ芭蕉庵にくだり、蕉門の奥儀を傳へ、文章は我ちからを加へて支考と撰集の沙汰に及ぶ、後病にかゝつて人に面せず。たま／＼面して風雅を問んとたづね來る風人あれば、屏風をしきりて俳談す。金城の万子馬を發して許六に謁せん事を願ふ。聞及ぶ万子、いかで屏風を隔んやとて、ふとんながらかきすへられ、あかき障子にさしむかふ。眉たゞれ落て豫讓ともいふべし。ひめもす蕉門の傳をかたり、めのわらはに酒をもらせ、万子にいつて曰、我此病あつてより、子に耻妻にはづ。けふ公にまみへて露もはぢず。是全公の德也。公俳諧のわざをならふ、支考を以師とすとも、此蕉門の傳における、公の師は又我也。我たべて公に投ぜんと、かはらけこぼるゝばかりに引うけ、三度して万子にあたふ。唇欠落て酒咽にもる。臭氣人にせまつてたまるべうもあらず。万子近くよつてかはらけをとり、よゝとのんで舌をならす、其色かぶろに酌とらせて朱雀の花に向ふがごとし。許六涙

をおさへ、まことに風雅の大丈夫なり、かゝる人になにかおしまん、我此病大にして餘命いく程もなしと、長別のことばを殘して入りぬ、

△万子翁にまみゆ　翁北枝に留別

万子は金城に鉢(蘇)をはんで、弓矢の中に風雅をたのしむ。その比翁金城に頭陀をおろし、久しく北枝が徒に遊ぶ。けふは犀川を見かへりて小松のかたに赴くと聞、万子むちうつて長亭を凌ぎ、滿稱任の驛にして翁の杖をすがりとゞめ、俳談夜をこめて別る。北枝はしばらく伴ひゆきて送別の涙を灑せば、翁もてる扇を出し、留別の吟を與ふ。よく人のしれる事也。扇は東行記にあり 北枝が後系図の寺に有

△酒堂梅の鎰の集をあづかる

酒堂はよく翁につかふ。あるとき翁、梅の鎰といふ集を作てみづから寫し、酒堂にあたへ、此封をしてほどくべからず、門人二十余輩の評をきはめ、百年後の俳諧を斎ズ、我家の未來記也。さるはこの梅の時を得て末世に櫻の鎰を合せ、梅に匂ひ櫻によそほひ、正風の花實大にとゝのはむと、あつく封じて酒堂が篋にひめ置り。翁の死後猶ふかく守り、生涯是をひらかざりしが、酒堂なくなりてより、むすめ愁にかしらおろし、山かげの菴にこもる。日月たつまゝに野坡の門人たりし洛の風之をたづね、南無天滿の大字のかけもの、そのほかおきなの眞跡にそへてかの篇も傳へおさむ。蕉門の徒此集をみざらむや。

△鬼貫貧にせまる并路通が事

難波の濁江に咽渇し、みじかきあしの葉陰にふして、床に蓬はたのしめども、一女のやしなひこゝろの外に、今は鬼貫の名をかくし、朝夕の烟をいとふ。昔は花洛に游(遊)吟して翁と書讀の遊せしも、その人東西に錫をならし、我はよしあしに身をひそめ、釜中の魚の水をしため、みなしろなして長物なければ、ともし火のかげに一通をしたゝめ、一貫一賤交をみるといふ。それもまづしきひがみといはん、きのふは門に車馬をつなぎ、けふは雀の巣にあらされ、餌にあたふべき一粒もなく、今日にせまり

ぬ間、只今自殺に及ぬ。なきあと人をさはがせじと、此一条を殘しぬ。御存知のむすめひとり、梟に木の實のきずもあらず、なさけある人すくひとつて、若菜にあさらひの水をくませ、雪には堀江の枯葦を折せて、薪水手のまゝに御遣給れかし、蓬生のひめとおとしめ給ふな、と書とゞめて稱名す。娘おどろいて父にすがり、やよやまて我死なん。いとけなうして母をみず、父のふところに人となれり。我きく、梟はあだをさしうらみを切る。此ゆへにこそ國をおさめ身を守る日の本の寶とや。いまだきかず、貧にせまり子をたすけ、たふとき父をころすものとは、よしなやな。我あれば父のほだしいくほどぞ。又刄に身をさくとも、父の貧・父の愁かさぬるの罪となる。ひたすら川たけのながれにしづみ、代をとつて孝にかへんと、よゝとないて聲をおしまず。時にあれたる戸をたゝき、頭陀おもく杖をひいて、久しく面せざる路通來る。親子あわて面をかへ、刄を箱におさめながら、むすめはかたへにまぎれ入ぬ。鬼貫その事をつゝむにしのびず、しかぐの事をかたれば、路通も雨のごとく涙落て、人の行衛のはかなきを歎じ、梟打かゐていへりけるは、死すべからず賣べからず、父をすくひ子をすくふ、我にひとつの術ありと、鬼貫が耳に口を合す、(此術尋察スベシ)そのゝち鬼貫幸を得て、にぎぐしくは世をされども、しれるものはうき名をうたひ、路通は似せ筆の上手といはれて、社中の憤をうけしとなり。

△涼兎變化に遇

涼兎は其性おほどかにして、俳諧は猶子を覺、いせに國友翁の名ある事はよく人のしる所也。中國に遊び北越にさすらふ。秋の比ならん、おもひ立て心づくしの山路にわけ入、雨一通り過て、日はまだ暮まじとおもふ空の、みね高うそめかゝり、雲の行來もよそよりはやきが心細き谷水をわたり、小笹原しめやかに合羽のすそけはらかして、ゆくぐあとをふりかへれば、大地をはなるゝ事三尺ばかり、長き丈余とみゆるものゝ、赤きいろ炎のごとく、風をおこし、さかさまに立て、うごくともなく飛ともなく、中にはなれてちかづき來る。涼兎たましゐきへて、

肌粟のごく、襟寒うなつて、呼んとするに聲をしらず。我あしに手をかけて一歩づゝ前にすゝむ。かくしてうしろに音あつて、水さつとなり、木かやうごき、物ひし／＼と聞ゆ。ふりかへればその物をみず。こゝちすこし我身にもどりて汗をしぼり、人家に入ば、あるじ凉兎がおもてをうたがふ。凉兎しか／＼の變化をかたる。あるじ打わらひて、世にいふばけ物にあらず、此山の蚯蚓也。凉兎猶おどろく。あるじかたりけるは、蚯蚓山の土をくらつて、としふれば土氣を起し空に飛。かならずやけふのごく雨はれし夕つかたは、いくつともなく出ありき、澤蟹を打つぶし、その蟹の腦を吸。西國に多き事なり。このみゝずはおそるべからず、澤蟹はおそるべし。故いかんとなれば、蟹の大さ三尺四尺、大にして丈餘にいたる。背には苔むし木草を生じ、目の光天を射る。はさみをあげ足をのべて人をくらふとまゝ多し。蚯蚓はかれを打つぶして、却て人をすくふなりと、あやしき物がたりに及べるとぞ。

△凉兎辭世

凉兎病の末つかた、いひをく事あはれなれば、門人枕に立より、さばかりの園友齋辭世の句なからんや、がてんがいてかとはげませば、凉兎目をひらき、高らかに、

がつてんじや其曉のほとゝぎす

かく吟じながら、あかつきのその杜宇　とやせんといふに、乙由かたはらにありて、爰に何をか輪廻せん、其曉のほとゝぎす　と打あげてとなへたれば、會北筆をとりてしるしぬ。

△麥林椿の落花に對し月花の姿情を悟ル

この麥林は川崎にむまれ、家とみ職めでたけれど、實をあつめ利をみる事をしらず。おさなきより眞榮法印に筆意を傳へ、風雅は芭蕉の門に遊んで、はじめはさびしみの閒をかんがみ、風雅は實を守にありと情より案じ入けるが、春の比わらはべの落ちる椿の花を拾ひ、糸につなぎ遊

ぶをみて俳諧の姿をさとり、一句の變化をしれるより、天下に名人の号は得たり。さればその談話に、落ちる椿多き中より白きは捨て赤きを拾ふ。乙由わらはべにたはぶれて、などや色ある花を愛さば白きとて捨べからず、赤きとてこのむべからず、赤きも白きも打あはせて紅白をたゝかはしめば、うつくしき色あらんと、何となくをしへしが、我風流もかくのごとく、柳櫻を交へてこそ春の錦とはよめる也。さらば月花は情にあらず、すがたにうきたるものなるはと、爰に發句のあつかひを轉ず。工夫味アリ

△支考 麥林と才をたゝかふ

支考、麥林の留主に來り、床の柱にたはぶれけるは、見龍發句麥林に及ばず、麥林附句見龍に及ばず、と大筆にしるして去りぬ。そのゝち見龍が來れるを待て麥林の曰、我發句貴坊に勝たるはあらためていふべからず、附句猶まされりと云。見龍やすからず思ひて、さらば我卽席に前句を出して附句を聞ん。麥林いとやすしと答ふ。見龍時に難ぜんと礫のごくいひかけたるその中に、

まつ黒に白紅（シロクレナヰ）にぐる/\と　見龍
　車の牛の雪に夕ばへ　乙由
いま一句所望といふに、
　宵やみに卷源平の旗　乙由
又一句聞んといふに、
　頭巾でしのぶ傾城の裾　乙由
見龍舌を卷ながら、
やれ/\とたすけたふあり怯（コハ）ふあり　見龍
　はしりかゝつて岸につまだつ　乙由
又、
珊瑚珠のわれて飛ゝだをふしんがり　見龍
　門から逃る鰒（フク）の億（臆）病　乙由
いづれも前句の息をつきあへねば、見龍口をとぢて、見龍發句麥林に及ばず、見龍附句麥林におよばず、と筆を加へて歸しとぞ。

洛東にも倫あり、口を閉て風雅を說すとて、又浪花にある事ひさし。風雅は無盡太子と稱。秋もむら鳥のわたる比なるべし。龍安寺のいづみ（二字缺）び出るまゝに、九月十五日野山のけしきをふみわくるとて、かのも倫と道を同ふしつゝ、きぬがさ山のもとに古を語。倫稿を出し、かれは武の俳が述せるもの也。一卷の文章、擲に金の聲あり、二条わたりの書肆寛次なるもの予に跋せよと責。我はいちくらに譜を賣事せちなり。ことばを練にいとまあらず。公は意を柔管に托する人歟。風雅は同志のために說べし、俳がために跋せずんば無盡も亦何のやくかは。句章のしらべ染書の筆意、和漢三千の里を隔じと難じて、押付に後序のぬしとはなしぬ。

辛未九月

浪花洛橋

［洛橋］

京都寺町二條上ル
井筒屋庄兵衛板

誹諧世説（はいかいせせつ）

五卷

闌更著

今はむかし、はたとせあまりさきならん。加の金城を去事四里ばかりにして、養老年中にひらけし湯涌といへる温泉に遊びけるに、山深ふして樹々しげり、郭公には富たる所ながら、五月雨ふりつゞき、いとつれ〴〵なるまゝ、北枝叟の書のこせるふみのはし、希因先師に聞つたへしことなど書集めて、正風人物誌と題号しけるに、門人誰かれ世にひろくせん事をつけ來りけれども、聊か此名のさはることのありてうち捨置けるに、仲叔が含蕟・彥重が事佛などのおもむきなきにしもあらざりければ、此たび俳諧世說と号して、頻に梓にちりばめん事を乞ふ人あり。われもとより忘れたるごとくなりければ他の心にまかせ、洛東山の蝸室におゐて、天明巳の春雨しづかなる日、闌更はしがきす。

誹諧世說卷之一

目錄

誹諧世説 巻之一

芭蕉翁風雅の志を示説

芭蕉翁元祿行脚の終ならん。金城にしばらく杖を休め給へる時、小春亭にて一夜會合ありしに、その席の饗應、山海の珍物をつらね、善美をつくしたるもふけなりし、其終に後會の事を約しけるに翁曰、こよひのもてなし、心づかひの程はいふべくもあらず、されど恨らくは大名の御成のごとくにして、こゝに風雅のさびなしといはんか。我は世を浮草のよるべ定めぬたぐひにして、あるは艸深き野邊に草枕の夢を結び、あるは茂りたる木の下に一むらの雨をしのぐの外、浮世に望さらになし。況やかゝる珍物厚味、啻世をさくるものゝ本意ならんや。もしかさねて我と交を結ばんと思ひ給はゞ、食事の類をひたすらはぶきたまひ、もし飢ば我より乞なん。かへすがへす此旨をよく守りて、風雅のさびを重んじ給ふべしと申されたり。其次は淺の川下なる一草庵にて會席あり。人ゝ前の誡に耻おそれて、其夜はやうやく煎茶の下くゆらすばかり、器とるべきものは何にても出さず。やゝ更行まゝに、翁曰、席もはや闌なれば、人々の腹空かるべし。冷飯あらば鉢ながら出さるべしとありければ、主人いとやすき事なりと云つゝ、手づから鉢を抱きて來り、其もふけの心ゆかぬを謝するに、翁ほゝゑみながら、諸禮停止は風雅の舊制なり。何の謝する事やあらん、皆々近ふ圓居し給へとて、あたりの茶わんのやうの物取あつめ、手づから酌子とりして茶漬一二椀さらさらと打したゝめ、風雅はかくこそあらまほしけれ。すべて酒食の肴に隙を費して誹諧の味をわするは、遊里戯場の物好にして、風雅の席には無下なりと云べしと示し申されける。金城の人ゝ此詞を感じ、それよりしてはおのづから奢を戒め、風雅に粉骨を致す事に成て、後に至りても、北枝叟・萬柳舍のごとき、諸國に名高く呼れたる人の出來し事も、いはゞかゝる教戒を世ゝによく守りぬる故にこそ。是ひとへに翁の訓誨のまめやかなるによりて、金城の人

ゝ初をつゝしむ事をよく辨へ、今の世までもかたりつたへて、終をよくするの基とはなりけらし。

白露にさびしき味を忘るゝな　芭蕉

蕉翁盜人に教化の說

ばせを翁、あるとき上川かた行脚に出給ひ、近州日野山のほとりを通り給へるに、雨そぼふり日もはや暮近く、やどり求むべき家居もなければそこはかとなくたどり行給ふに、たま〳〵市より歸る商人の一人ふたり打つれたるを見付て、一やどりの事など問給ふに、これより一里程行てしか〳〵といふ里あり、是にて一夜をあかし給へと懇におしへて別れぬ。いと嬉しくて草鞋の緒しめ直し、竹の細枝をたのみに、翁一ト足づゝすゝみ給ふ内に反影もはや深林に沒して、小倉の山もたどるまじき程に、いと黑うくれて行道さへ見えわかざるに、かたへの木影より出來る者あり。あなおそろしと打見やり給ふに、其姿人目忍ぶべき深き笠をかぶり、長き物腰によこたへたるおのこ、三人迄あらはれ出たり。是こそ世に聞へし旅人の物を掠て、さゝの一夜を送る白波といふものにこそと、疲たる足をはやめ行過給ふに、彼男等聲をあらゝげいふやう、御坊、我〻がありさま名のらずとも知り給はん、いで其負ひたるもの、着たるもの、のこらず捨て給はらんや、とても僻事して世をわたる我〻、沙門なりとて助くべき樣なしと、勢ひ猛にのゝしりつゝ、やがて左右に立はさみて、其いらへを待風情、髭のかゝり眼のうちまで、いとおそろしきゐせものなり。翁はすこしも驚き給はず。我は世を捨舟のよるべさだめぬ抖擻の境界、ある時は飧の飯に腹をふくらし、無きときは蔬一枚のわび寢を樂しむ。もとより身にまとひし物をはじめ、杖・草鞋いさゝかのものまで、皆人の施すにまかせて是を用るのみ。只今日の無事をこそ樂め、浮世はすべてあすか川の、あすのものたくはへたる坊主にはあらず。況ゝ金銀の華やか成もの、懐におさめたる修行者にはあらぬを、もの持たる旅人と思へるこそ、かへす〴〵も麁相なれ。されど汝らも、いひかゝりたる事なれば、いで望みに任すべしとて、先負たる風呂敷包を投出し給ふを、かのゐせ者ども

打たかりて、引ほどき見るに、草稿の反故の外塵一つ見へず。猶紙中をかきさがし、風呂敷を打振ひ見れども、是ぞと思ふべきものは何にてもなし。盗人どももあきれ果て、扨〻なにもなき貧僧かなと、案に相違の顔色にて、互に目と目を見合せて居たり。翁重ねての給はく、我が身の上の調度、何にてもほしき物あらばのぞみにまかすべしと有けるに、盗人共は猶こりずまの塩からき聲して、その着たるもの脱ゆへといふ。翁はゞかる色なく、上下の服衣ともにぬぎ與へて、赤裸して立給ふ。盗人ども此衣服をとりあげしに、いかゞおもひけるにや、互にさゝやきあひて、袈裟衣と肌つきとを返し、上着一ツ取おさめ、もはや用なしとくとく行ゆへと既に別れんとする袖をひかへて、因果歴然無常迅速の事など、ねんごろにおしへ給ふに、盗人共少しは耻らひたる氣しきながら、愚はます〳〵愚なりとやらん、たゞ己が不善を掩はんと聲を上て、左様の心よはき事を感じては一日も此業ならず。我もあしきとはしりながら、外に覺えたるいとなみなければ、いかゞはせんと、只あざ笑ふて居たるのみ。誠に一休禪師の山だちに逢給ふとき、

さきの世にかりて返すか今借すかいつか一度は報ひ來ぬべし

とロずさみ給ふもかゝる風情にや。翁は此ことばにも猶あはれみを加へ、たとひ馬耳の東風たりとも又因縁にもなるべきやと



打かへし／＼くれ／＼教導有けれど、下愚のうつらざるならひ、盗人共はそろ／＼と跡じさりして、終にはいづちともなく逃失ぬ。翁はそれより杖をはやめて、人里とおぼしき方に成にければ、夜寒をさそふ砧の音のころ／＼と聞へたるに、いとゞ肌薄に成たる我身を感じて、

剃れたる身には砧のひゞきかな　芭蕉

かく聞へしも此時の事なりとぞ。

蕉翁義仲寺雜魚寢の說

はせを翁・野坡など湖南の義仲寺にて雜魚寢ありし其つとめては、四月朔日なり。かくて外面に紙張をうりありく



聲聞ゆ。翁、野坡に對していはく。あの賣聲を聞ゆへ、かれが類ひを世の行過ものといふべし。いかんとなれば、いまだ夜な／＼に春寒の殘りありて郭公も鳴かず、まして蚊の聲を聞べき時ならんや、それを人に先せんとて、かゝるもの賣ありきたりとて、誰人か是を求むべき、價を貯へたるものゝ用ゆべき調度にあらず。實に朝三暮四の紛れものにして、つまる所は靜に賣出したるものと同じかるべく、無益の借上ならんかしとの給ひけるとぞ。是等は風雅に第一の誡辭といふべく、たふとみ恐るべき金言ならんかし。今の世の風人、其志はさらにして、其句を求むるにも、只人の上を行かんと心をくだき、果は心力盡て退屈

の心を生ずるものあり。何ぞかの紙張實に耻ざるや。

万子翁餞別の說

はせを翁北國行脚の時、金城の万子遲くして、別れの對面に後れたる事を歎き給ひて翁のあとをしたひて裸馬に打乘り追かけられしに、松任にて追付たり。扨對面ありて馬のはなむけとて、白衣一つ、金三兩を取出さる。翁の曰、我は一簞一瓢を樂しみて、陋庵を家とするの身なり。錦繡帛の名聞に苦しまんや、まして金銀は大盜を導くの媒にして、捨人の身には有て益なしとて受給はず。万子もさまぐ\に與ひ給へども終にゆるし給はず。こゝにおひて翁の風流をいよく\感じ申されしとぞ。



能順蕉翁の命終を譽る說

芭蕉翁五十餘歲にて世をさり給ひしを、加賀小松の連歌師能順聞て云、よき死時なり。世の騷人を見るに、年既六十七十になりぬれば、何としても何をふかく案じ入る事もなりがたしと見えて、古人も極老の作者は、多く風流の劣りたるやうに見ゆる。然らば風雅に遊ぶものは、年五十の前後をかぎりといふべし。翁の身まかり申されし年の程、我もうら山しく覺え侍ると申されける。誠に一道に堪能の者の志は、斗筲の人の間然すべきにあらずといふべし。

門人蕉翁に辭世を尋る說

芭蕉翁終焉の砌に、枕元によりつどひたる人く\、辭世

の時を尋ね申せしに、翁莞爾として曰、吾が一生に口ずさみたる事は皆辭世なり。人〳〵はいかに思ひけるや、さらば今更辭世とて外の事いふべくもあらずと答へ申されけるとぞ。誠に蕉門血脈相傳の教訓といふべきもの歟。

蕉翁賀州全昌寺一宿の說

芭蕉翁の奥の細道のうち加州大聖寺の全昌寺といふ寺にて、

庭掃て出るや寺にちる柳

此句は殊に故ある句なり。其前夜曾良此寺に一宿す。故に曾良を稱してかくは申されぬと覺ゆ。世說德行篇に、郭林宗は方正の士にして、逆旅にやどる事あれば、かならず其亭を掃除して過行。其跡に來りたる旅人、此ありさまを見て、則夜前郭林宗がやどりたる事を知るといへり。翁此故事をとりて、ちる柳に對して、夜前曾良がやどりたる跡を感慨ありしと。是を趣向にとりたる句なるべし。俗中の說に、曾良は山中にて翁の氣にたがひ、それより引わかれたるなどいふ者あれど、翁の此句意、其外互に餞別の句などをもて考ふれば、かつてそむきたる事なし。なをくわしき事は細道の書にゆづりて略す。

若綠集に、翁塚にて

おがみふして紅しぼる汗のごひ　曾良

蕉翁內藤露沾誹諧の說

はせを翁、ある時內藤露沾君の御元へ召れて誹諧ありけり。主君はもとより烟草を嫌ひ給へり。故に翁も其席にてはたばこを吞給はず。其角も其席に侍りぬ。歸りて翁に問て云、夫滑稽は洒落風流をもて本意とす。しからば威權にも恂るべからず、高位にも屈すべからず。さるを今日內藤君の御席にて烟草を吞給はざりしは、諂に似たりといはんか。小弟是に惑ひぬと難ず。翁莞爾として曰、此疑は誹諧を何のためにするといふ事を辨へざる故なり。夫誹諧は至て小技なりといへども、よく用る時は虎となるの一道なり。しからば風流のうちにも、豈禮節を忘るべきや。法を破るをもて洒落とするは桀紂の徒なり。繁を省て風流と覺えたるは頑愚の俗なり。德行の君子、

六上隠者のよしとする所にはあらず。今日内藤君の雅筵に烟草を禁じたるは、諂にはあらず、禮なり。いかんとなれば、我一介の乞丐躰なる捨坊主といへども、風雅の道に遊び、麈尾を握て二三子の上にたつ。是をもて二三子我に宗匠の假名をゆるす。此故に露沾君の膝近く侍りて談笑をなす事を蒙る。しからば貴人の御側にて其忌嫌ひ給ふ事をなすは、其人を蔑にするものにして、趙高が鹿をもて馬にするの罪を免かれず。故に我が烟草を呑ざるは禮なり。孔子のことばにも、しば〳〵禮を行者は、世人諂りと云との給へり。嗚呼古今の習俗なる哉とて歎息し給ふ。其角大に愧て背汗して退ぬと。今思ふに、禮と諂と紛れ安く、高邁と我儘と彷彿たり。修行者是をよくわきまへて、氣象は高上なるべく、擧止は失禮を顧べし。翁の細道行脚に、湯殿山禪定の時の紙縷袈裟今に殘りて播州増位山の風羅堂にあり。是いさゝかのものにて、殊に翁は佛頂禪師に嗣法の大居士なり。しかれば、何ぞかゝる細華(道)にかゝはり給はん。然るを其時の小物まで捨もやらず、持あるき給ふは、其時に應じ其俗に隨ひて其禮節を忘れ給はざるの至り、あふぎてもなをあまり有高師にして、其徳いよ〳〵かたく愈高き事を尊むべし。

万子蕉翁に初て對面の説

芭蕉翁元祿の頃北國行脚の時、万子はじめて對面ありし時、万子曰、翁は諸國に門人みち〳〵て、其道の融通は事足りぬ。さらば我は方外の友と成て、あまねく誹諧を守護すべしといへり。翁も是をうなづき給ふとなん。其ことばのあやまたず、終に北枝・秋の坊が窮急を救ひ、あるは諸國の行脚のあるじと成て、金城の騒人を遊ばしめ、此道のおもし人と成給ふとぞ。されば蓮二法師も万子の事を稱して、我友には恐れありと獅子物狂に書るも、かゝる風雅の深切を稱美したればなり。又蓮二房が本朝文鑑にも、翁の友に万子・素堂ある事をしるせり。世の人、万子は蕉翁の門人、十哲の下にして、道を許六・蓮二より傳へたるなど覺へたるものあり。大なる誤りなり。右に記せるごとく、翁の友とし給へる事古書に明らかなり。

岩踏て一目〳〵のさくら哉　万子

誹諧世說巻之二

目録

誹諧世說　巻之二

万子蕉翁に書を乞說

芭蕉翁金城逗留の内、連中發句短冊など認めもらひたるに、万子は其事なく、只南無當來佛の五字を書てもらひ、閑窓本尊となし侍る。げにや我は翁の友とならんと申されける氣象のほど、此一隅を擧てしるべきとにこそ。

丈艸蕉翁の墓に詣說

丈艸は芭蕉翁の高弟にして、其身は三衣一鉢のもうけに、塵の浮世をいとひたる風流の隱者なり。翁の生前にもまして志厚く、みやづかへせし人なり。故に翁の滅後はなをさら、子貢が冢上に廬するが如く、其面影をしたひ申されけるとぞ。有時翁の墓に詣て、

かげろふや塚より外に住ばかり　丈艸

かくは歎き申されけるとぞ。故に此後は菴中に深く篭り

居て、誹諧の外は世上の交りをたちておはしける。あるとき其連中の申けるは、いかにとて誹諧の席ならずとも、又二三子にも交りて、いにしへよりのおかしき物がたりをも聞させ給へと申けるに、丈艸答て曰、其事なり。翁滅後は、世上の風流絶たりといふべし。しからば二三子に交りても無用の事なり。されど誹諧斗は折〳〵世上へ交らざれば、おのづから流行におくれて、老の身は塩からく成ものなり。故に誹諧の時はおの〳〵に交り申なり。其外は各を便りとして何の用なしとて、一生外の交りを絶ておはしけるとぞ。道に執心の至り、さてこそ我門に丈艸・去來有と、翁も頼母しき事に思ひ給ひけるも、かゝる事のあるゆへにこそ。

翁病中看病人に句を望説

芭蕉翁難波の病床にやみ疲れ給ふ時、看病の人〳〵に發句を望み給ひて曰、今日よりして二三子の句は、我が死後の作なりと思ふべし。故に一字の相談を加ふまじ。皆〳〵其心得にて考ゆへとの給ひける故、人〳〵打かたむきて、粉骨をつくしけるうち、丈艸の句に、

うづくまる藥鑵の下の寒さ哉　丈艸

此句ばかり出來たりと翁の稱美ありける。去來是を聞て、誠にかゝる時は山海の珍奇を求めず、只ありの所にて其誠つくべきなりと、こゝに風雅の奥義を察して、かへす〳〵も丈艸が作をうらやみ、文にもあらわし人にも語りけるとぞ。蕉門に丈艸・去來有事は、和哥に人丸・赤人あるがごとく、いづれ上下をわきがたき作者なれども、かやうに偏執なく、互にしたしみ交りたる事、道に堪能のしるし、只人のおよぶまじき風流のふるまひなるべし。又あるとき、

有明にふり向がたき寒さかな　去來

おゝ〳〵といへどたゝくや雪の門　仝

其角嵐雪が菊の句歎息の説

嵐雪、ある年の重陽に、

黄菊白菊その外の名はなくも哉　嵐雪

といふ句をしたり。其角ふかく是を感じて云、我一生此

句に及ぶと思ひもよらずと。それよりして後、其角に菊の發句を乞ものあれば、翁の

白きくや目にたてゝ見る塵もなし。

の句あるは嵐雪がこの句を書て、其角書としたゝめて遣はし、我は一向に菊の發句せざりしとなり。則其しるしは、社中の倚黎亭所持の則譽が書に、其角が、翁のしら菊の句をもて讃したる有き。近き頃の回祿に灰塵となりしは惜しむべきに堪たり。いにしへの人はかく迄道に執心深かりける故にこそ、其時其世に上手の名をとりたるもの折〱にむなしからず。今はかゝる事にも我は顏の人多きは、風流のいにしへに下りたるしるしならんと、かへす〱も歎かしき事にあらずや。まして世には祝融神の災にて、古人の書を失ふ事すくなからず。金城の塩屋何がしがもとに蕉翁眞蹟の



旅日記ありて、其文の小笈の銘に、暮柳舍の筆して

此翁塩屋に宿すしぐれかな

と其しるしを残されたれども、是もさきの年火災にかゝりて、今は形さへ残らず侍る。されど暮柳舍こゝろざし厚く、是をうつさせて今に我が函底におさむ。世にいでし笈の小文は、乙州、翁の大和記行のところのみ梓行せり。もとより本書も乙州がすへより加賀へ傳ふ。

或人其角に巻の点を乞說

ある人其角が方へ点取の一巻を遣はすに、其巻甚初心にして、よき点すべきにもあらず。其角その巻を一ぺんさら〱と見て、使に返していふやう、此巻はあまり初心の事なれば、我が附墨を勞するに及ばず、連中の先輩に点を乞べしと云り。使も

是非なく其卷をうけ取、扨点料も返したびてんやといひけるに、其角が云、点料は見賃におさめ置なりとて、返さざりけるとぞ。されど其角が平生風流なる事を人皆知りけるゆへ、かゝる事をなせども、誰あつて貪れりといふ人もなく、もとより風雅に私なき其角、何を以て小錢をむさぼらんや。今の宗匠顔する者の内に、其德もなく其志もいやしふして、みだりに古人の洒落に擬せんとするものもあり。甚しきものは、風雅を賣物にして短冊に價を定め、点料に甲乙を定むるに至る。悲しき哉。其角がごときは其志あつて其德あり。故に貪も又風流なり。二三子よく戒めつゝしみて、無欲無垢の風雅人と成るべし。穴賢塵俗におとりたる誹諧賣となる事なかれ。いにしへ貞德老人の連中、老人の高点すくなき事をかこちたるに、老人

三絃の糸より細き誹諧に
点とろ〳〵といふぞおかしき

と申されけるを連中の返しに、

三絃の糸より細き誹諧に
点ちんとろといふぞおかしき

と云かへして笑ひたりとぞ。かゝる事は只おかしきたとへのみにいひ出して、さらに貪りとおもふ人なし。是天よりおもはするところにして、平生のきよければなり。いにしへより誹諧をもて口を糊するものゝ点料を受る事は、則儒師の束脩佛家の布施に同じく、是なくてなんぞ口腹を助けんや。故にむかしの隱者桑門たりとも、外の業なく、誹諧のみをもて今日の業とするものゝ、料を定めて点を出すも、又風流家の一律なり。されど其人により其品にしたがひ、料の貴賤をわかち、或は句を賣筆を商ふの輩、他門の風流者にもいまだかつて聞ざる所なり。風流者の諸國を遊行する事は是又修行の一事なり。故に蕉翁も東海道の一筋をも見ざらんは、風雅の情にうとからんとは戒め置給へり。されば其行脚するものは、さびに居てしをりを行ふは勿論にして、蜑の苫屋の蚤虱に短夜をあかしかね、朝とく出て磯づたひし、蛸壺の底さしのぞき、小鯛さす柳がもとにかひねむりて、しばらくの閑を樂しむなど、皆風流の至りなるを、今時の心下

りたる誹諧師は、さまでの風情を志すにはあらで、たとへば秋田・酒田の茶賣、京・奈良の呉服賣の世界を胸にたゝみ込たる顔つきして、大格子の廣袖長脇指よこたへ、定紋付の胸あてしたる供つれて津ゝ浦ゝを走り廻り、一生名利につかはれて金銀を貪り明すたぐひにひとしく、只得がたき寶を求めんがために國ゝ所ゝを廻り、蝦夷切の頭陀袋・笠紐など祇園會のつけもの見るごとき出立して、あなたこなたの旦那を廻り、今年の歳旦連中はこぞに何程增りたりなど、口にもいひ心にもよろこび、撰集をすゝめ板料を貪り、是は虚に居て實に遊ぶなりと、風雅の紛れものと成り、人には內心如夜叉とそしられても、蛙に水の耳にもかけず、只風人の襟もとをのみ伺ひ、頭は薬門身は商人、足手は行脚と見えながら、鵺にもあらず人にもあらず。是や俳諧に第一の傳受ものと名付んも又むべならずや。

眠る蝶よる〱何をするとぞ　其角

嵐雪が妻猫を愛する説

嵐雪が妻、からねこのかたち能を愛して、うつくしきぶとんをしかせ、喰ものも常ならぬ器に入て、朝夕ひざもとをはなさざりけるに、門人ともどちなどにもうるさく思ふ人もあらんと、嵐雪折〱は、獸を愛するにも程あるべき事なり。人にもまさりたる敷物・器。喰物とても、忌べき日にも、猫にはなま肴を喰するなど、よからぬ事とつぶやきけれども、妻しのびても是をあらためざりけり。さてある日妻のさとへ行けるに、留主の內、そとへ出ざるやうに、かの猫をつなぎて例のふとんのうへに寢させて、肴など多く喰せて、くれ〱綱ゆるさざるやうに賴み置て出行ぬ。嵐雪、かのねこをいづくへなりとも遣はし、妻をたばかりて猫をかふ事をやめんと思ひ、かねて約しおける所有ければ、遠き道をへだて、人して遣はしける。つま日暮てかへり、先猫を尋ぬるに見へず。ねこはいづくへ行侍るとたづねければ、さればそこの跡をおひけるにや、しきりになき、綱を切斗にさはぎ、毛もぬけくび

もしまる程なりける故、あまりくるしからんと思ひ、綱をゆるしてさかななどあてけれども、食ものもくはで只うろ／＼とたづぬるけしきにて、門口・せど口・二階など行ツ戻りつしけるが、夫より外へ出侍るにや、近隣を尋ぬれ共今に見得ずといふ。妻泣さけびて、行まじき方迄も尋ねけれども、歸らずして三日四日過ければ、妻袂をしほりながら、

猫の妻いかなる
君のうばひ行　妻

かくいひてこゝちあしく成り侍りければ、つまの友とする隣家の内室、是も猫をすきけるが、嵐雪がはかりて他所へ遣しける事を聞出し、ひそかに妻につげ、無事にて居侍るなり、必心を痛み給ふ事なかれ、我が知らせしとなく、何町何かたへ取かへしにつかわし給へとかたりければ、妻かゝる事の有べきや、我おつと、猫を愛するとをにくみもうされけるが、扨はわれをはかりてのわざなるかと、さま／＼恨みいどみ合ける。嵐雪もあらはれたるうへは是非なく、實に汝をはかりて遣はしたる也。常ゝいふごとく、餘り他に異なる愛し様なり、甚だ悪き事也、かさねて我云如くなさずば取返すまじと、さま／＼あらそひけるに隣家門人などいろ／＼いひて妻に佗させて嵐雪が心をやはらげ、猫も取返し何事なく成けるに、

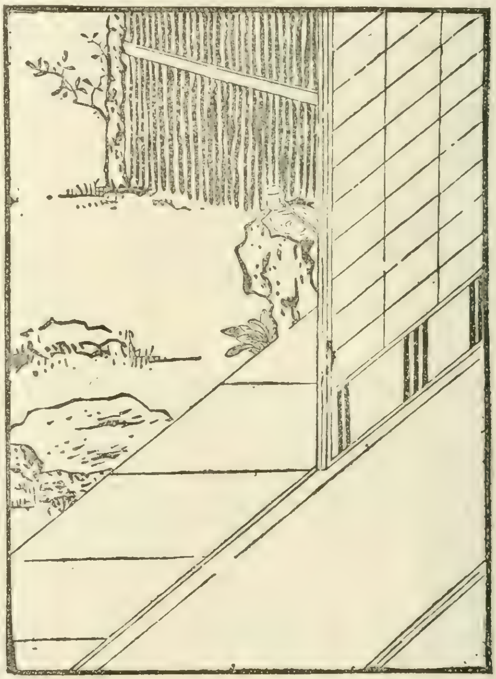


むつきはじめの
めをさいさかひ
を人／＼に笑われて、

よろこぶを見よや
初音の玉はゝ木　嵐雪

惟然坊布を得る説

惟然坊は音に聞えし誹狂者なり。西國行脚の時ならん。播州姫路の方にしる人ありて立寄侍りけるもとより狂僧の習ひ裾を結び肩をつなぎたる單物を身にまとへり。あるじ是をあはれみて、布一疋取出てあたへけり。惟然坊是を得て柱杖にかけていでゆき、旅店に至りていふやう、此布にて、かたびら一ツ縫て給はれ、殘りは内義に與へんと云ける故、あるじ悦び取いそぎ縫たてゝあたへぬ。やがて古衣をぬぎ捨て新衣に着かへ出けるが、一二町も行ぬらんと思ふころ、立かへりていふやう、何としても着馴たるものは心能物なり、新しきものはどこやら着心あしければ、元の古衣に着かへん爲にかへりたりとて、やがてかのかたびらを脫、もとの垢付たるものに着かへ、跡をもかへり見ず出行ぬこゝにおひて主人もはじめて道人なる事を感じ、此物語りしてとふとみけるとぞ。



澤水に米ほうばらん杜若　惟然

誹諧世説巻之三

目録

誹諧世説 巻之三

惟然坊婚家に一宿の説

惟然坊美濃の國を經廻せし時、ある誹士のもとにやどる、其あるじ近き比妻をむかへて、いまだ座敷のかざりをおさめず、振袖の小袖あまた衣桁にかけならべおきたり。朝とく家なる下女座敷へ行て見るに、客僧はとく出行たりと見えて、やり戸あけはなちたる儘にてあるに、衣桁にかけたる娘の小袖一ツ失たり。さは此坊のぬすみたるものにこそと、走り入てあるじにかくと告るに、あるじの曰、惟然坊は中〳〵盗などすべき小器の僧にあらず。しかし洒落の道人なれば朝の寒を凌がんために、此小袖を着て往まじきものにもあらず、されば夜前の物がたりに、明日はそこ〳〵の風士のかたに行かんなどきこへぬれば、先彼かたへおとづれして見んと、やがて坊が往べきしるべのかたへ使もて尋つかわしけるに、惟然坊其家

に有て答へけるは、其事なり、今朝とく立出たるに、野風の身にしみて甚寒かりし故に、立歸りて衣桁に有し小袖をひとつとり、上に覆ひ來れり。元より小袖なる事はしりたれども、男女の服のわかちは覺へず、定て是にてやあらんと、彼振袖したる伊達摸樣の小袖を取出て、其使に返し侍りけるとぞ。誠に人我ともに忘れたる風流の隱者といふべし。

惟然坊誹諧の意を語說

惟然坊播州姫路に假住しておはせし頃、久しく誹諧の席へ出ず、打こもりて居侍りけるを、ある人云、此程は何とて誹諧の交りし給はざる、今宵誰が亭にて誹諧あり、いざゝせ給へかしとすゝめければ、坊打わらひて云、おかしき事をいふ人かな。我は誹諧師なり。されば日出て起き、日入て休ふ。喫茶・飧飯・行住・座臥ともに皆誹諧なり。それを外に誹諧せよとは何事ぞや。左樣の事は誹諧と常と替りたる人にこそすゝむべき業なれといわれければ、其人且耻ぢかつ歎じてかへりけるとぞ。

秋の坊幻住菴に宿する說

秋の坊は金城に名高き風流徳化の大隱者也。祖翁湖南の現(幻)住菴におはせし時。我宿は蚊の小さきを馳走なり。との給ひて、一夜二夜かり寢せしに、翁隱遁者の身のうへの事、無常迅速の戒など、いと懇に物語あり。禁まで見送り給ひて、

やがて死ぬけしきは見へず蟬の聲　芭蕉

と一句の教誨ありしも此時のことにこそ。

蕉翁金城集會の說

金城にて北枝と秋の坊とは、ことさらに睦まじきあまりに、獨鈷鎌首のあらそひ絕ず、おのづから中あしきやうにも見へ侍るに、祖翁細道行脚のとき、金城にしばらく杖を休め給ひ、北枝などにも對面ありしに、例の中あしければ、此事を北枝より秋の坊へ露ばかりも告ず。しばらくして秋の坊此事を聞出し、いそぎ蕉翁のやどりへまかりて、對面を遂けれども、猶北枝が告ざる事を甚だ憤

りにくみて、北枝・秋の坊・曾良など翁もろともに會したる席にても、其終日は北枝とは一向物いわで有けるを、翁もおかしがり給ひて、坊が氣象を稱し給ひけるとぞ。

秋の坊命終の説

秋の坊の命終は正月四日なりしとぞ。其日友とせし李東といふ者、坊の庵に訪ひ來り、例に心安さの儘、匍匐して語り逢ふ内に、坊曰、我臍つくれり、聞べしと有て、

正月四日よろづ此世を去によし　秋坊

とロずさむかと見へしが、さしうつむきて息絕へぬ。李東驚あへる中にも、此坊のつね〲自己を忘れたるふるまひにたがはず、感涙別涙取まぜながら、

いねつむと見せて失けり秋の坊　李東

と取あへぬ一句を手向て、かたのごとく葬りけるとぞ。

正月四日よろづ此世の句原莞にあり。いづれがさきなるや。



秋の坊早稲米を求る説

秋の坊ある年の秋、友どちかたり申されけるは、いつ〲の日早稲米粥してまいらせん。必らず來りて語り給へと約束あり。其日になりて、北枝・從吾・小春・句空などかたらひ、坊の庵へ行たるに、坊はいづち出ぬらんしれず。日くらし待まふけたる暮がたに、坊いきまきて歸りたり。皆〲約をたがへて他に出られたるを恨みのゝしるに、坊曰、其事なり。我李東といふものに、早稲米をもらふべき約束せしが、彼は農家なれば補遂はあらじと思ひ、各へ其期を約せしに李東より是を贈らず。

されど其約を變ずるは、君子の耻る所なる故、われとくより出て町中をあなたこなた走り廻り。早稲米を求めたるに、いまだ商家の手に入らざるや終に是を得ず。故にかく遲かりしと申されけるに、あるもの云、其李東より越ざらんには、などこなたより取にはやり給はざると問ける時、坊曰、あなたより越さゞる程の物を、何とてこなたより乞求むべきやといひて、其日は客もあるじも飢をこらへて、互にわかれけるとぞ。

秋の坊万子に炭を乞説

秋の坊京師に遊び歸りたる比、冬もやゝ雪降りて梢氷れるに三衣一鉢の外寒氣をしのぐべき手だてなし。よつて万子のもとへ炭を乞とて、

寒ければ山より下を飛かりに
物打になふ人ぞ戀しき

と申し遣はしけるを、万子此哥は炭の字を陰し題なりと察し。則炭を送られけるとぞ。兩人の執心、道に堪能の程、神とやいわん妙とやいわん。又秋の坊の誹諧哥に、

やきみそに灰のついたは面白し
なまやけなるはちときらい也

かやうの風流など、誹諧哥の父母なるべし。秋の坊かつて云、風流人はまことに貧なるべし。死後に米錢など殘りたるは、見る目も苦しと申されけり。其詞にたがはず、坊の死後に至りて、一粒一錢の貯をのこさず、まことにたふとき風流の人なるべし。

許六命終の時狂哥之説

許六は彦根の産、世々武門を家とす。蕉翁曰、畫は取て師とふ、誹諧はおしへて弟子とす、との給ひける程に、丹青に妙を得たり。一生我が才を自負して、他を芻狗と思へる豪傑の修行者なり。故に翁の腹中へ足駄はきて入るものは我なりと高ぶり、あるは命終らんとする時の哥に、

今迄は下手が死ぬぞと思ひしに
上手も死ねばくそ上手也

など老後迄膺たゆまず、其外自負のあらましは、自撰の風俗文選・篇突・韻塞・宇陀法師等の書に見えたり。今の世

にも自負するものは多けれども、大かた我慢より出て、人をそしりて我を取しむるとを宗とする故に、終にはあらぬ道に走り、あるは年ふるにしたがひ、氣力おとろへ、自負の口あはず、却て諸人の笑ひものと成るたぐひ、かぞふるにいとまなし。許六の自負は左にあらず。もと風流より出て終に風流を忘れず。故に始もなく終りもなく、宛轉たる環の如し、誠にあふぐべき自負なりけらし。

凡兆獄中歳旦の説

凡兆はもと金城の産にして洛に住し、醫業をもて世わたりとす。嘗て罪有人にしたしみ、其連累をかふむりて獄中に年を明しけるに、其明る年牢中にて、

猪の首のつよさよ花の春　凡兆

陽炎の身にもゆるさぬしらみ哉

など聞えけるに、聞人涙をおとさずといふ事なし。かくて身にあやまりなき中ひらき上天に通じ、程なく縲絏の中を出て、ふたゝび悦びの眉をひらきけるに、あさの此世をあさましとのみ思ひとり侍るにや、果は亡名して行がたしれずなりけるとぞ。



牧童素堂の句物語之説

牧童は北枝が兄にして、才能をあらそはず、殊さら同胞のあわれみといひおのづから世の人のかゞみとも、人〴〵に愛せら

る。昔は難波なる梅翁の洒落をしたひ、後蕉翁の門に入て、翁も牧童はよきものなりと譽給ひしおのこなり。生涯眠るを以て得ものとす。常に云、我むかし芭蕉の翁にまみえて、武の素堂が、浮葉巻葉此蓮風情過たらんといふ句の物語に及ぶ。翁の曰、此句は此蓮と首にとなへたるがよしと示し給へり。其外は何事も覺えずとなん申き。いでやなべての人心、己が得辨へぬ事も、底ふかく知りたるやうにもてなし侍るは今日の人情なるを、牧童がときかくたゞありに言捨たらんは、いとたふとき事にこそ。曾子習はざるを傳ふるかとの給へるも、此さかひのいましめならんをや。



膝もとに月こそ出れ

おじろ守　牧　童

といへる名句せし人なり。

●北枝　如柳に酒を乞説

金城の北枝は古き蕉翁の門人なり。むかしそのとも如柳と軒をならべたり如柳は酒を賣をいとなみとす。北枝もとより嗜む故に、日毎に彼を訊ひて酒を呑。阮籍が壚邊に倜儻の風流をつくしたり。彼酒家、初の程こそあれ、日ゝ夜ゝの事なれば、後には少しうんだるけはひにて、あひさつなどもそこ〳〵の風情なりけらし。ある時北枝來りて酒を呑んとするに、あるじの心解かねて、いひよるべきよすがもあらず。しばらくして北枝、其家の下女に、ぬか味

噲やあると問けるに、下女又酒の事ならんと合点して、なしと答ければ、北枝の曰、なくば一盃のむべしといひける故に、あるじの如柳も腹をかゝへて大笑ひし、終に一樽をゆるしけるとぞ。

夏酒や我とのり行火の車　北枝

北枝家誹諧夜盗人の説

北枝が家にて誹諧有りし時、夜更て盗人入りたり。此をしるもの北枝に告けるに、北枝打笑ひて、いづれ煠はきには出べきものなりと、ざれ言いひて色もかへず居たり。故に皆静まりて共席を崩さず、時に

世間ばなしに茶釜ちん／＼

といふ前句出たり。北枝取あへず、

ぬす人の目にかけらるゝ目出たさよ　北枝

と付たり。此句を、おれを富貴と思ふやらと覺へたる人もあれど、是はいさゝか障り有りて、目にかけらるゝの句に直し申されしとぞ。

北枝家燒失の説

元祿年中金城に池魚の憂有りて、房屋過半曠野となる。北枝の家此炬烟に失ひしを、友どちいたみてとぶらひけるとき、

燒にけりされども花は散すまし　北枝

かく口ずさみつゝ、恬然自若たり。是人世のことぐさ、あすか川の常なき事をよく辨へたる風士なればと、人皆其厚德をかんじけるとぞ。其後又北枝火難に逢けるに、從吾人さきにかけ來りて、むかしの氣情いかゞにやと尋ねて、

もろともに硯も筆もすみと成　從吾
烟の中に一句作麼生

返し

もろ共に硯も筆もすみとなり　北枝
其ことの葉をかくものもなし

かゝる中にも滑稽を忘れざる、常／＼の風流も察して知るべき事にこそ。

此時の句に、家見舞といふ集有り。略して左に記す。

燒にけりされども花はちりすまし
さは、北枝雅兄がむかしの氣情なるよし

やけにけりされども櫻さかぬうち　東花坊
梅が香や先一番にやけ見舞　牧童
鶯も笠着てあがれ小屋のやね　北枝

普請にかゝりて

さる槌の祝儀にならず水鶏かな　仝
曇はすれど卯の花の時　從吾
坂越る人の笠着て杖突て　支考

哥仙あり

北枝雨中吟行の說

ある年春の雨降て、やがて晴たるに、北枝檜笠打着て、ふら〳〵出ぬる道にて行合たるもの、いづく〳〵わたり給ふと問けるに、發句ひらひにありくなりと答へられしに、我もいざといひければ、

髭白きかたふ人得たり梅の花　北枝

俳諧世說卷之四

目錄

誹諧世説　巻之四

北枝蕉翁に蓑を贈る 風羅堂の説

芭蕉翁北國行脚の時、北枝の案内にて野田の山本といふ所をあそびありき給ふに、北枝かやつり草と申は、いかやうの物なりと翁に尋ね申せしに、翁そこらを探し給ひて、これぞとてさし出し給ふ。其時北枝の句に、

翁にぞ蚊屋つり草をならひけり　北枝

かやうの即興躰も又一格なるべき事なり。又其ころ翁に菅蓑を贈りて、

しら露もまだあら蓑の行衛哉　北枝

此蓑、惟然坊附屬し、播州姫路千山に傳り、その子寒瓜、増位山といへる所に風羅堂といふをたて、此みのを納む。

二川句を殘家を出説

二川は越中富山の産にして、そこの太守の高家に仕へしものなりしが、常に江湖に身を任せん事を願ひて居たり。あるもの主人へ此事を告し故に、主人も此人をふかくおしみ申され、加恩の賜などして、其足を羈すべきはからひありと聞て、俄に髮髮(鬟)をそりこぼち、青入道となりて其國を立去とて、

米くれる人には逃て花に鳥　二川

かく我家の障子に殘し、出て行けるに、主人はもとより此ものを惜まれければ、させる咎めもなく、呼戻して隱者となし、則ち富山のうちに柴のいほりをむすびて、一生をすごしけるとぞ。

東花坊禪室を捨誹道入説

東花坊支考は美濃の産にして、初めは禪室に入て、鎭藏司といへり。若年の頃、

吹毛劍也春三月

臆斷牡丹花下風

といへる偈を作りて、宗門の人〳〵にも末賴もしく思はれし才僧なり。東都にてもある寺の大會に、學嚴の講主に八ヶ条の問を揭て難陳す。それより法眷其才をにくみ、出世のさはりとなりし故に禪機をくぢきて、ひそかに俗にかへるべき心にも成たり。夫よりして神學を好み、伊勢なるしるべをもとめて、山田のあたりに身をよせぬ。こゝに於ていつとなく風流家にもしたしみ交り、其内に凉莵などにむつまじく、人〳〵其英氣に感じ其才を惜み、凉莵を初め誰かれ俳諧をすゝめて、終に蕉翁の門人とはなしぬ。果して其才むなしからず、初に葛の松原を述、後に續五論を撰し、行脚は東花西花の兩集に名高く、實に諸國の荊棘を切ひらき、天下に正風の道を通じ、今に至りても蕉翁の直道の萬國にみち〳〵たるは、ひとへに支考の大功といふべし。彼の伊勢にて神學に遊べる頃も、いまだ僧形をかへず、僧律を守りて居たりけるが、後に蓮二坊となりては肉食などの放縱も有りけるを、ある法師是を戒めて、もし墮落せば來世かならず牛になるべしといひけるに、支考取あへず、

牛になる合点じや朝寢夕凉　支考

支考長崎逗留の說

支考西花坊と号し。西國行脚の時、長崎に暫く杖をとゞむ。そこに卯七といふ誹士有り。もとより長崎は蠻舶往來の港にて、官人の門たちつゞき、商賈の徒も華美を好み、おのづから中華の洒落を效ふに、卯七が社中には通譯の官人もあれば、いつとなく、人〳〵唐音華語をとなふるやうになりて、風流の行過ものも多かりけり。ある時誹席終て皆ゝ歸らんとする時、西花坊そばなる人に向ひ、そこのチヤ。ウチンを給はるべしといわれければ、皆〳〵笑ひになりて、其後は華音を唱る者おのづから憚りて、其事次第に止ぬとぞ。誠に面白きあつかひといふべし。

支考巴靜桑名同船の說

支考蓮二房と變名して後、尾張の巴靜とうちつれ、伊勢

の國へまかるとて、桑名の渡舟に乗侍りぬ。頃は春もきさらぎならん、遠山はいまだ額白う、野間のうつみはすみれ菫草に色どり、雲雀の草鳴はるかに聞て、空も青やかに、洋々たる海面は、青畳敷わたしたる景色にて、いと興ある日なりけり。巴靜。坊が背をたゝきて云やう、此風景何ぞ空しく過んや、願はくば一句あらんかと問に、坊やゝ不機嫌なる顔つきにて、吾子はかつて風雅に志あるものと頼母しく思ひしに、只今の詞を聞て其風流を見落し侍るといへり。巴靜心得ず、猶其くわしき事を尋ぬるに、坊の曰、古人も景に逢ては啞すといへり。かやうに風景十分なる所にては、發句の出るものにあらず。もし此景に發句せんと思はゞ、こゝの風興をよく胸中にたゝみたくはへ置、今宵何方にてもあれ舍り求めたる上にて、そこの巨燵に徘徊して、扨句を案ずべしと云りとぞ。誠に其藝を能得たるものゝ胸中は、未練のはかるにあたはざる物なりけらし。



涼菟花を尋肥前に至説

涼菟は伊勢に名ある誹士にて、其句々は涼菟句集あり。ある年の春、あたりちかき花見んとて、かりそめに草履はきて出で二三日歸らざりし故に、家内にてあやしみ思ひ、そこの花のもとを、人して尋ねけるに、あるものいふやう、此花を見て、

京都なる東山のけしきを思ひ出すなど聞へ給ふ。もしみやこへや行給ふらんと云におどろき、いそぎ京師の定宿へ便せしにあるじのいふ、其事なり、さきに爰へ來り給ひ、須磨寺の櫻戀しきなど物語り有り。もし須磨寺へや行給ふらんといふに、又それよりして跡をもとめて是を尋るに、終に草履はきたるまゝにて、肥前の長崎まで行れけるとぞ。



凉菟辭世の說

凉菟終焉の病中に、したしき誰かれ枕頭につきそひ居たり。今や臨終と見ゆる時、門人辭世ありやと尋ねし詞の下に、くるしき目をひらき、

合點じや其曉の
　ほとゝぎす　凉菟

と聞ゆると思へば、言下に息絶たり。此事は世の人の多くしりたる事なれども、此句を、曉の其とせんかなど、麥林叟に相談ありしと、跡かたもなき說有て、みだりがはしければ、其正しきものをしるす。もとより其病は痛症にて、病中の咏にも、

今迄は人が死ぬると思ひしに　凉菟
　我身の上にかくの仕合

かやうの風流も聞え侍る。

浪化蕉翁に師弟の儀を結ぶ說

浪化は、越中井波に名有る淨土眞宗の大寺に住し給ふ。

風雅に志あつく、一生の句をあつめて白扇集といふ有り。一とせ蕉翁の風雅をしたひて、ある夜ひそかに落柿舍にて翁をむかへ、師弟の盃酒をくむ。此事を其角が砥波山集にも記して、御心ざしの日出たく覺えぬれば、予も一かたに思ひぬるよしをやくすといへり。

分入れば巣鷹の聲や雄上川　浪化

尼智月蕉翁に形見を乞說

智月は江州大津の乙州が母にて、母子共に風雅に遊びて蕉翁を師とす。ある時翁に對面の席にて、紙硯を翁の前に備へ、紙子の袖かきあはせて、我に形見となるべきもの書て殘し給へと望まれければ、翁うなづきながら、六そぢにちかき人に形見を乞れていと力なし。我先にしねといふ事にやと戲れ興じ給ふとぞ。翁の死も大かた其後近き程ならんかし。

それでこそ命おしけれさくら花　智月

などいへる名句ありし尼なり。

北枝舍羅を吊（弔）說

舍羅は浪華に居て、貧と風雅に名を得たるものなり。崩れかたぶきたる茅が軒端、筵をかけて雨露をふせぎ、菰を敷て臥どゝす。實に儋石の儲なく、朝夕にくるしみながら、一妾一女と供に陋巷を樂しむ。金城の北枝、其風流を傳へ聞て心ゆかしく、浪花に遊べる時、たま／＼此庵をとむらひたるに、幸い舍羅も家に有て、日の暮るゝ迄語りつゞけぬ。とかくして腹もやゝ空しくなれゝど、あるじまうけの躰も見えぬに、北枝いとたへかねて、何ぞ腹ふさぐべき物やはあると尋ねしに、舍羅答て曰、壁立の貧家、何にても設くべき物なし。もしそれなる紙帒に米あらば、焼て參らせんと云に、北枝やがて立て是を探るに、漸やく米一合ばかりもあらん。舍羅云、其米にて四人の口をふさぐべし、しかれば腹ふくるゝ程は得參らせじと云に、北枝もあきれながら、其風流のをさ／＼增りたる事を感じ入、暇乞して立歸りぬとぞ。

舎羅夜盜に逢說

元祿十三年に、句空草菴集といふ誹書を撰す。其清書の頃舎羅の文通に、

さるべき所に遊吟して歸り候へば、隱者臥所に夜盜入たりとて、あたりのものどもとむらひ、わめき候。入るべき所もあるべきに、仕合のなき者にて候。され共盜たる中にも、是こそと心がけたるにや、盃なく候へば、

ぬす人も酒がなるやら朧月　舎羅

と吟じて寢申候。頃惟然此の地に居被レ申、かく聞たるとて、

ぬすまれて手柄ぞ花にどこなりと　惟然



李東句を吟じ家を去說

李東は金城にて十村〔大庄屋と云〕といふ村役をつとめたるものにて、常に風流を好み、誹諧・蹴鞠などの高上に遊ぶ。誠に古人の、官は俗物なりと云へるが如く、上つがたの不風流なるより、おのづから官人に忌れ、終に其門に冠を掛て立去るとて、

崩れても跡が花なり蕗の塔　李東

と高聲に吟詠大笑して出ぬと。誠に鐵心(堅)賢固の風人といふべし。

句空蕉翁を尊む說

句空は金城卯辰山に住して、庵を柳陰軒といふ。蕉門に深切の風士なり。抑蕉翁の門人となりてよりこのかた、朝夕翁を念じて三拜す。かくまでに師の恩を忘れざるも

の、餘人にいまだ聞かず。翁もかつていつくしみ給ひ、義仲寺にての旅寢の吟を、句空が兼好の畫讃して、

秋の色ぬかみそ壺もなかりけり　芭蕉

とは殘されぬ。此句は兼好のつれ〴〵草に見えたる、世を捨人は浮世の妄愚をはらひ捨て糂汰瓶一つも持つまじきものといへるの心をとりて、秋風吹盡て草木零落の時に至り、天地一点の塵埃なき抖擻の身のきさんじを述給へるものならし。もとより此柳陰軒には、翁も旅寢の杖をとゞめ給ひ、いと睦まじくかたらひ給ふ。句空の作に、

せつかくとゆかしがらせよ月の雨　句空

藤咲て菴のやうになかりけり　仝

或人麥林に句の姿を問說

ある時麥林の菴に案內して入來る若人有り。彼が云、我誹諧を學びたき望あれども、其法・其式などむづかしきやうに覺え侍る。去ながら、我らごときの下愚もうつるべき物にやと問けるに、師の云、其道に志さへあらば、さのみむづかしき事なしと答ふ。彼もの又云、發句はいかやうの事を申侍る事にやと問。師の云、只目の前の事を云迄なりと答へ侍る。彼もの又いふ、さ迄にては意を得がたし。さらば一句作りて御きかせ候へと云へば、安き事なりとて、あたりを見廻し侍るに、折から冬も半にや有りけん、畠へ通ふおのこの、いと寒げに鍬かたげて行姿を指さして、あれが則ち發句のすがたなりとて、

百姓の鍬かたげ行さむさ哉　麥林

とは示し申されしとぞ。又ある者誹諧の事を請る序に、何と御流義には、百韻に馬をいくつと定め哉、何〳〵の去嫌ひはいかやうにやと、こと〴〵く尋ね侍りしに、麥林の答に云、我はさやうの事しらず。もし左やうの事をふかくしらんとならば、をだ巻など云書を求めて見給へと申されけるとぞ。此品〻は、初心の無用をはぶきて、修行の近道を行べき滑稽者の龜鑑ならん。

麥林遊里に通說

麥林知命の年を超て、猶古市などの遊事あり。門人春波が雖諫て云やう、老後の樂しみは外に何程もあるべし、

しかるを遊里の興を好み給ふは、他の聞え、かた〴〵よからぬ事なり。願はくは心あらんと云に、麦師云、我は沙門にあらず、誹諧師也。人は形ち老ぬれば、句作もおのづから古び侍るものなり。しかるを折ゝ遊里に交りて、其興を遣る時は、おのづから老の屈情を忘れ、三絃の中にて句を案ずる事を覚え侍れば、其變化に後れず、心の古くなる事なし。我は誹諧の爲に其志を養ふもの也とて、身終るまで折〴〵遊里に通ひ侍れども、妓女と枕を並ぶる事もなく、只其席其時の興を感じて一生樂しみ侍りしとぞ。されば遊里の交りは老の身も落入やすく、椀久がごとき乞食の浮名をながし、人にさみせられ世にうたはるゝも多し。此故にかたくな親仁は青樓を見る事塗炭のごとく、妓婦を呼て禽獸とするものは其遊ぶものゝ悪き故なり、豈遊郭妓女に罪あらんや。人參能人を活し、よく人を殺すは用る所によれり。麦林師の遊びや、よく用得たる人といふべし。然れば其言を聞ども其行ひを見ざる間は、其評をなす事かたしと、初めて思ひあたりぬと春波の物がたりをまのあたり聞ぬ。遊女の讃に、

水仙やものにさはらぬ身のひねり　麦林

誹諧世説巻之五

目録

誹諧世說　卷之五

路通蕉翁の勘氣を受并鬼貫が說

路通はもとよしある者なりしが、わかき時放蕩の餘り、既に人の下にくだり臥たりしを、祖翁の憐みにて、ふたゝび世に出る事を得侍りし。後に又翁の志にたがひて、しばらく師弟の義を絶ぬ。されども翁の終焉ちかき程に、其罪をゆるされ、內ゝにては昔のよしみにかへり申されける。此事は路通が芭蕉翁行狀記に書るのみならず、翁より膳所の曲水への文通にも委し。

路通事は大坂にて還俗いたしたるとの事致推量候。其志三年以前より見へ來る事に候間、驚くにたらず候。とても、西行・能因のまねはなるまじく候へば、平生の人にて候。常の人が常の事をなすに何の不審か御座あるべくや。拙者におゐては不通仕まじく候。俗に成候てなりとも、風雅のたすけに成候はんは、むかしの乞食よりまさり可申候。

二月十八日　はせを

曲水樣



かやうの證文どもありて、其罪の赦されたる事うたがふべからず。故に翁終焉の砌も、後ればせに來り、膳所の人々と共に、後の追福かたのごとくいとなみたる事、行狀記に詳なり。しかるをある書に、湖南の義仲寺にて翁の追善法會有し時、路通大津の俠客を誘ひて、其席を妨けしなどゝいへるは甚しき妄談にして、古人を罪

するの咎、豈拔舌のみならんや。あるひは路通・鬼貫が貧にせまるを見て是を憐み、鬼貫にさゝやきて、あらぬ邪なる事せしと書る書有り。大なる僞なり。鬼貫は蕉風にあらずといへども、其頃伊丹の鬼貫と人の稱しもてはやしたる賢(堅)固の隱者なり。既に貧にせまりし時、一女を高家のおもひものにと媒する人有しに、鬼貫かたく義を守りて是をゆるさず。かくまで風流の人、たとひ水火の中へ陷る共、豈よこしまなる事にくみせんや。まして路通もさる者也。何とて風流の人に對し、あらぬ巧みを語らん。かゝる事しるしたる人の其志の野鄙なる事を察すべし。古書に曰、詩は志をいふと。誹諧におゐても又耻ざらんや。

翁の行脚も此みなさまで出むかへて

目にたつや海青〳〵と北の秋　路通

敦賀にてのことなるよし。

あるゝものとしれば尊し神送　鬼貫

杉風無季の句を吟ずる說

杉風は東武に產して翁の東行をむかへ、かたの如く志をつくしたる高弟なり。もとより翁の、

古池や蛙飛こむ水の音　芭蕉

と名高き吟も、則ち杉風が別墅深川六間堀といふ所の庵にての事にして、其古池猶今にのこりて記念となりぬ。一とせ翁の行脚を送り、其別れ深く胸にせまりて、送別の句に、

何となく芝吹風もあはれなり　杉風

かく無季の句吟じたりとぞ。是も別れをふかくおしみて、おのづから其情の句と成たる迄にて、季の沙汰も打忘れ侍ると聞ゆ。此句を野ざらしの序に、素堂が云、此句秋なるや冬なるや作者もしらず、只思ふ事のふかきならんとは稱し申されき。もとより雜の句の事は翁の生前に沙汰ありて、かちならばの句、あるは朝よさの句を製し給ひけれど、其時は古人をはゞかりて其格をたしかにはし給はず、是を以て去來・杉風・凉菟なども雜の發句せし、

事有りて、是又蕉門の一格なるを、今の誹諧を賣もの、哥に雜哥あれば發句にも雜あらんなど、己が初て心づきたるごとくのゝしりありく輩もありと聞ぬ。此事は右にもしるすごとく、翁の生前にひそかに定め給ひしを、其光をつゝみ其徳をかくして、古人の爲にしばらく謙退の辭をかへ置給ふ。且ある人の說に、祖翁迁化の後、杉風と支考と絕交して、支考もし東武に脚を入ば雨脚を切をらんと杉風がいかりたるなど云り。殊なる妄說なり。牧童が草刈笛集に、杉風より支考への文通を載たり（[illegible]）。其詞に云、

愚事もはや世上もやかましく、口に出るも我と吟じて我をなぐさむる斗りに候。諸事御免可レ給候、一兩年の内には、追善の句を請申にて可レ有レ候、以之外病苦かさなり申候。

蚊のすねも達者に見ゆる夏の内　杉風

是則ち蕉翁滅後の事なり。しかるを前をかゞ見ず後をはからず、みだりに古人の是非を論じて、我をもあやまち人をも惑はしむるは、古人の書を博く見ざるの僻念とは云ながら、かへすがへすも憐むべき風雅の罪人ならずや。



越人旧懷の句を吟ずる說

尾張の越人は蕉翁の下葉にふるき門人なりし。ある年翁の行脚を供し侍るべきなどやくしける事ありしに、後にはいつしか初發心志もさめ、わかき

女など出入る事も侍りしを、翁は其終りあらざる事を憐み給へるにや、其後の行脚には越人亭に足もとゞめ給はず、それよりしていつとなくむつびもうとくなり給ひしを、越人後に悔ひて、

うら山し思ひきる
時猫の戀　越人

かくはかこちけるとぞ。翁も此慚愧をよみし給ひ後の撰集に此句をも加入有しとぞ。實や色は君子の戒むる所なれど、又玉の卮のそこなき風情もうるさし。此兩端をたゝいて、そのほどよきを知るこそ、誠に風流の人とはいふべかめれ。



吉原遊女奥州の說

奥州は其師さだかならず東都吉原の遊女にして、蕉翁の世に風流の稱を得撰集にも發句を加入し給へり。ある時むつまじくかたりたる人に中言したる者ありて、契りもたへ〴〵ならんとする時、奥州此事を深くなげきて、

戀死なば我が塚で
鳴け郭公　奥州

とは恨言申き。誠に後世の伏柴の加賀なりといふべし。其哥に云、

かねてより思ひし事よ伏柴の
こる斗なる歎せんとは

加賀も契りたる人のたへ〴〵なりけるとき、よみてつか

はしける哥なり。

梅員の句蕉翁一見の説

梅員は備前岡山の産にして、いとわかきより誹諧をこのみ、十七才の頃ならん、

山寺や只のさくらが二三本　梅員

蕉翁北國行脚の後、此句を京ニ而見せ申せしに、甚かんじ給ふとぞ。其後翁は程なく迁化ありしゆへに、此外翁の電覽を歷たる句なしといふ。後に、

片よりて水も見せけり杜若　仝

といふ句をして人〳〵に稱せられけるが、としもやゝ若くして黄泉の旅に趣き、備府に風雅の達人を失ひしは、歎くべきの甚しき者なるをや。

北枝從吾が命終を歎說

從吾は北枝が門人にして、互に一日も相通ぜざる事なし。かくて從吾病の床に臥けるに、もとより日每に交はりたる友なればと、北枝おやみもなくとぶらひ、湯粥の機嫌をうかゞはれける。とかくするうち病ひ日〳〵に重り、もはや治療の術盡たりと聞て、其後はさらに病家に候せず。しらざるものは朋友の信を失せりと、ひそかにつぶやきけるもありしとぞ。かくて從吾命終りぬと聞、北枝あはてゝ走り行、殯室に入て其棺をたゝき、從吾〳〵我をすてゝと斗ﾘ言て、其跡は大聲を上て泣出し、其儘立て歸りぬ。初めにそしりし人も此事を見聞して、扨は此程打たへられしは、實に其別れに堪兼たる故なるをと、はじめて信友の交り深き事を察し、北枝が行狀を稱美しけるとぞ。

風國集の題号を譏說

洛の風國は、蕉門に一方をたのむべきおのこなりしが、いつとなく自己の高ぶりより、泊船集のごときみだりなる書を出して許六が譏りをうけ、風雅の名を下したるは、己が才の度量をしらざる故にや。あるは梅蟬・菊の香二集の題号もあやまりて、世の人は無下の誹士のやうに思へども、

三日月の秋をはこぶや草の上　風國

といふ句は、其時の人さらに及ぶまじき一筋を得たりといふべし。かゝる誹士のいさゝかなる麁念より其名を無下になしたるも、撰集に心を用ひざるのあやまちにして、惜むべき事にあらずや。今の世にも、初めに其師の物語りをあつめて印行し、大に其名を發したるが、次の古人の行狀かきたる書に、多く妄誕なる事ども取入て、世上に笑ひの種を殘したるものもありぬ。かへすがへす撰集の事は一場のはれ業なり。よく是を切磋して世に行ふべきをや。二三子たゞ十日の見る所を恐るべし。

俳諧世說後篇　未刻
同蓬萊嶋　蕪翁文集　全三冊　出來

天明乙巳春

平安書林
間之町通御池上ル町　林　權兵衛
御幸町通姉小路上ル町　菱屋孫兵衛
同町　菊舍太兵衛

誹諧世說五之卷終

花見車（はなみぐるま）

四巻　轍士

花見車一

人の親のならひとして、子に藝能をつけ、わが身のうへのために報ひよとはつゆおもはずして、行すゑのたよりともなれかしと、八九歳のころより寺入させ、もの書ならはせ、素よみをさせつなどして心づかひする事、げにことはりなり。十七八・はたちのころよりは我がこのむ所の道にすきて、おのがさまざまのいとなみとはなり行。その時、手跡・學文万づの藝の柱となりて成就し、侍は主人のためまたは身上ありつきにはやく、町人はかはせ手形みせの帳あひ達者につとまりて、手代の番頭に望む事すみやかなり。學文のちからにてかなはねども、醫者ぼんにもかたづく。其中に哥よみになり、連哥師にならんとはおもふべからず。和哥は公家のわざと成て、いとけなき比よりそのさまをも見及へられて、まとの道にそみたれば、おのづからこゝろもすなほ也。地下はよのわざにまぎれて、年たけ道に入ぬれば眞法になりがたし。哥をよくよまんとおもはゞ連歌をもすまじきよし、古人のいましめ也。西行・兼好なども若き時より御家にしたがひつれば、哥人とはよばるゝ。連歌も宗祇・宗鑑のころの句はいかにもおもしろくて、はしばしの耳にもとまりたる也。紹巴このかた、つゐに連哥の發句とて人のかたる事なし。ちか比北野の能順こそ一ふしある句も出さるゝとて、心なきまでも耳にふれけれども、これも七十にあまりてかすかにきこゆる名なれば、日くれて道いそぐやう也。そのうへ連哥は引哥もきはまり、名所もあたらしきはいはず、たゞ掟を大事大事とするゆへ、前後せまりてたのしむに不自由也。誹諧は今日のうへを句につゞけたれば、天地造化の事をはやくしり、和語をよくおぼえ、古哥・古詩はそらんじてわきまへ、文字を探し、名所・古跡を行脚して見さだめ、古說を聞とり、戀の句に情をふかくおもひ入ぬれば、はやくとをりものになりて、人愛ありてまじはりの友多し。しかるを誹諧は悪性になるとて、きらはるゝ親のおろかさよ。先、金銀のついゑさらになし。傾城ぐるひをして、一月に太夫ひとつづゝ買て一年を見れば、な

んぽしまつにしても三十兩と云かたい金はのこらず。誹諧は折ふしの會を催し、点者のつけとゞけ見事にしたりとて、一年に十兩はいらず。これほど心やすくして、たのしむ道は外になしとおもひとりて、我壯年より京・江戸・大坂の宗匠達に相なれ、三十年來好、天下の風俗は都にしるゝなれば、年〳〵京に出、書林いづゝや庄兵衛が店に來り、毎年の三物を見て、諸國の風躰を味はひ、月〳〵に撰み出せる集ものをながめ、折ふしのうつりかはれるを考へて、古びはつけじとはげむ。しかるに爰にひとつ悲しき事有。一道に身をくだきてときめける宗匠あり。又名のみきこえてさほどになきかたもあるを、遠き田舍の口おしさは、みな平等におもふ也。前句付の一番勝ぐれたる点者は唐にもなしと云、かやう〳〵の名句をやりたれど一点もなし。点者でも杭でもあるまじきと、のゝしる人より宗匠になしたるあり、我がかたより無理点者に成たるあり、此境のさりとはなげかしく、妄執のひとつと成て、明くれくるしみけるに、ことし元祿十五の春は北野八百年の御忌也ときゝて上京して、小座敷にこもりたるが、折しも壬生大念佛のころ、にぎ〳〵しきにうかれ出、茶店にやすらひ、なすび賣の猿になりたるを見て、しばしありける所に、としのころ二十二三にもやなりなん、みめことがらあてやかにうつくしく、ことに髮おし切て、まくらひとつのくるしきにと見えたるが、しと〳〵とそばに寄、法しさまはたしか哥よみか誹諧師ならんと問。都の人の目こそはづかしけれ、いかにもわれは誹諧師也。何として見とがめ給ふといへば、さきほどよりものごに心をとめられ人をみるめのしたゝるさ、たゞ人にはあらずとおもふ。誹諧師ならばかたりましたき事あり、いざこなたへとひかるゝ袂も心よはくて、糸つくるまでもなく、跡をしたひて野をわけゆけば、にぎはしき一さとあり、高き座敷に引入たり。叡山のうす霞はれくもり、愛宕山は雪すこし殘りて、花かあらぬかとあやまたる。野づらは若草やう〳〵にもえ出、ことしも麥はよさそうに腹すこしさびしければ、さかづき取出、よきほどに酒のませ、さてかの女のいふやう、これまでさそひくる事外の事にあらず、としごろ誹諧に心をよせて都に出る艶しき

心ざし、なじかは神も感應なからん、一筋のあらましかたりてきかすべし。事長ければ次第を分る。

一　むかしと今の誹諧の、先、心ざしうら表にかはれり。いにしへは連衆一會興行せんとおもへば、十日も前より一巡を廻し、極まれる日は、いかほどの隙入も闕て相つとめ、御影をかけ、香をたき、一巡よみあぐるたびに、我が句の時はきつとかしらをさげてはゞかるよしをのべ、會の中、物がたりもせずして、あげ句よむ時膝たて直し、禮儀をとゝのへ、跡にていさゝか酒しゐて、歸る時は門前に出てうやまふ事正し。翌日ははかまを着し、宗匠のかたに參りて、昨日は御苦勞にかたじけなしと、一包へぎにのせてさし出す。當時はまたさにあらず、点者のかたよりひたすら會をすゝめ、やう〱に料理を出し、一巡よむまでもなく、先盃をとり〱に廻し、わが句まへになければ大きなる聲をあらゝけ、嵐三右衛門はおしい事をしました、中村七三はのぼらぬかと我がちに云あへ、はては大酒に成て、懐紙がどこにあるやら、点者に藝をさするやら、されどあふぎ・はな紙はまぎれぬやうに取廻し、歸りにはいとまごひさへせず。さて翌日は宗匠のかたから禮に參、昨日は色々御馳走、ことにめづらしき貴句を承り、かたじけなくぞんじ奉るときつと禮をのぶる。これあちらこちら也。昔は短尺をたのみ、繪の讃をのぞむ時は、宗匠のよき相口を以て、本金の色紙をつかはす。さて点者も氣をつくろひ、句をあらためて書ゆへに、廿日も廿日もかゝつてしたゝめつかはすと、一包へぎにのせて禮義をつとむ。今はまた点者のかたよりさきにいやがるかもしらず、短尺書て進じませふといへば、ほろ〱と土のこぼるゝ紫色の色紙をなげ出す。さら〱と書て送るをろくに見もせずして、足つぎの塵籠にうちこんで、煤はきの時の邪魔になりてすたる。これめいわく也。いにしへはさいたんの三物を文に入てつかはすれば、返状にそこだめ有てきたる。今は返事もなく、ふすまの下ばりになる也。かやうに古今のちがひあれば、いにしへの点者は家持に成て、宿ちん取て老らくの寺參も樂〱とする也。當時は會をつとめても

會料も滞り、連衆にさまをつくるやうに位をうしなひたれば、所務もかるぐしく、みなちりぐにきゑうせて、有つるかんたんの枕もさだめねば、しばしの榮花もならず、やうぐと姥が豆腐に口を送る也。

一　天滿の宗因、深川の桃青、一生の中編集をせず、いひ出せる句はよしあしともに、門弟または連衆より板行して世にあり。これ集ものゝ本意なり。近代は点者國ぐにみちぐたれば、名もそれとしられたく、我がねらふ所の一躰もきぎれぬやうに人におもはせ、又は五わり增のたよりともなさんと、点者の集を出すはことはり也。歷々の編集なども近ごろは見ゆるが、点者の相談もなく、我まゝに板行させて、家來筋にいひつけ、書をうらせて板料のたすけとなす。これ有まじき事ぞかし。夜の錦・一字幽蘭・七瀨川など、みな点者に申つけてたのしまるゝ、かく有たき事也。惣別点師と世にいはれてこもれるもの、それぐの傳受をわきまへて、一風をかまへぬはなし。其中にたよりて出したる集は見所ありて、ことぐくに人の手にもわたる。我在所の狂談をわけもなく書ちらし、上留り本のやうに見ゆれば、其人の本性もしられて見ぐるし。初春のさいたんと云事、慶安二年に長頭丸はじめて出さる。王城の地に有てその冥加をあふぎ、都をことぶくとの事也。はじめは都の中迄の事成しが、今は誹諧も國ぐにわたりて、年ぐに三物ぐと出るはめでたき御代の色也。そのみなもとより出る本式を見覺へ、連衆うちそろへて三物にくみはせずして、只、一句など片表に書さがし、又は熊野の牛王のやうなるものを書、石ずりなどにし、あるとあらゆる法外也。点者の中より連衆もあまたにて、組合事長くなるとて連句に出したるは、口に其品を事によせて出すはさもあらんかし。これらも先達に傳受も得ずして、ことぶきはやめて名聞までの摸やう也。ちかき比の集などに世上もどかしきとて、田舍の文盲、掟がましき事をいひ出し、または我同門をそねみなどしたる書もあり。身中の虫をくらい、紙子着て川へはいるのたとへに同じ。

一　近年、桃青門人世にはびこり、諸國に頭陀往行して

名山・古跡を見、または一筋をすゝめてありくに、四五日もとゞめて、大廻しの切字はいかに、第三の字どまりはいかやうにする。戀の句一句にて捨るはいかになど傳受をかたらせ、晝は會に引出し、夜は鳥のなく迄ものかゝせなどして、べつたりとくたびらかし、歸る時は集料・句代ばかりさし出して、此方より便狀以てなどゝまぎらかして置也。からしり・草鞋・茶碗酒は何を以てとゝのふるや、右の句料をつかふ外なし。さるによりて出さぬ集もあるよし也。味なき味噌をふるまい、蚤蝿にいぢらせ、あまつさへ跡にては下手くその、なんのとそしりのゝしる也。此のみ行脚の人〳〵も、方角を聞つくろひて通るべし。宗祇は大名によき連衆を持て、臨終までも心よし。西行は秀ひらを伯父にもち、長明は伯母が家のやけ殘りにて、一生終りしぞかし。

一　京は國の所院と定て、諸國の客をまねきよせ、金銀殘させてくらす地なれば、富家の町人のみ也。されども点者のくらしにくき所ぞかし。そのゆへは正月は一類の莭ぶるまひにとりまぎれ、御忌よりつゞく初午、鈴の音にいそがしく、彼岸万日開帳うちつゞき、伏見の桃もうつろへば、四方の花ざかりにいとまなみ、四月・五月は祭〳〵に行かよひ、くらべ馬にかけ廻り、六月は四條の涼川につかり、末は紅の流にしたがひ、雷のひゞきに閉こもり、七月は嶋ばらしゆもくまちのおどりにたをされ、八月・九月は茸狩・月見に飛廻り、冬は茶の湯に未明より相つめ、十二月が間遊興に曾ていとまを得ず。貞德・立圃・重賴出生の地なれば誹諧はたへねども、とりしめて一筋に心をよする人まれ也。さるによつて連衆にひしと事を闕。○江戸は遊興の地、かりそめにも程遠く火の用心を守りて、宿にのみ町人も居れば、毎日・毎夜、會合して点とりをはげむ。また武士は二年に一度づゝ兒をかへて、白壁の中に氣をつむれば、古郷への書狀の間は奄〳〵催すによりて、点とり机に重り、点料もむかしの通たち至りて、とりこむ事うるしのごとし。こと更点者もうちこみに点とりをすれば、五六會出るともはや句並同じやう也とて、あたら

しくおもひかゆるによりて、面白き一ふしも出くる也。國〳〵の点師もみな江戸の風俗をうかゞひて、ふりを出すやうに成たるなり。されども一兩年の句、神も得きゝとり給はず、尤つけあひは匂ひかすらせて其緣をはなさず、一句の曲、此うへはとおもふて世間まなぶ所に、此ごろはつけあひの匂ひもうせ、一句も唐人の寢言のやうなり。さらばこちらがおろかゆへかと、武さしより其風をなす人にたづぬれど、自句の返答さへ埒明ず、しからばことかけの一躰なるべし。じやりばの名ぬしと定めたり。○大坂は天王寺より住吉へ、一日がけに見たれば行方もなし。去に仍て參會も江戸に似て、点とりにかたぶく。点者も今は出座金百疋とさだめたれば、會合も行儀に文臺おしたて、作法のよきは此地也。初會をつとむれば、みな〳〵懷中より一包づゝ扇子にのする也。しかれどもこの比は連衆が大かた点者に成て、曉方の日ばりのやうに、とほ〳〵として点者斗やのこるらん。

一 抑、誹諧は女神・男神のいひ出せることぐさ、則やまと言葉となり、哥とちゞまり、誹諧となりたる也。しかるをいづれの時よりはじまり、いつの代より事おこりたるとて論じけるおろかさよ。連誹のわかちもなく、一句に問答したるを、山崎の宗鑑より連哥になづみける也。こと葉のうつくしきを連と云、今日のと葉につゞけたるを誹とさだめたるなり。連句につゞきたるは宗祇が三百韻も有たれど、今はうせ〳〵て百韻一ッ丹波にあり、世人しりがたし。たしかにあらはれたるは、天文年中伊勢の國守武が千句ありて明らか也。またさし合の掟は、万治年中に貞徳御傘をさし出せしより定まれり。かのいせの千句も髮と云に櫛とつけ出してひとつに成たるを、攝州天滿の住、西山宗因ほつ〳〵とときほどき、獨吟の百韻していせにひろめしより一躰の風俗はわかれて、天が下なびきあひて、宗因風とはあがめたり。その後時とかはれる世のさまなれば、あるひは南京流とてさぬきを敷と云て圓座になし、三輪をひやすとのべて、そうめんになりたる一躰、半年ばかりいひしらい、または一句四十二三字などにあ

まして發句と云、またはこゝろにつかひて漢句のやうに成たり。此時多くは誹諧はらちなきものとて止たるもの多し。しかる所へ武州深川、松尾桃青出て、意味深長なる事をのべてうるはしくなしたるより、國〳〵おもひつきて、四五年跡までは用ひたる也。今は誰が家の風俗ともなく、前句にあらはになじむ事をさけて、一句の曲あるやうに成たるは六かしき風躰なり。しかあればその風儀〳〵は、世以てうつり行ものとしるべし。今、法しがくるしみて、点者の位をさだめたきとおもふ念願、まことに殊勝の事也。凡俗の心はちかきたとへを引つれば、その利はやくしるゝもの也。さきほどより俗言に入てかたるは、ひつきやう誹諧点者の上なれば、今日に和して高きをとかず云きかするぞかし。点者の位をこの里嶋原の傾城になぞらへて見るべし、厘毛遣はぬ所あり。先、太夫職を見よ、あながちに琴・三味線・小哥は得ねども、かたちのよきにしたがひ、心ばへ優に發明なるにより、人〳〵おもひつきてときめく也。点者もそのごとし。さしたる學文はなけれど、いひ出せる一句に一曲ありて、姿面白きには人〳〵おもひなづみてうやまひもてはやす。天職はまたこゝろもおとり、風俗のそろはぬ所あるゆへ、らうそくのひかりもうせてその次也。またかこゐはかぶろもぐせず、ほち〳〵とたどる也。点者も文學はあれども作意のおろかなるは、人のもちゐもかるく、供をもつれずして十德をふところにおしこみ、せきだのうらたゝき合せて、緣の下にさしおくは下座にあり。青のうれんにこもりていせのくし田をうたひつれて、ゆききのやつこをまつは笠づけの点者にて、そよと人のおとづるゝも、笠か前句かと四疊敷に引こもりて、まちわびたるにて位なし。人中をたゝれたる点師あり、北むきに相おなじ。また宗匠の外にして名も得たり。これらは先達の風〳〵をまなびたるゆへ、傾城を似せて白人也。遊女は身を賣、点師は名を賣て一生の界境あり。傾城となる事、あるひは牢人のおとろへたる娘をつかはし、または夜番の妹を賣たるなれば、むかしを耻て親ざとをかくす。点者となるも牢人して奉公をかまはれ、町〳〵の家請

狀にもきらはれ、もと手もなければ、伽羅の油のみせもかなはず、点者とはなれる也。又は出家には成たれども、なんぞ佛弟子に俗やなからん、うるはしき女をいましめ、うまさうな鯛・うなぎをぶくせぬ事の損をおもひて、高みよりこけ落、衣のすそ押切ればたちまち十德の姿と成り、心やすくちよろりと点者になる也。親のゆづりはうけたれども、米の買置にたをされ、分散にあひて大こんうりはさながらならず、また職人には生れ來れど、細工が不器用で野らをかはき、謡やにてつきあひたる人をたのみて、点者になりたるも多し。これみないにしへを耻て先祖をかくすは、遊女の身を耻るにちがはず。身請をしたれば下やしきにやしなはれて、ゐようゐいぐわをきはむ。大名にかゝへられたれば、折ふしの發句斗にて寛樂也。かれこれの比准ほどよく〳〵かなひたるはなし。点師も口おしきものにたとへられたりとて、腹あしくはおもはじ。公家に生鰯をたとへ、彌陀のかしらを蜂の巣になぞらへていへど、譬喩品の方便なれば罰もあたらず。そのうへ下ざまに成たるは、句〻をはげみて上手になれば、その身の爲ぞかし。人死して名をとゞめ、豹死して皮をのこす。道をみがきて上にたゝんとおもはゞ、三神の加護やなからん。汝がとし比なげくは爰ぞかし。いそぎ旅宿に歸り、(遠)延慮なく書綴りて梓に出せよ。書寫の間、天井にゐてちからを添べし。かならず〳〵依怙荷擔あるまじ。貞德、掟の書を出す時は外題を數〳〵したゝめ、稻荷大明神の御鬮にまかせて、御傘と云末世の重寶をのこしたり。今此集も、汝がやさしき心をあはれみ、世俗に下りて俗言をおしへ侍る。長〳〵しきものがたりにくたびれて、青かりし葉の秋、花の春は清水の花見車をたてならべて、名となれる点者をうるはしき遊女のはだへになぞらへ、人の心をよろこばしめよ。我はこれいなりの末社鳴滓の神、かりに丹州の清めにのりうつりて、衆生のたすけとなる也とて、たちまち白狐のかたちとあらはれ、辰巳のかたに飛さり給ふ。夢さめ忙然とおぼつかなきは、藤屋の傳三が高にかゐ也。おどろき見て御山を五六度禮拜し、旅宿に歸ればそゞ

ろに腕首重く成て、先神勅のごく譬喩の目祿(録)をぞ書たりける。

もくろく

一琴とあるは　漢文漢和の事と心得べし
一三味せんとは　和哥の事
一小哥とあらば　佛學
一風俗とは　其人の發句にてしろゝ
一にしやまやは　宗因
一松尾やは　桃青
一かへ名は　名乘の片字・軒号等
一親かたとは　いづゝや庄兵衛
一やり手とは　誹諧のせわやき也
一尼君とは　(点者の樂に成たる也又くるしむもあり)
一太夫とは　上の点師
一天神は　その次
一かこゐは　その次
一みせとは　またその次
一北むきは　大坂あわざ 江戸かし　人中をたゝれたる人
一きんちやくは　人しれず裏店にゐる人
一よ鷹は　江戸のそうか
一なべとは　みちのくの意
一しやくとは　さか田の君
一うき身は　越後にあり
一あんにやは　いせ
一現妻は　きのくに
一白人は　点者の外
一大臣は　よき連衆
一まぶは　常に念比なる人
一ちかひとは　奉納の事
一心中は　連中に無心いはぬ也
一入ほくろは　点者に執筆さする
一身あがりは　誹諧の外に家業をまじへる
一紋日は　會に出る
一大よせは　(矢數はいかい五百句千句の歟に入)
一うつとは　身もちあしき人
一身うけは　人にまれかれたる也
一親里は　身をおさめたる
一手形は　板行の書物

一はつ文は　さいたん三物
一道中は　廻國の人
一さこ入は　一座のよしあし
一くせつは　連中さ中あしき
一たいこ女郎は　点者に似てまじろ人
一かぶろは　同つきしたがふ人
一あれ女郎は　同門の先達
一いたづらさあらば　はいかいの好人
一引舟は　執筆
一ふるは　点者からいやがる連衆
一やぼは　いなかうど
一らちあけは　点者をおもひかへる時
一夏書は　連く万句
一あげやは　會宿
一ふみは　手跡
一酒さ出たらば　上戸
一信女大姉とあるは　むかし人也
一年のあくさは　誹諧やめたろ人

花見車　二

京　大坂　江戸　幷諸國宗匠

長頭丸を誹諧宗匠の祖として、代〻に出たる編集にて見來りたるゝ顯はしける。在世・亡人のかた〴〵も近代名によくしれたるは、おもひ出るまゝにのせたれば、時代前後する事有べし。たゞ都鄙ともに、京寺町二條上ル町井筒屋庄兵衛が店に見えぬはしれがたく侍る。出板の題号、發句の次にしるしつけゝる。

京

長頭丸　立甫　（雅）惟舟　貞室　西武
貞衆　令富　梅盛　（怒）貞恕　常矩
信徳　随流　似船　高政　自悦
常牧　定之　幸佐　和及　我黒
如泉　言水　林鴻　曉山　順石
好春　方山　轍士　泥足　柳水

鷺水 心桂 可休 古柳 滴水
雲鼓 風山 了我 恕風

大坂

宗因 玖也 保友 西鶴 遠舟
由平 一昨軒 益翁 豊流 來山
才麿 万海 一禮 園女 川柳
伴白 賀子 團水 只丸 諷竹
芝柏 舎羅 天垂 盤水 東行
何中 岸紫

江戸

徳元 玄札 未得 立志 露言
調和 桃青 嵐雪 其角 立志
一晶 沾徳 山夕 不角 無倫
桃隣 東潮 素イ 常陽 秀和
盤谷 一蜂 介我 神叔 艶士
渭北 吐海 専吟 湖月

諸國点者

元順 青流 尚白 酒堂 惟然
團友 木因 荷兮 露川 東鷲
如行 三千風 風子 友琴 律友

釣寂 吟夕 芳水 貞直 曉翠
梅員 除風 朱拙 不玉 助叟
支考 雲鈴 等躬 路通 西吟
宗旦

勝名并編集之作者

春澄 秋風 重徳 千春 立吟
和海 淵瀬 芝闌 去來 風國
正武 素雲 如琴 烏玉 爲文
竹亭 丹野 一林 怪石 里右
松雨 賦山 吾中 底元 政勝
竹條 原水 定方 紅殘 金毛
爲有 都水 圓佐 常雪 壺中
芦角 定宗 岡諧 陽川 洞水
万蝶 落水 淨芥 鬼貫 半隱
定明 季範 杏酔 狐界 文十
如圓 三維 芙雀 伊丹中 休計
○素堂 岩翁 一鉄 卜尺 倶風
杉風 曾良 一十竹 尺草 百里
冰花 仙化 鶴立 琴風 秋色
横几 子珊 史邦 旭志 潮里

（習）○知月　木節　乙州　正秀　丈草
曲翠　芥舟　許六　江水　荊口
巳百　○白雪　梅可　○狸々

京

承應二年十一月十五日卒ス　鳥羽實相寺　長頭丸

元和四年　梅もけさ匂ひて來るや午の年

寛永七年　有しだひうす雪きやせけふの春

嶋原と云所にだいうすの破黨籠りしを御征伐のため、軍兵をつかはされし明るとしの元日にと前書あり。此集のついでおかしくこゝにしるす。また聖廟八百年のことし御忌のさいはいに口の句を錄る。

寛文十一年二月七日卒　貞室

年徳やさほ姫君のうぶの神

寛文九年九月晦日卒　二條寺町要法寺　立圃

南無天滿大事の木也松と梅

延寶八年六月廿九日卒　東山大谷　維舟

筆たても若やぐ年や對の春

西武

田かへすは哥の種まく誠筆哉

八十三　梅盛

來る年や末たのみある中の秋　八月に閏あり

同年　貞怨（恕）

にくからぬ人の正月こと葉哉

故人　常矩

時なる哉哥人の曰千代の春

八十餘　貞兼

富士のねんしとはでも雪にしられけり

同　令富

耳正月寶ぞ延るとしの春　風俗は句の事也

此君だちの風俗は、右にあらはすがごとし。地なしの袖ちゐさく、今織の帯を尻にまかれたるにてしられたり。ながらへて御ざん

すはみなよき身にて、みつわぐむ老女の姿さ成て、わさぎぼうしの寺まいり也。南無阿彌陀佛〳〵。

▲太夫　　信徳信女

〔信女は古人ゆへ也奥め是にならへ〕としかたぶくまで、時〳〵にうつりたるとりなりうるはしく、〔此大よせ江戸八百句巻頭の事〕大よせにも上座にたゝれて、江戸ざくらのにほひ芳ばしく、とこ入もよきとて、大臣もあまた、〔とこ入は一座いたづらははいかいのすき〕やほもなづみてときめかれたる也。日ごろいかいいたづら人なりしゆへか、しもがゝりのやまひになやまされて終(をは)られしは、かゝる人のつねのわづらひにては、め〔磯花寶〕づらしからずとて、しなんして跡までも、うちき姿のなつかしや。風俗は

雨の日や門提て行かきつばた

〔平形は集別〕○（手形）五徳　うちき姿　ひながた　三木櫻

▲太夫　　隨流

〔西武門弟〕武(たけ)さまの風(ふう)を似せさんしたれば、さしあひつめひらきがよしとて、しのび〳〵にうそのつきやう、客のたら

しやうをならひに行かたもありて、太夫職(しよく)とはなられ〔邪書〕たれども、只意地のわるひ君にて、人のかけごとをよふいはんす。

天が下や夜ふかし箱を明の春

〔親かたは井づゝや庄兵衛〕○貞徳永代記　まぎらはしき手がたなりとて、親かたにはうけとらす。

▲太夫　　似船

〔小哥佛學也〕小哥をよくうたはれ、手もうつくしうあそばすゆへ、〔文は巻の点〕かりそめの文にもその品見ゆる。初ふみも年〳〵あり〔紋日は會合〕て、よく人も聞およびたれども、いつの紋日にも見え〔身上りは道の外をつとむる〕ず、身あがりしてひたと何やら書ていさんす。客もなけれど、老(おい)女郎の功者(こうしや)にて、身づくろひはよくまへうしろを見て、

鏡とて餅に影あり花の春

○かくれみの　大上戸　火ふき竹　苗代水　せたの長橋
千代正月

▲太夫　　高政

いつ見てもあかぬは、小袖の色はむらさき、もやうはかのこ、裏(うら)はもみうらがむかしも今もよし。ほうばい

女郎にもすぐれんと、くはんくわつのこゝろから中やう姿にもゆかずして、がさつかしたる紙子のうはぎは、さながらおてらさまのやうなりとて、惣本寺〳〵とはいはれ給ふ。されど大臣の種によい子をもたんして、その見次にていまはらく尼のすがた也。

　　五月雨や麦はら一把とぶ螢

○中庸姿　是天道　檀林三百韻

△太　夫　　　　　自悦大姉

（あげや は倉付）はじめはあげやのせわなりしが、君たちの風俗をよく見おぼえられて、かりそめのものずきもよく仕ださるゝもやうに、ひとつとしてはづまぬはなし。

　　姫瓜や三千の林檎顔色なし

○花洛六百韻

△太　夫　　　　　常牧釋尼

（常姫常子）姫の姫のかぶろだちにて、つとめもよく、上京に客ありて、身あがりもなければ借錢もなく終られし也。

　　陽炎や静る牛の丸ながら（外にあり）

○この花　うてなの森　冬ごもり

△天　神　　　　　定之信女

（言水事也）言依のゆかりにて、さしあひ・つめひらきにもかしこし。のちは身あがりがつもりて、うき名にたちて死んした。わやくなる女郎にて、つねにいかのぼりをすかんした。

　　梅はこべ君此御代に浦乙女

○一丁鼓

△天　神　　　　　幸佐大姉

おかしい君にて、まんぢうと酒がおすきなり。ゆもじ（廿年前より物が落ちてなし）の下がどふやらで、つねに不自由がられしが、そんな（琴は漢句の事）事でか風俗もすぐれず、琴をすいてひかれける。それも下手で客もなし。やほはきゝなれぬによりはまりたり。手形もみな濱並のおもむきをかゝれける。

　　碧－桃ハ　知ヌ　底－拔

○大みなと　入舟　二番舟　三番船

△天　神　　　　　和及釋尼

（きんちやく町並也）きんちはじめは延仁寺前に、きんちやくしてゐられしが、小利口につとめられてのちは、風俗もよくならんしてと

きめかれたり。死んせう前には、嶋ばらちかくに庵をむすびて、辭世の句に、

我としも四ゝ詞の花のあけ句哉

○雀の森　ひこばへ　外にあり

△太夫　　　我黒

（重頼弟子）しげ風の引舟にて、はじめはあけくれ屏風のかげにばかりいさんしたが、（表具やの事なるべし）うそのつきやうが上手にて客もたへず。三味線をひかんすといふさたあれど、（三味せんは歌學なり）岡ざきもろくにならぬが、

たし年魚は水のよし野を越きたる

○藤なみ　外にあり　いそ清水

△太夫　　　如泉

此きみ廿年前までは、かくれもなきはやり太夫にて、（三井秋風なり）秋風の深(ふか)ふあはんしたにより、紋日〳〵にいとまなく、京もいなかもはまりたる也。されども十年ばかりまへ（つほねとは笠づけ也）つほねに、ぶはんじやうにて、つほねにてうき名がたち、それよりさびし。琴(きん)風も心中のわるひ事があるとて、のんしたいまは裏風・正風のいとしがらんすかして、はつぶみにも見ゆる、いかふ年がよらんした。

八百としの梅の雫や筆はじめ

○松囃子　もはやそのとしで手形はいらぬとて親かたにはとらず。外にあり

△太夫　　　言水

いまのさんやのはんじやうを見れば、やはりむさしのつとめがましならんにと、ぬしにもたび〳〵うはさ也。（道中は石脚也）道中もよく、木がらしのはては有けり　とたちあがりたる風俗に、一たびは京もいなかもなづみたりしが、身あがりに大分借錢があり。ことに大坂やの野風に似さんして、お子がひたと出來てこまらんす。それゆへ神ほとけをふかふいのらんす。頬(ほう)もすいていかふ古う見ゑます。只、口はしのきいた君也。

比叡にこそ額の鐵は朝霞

○京日記　前後園　かり橋　都ぶり　續都ぶり　外にあり

△天神　　　林鴻

酒もなり手もよく繪までよふ書(かい)んすゆへ、一座かしこく、京はぶたへのはだへになづみて客もあり。たゞほうばいしゆとけんくわがたへぬゆへ、しゆもくまちの

つとめなりしが、年があいて今は親さとにかへりていさんす。うそのつきやうも上手なるに、太夫にならんせぬはたん氣ゆへ也

　する〳〵と花の花うむ杜若

○京羽二重　あらむつかし　永代記返答

　▲天神　　晩山

大坂からよい客がついて、上づめのやうにきこゑしが、いまはその人ものかんして、紋日にもつゐに出られず。〔論馬寄也〕の道中がよいかして、ちかごろいなか衆とつれだちて、北野へ見ゑさんした。

　水古くゆるし色也かきつばた

○千代の古道　ばく物がたり

　▲天神　　鞭石

むち〳〵としておとなしい君也。風俗もおもしろい所あり。地の客の見えぬは酒もならず、文盲で利口がなきゆへか。されども下京衆になじみもあり、いなかものがちよこ〳〵と見ゆるよし也。

　此匂ひ十百里とゞけ宿の梅

○そなれ松

　▲天神　　好春

はじめはしゆもくまちのつとめなりしが、手もかゝれ盤上がよきとて、京へは出られたれども、風俗もすぐれず、ぶはんじやう也。それゆへ身あがりていさんす。〔夏書は万句〕道具や衆が折〳〵見ゆるよし。夏書はたへずかゝんす。太夫の器量はとかくなき君也

○新花鳥　左義長

　曙の京の天氣や花の春

　▲天神　　方山

風流なる君也。草ばな、小鳥をつねにすいていさんすゆへ、繪もすこしあそばし、手もよし。とに連哥師の中によい客があるゆへ、よろづにつけてかしこし。さる〔有つきの事〕によつて身うけなされたり。あまり大女房にて毛が長いとて、きらはんすかたもあり、それで天神髭。

○花屏風　北の箱　曉山集

　無拍子な歩みかはゆき鹿子哉

　▲太夫　　轍士

（宗因弟子也）大坂西山やのかぶろ成しが、酒もなり手もりちぎにかゝれ、ゑくぼがしほらしさに、京へつき出しの君也。（はつ文は三物也）はつぶみも客衆あまた見ゑたり。つとめにくきみやこ（心中は連衆に無心はぬ）にながらへていさんすは、一座もよく心中のよきゆへ也。入ぼくろもよふさゝんす。風俗も江戸に似てはり（入ぼくろは讃の書紙）もつよく、道中もよいほどに、むさしへといふ人もあれど、地によき大臣があるゆへか、かぶりふつていさんす。紋日にもよく出らるれば、今の世のはやり太夫ときこゆ。

○我庵　世のため　わだち　白眼　後瀬山　尾山集　墨流し
　糸屑　此日　七車　葵車　苻　元禄拾遺　自在講

屋ね葺や小哥もならずほとゝぎす

▲天神　泥足

（桃青門人）江戸にて松尾屋のかぶろ也。達者な所ありとて長崎につとめられしが、風俗のすぐれたるゆへ、京へはまねきたり。されども唐人にあはんしたゆへか、廣ふて身（うつとは身あちぶさた也）がうつとて客なし。

松浦浮これより東門餝り

○そのたより

▲天神　柳水

（出雲の風水門人）八雲たつ風ゐの風になれたまふゆへか都にうつらず。

○大元式　包井　都百韻

春たつや女房が尻もあたゝまり

▲北むき　可休

（加賀田河内）あけくれ鏡にむかひて、我ひとりじまんするのみ歟、國〳〵の君たちの害になる事を仕出かしたるむくひにて、まじはるものなし。唐へゆかれたがまし。

○物見草　（こんな手形はいらぬとて親がたからはうけとらず）

耳塚に泣人もなし萩の家

▲つぼね　古柳

名も古流也。風俗もしれず。

▲おなじ　滴水

▲おなじ　風山

（方山）此ふたりは山ゐの引舟ゆへに、名はきこえたれど風俗も見えず。

▲おなじ　雲鼓

名もつゞけて二つはよばれず。

合点して追ておどろく師走哉

○夏木立

△たいこ女郎　鷺水

（信徳團水）とく〻や團〻のつきものゆへ、琴も三味線もちつとづゝはやられ、手もかゝれて利口なれど、たゞ氣のない（誹諧の筆拍）子にて立身なし。手形や初ぶみの手つだひばかりなり。

八寶の家冥加あれやどの春

○こんな事　此衆　手習　よせ書　新式外

△比丘尼　心桂

（取賣）戀すてふ吉田山に名あるほどの、よろづはつめいなる君なりしが、只氣がそゞろにて、いまは文庫かたけてあなたこなたにて、つりりん〱。

またゆるゝ鳥があとの柳哉

△きんちやく　了我

（沾德）さんちやにも得ならず、沾〻の京へひいて御ざんして、三條の橋にすてゝいなんした。むさしのなまりがあるとて、かゝつてゐらるゝかたありて、どこやらうらだなにはいられて、かけまはられ、あかつき方にはかへりて、ごと〱ごと〱とたゝきまはして、一ばん鳥はつくられし。

ほうらいに菓子の名よせや奥ざしき

○一番鶏

△二階はすは　恕風

美のゝ客衆にかこわれてゐさんすよし、はつぶみに見えたり。

お他人がかしら持けり筆はじめ

大坂

詠むとて花にもいたし首の骨　西山宗因

年おとこ聲やおかしくて謡初　玖也

書そめや鼠の髭の筆の海　保友

西鶴

射て見たが何の根もない大矢數
　　遠舟

呼子鳥あゝらこひしやさるにても

難波は日本の大湊にて、風俗もかはれり。初手はふり。のちは抱さめて、法しさへ泣せたる江口の君がはづみを殘し、都の姿もからずして、一躰をはじめたる所ぞかし。古君たちも多けれど、こさ〳〵にしろすにおよばず。

▲太夫　由平

（宗因門人）西山屋の内にても、ならびなくはやりたる君也。藝能にかしこく大酒もまいらず、しまつをよくなされたる（年のあくはらくに成たる也）により、黄なものもたくはへられて、年が明てのち天滿の片里に引こもり、田地をつくらせ、小借屋などかして、

　定家流にてかし座敷あり村しぐれ

（手形集物）○手形ごれ〳〵も大坂にあればしれず。

▲太夫　一時軒

琴・三味線・小哥・手跡、三ケの津におよぶはなし。さるによつて大坂へは出られたり。玉に疵はたゞ惡性にて、あけくれうなぎ玉子に身をよせ、下男に迄あばれて、名にたつ風俗もいなかがうせず、しりつき備前すり鉢のやうなれば、ぬしもかしこい人で、これではつゞくまいとおもはれけるにや、いまは何やかやの藝をおしへていさんす。

　泥坊もふたゝびすめり聖の春

▲太夫　益翁

いまは白髮となられて、いづくにいさんすも知がたし。これも西山屋にては、ときめかれたり。しほらしき君也。

　富士ごりや淺瀬しら波あさり鷺

▲太夫　豐流

こうたうなる君にて、にし山屋の内でもおば〳〵といふて、いとしがられたる太夫也。いまは老の姿に引かへ天王寺のあたりにすみて、あふ坂の淸水に影をうつし、往來の人をまねきて、彼岸ざくらの花のもとに（彼岸櫻集物の名也）

むかしをおもふ。

すめばこそ拙者風情も難波の春

▲太夫　來山

左(ひだり)づまにしやんとつかみあげ、大事の所の見ゆるもかまはず、くはんくわつなるとりなり、あね女郎よしな（由平事たるべし）には似ず。酒もよくなり手もよし。はなしがおもしろさに客もあまた有しが、くいものにいやしいとて、ちかごろはさびし。

名月や草とも見えず大根畑

▲太夫　才麿

うぐひすのほそはぎよりやこぼれけん、梅の匂ひのかうばしく、今の難波のはやり太夫也とて、都のかたよりも風俗をうかがふは此君とや。されども氣がみじかふて、ちつとした事にも人をしからんす。一座は見事に一ぱいくう風也。

古石の舞て出るやけふの月

○椎の葉　後椎の葉　うき丶

▲太夫　万海

しんき〳〵が三しんき御ざる。あそび過ては身をうつしんき（盲八）、酒が過てはらん氣のしんき、水がへつてはじんきよのしんき、ついにつぶれて月も見ぬ。

海山のはつものつ丶む霞哉

○ぬれ鳥

▲太夫　一禮

あけぼの鳥（集の名にや）のうしろ姿、いとしらしい風俗成しが、ちかきころは紋日〳〵にも見えず、大事のお子を瓜(うり)かなんぞのやうに、井戸へおとさんしたげな。そんな事で心もひへたかしらぬ。

武士の子や正行作る雪あつめ

▲太夫　園女

あんにやの風もいやしとて、大坂に出られたり。よろづの藝。女にはめづらし。風俗もあれこれを見とられたれば、京にもむさしにも似る。されどもやり手がうしろからとりついて、さしでをいふてわるいと云沙た也。此やり手が死んだらば、かゝへてよい金(かね)まふけせんにとてみな〳〵わるロ。

得た貝を吹て田簑の月見哉

○筆はじめ

△天　神　　川柳信女

おめ〳〵と平安城をならざらし

△おなじく　　伴　自

ちかきころのつき出しなり。めき〳〵とよい客がつきたり。風俗もしかとはしりがたきほどの君也。人しれぬ内證(ないしよう)になんぞうまい事が有かじやさて、

芦田鶴の鳴て通るや笠の上

○住吉詣　雲月花　難波拾遺　紀の山ふかみ　かくれさぎ

△天　神　　賀　子

西鶴門人 鶴ゐのあとにとばんして、人もはし〳〵しる利口(りこう)なところ有て、身ざまもよし。

鉢たゝき厄はらはせて歸りけり

○蓮の實　難波丸

△天　神　　園　水

小哥は佛學 こゝろがよさに、何をうたはんしてもおもしろく、みやこのすまひならば、今ほどは太夫にも成かねぬ器量(きりやう)なれど、酒が過ては只一座があらく、泉ゐきめさんした時も、すさまじきとり沙た也。智惠(ちゑ)はずんとかしこふて、楠にも北條にもまけぬ。 如泉なるべし

しうとめにちよろりとなるや宿の春

○あきつ嶋　味噌有　特牛　くやみ草　彌の介

△天　神　　只　丸

牛にも馬にもふまれぬかしこい君なり。かくもの足ぞろへに見た人があるげな。いまはうき世しようじのあたりに、かこはれてゐさんすとやら。

衣がへ見ん三條の人通り

○丹後ぶり　足ぞろへ　小松原

△太　夫　　松尾屋内 諷　竹

只こんじよがふとふて、客しゆのしゆびをそこなはせ、またしても〳〵身あがり斗して、なんぼまうけても〳〵あとへもどる。これほどしかられてもあの目つきはいの。

春〳〵何から先へ笑ふぞ

○あめこ　淡路嶋　砂川

▲小天神　　芝柏

客がのうれんあげて見ると、小手まねきしてだましすまひて、ちよろりとあけやへつれて行にはないよねじやとて、わざとつぼねに置。

花の雲そりや〱〱〱〱〱

○杉の庵

▲天神　　天垂

おんなきらやる高野の山に、なぜに女松は、はゆるやら〱。もう精進おちて、つとめもしか〱させましたし。

あはぬ間は星も大事の一夜哉

○男ぶり

富士を見ても嵯峨野の虫をきいても、心のはき〱とせぬは、せふ事がなふて、去年は西行に成て善通寺の松は見さんしたれども、どちらへともかたづかぬ風俗也。

▲かこゐ　　東行

木がらしや障子の引手十文字

○天滿拾遺

▲けい子　　何中

▲おなじ　　岸紫

風俗も分らず、一座のとりもち斗也。

▲ふろやもの　　盤水

よい客がついて、うけ出されさんしたかとおもへば。いまはほり江に名はたち花屋この、

涼しさに四ツ橋を四ツわたりけり

○水尾杭

▲かこゐ　　舍羅

ほそ〱と心のやうに手をよふ書んすゆへ、ほうばいしゆのいそがしいときには、ふみの手つだひも心よくなさるゝゆへ、いとしがられさんす。されども氣がのらでいやしうて、客衆からきるものや帯をもらはんしても、ついおしまけてなし。ぐんないの小そでひとつで身すぼらし。また備後の鞆へやらざなるまい。

八尺の海老も餝らず朱雀門

○簑笠　あさくのみ　柴橋　あら小田

花見車 三

江戸

徳元

飛梅やとし飛こえてはなの春

玄札

寛永やあけ七才の午のとし

未得

葵にや所あらそふ車百合

立志

書そめや去年をことしにうつしもの

露言

楪葉の座に等閑の友ならず

八十氏やものゝふのあつまれる地なれば、人の心もつよく風俗もしやんざしてゝし

みつかぬ所有。かりそめの小哥・三味線

も一風おもしろく、ふみひさつ書ても、ふしさ成てうたはるゝ手づま也。さればむさしのよれのつよみをもつて、都の君の風になし、難波のあげやにあそばんさは、三ヶの津のちなみを合せて、その所のかはりめをよくおもひつきたり。

▲太夫　　調和

かゝるさんやの草ふかけれどゝ、ふり出されたるも、一むかしにてなつかしき君也。とくに身うけもあるべき事なれど、肩から足までこはい跡があるとて、いまゝでのつとめ也。

十夜過て林に眠る鳥哉

▲太夫　　松尾桃青裲定尼

襟のうちにかほさしこんで、ものをふくみたる道中に、風俗をたくみ出されしより、三ヶの津はいふに及ばず、國〳〵の君たちも、まなべるやうには成たる也

梅が香にのつと日の出る山路哉

▲太夫　　嵐雪

大門口より桐屋の市左が軒まで、たて砂をもらせ、い

まの世の買手のとおりもの也とて、なりわたりたる客でも、むつかしい所よりひねり出して、くみとむるは此君也。しかるに去ゝ年ねんがあき、しかもよい身にて、今は尼の姿となりていさんす。

（ひねろは付句の事なるべし）（尼はのがれたる也）

秋風の心うごきぬ繩簾

○その袋　若水　一周忌　杜撰集

▲太夫　　其角

（桃青）松尾屋の内にて第一の太夫也。琴・三味線・小哥でも、とりしめてならはんした事はなけれども、生れついて器用な所があつて、小袖のもよう・髪つきまでも、つくり出せるほどの事にいやなはなし。國〱にてもこひわたるは此君也。花に風・月には雲のくるしみあるうき世のならひ、酒が過ると氣ずいにならんして、團十郎が出る、裸でかけ廻らんした事もあり。それゆへなじみのよい客もみなのがれたり。されど今はまたすさまじい大ゝ臣がかゝらんしてさびしからず。

うかれ女や異見に凋む夕牡丹

○みなし栗　新山家　續みなし栗　いつな昔　花つみ

萩の露　句兄弟　かれ尾花　眞若葉　焦尾琴　三上吟
雜談集

▲太夫　　一晶

むかしは京にて扇子やのおり手なりしが、いかにしても氣性な所ありとて、武藏へつき出しの太夫也。大よせにも名をとられけるが、近年はうそもいよ〱しあげさんして、功者に人のはまる事をこしらへ、大分よき身になられたり。まとの事にはあらずとて、ほうばいしゆのつきあひはなし。

（一万三千五百句）（前句付）

白妙やうごけば見ゆる雪の人

○四衣懸隔　丁卯集　前後千句

▲太夫　　沾德

心だておとなしく、三味線もひかんすゆへ、身うけもなされたり。つもれる文蓬萊より都にも聞およびしが、好きらひのある風俗なり。つとめの内ねむらんせずばよかろ。

（三味線は哥學）

たが猫ぞ棚から落す鍋の數

○文蓬萊

▲太夫　　立志

むかし三うらのたか尾ゑのはらに、さぶらい衆の子をまうけさんしたを、こちへとつてやしなはれけるが、らう人のゝち京にて身上おとろへ、嶋ばらのつとめをなされたるは河内ゑ也。女郎に二代なしといへど、此君も同じく二代のつとめ也。風俗は小女房なれど、江（句作のちいた窓なるべし）戸に似ぬ客衆によふまはらんすゆへ、よはい客たちはおもひつく也。

人の手も只はあそばぬ火鉢哉

○都のしおり　難波のしおり

▲太夫　　山夕

あくしよすてほのさんせきといふ人あれど、そんな御かたではなし。おとなしい君にて、茶の湯などもよし。しほらしい太夫也。

栗虫やすくせ蠶のから衣

▲太夫　　不角

（雷杯）つねに書物をすいて見さんすゆへかしこし。手もよし。されどみやこへはむかぬ風俗也。奥すじの客をよふたらさんす。

七夕の日細はしらじ七度食

○前句づけの本數〱

▲太夫　　無倫

（異名となる也）男文字がならいで、文もかなで〱かゝんす。

もゝ草や千種のあとの冬牡丹

▲太夫　　桃隣

一風あるかたにて、人もそのにがみをすきて、ちよこ（家来）〱と客もあり、ようかぶろをたゝかん兵衛。

獺の背兀たりはな筏

○むつちどり

▲こうし　　東潮

一たびぶはんじやうにて、尼にならんしたが、いまは（この紋日一枚ずり也）またよい客しゆがついて、五節供の紋日にも見えます。

願しや雲雀の中の晝狐

▲こうし　　素狄

心だてのうつくしい御人なり。ことに腹をようとらんすとて、ほうばいしゆのためにも成也。

蚊柱やさて是ほどに風のなき

▲こうし　常陽

ちま〳〵と日書をさんすゆへ、なじ見もあり。中むら七とねんごろしてじやけな。

星合や桴流せし女來三谷

▲さんちや　秀和

あづまにはもし黄な櫻赤き藤

▲おなじ　盤谷

鍋のまゝ洗足とらん花のくれ

▲おなじ　一蜂

旅籠さぞ花の上踏蜆汁

▲おなじ　艶士

語るまもなくて西瓜の堅さ哉

このかた〳〵、みやこのかたへはしれがたし。むつちどりの姿繪にて、ちらりと御けんに入りゆ。

▲こうし　神叔

其角嵐雪

晋(しん)〆や雪〆のやり手なりしが、よろづきやうな御人にて、いまはこうしにならんした。さりながらぶたごな御かたじやけなほどに、立身はあるまいと。

蝸牛雪を這ふか九月盡

▲こうし　介我

晋〆についていさんしたゆへ、手跡までよう似せさんす。

諸ともに雌もつかれずや雲に雁

▲かぶろ　渭北

因角也

白人はつねの人　人不角

大坂では白人していさんしたが、いまは角〆についていさんす。諸事きやうな子じやほどに、つとめもよくば太夫にも成かねぬ所あり。酒ものみならはせたしと、

職士也

てつ〆のうはさありし。

春たつやはゝ鳥の羽の色みどり

▲たいこ女郎　專吟

山鳥のおろと氷るや瀧の松

▲おなじ　湖月

腰もとや主の雛を我が顏

おふたりともにだい所まで、いつもきていさんす。たがひにけいのあらそひたへぬよし。

▲夜たか　　吐海

湖月也みやこの生れじやが、月どのゝつれて下らんしたれども、らちもあかず。くつわ・あけやとまぶばかりしていられしゆへ、さとのすまひもならず、いまはよ鷹と成て、柳はらをとび廻るといの。

諸國の部

國〳〵のかた〳〵はみな、三ケの津の風俗をうかゞはるゝなれば、ひだりにあらはす心ばへにてしるべし。その所に名を得たる君たちも、いまだ有べけれど、三物にも見ゑぬはぜひもなし。

▲堺のちもり　　元順信女

宗因時代の故人大坂の風俗に似ていやしからず、かくれもなき君也。

胴炭や中につかんでみぢん灰　　青流

新まち・高須のかけもち也。

○住よし物がたり

夏の夜やもどりさま見す流(マヽ)ひ星

▲近江芝屋町　　尚白

松尾やにいさんした時は風俗もよし。

○ひとつ松

四ツ子のひとり食くう秋のくれ

▲松尾屋出見せ　　洒堂

一たび大坂へ出られし程なく身うけ。

麦の穂やさくらについて鳴鳥

○ひさご

▲おなじ　　惟然

ほうばい衆の風俗が氣にいらず、四枚五枚づゝあたまに櫛をさし、べに・おしろい・きわずみなど、おもはれたがましく。もはや古ひとて一風出されたり。髪もかいつのぐりなわのやうな、ほそい帯にゆもじもせず、つぼ〳〵口もしよしんなとて、出るほどのさかなをしてやられ、とこ入に屁までこかんすとて、いよの客も富小路のぜんせいのがれければ、いまはよし仲でらのあたりに引こもり、湖の夜の波を琴の音にきゝなし、雪のあしたは、いにしへの茶の湯をおもひ出て、冬の日のものかなしきに、

水さつと鳥よふわ〳〵ふうわふわ

○藤の實　千句の跡

△伊勢の古市　　團友

かぶろどもが參宮してたづねたれば、兒もあらはずに、やきめしに赤みそつけて、にた〳〵とくうてゐるさんしたとかたる。風俗は衣裳こそわるけれ、都にも江戸にもはづかしからず。

人中へぞろりと長き袷哉

○一ふく半　かわこ摺

△美の　　木因

うつろふよはいなれど、さのみ白髪も見えず、年より若きは、かもじをたんと入れさんすゆへなるべし。

途中から鳴出す空やほとゝぎす

△尾張　　荷兮

身のねがひありてみやこにのぼり、太夫の位にならんしたけれど、今はあとへもさきへもゆかず、松尾屋のむかしこそなつかしけれ。

木がらしに二日の月のふきちるか

○冬の日　あら野

△同　　露川

ものだのもしき人にて、ほうばいしゆの事といへば、珠數や珠數を片手にかけ廻らんす。

數入のあとやそのまゝ馬の留主

○流川集　かたみだい　やはぎ堤　まくらかけ

△同　　東鷲

京・江戸の風俗はたび〳〵見にのぼられけれど、大こんの土けがはなれぬ。

桑名から鼻へいるゝや田植哥

○小弓　乙矢

△同　　如行

松尾屋の內ばかり似せていさんすればよいに、柴やまちにて名にたつ。

繪すだれや繪かとおもへば蝸牛

○後の旅

△相州　　三千風

三千句みちのおくにて大よせの沙たもあり。そののちはくに

〳〵をとびあるかれけるが、心なき身にも、いかぬ風俗はしれるにや、鴫たつ澤に影をうつし、心はゆきゝの人をおもふ。

○行脚文集　田鳥集　笈さがし

堂たてゝ幾世の鴫の魂祭

▲越前　風子

都の風俗にはうつらぬとて、今は金澤・今庄のつとめにて、花の繪じまをうたはんす。

○草刈籠　越前本書　越の大高

欲過て盛をくれぬ歸り花

▲加賀　友琴

所がらなるすけ笠、つの出しのぼうしの内も古く、ゆかたにかくしても腰がかゞむ。

○色杉原　飯酒　卯花山　八重葎

駕籠とめてしぐれの富士や三ケ一

▲阿波　律友

一たび都にのぼられ、人〳〵をなづまされし風俗、いなかにはおしゝ。

牛飼のむすべば濁る清水哉

○四國猿

花薄ちよいとまねいた飛脚哉

▲同　鉤寂

諸藝かしこし。手もよくかゝるれど、たゞ國風ののかぬはなんとせうがの。

○寶錢

浦の春やあるが中にも和哥の浦

▲同　吟夕

ことはり右に同じ、無藝。

○眉山

手をとつて櫻ぞちぎる歳の禮

▲讃岐　芳水

折〳〵大坂・京へ出られて、風俗をなおさるゝ。

○さら山　あやの松

百草に摘殘されつわらび草

▲備前　貞直

ことはり、さぬきにおなじ。

○おぼろ月　鄙の長路
　　▲同　　晩翠
都へはついに見えず、所ではやらんすけな。

○蟬の小川
　旅人よ宿は酒煮る隣あり
　　▲備中　　梅員
京にも出られし。

○吉備の中山
　ひゝき日もなくて散けり白牡丹
　　▲同　　除風
右に同じ。

○青むしろ
　この花やちさゐやしろの有ところ
　　▲豐後　　朱拙
筆まめなお人じやと。

○けふの昔　おくればせ　梅さくら　きくの道
　初花や覆面したる女子の日
　　▲出羽酒田　　不玉

○續(鶯)尾集
　月花の平生腹にちからあり
　　▲長崎まる山　　助叟
言水三千風はじめは言ゐにしたがはれ、のちに三千どのにつかれしは水くさい。

○京の水　三ゝせ艸　新の初　遠帆集
　山畑の崩れて寒し松の秋
　　▲妾もの　　支考
國〳〵へかゝへられてひたといかんす。かづき着てあるかんす事もあり、衣着てとおらんす事もあり、京・江戸・大坂のつき合一度もなし。いなかにて一ぱいづゝ庄兵衛くはさるゝやら、親かた人の手形はたび〳〵。

○西花集　東花集　歸り花　葛の松原　笈日記　新百韻　梟日記　櫻山伏
　木枕はまだ寒けれど旅寐哉
　　▲世帶やぶり　　雲鈴
大坂でも京でも三日とながらへている事なし。食をたかしては日本一。

楊貴妃にほれたる床の涼しさよ

▲奥州須加川　等躬

松しまの月や雲居の自畫自讃

▲陸奥　路通

松尾屋にても二三番ぎりの太夫なれども、うき名にたつ事ありて、あちこちといたされしが、いまは心もなおりまして、なこそといふ人もなし。

後の月名にも我名は似ざりけり

▲櫻塚　西吟

富田・池田のさはぎ所にて、はんじやう也。

しら樫や媚ずさはらず花の春

○西吟ざくら　寐覺廿日　難波ざくら　彌生山　ゑんみ集
菜の花　橋ばしら　ほの〴〵草

▲伊丹　宗旦禪定尼

（維舟）舟ゐの引舟なりしが、請出されていかんして、所がよさにはんじやうにてしなんした。風俗を所にきわめられて、かくれもなき名をとられし。そのゝち跡したふものもなし。（鬼貫 知牛）ちかゐころ牛ゐと云を鬼ゐの引て出さんしたが、いまだ風俗もしれず。

經しらぬ人も覺ゆる涅槃哉

無分別　親仁異見　盆且　古文祇園會　無盡經　藥喰

○西瓜三ツ　誹道盤石録　かやうにゆ者は　生誹諧　食誹諧
野梅集　三人蛸　四人法師　當流籠ぬけ

花見車　四

勝名井編集之作者

そも〳〵白人といふ身は、としたくるまで親のもとにあり、又はれき〳〵の御かたにまねかれて、たちかえりたるもあり。さそふ水あらばと流れよる瀬をまちわび、中だちをしていひよる男もきゝつたへて、けしきある座敷をかまへてめぐりあふ。あながちに氏(うぢ)をたづねず、縁をたよりにこなたにむかへても、人しれずむすびあひたれば、うき名に出る事もなし。また遊女はおやかたに身をよせて、心にそまぬかたをも、ふかくおもひ入たるよしにもてなせば、つねにかたちをつくりて、人をまつ事にしてこゝろをつくす。その風俗の時にしたがひて、あしかるべきやうなし。そのありさまをこなたにきゝとり、まなぶすがたとなして、けふをすぐせば俤(おもかげ)は似せて、心はゆくところのまゝなるべし。

京

春澄　おはる

いよ〳〵めでたき身にて、けつこうなものをならべて、あけくれかぞへてゐさんすゆへ、かりにも今は見ゐず。

親もなし子もなし闇に飛螢

秋風　おあき

なつかしき風俗也とていまもしたふ。

僧ひとり辛崎へ乗しぐれ哉

重徳　おとく

ゐのころの乳のむ春の日かげ哉

○花見辨慶　便船　類船

千春　おせん

餅かびて二月の柳青かりし

○鬼がはら　新清水

立吟　おきん

三味線・小哥天下一、風俗はいせのおもうのちのひとり也。

のがれても世にかしましき紙子哉

○餞別五百韻

和海　おかい

ほく〳〵と百足すぎて一葉哉

○鳥羽蓮花

淵瀬　おゑん

金山まぶにとりつかんして、のりものすがた。

堂ふるしうしろは淺黄ざくら哉

○蓮の葉

芝蘭　おらん

はつ雪におろしかねけりはねつるべ

去來　おらい

手討した下から笑ふ西瓜哉

○猿蓑

風國　おくに

雨の間が鳴ふさぎけりほとゝぎす

○菊の香　はつ蟬　泊船集

正武　おまさ

よい酒は東方朔よ若ゑびす

○此大橋

素雲　おくも

鶉すき親にしらせそ朝もどり

如琴　おこと

梅が香よしたふに我が行所

烏玉　おたま

世のさまや我鉢の子に山ざくら

爲文　おため

撫子や鋏して切る世もならひ

竹亭　おたけ

大かたはしかられにけり縣めし

○たた巻

丹野　おたん

くつわへほしがるほどの君なれど、大名へのぞみありて見合さるゝ。いまは乘かゝつた舟。ともかくもりがしう

しん／＼やめさせたしとのとりさた。

正月もなじみのかゝる二日かな

一林　おいち

水無月や夕／＼に生かへり

怪石　おいし

尻たゝく園の音や更る月

里有　おさと

釋迦の目やわれて歸らぬ煎かはら

松雨　おまつ

花野出て姪へ行や齋坊主

賦山　おやま

涼しさや大魚はねる沖津舟

吾仲　おなか

朝めしのさほひに着たる袷哉

底元　おけん

灼見より公家の柴呼さくら哉

政勝　おまさ

けふ／＼と火をうつ音や麻のはな

竹條　おちく

月花の手にさはる也水の肌

原水　おけん

家ゞに書を置て出る花見哉

定方　おかた

足洗ふ水もまれ也雲のみね

紅殘　せんじゆ

男からまけてかゝりし夜寒哉

金毛　おきん

山王のさくらは白し帆かけ舟

爲有　おため

竹の子のつれにおくるゝ泊かな

都水　おする

くるゝ日に人は欲なき月見哉

岡佐　おゑん

花の雨仁王の作を聞ばかり

常雪　おつね

出替りに虎杖山のあれにけり

壺中　おつぼ

ひるがほは日かげに成てくるしいか

○霜月哥仙　極月哥仙　弓　木がらし

青角　おあし

脇ざしや花のもどりに撫てみる

定宗　おむね

ちろつくやけふも櫻の二日醉

○新行事板

編集之部

一書籍目録　同譜　一十月哥仙 潮汐鈔　陽川　一緑無葛　潤水

一ふくさ集　万蝶　一臍の緒　落水　一流木集 一夜百句 柳の道　浮芥

津の國

鬼貫　おおに

大名もどり也。まだも一かせぎのぞんでゐさんすゆへ、流れの身ともなられず、風俗は大夫にしても恥かしからず。

月しろやむかしに近き須磨の浦(狂)

○有馬日書　鬼の目　犬居士　大悟物語　佛の兄

牛隱　おはん

一たび落ていさんしたが、いまはまたはんじやう。

○縄すだれ

花すみれひとり旅人に宿かすや

定明　おさだ

よられつる一すじ涼し草の露

季範　おはん

いき靈(れう)がついて、狂はんすといの。

○如月集

あらかじめけふ咲得たり菊の品

杏醉　おする

○京の曙

誰見よふ師走のはての富士の山

狐界　おかい

○難波順禮

ひるがほの花も咲けり鈴の音

文十　あわぬ夜は鶩に餌をかう川邊哉　お十

〇よろひる

如回　鬼百合は佛のつけし名なるべし　おくわゐ

〇合類

三維　うぐひすやさしもの客に見ゑませぬ　おさん

〇鳩の水　梅の嵯我

芙雀　念入て見れば垣ねのほたる哉　おじやく

〇鳥おどし

三紀　都には町ほとゝぎすばかり也　おさん

青人　腰ぬくな屋ねの上まで飛螢　おあを

鷺助　凉み〳〵門で留守する夕哉　おすけ

百丸　鷄がなき候よなとまゝよの蚊や噺し　おまる

春堂　旅なれば晝ねして行あつさ哉　おしゆん

蟻道　蚊のこゑに我つらくはす寐覺哉　おあり

入角　まくら蚊や時分〳〵の寐覺哉　おかく

涸水　みな月や晝の星みる空の色　おだく

馬樓　夕がほに預り手形打つけたり　おむま

酒粕　風凉し願ひ叶へばまた一ツ　おはく

露碩　鶺鴒の落葉踊行ふもと哉　おせき

酒人　春の浪や須磨の風みる爽じま　おさか

休計　　おけい

いかいいたづら人なりしが、今は瀬川でやゝをだいていさんす。

板橋のとがめ〳〵は杉若木哉

○難波習火燧　正月事　今源氏　孟集

武州

素堂　　おだう

はちす葉のにごりにはそまじと、ながれの身とはなり給はず。わかき時より髪をおろして、深川の清き流れに心の月をすませり。

御手洗や中葉ながるゝとし忘れ

岩翁　　おいわ

つねに、にぎはしきまじはりをすかれて、人〳〵のたよりとなり給ふ。

かたびらの相身やおちふ女むき

一鉄　　おてつ

風俗たぐひなくして名にたかし。みやこに見えたるとき、御室にて、

わすれては上野のさくら咲にけり

卜尺　　おぼく

われ鍋や薪の下もる村しぐれ

枳風　　おふう

誰山ぞちるさき門に山ざくら

杉風　　おさん

いかにしても寐耳に鹿の不便也

○冬かつら

曾良　　おそら

むかしとや二人行脚の盃せしか

一十竹　　おいそ

ぴつかりといなづまひとつうしろから

尺艸　　おくさ

青のりやうしほにさらす磯なれ松

百里　　お百

海をみぬ山人あらんけふの月

氷花　　おはな

仙化　すこ／＼と手をひろげけり夏蕨　おせん

鶴立　山ざくら行つくまでの匂ひ哉　おりう

○六歌仙

生て居る人見て秋のあはれ也

琴風　おこと

紅葉見や村の用意は藁ざうり

秋色　おあき

大坂にその女、なきしに此君也。されどもみなつながれたる身とて人はかなしむ。

雛さげて誰がつまならん凉み舟

横几　およこ

ひつさげておもへば重し衣がへ

子珊　おさん

簑虫や萩のたはみのまきほどに

○河内散　續山座敷

史邦　おはう

晝がすみ喰くうべき腹ごゝろ

○小文庫

旭志　おきよく

あてなきもあらん月見の人通り

湖叟　おてう

今の世の風俗也とて、都にもまちかねるよし。

ほたん見や掃部の咳の明はなれ

諸國之部

▲江州大津

智月[尼]

月日をもうくるばかりの枯野哉

木節　おせつ

たなばたやむかひとのにも瓜飴

○へちま

乙州　乙女

親仁さへ起ざるさきに鶺鴒

正秀　おひで

まさかりで柿むく杣が休み哉

丈艸　片やねの梅ひらきけり煙出し　おでう

曲翠　▲　おきよく

うぐひすや辨の(嘴)をせかせける

芥舟　▲水口　おふね

水鉢にちどりを覗く寐覺哉

○あくた舟　二木　梅

許六　▲彦根　おろく

百石の小村をうづむさくら哉

○鼠ふたぎ　へんつき　宇陀の法師

江水　▲柏ばら　おごう

冷食になるまで梅のながめ哉

○百人一句　柏原集　道中ふり

荆口　▲美濃大垣　おけい

紺屋めとしかりながらや衣がへ

己百　▲岐阜　お百

陽炎にものゝ姿や田うち蟹

白雪　▲三河　おゆき

古いとは繪にてこそあれ蓮の鷺

○茶の草紙　曾我　きれぐ

梅川　▲三河國府　おむめ

ほとゝぎす茶のこもなふて山路哉

○彼岸の月

狸く　▲伊勢松坂　おりり

あつさりとすましの汁やとし忘れ

○反古ざらへ

編集のかたぐは、書籍もくろくにて見出しけるゆへ、京より外にあるはしりがたし。書の名は聞ても、句のさがしにくきは是非なく、せめての事に俳号をあらはしける。

一紀州順水　わたし舟 破曉集　童子位(教)　一攝津闌風　椎柴

一鷺外　生駒堂　一河州幸賢　河内羽二重

一遊林　反古集(道)　一和州天弓　大和狐

一支梅　鳥の跡　一勢州文代　麓の旅寐

一一吟　雲の葉
一重道　湖東千句
一尾州白支　春草日記
一三十六　猿丸の宮
一北枝　喪の名殘
一能州提要　能登かま
一越中十丈　射水川
一越前三惕　みじか夜
一羽州清風　一橋
一備中露堂　追鳥狩
一草也　備後砂
一助然　蝶姿
一肥後長水　白川集
一曾米　裸麥
一豫州鶴子　月の跡
一大坂發句翁　二見箱

一江州吐龍　車路
一湖翁　寐ものがたり
一加州ノ松　西の雲
一句空　北の山　はゝき原（二）草庵集
一巴水　菰師子
一勒文　洲珠の海
一路健　旅袋
一若州去留　青葉山
一備前兀峯　桃の實
一備後如奕　ちどり足
一筑前曉柳　はなし鳥
一扇哺　染川集
一肥前橋泉　西海集
一讃州寸木　金毘羅會
一蘂鳥　籠

俳諧請狀之事

一此何と申点者、誹道に身をくだき、何のとし何ヶ月日の出の宗匠、いづくの雲すけ、親の勘當、金銀手どりの身にてもなし。巻のかさなるその間は、一足も机の外へ出不レ申。古來の掟すこしもそむかず、点をさせもが露ほども、脇書におよさいなく、連衆を大事に心にかけて廻る會日を、いつとてもおこたらせ申まじ。第一には茶屋ぐるひ、大酒のんで朝ねをし、つとめそまつにいたすにおゐては、きのまゝながら行脚におゐやり、または筆耕・執筆になされ、かまの火をたき、湯どのゝ水くみ、せどはき、かどはき、庭のそうじのちりやあくたや、かみくずのはのうら見と存ゆまじ。万一此人、点者のうちはいかいやめてたいこもち、水をへらしやいとをせず、じんきよして死したりとも御なんはかけず、いづかたまでも庄兵衛出てさばき髪、油や・酒屋・米・屋ちん・とうふ・八百やにいたるまで、相さばくとの定め也。若又ふかき作もあり、學文つもりて月雪にま

ねかるゝ大名あらば、それはその身の徳分たるべし。若一雪や可休めが非言をうつて、さまたげのさしでのいそのもがりぶね、おして点者をはまらすならば、傳受のこらず荻薄、宗匠をかまひ給ふべし。惣じて点者のその間、上戸なりとも酒をやめさせ、板行ものをずい分出させ、會にも人をそだてつゝ、ねぶたくともいねぶらず、ほめともなくとも、それ〳〵に何をばほめさせ申べし。一じゆん懐紙のそのうちに、何どころかまはせ申まじ。さしあひはさばきぞん、見おとしはぜひもなし。その外身もちいよしあしにつき、後日のための誹諧請状の趣件のごとし。京や大坂や江戸いなか点者ひとゞけとよみ上たり。

請人

寺町二條上町

(名)いづゝや庄兵衛

元祿十五年三月日

誹諧

京羽二重（きやうはぶたへ）

四巻

林鴻編

誹諧京羽二重　自叙

夫誹之爲道嘲哢風花雪月評品禽獸艸木乃至於春日之遲々秋夜之悠々以遣興暢情者厥趣豈僅々哉故作者競出或有濟筆鋒於學海摘詞華於文苑而宏材博覽世人自以先生宗匠推稱之者或有謭劣陋薄以挈瓶之智纔綫之才而自爲矜誇不能傳芳譽於后裔徒流臭名於當世者余自垂髫遨遊誹林含英咀華有年于茲矣杜少陵詩云爲人性僻耽佳句語不驚人死不休余於斯道竊以老杜此句爲志但憾質元蒲柳材匪駿耳抑近世誹學日新月盛白上國臻于邊鄙就中當流作者洛陽最夥東阡西陌新點者棊布北衢南街誹之師星散余今詳其姓名攷其居處覼縷記之及毎一人採其傑作一句類編校訂題曰誹諧京羽二重言其俚鄙密潔自固非他邦所能及也遂授諸剞劂氏繡梓賈傳云爾

元祿重光協洽之歳春則下澣日

鳳城隱所雲風子林鴻

操觚於烟月堂

[印]　[印]

泊湧金門

宋　林鴻

烟生楊柳一灘月

雨弄荷花數點秋

此景此時描不盡

畫船歸去有漁舟

又明の林鴻出塞の曲あり、頌しければ不贅于此。かくのごときもろこしの人々達は、才智すぐれて代にほまれあり。これには似ぬ林鴻、みづから愚知と極ながら、此道におゐて名をよばるゝもよろこばし。誹の冥加にや。

曠古逸韻

誹諧點者並誹諧師

七條通ヨリ松原通マデ之間 次第不同

芦月庵似船　五條通東洞院東へ入町

梅か香の谷〻谷〻ひろはん深山河　似船

宮川道柯居士　建仁寺町通五條上ル町

ところとか初音のはつねほとゝきす　正山

招鳩軒方山　東六條

千代の春鳥來て敲け宿の石　方山

井龜軒鞭石　松原通室町西へ入町

種漬て濁し始る野川哉　鞭石

一松軒湖外　富小路通五條上ル町

鵜つかひよ若きは人の目にたゝす　湖外

寶樹軒兒水　御幸町通五條上ル町

凉風や萱簾の内をふきさすり　兒水

滴水　佛具屋町通日本松町

のひ〳〵てゆかまぬ松のみとりかな　滴水

誹諧師 並作者

姫宮のお手には黒し氷餅　五條□町東へ入　貞隆

抱籠に見て居ル雨の薄かな　同町　松木

五月雨や杜秤にかゝらん身のおもさ　東六條　心兮

倡掘らむ花のよし野に死ぬる穴　五條御幸町東へ入　可休

拾はるゝ物になれかし草の露　万壽寺高倉西へ入　岸柚

裸をも尤ぬ京の躍かな　東寺　嗽石

神無月今朝は氷もうす着哉　西六條　薄椿
海山や同じ世界に宿の春　東六條　可廻
春は今朝宿見よ天の漿水　同柳の馬場　友竹
日の始魚や戸越ん阿波の海　同中ノ數珠や町　旧白
月夜かな念佛中の聲かはり　油小路五條下ル町　軒柳
秋風や木幡の里のへちま空　同五條下ル二丁メ　知足
世の中の雨の形見る氷柱かな　七條樵木町　友也
ひろく寐て夢はすくなき蚊帳かな　五條高倉西へ入　琴山
砂川や餘所の夕立しらす色　五條新町東へ入　梅里
聟らしき人のはいりぬ門の松　同新町西へ入　呦軒
あら夜半の星にひかりのある物か　さゝがい五條下ル町　桃雨
哀也あさぎ櫻のかへりばな　新町松原下ル町　林鳥
人の氣の片原町に踊なし　五條新町西へ入　林虎
白壁にかゝりて蔦のあはれなし　同町　夢雪
行年や小指の爪と耳の垢　七條樵木町　道正
寄添のあるさへ秋の暮なれば　西六條　宗清
廣きほど霞もひろき野原かな　西寺内魚棚西洞院西へ入　梅雪
もみぢ見て戻れば柴のあはれ也　同町　貞春

尼寺はたなばた祈ルつみもなし　同所油小路東へ入　松理
橋のうへとまられはせぬ涼みかな　東寺内魚棚室町西へ入　貞秋
初夢や共歌もなし詩釣竿　東六條烏丸　嶺風
元日にとはゞかくしぞ人の年　東六條　二夕
氣よ今朝は柳の匂ひ梅の糸　同所　杏分

融の旧跡なれば

むつかしや見えたる山を門牓　同所　求之
いたづらか女の袖に入胡蝶　洛東五條　一嘯
まぎらはし虫の其中虫撰　同町　秋翠
淡雪の朶柿おもふ木芽哉　西六條西中筋化や町下ル　拔川
葉柴萓萩の思はん昔かな　同町　松白
ぬけがらや蟬の時雨の涼　七條油小路かど　洗柳
蚊遣火や雲にこまいぬ里社　東本願寺門前油ノ小路東へ入　永治
雪の景や青かりしよし稲荷山　油小路七條上ル　信勝
書捨の佐竹も茂る伽藍哉　同通本願寺前下ル　金虎
麥の穂やはつねぬすみし郭公　同通七條上ル　秋夕
祇園會に忌れぬ水の二階哉　七條あちや町　正次
菊苗に鐘の告たる覆ひかな　七條大宮東へ入　友貞

はつ雪ははやいそがしきすがた哉　同町　梅枝
待花のとほそをたゝく晝寐かな　同通堀川西へ入　可遊
小鳥狩夕日をかへす竿もがな　七條下ル生酢や橋　智和
更るほど寐られぬよその躍かな　西六條　粗吟
もえたつや心からとは施餓鬼棚　鳥邊山　一妙
早乙女よ顔は見えねど後帶　万壽寺ふや町西へ入　好意
古井戸の魚つまみけり五月雨　大佛伏見海道三丁メ　東有
乳離の淺瓜おもふこゝろ哉　同町　吟松
節分や枳棱は賣らぬ世のならひ　油小路五條下ル　松閑
苗代は大かた鷺のとなりかな　西洞院五條上ル　友之
いざのらむ歩めば暑し丸太舟　新町七條上ル二丁メ　吉忠
藪なくと日は留どなき春野哉　四本松通松原下ル　光吉
桃山や淀の小橋も花の隈　クマ　東六條　可笑
いづれをか撰屑にせん蓮の花　同所　松煙
梟に晝顔見せよ花ざかり　同所　花笠
花に寄蜂追にけり追はれ梟　（梟）同所　無關
玉簪死やまへうしろなき花盛　同所　高里
枕引みじか夜明て笑ひけり　東洞院松原下ル丁　珈姿
海士の家も七月やさし花切籠　西六條黒店　石流
蚊の聲やかたづく所小くらがり　東洞院五條上ル　軒柳
君が代は庭の樹木も柳かな　御幸町五條上ル　魚水
名月に土着てさけぶ蚓哉　ミヽズ　御影堂の内　遊蘭
頰悪し蛙が物欺かきつばた　富小路神明町　反木
時鳥一羽なりとも賣ならば　朝妻町　玉籠
河音の卯の花寒し新樹山　芦月庵　新町七條坊門　嘯吟

それ南方は紫震（宸）の正面、右近の橘・左近の櫻、げにや唐虞の御代の春、錦にまさる京羽二重も下から上へ織もてゆき、分寸尺丈より端疋に至ることわりなれば、此書まづ南方七條より筆をおこし、果は上京・北野・西陣にて擲杼を徹し侍る者也。其間竪四五町がほどをかぎり、點者誹師之住居にまかせて一所に記之。すべて點者誹師にかぎらず古流・當流のわかちなく、前後のなみもくらず、誹德すぐれたるも末にのせ、近き誹師も前に出しぬるは、なまじるに誰はこゝ、それは次と予が到らぬ愚判も鳴呼がましく、

かつは管窺蠡測の嘲を憚りて、たゞみづから日々に聞に隨ひ見るにまかせて、書集たる草稿のまゝ梓に鐫侍る。下文效此。此外或は名乘佳作等へ聞及ぬれど、さだかに住居しらぬ作者又あらまし記畢ぬ。

作者次第不同

鷺風　閑卜　寂山　不省　鉄鼠　好里
道可　心嶺　閑水　岩勝　吉春　梅子
白閑　風壁　一二　柏之　一桂　凉水
季定　踈琴　常信　雲呼　和閑　鏡水
芦鴨　張高　夢栖　正重　玄甫　味雨
可志　如柳　氷髭　玄竹　風也　澄卜
杏木

俳諧點者並俳諧師

松原通ヨリ四條通マデ之間 次第不同

舟叟翁我黑　東洞院通綾小路下ル町

めたゝぬは花見もとりのちんは哉　我黑

露吹庵和及　佛光寺通大宮西へ入町

打はへて職人連や山櫻　和及

花香堂貞木　綾小路通東洞院東へ入町

姫こせや難波くら馬をとふ粽　貞木

東白軒風山　佛光寺通東洞院東へ入奥之町

さらし臼撫子輕きそだち哉　風山

李樹堂松遥　綾小路通堺町東へ入町

かくれつる家はさもしや米嚢の花　松遥

排齋竹翁　岩神通四條下ル町

赤土のくづれて暑し山のはら　竹翁

林也　東洞院通佛光寺下ル町

山からのもとの立木に戻りけり　林也

柑拾士長伞　室町通佛光寺下ル町

初紅葉出るほど人の付にけり　長伞

矢野東河　宮川町

摩られて岩ほ痩たる櫻哉　東河

誹諧師 並作者

鶉すき親に知らせそ朝戻り　新町四條下ル　素雲
大かたはしかられにけりあかためし　醒井綾小路下ル　竹亭
暮る日に人は欲なき月見哉　いノくま間通下ル　都水
漕よせて我が山かたれ花筏　綾小路新町西へ入　周也
聞ほどの小歌ねぶたきなつ野哉　圓山之内　共諺
活てゐるものは俯むけ御秋川　富小路佛光寺角　蘭齊
ふたつ行左をはつ音郭公　柳ノ馬場綾小路下ル　正友
軒に出て牛は捨つる花野哉　烏丸佛光寺下ル　山章
桐の木やおなじ高さの蘘の木　岩神四條下ル　荷翠
夕立にはしりついたり向側　油ノ小路松原上ル　虎海
これを着て寐たる形見よ夏衣　油小路四條下ル龜林事　暮四
白雨や柴垣ゆひてきのふけふ　岩神四條下ル　玉芝
暑き日やかゝりがましき猫の聲　油小路松原上ル　萍水
村雨を橋に乗込ム鵜舟かな　新町四條下ル　加柳
蓋みしを佛は何と蓮のはな　寺町松原上ル　是水

いなづまや切れたとをりの窓の縄　綾小路油ノ小路西へ入　松見
口ぐせになり果ぬめり五月雨　醒井松原上ル　周竹
あるときはすゝどかり梟(鵯)かたつぶり　同丁　周木
手枕や籠に入たる轡むし　四條油小路西へ入　延尙
垣はみな女子結びよ紅の花　四條富ノ路　光泰
鴈連てしばらく九輪隱ス哉　同所　正行
いつの間ぞ走りありきて年の暮　柳ノ馬場綾小路　獣石
鼻くたも香は思ひ出の青柚哉　綾小路柳ノ馬場西へ入　古吟
月見れば哥の姿の親仁かな　やぶの下柳ばゝ東へ入　富丸
水澄ば雲に生たる早苗哉　松原新町西へ入　移心
柿の花鑵の香爐と詠メけり　松原室町西へ入　万芥子
宵の雨座敷踊に定むべし　松原室丁東へ入　義雪
春の門賀茂の白砂こそよけれ　新町松原上ル　素石
それ〱や老て似合ぬさらし賣　松原新町西へ入　一有
願ヶハ七月大にさだめたし　同町　梅氏
學校の松植そめん年の今朝　御幸町高辻上ル　一歩
和らかく若葉は蝶の齒にあへり　同通橋詰　林夏
實嬰にまた來て酒の懺悔哉　同通高辻上ル　松竜

隠されぬ物は鰥よころもがへ　柳ノばゝ松原上ル　一正

鮎の時桂に見たし水車　松原堺町西へ入　松軒

大水の何いづべきや春の雨　同町　大見

此氣にて白魚見たき淸水かな　同町　鴨流

昨日見あけけふ踏んで行落葉哉　同町　遲速

山城やおなじ谷にて長なすび　同町　只石

早蕨やゆがむもおのが一すがた　同町　巴石

氷たる池またあるやよめな黄　松原西洞院西へ入　勝伊

掃もよしはかぬも嬉し雪の門　高辻新町西へ入　雖志

まむざらに蛙咎なしけふの雨　高倉四條下ル　雪山

老人や氣ほど數釣蝙かしら　御幸町高辻上ル　三好

河狩に行て留る歟宇治の里　富小路松原上ル　林松

けふあやめ晝過て見ぬ人惡し　寺町高辻上ル　一喜

作者次第不同

車柳　常風　山之　柳水　芦秋　義雪

柳庵　敏水　澗水　自笑　自閑　正三

家次　風夕　林山　林之　白笑　可卜

定林　卜水　春木　櫻木　以來　正明

若水　信竹　松門　意計　一十　梅香

貞之　虎竹　秋山　松令　水入　續久

白笑　貞女　嶋女

誹諧點者並誹諧師

四條通ヨリ三條通マデ之間 次第不同

乾　貞恕　東洞院通四條上ル町

水草にいきた花とふ螢哉　貞恕

眞珠庵如泉　寺町通四條上ル町

鹿起て雜煮にむかふ深山哉　如泉

紫藤軒言水　新町通六角下ル町

紙鳶裸子はみぬ都かな　言水

吟花堂晩山　御幸町通錦小路上ル町

おもくれでさすかの一重櫻哉　晩山

高田幸佐　御幸町通三條下ル町

三門に似合しき物よ花樗　幸佐

菅谷高政

閼伽棚の菊かさし行ねすみ哉　高政　（富小路通錦小路上ル町）

東林軒定之　（東洞院通六角下ル町）

室町の果や薄打穂の暮　定之

椿木亭助叟　（錦小路通室町西へ入鑓木のづし）

初秋の水にかへすそ香蓄散　助叟

有明軒良詮　（新町通一條下ル町）

人魂にさかるゝ鷹の妹婿哉　良詮

幽賞軒立植　（六角通柳馬場東へ入町）

髪結も嘸あさがほを仕舞迄　立植

誹諧師　並作者

今朝開けば蟬の地に鳴一葉哉　（新町四條上ル）友作
曇る日を窗に明おく雨戸かな　（四條西洞院西へ入ル）[illegible]燕
静なる物は全しかゞみもち　（新町六角）如帆
梅が香よしたふに我が行所　（にしき室町西へ入ル）如琴
撫子や鉄して切ル世のならひ　（新町錦上ル）爲文

世のさまや我鉢の子に山櫻　（同通六角下ル）鳥玉
寐る時はとぶでもおりる雲雀哉　（たこやくし新町西へ入）朋水
一夜さは妻も替るか網代守　（西洞院にしき上ル）小稽
土用干女房が異見酒の黴（カビ）　（同町）白木
涼しさやどこまわりても椽の角　（同町）通見
すゞしさや田に水かけてもどる里　（四條新町西へ入）元來
草〳〵に風のとゞかぬ枯野哉　（櫻木町三條下ル）古柳
松風のたゆみ〳〵の蛙かな　（同町）惠方
送り火をふくや無常の鬼の息　（知恩院町）柳雪
七夕や一夜機織ル女なし　（烏丸三條下ル）空礫
布ちゞみ羽織やゆきの長短　（西洞院四條上ル）岩勝
ありやうは饒（ジヤウ）にのまれぬ清水かな　（知恩院町）凉風
都鄙の人氣を潤せり今朝の椿　（四條道場）椿素
蓮の花酒臭（カウ）ぬ口のながめかな　（新町四條上ル）清昌
盲目の松風すます春日かな　（同町）都雪
ほく〳〵と百足すぎて一葉哉　（同町）和海
悪からじ卯木をしめす夜るの雨　（同町）志計
はな過て花見の手本習ひけり　（堺町三條下ル）集加

うつくしや凩までも高尾山　室町三條下ル　勇山
梅苗や難波わたりに賣てなし　西洞院柳ノ水ノ町　風葉
關越て來るほど違ふきぬたかな　たこやくし御幸町西へ入　惟豊
夜は寒し閼伽汲ム袖に入千鳥　ふや町六角下ル　素秋
蚊やりせし暮を手あぶる火鉢哉　同町　歩叟
凩や仁王はつねの眼だま　にしき室町西へ入　宗卜
犂になれ白魚見せんみやこ人　室町三條下ル　秀興
ひとつゞゝわけて聞たし虫の聲　同町　殘之
夕顔は大工の歸る詠めかな　室町にしき上ル　卜也
傾城の筆とはつらし梶の哥　四條立賣西町　三秋
菰刈や淺かの沼のみつちやづら　堀川六角下ル　魚住
蓮池の岸はねぶたき所なり　同町　一言
見たやうにあつくはあらぬ峠かな　岩神四條下ル　一秋
蚊の耻よ蚊遣は哥によまれ梟（鳧）　四條南良物町　萠也
時鳥瀧の音をとる葉柴哉　同町　言林
ふけ扇夏野ゝ鹿もよる斗　ふや町にしき上ル　流水
卯の花にたゝねばしれぬ胡蝶哉　同所下ル町　素丸
卯のはなはいやしからざる月夜哉　三條御幸町下ル　榮道
入相に下戸引起す月見かな　東洞院にしき上ル　吟望
露分て我ゆびを切ル土龍（トカゲ）哉　六角通柳ノばゝ東へ入　千植
蝶よはし背くらべいかん萩の枝　同町　茂春
髮のある女やさしきおどり哉　同町　保高

作者次第不同

一至　昌水　玄利　源水　玉人　我止
自謙　鬼外　澄正　詳庸　林豊　風子
流水　時久　雲志　晩柳　清信　梅流
正興　政要　芦舟　石桂　鶯吟　正重
友之　重山　志看　桐榮　直貫　信治
一平　千里　好昌　流石　夏木　元水
定林　卜水　以來　東月　甫草　正利
推月　佳園　榮元　政之　如竹　和仙
泉風　光正　一薫　林松　松風　清信
一樂　末及　竹子　如水　下松　亂風
夕雨　宗安　三柳　下筵

誹諧 京はぶたへ 二

曉古
逸韻

誹諧點者並誹諧師

三條通ヨリ二條通マデ之間 次第不同

向陽堂好春
御幸町通押小路下ル町
よたりして御蚊屋つるらん女房達　好春

池流亭松春
衣棚通御池下ル町
京にさへ茶をもむ人はもみにけり　松春

春花堂松笛
車屋町通押小路下ル町
帶とかぬ人はまたるし夏の瀧　松笛

友鶴山人芝峯
西洞院通御池下ル町
子の妻の鼻や噓らん五月雨　芝峯

則風
油小路通二條下ル町
蝙蝠の日午飛筆の林哉　則風

田中正業
堀川通二條下ル町
石井筒似もにす落る一葉かな　正業

竹葉軒風子
三條通川原町西へ入町
欲過て盛遅れぬかへり花　風子

誹諧師 並作者

若夷人よろこばすはじめ哉　御池西洞院東へ入　元清
同じ口になりてそろはぬ眞瓜かな　三條油小路東へ入ル　未達
思ひ出し〳〵降ルしぐれ哉　同[illegible]へ町[illegible]吉　烏水
花の雨二王の作を聞ばかり　押小路富小路西へ入ル　圓佐
出替りに虎杖山の荒に梟(鳧)　同町富小路角　常雪

五月雨やこゝろ隙なし夢ばかり　烏丸御池下ル　慶命
夕顔や子は親犬のふところに　雨がヘ町二條下ル　淵瀬
御廟野は花見ぬまでの念佛かな　雨がヘ町御池　和海
鴨弥も憂や堤に鳴きつね　同所　一翠
牛飼の心見おとす花野かな　同所　如稲
來る人の氣を預りし柳哉　同所　一海
鉢扣世の過うきもすゝむる歟　同所　芝蘭
見ぐるしやもぎ盡(ツク)されし菅の果　柳のばゝおし小路　補方
入相の遠音をつゝむ茂りかな　ホや町二條下ル　芳澤
凉しさを鷺とくらべる扇哉　同町　笑山
腹の立時見にゆかん山ざくら　衣の棚御池下ル　雨行
朝霧のほつれなつかし鳥羽車　三條大橋　脅之
大釜は只三たぐりの錺かな　ふや町おし小路下ル　松下
都にて近江にまけしかぶら哉　同町　好山
飛石やどこらをふまん炉路の雪　押小路烏丸東へ入　良昌
澁鮎やなれて汲るゝ水車　烏丸二條下ル　櫻友
文よたゞ泣事千度秋しぐれ　同通場ノ町　如水
散ル柳一葉あらそふ氏子かな　同町　露訂

凉しさや大魚はねる沖津船　川原町二條　賦山
たゞ獨鍬かたげ行枯野哉　三條富小路西へ入ル　水色
若(モシ)蛙言(モノユウ)ならば吃(ドモル)べし　二條車屋町下ル　柳淵
細るなとほさじ野邊の揚灯籠　車屋町押小路下ル　信武
女達テら躍といへる人もなし　同町　雪川
葛の葉や夜ルは(暴)風によれる音　雨がヘ町御池　雪山
寐覺には我が兒すごき氷かな　高倉押小路下ル　李梅
まきものをそのまゝ出すのぼり哉　押小路柳ノばゝ東へ入ル　正光
一降はつゆの中なる夕立哉　押小路ふや町　不知
水車廻らぬもあり秋の暮　油小路三條上ル　數市
名月やそゞろに物の遠キ音　室町ゑんノ行者町　桐木
兒白し櫻に夜汐くむ女　同町　水流
鴨の音に年〳〵生し白髪哉　室町三條上ル　松隠
白露を拾ひて女嬬の化粧哉　衣棚三條上ル　塞月
夕立や土の香嗅す一となり　竹や町柳のばゝ　杜若
いたみ喉どれと定メて切ル菊ぞ　頂妙寺通竹や町　萬可
お火焼や疱瘡したる子の數多き　室町三條上ル　入安
躍子の袖のしわのすゞのとかな　小川二條下ル　竹枝

辻踊明日は車の道なるべし　同町　林鳥
けしの花開くに隙のいる事よ　同町　圓山
山寺の暮に淋しき風鈴哉　衣の棚二條下ル　薫風
麥たけてあみがさいらぬ朱雀哉　同町　薫木
良(ヤヽ)ありて蠟(スポン)首出す蓮かな　押小路東洞院東へ入ル　信治
寫すべきあくびに秋の友もなし　東洞院押小路下ル　酒的

作者次第不同

正勝　圓之　玉芝　松聲　楓山　白鴉
光之　夕推　光益　友船　廻雪　三德
明信　棹哥　正之　和得　幽林　長貞
山信　西德　桂中　貞安　全林　白水
金竪　玉之　自笑　繁姿　一計　和石
松山　勝貞　秋扇　竹淸　秀貞　和夕
何夕　貞友　雲竹　自休　成重　光矩
由良

誹諧點者並誹諧師

二條通ヨリ下立賣通マデ之間　次第不同

高瀨梅盛　二條通西洞院西へ入ル町
ひかしより世はおさ丸き春日哉　梅盛

蘭化堂常牧　油小路通丸田町上ル町
陽炎や靜る牛の丸なから　常牧

伊藤信德　新町通竹屋町下ル町
尻ひとつ虫に喰せん山櫻　信德

寺田重德　寺町通二條上ル町
妹かりや墓の繪のいさきよき　重德

谷崎谷遊　高倉通竹屋町下ル町
三具足鶴にてしりぬ善導忌　谷遊

鴨水只丸　川原町通二條上ル町
更衣見ん三條の人とをり　只丸

北條團水　兩替町通二條上ル町
寝ても〳〵目さむる夏の青み哉　團水

菅原琢石　新町通竹屋町下ル町

鞠過て滿月かゝる柳哉　琢石

青木鷺水　御幸町通二條上ル町

夕かほにおもたき薹の歩みかな　鷺水

吐雲閣天龍　丸田町通西洞院東へ入町

相撲とりに秋たつねけり食味　天龍

中川引牛　丸田町通新町西へ入町

青梅はよく味はへはすけもなし　引牛

鵜殿心咲　猪熊通丸田町上ル町

比叡の鐘より〳〵落ル神樂哉　心咲

惠鳳軒立吟　堺町通竹屋町上ル町

風の來る窓をひらいた扇哉　立吟

童種庵淳竹　二條通油小路西へ入町

むかふ書にこゝろぞちらぬ蟬の聲　淳竹

夏夕　惠比須川通柳馬場東へ入町

怺や猶ほとゝき過た聲の艶　夏夕

誹諧師　並作者

後戸に飽まで花のさかり哉　高倉二條上ル　春澄

しら藤よ雪の時分に咲たらば　同町　千春

花のなきよしのに入らん師走哉　洛西若水寺　篁水

瀧川に筏ははしる鹿驚哉　同所　潤口

宮人に柳さはりて覺にけり　木町間ノ町　且閑

家毎に苫をおいて出ル花見哉　二條油小路西へ入ル　原水

ある時は十日も降らぬ時雨かな　竹や町両替町角　柳水

物見より公家の柴よぶ櫻かな　二條玉や町　底元

橋の霜雀の跡や馬の跡　小川下立賣下ル　意醉

あれほども寐られぬ物か櫻陰　同通魚棚　蔭推

果しなの小鮎を作ル日になりぬ　同町　一要

友ずれも氣高き蓮の葉風哉　洛西武弘忠栄寺　貞嶺子

月見る夜更に名所の望なし　洛西　蟻想

はしかいぞそれは麥の穗飛胡蝶　雨がへ町竹や町上ル　太枝

物すきや匂はぬ草にとまる蝶　西洞院二條上ル町　京　芭蕉

喰ヒ物に嫌ひがある歟魂まつり　烏丸下立賣下ル　知房

三葉ちりて跡は枯木や桐の苗　小川さはら木町上ル　凡兆
蝸牛の富士にのぼらむ姿哉　烏丸竹や町下ル　漁舟
藻の花やゆたかに開く波のうへ　竹や町室町東へ入ル　升具
鶺鴒かきのまたけといへば清水哉　同町　冬風
離れ菴菖引ぬく日こそあれ　さはら木町間の町　富玉
麻蒔に鳥うしろに續く哉　油小路魚ノ店　如遊
ずら〳〵ともみ出しニけり今朝の秋　二條樋ノ口　我鉅
黒鴨の人交りのならぬ也　川原町二條上ル二丁メ　一林
月は去(イニ)殘りて山はたゞ居るや　竹や町東洞院東へ入　松林
山雀の目ぼしを返(カエ)す木の間哉　室町竹や町下ル　重慶
芹若ヵくまだ蛙子の飛ざりし　同町　哥風
誰かひろげてもすほめても扇かな　同町　不殘
あさがほは痒さをかゝぬ詠めかな　室町二條上ル　如翠
梅が香は世ゝの哥人の寐息から　同町　觀子
何あらん名月山をはなれぎわ　烏丸下立賣下ル　吟睡
六月や寐られぬほどの夜るの雨　同町　元惠
歸るなく足跡つとふ雪見哉　同町　柳石
見た所蛙毒とも言(イヘ)るべし　新町下立賣下ル　三友

櫃の菊むしるは稚(アサナ)ごゝろかな　同町　三竹
月影や茄子ひとつに又壹つ　新町魚棚下ル　草也
黒き牛の尾ばかり見ゆる夏野哉　衣の棚九田町下ル　未及
短夜や一村雨のあまる音　同所　間柳
まじめなは角に御座るか魂祭　さはら木町堺町かど　醉雪
春雨に隣のあくびうつりけり　同所　玉葦

江戸衆ニ逢し時

土用哉やらるゝ物なら京の水　さゝら木町高倉かど　翅之
雷よ夏の季に成さうな物　同通高倉東へ入ル　玉淵
晒たつ折ふし初音楽にけり　丸田町東洞院西へ入ル　貞則
ひとつ出て後にも壹つ螢哉　同通烏丸東へ入　柳枝
川狩に田中女のさゝへ梟　(梟)同町　私言
汲干シて覗けばもとの清水哉　同通東洞院西へ入ル　南枝
一瀧の雪吹にふとる氷柱哉　同町　澗山
落つかぬ氷柱の中の松葉哉　二條二王門町　友夕
吉野路は牛に乘たし春の山　同町　昌宜
秋風に身のすくまるゝ北斗哉　同通矢橋町　田水
三ケ月を網に打込ムひづみかな　同町　晉水

遣水に魚放かな夕すゞみ　二條堺町　流螢
風上霜の秋の夜鐘の音　コエ室町竹や町上ル　正甫
曙に消のこりたるほたるかな　同大門ノ町　朝風
捨られて草むらいじる螢かな　同町　嶺夕
菊問へば内義答ふる都かな　竹や町通東洞院東へ入　阿誰
たのしみよ小蝶も花の一勢　魚棚油の小路西へ入　右貞女
花にいざよしのゝ人に留守させん　同町　洞鳥
人ゝの香のまよひなり若たばこ　竹や町東洞院西へ入ル　白水
傾城や躍こゝろのあるもよし　車屋町竹や町下ル　遊計
けいせいやをのづから吊盆の萩　いノくま魚ノ棚下ル　丸目
世の哀芹摘澤の經木かな　新町竹や町下ル　隨友
京に出て夏をしるらん氷室守　烏丸丸田町上ル　貫風
日和見は雪を霖るらん碇船　東洞院二條上ル　正興
雛まつり見ればせむしの娵かな　衣の棚二條上ル　定宗
峯までも植もてゆかん早苗哉　ひくらし丸田町下ル　又玄
菖蒲の日都ぞ匂ふ比叡の雲　魚や町堀川西へ入ル　秋竹
あたりでも鞠に疵なき柳かな　西洞院丸田町上ル　流水
悪からじ蟬にいねぶる禰宜貳人　二條高倉西へ入ル　龜友
打落トス盃はなのいわれなり　車屋町竹や町上ル町　吉音
九条には水菜を閉る氷哉　同町　朝愛
桃の節句伏見をたして都かな　同町　梅竹
稀人にしばし無言の雪見哉　車屋町丸田町上ル　車俵
八重一重見て批難なし山櫻　同通二條上ル　芳流
西瓜賣肥たる人に尋ぬべし　新町竹や町下ル　盤海
川音にゆるゝさまなる穗蓼哉　烏丸竹や町上ル　石流

作者次第不同

命政　金竪　莇之　保木　從心　松音
松閑　定吉　花林　水仙　我赤　蒲穗
可山　曉水　梅山　鉄盃　鹿玉　魚水
澄風　卓詠　鳫鶴　一舟　月笑　花曲
峯子　松吟　一言　又左　心水　流水
出圓　窓顔　百内　重則　可見　春風
宗利　珊瑚　旭山　鼠角　山茶花　珍水
一遊

誹諧點者並誹諧師

下立賣通ヨリ上京柳原マデ之間 次第不同

竹山重榮　室町通上ル下柳原

けふの月や花に申さは名取草　重榮

服部定武　新町通中長者町上ル町

七月は變化物くさき時分也　定武

橘柱軒薄古　藪屋町通出水上ル町

早々稲や陽のゆるみのたなつむろ　薄古

木戸丈竹　小川通上行當妙顯寺西へ入町

蜻蛉の蹴て行水の淀み哉　丈竹

撒谷松月　中立賣通西洞院角

いかにせん綿くる里に鹿の聲　松月

一二軒陽川　小川通上長者町上ル町

むし干やさうした中に枕して　陽川

秋香軒丁常　中長者町通小川東へ入ル町

葉の盡キて月の裸に隱れなし　丁常

河副宗量　小川通中立賣上ル町

秋立てはおりにうすき日足哉　宗量

二竹軒生西　上長者町通小川東へ入ル町

咲物か木にしら雲か芳野山　生西

誹諧師 並作者

若は日に乳長出て見る蛙哉　室町今出川下ル　山卜

つり陰葱(シノブ)女ばかりの物見かな　同通長者町下ル　一雫

いづれとも花とは見えず杮のたう　寺町上御靈　花扇

氣のはづむ山櫻かなあらしかな　中立賣松の下　松壽寺　鶏賀

花に暮俗に羽織を返し　室町下立賣上ル　梟(梟)正隆

遊ぶ子を柳につなぐ田植哉　下立賣西洞院　商山

竹の子や畠隣に惡太郎　中長者町堀川東へ入　去來

迷子の泣〳〵つかむほたるかな　中立賣西洞院　流水

おかしさや田刈男に落ル鴈　同所　潤水

日の歩さながら姤し氷室守　同通小川　觀水

不稟(ヒンス)なる姪に見せたし關ずまひ　大宮中立賣下ル　松詠

夕暮の山や霞の逝(イニ)所　小川蓮池　遠之
ゆく人の所や替へて舞雲雀　下立賣油小路　梨雪
動きけり蟬のぬけがら蟻が家　東堀川本誓願寺上ル　西角
平野こそ暮待かねて飛螢　室町下長者町下ル　水風
晝顔は日影になりてくるしいか　小川上立賣室町西へ入ル　壺中
青二引釋迦八十のねはん哉　小川一條上ル町　直氏
虫提ていやしきをのれ賣に梟(発)　新町中立賣下ル　情入
待合すつれも木の葉の山路哉　下長者町西洞院西へ入ル　浮草
春雨や耳の垢とる椽の端　室町中立賣　景卿
水仙や灰汁(アク)漉(カス)捨る藪の陰　同所　遲牛
桶の輪のきれて鳴やむいとゞ哉　同所　荷葉
更ル月呑よ其酒有次第　同所　慶笑
夕立の果しや直に初あらし　小川中立賣下ル　正豊
蕗の葉は蛙の里の日笠かな　中長者町小川東へ入ル　龜女
かも瓜や垣ねの霜に耻多し　油小路中立賣下ル　永之
諸鳥の羽虫を洗ふ清水かな　同町　素雪
破れざる松はちいさきばせを哉　大宮中立賣下ル　宗明
一息は呑もの〻ぬも清水かな　大宮中立賣下ル　春水

誰が煙かすみにあわれ蓮臺野　寺之内通百〻町　安重
袖のなき猿のかわゆき木の實哉　下長者町西洞院西へ入ル　松船
花の露ならではなめぬ鳳蝶かな　中立賣西洞院西へ入ル　龜三
帷子の裏着てしばし凉み哉　一條小川西へ入ル　凉傘
堅(カタイ)情(ジ)に夢さへ秋の住家かな　西洞院下長者町上ル　嘉保
人の顔いづれ痩たる秋の暮　同町　雪川
壁(カベ)人(ボシ)を百合に見合す女子哉　下立賣千本西へ入　我ト

作者次第不同

丈有　正榮　林下　二休　一星　税山
宗宇　柳子　洞水　琴風　一室　光俊
不酔　元昌　屏風　定悦　了安　忠利
春清　行雄　直信　春山　旦筆　丈柳

誹諧點者並誹諧師

西陣

鶏冠井令富　西陣あわとの町

蝙はさそ内や床しき横簾　令富

藤谷貞兼　今出川通大宮西へ入町北小路町
きり殘す岩のはな見や吉野川　貞兼

鈴村信房　同通西へ入二丁目
契り星さこそ木にとも鳥にとも　信房

眠柳堂常春　寺之内大宮西へ入二町目
起ると狄には早し窓の前　常春

佐藤舟露　本誓願寺通知惠光院西へ入二町目
菱咲てゆへよ蟷も惡からす　舟露

佐藤友扇　盧山寺通大宮西へ二町メ
この暖ｻさう乘井ものか纀守　友扇

市村殘石　北野經堂通今小路町
今朝初穐先天上の五衰より　殘石

八木如水　大宮通上立賣上ル町
顋體に鰤のいきたを問に梟(梟)如水

吟燈子雲水　北野おまへ通千本西へ入二丁メ
なんそきく耳有は社今朝の炼　雲水

誹諧師 並作者

にげ水につれだつ鮎と藥雨かな　寺之内　墨袖
物ずきに植てもいやしかき小角豆　大北小路大宮東へ二町メ　器水
須磨の浦何やらたらぬほとゝぎす　大宮一條上ル二丁メ　貝水
つれなしや小野小町と落蔘と　本誓願寺前や町　可閑
脇ざしや花の戻りに撫て見る　寺之内天神のづし　芦角
こら〳〵と燒野ゝ石や礫ころ　上立賣堀川西へ入ル　乙勝
とる時や薺の汁のかゝり爪　西陣糸や町　益忠
大文字中がきれてやひがし山　同本伊佐町　宗勝
鷄旦や五德そなはる庭竈　同糸や町　德忠

光明無量壽命無量
壽命のみか光りあまねきけふの春　依西法子
さるとりは二幅一對のえ方かな　西陣本北小路町　宗清
たらつくやもるとて花に茶辨當　淨福寺西へ入北小路中之町　知德
水ふりかめぐる時雨の糸車　西陣糸や町　益貞
こもしほや都のつとに櫻鯛　同五辻町　種園
御忌の下向日もかたぶくや西山派　同所　勝周

顔に火や薪の能のしそこなひ 同櫻井のづし 公意
姫瓜の畠も見せぬ化粧かな 同本北小路町 了元
今宮は葉守の神か柚鉾 同五辻町 貞長
異風でも祝ひからやうの吉書哉 同本北小路町 正愛
春を憐垣はひとよのまたけ哉 同所 悦章
人ごみぞあたら櫻のいせをどり 同糸や町 政則
双六や手酒もくいちとうち花見 同五辻町 忠嘉
國の花やまいらせ籠に櫻鯛 同所 尚春
うかべ〳〵水の花瓜ひやし物 同所 正辰
平岡や御粥にぎはふ竈かな 同本北小路町 行榮
水ほそく蜻蛉(ヤンマ)ながるゝ夕日かな 一條堀川西へ入ル 枕流
世ノ中よ夏花ながるゝ秋の水 西陣富屋町 定勝
類による吉野の春に松もなし 五辻一色町 一之
花なせり池の繭黄に千ゞの紋 蛯榑木町 延清
曉の松より寒しうたひ聲 北野境内 貞義
雪の香に夢はさめけり南顔 蛯寺前之町 定隆
常盤木か末は煙の若たばこ 寶山寺町 春豐
借りに來る琴箱にくき師走哉 黑門中立賣上ル 好行

一厘二厘破(ヤフ)るゝ音のばせをかな 同町 吟松
鳥の巣の跡揚て行茶摘かな 大宮一條下ル 一松
青麥に罪持ぬ身の哀也 同中立賣上ル 介水
暮相は蜘の網くるばせをかな 藤木大宮 庭水
いもとには日向むしらす小角豆哉 同所 以水
初笑や松にこぼるゝ筆の聲 千本五辻上ル 貞眞
飛石を磨やう也あきの月 御霊馬場橋町 書林 舩山

作者次第不同

玄呂　友俊　梅水　明風　桃羊　利明
攀高　季南　流螢　素卜　一通　西風
舟山　臥雲　團雪　花月　常久　榮枝
清房　召柳　芦風　青笑　春昌　白糸
塩水　房尚　宗明　元理　林角　一星
親昌　正次　清水　舟玉　正景　古清
宗種　定勝　重武　是信　友知　宜隆
易莚　冬木　如舟

予が句は切字なし、はなや花産(ウム)させば一句おさるべし。よしやこのまゝ　車屋町通竹屋町上ル町

するゝと花の花産杜若　林鴻

俳諧隠者

友貞 一條通烏丸西へ入　友静 烏丸通一條下ル　忠直 富小路通押小路下ル
自悦 高倉通押小路下ル　如風 御馬場通八幡町下ル　秋風 室町通御池上ル 今ハ鳴瀧ニ居ル
順也 堺町通丸田町上ル 今ハ嵯峨ニ居　如雲 両替町通竹屋町下ル　千之 高倉通二條上ル 今ハ知恩院町ニ居
可周 新町通二條下ル　一旨 錦小路通油小路東へ入　重好 猪熊通丸田町下ル
重知 恵比須川通堺町　貞竹 小川通三條下ル

已上

俳諧清書元

蜘の巣の日に／＼ひづむ若葉哉　是正 新町通丸田町上ル木村源六
撰取にしても残らぬ木綿かな　季泰 西洞院通六角下ル町西洞軒
世を見れば律義にあまる時雨哉　予潤 堀川通本誓願寺上ル町
花に来る山蜂人のやまし梟(梟)　琴蔵 東洞院通出水上ル町

しらなみのむかふまばゆきほたるかな　圓木 西洞院通二條下ル町 芦月庵清書元

俳諧書林三物所

はいかい京はぶたへの賀

竪横の糸の艶あるきぬた哉　重勝 寺町通二條上ル町 井筒屋庄兵衞

ひとの國のをんなは、錦に詩(カラウタ)を織る。わが京のおのこは、羽二重に誹諧を織りて世／＼の寶となす。それはこれ誰(タソ)林鴻　信徳

林鴻子来て誹書板行なる事を告る。見ればもろ／＼の数寄人の句を撰し、奥に誰々の跋有。予にも筆を加(クハ)へよといふ。そも我が世は草庵に雨を楽み露吹ク風を一衣の紙服にしのぐ。是を足(タル)のみ。京羽二重の華なるに手をさし入んも如何。　露吹庵和久

江の錦は詩（カラウタ）の種、和風の姫はさゝがにの糸に名をへて、世人とばりのあやに織事たえず。爰に林鴻士、五百機たつ雨窓の前、一塵の障なく、世のふしぶしもあらぬは京羽二重か。

言水

鄒國の千織薦大賢ヲこゝに林鴻子、あまねくわざと男のつぶやくを揃て、四滋の竪横にひけらかさんと、緒の幗をかまへて、京羽二重を編て綜紮の餘に跋を乞に、其糸口のむつかしきまではしらねど、兎毫の梭を手にはしらかして、きりきり爲撥てうちうち打。

辛未無射念五日　吟花堂晩山

陳留の若蘭が錦の詩（ウタ）は。わづかに尺に満ざる間に。八百余の文字を織て。漣波が心の水に洗へりとかや。少林鴻といふ者あり。山の經（タテ）水を緯（ヌキ）にして。はたをる虫の夕夕。京羽二重工なりにたり。吁すきものゝ家路まどはぬ。はいかいの山わけころも。たもとゆたかにしたてよと。鴻子にをくる此一言。鴈のつばさに秋の風

旹元禄四年辛未秋聞八月下浣

蘆月庵似船書之

林鴻子五色を文どりて、錦城の竪横をわかち、そのはじめに白撰糸の緒（イトクチ）を書して練出したる京羽二重一疋、花濕テ當レ令ニ走ノ馬ヲ看ニ工多ク休ムヿヲ嘆ニ下レ機ヲ遲ヿヲ。

元禄萬年之四秋之季月之晦

鴨水只丸下翰於弄松東軒

鳥飛ときは足をちゞめ、うしたゝかふときは尾をすほむる、みな作用也。今林鴻子がゑらむ所は、宋元の畫工を仙臺にみるか。ひとしく隱（カクレ）たるをあらはし、蜜（カクレ）たるをしらしめぬれば、笑ふもあらん、あふぐもあらむ。

洛下永昌坊清白老人跋

夫俳諧は人の世話を種として、よろづの句とぞなれりけ

る。爰に堀江氏林鴻子は此道を好て年久し。其いさをしの餘に此一集を編む。呼奇なるかな。古人の曰、誹句は連哥より其さまいやしく、いはゞ商人のよききぬ着たらんやうにすべしと、そのきぬやこれ京羽二重。

元祿四ひつじのとし中秋中浣

幽竹堂幸佐

誹諧の京羽二重は七夕妻（ツマ）の手際にもあらず、生田の神の織おろしにてもなし。堀江林鴻の練仕立たる所にして、此道の緒（イトヘヅ）長く傳れとなり。我これを見るに勒（テハ）思女ノ在（ルヲ）機（ニ）といひしを、林鴻子もさおもふなるべし。先哲もまたこれを感じて、今や草の原露に潤（ウルヒ）なん八月の日

蘭化堂常牧書

堀江林鴻子京華誹師の句を集て、此羽二重に書り。其遠大のいさをし、彼者林ノ遠ヵ之紙衣の祿といづれぞ。好春曰、別々不別

林鴻綴（テ）誹諧ノ集（ヲ）名（ク）京羽二重（ト）所（レ）謂京羽二重（トハ）者京師（ニ）所（ノ）織出（ス）之密絹（ナリ）也其美（ナルコ）恰（恰）（モ）如（シ）以（ニ）羽毛ノ兩片（ヲ）作（スガ）經緯（ト）今以比名（クルコ）之竊（ニ）比（スル）蘇若蘭（ガ）錦字ノ詩（ニ）者乎

招鳩軒
方山

請跋諸

林鴻所撰俳諧京羽二重一部四冊

讃曰

虚談誤世王夷甫

園水書

ひよつと見つけて星ひとつ、さゝがに姫の手わざにならひ、風雅の縷をたゝするものは誰ぞ、洛の雲風子、滑稽の林に遊びて好士の藻を吸ひ、妙句を翅につゝみ經となし緯となし、京羽二重の綺を織出す。是俳諧の吳服鳥か。胡曾衣を作れば伯余裳に縫にひとし。林鴻士が功。

重徳

詩々の錦を織て情の色を顯せしは夫(ツマ)に貞義のせつなる也。俳の京羽二重を編て風雅を述しは、友に愛敬の淺からぬ也。其人は誰ぞ、何某の林鴻、紡績の勤たゆみなくて、いちはやくひと巻となりぬ。予衣店の市中に此絹を得て筆すさみに端書する日有。

元祿三の秋閏燕去の末、洛下塵々の隠士

池流亭松春

誹諧京羽二重 三

誹諧京羽二重目錄

並　下の句中のつゝ
夢　夢想のはいかい
句　句數之事　大嫌
二　二句嫌物
五　五句嫌物
面　面嫌事
神　神祇之詞　非神祇詞
戀　戀之詞　非戀詞
述　述懐之詞　非述懐詞
居　居所之詞　非居所詞
山　山類之詞　非山類詞
象　天象之詞　非天象詞
百　百韵之事
並　四十四句之法
並　源氏之法
千　千句之事

並　和哥ノ五儀　連哥ノ八躰
本　本式はいかい
打　打越嫌物
三　三句嫌物
七　七句嫌物
折　折嫌物
釋　尺教之詞　非尺教詞
無　無常之詞
人　人倫之詞　非人倫詞
夜　夜分之詞　非夜分詞
水　水邊之詞　非水邊詞
四季　四季之詞　非季詞
法　百韻之法
並　歌仙之法
並　首尾之法

目録終

◎道統之圖　附柿（カキソノ）園之事

宗鑑法師　山崎人也。以ニ俳諧ー得ニ其名ー、所レ編有ニ竹馬狂吟集、犬筑波ー行ニ于世ー。

荒木田氏守武　伊勢人也　俳諧獨吟之千句

從五位上荒木田氏武珍、勢州之人守武之末、望一勾當勢州人也。有ニ俳諧獨吟之千句ー。

松永氏道遊軒貞德　号長頭丸又明心居士

攝州高槻城主入江盛重息入江五郎ノ孫、松永永種ノ子也。元龜二年未ノ年未ノ日ニ誕生、承應貳年癸巳十一月十五日未ノ日卒ス。鳥羽實相寺ニ葬ル。花開ノ宿ニより未ノ方ニあたれり。貞德松永を名乘らるゝ事、入江盛重の室に松永霜臺の伯母也。此腹に五郎政重を產り、故永種松永氏とす。永種の母は下ノ冷泉爲氏の息女妙田の女也。貞德は父永種の道をつぎ、連歌を好しかども、是を捨て和哥をもつぱらとし、九條玖山公また玄旨法印より和哥の奥儀を傳受して、誹諧の道をたてせり。誹諧の中興なり。淀川・油糟・御傘之三書行ニ于世ー。

野々口氏 立圃
松江氏 重頼
鶏冠井氏 令徳
木勝寺上人 日能
末吉氏 道節
馬淵氏 宗畔

山本氏 西武
澁谷氏 以重
安原氏 貞室
北村氏 季吟
江戸住 未得
要法寺上人 友閑

池田氏 正式
内海氏 宗恵
中嶋氏 貞宜
荻野氏 安靜
高瀬氏 梅盛
宮川氏 正由

(牡)杜丹花之末

堺住 慶友
江戸住 徳元

江戸住 玄札
大坂了安寺 夕翁

大坂住 休市
堺住 成安

貞徳柿園之事

一大佛殿近き所に柿園といふ有。柿の木を植たれば也。内ニ芦の丸屋といふ有、葭をもて作りたる庵也。是レ哥俳諧の會勤たる庵なり。此前に廊下あり、吟花廊といふ。前に花を植たればかくいひけるにや。是には哥俳諧の短冊ををきたり。作者は都鄙にのこらかたなし。やんどなき御かたもおほく有レ之。次に報恩藏といふ有、此内には法華經千部を納、人丸の尊像より始メて六人の哥仙をかけたり。繪は狩野釆女筆、哥は　妙法院御門跡樣御筆を染させられ、貞徳にくだされけるなり。此故に世の人是を哥仙堂といひし也。さきだつて以悦老人が逍遊集に此事をしるしてつまびらかなれば、おほくは略し侍りぬ。つたへきく俊ッ惠法師が歌の會せし哥林苑などは、いかなる所ともしらず。ちかき比には此柿園といふ名は、かの柿の本の末さかへ行心ちして、柿園万句などゝて有しを聞だにいとゆかしく、かゝる所にて花の晨・月の夕、興ある折ふしごとに、我とひとしき友をいざなひ侍らば、俳諧の稽古も今一入まさり侍らんかし。此所松永懷徳堂より宮川正由にゆづりて、懈らず會つとめられよなど有つるよし聞侍りぬ。いかにぞや今は春の鶯・なつの蟬などの哥よみ侍るのみとぞ。

(賦) 賦物之事

上何　何下　一字露顯　二字返音　三字上略　中略　下略　四字上下略　五字上中下略　一字借音　二字除篇　除毛同前　他添

此外にも巧者以作意しな〳〵取と見えたり。然ども一字露顯の外百韵俳諧には不レ可レ取ル事也。初心之輩取物にあらず。

それ俳諧の賦物は定たる文字もあらざれば、人舟などいふ五ケにもかぎらず、只發句に隨而何成共、興ある字を取ル也。兩韵にかよはざる物を取べし。

予當流の以ニ發句ニそれ〳〵ニ取見すべけれども、初心のためニ古人の作りおかれしまゝ、耳ニ入よきを左ニ記ス。

何茶

初花や目さまし種の〳〵朝朗

是は朝茶と取たる也。發句の中、朝といふ字を何と上ニ置たる也。

餅何

一本や日本にひらく〳〵花の春

是は餅花と取たる也。句中の何字を下ニ置也。右二句にて上何何下の心なぞらへしるべし

一字露顯

なけかしな〳〵寢ぬはうき夜の時鳥

是は寢を音と取たる也。句の中の興字を一ツ取て別の物ニ顯なり。氣を木になし、名を菜に露す事、餘はなぞらへ知べし。

二字返音

籠でかふそらねも高しほとゝ〳〵ぎす

是は句中のぎすをかへして、杉となし侍る也。音をかへす事、何によらず如レ此作意有べし。

三字下略

月は〳〵ひとつ影は日數の詠かな

是は句中のひとつの文字を略すれば、人に成也。中略・上略・四字上下略・五字上中下略も此心得也。別に取様たつるに不レ及ゆへ略す。まさに准知べし。

一字借音

白雪は山の額の〳〵けしやうかな

是は句の中のけしやうのけもじを毛ときかしむ、句の中の音を一字借りて、此方ニ賦べきもの丶名を周く知樣にすべし。よみに作物にきかしむ。露顯に似たれども、借レ音と直ニ顯レ訓と各別なり。能ヽ味ひ知べし。

二字除篇

龍門ならで都へのぼれ＼鱈の魚

是は句中の鱈の字篇を除けば雪に成る。或は松ノ篇を去ば公ニ成、明ノ字を月にする事、皆此心得なり。

他添

鶯やよむ哥＼毎にはね題目

是は句の中の毎ノ字、木を添ば梅と似合しき字ニ成ル也。

右此外に猶作ニまかせ、色ヽの賦物あり、併是等は千句・万句等ニ自然の事也。毎度取物ニあらず、爲稽古之独吟などニは取べし。賦物之取樣も、宗匠之氣によつて家ヽニちがいあり。

㊞ 發句切字 幷に三世のし ぬの分別 大廻 三段切 三字切 二字切 支妙切 手爾於葉

＼切字○そ○か○よ○ぬ○や○つ○ぞ○し○む○かな○けり○あり○めり○たり○や○は○か○は○こそ○なり○なに○など○いく○たれ○たそ○たか○かも○いつ○さぞ○いさ○いざ○けれ○つ丶○らん○もかな○かもな○けりな○もなし○はなし○けらし○ならし○さぞな○かしな○いづら○いづこ○いかゞ○ちとせ○いかにせん○下知

＼下知といふは、あるひは花に呑め、月にうたへなどいふ。物をいひ付ルやうのことばの下知、いかほどもかぎりあるまじ。みな切字ニ成ルなり。

○三世のしの事

＼見し＼きゝし＼ありし＼思ひし＼なかめし

これは過去也。切字ニならずゆへ、△哉とも△てとも△にとも留ゆ也。

＼遠し＼青し＼しろし＼高し＼短し

これは現在なり、切字になりゆ也。

＼おもふへし＼成ぬへし＼あらじ＼みたし

＼ねがはし

これは未來なり、切字に用ゆ也。

○ぬの分別の事

＼雪降て道あらはれ＼ぬ冬の山　是はふのぬ也

＼雪消て道あらはれ＼ぬ春の山　是はをはんぬ也

ふのぬはきれ字にならず、をはんぬは切字なり。

○たとへば（行ぬ（ユキ）／行カぬ）（咲ぬ（サキ）／咲カぬ）（ちりぬ／ちらぬ）（のぼりぬ／のぼらぬ）（笑ヒぬ／笑ハぬ）（畢ぬ也／ふのぬ也）

○あるひは＼うたれぬ＼たれぬ＼くれぬ＼晴（ハレ）ぬ＼ぬれぬ

＼これらは一句のしたてにて、畢ぬにも、ふのぬにも成べし。前ニいだし置、雪の句にてなぞらへしるべし。

○大廻（マハ）しの事

＼あなたふと春日のみがく＼玉津嶋

＼雲はらふ風のみち行烋の＼月

口傳にいふ、＼あなたふと＼玉津しまとまはる也。＼雲＼月とまはる也。

雲はらふ風のみち行月の烋

かやうに月の所を秋としてはまはらず。猶口傳あり

○をまはしの事

はだかなる人さへある＼をきそ始

口傳にいふ、上をかゝへたるをなり。

○三段切の事

＼花はひも＼柳は髮を＼ときつかぜ

＼五月雨は＼峯の松風＼谷の水

○三字切の事

花＼もかなあらし＼やとは＼ん夏の庭

はなかと＼よはらは＼じつも＼松（れ）の（り）雪

○二字切の事

折人は花にうらみ＼ん風もな＼し

○玄妙切發句之事

月ほそ＼しかっら＼やしけりかくさ＼らん

名＼ぞ高き月＼やかつらを折つ＼らん

口傳ニいふ、＼し＼そ＼やの分別といふ是なり。句の中に＼し＼や　とか、＼そ＼や　とかいれずして、らんとははねられず。＼し＼や＼らん＼そ＼や＼らんと分別して玄妙切なり。

○發句、や哉、し哉、けりさまり

などは、てに於葉にてしるべし。

㊄ 手爾於葉之奥儀

○にて留さへ字の事

へをへはへばへもへからぬ

此五の字をきて留候なり。又口傳にいふ、或はへはるかにてへしづかにて　など、かくのごときの虚字(キョジ)なるつゞき詞は、上に五のをさへ字なくてもとまるなり。しかれども句作りによるべし。

○上にこそと有時

へけへせへてへねへへへめへれ

此七ツの字を、上にこそと有時下にをく留字也。

○見ゆ留の事

へうへくへすへつへぬへふへむへゆへる

此九ツの字を、みゆの上にをき候へば、みゆと留(トマリ)侍る。

○かもとまり、かはとまりの事

まよはぬ峯の雲ははなへかは

此句かもととめてはあしく候。かはなるべし。

まよへる峯の雲ははなかも

此句かはにてはわろし。物かはの哥にて分別あるべし。

○上にうたがひの文字ありて、てと留ル事

かゝへ字といふ物いり候。へかとへやと又秀句にて留る事なり。

○下の句、にどまり

て船へはあちに舞はこなたへに

口傳にいふ、七文字〳〵にへはへに〳〵とをきたる也。

○下の句、てどまり

あの世の事へはわきまへずしへて

上ニはとおさへて留候也。又をにてもとめ候。是は句の十字めに、をとをく事也。

○こそといひてをき字なきさま

ちり過て庭へこそ今は花ざかり

雲に入へこそ月の山の端

此二句にてなぞらへ知ルべし。

○らん留りの事

けん　なん　せん　見ん

これは一字はねにて、上ニうたがひの字いらず。ぬらん　つらん　すらん　此三ッかなの時は、うへニうたがひの字をいれてとめゆ也。但し、ぬらんにも、うたがひの字いれざる事有。口傳

○さしのらんといふ事あり

あくるまでうたふに月もすみぬらん

これは治定してはぬるなり。

○治定のかもじの事

夢のみ〳〵か月も今宵はむかしにて

○とにかよふやあり　はさみやとも申也。

山の端の雲〳〵や霞に雪消て

○主なき句といふ事あり

うすがすみはるゝひまかと雲みえて

山見えて、月見えて、などしかるべし。

○有文無文といふ事あり

有文の句

雪遠し富士にふらずばよもみえじ

無文の句

吹まさる風を野中の夕にて

○邪正の句といふ事あり

影もなき水田の鹿の聲ぬれて

此句邪也。

水の月ながれとまるに夜の明て

此句正也。

初心の好所、大かた邪にして正はすくなし。傳をうくべき事とぞ。

○冠さす、袴さす、沓はかすといふ事あり

かぶりきす

しろ〳〵とをきぬる露に袖ぬれて

此しろ〳〵なくても一句聞えし、此五文字に花折ばなどゝありたし。

袴きす

うき世にはうるさき事に住侘て

うるさき益なき詞なれば、七文字遊びていらず。

沓はかす

しら露のたま〳〵來てもたる泪

下の五文字なくてもあらまほし。はやいにてなどあり

たし。

惣じて一句の仕やうによりて、うたがひたる心の句に詞治定あり。心治定の句にうたがひたる詞にてつくる句おほし。畢ぬ、ふのぬ、つゝ留りなどの句も大かた心と句作りとは相違したるのみあり。よく分別あるべし。それをふぬけとも、又はつゝぬけとも申なり。

○つゝ留の事

〵なり〵けり

此字をおきて留侍りぬ。是は上の句の時也。下の句には、をき字におよばず、上の句には先せぬ事也。

〵も〵は

此二字をゝきて留侍り。

○下の句中のつゝの事

〵酒を酌つゝ〵舞遊ぶ袖

如レ此をきけ事也。

体に成つゝ〵茸がりをする

かくのごくの句あしくけ。口傳にいふ、七文字〵に體あることをいひて、中につゝとはをきけ事〵体に成つゝ茸がりをするといふ句。わざ。茸狩ばかりにて悪し。

右ならひある留は、面八句の内にはせぬ事也。

和哥に五儀あり、連哥に八躰あり、是をしらずして俳諧をしるといふ事有べからず。

五儀といふは

遍序題曲流

五月やみくらはし山のほとゝぎす
おぼつかなくも鳴わたる哉

貫之、宇佐宮に參籠して哥の躰を祈けるに、夢に一首の哥を五人の歌仙ノよめり。

遍　あなくるし
序　いとぞくるしき
題　青柳の
曲　我行かたは
流　よるによられで

八躰

平詞風回違心對埋

右何れも口傳也。

夢想之俳諧 百韻之内夢といふ字を嫌ゆ也。その外けやけき事いたすべからず。

夢想に下の句をみたるときは、脇に切字を入レて發句のやうにする也。以上句數を百一句にする也。夢想のはいかいの時は、第三を必て留りにする也。もなし、らん留など、うたがひのことばなるが故也。脇の句も第三、て留りなるがゆへに、こしのてもじ心得べき事也。

本式之俳諧 面八句ノ十句ニして、名ノうらニ六句ニする也。面十句の内ニ名所ヲゆるす。百韻之内、月と花と郭公とねざめと此四つの物ノいづれも打越を嫌ふ也。

夢想本式ト云ニ、口傳有。

（校訂者、以下、句數之事并去嫌、打越嫌物、二句嫌物、三句嫌物、五句嫌物、七句嫌物、面嫌物、折嫌物として、その例を擧げあれど、たゞ連句に嫌ふ文字を羅列せるに過ぎず。すべて省略に從へり。）

京はぶたへ　四

（校訂者曰、神祇之詞、非神祇詞、尺教之詞、非尺教詞、戀之詞、非戀詞、無常之詞、述懐之詞、非述懐詞、人倫之詞、非人倫詞、居所之詞、非居所詞、夜分之詞、非夜分詞、山類之詞、非山類詞、水邊之詞、非水邊詞、天象之分、非天象分、變時之分、及び四季十二月、季詞はさして重要ならざれば、すべて省略したり。）

百韻之事 並 歌仙 源氏 四十四 首尾

一發句は百韻の初なれば、たけ高き句よくゆ也。

一脇は發句之躰を背ざるよし。併、付がたき句なるときは、ていかはりてもくるしかるまじき也。先は對第一之事也。留は韻字と名付て、いづれにてもしかとしたる文字をゝきゆ事也。

一脇は句切を四三とする事きらひゆ事なり。○四○三。三○四。と切ルものなり。

一脇に腰のてをかならずせぬやうにすべし。第三をする人への不禮也。たとへば下戸ニ大酒をすゝめ、ほそ

き橋を渡して老人を待がごし。第三に、て留ならざる故、少にても苦勞をさせる事也と居士の云のこされし。

一第三は付心は少おほやうなりとも、唯一句を幽美に高〳〵すべし。留は、て留幾度もよき也。此外は、はね字留りすべし。此外の留、初心の人かたくせぬ事也。にて留の事、少仕やう有事也。猶外にしるすべし。

一はね字留も第三には、けん　なん　せん　などの一字はねはせぬ事也。三つかなにてはねぬ事なり。脇のやをかりてはねる事有。猶口傳也。

一むかしより發句をわきざしにたとへ、脇をさげをにたとへ、第三を扇にたとへをきたり。是にて付心をさとるべし。

一四句めはかろ〳〵とする物也。留も〵なり〵けりなどとめ候也。但、外の留もくるしからねど、とかくかろくせよとの事也。

一五句め・六句め・七句め、すら〳〵ととなきやうにするが上手のわざなり。力を入てふしだちたる句は、かならず不好候事なり。

一八句めは猶すら〳〵とかろくする物也。月は發句より七句めまでにしてよし。八句めには嫌候なり。但、月なりがたくて七句めにもいでずば、八句めにて自然はくるしからじ。花は發句・脇・第三まで也。外にすべからず。但、獨吟なれば五句め・六句め・七句めにいひてもくるしからず。四句め・八句めにはかたくせぬ事也。此心はこゝにしるさず。

一裏うつりの句もたけたかくすべし。神祇・尺教・戀・無常、連哥には此九句めまできらひ候へども、俳諧にはいひ出てもくるしからぬ也。

一九句めまでならひ有留はせぬ事也。

一此初折の花にちる花などをせぬもの也。いか程よき句をしても、かやうの事相違すれば、習ひなき作者とおもひて淺くなるなり。

一十三句めに花をする也。但、是を定座とおもふはわけしらぬ也。是も獨吟なれば引上て、いづかたに成ともいひ出るなり。十三句めを花の座とする事は、互に時宜をしていひいでずしてのべ候故に、おそなはり

て十三句めに成事也。故に人〳〵よりあひの俳諧に、引あげて前に花をするは大なる不禮也。自然貴人などへ、前になされよなどいふ事は有事也。又、獨吟にても十二句めに花を出す事、待かね花とて嫌候事也。十一句めに植物の出たるとき、花打越とてならべて付る事あり。それも植物にならぬ花もあれば、十三句めになるべき事なり。十一句めには人々心得て植物せぬ事也。

一初折一順の事、發句貴人か珍客か宗匠かにかならず望むべし。脇は亭主しれたる事也。又、第三は發句とおなじ事也。四句めは若役(ワカヤク)なり。但、はやきが規模なれば、功者にさせてもくるしからざる也。それよりは次第〳〵にはやきがよき也。扨又、功者おほくて發句・第三にもあまりたらば、執筆の前を付さすべし。それにもあまりたらば初折の花を望むべし。

一一順にはよき句をねがはず、すら〳〵とする物也。猶口傳

一若キ人・初心之人は、たとひ其時句すゝみ候とも、ひかえて功者に句數をいはするやうにすべし。唯、一座

の禮義をたゞしくせねば、はいかいをしても益なし。

一百韵の句のうつり行心得の事、初折はあまり作意も見えぬやうにすら〳〵として、二之折よりそろ〳〵と作意ある句をし、三之折には隨分作意をふるひ、人の目をさまさせ候がよし。此折は道外たる句もいひて、一興も二興も有がよき也。名殘はかろ〳〵と仕立る物也。併、是は功者とても自由には成がたし。先、此うつり行心持を知り置べき事なり。

一月の句七ツ、此内一座の貴人・珍客にさすべし。若き人・初心の人たくさんニ句數する物あらず。

一花の句四ツ、此内名の花は猶功者のわざなり。それゆへに是をにほひの花といふ也。匂ひの花といふ事色〳〵の說あり、知人まれなる事也。まづしほめる花の匂ひ殘れるなどゝ云やうの事と心得べし。猶口傳也

一あげ句は祝する故、亭主はせぬ事也。あげ句は不レ付がよきといふ也。成程付たるがよけれど、挨拶を入て祝して又遲(ヲソキ)があしき故、隨分はやくする物なれば、つかずともくるしからず、めでたきやうにはやくせ

よとの事也。

百韵の仕やう猶かず〳〵有レ之といへども、事ながき事也。又は祕事おほければこゝにしるさず。

㊟百韻之法、句數之事

一面八句、發句は其時節をたくみに、景氣をうつして一作あるべし。切字はたらき第一也。過去のし文字、又はふのぬなどにて切字に用たる句、初心の句躰に多し。猶工夫有べし。又は功者分の人の句に、或は大まはし。句切レ。心切レ。などいひて、かつてきれぬ句あり。慥なる切字なき句先せぬ事也。哉留りの發句に、早哉(ハヤキ)遲哉(ヲソキ)などは、うきかなとてとまらず、櫻哉　嵐哉と治定して有べし。

一面八句ニ神祇・尺教・戀・無常・述懷・故人之名(ナ)・名所・同字を嫌ふ也。しかれども發句に神祇・尺教・戀・無常・述懷・名所等ならば脇に是非すべし。第三まではつゞくべからず。脇・第三・四句め・五句め・六句め・七句め・八句め等の心得前にくはしく書出しぬ。〇哉留の發句に第三のにて留習ひあり。あるひは、

水あさく根は深芹の野澤哉

これは治定の哉也。第三に、にて留ならず、類哉(タグヒ)などゝあるときは、類かとうたがひたる心にも成也。此時はにて留くるしからず、又哉にかよふにてあり、工夫あるべし。餘はこれになぞらへ知べし。第三はね字留りは、ぬらん　つらん　すらん　此外にも三ツかなにてはねぬ事也。あるひは、

え方に＼や松の落葉のおほ＼からん　貞德

かねをほるまふの深雪＼や解＼ぬらん　立甫

かくのごとく上ニやもじをきて、はねると知ルべし。

〇七のやの事

口合のや　これ＼や此行もかへるも花見衆
切　や　かゝがね＼や唯一つれに渡るらん
中のや　さゝめきて花＼や嵐にちりぬらん
捨　や　かやうにも月のはれんとおもひき＼や
はのや　むさしの＼や種ゝさま〳〵の花咲て
疑(ウタガヒ)のや　まちぬる＼やしらさながらにかよふらん

すみのや
　きゝぬ〳〵やと人にいさめをひたいひて

以上七也。五文字の三つめ口あひ也。五つめは切や也。八めは中のや也。四つめは角のや也。又五つめははのや也、又五つめうたがひ也。是はみな心にてかはる也。韵やは捨や也。右七つはをき所の事にて侍れど、やもじの次手にしるし侍る也。第三て留り、はね字の外、もなし留り・に留り・又は文字にて留る事あり、あるひは、

　春のすゑ天下に名ある郭公　貞徳

かくのごときの文字留は功者のわざ也。初心のする事ニあらず、此留を韵字留といふ人あり、あやまりなり。

一**月花定座**　一面八句ノ内、七句目月之定座なれ共、七句目までは出がちにすべし。自然八句目にも、ふみはづしの月とてする事もあり。

一裏十四句、十句めより月の句か・秋の句かをすべし。十三句め花の定座也、

一二ノ面十四句、十三句め月の定座也。

一二ノ裏十四句、初折の裏とおなじ事也。

一三ノ面十四句、二ノ面とおなじ事也。

一三ノ裏十四句、二ノ裏とおなじ事也。

一名殘ノ面十四句、三ノ面とおなじ事也。

一名殘ノ裏八句、月なし。七句目花の定座也。此花を匂ひの花といふ也。八句目あげ句目出度する也。

右百韵之法月花ノ定座爲二初心ノ古今ノ格式記レ之。

一**四十四句之法**　是は百韵之初折と名殘の折と二折して、二ノ折三ノ折をぬきたるまでなり。法は百韵の折のごくにする也。別の子細なし。

一**歌仙之法**

一面六句、五句目月之定座也。

一裏十二句、八句目月秋、十一句目花之定座。

一名殘面十二句、十一句目月之定座。

一名殘裏六句、五句目花之定座。

　以上三拾六句也

一**源氏之法**　歌仙之初折之次ヘ面十二句、十一句め月ノ定座　裏十二句歌仙之初折ノ裏とおなじ　此一折二十四句をそへて、以上三折句数六十句となれるなり。

一首尾(シュビ)之法　歌仙の面六句と名殘之裏六六と、以上句數十二句に首尾したる迄也。法は歌仙のごくする也。

㊉ 俳諧千句之事

一千句は發句數、十句也。四季の分やう、春之句三、夏之句二、秋之句三、冬の發句二句也。又發句十ながら花にし月にしなど、めづらしくせんとてする事あり。是もくるしかるまじき也。四季に分ル時は右之通也。

一千句のときはならひ有切字、第三にもめづらしき留など傳受さへしをきたらば、仕てもくるしからぬなり。

一卷頭の發句はなるほど、たけ高き發句にする物也。こせりたる發句は必せぬ事也。題も初春・霞・鶯・梅などやうの類よし。めづらしくせんとて俗過たる題などは、卷頭にはかならずせぬ事なり。

右千句之事猶かず／＼有レ之といへども、初心のいらざる義なれば、しるすにおよばず、後集に書載べし。

京羽二重(はいかい)　終

誹諧京羽二重者林鴻子所撰也余披讀之誹道一流莫所不备悉異寃若入波斯之肆衆寶羅列也嗟乎林鴻子者斯道大成者耶

積レテ絲ヲ成レス寸ヲそれより一疋物さなれる羽二重、是誰が工ぞ。林鴻は吾誹諧之良儔なり。

織たてゝ秋の綿(遍)の色薄し　眞珠庵　如泉
甕(モタヒ)の窓をのぞかるゝ月　林鴻
鴈の行(ツラ)童子(ハラハ)に開ヶと指(ユビ)さして　素雲
旅はじめには名を知らぬ山　蕉林
かぞへ置帆あげて舟の忌(イミ)詞　重慶
皷をかりに人傳の状　南枝

誹諧の京羽二重は、七夕妻(ツマ)の手際にもあらず。生田の神の織おろしにてもなし。堀江林鴻の練仕立たる所に

して、此道の緒(イトスヂ)長く傳れとなり。我これを見るに勤テハ思女ノ在レヲ機ニといひしを、林鴻子もさおもふなるべし。先哲もまたこれを感じて、今や草の原露に潤(ウルヒ)なん八月の日

蘭化堂常牧書

江の錦は詩(カラウタ)の種、和風の姫はさゝがにの糸に名をへて、世人とばのあやに織事たえず。爰に林鴻子、五百機たつる窓の前、一塵の障なく世のふしぶしもあらぬは京羽二重か。

言　水

鳥飛ときは足をちゞめ。うしたゝかふときは尾をすぼむる、みな作用也。今林鴻子がゑらむ所は、宋元の畫工を仙臺にみるか、ひとしく隱(カクレ)たるをあらはし、室(カクレ)たるをしらしめぬれば、笑ふもあらん、あふぐもあらむ。

洛下永昌坊 清白老人跋

陣留の若菌が錦の詩(ウタ)は。わづかに尺に滿ざる間に。八一

百余の文字を織て。連波が心の水に洗へりとかや。爰林鴻といふ者あり。山の經(タテ)水を緯(ヌキ)にして。はたをる虫の夕々。京羽二重なりにたり。吁すきものゝ家路まどはぬ。はいかいの山わけごろも。たもとゆたかにしたてよと。鴻子にをくる此一言。鴈のつばさに秋の風

旹元祿四年辛未秋閏八月下浣

蘆月庵似船書之

（校訂者曰、常牧、言水、清白、似船の跋は、第二卷に掲ぐるところと同一なれば、追刷の際再びこゝに附せるもの如し）

元祿四年辛未九月吉日

寺町通二條上ル町
井筒屋
庄兵衛板

誹諧
貞徳永代記（ていとくえいたいき）

五卷

隨流

誹諧 貞徳永代記 あらはし衣 序文

誹諧あらはし衣

松永貞徳永代記序文

夫誹諧の連哥は、和哥の一躰より風俗別れて、眞連哥に唐の滑稽亂同の辭を和國の世話に讓メ、誹諧の連哥と成事、先テ誹書毎に祥(詳)也。和朝誹諧の元祖は松永貞徳也。其謂委レ後ニ。予當書を述て板行する旨趣は、去冬京羽二重と云誹書一部四卷、堀江林鴻と云誹士、京中古今(コン)の点者不殘自筆の發句を請受て加入しける中に、貞徳翁之系圖を推量に釣出し、祕密出要の奥儀、居士殘し給へるまゝ記之と、鴻が添書して誹点者十三人に奥書させて板行せり。予見レ之、此書は京中惣点者其外名に聞へし誹士不レ殘自筆の發句を加入し、剰十三人迄一統に賞美之跋を書たれば、是此出要正身證據の書也。其上林鴻私之新誹式を立、貞徳の名をかりて御傘違背之句法を出せり。此書世間に流布せば貞徳正誹の一道ノ障ッ可レ成、內證にて異見仕、絕板させばやと思ひ、兩人方へつかはしける書狀の旨趣、爰に書付侍る。

今度誹諧京羽二重一覽申、大悅此事ニ候。誠に堀江林鴻之千機之工に織出し、諸國へ施行仕給へば、都鄙遠嶋之船頭・馬士・穢多・乞食迄、蓑に換ン事然也。就レ夫林鴻雅丈私宅へ御出候ば、密談に可ニ申入一子細有レ之候得共、早速無ニ其儀一、先當書三卌目貞徳道統之誹圖より賦物口傳・本式ガ發句祕密切レ連哥一子相傳之出要之大事書入て板行被レ申候事、近比思案違ひと被レ存候。林鴻一人之作か、又何人之談合かも不レ知。予此儀を見て夜の目も不レ合、傍若無人笑止千萬也。抑連哥は二條殿下御好被レ遊、時之好士侍公・周阿等御相談有レ之、出葉祕決之式法を定、則侍公に宗匠を許免なされしより、上は攝家公方家、下は新在家之重器となれり。依レ之新在家を花の本とて祕決を傳來す。攝家樣方へも被ニ召上一、連哥の指合を聞させ給ふ。御代ミ公方樣へも罷下、天下長久之歲旦之發句をなし奉る事に今不レ怠。是何故なれば和國の風俗を重じさせ給ふ故也。誹諧は

九條殿下攻山尊公并細川玄旨法印、紹巴法眼御談合被レ成、松永貞德に連哥の祕決を傳へ、誹諧一道之宗匠を許免被レ成しより誹諧はじまれり。然ば連誹兩道共に地下の物に非ず。攝家公方樣より御免しある新在家之源流祕密口傳之大事を、林鴻が物にして板行仕、賣物に出し、天神之御正躰をあさまにする事、扠ゝ如何成無法放埒ぞや。林鴻人心あらば、貞德道統の誹圖口傳祕密之大事并四冊目林鴻私新法之式目早速絕板し、扠出來の書物は火にも水にも入られよ。扠京中數多点者の中に隨流一人指出て、此難儀中に子細有レ之。當書貞德系圖を名乘出し證據にして、大事を書あらはしたるは、さながら貞德傳誹之門弟ゟ無法に板行仕たるやうに書たる事、第一の遺恨也。誹道に連哥の祕決を傳へしは貞德一人に限る。然るを誹弟器量の人には大儀之受代を課て許免ゝ、誓紙の切紙にて傳誹せられし也。當代誹士之中に貞德門葉ならでは此事知者なし。若貞德之門流の誹士之中に當書を談合手傳せば、和哥三神の天罰と當らん事然也。但此度京羽二重に書出せしてには、たとへば連哥三部書隅田川宗祇長六文肖柏祕傳書師說口傳玄仍祕決等の万が一にても是なし。然共祕密の物は一二にても破戒はのがれず。當世誹業へ眞連哥のさまたげなれば、誹は連の大病也。依レ之誹師の越度を連師のとがむる折柄、かゝる無法は誹道滅法の第一也。誹点にて道を立、今日を安穩に送る事は、連哥出葉のおかげならずや。重き神器を淺ましき穢民・非人に引さらし、連誹の無盡藏をぬけがらにする事、誠に是林鴻が樹木を枯すが如し。愚拙も貞德在世三年、西武在世三十七年、以上四十余年、晝夜莫背に師從せし事も、此祕傳すこし成共ゆるされん事を懇望して、三度までおそろしき誓紙せし事、大賊にあひたるがごし。我のみならず諸國所ゝ連哥の好士皆以如レ此し。書物にてすこしの利德を得て露命たすけんため、諸國一統三百年來の大功を破る事、人道にはたとへがたし。嗚呼可レ悲ゝゝ。此書もはや三百部も世間にひろまるべし。今は是非なし。所詮一身の云わけなれば、愚拙が羽二重は貞德居士武老之名誹圖并隨流が發句の紋所、門弟五

人之雨袖、悪法にしてかへされよ。誠に末法諸滅の時ながら、かくさるゝ物はかくせよかし。唐の楊貴妃もはだかになし、和國の上村吉彌も尻をまくりて四條河原の見せ物に出さば、諸人唾を吐ぬべし。勿躰なし〱。此上は外より御せんさくあらば　南無天神様と手をあはせてすさるべき而已。

元祿頭年未ノ十月廿一日　　松月菴随流

堀江林鴻雅丈

井筒屋庄兵衛殿

右臘月閙敷折から一時もはやくと、心さはがしきまゝに筆法の跡先もかへり見ず、一筋をことはりし書狀なれば、過言のあやまりをば見ゆるし給へかし。扨羽二重に加入せし随流が發句、門弟五人之句、寺田重徳をかたらひ、板行をけづらせて止ぬ。然共世間流布の羽二重に共印なければ、罪を遁れんため板けづらせし句共此書に記レ之。

随流に紋を付るや春の水　河原町通三條上ル町 松月菴 随流

けふといへば都も塩の干鰯哉　三條中嶋町 山本 流滴

祭なれや馬に花咲藤の森　榛木町三條上ル町 永田 呂葉

さゞ波や龍の宮古の青簾　松月菴 随風

木毎の雪人丸いかに吉野山　南禪寺門前 杉谷 未英

水あかや上すべりする柳繻子　河原町三條上ル町 長井 吟風

扨今度京羽二重を編立し林鴻は、誹士の中に何れの門弟、師傳はいか成人なれば、徳翁の系圖并賦物口傳・出葉の奥儀まで、居士の直弟のやうに書出されし事ぞや。予七十まで貞徳門に入て誹諧すれ共、何れの門弟といふ事を未レ聞。今度如泉の跋を見れば、鴻は予が良濤とあれば如泉門弟か。又新点者の中よりいはれしは似船門弟なり。誹新式も句法も跋も一式似船の取持と云者あり。是不思儀也。似船は貞徳門流と名乗るゝ身にして、白〱しく取もたれたるにや。今心を付て見れば、似船を惣巻頭、正由を第二古今貫之所に置べきため、勿躰なくも　紫震(宸)の上京を跡にし、下七條より筆をおこして羽二重を逆織に

せしは尤それ故ならん。扨は林鴻は似船弟子にや。然らばあやまりたる事、似船も今は合点行べし。何とぞ談合して絶板させ度おもひ、乾貞恕・宮川正由・伊藤信徳・如泉・我黒・重徳等へ書狀をつかひ直談し、此事いかにとかたれば、尤同心らしくいひて、あへて物いはず。かさねていはんも心底うたがはしければ、とやかくするうちに、もはや羽二重夥しく織出し、世間に流れ布ぬれば、さすが誹の大河、一人の手にてせかるゝ物にもあらざれば、胸をさすりて止ぬれ共、且は貞徳・西武師恩孝養のため、且は正誹一道再興のため、徳翁より山本西武へ傳誹せられし貞徳居士の私之家之集に書留られし古實・古傳を、あら／＼貫出し、此書にあらはし、号ニ誹諧之元祖松永貞徳永代記ト之フ。愚盲文盲の筆法、かた言まじりのかな書、何方にても貞徳門流之老誹高弟の仰ニ後見助筆ニ而已。

六月菴 隨流 述

元祿五壬申歳如月日

松永貞徳正誹之系圖傳來

- 新在家件 公十代ノ宗匠
  - 幽山
  - 重頼—夏夕
- ○—宗養—永種
- 紹巴
- 貞徳
  - 重頼—夏夕
  - 親重—重榮
  - 令徳—令富
  - 西武
    - 貞木
    - 隨流—隨風
    - 佳種
  - 貞室—貞恕
  - 季吟—湖春
  - 梅盛—信徳
  - 安静

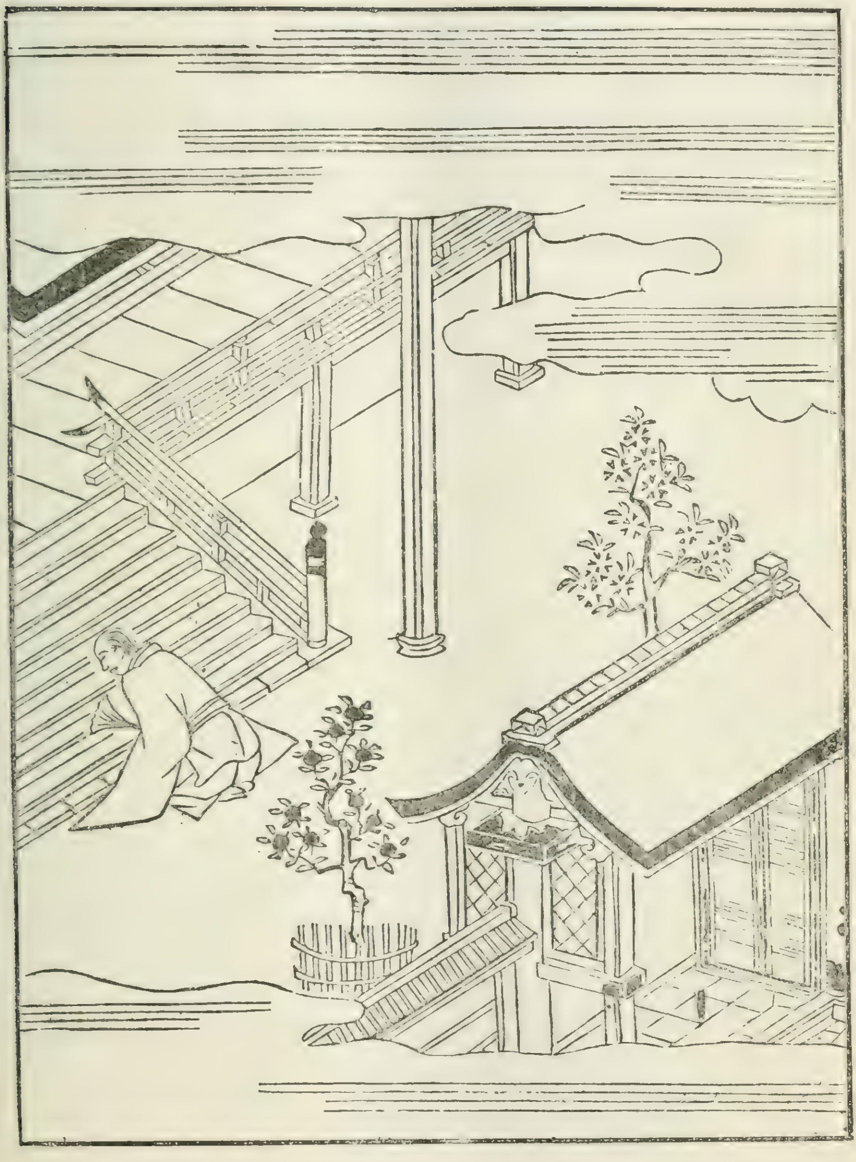
九條殿下玖山尊公
細川玄旨法印
宗鑑法師

誹諧 貞德永代記 繪師傳 卷之一

松永貞德永代繪師傳記卷之一

目錄之次第

天然トノ當時哉、說二誹諧一道之元祖、逍遊軒 吟花堂 松永貞德明心居士ヲ。抑、尊師花咲翁之慈父公永種翁は、攝州高槻之城主松永霜臺之嫡孫、下之冷泉妙壽院の妹聟也。歌藝をもつて鳴レ世ニ。新在家宗鑑より、連哥の出要を學び傳へて、紹巴と相弟子なり。永種、貞德を生、元龜二年未の年。是冷泉定家卿の苗裔にして、天質頴常に季世の優曇花、絕倫の神童、麟兒鳳雛也。十歲にして六經を讀、能書にして連哥の執筆をなし、十一歲にして哥書トして見ずと云事なし。細川玄旨法印を師トして、二條家ノ和哥の奥儀を傳ふ。九條玖山公の哥流を汲、萬葉・古今・源氏を傳へ、三條稱名院殿素然公・中之院殿也足軒の哥林に遊び、紹巴法眼に隨侍して連哥の祕決を傳へ、如レ此名師の藝苑に獨步し、歌よみて名哥秀逸多し。載て貞德集・戴恩記ニ有レ之。其撰する所の書、汗牛充棟家に滿。歌中にも和哥寶珠廿卷は、古今之卷になぞらへて作す。歌林樸樕二十八卷は、法華二十八品に準ジテ作せり。貞德翁一生哥學祕傳の良材、此書に籠れり。寛永年中其年ノ時分なれば、弟子遠方より來る。されば貞德哥道の器量、雲井にきこへあげさせ給ひ、太上皇宿勅詔有て禁闕へ召上させられ、いともかしこき五首の勅題を下されけり。何れも





秀逸幽艶の名哥也けり。中にも遠見の月と云御題の哥、

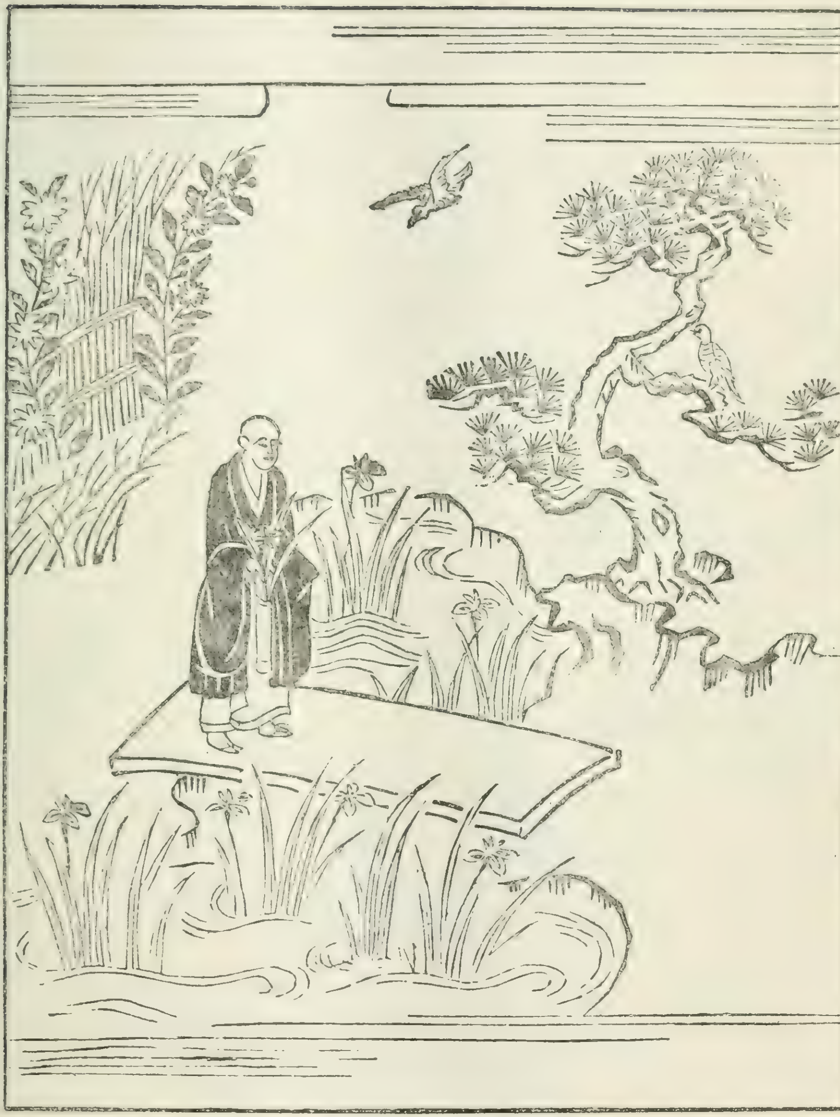
松浦浮かたぶく月にもろこしの
　はてのはてまで行こゝろかな

と云哥、一唱三嘆ましまし、叡感の御眉美麗(ミマユウルハシク)、時の傳奏飛鳥井・菊亭兩大納言殿に勅命有て、御料理御酒を被ㇾ下ける。其時又、勅下りて、貞德は誹諧・狂哥もよく讀けるよし聞召たり。よみて奉れとありければ、かしこまりて卽興、

ちよくいひとて哥のおたいを下されて
　かたじけなしやしかも五首まで

とよみて奉りけり。君王をはじめ奉り各〻興じさせ給ひ、生前の太幸有難かりし君恩也。此兩首の哥を、地下京わらべ圍〻まで口ずさみもてはやし、やんごとなし。其上玄旨法印手引仕給ひ、神祇官吉田二位殿へ參りて、八雲の神詠の口決并ニ和哥三神の御正眞筆御傳受ありて、いにしへ先祖二位兼直公より神道八雲の秘決御傳受有て、其時定家卿自筆の起請文ありとて取出し拜見させ給ふ。其文ニ曰、右之秘決之傳受、三世の厚恩、我子と云ともゝ嫡流一人に傳へ、他見他言致べからず。若此旨を違背せば、天神地祇の御罰を蒙るべしと書給ふ。誓紙の寫し、近衛龍山公自筆にあそばし、貞德翁に下されけり。是より彌翁の貞德あらはれて、世人尊敬する事甚し。和哥の弟子には、加藤盤齋・廣澤長好・一華堂・以悅・三之・等也。翁の哥流を汲て鳴ㇾ世。其枝葉(シコウ)地下にひろごれり。儒道の興隆は、翁の令子松永昌三子と林道春子を召つれ、北肉山惺窩先生の門弟となし、四書六經、百子之文苑を涉獵し、千家之詩流に泝(サカノボ)り、廿一史を通讀し、一切經をよみて拔書八千紙有。書として見ずと云事なし。太上皇帝宸(宸)勅有て、昌三子が一切經の拔書、八千紙御寫させ給ひ、其博覽の天才を愛しおほしめされ、宋朝翰苑勅本一部宸(宸)惠を蒙り、頂戴して家寶とせり。昌三が高弟には、野間三竹・林春齋・木下順菴・瀧川隨有・安藤省菴・宇津宮由的等、其外之數子、昌三先生の伐柯にして六經を傳へ、博聞宏(ハクブンコウ)贍(セン)の巨筆(キョヒツ)にして靑(アヲシ)ㇾ於ㇾ藍。昌三長子春秋館昌易子・季子懷德堂永三子に到て、實學德行、近來の博學也。林春道子は天下の儒宗と成て三百年來の博學、江府に勤仕し、其子春齋、本朝通鑑をかけり。如ㇾ此子葉孫枝(シヨウソンシ)鳳毛(ホウモウ)の美を





纔て百世の醫師となる事は、一朝一夕の故にあらず。誹門一道の元祖は、本朝におゐて誰か此翁を違背すべき。正誹的流の弟子、次に品定の所にくはしければ爰には略レ之。其外諸道に達せし翁の徳行、不レ可ニレ勝計一。末〳〵次第ニ記レ之。

正誹興隆之濫觴

京極殿連哥御會之事

慶長三年八月十八日、豐臣秀吉、享年六十三、伏見ノ城にて薨ぜらるゝ。同五年九月、濃州關ガ原の戰に凶賊滅し、天下悉ク家康公に歸伏し、太平を唱へ武徳を頌す。目出度かりける御代は、万ゝ世に至る迄天地と共に長久成べしと、王代一覽ニ記せり。依レ之慶長十七年壬子年 太上皇帝御即位、君臣合躰の仁惠、いにしへの聖の御代にも勝れ、和哥・連哥の道を重じ給ふ。于時慶長のはじめつかた、漸ク春過夏も來て、遣水を櫻が本にまかせてはゞ、風の思はん事も恥しく卯の花月の末つかた、九條禪閤京極殿にて連哥の御會あり。御連衆、近衛殿下龍山尊公御出座なされ、新在家の宗匠宗養法橋・紹巴法眼・細川幽齋玄旨法印・山崎宗鑑法師・松永永種・同貞徳、其外公卿も少ゝ御出座ありけり。わざとならぬ樹木時をえがほに茂み立て、山郭公さそひ來る卯の花垣に咲まじる八重山吹の一枝、ちり殘りしもいとあはれなる折から、御泉水の杜若、濃むらさきに咲匂ふ。禪閤御覽じて宗鑑を召れ、あの杜若を一もと折て、汝が家の油筒の花生になげ入よと仰有ければ、宗鑑かしこまり座を立けるが、生れ付痩法師なりけるに、殊に老闌て足もともたど〳〵しく御池のはしをわたりけるを、あやしくおぼしめして、宗鑑池へはまるなど御心つきけるに、やう〳〵として杜若を二三本袖にたづさえけるを、近衛殿御覽じて、

宗鑑が姿を見れば餓鬼つばた

と被レ成ければ、連衆一同に扨ゝ興ある御作意の見たて哉とどつと笑ひ給ふ。宗鑑かる口なりければ、はゞかりながら御脇可レ仕と申て、

のまんとすれど夏の澤水

と申出ければ、玄旨法印第三可レ仕とて其まゝ、

群からす山郭公飛暮て

となされければ貞德末座にゆひしが、

有明を待月はまん丸

と四句目を致しけり。何れも名匠のうつはなりと、いよ〱興じさせ給ひ、玖山公おほせけるは、和哥・連哥のうちしめりたる後宴には誹諧尤興ありて、わつさりと心もうき立物也。是も古今集の一躰なれば、末代いよ〱さかんになるべし。莊年なれば、貞德其器にあたれり。連哥のごとく誹諧一道を興隆せよと、龍山公・玖山公より玄旨法印・紹巴法眼等に仰付させられ、貞德に誹諧一道の宗匠を、別して許免被レ成しなり。是より日本國のはいかい、さかんにおこりたりと、貞德私の家と云書に有レ之。

清水寺花の會之事

貞德、連誹兩道の宗匠を　九條殿下玖山尊公より許免故、東山清水寺金剛殿にして、地主權現法樂の連哥の會勤られけり。　九條殿下を成就院へ申請られける時、　禪閤御發句、

連哥本式

花に猶道分添ん行衛哉　玖山

春は霞にひかれぬる袖　貞德

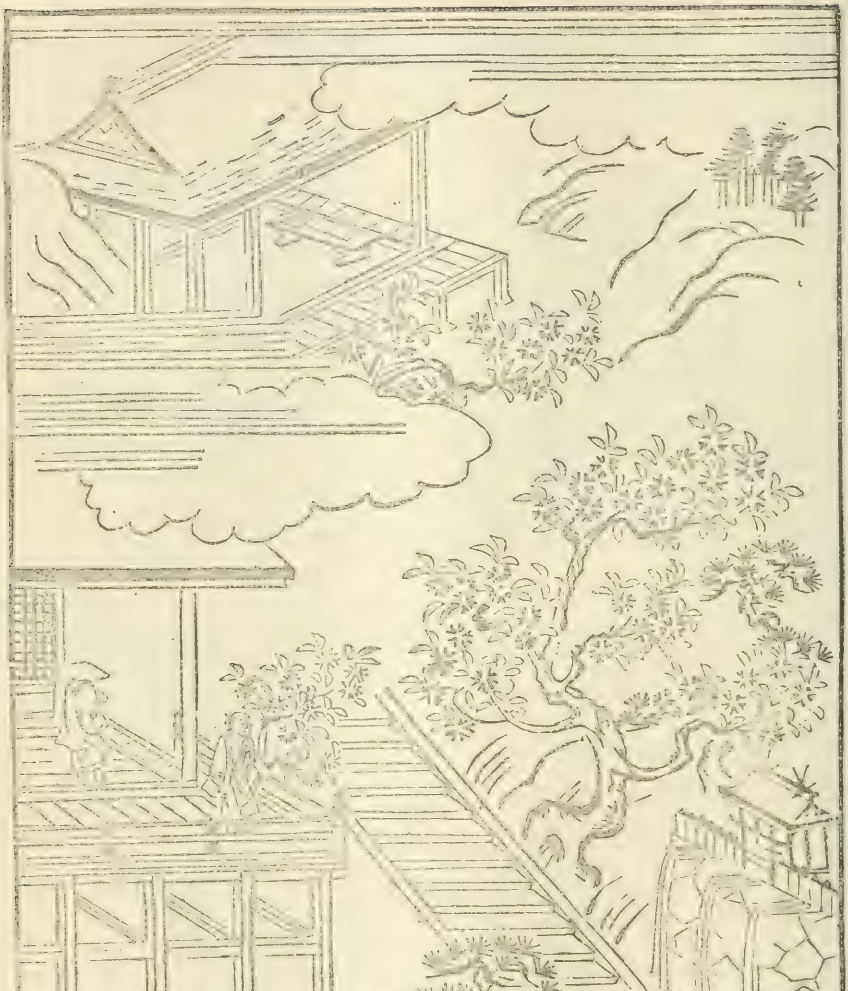
たかとばふすこ野の雉子鳴捨て　玄旨

花に猶道分添ん行衛哉

此御發句は、連誹兩道を相兼て、宗匠を御免被レ成し御挨拶の御句也。おそれながら此御發句の躰をおしはかり奉るに、貞德はもとより和哥・連哥を好みて、言葉の花やかなるに、猶重而誹諧の道を分そへて、行するゑかけて此道さかふべしとの御作意ならんときこへ侍る。猶といふ字に心を染て甘心すべし。

春は霞にひかれぬる袖　貞德

此脇句のうけやうは、春くれば山もかすみて四方の氣しき風流に見ゆるもの也。扨、攝政家をば霞の洞にたとへぬれば、殿下の和哥のお家の御威光に手引せられて、誹道すゑ〲まで相續致さん事の有難さよと、我身にうけて袖といふ字を謌に居(すへ)られしときこへたり。袖と云字に力を入て見るべし。脇に韵字をすゆる事、一ヶの口傳也。



たかさばふすそ野の雉子鳴捨て　玄旨

第三はたけ高く幽玄を本意とする故、春の名鳥にてあしらひ給へり。すそ野は地下の心也。地下より高位にまじはりて吟花する事は、雉子の花やか成吟聲を出して、高とびするに似たりとの御挨拶成べし。愚意の註釋、はゞかり多けれ共、誹の初心をすくはんため記ㇾ之。猶ゝ余情意味、凡慮の及ぶ所にあらず。

右御連衆は、京極殿御會の人數大かたまじはり給へり。代ゝ連哥の宗匠、一代に一度は地主權現の法樂に執行ありけり。宗祇本式連哥の發句、

水かほり花いさぎよき深山かな　宗祇

是本式法樂の發句にて、清水の二字を入られたり。宗養は不二執行一とや、無念の事なりとて、紹巴法眼は被二執行一たり。依ㇾ之貞德も執行申されけり。清水金閣殿と云は、地主權現の東の方に唐破風作りの閣ありけり。九條殿下へ御庭なれば、むかしより例なき御會也。閣殿南向にて、東山床に對の花瓶を立、中尊には　後陽成院御震(宸)筆、大悲の尊詠也。

清水の瀧へ參ればをのづから

現世安穩往生極樂

此御哥は、去ル公家之宗閣(客)、清水寺觀世音を常に信じて百日參詣申させ給ひし時、夢想にあらはれ詠じ給ひしと也。是故、あそばされしとかや。觀音の尊詠といひ、御震筆といひ、尤尊寶云にたらず。左は人丸、右は天神、執筆は清水の寺僧永寶坊なりと、貞德集に記したり。此金閣より南方を見やれば、大悲應護の新熊野補洛陀山と詠めこす生駒が嶽もまのあたりにうつりて、音羽の瀧の東岸、花か瀧かとあやまたれし。都人の參詣、彌生山分こし通る柳が袖に、鶯こゑの花物がたり、王城の地主權現なれば、ありがたかりし靈場なり。諸行無常の世の中とて、かゝりし御寺も、寛永の初つかた燒失せしこそ淺間しけれ。其時の狂哥、

寛永の六の九月の十日の日

清水寺の燒る巳の時

其時彼金閣殿も燒失せり。今は其形斗に石階しば／＼殘れり。其後　台德院樣追付再建被ㇾ成てむかしを耻ざる



御堂作り、善つくして有がたけれ。

妙滿寺三の會之事

伊勢の山田荒木田守武は、お長官とて歌人なり。かる口にて、狂歌の上手なりし故、誹諧の千句獨吟にして興ぜられしを、其比世間にめづらしくもて遊びけり。世の中の百首の作者、又は誹諧も作り、古實を殘されけり。山崎宗鑑、能書のはしり書達者也。はじめは江州に住居せられしが、一生は木の葉のやうにして、後にはたから寺のほとりにゐて、常には朝夕のけぶりをも不ㇾ立、唐土の燒餅などにて一生をすごされし人也。中比は西國行脚して讃州觀音寺、琴引山のほとり、有明の濱の此方の川岸に住ける故、其跡に一夜菴とて寺ㇾ今小寺あり。予西國へ下りし時この寺に一宿せしが、宗鑑の書おかれし歌仙の歌の色紙を見侍りけり。此人連歌師、歌をもよまれ、俗性よろしければ、上つかたにもえじはり、玄旨も念比に仕給ひけり。かる口にて誹諧前句附をせられけり。其筑波と云道鑑たる前句附、一休風のうつり侍りけり。かゝる時までは、玄旨も宗鑑も貞德も、十句廿句の云捨などにて、誹諧とて定りたる會席もなし。其後寛永六年十一月の末つかた、京寺町妙滿寺にて誹諧の會はじめ有けり。貞德連歌の會の式法に毛頭たがはず、床に天神人丸をかけ、花瓶を立、文臺をかまえ、式法の會席是始也。其時の發句并百八句を書付侍る。

つみ綿かぬり桶なりの庭の雪　松永貞德
火燵めされよ雲のころも手　山本西武
天人や空をこらへ兼ぬらん　野々口親重
滿水清き谷の岩が根　妙滿寺日如
いづくともとまり定ぬ漁師舟　道節
月出てしる山の方角　本能寺日能
羊たりにはねすかはす鴫の聲　鷄冠井令德
聞付儲夕部ころ〳〵　宗畔

此外連衆略ㇾ之。執筆は須賀庄三郎也。此懷紙山本西武亭主にて執行せられし故、無外軒に殘りけるを書寫し侍る。西武は三條橋息の町にすみて綿商賣せられし故、つみわたの雪を挨拶せられしと見へたり。其時かけられし人丸



の紹傳、雲谷常益の筆也。貞徳、西武へ傳法の印に、此人丸井玄旨法印自筆の八雲の秘決・一紙品定・貞徳自筆の批点許免の一札・長良集・戴恩記・誹諧式目十首の狂詠・家之集のうつし、其外誹書不レ殘わたされたり。此人貞徳の跡目の誹傳嫡流の愛弟也。是何故なれば、誹諧はじめ、妙滿寺會を西武亭主にて興行せられし由緒成べし。

連哥本式新式之次第今案等之事

連哥新式は、此以前に古式有によりて新式といへり。是、堺の牡丹花肖柏の今案にて、叡覧に達して定られし也。依レ之以前の式を本式と云。面十句に一句〳〵賦物とりて、さりきらひ入組、ことむづかしきゆへ新式にあらためられし。本式をば建治の式といふ。人王九十代後宇多院の御宇也。新式をば應安の式と云。人皇百一代の帝後圓融院の御宇也。建治の式を本道といひ、應安の式を小道と云。抑新式連哥の興隆は、二條攝政三代の關白後普光園殿下良基公也。救濟・周阿・順覺・四阿・信照・良阿等、其時の好士也。二條殿下、立水・臥水と云連歌出要の書を今案仕給ひて、重く秘して世間へ出されず。或時北野天神、老人と化して殿下へ御出なされ、かり取給ひて北野の梵灯菴主と云好士に授け給ひしと也。殿下、老人の跡を付給へば、北野の神宮に入せ給ふにより、北野連哥も新式を用て、立水のてにをは梵灯より受傳へたり。それより以前は建治の本式にて、てにはの秘決もなかりけり。連哥の神も天神に非ず、日本武の尊を繪にうつし、連哥の神とせり。應安の新式の句法を天神の御納受ありてこそ、建治の式には出給はず。此度出現仕給ふ事也とて、是より以後天神を連哥の神と崇め奉りけり。右之立水、二條殿下の御自筆なれば梵灯に寫させて、正筆をば御神殿に納めさせ給ふとぞ。依レ之梵灯を北野連哥の出葉元祖といへり。此人丹波朝日山の人にて、連哥の妙を得られしにや。

　　人を送りて歸る野の末

と云前句に

　　身はいつの煙のために殘るらん

と云付句を其比名誉の妙句也とて諸人甘心す。北野に煙の宮とて末社有けるが、此神の化現と諸人申あへり。

又は朝日山の生れなれば、北野の地主朝日寺の觀音の化道ならんと、于レ今此人を信仰せり。裏白連哥は、北野初會の時執筆誤て懷紙四枚の面斗に書ける事神祕の吉例と成て、于レ今正月三日必ら白連哥八枚に書事也とぞ。新式連哥の神躰は立水・臥水の兩書、是天神の双紙也と云事、深重子細有事とぞ。尤誹諧も毛頭かはらねば、天滿神を偏に信仰すべし。此立水・臥水の祕書口傳ならねばしる事難し。今の新式も此書の中より出たり。立水・臥水の讀曲さへ人しれぬ習(ナラヒ)有。至極の神祕なれば愼(ツヽシム)べし。

新在家新式連哥の事

二條殿下、其比の好士をあつめ江州石山にての御發句、

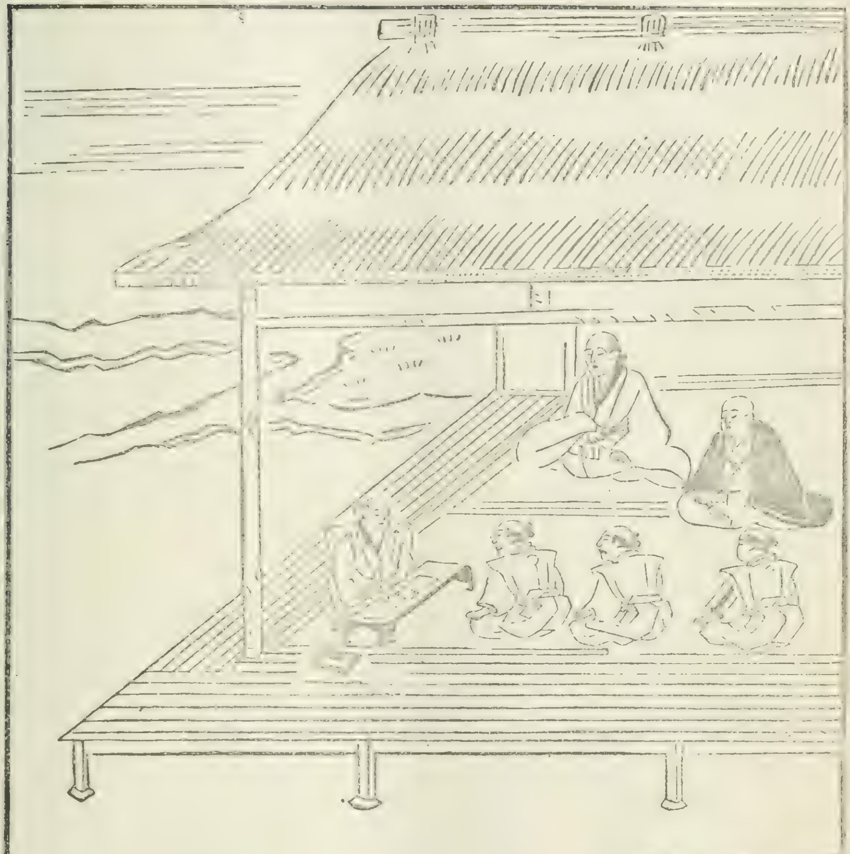
　月は山風ぞ時雨ににほの海　攝政殿下
　さゝ波さむき夜こそ更けれ　周阿
　松一木あらぬ落葉にあらはれて　侍公

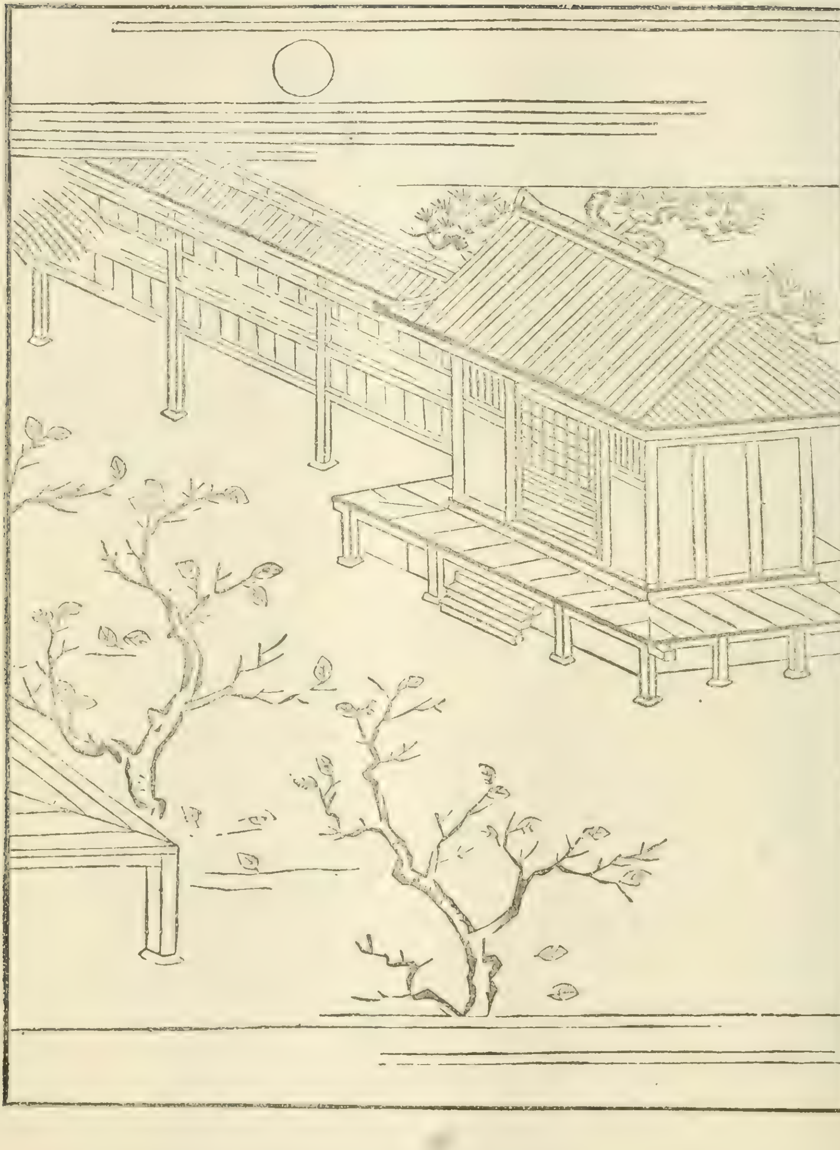
是より侍公宗匠をうけ給りて、新在家の連哥傳來相續也とかや。右の殿下の祕書口傳、新在家に傳へて連哥の龜鏡となれり。然ば貞德、宗鑑・紹巴より傳受せられたる誹諧の出葉も、連哥立水の祕決に毛頭かはらねば、懸望執心器量の弟子には重々誓紙を書せて寫しさづけられけり。かゝる神祕の連哥の書なれば、書寫して守りにかけ信仰すべき名目を、むさと板行にする事、和哥三神の冥加につきたる無法なり。天罰空おそろしく侍る。かゝる事の祕密なれば、予板行に書出しぬるも同じ罪にやならんと空おそろしけれども、今の誹士の点者、わけをも由緒をも不レ辨、我手がらのやうに、祕傳の大事ともいはず、和哥の神躰を引出して、世間にさらす事勿躰なければ、信心を内陣へおさめんため、はゞかりながら記レ之。和哥の道なれば天もゆるしおはしませ。

柿園芦の丸屋月之會の事

承應元年の八月、柿苑あしの丸屋にて一會興行有けり。是は山本西武と安原正章と兩人に其点ゆるし給へる酒宴の會也。發句、

　天長く千人(チヒト)ほむるや秋の月　貞德
　ふかき紫苑の花の夕露　正章





鳩からす紅葉ぬ松に季見えて　西武

其席につらなりし連衆、鶏冠井良徳・馬淵宗畔・六條の道場金祖・北村季吟・末吉道節・池田正式・中島貞義・小原正在・嶋本正伯・山田佳種等也。此柿園は　妙法院御門跡の御境内也。松永貞徳に哥道をとはせ給ふ故御愛憐ふかかりければ、此地を貞徳拜領して蘆の丸屋を作り、廊下をわたし、法苑蔵と云小堂を建て、法華千部をこめ、一生和哥の會・誹諧万句などはじめて、都鄙の好士あつまれり。北は蓮華王院の三千佛・大佛寶殿・豐國山・智積院、東は今熊野、門田の稲葉花盛りにして、村過鳥のわたり来るあしの丸屋の秋の風、夕されの月出て感情かぎりなき境地也。東南にあたりて、天子まれ御幸なし奉る泉涌寺の御陵山、蓬が洞の鹿の聲もかすかに聞へて物かなし。粟田のうづら、夕ドをおどろかし、萩・紅葉・尾花が袖、境地といひ、折からといひ、古人をおもふいざよひの空、かたぶく月のおしきのみかは、かゝる所の秋なりけりと、連衆も一入に誹諧に身に入あへり。此會席につらなりし人ゝ、むかしをおもえばうらやましくこそおもひつゞけぬれ。

貞徳編集式目之歌の事

御傘一部十冊、此書は連哥新式を本として誹式目の掟を定られけり。連誹両道に渡りて是誹諧の根本の書也。此書を見ずして、門弟の末書斗にて誹諧する人は、根本をしらざる故也。誹諧元祖の掟なれば、誰か此書に違する者のらんや。尤信用すべし。此外、淀川・油かすなど發句付合の物は數多有。

式目十首の狂詠

誹諧は式目ぞなき大かたは和漢のごさく去嫌べし
和漢には季戀述懐旅同字連哥のごとく嫌とぞきく
誹諧は右の五色おしこめて七句などは五句五句に三句ぞ
水邊や又山類の躰用に連哥のごとくしかるべきなり
名所國名神祇尺敎戀無常述懐に旧おもてにぞせぬ
鬼女虎狼の千句物面にもすれど一座一句ぞ
新式に一座一句は二句すべし二句の物なば三句有べし
三句去物に四つ有四ツノ物おもてなかへて五ツ有べし
新式にうらさおもてね嫌物はいかいにては七句去べし

連哥にはせぬ物の名や古事詞けやけき物は一座一句ぞ

以上

又西武へ命じて誹諧のくろゝ集をあませられけり。五冊有。西武の名代なれども皆貞德翁の今案也。右十首の狂詠自筆に書て西武へゆづられける故、西武又追加に十首の狂詠して、門外不出と名付て門弟に渡されけり。次ニ記之。

門外不出 **十首狂詠**　　無外軒西武

誹諧に嫌はん物は人言と戀の放埓俗の今やう

はいかいも席にてせぬは先諸禮又高咄しさては大酒

誹諧も諸禮位止と云ながらおもての句次人た見るべし

はいかいも先は一座に一直し墨付なくば猶もよくせよ

誹諧は金言妙句はきぬると老若貴賤出合遠近

はいかいはおそくてたけをかゆる共人のまへをはい句致な

さし合は誰の句なりと誰也と云てなをしは其人のまゝ

句作りによしあし有と脇よりはいはで一座の談合にせよ

句作りにたさひ不審はありぬとも當座に問て耻をあたへな

よろづとうたがはしきに念入て丸のなしへの外は用な

萬葉之誹諧

無外軒西武

陰賓日本國樂揚之技

頓十所泣香名予親我輩

月金是照母無賀伊入豆

来中長々永岡云秋

久留具類常日來繩手也笹奈覽

二騎爾何諾乃上洛

行啓之供奉丹見物有豆去來

一津々々和別四合朝覲

ウ

御會仁母同師事底通里題

能馬樂調夫機布佐八等

談合我明日智入意有十而已

須佐遠不珠吉乎尋寄戀

飲乃鋼能先布樣底空之月

莉田野跡野猶母世昔周禮

可之麻思久又々嶋會吹奴覽

細工保米左比射逅播良筒

後能世達岡矢年迄持爲知伎

若男道望乃日布入

見苦沙何二多十去天加賀部覽
耶不禮簾能內外耻扶

伊勢鴨合山田能住八个左右
春呼世信將爲杉之目上有

二
側來出來者見事二備乃響
杆達比布留類之貫左

樽也十日者實常堂圖白二
六條殿合攝家門跡

何事呼清原氏常物語
溶馬小而母異言樣々

五段田十世仁申來鴨能人
莫達紋丹布禮縫

穩從母將思豊昔哀世
月見之洪仁手目笥里吉良

銘持之其特佳道身二入也
直頁不天縟思時不有樣

金有金大服寄世茶事有
東者春耳高洲仁志肴

ウ
山食能[illegible]仁付留者實貝之貝（貝）
先永刀指者腰左之

朱禮乃時者火違故十撰類禮
十香久女者皆可將爲

人能物於我受借樣呼綠西有
春惡類聞實者早稻之稻也

月出比音邊土賑布最中從天
新酒酌左機嫌吉舍代之

頓久相坂越天關迄里
瀧者碁局之上能分別

濱雪淡不屑十而已之業違云
炙二增天伊波原可笑散

花紅葉其節將二八月
拾六羅漢夫々能寄

三
三門止日者何入用舍疑
延曆寺靡物事貫有

丸具爾可近江有所來長良山
虫乃和久者櫻咲比

震稿欄無小舟濟出之
節分過違波春者其末々

勢州寄鬼我登土沙汰有天
月二涼默戾能屑去

禮儀達波盡佛能御前鶴
　昔鳴達聞二清鹽
下手上手有者上留讓仁有之
　歌以之事内日備不及
何左母鷄達限之暇乞
　誓之立天後之約束
ウ
法然之一枚起請誓身
　新黒谷中東山京里
白川毛所流水者水包二
　指通乃何門昔何人
貞凪能便能有徳德之道
　歌備立名市高砂能松
住吉能神仁祈達諸答天
　唐渡里爲留首途說有
合讀母亂有者曾文字之數
　易達習有十夕月能影
秋之哀所日棒能弓之絃
　置之扇之草紙何爲
業平能昔者花之外母無
　德達長閑備奈良之京衆

名
油煙毛天昔詞從母口說有
　幣奈久豆四有此里下地
業吐藻開八無道
　蛇者所入同々穴賢
芝原母宮能万稲里者色有天
　汗中字久賀見月之夜相撲
加茂須之草遺唇嘴有
　誹二來奈唐之文
細從母大小達唯年使亂旦
　難昔成達之借見搭
主持者一入有何念達入
　何丹堺有不有夜舊
難波津合兵庫網引有合
　內裡能事者捉毛聞言
ウ
華一道秘傳受可類子共々
　廿日閣將常云者正月
消度口留永砂糖中曲器二
　借木丹所見和佐多造上
此所長成鬼能言請天
　窓打開後直須願物

痴嚢含他末里合不致湯遠懸亘

天下太平天下太平

山本西武老人自二童歳一學テ予ガ祖父逍遙軒貞徳翁之門ニ出レ頭發レ華以二誹諧一鳴ル於世一者久シ陰壁之窓ト灯雨之牀孜々トシテ不レ倦勉々トシテ無レ懈ルコト因レ是受ケ萬葉集ノ口傳ヲ而游ニ泳シ其ノ源ヲ資ニ探テ萬葉文字ヲ作ニ爲メ百句誹諧ノ授ク之ヲ好事之者ニ焉一日示シテ予ニ欲下索メテ一語ヲ以證セント中其ノ事上予與ニ老人相知ルコト日久シ不レ獲ニ峻拒一レコト聊カ抒ベテ蕪詞ヲ以賛スト其ノ後ヘニ云

于時延寶第八次庚申良月穀旦

懐徳堂人思齊永三書之

右万葉の誹諧は、しれる人ならでは自由によめもせず、又しらぬ人の眞似もならず。又つねのやはらかなる西武の誹なれば、そろ／＼よめばよめもする。しる人はしり、しらぬ人は知らぬ所、是なん日本無双の珍物也。此誹諧は西師、貞徳翁より源氏物語・萬葉のよみくせ共ならはれし印に、百句をつゞりて門弟ニ授けられし也。時代物なれば東山殿の茶之湯道具を見るやうにて、古風をのこされしまゝ諸國の誹士のなぐさみにもならんと記レ之。若よみやうの望みあらば重而尋られよ。

松月菴隨流

貞徳元日三物付之事

慶安四辛卯年四月廿日右大臣家光尊公御他界。同年五月家綱尊公任ジ征夷大将軍ニ玉フ。御年十一歳。明年ニ辰九月改元アリテ承應元年也。此年之三物付。

元日

御成人の君に来てあふや千代の春　貞徳
粧り竹にもわたるから鳥　正章
鍬入る苗代小田の土肥て　西武

明年癸巳年

元日

枯ぬ草をふまずに春は麒麟哉　貞徳
鳳凰らしき鷄旦の聲　正章

おぼろなる月の余所から嘯吹て　西武

同十一月十五日貞徳逝去。享年八十三、明心居士と云、鳥羽實相寺に葬る。法華宗ナレバ也。門弟、京・大坂・堺・江戸、諸國に數多有ければ、方〻にて思ひ〳〵の追善會、手向の發句・和哥記レ之にいとまあらず。令德・貞室・季吟・梅盛・西武・立甫、家〻の追善、京中の門弟不レ殘。本家は貞德翁の長子昌三の子息永三等、儒家の追善、儒門の弟子歷〻勤レ之。和哥の弟子には加藤盤齋・廣澤長好・一華堂以悅等、和哥を詠じて勤レ之。連誹兩道地下之師範なれば厚恩の報謝、遂(遂)レ日追善の會怠りなかりけり。其會にあひて書覺へし分少〻記レ之。山本西武、誹門の嫡弟なれば、批点を繼て取分追善を勤られけり。

八千草の種や枯野の雪佛　西武

明る年五十日時分之會興行に、

殘雪の色や形見の法の花　西武

霞の衣洗ふ功德地(迦)　令德

三途川の姥もをのづと春めきて　宗畔

第三までおぼえしまゝ書付侍る。此元日は忌中なれば、門弟の家に三物の沙汰なかりけり。只發句斗也。正章も点者の家を立て發句せられけり。

元日

しさりても天しる地しる試筆哉　西武

繼留てけふぞ名木の花の春　貞室

西武も法躰して名乘字を直に西武(サイム)と云。正章も入道して貞室と云。兩家相たがひに門弟わかれて威儀をみがけり。此節おかしき物語有。大文字屋重頼と安原貞室とは數年中よからず。貞室が繼留ての發句をきゝて、重頼、

繼留でけふぞ面目の鼻ひしやげ

として貞室へ点取にやられけり。意地わろき重頼哉と諸人興じあへり。惣別重頼、貞德と不和なりければ、やゝもすれば貞室といどみ相けり。貞室母の追善の百句して、自注仕たりしを惡みて散〻非言の書を板行せり。其返答又板行す。重頼毛吹草を編集せられしを貞室惡みて、「鄒(ボリ)山・氷室守など板行して是をなじりけり。或時重頼、貞室はなのすこしひくかりければ、

朝がほの日まけをしてや鼻ひしやげ

として貞室方へ点取にやられけり。貞室こらへず、

　　送り火や其身をこがす大文字

として重頼方へ点取にやりけり。如レ此相互に一生中あしく、諍ひ火花をちらしけり。

鶏冠井良徳・末吉道節・馬淵宗畔は貞徳骨肉の弟子にて有けるが、西武門弟に等く貞徳追善の會席に出座して、跡目を相續してけり。

誹諧發句帳的傳正統の事

貞徳最初の句帳をば鷹筑波と云。是宗鑑の犬筑波に對したる心也。山本西武に命じて撰之。次の書を犬子集と云。重頼に命じて撰レ之。是犬筑波の子方也。此集に付て、親重と重頼と集をあらそひて違論に及ぶ。貞徳へ訴へければ、兩方の様子を聞給ふに、重頼我慢の非有ければ、貞徳弟子分を不通せられけり。親重は相不レ替出入せられしが重頼ふかくねたみいきどほれば、兩人共に弟子分不通被レ申けり。依レ之兩人相互に威勢を諍ひ、自立の点者となれり。是故に犬子集は兩人の編集也。三番に崑山集、良徳に命じて編集す。四番目は崑山に對して玉海集と云。安原正章、貞徳死後に昌易子へ懇望して、正章愚判の發句半分加へて編集す。此兩集の撰者をゆるされて兩人共に点者となれり。連哥筑波問答、宗祇の作也。誹諧犬筑波、宗鑑の作也。連哥に謙退して犬の字をそへられたり。鷹筑波、西武作。犬子集、重頼作。崑山集、良徳作。玉海集、正章作。次に山の井、季吟作。是貞徳的流の誹諧の發句帳也。日本の誹士、右之發句帳を手本に信用すべし。

夷中誹士の事

誹諧諸國にひろまり、輕口の誹士數多有けり。江戸ゟ徳元・未得上京して貞徳にまみへ、弟子に成ければ、大坂・堺はもとより、發句・百韵などのほせて、貞徳へ批点頼みけり。依レ之点者許免の印にとて、貞徳翁の發句を申請、京・江戸・伊勢・大坂・堺、名ある点者共一巡をして百韵成就せり。其時の發句、

　　京田舎言葉の花の幾めぐり　貞徳

そだちがらこそなまれ鶯　江戸齋藤 徳元
蝶の舞誰を師匠に習ふらん　江戸 未徳
かげ日なたなくてらす朝ひこ　堺 卜粮
海ごしの山はそなたの物にして　同 慶友
乗り心よき舟の自由さ　大坂 空存
降から降へ月もうら傳ひ　同 休園
おなじかし屋の秋の夕ぐれ　伊せ山田 望一

右之百韵の寫し、山本西武にありしを寫して、此度面八句を書付侍る。然ば國々の誹点者、何れも貞徳の弟子ならずと云事なし。然るに京羽二重をみれば、此誹士を牡丹花の系圖に釣たり。むさとしたる推量の似せ事也。牡丹花肖柏は連哥の宗匠、和哥の奥儀を究め、古今を傳受し二條家の正統をつたへ、連哥新式の作者也。誹諧傳、有べき事にあらず。

賦物波止津句利之事

眞連哥ハ賦文字ニ付テ梵漢和風之傳來、天滿宮三字即一ノ妙理、廿五義之卯(印)加アリテ、天下一人之宗匠ナラデハ灌頂ニアヅカラズ。依レ之誹諧ノ連歌ニハ辭讓謙退トテ貞徳川捨アリテ、唯誹諧之連哥ト可レ書ト定ラル、。是一ケノ口傳ニテ、誹ニハ賦物ヲ不レ取也。此師說、妙滿寺會はじめの時道業へ申渡されし也。立甫も親重と云し比、第三をしてきかれけれ共、はなれて一流を立し時賦物之はし作りして、則はなひ草にも賦物の事書出されし也。重頼もはなれて一流おこせし故、連哥師の玄春弟子に成て、賦物を用てはし作りせられし也。貞徳的流には、賦何のはし作りなし。誹諧之連歌と五文字に書也。

誹諧之二字之事

貞徳的傳之正流ニハ誹之字也。傳受師說口傳アリ。是第一ノ惣題なれば也。此儀ニ付誹諧之書物共を見れバ、誹ニハイノ聲なしとて、唐日本ノ文言を引て、滑稽ノ二字など夥しく書出して義理を云たて、誹ノ字ヲ難じたる書物數多アリ。誹諧之元祖となる貞徳也。其上、林道春令子昌三などを弟子子ニ持たりし明心居士、誹ノ字ヲあやまるべき乎。古今傳受の貞徳ぞや。なまさかしき点者達、

笑止千万御太儀之骨折也。眞連哥には賦之字之印加、誹諧之連哥には誹之字之口決とて、古今傳受にならべて秘傳の師説有。しり給はぬは道理〳〵。但是を吟味仕ける程ノ誹士は珠(殊)勝之事也。器量なくてはいはれず。此比園水といへる誹士、所作之花見車ノ返答を見れば、誹之字ニ付テ殊之外情を出し、鉾を揮て骨折レタリ。いとやさし。貞徳流に誹ノ字ヲ用テ人〻に難儀を掛ル事迷惑なれ共、定家・玄旨・貞徳よりの師傳なれば是非なし。ひたとせんさく仕給はゞ、後にはごつとりとひとり合点の行事傳るべし。自己ノ小智を捨て、あほうになりて古今や拾遺にも見れば、誹ノ字を用られたり。然ば様子こそあらめ。我等いたま兵法は大耻のもとひ也とへり下り、名師にあひてとふ時に合点行事也。唯今京中數多の点者衆、懐紙のはし作りはいかやうにする事ぞや。俳と誹とは何れがよしと定められしぞや。賦物とる人もあらん。俳諧之連哥とかくもあらん。俳之字を書ては和國神秘の正理にはあはぬ事ぞや。唯何事のおはしますとはしらねどもかたじけなさになみだこぼして、誹諧は貞徳の物なればおしへにまかせて誹之字を用られよ。天神様もよろこび給ひ、よく知人の見て、しかる事もあるまじ。こゝろやすく向後誹之字にかためられよ。大事の題目なれば今すこし云べし。世話に、わぬしははいかいの誹の字もしらぬなりしてと、人毎にわる口いへり。是なんまとならずや。爰ニ當りてよき證據あり。山本西武万葉の誹諧の跋を、松永懐徳堂永三先生のかゝれし正筆あり。それに二所まで誹之字ヲかゝれし也。永三は昌三ノ子にて、于レ今存生也。此人いかでかハイノ聲ナキ誹ノ字ヲかゝるべきぞや。正筆望ならば何時にても見すべし。それまでもなし、直ニ懐徳堂人へとはれよ。是にて大かた不審ははるべし。但いづれの書にも漢言を吐て難じらるゝ程に、すこしきゝたる事あり、記レ之、園水、史記ヲ引テ云、滑稽ハ亂同ノ二字ノ心也、言レ非ヲト云則ハ誹也、言レ是ヲト云則ハ諧也、是にて先誹諧之二字ハアラハレタリ。猶大事の口傳有事也。俳ノ字、人非トカケル字訓、亂同ノ滑稽ニ叶乎如何。誹ハ市尾ノ切、ハイノ音ナシト云一理ニヨリテ、和訓名義ノ風俗ヲ不レ知シテ色〻むだぼねを折るゝ事也。

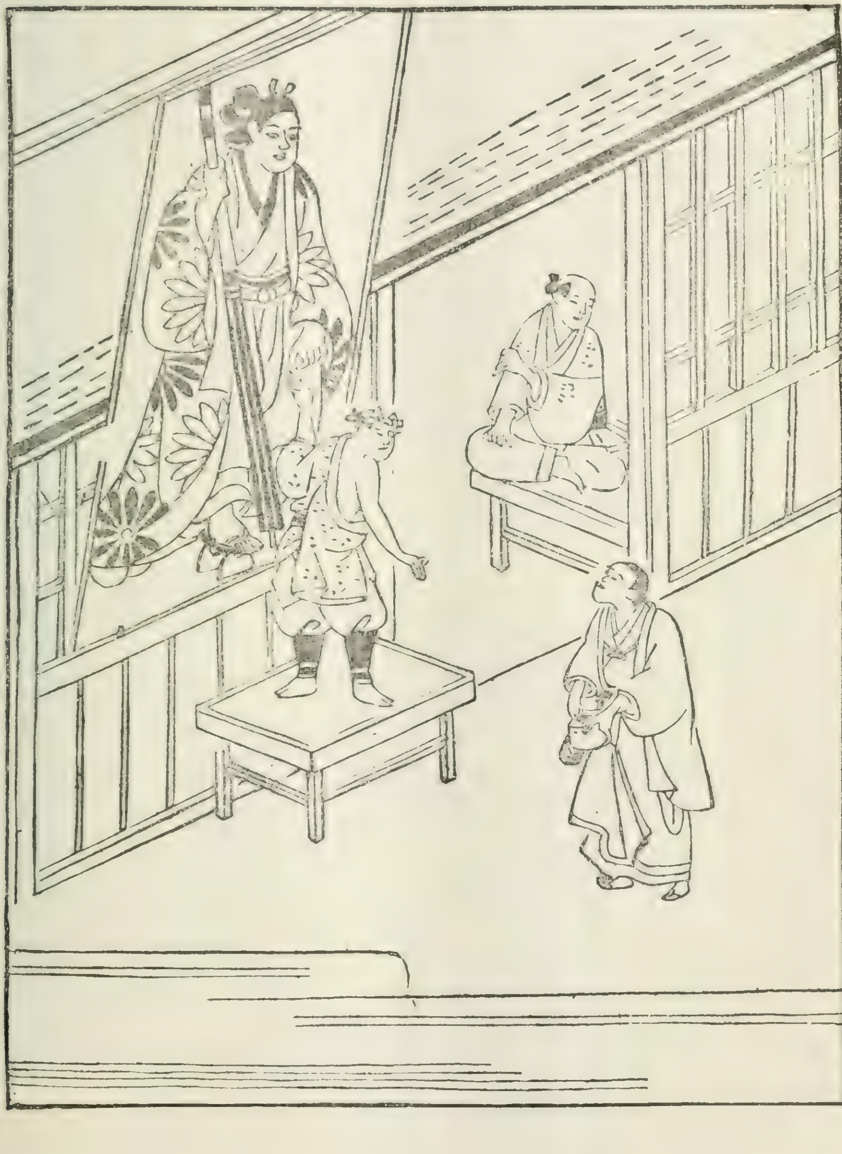
只神道の祕密ナラント我をおられよ。誹諧の点者此事を難じらるゝは、貞徳に傳受なき事あらはれて、云ほど恥なり。かまへて誹の字のせんさくとりおかれよ。唯今貞徳傳誹の点者京都になくなりたれば、誹諧とかいたり、俳諧とも又詼諧とも書たり、賦何・何賦ノ取やうもしらねど、連哥のまねをしたり、いづれとも定めがたく、貞徳門流と名のりても賦物を用ひ、傳誹仕たりとのゝしれども俳の字をかきたり、中有にまよふ新点者多き故、それよりむさと仕たる新法おこして放埒を吐出し、初心をまよはす事、あさましき時代也。是をかなしまざるは、まとの誹士にあらず。とかくしらぬ事はしらぬにして、一筋に貞徳流にかたづきて丸のおしへを用ひ給へ。貞徳にまさらんと思へる自立のあさ智恵は、和哥三神もにくみ給ふべし。

貞徳永代記 繪師傳 七誹仙品定 巻之二

松永貞徳永代繪師傳記巻之二

古点者品定の事

親重入道立甫は、犬子集のあらそひより貞徳をはなれ、一流を立て風俗をおこしけり。いかさま誹諧も上京風にて、句作りやはらかに、誹言よは〳〵として、仕立うつくし。上手の門弟數多あり。色〻の千句共板行して、貞徳にならびて世に鳴けり。誹式法の鼻ひり草を編集す。一冊物也。たとへば紹巴至寶抄のごとし。貞徳の御からかさとは、さし合相違少〳〵あれ共、一流の掟なれば其門弟是を信用す。初心仕ならひのふところ本にして、是を重寶とす。細工繪を書て發句をなす物世にあまたあり。編集の物へ花火草へ徳万歳へ花月千句へあだ花へかへり花へ鵜鷺千句へ碁打花見へ河舟へ若狐へ神子の舞へ万句へ小町踊へゑぼし箱へ片輪車へ詞寄へ大坐へ硯誹諧等也



手跡ものびやかにしておもしろし。老年にて逝去ス。

辭世

月花の三句目を今しる世かな　立甫

七十有余に過るまで誹道にまぶれて、一流の宗匠となりても、三句目のはなれやう、しなねば我物にならずと、道をふかく重じて我をしりぞきし辭世也。尤殊勝の事也。上京に此人の流義少〱に今有。但立甫野ノ口は誹諧の花は得たれ共其實たる事すくなし。たとへば繪にかける大女房を見て、いたづらに巾着をうごかすがごとし。

因〱は花の都の枝葉哉

むかひ見る餅は白みの鏡哉

松江重頼入道維舟は、犬子集のあらそひにて貞徳をはなれ、一流をおこさんとはげむ。しかれ共貞徳流にもなられず、立甫流にもあらず、中にぶらりとして礒にも波にもつかざれば、犬子集の以後毛吹草を編集す。此書には四季の名物を十二月にわけて記ㇾ之。諸國の誹ノ名物をあらはし、世話の平とばをあつめ、古今誹諧の品を定め、諸國の發句もあまたのせたり。此書初心仕ならひのためには比類なき重寶の物、はじめて編集仕ける故、諸人是をもてはやし、世に鳴事夥し。依ㇾ之其名高くなりて、より〱後集を板行する事かぞへがたし。貞徳流と立甫流のさかんなる中にまじはりて、まけじおとらじとはげみけり。此道になづみて、身鉢を誹諧にかへてたしなみけり。編集の物、へ犬子集へ毛吹草へ時世粧へ浮世長刀へ懐子へ乳母へ佐夜中山へ大井川等。それ故誹書の祖師となりて、重頼作にㇾ今是を信用す。依ㇾ之松が江崎の維舟とは、後に名を付たるなるべし。但はいかいの風は、句作りに伊達あまりて威勢たらず。たとへば四十あまりのうかれ女を請出して、おくゐといはするがごとし。

大上戸ひがしに有かにしざかな

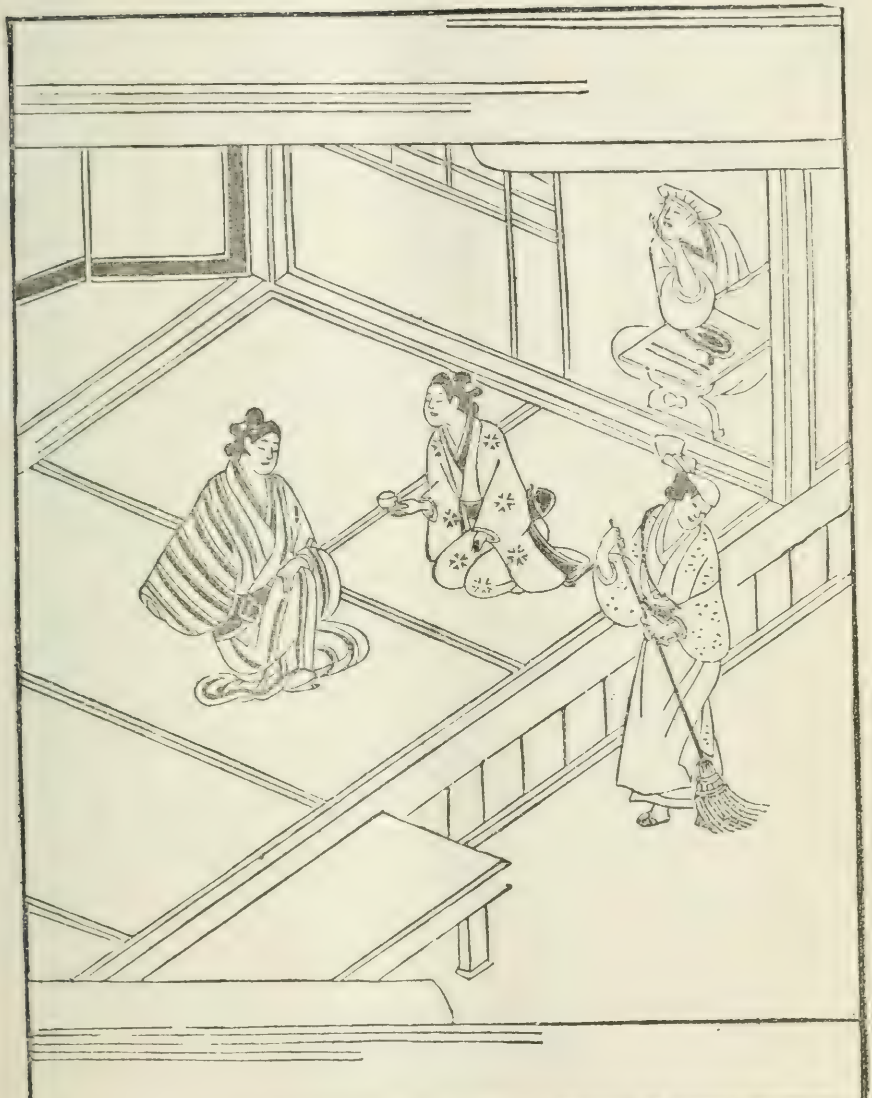
青柳の糸たへず松の羽衣や撫はじめ

あれといへば見るやことばの下もみぢ

よはひ七十四にて逝去す。

辭世

りんごもや菩提樹のだつま汲清水



無外軒山本西武は、貞徳翁の手習子也。十一歳より貞徳はいかいの執筆を仕ならひて、一生腰もとをはなれず。誹諧になりて〳〵鷹筑波〳〵くろゝ集を編集す。貞徳死後、自分に〳〵砂金袋前後集ヲ編集す。和哥の會にまじはりて源氏みんかうを傳へ、一華堂より古今の箱を傳受し、師にしたがひて一生ほつ〳〵として古實をたしなみ、誹諧にも花なる事を不レ好、顔子が高上をあまなひ、南華が滑稽を物のかずともせず。古風を捨ざれば、世間の當風にあはざる故、誹諧躰おもねりて諸人皆下手也といへり。享年七十三にて逝去す。門弟數多追善の言葉を吐。

辭世

夜の明て花にひらくや淨土門　西武

戌ノ三月十二日

山本西武は、心高標にして、其すがた花やかなる事身におはす。たとへば佐野の源左衛門、古具足を着て鎌倉殿の御前にかしこまるがごとし。

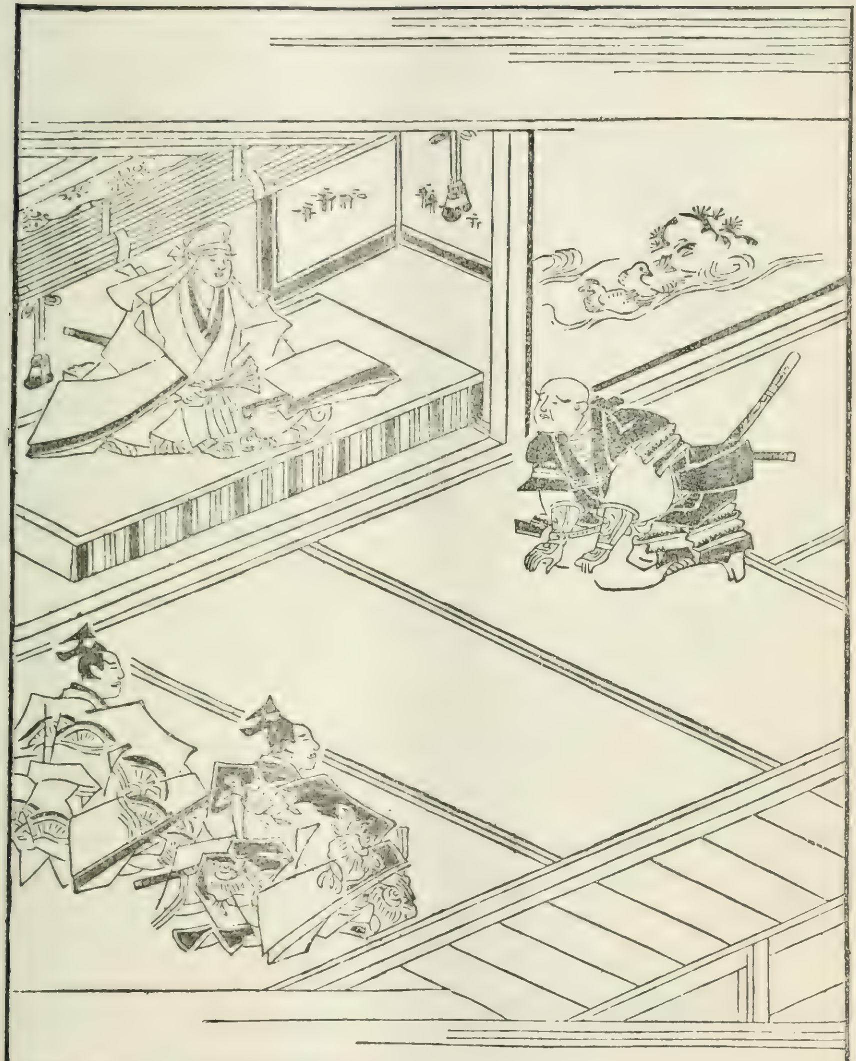
鷄冠井良徳は〳〵崑山集の撰者也。一生貞徳に隨て古風をまなべり。誹躰かすかにして、はじめおはりたしかならず。あめる誹集おほくきこへねば、かれ是をかよはして其名世間にしりぬ。貞徳逝去の後、年を經ずしておはりぬる事殘多し。いはゞ秋の月を見んとおもふに、あかつき痛氣のさし出るがごとし。

けゝらなくくきらや鳴ぬこゝら邊

川ごしに乘や網代の位鳥

安原正章入道貞室は、生れ付一物有て、諸道に器量風流を好めり。文才も達者にて、古事來歴をよく覺て、誹諧一方ノ大將といはれし。一生重頼ともみあひ終にまけず。〳〵玉海集をふらみ、色ゝの誹書編集す。西武とならんで誹門を二口にひらく誹匠み(マヽ)にして大やう也。後には琵琶をすきて平家をかたる。花のあけぼの月の夕べ、初雪のあした、近國の名所に行て琵琶を引、笛を吹、活計の誹士也。然に定めなき世の時雨におかされ、旧冬よりいたはりつよければ、明る年の歳旦、

來る年のおも湯につなぐ命哉



元日も脳病の内なれば覚悟の歳旦、常にかはりてあはれ也とて、諸人此句を甘心す。正章千句とて貞徳批点の千句を、椋梨一雪、茶摺竹と云書を作て倒レ之。貞室こらへず、蝿打といふ書作り、大津乾重次を作者にして是を殺す。誹諧一道のつは者也。編集の物、〽玉海集〽同追加〽氷室守〽悲母追善百句の自注〽千句点取〽五條之百句等也。一生誹諧のすがた、たとへば六具仕たる鉄人の前に、松の一色を立たるがごとし。

鶯も三皇の御代を初音哉

哥軍文武二道の蛙かな

よはひ六十四にして春の末つかた終に逝去ス。

辭世

今までは目見へせねども主人公
八八といひし年もあきけり

北村季吟は根本儒醫也。貞徳門に入て學文して哥道の奥儀を傳へ、誹諧を仕ならひて其名世上にあらはす。生れ付上根にして器量の發作、地下にならぶ者なし。むかしより注なき〽清少納言〽大和物語にも抄を付る。〽其外朗詠ノ抄〽つれ〳〵草ノ抄〽百人一首ノ抄〽源氏湖月抄〽八代集ノ抄等を作る。誹諧は慰事のやうにして、いにしへの山崎宗鑑ニ似タリ、道戯たるやうにて誹言つよからず。つよからぬは哥學になづめる所有に似たり。つよからぬは哥人の誹諧なればなり。一句かろ〳〵として色すくなし。いはゞ一重櫻のちりけるを、女わらべの拾ひもとむるがごとし。

袖にもつ梅の匂ひや伽羅衣

山ひこよこたへていはくほとゝぎす

高瀬梅盛は貞徳門流也。しかれ共したしからずして、自立の点者となれり。生れ付律誹にして古風を捨ず。世間の風俗天地をかへし、物に狂へ共すこしもさはがず。古誹なりとて笑へども、當誹の及ぶ所にあらず。編集の物、〽口まね草〽あふむ集〽捨子集〽落穂集〽さゞれ石〽山下水〽便船集〽はいい仙等を作る。〽崑山集より以來、發句秀逸多し。誹諧一道の毒にもくすりにもならず。い



はゞ佛の糞を、花にてあえたるがごとし。

　とぶ蝶はまひ〳〵虫か花の波

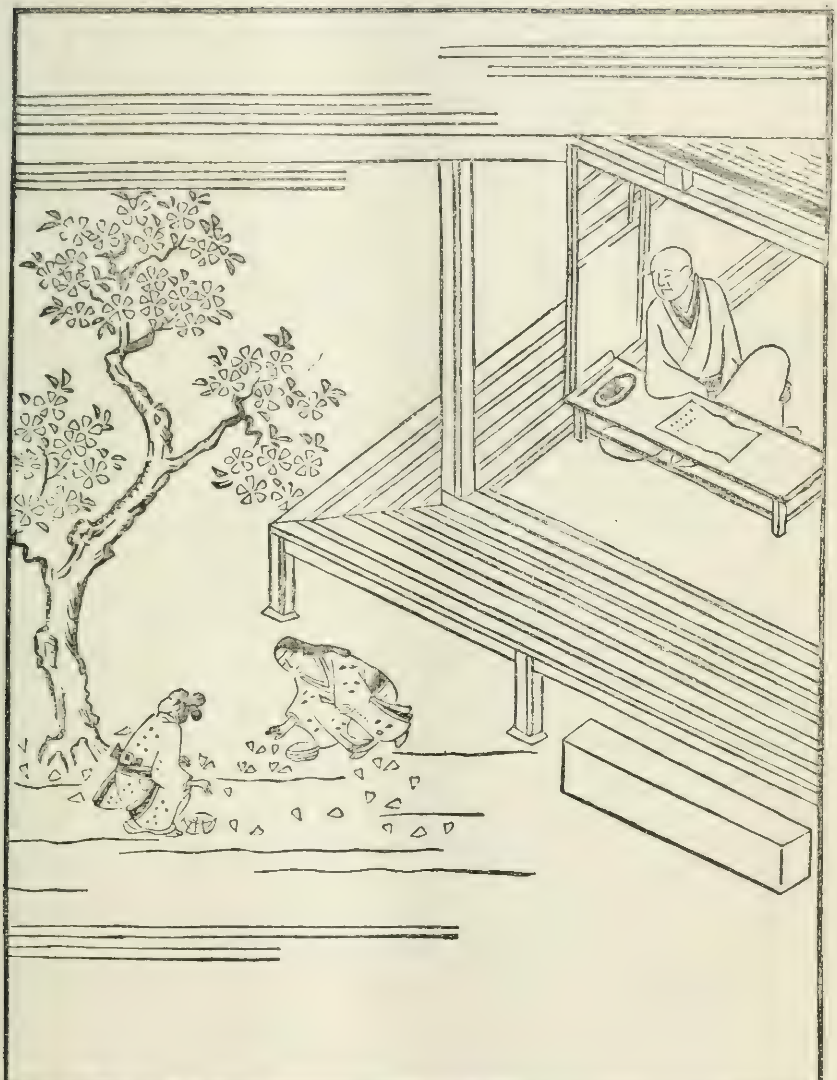
　とりついてはなれぬ松の藤見哉

此外の誹士は其名きこゆる野邊におふるべくぞ、かづらのはひひろごり、林に茂き木の葉天狗のごとく、自慢おほかれど、誹諧とのみおもひて、其源流をしらざる成べし。

かゝるに今、皇の御代榮へ天下泰平に、いつくしみの水八嶋の外にながれて、風雨時をたがへず。片夷中の山賤も斧を枕にして發句を案じ、田夫は鍬杖にもたれて前句を味ふありさま、有がたき神國和光の時を得たり。是自然の君恩なるべし。此度祕書口傳の物を板行仕たりしを予がとがめしこと、せきせばしとて笑ふ新点者ありとかや。其道〳〵にとくと心を染て味ひをしらねば合点ゆかぬ事也。哥道は高くてもたかく、誹道はふかくてもふかゝらねば、唯猿若のそゞろ事に落て、しほも差々理もなき物になれり。大乘過たる誹道なればしらぬ人もなし。又よくしる人もなし。かならず無差別の理に落る事、髮筋よりもあぶなし。五文字をならぶるより、手爾葉の大事をひかへづなにして、其みなもとを祕して奥をしらせず、信心をおこさしむるにて、道の道たる道は相續する事也。神と云は別の物に非ず、唯紙きれのひら〳〵する斗也とて、社より引出し、塵にまじへば、神の神たる道正しからんや。職商賣につきて、人のせぬ事をして利德をうるを、世智かしこしと云り。哥道のみにあらず。諸道につきて人の祕する事、又は人のいやがる事をして手がらと思ひ、ほまれをとらんと思ふは、みな文盲至極の無法也。此度羽二重に入し京中の点者六十人におよべり。一兩年過たらば、いかさま百人にあまるべし。かく數多になりても、其道立事ならば有難事なれども、片手にてはたばこを切、片手にてはきせるをみがき、ことにいそがはしく取まぜたる点者もありとかや。かくいへばわる口がましけれ共、しるもしらぬもうはつく事、珠數やからざけ挑灯の代待、いかさまめづらしき風俗にはなり下りたり。いづくとも

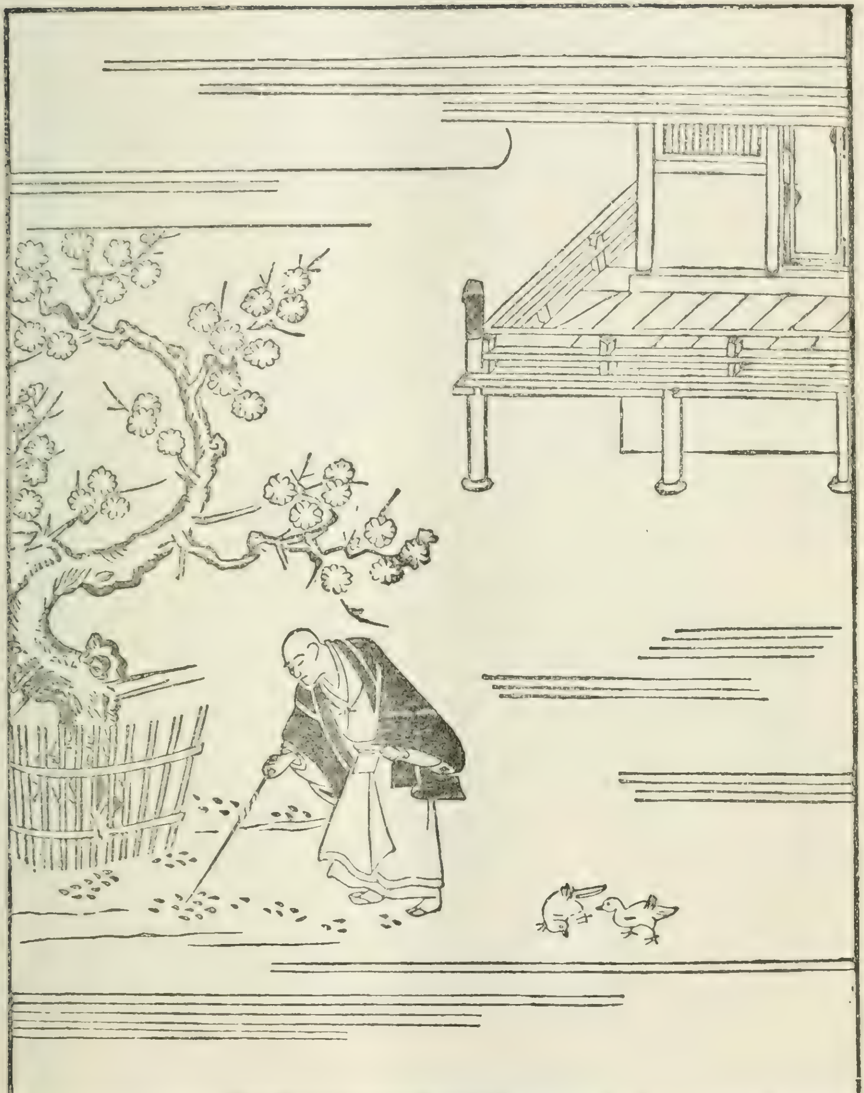


なく人の云けるは、新点者いつの間にわき出たるやらん、掃まつへるほど有とて、北野の繪馬に、点者あまた書て、ゑのころ・兒・道心者ヲまぜ、大男に鐵・はゝきをもたせ、箕にてはかり、俵につゝみ、淀川へ捨る所を書て掛たり。見物夥しと人ゝ語あへり。まとかとおもひて、北野へ參りて見れ共なし。淸水に有といふほどに、參りて見れ共なし。たゞそら言のかはなりけらし。是も誹諧繁昌の前表と判ずれば吉事なれ共、はたして正月物の点者舞に作りし京わらんべのわる口、是非もなし。かくいはるゝ事も又自然也。由緒もなく、師匠もなく、六齋の万句會や前句附抔にして仕ならひ、百句をならぶる程の者は、はや自立の三物を組、点者となりて人にしられんため、われ一と、むさと仕たる双紙を作りて板行し、祕する物やらせぬ事やら、めつた的を射るやうに小錢を取才覚斗にて、はいかいのてにはの大事、拔書の板行者一枚三錢づゝとて、京中をよみ賣にさせける点者も有とかや。あまり我まゝにして達人も耻ず、上つがたのうるさく思召すうはさをもはゞからず、御所のありかた會のなどいひまはりて、無理に我身を高ぶり、点者がほしてありきぶり迄大平に、屁にて風きる点者もあり。是はきのふけふ我からの才覺に、点をかけなどして、發句やら平句やらもしらねど、宗旨御改の時もとめし三錢宛の印判に、たばこやの丹をもらふてぬりまはり、裏長屋の子供をあつめ、煎餠椎などつませて會はじむる誹士も有とかや。いはゞやさしき此道なれば、無下にあしきと云にはあらず。ほう引・穴一するやうにはなけれ共、かゝる点者は分に似あはず、身におはぬ道なれば、庚申の代待か、お佛餉なりとも仕たるが目やすかめれ。うか〳〵かけば又過言あり。京中六十人の内には、一器量ありて誹仙におとらぬ点者も有べし。文才達し、又筋目由緒俗性のよろしき点者も有べければ、一つ口にいふも無下也。但一誹すなをならねば、千誹狂亂す。同じ羽二重の袋添になりて無實にあえる点者衆、口おしき時代になれり。かく淺ましき誹道に落ぬる故、すこし身をたかぶる人は見かぎりて、詩哥によせ楊弓を射ならひ、上つがたにもきたなくおぼしめし、神も佛ものゐてとほらせ給ふべし。貞德なくなりて後四



十年も過ざるに、正誹は滅盡せしこそあさましけれ。かく云事を、点者衆大方同心の方多かるべし。又いはれぬわる口をいふとて、腹立する点者も有べし。不レ及ニ是非一。

一　去年大坂より誹士京へ來りて、只今はがねをならしける都の点者衆の誹諧聞たきよし懇望仕ければ、若点者のかつほね數十人、六角堂を會所にして一二會興行せしとかや。連衆の中に何れを宗匠にすべきやうもなし。又發句をそれとさし圖すべき方もなければ、点者方へふれをまはして、未明一番にはやく出座せし人を上座と觸ければ、我おとらじとすゝむ所に、熊谷の直實が一の谷のぬけがけするやうに、宵より六角堂へ參りて夜をあかし、一番座に付たるもありとかや。扨發句もはやく出しを、それと定て脇・第三・面八句、人におくれじとまなこをむき出し、こぶしを握り、句を出しける。指合あるもとがむる者なし。とがめても利屈をいふて返句せず。付もつかぬもかまはず、我慢にかまゆる人は、百韻に十句・廿句もする。又律義におもねる人は一句・二句するも有。又遲作の會なれぬ点者は、百韻に一句もえせず、すう〳〵いふて、すご〳〵とかへるも有。又上座の人の用に立ぬれば、下座からあとの間に上座へのし上るも有。文臺を引あひ、たばこ盆をふみわり、めつた黑誹にして、さつとおはりけるとかや。かやうの座誹いとめづらし。是も當風の都會といふものにや。京誹の耻を京から書あらはす事は、さながら味方打なれども、とても大坂の誹士、はや三番つゞきの狂言に作りて、枝葉をさかせてなりまはるとかや。尤我一と威勢をあらそふ点者衆なれ共、其中に先誹の点者なきにあらず。其人をかり宗匠にして文臺もとをあづけ、一座をさばかせ度事也。中におとなげなき我慢の点者有故に、一座おさまらず。老たるをうやまふは父母のごとし、先誹を立るは師匠のごとし。面々誹退をたしなまば、いかでか神妙にならざらん。皆若誹の無法よりおこりて、歴々の点者にも同じやうに大耻を見する事、笑止千萬の事也と京中の評判也。予が門弟の中にも今点者になりさふな器量あれ共、道を耻て自立する誹士もなかりしが、もはや此時節なれば点者をせぬが損也と、



ゆるしなしに下づくろひせらるゝ方も有とかや。未熟の分にてはかならず無用たるべし。あふみ前句附など事さめなば、當時京にては句を見する人有べからず。此道は其根ふかく、みなもと遠し。去老人に誹諧哥の事を問ければ、さればこそ大事の事をお尋あれ、木蝉法師が哥は、我うたは深山の狸鹿ぞよむざれ言哥と人は云也、我はしらずとこたへられけり。古今集の中にてはいかい躰は、たゞの和哥よりも難儀の物にて、むづかしとや。今の世の中に、是はいかい歌ときはめん人はまれなるべしと申されたり。然ば誹諧の連哥はいよ／＼かたかるべし。誹言つよければ漢の句のやう也。又やはらかにすれば、連哥のにへそこなひになれり。又句作めづらしくとおもへば、手爾葉あはずしてつゞかず。與有やうにとおもへば樂首作り、物狂になれり。連哥の達者にならねば、連語・誹言わかちがたし。和哥も一首の始終を合するほどには成やすかるべし。又連哥も秀逸こそ無盡なれ。大法の地連哥は、大かた言葉に各式あれば、平点斗の付句は成ぬべし。誹諧と云物ほど、合点のゆかぬ難儀の物はあらじとおもへるは、我斗にや。いか様一兩年の稽古にて点者にならい、智者上人の句をも添削せらるゝ事、凡人にては有まじきやうにおもはるゝ。かく思ふも此方のかなはぬ耳魂ならんか。立甫が辭世に、

　月花の三句目を今しる世哉

とせられしは、謙退にして又眞實ならん。淨土へ生れて如來の直說を聞、誹諧と云物をしるべしといへる名言、われらごときの愚誹の心には、なみだながれて同心也。憚ながら若誹のかた／＼、舌さきに有、誹諧にてはなき物也としりぬべし。當時万里小路上、土御門のほとりに、火の見やぐらをおたてなされ。有がたき君の御めぐみと京中よろこびあへり。

　天照す日の見櫓のたかき屋に
　　こいでかなはぬ伊勢の神かな

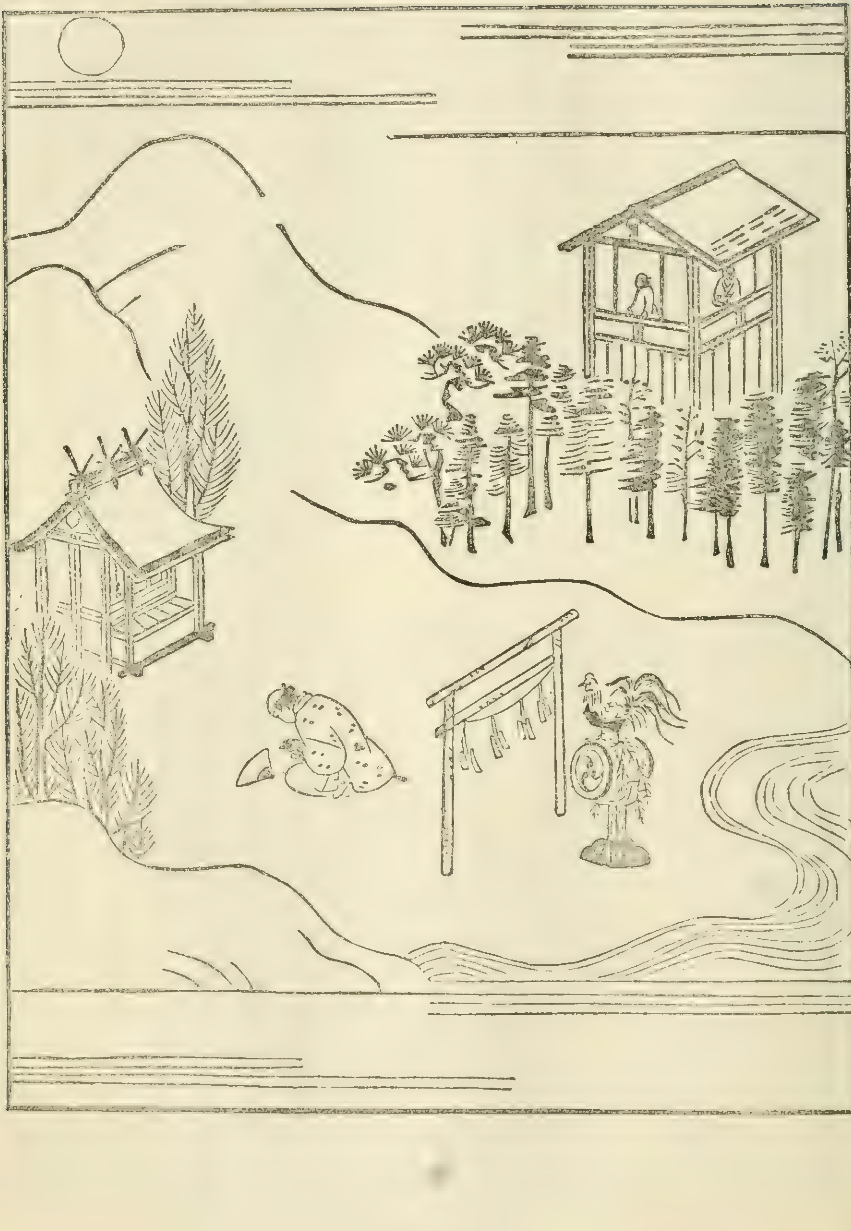
といへる樂首うた、上つかたのあそばしたりなど云て、いづくともなく京わらべの口ずさみけるを、さる老人此哥を甘心して、二三度誦して、是平人のよみ出すべきと草に非ず。七十に成迄かゝる樂首は未ゝ聞。一首長貴く、

自然の句妙・字妙、そなはれり。先樂首作りに非ず、又狂哥にもあらず。又和哥ともいひがたし。是こそ古今集の誹諧哥と云る一躰なるべし。かたじけなくも君と臣の御心相叶ひて、万民をいつくしみおぼしめさるゝ天哥なるやと申されけり。此人老功の哥人なりければ一入殊勝に覺て、誹諧躰のちなみに書付侍る。

たかき屋の鐘も鼓も苔むして
ねぐらさはがぬ宮すゞめかな

一 宮川正由は貞徳の誹弟か、たしかに不レ知。椋梨一雪と同朋の誹士なれば、貞門えもま見へられしか。又盤齋・以悅などに哥の道をも稽古せしといへば、連哥の大事など傳受せし事もあらん。柿園の跡を望し旨趣、羽二重にかき出し、林鴻が釣用せし貞徳直弟の系圖にものせたり。然れば哥道・誹道に付ても、貞徳をしのぶ心ざしはあらは也。もと實誹にして、今程は哥の点をもなせりとかや。此度いかなる事にか、貞徳違背の誹士をたすけ、京羽二重絶板の心ざしなかりけるぞや。いかさま內證に子細有か不レ知。此度板行仕たる羽二重にて、貞徳の誹道の掟、滅法する事をかなしまれぬはいかにぞや。道理をつけてとがめをゆるしたくおもへども、諸人口づさめば力なし。一分の云わけは有べけれ共、我身ひとつの名利にまよはされて、師道のすたれ行事をわすれけるは、我人あやまる事、是故貞徳の系圖にはもらし侍る。

一 芦月菴似船は、貞徳直弟萩野安靜が門弟とや。さも有べし。然ば貞徳は祖父の師也。此度羽二重に談合して貞徳違背の邪書を板行させしは、いかなる名聞のうは氣ぞや。尤中誹の点者の中には器量の筆勢ありて、若誹の時師匠安靜子におくれて、異見する人なければ、自身の器用あらはさん事斗にまよひて、よしなき林鴻をすゝめて、京羽二重をさかまにおらせ、老誹をさしおき、初卷のかしらによぢのぼる事、和哥譲退の道には大きなるあやまりなり。さすが翁の孫弟子として師誹滅盡の誹書を心得もなく手傳する事、いかなる麁相ぞや。何とぞのがれあらば、のがさんとおもへ共、先上京の誹点者何



れも羽二重の逆織をにくみいきどほれば、ことはりせめて是非なし。貞徳翁に兎毛ほども疵つきては、誹道の恥なる事をしられぬは、皆自分の名利斗にて、ともに邪道に落さるゝ事笑止千万也。翁より奪紙切帋にて傳へられし大事の名目を、林鴻が板行にしていたゞかせ、新誹式を建てをしへけるを、奥書までしてたふとがる京中之誹士、いかなる無分別ぞやと世人の口ずさみなれば、かくすに所なかりけり。

一 伊藤信徳は高瀬梅盛骨(管)随の門弟也。西武・令徳・貞室へも會に出て誹諧修行年久しければ、時代の誹士にて、一器量有て、秀逸の珍作も集毎に數多見へたり。ちかき比まで点者を不レ好。一兩年以來そゝのかされて点者に成たりと見へたり。此度京羽二重に奥書せし事はいかなる事ぞや。出聚物をしらぬにもあらじ。又新誹式をたふとがるにもあらじ。推量するに、此人に奥書させたらば餘人も異儀なく書ぬべしと、林鴻がだましてかゝせたるべし。自余の点者も何のわきまへもなく、余情斗に心まよひて書たるも有べし。然共十三人の中には、又よくしりて手傳肝煎てかゝせたる人もあらん。かゝるあやまりは世に有事なれば、是をさしてとがむるにはあらね共、京羽二重世間にひろまりて、末代まで初心・後人これを手本と信用せん事、貞徳翁の大敵なれば、かた〴〵のあやまりを云わけの筆にあらはして、誹諧一道のみなもとをみがき、末代までも貞徳明心居士をはいかいの人丸になし奉らんと心ざしをのべて、自余のにくみもかへりみず、慮外の筆を染る事、誹道に一身をなげ打物ならし。

一 如泉・我黒兩人は中誹の点者なれば、世間にも其名聞ゆる器量あり。点者となりてもはづかしからねど、此度あやまりて羽二重の奥書の人數なれば、罪なくてまさぞへの難のがれがたき事是非なし。古誹七仙の中何れの門弟やら傳誹はたしかにしられね共、貞徳を違背する心ざしは更に有べからず。只一分の器量有ゆへに翁のをしへをかろくおもひし、心ざしのうすきあやまり成べし。此外奥書の点者十人有レ之。是は近年五三年の点者、いづくいかなる誹流なるらん、由緒をしらね

ば、庵筆を染るもいかゞなれば、とがむるにおよばず。此度羽二重の奥書はあやまり也と、京中の誹士取沙汰なれば、めん／＼の云分成がたかるべき事をおしはかりて、自分の予が云分の次に評判を書付侍る。

右の点者何も奥書を絶板させ度おもはれける心ざしはしれ侍れ共。自由に絶板せざれば不レ力及、依レ之此書を作りて、世間流布の羽二重の嘲をけづるなるべし。下巻は京羽二重の筆誅なれば、五十余人の点者斗に依怙贔屓なく、あらひ汁のとばしりをかけ侍る事も、又狂言なるべし。

江州前句附之事

當時前句附はやりて、都鄙遠國まで誹諧流布する中に、殊更さゝ波の國、濱の眞砂のかず／＼なる誹士、土をかへしもてあそぶ。其源流をたづぬれば、大君の御代榮へんと東路のみちのく山の金花に、石山も變じて崑山となりしむかしを今におもへば、南都大佛御再興の時節に生れあふみの前句附也。志賀の都の御あるじ　天智天皇の秋の田のかりほの庵の御いつくしみの御製より、さゝ波の風流おこりて、青柳の糸たへず、松の葉のちりうせぬ木の葉の沖の嶋守までも、船をおし網を引ぬる片手にも、前句附の板行を四つも五つも懐中して、三公にもかへじ此江山と、漁村をたのしむありさま、實や民相應の誹諧、今此御代にあらはれたり。

予、江劦八幡万句之巻に、

筆の海や試む湖水まん／＼句

又二万句の巻頭をもなしたりしが、今此時に思ひあはせ侍る。此句を書出す事、人しれがほなれども、八幡連衆近邊の誹士も、いよ／＼心いさましく此道をおこし給へとよ。つら／＼おもへば有がたき事多し。三國無双の富士山を産出せし母國なれば、湖水は神國万寳の無盡藏なるべし。殊更古今集のさゝ波や濱の眞砂の詠哥は、心の水の底意をあまなひ、源氏六十帖も湖月よりあらはれ、連哥は、長原・北村の天滿宮にて、宗祇の發句抔をきゝ侍るにも和哥の由緒多ければ、今誹諧之繁昌も自然天然の子細有ぬべし。此外我しらぬ和哥の名所多かるべし。此二三年京中新点者俄に多くなりし、其みなもとも湖水より

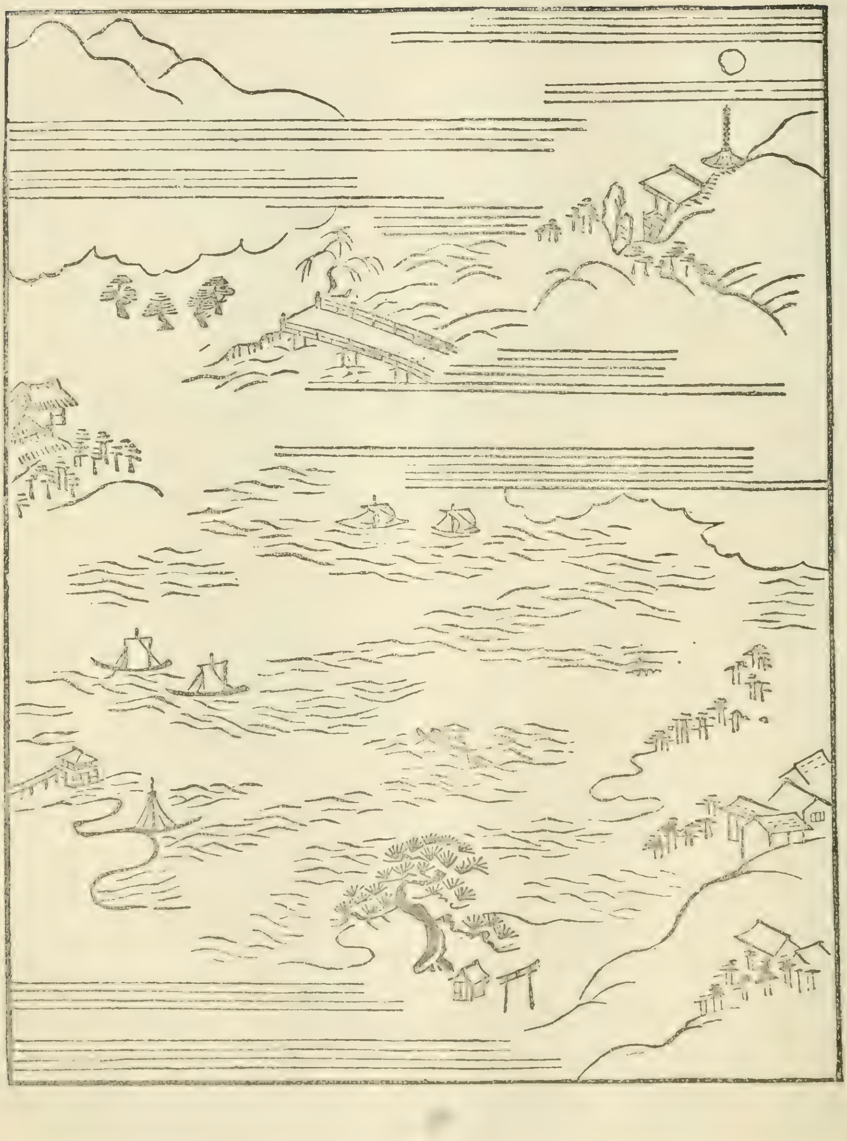
涌出たり。二三年以前に八幡三信といふ門弟、予が前句所望せしほどに、旧友なればはじめて出しけり。此時迄は江州に一兩會所有けるとぞ。それより一兩年の中に八幡ばかりに廿五會所はじまりたり。其外所〻の會所數多出來たり。此會所より前句をひろめて、美濃・伊勢・越前・若狹、近國・近里は皆湖水の月のひかりにて、至らぬくまもなかりけり。一兩年已前、元日三物の第二金壽發句に、

湖の海や六十余州筆はじめ

と云脇に、

こゝに數ならぬ隨流が花

とせし事も、つたなき付句ながらおもひ出られたり。先八幡にては、予前句附三信會所がはじまり也。それゟ枝葉さかへてはびこり出たれば、人しれず心に喜美をふくめる故、おもふ事を有のまゝに、はゞかりながら書付侍る。さりとて予は古風にて、當世にあはざれば、かずならぬ隨流が花はちりはてゝ、其實たる事は皆新点者の手がらとなれり。此度羽二重にのせたりし点者の中に、京にてはいまだとなりにもしらぬ誹士も、元日の三物をしるべにして、めづらしき當風の点者をと、あふみより尋のぼりて前句を所望してひろめける故、其名あらはれて五十年三十年の点者と同座せらるゝ事、江州の前句附繁昌の故なれば、いかさまにも、あふみには和哥をそだつる神おはしますと見へたり。予も一兩所に今前句を出せば、是まではめでたし〳〵。此うへにおゐて、点者衆めん〳〵の心得一大事也。すこしのかけ物なければ、付句する人もまれなる故、ほうび物よりかくまでは繁昌也。むかしより上つかたのおなぐさみにも、八的・楊弓・十炷香やうの物にも、すこしのかけ物は有ぞかし。或は色紙・短冊・あふぎ・盃のほうびものは、何方にきこしめしても見ゆるし給ふべし。その外かさなることを會所より書出さば、かならず〳〵面〳〵用捨仕給へ。他にすぐれて付句をとらん為、會所は皆よくにかゝれり。点者ゟ是が花なれども、小欲知足と云事あれば、商物とはかはるべし。もはや去年よりよろしからぬ取沙汰多ければ、みな身のひしと成事也。かくいへば、予一人して誹諧の法度をおくや



うなれ共、此事惣点者の中に異見する人有べからず。又かゝる書物の次もなければ、悪口のやうにていはれず。とかくこはひ所が一つあれば、先天道に恐れ給へ。五句三句の詠草さへきはめがたきに、一度に千句も二千句も見る事なれば、大かたの点者衆、械のまはる物にてはなし。まして我句さへ埒のあきかぬる点者も少々あるべし。自分をかへり見て、先とくと誹諧我物に成までは、外の事を仕て世をわたり、身におはぬ大儀のうへは、人にいはれぬ先にふつとやむるを、かしこき物知り共申べし。此前句も人のうへにあらざれば、手をあてるやうにあやしく、胸をこがし侍る故、めん／＼心にしらぬあやまりのたすけともなりて、此道ながくつたはれと也。あふみ前句にかぎらず、京にも唯今かたはし會所本をこしらへ、種々のほうび物を出す方も有けるよし、甚以よろしからず。一番勝句の徭取斗にても、惣並ならばなどか付句をする人せざらん乎。いかさま人にかはりて、めづらしき事をして、初心をそびやかさんとせらるゝは、あさましき事ぞや。かまへて道をつゝしみ、わたくし事をやめ給へ。

さすがみやこは都の風に有たき事也。王城の住居をするかたじけなさ、しり給はずや。あふみにも京の点者にまさる誹士はあまたあれども、三物をたづねまはりて、御前句とていたゞく事、是都の徳ならずや。此度の書は貞徳永代記なれば、あふみ前句に限らず、國／＼末／＼までもかゝる事の有まじきにあらねば、後人のしめしのため、はゞかりながら徳翁に替りて諫言を書しるし侍る。

さゝ波やはまの眞砂の新点者
おさまる御代に近江誹諧

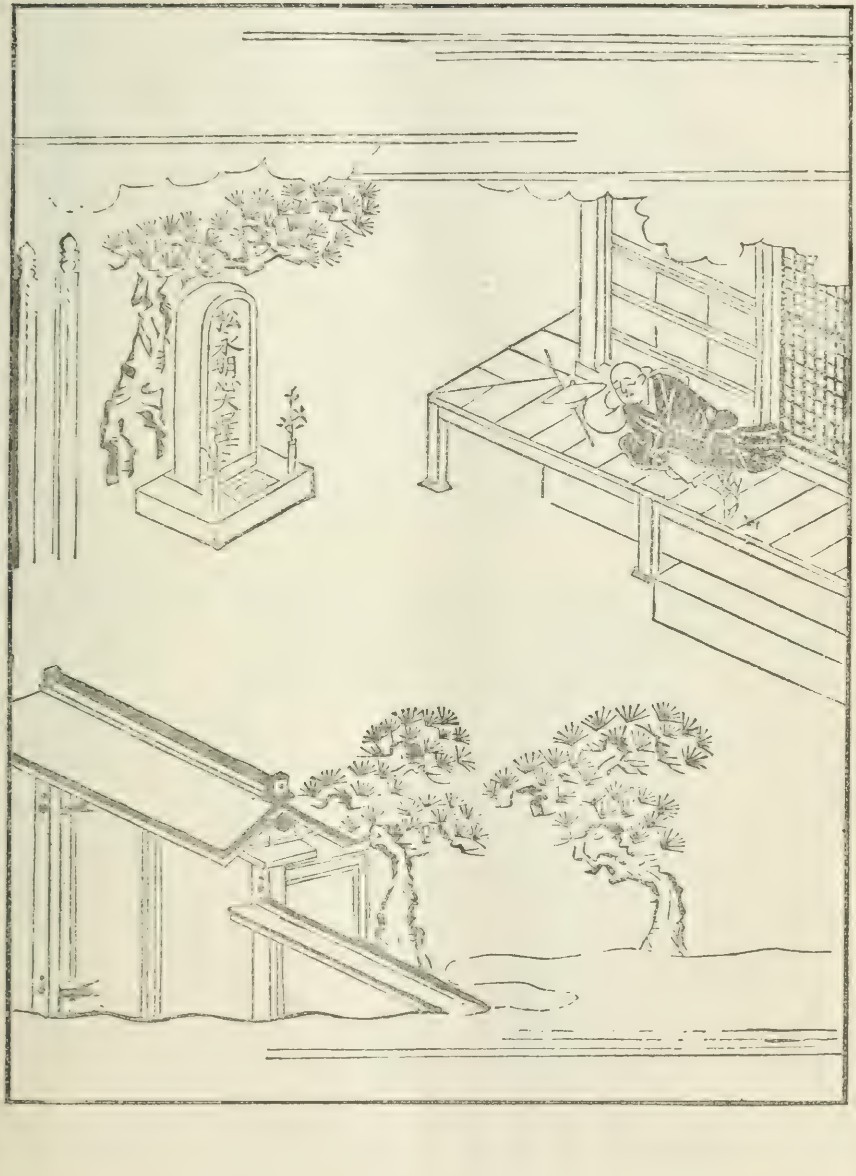
誹諧貞徳永代記

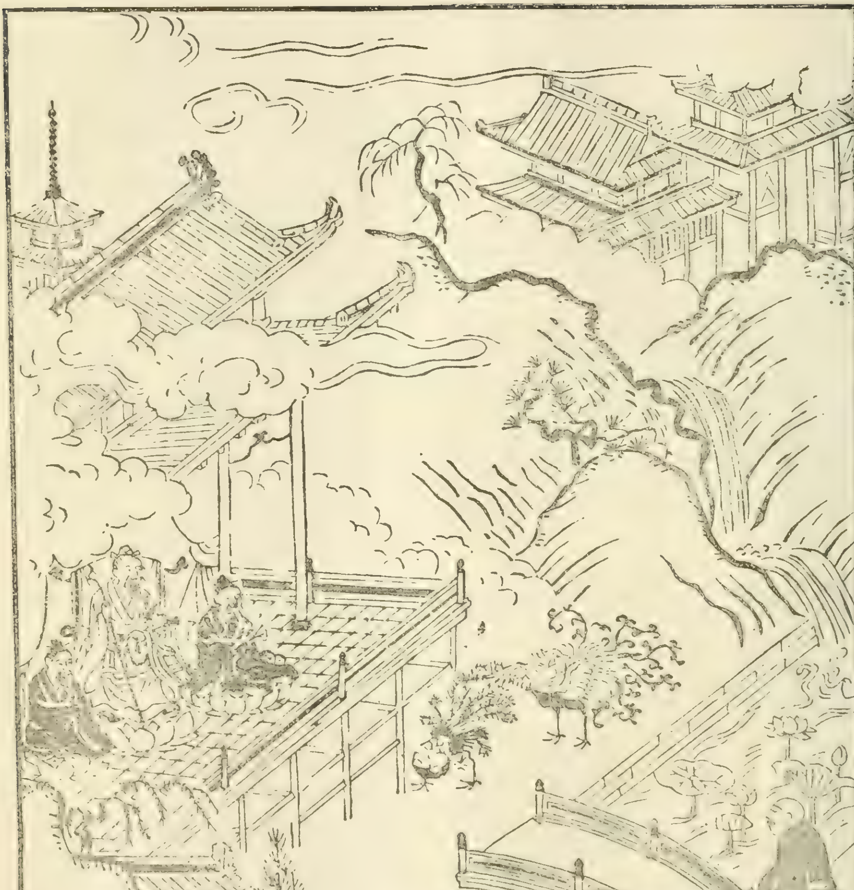
明心居士夢物語
絵師傳巻之三
京羽二重初巻評判

松永貞德繪師傳記巻之三

明心居士夢物語之事

夢に洛東鷲峯の岩洞に、茅草を坐として、苔の莚に木の實を甜味、破れ紙子の袖を片敷、浮世を余所に見侍る文爪といへる樂阿彌あり。總角の昔より、淺香山の淺からず、難波津の何となく手習ふ道を好み、筆の林の枝茂り、言の葉の色ふかく、匂ひ四方にあまねニ花咲翁貞德明心居士の流れを汲み、濁りにしまぬこゝろの水に、ふところ硯をならし、我が爲につらさも見せぬ月にむかひて、かくや藻塩草、三十一文字の腰おれなど詠め侍る。されば、いにし年霜降月中の五日、かきくれて雪いと面白ク我が墨染の衣手に間なく時なく積りければ、何哉と上の句案じ兒に、師の恩のふかく如大海と說給へる有難き事思ひ出て、晨光ノ喜美なるに鵲の橋をたどり、白きを見ればと詠ぜし霜を帶て西南の離宮を遙に拜し、彼實相寺にもふでゝ居士の塔婆の前に膝を折、木の葉に埋るゝ盤の氷を扣きて洒水し、つら〳〵居士の生涯を慕ふに、元龜二年辛未年未の日に生れ、承應二年癸巳今月今日而未の日、行年八十三にして卒せらる。物變星移りて、指を屈すれば三十九年の霜を重ぬ。誠に一生貞にして四德の利備り、五常自たゞしく、地下の師範として世上にまなこ高しといへども、今ははかなき石の形代、朽せぬ名のみばかりかなと不慮に草衣の袂をしぼり、續經し、南無妙法の七字を唱へ、八聖道の觀念をこらし侍れば、まとに冬の日の空さだめなき雲の行來もはやく、時雨にさはぐ竹の葉がくれに、ねぐら求る雀色時に成ぬ。今宵は此寺に籠り、夜すがら陀羅尼など誦して、彼妙法の花咲翁に廻向し奉らんと、甕り返す玉の緒の長き夜も深更に及びければ、鳥羽田の藁を假枕、ふすとはなしにまどろみける。夢ともわかず現にもあらず、所は南方補陀洛とおぼへて、水遠く山長ふして哥流瀧波をたゝみ、八功德の池には君子といひし芬陀利華、蔓あらず枝非ず、鳧・鴈・鴛鴦迦哥を吟じ、七寶樹の梢には鸚鵡舍利和哥をつらね、四邊の階道に白


松永明心大



鵁・孔雀詩をうたふ。一字の御堂あり、棟には瑠璃の甍をならべ、珊瑚の柱・瑪瑙の扉、玉の床を餝りて、八旬あまりの老翁、素絹を重ね、頭には雪をいたゞき、眉に八字の霜を置、如何様九地のほさちかと見へ侍る。左に七旬ばかりの翁、右に六十有余の翁、直綴に中浮をさし、自受法樂のよそほひなり。文爪、夢の中にさも有難、つく〴〵と見れば、白き鬢ゆふて金の簪さしたるは、正しく昔見し長頭丸貞德、左右は西武・貞室かと覺へたり。こはいかに、かゝる貴き淨土を拜む事よと、歡喜の泪をながす所に、左右の翁、中浮を以て文爪を招き、貞德老師の仰事有、近く寄て聞れよといへり。金砂布地にかしこまる。其時長頭丸宣ふは、丸は普門不可思儀の妙典に引れて、魂は淨土にありながら、魄は倍柹園のむかしをわすれず。地下の哥連誹の守り神と成ところに、勢ひ猛に自流我慢の邪誹起りて、正誹滅盡此時也。加之今度鴻といふ誹師は、安靜が末葉、芦月菴似船が門弟とかや。まだ目もあかぬ犬子の、あくちもきれぬ新点者として誹書を編みて、丸が名を借り、名目口傳の出葉物をさがし出し、板行にあらはし、剩丸が式目の御傘を破り、作者慮外の新法を立る。誠に一犬吠レ虚ヲ万犬傳レ實ヲ、同じ穴の狐十三疋狂ひ出、跋を書り。讀て見れば人がましき跋にはあらで、蘇若蘭が錦字の詩の古事たゞ一つにて、同音に歌舞妓芝居のほめことばを書り。是如何なる上氣ぞや。此書世上に弘まらば、田舍初心の誹師よき事かと學びて、邪誹狂亂の族と成らん事、なげきの中の第一なり。抑丸在世のいにしへは、雲の上の花の會、春の初の連哥になれ、地下の紅葉の秋の夜は、月を趣向の正誹して、忝も古今・萬葉・伊勢物語・源氏・狹衣三部の書・徒然草に至まで、あらゆる哥書の口傳を受、誓紙の山・起請の海、ふかき師恩を受し事、戴恩記に委く書殘し侍る。丸に隨ふ哥連誹の門弟、恐しき神文にて、連誹いろはの言ぐさ初心の守りにかけさせし片端少し見とりて、世にあらはすは何事ぞや。彼似船は安靜が末葉なれば、丸が爲にも薄白水の流れ袖にかゝりしゆかりなり。又作者は何のわけをも知らぬ自流の誹師なれば、無分別は道理也。知らぬ道は是非の沙汰に及ばず。たとへ芦月菴が門弟ならぬ作

者、血氣に任せて無分別をおこす共、わぬし心あらば、子細らしく一口の異見をもし、猶其上に承引なくば師弟の中を斷、おとなしやかに今時の若誹師をも引まはし、某こそ數ならね共長頭丸が流れよと、師説口傳も得し顔して丸が正誹を發すべき身ながら、此度の筋なき事はいかにぞや。又信徳は梅盛が徒なれば、是又丸が孫分也。角前髮のむかしより此道を好み、誹のわざとは自然と器量に生れたり。最早年もよい程也。おしくすみ髭喰そらし、床脇になをり文臺をも預り、今時の新点者を下に着、丸が孫がほして、長頭丸、正誹のいきかたは、中は慮外なれ共、京・大坂の新誹師は中〱御存知有まじと、おとなしく丸が道をも立べき身として、芦月と同じ心にて、我慢自流の蔑原すゞめの点者共と躍り合、此度も跋まで書しは何事ぞや。其上丸は妙法圓融の宗門一息切斷の折から、

露の命消る衣の玉くしげ
　二たびあはぬ御法ならなん

と辭世によみしもいたづらに、邪誹の底に沉めんとせしうらめしさよ。又林鴻も、丸、かく羽二重の批判すればとて、かまへて腹をな立られそ。そなたは年も若ざかり、老さきも長ければ異見の爲に申なり。惣じて、丸は地下の誹諧一道の元祖なれば、自流他流によらず、誹諧一道の狼藉は皆丸がかぶる事なれば、京・大坂にかぎらず、たとへ遠國波濤の末迄も邪誹をたゞし、正道になさしめんと、夜晝汗をかく事也。夫我國は神國として二はしらの往昔、みとのまくばいありし彼うき橋の下にして、陽神先唱テ曰嘉哉遇二可美少女一、との給ひしより連哥と云事初りたり。猶說ゝ口傳あり。歌は素盞烏ノ尊より三十一文字になりぬ。倘古今集の序を見るべし。然るに近年邪誹を起し、和國の姿を失ひて、いやしき夷の風俗を好み、雜言するは何事ぞと、老翁すはぶき三つ二つして、素絹の下より立懷紙やうの物取出し、是よめとて文爪に給る。文爪、夢心地に披き見れば長哥也。

夕涼み　四條河原の
撫子の　色香にうつる
世の習ひ　思ひそめてき

けふよりは　君に引れて
萬代こ　子日の小松
根さしある　連哥のいろは
誹の種　蒔や早苗の
たはぶれに　唯も野の字の
誹な　すける心の
やさしさよ　かきあつめたる
もしは草　天水わづかの
抜書な　かたく誓の
千早振　かみなおろして
信秀は　槇の尾山に
隱れ家の　かくし置しな
しら波の　立宮川に
うすまきて　流れの末の
ふか草や　野べの櫻木
心あらで　墨染にこそ
咲せたりけれ

長頭丸宣ふは、此度織そこなひの羽二重は、わらんべわざの篠船に似たる心の乗合の、林鴻に梶とらせ、跋の作者に綱引せて、哥流をわたらん其ために、たゞ跡先の思案

もなく、板におこせし罪科を倶生神告知らせ、丸に役書を見せられたり。誠に家に鼠あり、身に虱あり、誹師に不法の弟子あり。是ぞ飼かふ虫点者に千仁於葉を喰はれ侍る。蓋誹諧の二字は哥の六種の一にして、哥流底ふかく、源清く、道を糺の河上翁が、直なる針の系圖を横に釣しも、石垣の鰻ぬめらの歌女文字、三十一の哥の會、彼柿薗の跡形もなき空言は、誰が書せしぞいぶかしや。中にも丸は子細ありて、誹諧の元祖とよばるゝ事なるを、中興成と書せしは、獅子身中の虫なりと佛も、是を說給ひしと涙ぐませ給ひしが、めされたる素絹の袖、時ならぬ紅葉の色をぞちらしける。投婆婆の法苑藏をうつせし所ありとて、素絹のすそに取つかせ、補陀洛淨土の吟花樓をおがませ給ふに、鴻が羽二重の千罪を、十羅刹の金言をのべて鐵杖の短冊あり。文爪よみて見れば、

神かけし秘密口傳を板行に
　　堀江たちまち阿鼻獄となる
おからかさの法度破りし林鴻が
　　あかがねの爪己が身をさく

鳳城を逆織にせし罪科は
　其身をしばる鴻が羽二重
のぼるべき高瀬舟をば押下し
　逆卷のぼす似せの川船
予が發句切字なしとて誹諧の
　王になりたる罰は眞鴻
冠不着板におこせし報ひにて
　鴻が發句の首ぞきれぬる
聖賢の御名を奪し林鴻が
　燗月堂は火の坑に落ッ
居士中のこされたるの綺語忘(妄)語
　今あらはれて舌をぬかるゝ
絕枚をせざる無法の大かゞみ
　見る目かぐ鼻いかでゆるさん
いつはりて奥書させしはかりごと
　ゑんまの前にぶらさがりぬる

抑明心居士宣ふは、予が編立し御傘は應安新式の捉也。此式目を守りて松の葉のちりを結び、正木のかづら永き代までも、此道を傳へよとかたらせ給ふとおもへば、夢の枕の鐘の音、鳥羽田からすゝ鳴渡りて、夜はほのぼのと明にけり。文爪有がたく泪にくれて、歸るさの道はそれともわかねども、南無佛とぶつやきて、都をさしてぞ歸りける。

此繪圖を拜し、諸國の誹士廟參の志をのべ給ふべし。

松永貞徳永代繪師傳記卷の三　終

松永貞德永代記卷之三

京羽二重評判之事

一京羽二重と云題号の事、先年京田舎より商賈諸職方名物名人の調物用事のために、京町中小路の実名所書をして板行せし物有、是を京羽二重と名付たり。此名京中竪横こまやかなりと云心なるべし。然るを今度の誹点者名よせ集の題号にうばふ事は、事をかいたる作分也。外に何とぞ名の付やう有べき物を、有が中につたなき先書之題号を盗て、式目誹書の名にやとふ事、法らなく恥もなくあさましき文盲也。是を手傳せし誹士もよしとおもひて、あらためもせざるにや。

京羽二重堀江林鴻自敍評判

惣別此書を編集するから、辭讓謙遜なく、自立高上の放埒なれば、鴻が自敍を評判する事、筆ついやしなれ共、正誹の道引なれば出立所より横道をふさぎ、まがれる岩かどをけづり、先師の足にさはるごろた芥を、そろ〳〵掃除するのみ也。

羽二重自敍發且云、夫誹ノ爲レ道ヿハ嘲ニ哢風花雪月ヲ一と云り。是先いかなるひが言ぞや。もろこし滑稽亂同の辨へもなく、善ク戲謔一了不レ爲レ謔と云味ひも不レ辨、和國誹諧の字訓をも不レ知、虛礫打たる文言也。詩哥・連誹のまなこ、あらき風にもあてじと、美景する雪月花を押つけて、めつたとあざけるを誹諧といへるは、我流愚昧の心得、羽二重の仕立やう、そでない事ぞや。又自敍云、有下不レ能レ傳ニルヿ芳キ譽ヲ於后裔一徒ニ流ニ臭キ名ヲ於當世一者上此文言京中の点者へ對して先慮外也。余人よりほめらるゝは人も見ゆるし侍れ共、自敍として諸人をさみし、我身を手ほめする事は筆法に無レ之。たとへ釋迦にしても不許。かやうにはかゝぬ物ぞや。

又自敍云、予自ニ垂髫遨ニ一遊誹林一ニ含レミ英ヲ咀レフヿ華ヲ有レ年ニ于茲一。判云、此作者後紐よりいづれの誹師に隨ひて一道を學びけるぞ。師匠慥に聞たし。いかに名を取度とて　天滿宮の恐もなく、いまだ若年にしてかやうの事は用捨する物ぞや。

又自敍云、杜少陵ガ詩云爲レ人性癖ニシテ耽レフケ佳句一ニ語ハ不レ驚レサ人死トモ不レ休ヤマ余於ニ斯道一ニ竊ニ以ニ老一杜ガ此句一ヲ爲レ志。判云、此高上の文言に心を付て見れば、さりとは笑止千萬也。詩の大聖人といはれて、鳳鳥も出て舞ぬる杜少陵と鴻鳥と同じやうに首をのべ、羽二重をひろげんや。是驢屎比ニス麝香一ニといへるがごとし。勿躰なし。かゝる事は猶以かゝぬ物にて侍る。

又自敍云、題ノ曰ニ誹諧京羽二重一ト言イフ心は共一體麗レイ一密潔ミッケツ白ニノ固マコトニ非ニ他邦ノ所ニ能ク及一遂ニ授ニケ諸コレヲ剞キ一劂ケツ一氏一ニ繡シンノ梓ニ廣レムト傳云レ尒。判云、先にも云ごとく、此自讃を書は先書の美にして、鴻が手がらには不レ成。此書を京羽二重と付ねば不レ叶事か、迚も自讃ならば、京今織とか京とひ紗綾と成共名を付ん事、濱の眞砂の數なるべし。きのふけふ賣人の

匠み出せし先書の名をかりて、雪上に霜を加へし文言、誰か潔白と見るべき。

泊ニ湧(ル)金門一ニ　　　宋ノ林鴻

烟生ニ楊柳ニ一痕ノ月　雨弄ニ荷花ノ數点ノ秋
此景此時描(ウツセド)不レ盡　畫船歸リ去テ有ニ漁舟一ニ

判云、此詩は聯珠詩格の第一に見へたり。此詩何のよせもなきに爰には出しけるぞとおもへば、烟月堂といふ鴻が堂号を自立に付たる私の異名をあらはさん爲ならん。又明(ミン)ノ林鴻出塞(ソク)曲あり。判云、宋明二代、林鴻ノ徳を我身にくらぶる荒言、はゞかりもなく書(カク)物に非ず。名にも付物に非ず。又林鴻愚知と極めながら、此道におゐて名をよばるゝも誹の冥加に叶へるにや。判云、愚知の字あやまり也。愚癡よし。又林鴻とみづからたかぶりたる名を付て、余人に宋の林鴻と呼るゝとや。又誹の冥加に叶ふとや。忘レ自ラ惠レ他ラ。五常をふかくたしなみてこそ、自然と冥加にもかなふべけれ。心のたかぶりにまかせて似せこと虚言を吐て、無法放埒を辨へず。破戒無慙にして天道に叶はん乎。

一　鴻假名書の自叙云、それ南方は紫震(宸)の正面より右近ノ橘・左近櫻、げにや唐虞ノ春錦にまさる京羽二重と書リ。判云、是も手ほめの羽二重也。下から上へ織もて行ば、此書先七條より筆をおこし侍る。判云、何と万機の王城を下から上へ織と云古實ありや。忝も万乘の紫宸、九重のまんだらを逆さまに織なす事、誹の冥加につきたる無法ぞや。いかさま何ぞにばかされたると見へたり。

かつは管窺(クワンキ)蠡測(レイシヤ)の嘲りを憚リ。判云、是大きなる過言なり。世間には高學尊貴もましますに、管(クダ)の穴から測(カクヘラ)をのぞき、蛤貝にて大海をかゆる、あさましとかける無法興骨也。鴻が河内羽二重の糸を通せし管の穴からあやまりをあらはし、予蛤貝より蕪香圓をくじり出して、空谷響に妖されたる人ゝに氣付を參らする邪鬼、急ゝにされ〳〵。

是までにて自敍の評判終。

扨又正誹の道筋をわかちて、卷頭の發句より次第にそろ〳〵羽二重を洗濯すべし。十三人の外へとば汁のかゝりける事はゞかり多けれ共、それ〳〵とえりのくべきにもあらねば、つゐでに帽子をあらひ侍る。予つく〴〵此書

をうかゞふに、誹諧に魔の入たる證據あり。發句卷頭の木魅の所爲に正誹を妖されて、さそはれ出し鳥獸かず〳〵也。あるは珍らしき鳥も有、あるはいな獸もあり。先卷頭は木神と云化物の大將、正由は魂のぬけたる郭公、方山は宿の石たゝき、湖外は鵜遣、我黑は恙馬(チンバ)、和及は山女、林也は山がら、貞恕は螢、如泉は物喰のよき鹿、言水は紙鳶、高政は鼠、良詮は人魂ノ鷹、則風は蝙蝠、常牧は牛、信徳はま虫に尻、重徳はひきがへる、鷺水も蟇、天龍は相撲大食の山獺、團水は蓼喰虫、遊谷は鶴、淳竹は蟬、夏夕は郭公、定武は變化の物、丈竹は蜻蛉、松月は鹿、令富は蠅、信房は比翼、舟露は蟎、如水は鰤、卷軸は雲風子木綿の林鴻、以上三十疋、京雀と共におどり出たり。此禽獸遊山の中に、犬と狐の出ざるはいな事じやと思へば、友にせざるもことはり也。此二獸は林鴻と木魅の鴆毒(フス)なる故成べし。

梅が香の空谷響ひろはん深山川　芦月庵 似船

判云、先誹言なし。又連哥作りにも非ず。此作者は古美たる誹士也。殊更惣卷頭におかるゝ發句なれば、いかさま一ふし幽玄可レ視の様子も有べしとおもひて、魂をこらし思案すれども毛頭愚耳に不レ及。定て自分にはかふした事をとおもはるべけれども、十人が十人ながら合点せず。無心所着の妖物也。古太万(マヽ)を卷頭の發句にするならひ有か未レ聞。山彦(コダマ)・木神(コダマ)、文選蕪城の賦ニ云、木魅(コダマ)山鬼(コダマ)今案ニ、木魅(モクミ)は樹神(コダマ)也。是皆人心をうばふ邪鬼の妖恠也。發句には空谷響之字をかゝれたり。定て文字に子細有べしとふと心付ける故、山姥の謠を思ひ出たり。一洞空しき谷のこゑ、木末に響く山彦の無聲音をきくたよりとなり、かくうたふて見れ共、聲にひゞかぬ谷也けり。源氏蓬生の卷に、こだまなどいふけしからぬ物ども、所えがほにやう〳〵かたちをあらはして物わびしとあり。又、浮舟の卷にも、此世になくもならばやと明くれ思ひわづらひて、人皆ねたりしに妻戸をひらき出たれば、風はげしう川波あらふきこへしに、兵部卿の宮とおぼしき人の、いざゝせとていざなひ給ふとおもひしより、樹神にとられてさん〳〵物狂ひになりたりとあり。又、徒然草にも、ある

じなき家には、狐・梟・木玉やうの物かならず入來る物なりと有。云心は、本心に邪鬼の入かはりて、狂亂さするくせ物と見へたり。さればこそ此空谷響も正誹の神(タマシイ)をうばはんとて、羽二重のかしらにのぼり、又鴻、雲風子といへる名は、梟の雨を呼ぶ異名ならん。此二つの妖物、卷頭・卷軸、首尾をあはせて誹諧の正躰をぬけがらにして、內證へ入かはりし邪鬼魔民のなす誹(ワザゴト)、人〱御覽ゆへ、扨こそ妖はあらはれたれ。

どこもとぞ初音の初音ほとゝぎす　宮川道柯居士

判云、此句は似船卷頭の次の又卷頭に成しをよろこびて、初音の初音とせられしと見へたり。尤の挨拶なり。どこもとは、こだまの親父(オヤヂ)のおぼつかなき空耳ならん。老誹ほどありてよく心を付られたり。或連哥に、

いづこもし初音の初音郭公

と云句あり。又哥に、

老らくの耳にはうとき郭公
いつも初音の心ちこそすれ

かくいへば哥・連哥と心も言葉も同じやうに聞へ侍る。尤どこもとぞの五もじにて、連誹のかはりを見せられしは、一作にてもあらんか。郭公の誹發句をかやうにしては、かならず同意になる物也と先師申されたり。心の誹諧は新点者衆上手にてよくいひまはさるゝもあれば、こべり付たる古風とて、老誹をなじるもいやといはれず。又あるが中に道柯居士と鴻が德号をかけるも、何とやら諸誹士へ慮外がまし。依怙のやうに聞え侍る。位牌か卒都婆などには目にも立まじけれ共、いまだ長生の人をして余情がましく居士号はおとなげなし。

千代の春鳥來て敲け宿の石　招鳩軒 方山

判云、此句は王子端が一堂足了一生閑ナリ門前ノ剝啄定ニ佳客ニといへる心か。又千代の春と五もじにあれば、搜神記に見へたる鶴化レ石と云古事にや。又鸚鴿(インタヽキ)と云鳥か。是も一名鳩の類也といへば、軒号の招鳩の事にや。此内鶴の化レ石といへる可レ然。庭の石とかいふべき宿の石いかゞ。此点者はきけば添削のうへもつゝまやかな

るよし也。たのもしく侍る。

種漬て濁し始る野川かな　井筒軒　鞭石

判云、此句何の子細もなくきこへたる分也。今時かろき正風躰とてかやうの發句多し。たとへば連哥に、

春雨はやまで音なき軒端哉

かやうの句勿論躰骨なしとて嫌ひ侍る。

鵜つかひよ若きは人の日にたゝず　一松軒　湖外

判云、此句は老さらぼへるなりをして殺生のわざは、さながら淺ましく見ゆるほどに、余のわざにて身命を御つぎなへかしと、鵜飼に僧の敎訓せられし下心をうけられ、おとなしくきこへ侍る。此誹士はまだしきよはひと聞しに、末たのもしく珍重〳〵。

凉風や晝寢の夢を吹さすり　寄竹軒　兒水

判云、連誹共に發句作り、平句作りと云事あり。凉風やと切字有斗にて一句は平句也。

のび〳〵てゆがまぬ松のみどり哉　滴水

判云、松のみどりも、立とせねば季にならぬ古法有。のび〳〵てと有程に、立やうの心か。杉ハ直ヲ爲レ性松ハ屈曲ヲ爲レ性といへば、松ものび〳〵ては、棒杉のごくなりと云心か。

日ゝだぬは花見もどりのちんば哉　舟叟翁　我黒

判云、此句たとへば、人の心のおくふかき其情こそ都なれや、東山木の下陰にまど居して、樽の前の春風、ざゝんざの松原有、花有、月有、樓臺あり。一盃〳〵うへすくなしのかへり足、一町十番うたひつれたる千鳥足のありさま、新しくも當風に見たてられし一作哉。予も狂哥を一首うたふべし。

花見もどりむれつゝちんば引のみぞ
あたら作者の難にぞ有ける

扨満白老人と云羽二重の跋は、此人のかへ名なりといへり。いかさま余人にかはりて、羽二重を半疋は云さけた

る文言也。惣なみなればかゝねば不レ叶、かくも又いな物じやと心を付し所、筆勢にあらは也。是座敷なりのぬけ道をおぼへられし上手ぶり也。仕やせまし、せずやあらましとおもふ事は、大かた與書せぬがよしと兼好法師申されたり。

打はへて織人達や山ざくら　（露吹庵）和及

判云、織人達やは羽二重の挨拶かときこへ侍る。され共一句に衣類のえんなし。又折人たちやか手毎に折て土産にせんといひし花見衆か。此人予が會へも折ゝ出座せられしほどに、やうすあひて尋たくおもひし所に、此程の内にはや古人になられしとや、評もほひなし。

姫御前や難波くらまをとふ粽　（花香堂）貞木

判云、此誹士は山本西武門弟にて、予が味方也。然共たとへ兄弟とても、うしろくらまの篠かくれたる難波のよしあしを、いはでたゞにやは有べき。一句邪もなく律義なれ共、當風におかされておさまらず。爰にて西師の口傳をかたらん。たとへば、姫ごぜや篠あしわかずとふちまき　とありやうに仕立る時は、ひいな遊びの姫ごぜのまだいはけなきすがたあらはれて、やさしくきこえ侍る。難波くらまをとふ粽　にては五もじの姫ごぜに皆式うつらず。五つ七つの女の童、篠芦の名所旧跡をいかでたづねんや。然れば姫ごぜの五もじ、うごきてすはらず。三十一字にて仕立る和哥さへ、五もじすはらでは首尾あはず。いはんや十七字にて哥一首を仕立る發句なれば、あだ字ありては云たらず。それ故五もじ大事也。發句は五もじにて誹言と、季と、切字と、惣躰とをもたするやうにせねば、七五にておもふやうにいはれずと西師物がたり仕給へり。當時の点者衆、正風躰とてまつすぐに季斗もたせてする事を好まるゝ。大かた連哥の無心躰・無文躰・勿論躰のなりそこなひ也。それ故切字斗有て哥の上の句平句作りなれば、連哥におゐて此味をつよくいましめられたり。當時自立の若点者衆、數多湧出て我流をおこし、さまぐ\異形異類の風俗ありとも、隨分正躰をうしなはず、貞徳・西師の流を汲からは、其道をしかと守り給へ。

扨又花香堂といふ堂号も、西師存生にましまさば殊更しかり給ふべし。今は新点者めつたに堂号を付ぬる故、つかぬがそん也とおもふて付れしにや。先達七仙の中にいづれか堂号の点者ありや。西師も無外軒にて一生終り給ふ。晩山丈などの貞徳翁の堂号を直に吟花堂とつかるゝ事を、かまへてけなりがらるゝな。予は七十に及ぶ身なれば、明日をもしらず。貴方は年も若ければ、西武老の流を守りて末ながく正誹を傳へられよ。安原正章入道して貞室といへるを、黄門跡林公(マヽ)、貞室と御黎志成ける故、貞室とは名乘によむ時は、文字こそかはれ貞室(サダイヱ)と人いふべし、遠慮有べき事也と、面談にての給ひしぞかし。殊更、堂号は上つ方の尊号なれば、一德なくては地下にてむざと付事に非ず。誹諧士といふ者は、無法な者共かなとおほしめされんも空おそろし。自余点者の所にて此事申さば、非言悪口のやうにおぼさるべき事、はゞかりける故、同門相弟子のちなみなれば遠慮をかへり見ざる也。惣別當時誹諧に魔が入て狂亂さすると見へて、風躰おかしき物になれり。此度羽二重の發句は、當座の卽興にもあらず、元日發句の一年切にも非ず、一世一代一人一句の名目發句なれば、面〳〵念が上にも念を入らるべき事なるに、正躰を樹神にとられて、うか〳〵せられたるなるべし。

さらし臼撫子かろきそだち哉　東白軒 風山

判云、只洲河原の夏けしき、でつしりと晒臼をすへて、河原撫子の露もたはゝなるを、かろく見くらべし一躰、新しく侍る。珍重。

かくれつる家はさもしや米嚢花　季吟室 松遲

判云、一句落着きかず。米嚢花にかくるゝ程の家ならば、あまがへるが家なるべきか。但さながらかたぶく軒の草、はにふの小屋のいぶせき事にや。

赤土の崩て暑し山の原　鉄窓 竹翁

判云、暑氣炎天の至極を見たてたる一句ときこへたり。樹有を以山は貴しといへるに、立よる陰も夏山の赤はげ

の蛆くへは、見るから汗もたりぬべし。

　山雀のもとの立木にもどりけり　林也

判云、上ゝ吉の狂哥の上の句也。くるり〳〵とくるみまはしてといへば一首によろし。

　初紅葉出る程人の付にけり　相拾士 長伞

判云、一句皆式えきかず。定てふかき様子こそ侍るべけれ。

　水草にいきた花とぶ螢かな　乾貞恕

判云、此人は貞室跡目の点者、七十の老誹古風の石部金吉也。それ故一句はよくきこへたり。然れども生た花とぶの誹諧、わか〳〵しく位なし。いはゞ老て二度見に成たるがごとし。

　鹿起て雑煮にむかふ深山哉　眞珠菴 如泉

判云、此句は歳旦の句にて、一度用に立たる發句を加入せらるゝはいかゞ。随分の達者なれば、自余の發句ないものかなんぞのやうに、如泉には不足也。扨又元日の句にても、一ふしとんたる句ならば加入せまじきにも非ず。一句はきこへながら、元日の下心いかなる廻しやらんえきかず。たとへ深山の奥に住とても、心を都になしてする發句を、引かへて都に有ながら山家の柴とゝに成て、鹿を友にするこゝろ、打かへ手と云一作にや。あまり匠み過たる一句也。扨点者衆、近年哉留の發句を好みてせらるゝ故、京も夷中もそれを手本にして惣哉の發句になれり。先以手がらなれども、それ故下手の哉は、やかな・うき哉に成て尻すはらず。杖つき立て片足あげたるやう也。一比は哉留古くさしとて目にもかけざるが、此羽二重点者の哉斗廿一有。是も名譽の不思儀哉。

　鶺鴒かりて淡路へ行かん塩干哉

此句如泉の發句とて人のかたりけり。又此哉は手本にしても可レ然哉也。一句の見立も新し。又當年元日も見侍りし

　初空や櫻が彌生蘭の秋

此等は鹿起ての元日とは、富士山と芋がしら程のちがひあり。初塁の五もじより云たてたる故に、何事の自由を云ても首尾おもしろし。貞木發句所にて西師の物がたりみかける五もじの大事、かゝる發句にておもひあはせ侍る。

紙鳶裸子は見ぬ都かな　粟藤　言水

判云、此句いかなる古事ともきゝかね侍る。但此誹士は根本江戸役者とききゝしが、鈴の森・品川灘の海士の子が裸にて生鳥賊・蛤やうの物をかつぎ揚るを見て、さすが都の子共はいかをあぐれ共裸にはならぬと見立られしにや。都といふ字まなこなれば、夾中あやつりたる狂言なるべし。はるぐ〳〵遠き大まはし、是もあづまのはてしなの一句や。

おもくれてさすがの一重櫻哉　吟花堂　晩山

判云、兼好法師、花は一重なるよし。とく咲て、はやちりたる見所あり。とかける美景を、取もなをさず同じ櫻の吉野山にて作られたり。それなればつれぐ〳〵草を、口おもき人の講尺するやう也。さすが見所もなし、八重櫻は異様の物也と兼好、かきたれば、是はおもくれて、人の物重づらに似たるにや。八重櫻迷惑の事也。又吟花堂の事は、貞徳翁にあやからんとおもふて付れしと見へたり。烟月堂、宋の林鴻とよばるゝも、自然の冥加にやとかゝれたれば、晩山もやがて貞徳まさりになられん事、うらやましくこそ侍れ。

三門に似合しき物よ花樗　高田　幸佐

判云、いかなる見立をればかくはいはれけるぞ。先中の七もじもつてまはりて聞よからず。樗は紫雲に似たれば、三門にて葬禮などする折からは似合しき物といへるか。三門のなき寺にては、又似合ぬか一圓えきかず。

閼伽だなに菊かざし行鼠哉　菅谷　高政

判云、此句は兼好法師、あかだなに菊・もみぢ折ちらしたる、佳人のあれば成べし。と、かける栗栖山の菴より

廿日鼠のやせたる、ちよろめきて菊かざし行松葉がもとのさびしき風情、あはれ野ら猫なくもがなと、高政和尙感情をもよほされたるときこへ侍る。惣本寺をば烱月堂鴻長老にゆづりて、外山の方丈の跡などしたはるゝ心ざし尤切なり。名とげて身しりぞくは点者の道とかや。近頃殊勝に侍る。但哉留のかゝへ字をぬかるゝ故、菊の句にはあらで鼠の發句になれり。

室町の果や薄打秋の暮　東林軒 定之

判云、此句いかなる事か更にきこへず。室町の果とはすゑの事か。北か南か。薄打とは何ぞうすうつか。又秋の暮のむすびあれば薄打か。又きぬたのやうにもあれば箔打か。室町なれば、もめん足袋打てんころ〳〵か。

初秋の水にかへすぞ香薷散　椿木亭 助叟

判云、初秋の秋涼しき水の月に、山猿の霍亂をさめて心きめやかなれば、藥袋も何ならずとや。

人魂にさかるゝ鴈の妹背哉　有調軒 良詮

判云、此句の趣向は、天の原ふみとゞろかし鳴神もおもふ中をばさくる物かは。此哥にて神鳴を人魂に取かへられしときこゆ。人魂、鴈にえん有かと工案するに、うら盆に里がへりせし人魂、嶋原・八坂などへうろたへありきて、冥途の道さへわすれて中有にうか〳〵せし折から、夜這星にさそはれ天上せんととびまはりしが、折ふし八月十五夜、はじめて鴈の渡り來るうはの空にて行あたり、つらなる鴈の中をさきたるときこゆ。尤誹諧の狂言躰なるべし。

髮結もさぞ朝皃を仕舞まで　尙賀軒 立植

判云、此句は朝皃のあだなるを云立んとて、髮結をさそひ出されしときこゆ。髮ゆひの床の垣ほに絃はわせて、打ながめんとうへおきしが、家職のいとまなきかなしさは、未明から起ても終に朝皃を見ずして、あはれことしの秋もいぬめりと打なげきて、花よ心あらば晝過までも露命をながらへよかしと、足もしどろにかけ廻りし心の

やる方なさ、おもひやられし作者の仕立、を廻しにてよく云たてられし。かく云出れば、あやしの髪ゆひもやさしくなりぬ。

京羽二重初巻評判　終

貞徳永代記巻之三　終

貞徳永代記

二巻目
京羽二重評判
繪師傳巻之四

松永貞徳繪師傳永代記巻之四

京羽二重二巻目評判

隨流に紋を付るや春の水　松月菴　隨流

判、自註ニ云、此句は右作のあらまし事にて、板行をけづり句を引けり。然共世間流布の羽二重に如レ此發句不レ消、それ故句並の評判をさし置がたく、愚案の自評をのべ侍る。先隨流の二字は、隨レテ流ニ認ニ得スレバ性ヲ無レ喜モ亦タ無レ憂モ。かゝる心にあやかり度おもへども更に不レ叶。發句は予が境界、きのふといひけふと暮しつ飛鳥川、流れ渡りの世の中、なす事も夏川の秋暮、冬も來て木の葉にうづむ流れの水、深山嵐に吹とぢられ、雜魚の氷つまりに波の紋躰もなき旧としなりしが。春立京羽二重につゝまれて、老木の柳條うごき、氷の下の流水も打出る波の紋あらはれて、松月の影をうかゞん事老後のおもひ出なりと、愚意の挨拶を一句につゞり侍る而已。



柳無二ノ氣力一條タ先ツ動ク
池ニ有二ア波ノ文一氷リ盡ク開ク

四人(ヨタリ)して御蚊屋釣らん女房達　向陽堂 好春

判云、此趣向は、已が女房の一人してくど〳〵と釣かねしを見て、おもひやりうらやましく、あたまかきたる息込なるべし。かやうに心をまはして注尺すれば、一ふしあれ共おしまかせて、あり事を云のべたる斗にては何のせんなし。此誹士も同じやうに堂号を付るゝからは、誹諧の奉加帳いか斗にや。

京にさへ茶をもむ人は按にけり　池流亭 松春

判云、此やうな句はあまりきこへ過て、只狂哥の上の句也。むかし九重の中に麥を干たるを見て、西行、都のおとろへたる印也となげきしとかや。是を思へば、

京にても麥こく人はこきにけり

かやうにもせば、古人のうはさともきこゆべし。かゝる風躰を自慢して京羽二重につゝまるゝは、千差萬別の心也けらし。

帯とかぬ人はまだるし夏の瀧　春花堂 松笛

判云、此句は納涼を云立られたり。魂ハ傷ニ夏山ノ深一ニ愁ハ破ニ瀧水ノ流一ニ。但シ夏の瀧つまりたり。何とぞかはり有べし。

子の妻の鼻やひくらん五月雨　友鶴山人 芝峯

判云、此句は何共きゝ遠き仕立也。田うへ姑などの、娌をそしりけるか。子の妻とは作りとばならん。已が親父(ヲヤヂ)を女共の舅(シウト)といへる猿若事など思ひ出てこばされたるか。作者の名書と似も似ず道外過られたり。

蝙蝠の日(ヒル)午とぶ筆の林哉　則風

判云、此句落着きこへがたし。扇などに書たる繪の事か。かうふりを畫とばするは、朝鮮あふぎならん。祖庭(ソテイ)事苑(ジエン)曰、吾鼠名狀如ニ小鼠一以ニ蝙蝠ノ肉翅一ハ亦謂ニ之ヲ飛生一ト。唯學文もせず、徒に畫ねをひろぐ捨(ステ)坊主なるべし。

石井筒似も似ず落る一葉哉　田中 正業

判云、きゝ遠し。石井桁は末代物、梧桐の一葉は一年物、とあだに落ぬるをいへるにや。いぶかし。

欲過て盛おくれぬかへり花　竹葉軒 風子

判云、あまり唉おしみして、冬までうろたへにし梅櫻を、五もじにてしはん坊の柹の木といへるならん。

東より代はおさ丸き春日かな　高瀬 梅盛

判云、此句は一兩年以前元日の三物に出て、世間によくきゝしれり。然るを此羽二重に出されしは、梅盛發句に事をかゝれたるにやといへば、去人の云、いや是は林鴻、羽二重の惣卷頭に致し度よし懇望せし故、此句を出されしといへり。扨は元日の發句を出されし事尤也。一句御代を可祝して、日光山を下心に含られ、一躰やはらかに万人よくきゝしり侍れば、惣卷頭にそなへても難有まじ。然るに何とて卷頭にはおかずして、羽二重の中込にして古綿にはしけるぞや。殊に此人は誹七仙の中也。今京中点者の中に第一之老誹、誰か此人を超んや。信徳は隨一の弟子として此儀しられざるにや。梅盛を押こめて惣頭にのぼりし点者はたぞ。和哥はかたじけなくも難波皇子宇治の尊即位謙譲の御心より、もろこしの王人と云賢臣渡りて、難波津の什世にひろまり、手ならふ人の初にて、和哥の父とはならせ給ふ。誹諧も此道にそむかば、只狂亂のそゞろ言なるべし。かゝる無法の誹士、高上の一路にのぼりつめて、天神の三十棒を請らるべしと、居士かなしみ給へり。

陽炎や孖る牛の丸ながら　蘭化堂 常牧

判云、此句皆式きこへず。先、丸ながらの留り異風也。常矩は近付にて風躰も聞覺しが、かゝるむづかしき事はせられざりし也。五もじは野馬陽炎の事なるべし。牛にたとへしはいかにぞや。にほふは牛くさき事か。肉食する者のいへるは、寒中に牛をくらへば、其身陽氣をうけて、丸ながら牛くさき物也といへり。左樣の古事なるべし。

尻ひとつ虫にはません山ざくら　伊藤信徳

判云、此句はきゝてによるべし。武士のやたけ心には、天晴仕立誹諧哉、我等も尻の一つや二つはなんだ辨慶とほめらるべし。内仕の春好む方々などにては、あゝさもし、はいかいとても、あまり平たいおいど哉、胡蝶をさへや秋松むしわいの、などいふてわらはせ給ふべし。此人は誹のいき方もしりながら、大ちやく者の大將也。次而ながら今すこしもつてまいらん。當元日の發句きゝけり。

蓬萊やこしの海づらよしの山

たとへば、

蓬萊や熱田御熊野富士の山

かやうにしても春の季を持申か。蓬萊のあしらいやうは申さずとてもしり給ふべし。此度林鴻が、予が發句は切字なしと名乘かけて無法をはじむる事、貴方御同心か。初心是を手本にすると見へて、あふみの勝句附に、切字のなき發句共にほうび出して渡さるゝ点者多し。是誹一道の天魔ならずや。貴方も予が發句は季なしにせん。蓬萊いはふなどせば一句おとるべし。よしや此まゝとことば書せられば、林鴻よりも貴所の發句をばいよ／＼初心證據とすべし。尤元日と題書して蓬萊と云からは、心にて季をもたせたれば一理は立ぬべけれ共、取はなせば雜にしてひとり立せず。古法をわたくしにやぶる事は大道のさまたげ也。今は点者となりて自余の添削を仕給ふからは、ちとたしなみ給へ。百になりてもおどり忘れぬ京すゞめちよい／＼。

妹がりや蟇の鱠のいさぎよき　寺田重德

此誹士は貞德翁の愛弟馬淵宗畔の弟子なれば、もと正誹にて、虫もふみころさぬ人なるが、今程は若点者と席座せらるゝ故、そびやかされて此度珍物の蟇の鱠を作られしと見へたり。蛙も鶯も季にする事は、聲有て春は鳴ゆへに哥にも詩にも春に用る。ひきもかはづの一つながら、鱠にしては春にならぬと云事を、作者も合點なるべけれ共、當時實法な發句は、こべり付たる古風也とて若点者笑らふ故、是非なく妹がりをせられたりとおぼゆる。是

も時の風俗に隨ふならひなればさも有べし。さりながら、羽二重にのせし發句は諸人の見る物なれば、若誹とおどりあはるゝはあやまり也。扨當年の元日をきゝし、

きそはじめ女は髮のめでたからん　重德

此句は五もじも尻すはらず、とまりも云たらねども、物がたりへなげかけて、はづませたる一作、自然奇妙のてには也。きそ始の女は髮のめでたからんこそ、人の目だつべかんめれと心にて留たり。是三十一の哥也。發句に十九てにをはと云事あり。是は三十一てには、古今無双の大はづみ、私のことばにあらず。つれ〲の文段をやとはれたるはめでたし〲。これ〲。

きそはじめ、女は髮のめでたからむこそ、人の目だつべかんめれ。

是にて一句よくとまりたり。

ねても〲目覺る夏の青みかな　北條　團水

判云、此句は新樹を利屈に仕立られたり。夏の青みとは一句つまりたり。白河窮レ年潔ク、松-柏冬-夏青シ。又いはく、突厥不レ知レ暦ヲ、惟以ニ草青-ヲ爲レ記。五もじ何とぞ有べし。此誹士、元日の言葉書に、西國行脚の心ざし有とて、菅笠におかざりを引れたり。幸此五もじを、菅笠に目覺る夏の青み哉　とせられよかし。兼好も、すこし旅立たるは目覺る心地すれ。とかゝれたるぞや。

鞠過て滿月かゝる柳かな　菅原　琢石

判云、見たて一かゝりあり。古詩にもうつり侍る。但シ菅原氏などは家の系圖かもしらねど、連哥誹哥を好む地下人は用捨有べき事也。百人一首に菅家と有やうにて目に立侍る。

夕皃におもたき蓑のあゆみ哉　青木　鷺水

判云、いまだ青木の梢に鷺の宿するに對して、夕皃の紘(蔓)に蓑のよこ〲仕たるいぶせき風情、せゝなぎのいやしき垣ほ、蚊やりふすべるなどよく似合侍る。

相撲取に秋たづねけり食の味　吐雲閣　天龍

判云、此句は唯万事を打捨て、食事一遍に思ひ入たる仕立也。世俗に秋のかはきは、人につくといへる心なるべし。吐雲閣天龍とは、いかなることはき神鳴ぞや。名をきくだにも其佛はおしはかられ、と兼好もいへり。一休狂哥に、

天龍が公家一口に呑やらん
食たゝりして吐雲閣

三具足鶴にてしりぬ善導忌　谷崎　谷遊

判云、此句は人にかまはず、佛たふとやとおぼへたる誹士と見へたり。元日毎に三物の本尊を吹出されよ。

衣更見ん三條の人通り　（マヽ）鴫永　只丸

判云、此句は三條にかぎらぬ事なるが、いな事をいはれたるとおもへば、往來の人の衣類の色〴〵を、二條の本誓寺からのびあがりて見られしにや。此比は寺をひらきて、知恩門前に看板して、いよ〴〵誹諧芝居繁昌とや。諸旦那も不通の由なればかくこそ。

衣がへ見ぬ三條の旦那かな

青梅はよく味へばすけもなし　中川　引牛

判云、此句は何のきゝ所もなし。狂哥の上の句也。

比叡の鐘より〳〵落る神樂哉　鵜殿　心咲

判云、五もじ書あやまりか。比叡か。一句の仕立がらいかなる神樂ぞ。不レ及レ判ニ。

風の來る窓をひらいた扇哉　惡鳳軒　立吟

判云、古めかしけれ共一句難なし。こせくりてきゝにくからんよりは、万人の耳によく入て涼し。

向ふ書に心ぞちらぬ蟬の聲　童稚菴　淳竹

判云、一句難なし。しづかなる夏山寺抔の心地していと涼し。但、心ちらぬや蟬のこゑ　とせねば發句めかず。となへて味ひ給へ。

秋やなをほとゝぎ過た聲の艶(ツヤ)　夏夕

判云、一句律義也。但五もじ切字の入やう有べし。

けふの月や花に申さば名取草　竹山 重榮

判云、古風かゝり實法也。月花の春秋を一所におしくらべし當流、さも有べし。上京一番の名取草なるべし。

七月は化物くさき時分也　服部 定武

判云、此句と重榮句とならべて見る時、邪正よくしれ侍る。いかほど心新しくとても、ことばの異風はかやうの集發句の大事にはせぬ事とぞ。七月は抔の五もじ、商人の帳を見るやう也。文月は、盆前は、初秋は、いか程も連誹のことば有べし。皆式初心と見へたり。くさき物は何〳〵ぞ、妖物は何〳〵ぞ。狐七疋といへるおどりのこゝろなるべし。

蜻蛉のけて行水の淀み哉　木戸 友竹

判云、趣向はよけれども、發句の仕やうならひなきゆへ、淀川のどろがめの料理になれり。又、哉留のてには、連哥の發句にあまたあり、それを手本に見給へ。とくと合點ゆくべし。

早早稲や陽のゆるみのたなつむろ　橘祥軒 薄古

判云、万人のきゝよきやうに田なつ物と仕てよし。予細過て初心えきかねば作者のそん也。陽のゆるみ易道においてさま〴〵有、書つくしがたし。

いかにせん綿くる里に鹿の聲　撒谷 松月

判云、此句は秋の夕昏の淋しき山家の心にや。又わたくる音ほどやかましき物もなし。碪とはかはりて、きゝやうにて心かはるべし。一句難なし。

虫干やさうした中に枕して　三軒 陽川

判云、書物の虫干から草紙た中に枕して、源氏・狹衣など見るよし也。此かゝりもおかしけれども、して留などの發句は人による事なれば、かやうに大勢の中へ加入す

るには、出過て人口にかゝり侍る。連哥の發句に、

　名も涼し清き渚の玉はして

と云句有。此句に付て子細有事に侍る。

　葉の盡て月の裸に隱れなし　秋香軒 丁常

判云、五もじ、木の葉つきてと木の字入たく侍る。たゞ葉と斗はせぬ法有。一句の心は桂花侵レ月松羅掛レ雲。といふ語もあれば、裸一作なるべし。

　咲物か木に白雲か芳野山　二竹軒 生西

判云、よし野ゝ櫻を、人丸が目には雲となん見ける。すぐに是なれば別の事なし。誹などは見立をかへていふべき事也。

　蠅はさぞ内や床しき櫃すだれ　鶏冠井 令富

判云、一句見立は新しけれ共共さまいやし。令富抔發句に、食に蠅のたかる風情などは一向不ニ似合一。令徳翁にはおよび給ふまじ。一句をきくから道中のうき嶋が原の馬宿を見るやうなり。いと涼しからず。

　きり殘す岩の花見や吉野川　黒田 貞彙

判云、西行法師の、花ちりなばと人や待らん、などの枝折手折の山櫻、柴人の切殘す岩の花見や吉野川、秀句も一入にきこへ侍る。

　契り星さこそ木にとも鳥にとも　鈴村 信房

判云、此句長恨哥、二星に誓ひしことばにも、天にあらばひよく、地にあらば連理、楊貴妃のうたひにうたふがごとし。是によそへて遊子伯陽の因位の誓ひを、さこそとおしはかりし仕立なるべし。尤句作りをば一ふし有やうにせられけれ共、ちぎり星の作りことばも千話過たり。木にとも鳥にとも、是も二星の發句には勿論古くさく、はまりたるやうに人きくべし。

　起る事荻にははやし窓の前　眠柳堂 常春

判云、此一句、庭の萩原先そよぎそよかゝる秋としらす

る月のあけぼの、目はり柳の常春なれは、夜ざとく風におどろかれしもことはり也。いきは連哥なれども、五もじ誹なるべし。

菱咲てゆへよ蟵もにくからず　佐藤　舟露

判云、此作者一向若き所見へ侍る。水宿江のおほつかなきにも、菱の花咲ていと涼しく打ながめやる折から、すほん目がのたくり出るも一景とおもはれて、さのみにくからぬは菱の花ゆへ也と云心なるべし。かくいひ出ればいとやさしくなるに似たれど、此句作り、げにや世俗にいへるすほんの料理、下手の仕てはよろしからずとや。

今朝の初秋先天上の五衰より　市村　殘石

判云、此作者もいまだ若し。あたら五もじに今朝の初秋風袋の手づゝ也。今朝ノ秋又は初秋はとおきても同じ事也。次にかなづちのやうなる誹言あり。何のあぶなき事かあらん。それに、よりの捨ぎれ、是も上達の人の手わざならではまはらぬ故、てにはの口傳にても初心の人好む事なかれといましめられたり。此仕立は、よりどまりのまはしにもかまはず、ふしなしにうたふて、さあこれから須彌の四州と同音せよと、下知したる一句なるべし。楊貴妃の謡しらぬ人は一向合点ゆくべからず。

この暖さ　さう奈井ものか鷲所守　佐藤　友扇

判云、此あたゝかさとよめば七もじにて春也。さだめて此暑さにて有べし。いづれにもせよ、船頭のつらの黑ほうになりたるを御らんじて、不審はなさせ給ひそとよ。

順禮に鰤の生たを問にけり　八木　如水

判云、此下の句を、我終に見ず天の橋立　と付て、六角の扇屋庄介と名乘仕たらば、よき狂哥の短尺なるべし。

何ぞ聞耳あらばこそ郭公　吟瓢子　雲水

判云、此一句全躰、郭公に枕をならしたる寝耳、感情かぎりなし。五もじよくおかれたり。雲水の行衛もしらぬ郭公、燈の外に吟ずると、我が名によせたる余情も有ぬ

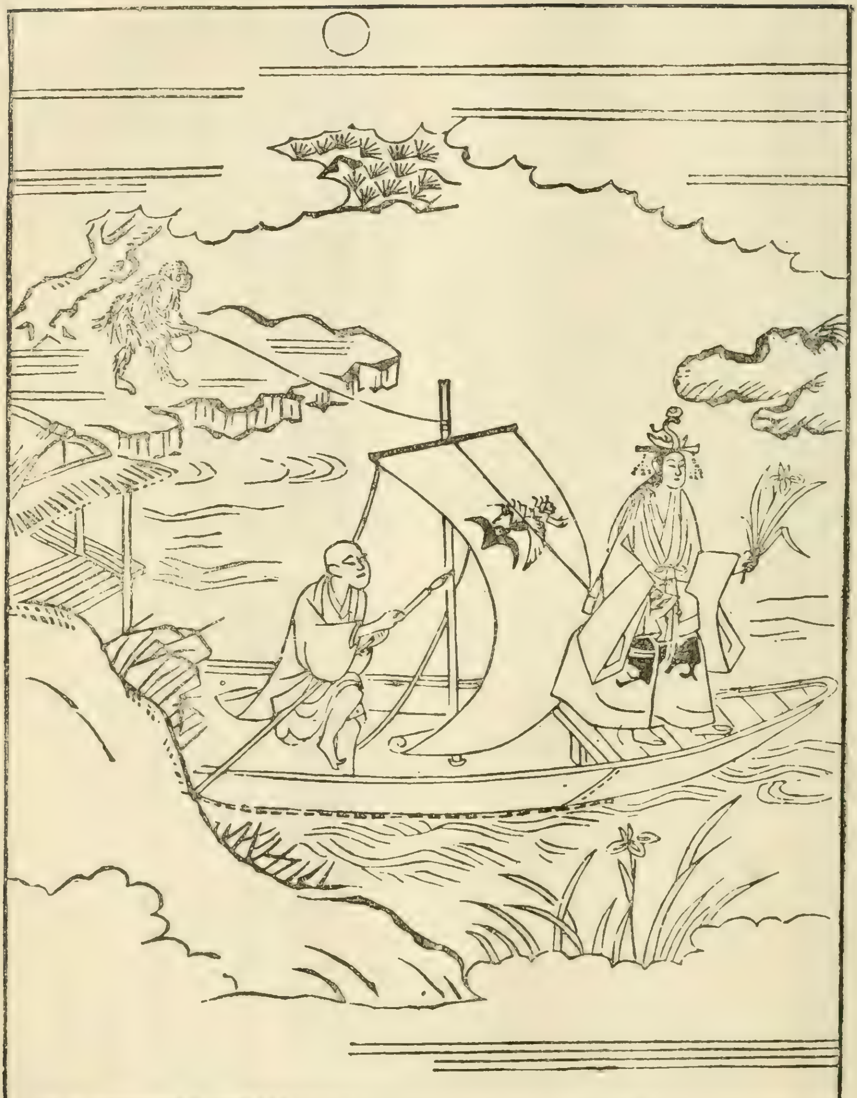
べし。

予が句は切字なし。花や花産とせば一句おさるべし。よしや此まゝ

する〳〵と花の花うむ杜若　林鴻

判云、此句ことば書前代未聞の曲事、高慢無法の第一也。既に十羅刹の鉄板にあざやかなれば、くはしくは其罪を判ずるに不ㇾ及。今度の京羽二重一部四冊、骨を研て編集せられしは、世間に高名して諸人の誹師となり、正誹の添削をもせられん土代ならずや。然るに予が發句から切字なしと名乘出して、自余の句の切字なしをば何と批点せらるゝぞや。若又發句の切字まだるければ、予が發句の切字なしを手本にさせ、自今以後切字の有句を非言せんとの新法か。又、いや〳〵万民の切字なしは制法也、我一人は切字なしにするとの我まゝにや。いかに自身を雲風に吹上て、宋の林鴻に成たきとても事による事也。連哥の祕決に、切字なしの發句に付てかたき制法のいましめ有。仕やうを傳受しても凡人のする事に非ず。若此義に違背せば、和哥三神の天罰を蒙らんとかけり。此儀

虛言とおもはれれば、新在家の名匠にたづねられよ。しらざる事をしり皃にして、日本流布の誹書にはゞかりもなく誹諧の大王になり、發句の禪閤になる事、天道これを許さんや。一向しらぬ初心の發句には切字なき句多し。それは仕やうをしらざる故、心におかさぬ科なれば神もゆるし給はん。花や花うむと切字入る事をばしりながら、我一人切字なしにせんとはいか成狂亂ぞや。其方此道の点者にあらずば、此難申もと〳〵し。自分斗の樂みは、からすがはゝもおもしろし。師は針のごとし。一毛衆毛を引とはり也。惣別あしきをしへには、初心はやくなづく物なれば、もはや世間、鴻のをしへを見ならひて切字なし又は三段切、大まはしなどして、唯一向の平句を一番勝二番勝とても〳〵しくほめそやして、初心をたぶらかさるゝ点者多し。かくまで此道を無法にをしへらるゝ事、京点者の大耻、しれる人のきゝてあざけり笑ふ事、たゞごとならず、誹士に木の葉天狗の入かはりて狂はすると見へたり。和哥の道はよろこびを延し、君が代のすぐなる道をあらはして、越鳥南枝に巣をかけ、胡馬北風にいばふ。此理



にそむかば、いかで國土も安穏ならんや。恐るべし〳〵。

扨又

する〳〵と花の花うむ杜若

判云、此五もじ用に不レ立、首きれ也。連に冠不レ着と云に似たり。惣別發句のすがたは、冠・装束・沓をはかせて、諸根具足の妙躰を立る。此道具不調法なる故に、冠不着・沓不帯の名目出たり。然ば沓冠の具足するを連にては首尾と云、詩文にては轉合、誹諧にては亂同と云。此發句、する〳〵との冠、杜若の沓にかよはず、はなれて別の物也。首うごきて不レ居(スハラ)。たとへば、する〳〵・やす〳〵・うんと云てと仕ても、杜若へちつともひゞかず。是故これを首きれと云。五躰のかたわ者なり。扨此句を一字もかへず、姿をひねり直して、諸根具足の妙躰をあらはすべし。

花の花する〳〵とうむ杜若　堀江林鴻

是にて自然の秘密切そなはり、上品の發句也。尤花の花うむの趣向、奇妙開發哉。此度鴻ト與レ流。琢ニ磨ス是非一ヲ。以レ石ヲ打レ鉄ヲ。生ニ於レ中光一ヲ。是石ノ徳乎鉄ノ能乎。以レ邪ヲ生ムレ正ヲ以レ非ヲ生ムレ是。是非ノ父母相交テ而生ムレ道ヲ。鴻カ以ニ京羽二重一ヲ流生ニ貞徳永代記一ヲ。是生レ鴻乎。生レ流乎以ニ堀江泥中ノ杜若一ヲ生ニ京極玉泉ノ之杜若一ヲ。兩句無ニ切字一ノ杜若。自然ニ生。雲泥一如。地天泰和。滑稽亂同。誹諧首尾ノ之妙花。天然トシテ顯レ是。無ニ思邪一者哉。こゝろの水の堀江より地紫の染羽二重、透額の冠を着し、さもうつくしき兒よ花、たけ高ひ子の后量(ガネ)、御産平安城珍重〳〵。

京羽二重發句評判　終

連哥引離の付合

前句

紫の庭にかゝれる御溝水　宗祇

附句

かきつばた咲八はしの、里　宗長

京羽二重跋書巻頭

誹諧の京羽二重は、七夕妻の手際にもあらず、生田の神の織おろしにてもなし。堀江林鴻の練仕立たる所にして、此道の緒長く傳れとなり。我これを見るに、勤テハ思女ノ在レヲ機ニといひしを、林鴻子もさおもふなるべし。先哲もまたこれを感じて、今や草の原露に潤なん八月の日

蘭化堂常牧書

ひとの國のをんなは錦に詩を織る、わが京のおのこは羽二重に誹諧を織りて世〳〵の寶となす。それはこれ誰、林鴻。

信徳

請跋諸
林鴻所撰俳諧京羽二重一部四册
讃曰
虚談誤世王夷甫

園水書

跋書巻軸

陳留の若蘭が錦の詩は、わづかに尺に滿ざる間八百余の文字を織て、漣波が心の水に洗へりとかや。專林鴻といふ者あり。山の經水を緯にしてはたをる虫の夕〳〵、京羽二重工なるにたり。吁すきものゝ家路まどはぬはいかいの山わけごろも、たもとゆたかにしたてよと鴻子にをくる此一言、鴈のつばさに秋の風。

旹元祿四年辛未秋閏八月下浣

蘆月菴似船書之

右京羽二重十有三跋ハ都テ不レ及レ評-判ニ只誹-諧各-遂タル擧ニテ自-毫讃-列證-言ヲ以テ余並レ之軸-跋一-嘆ハ積テ鴻-鴈羽二重一部始終ノ櫃-荷ヲ任テ雲-風ニ渡ル阿-蘭-海ヲ是蘆-月乎朱丸ノ之旗似タル紅-毛-船ニ乎

松月菴一源子
隨流述之

貞德永代記跋

一源子曰此永代記貞德之遺書而初誹入德之門也於今可見正誹爲學次第者獨賴此書之存而諸誹書次之誹者必由是而學焉則庶乎其不差矣

洛山道人書之

元祿五壬申歲三月吉日

三條繩手大黑町

橘屋庄三郎板行

芭蕉翁反古文

上・下

文暁編

芭蕉談終焉實記序

今は一むかし、此花舍某が後廳は芭蕉翁終焉の地なり。時うつりぬれば、木は立ちのびて空を支ふ。星うつりぬれば、石は沉みて人しらずなり行ぬ。元亨釋書に曰、人去境留境者也と、誠なるかな此言、湊川の史録に、楠正成が戰死を聞て、齒を喰しばり涙を墮さゞる族は、忠義をしらぬ人なり。花屋の後廳、芭蕉翁の終焉の實記を見て、涕すゝり泪を拭はざる輩は、世に月花をしらぬ人なり。かゝる旧跡有て、此旧記のあきらかに傳りあること、げに風雅の冥合といはむ。是ひとへに去來先生の篤實にして、翁生涯の事實を書記しおかれしゆゑなりとぞ。かく舊き事はしたはしうこそはべれ。浪速潟みじかき芦の草枕、松島・蚶潟・須磨・明石、身は風雲の行方さだめず、漂泊二十年の曉の夢、こゝにてをはり給ひし面影のたちさらでのみ、千歳の後といへども朽ざらまし。今風花雪月にあそびて翁を慕ふともがらは、此不可思議なる三世値遇の因と縁とを感仰すべし。

文化七秋八月五日

東肥乞隱文曉識

翁反故 上 終焉日記

肥後八代 僧文曉著

浪速 花屋菴奇淵挍

九月廿一日。泥足が案内にて、清水浮瀬の茶店に勝遊し給ふ。茶店の主が需に短尺抔書て打興じたまふ。泥足こゝろに願ふとあるによりて、發句を乞ひければ、

（松風の軒をめぐりて秋くれぬ　はせを）

所思

此道やゆく人なしに秋のくれ　翁

峽の畠の木にかゝる蔦　泥足

哥仙一折有略

（毎年九月廿一日浮瀬四郎右衛門亭にて松風の會式あり花屋庵より執行ふ此一折の俳諧芭蕉袖草稿ニあり）

連衆十人なり。短日ゆゑ哥仙一折にて止む。今度はしのびて西國へと思ひたち給ひしかど、何となくものわびしく、世のはかなき事おもひつゞけたまひけるにや、此句につきて、ひそかに悵然に物がたりしたまひけり。

旅懐

此秋は何でとしよる雲に鳥　翁

幽玄きはまりなし。奇にして神なるといはん、人間世の作にあらず。其夜より思念ふかく、自失せし人の如し。雲に鳥の五文字、古今未曾有なり。

惟然記

廿六日。園女亭也。山海の珍味をもて饗應す。婦人ながら禮をたゞし敬屈の法を守る、貞潔閑雅の婦人なり。實は伊勢松坂の人とぞ。風雅は何某に學びたりといふ事をしらず。岡西惟中が備前より浪華にのぼりし時、惟中が妻となる。其時より風雅の名ますく高し。惟中が死後、江戸にくだりて、其角が門人となる。

白菊の目にたてゝ見る塵もなし　翁

紅葉に水を流す朝月　園女

（歌仙一巻袖草子にあり）連衆九人、哥仙あり、別記。

惟然記

廿九日。芝柏亭に一集すべき約諾なりしが、數日打續て重食し給しゆゑか、勞りありて出席なし。發句おくらる。

秋ふかき隣はなにをする人ぞ　翁

此夜より翁腹痛の氣味にて泄瀉四五行なり。尋常の瀉ならんとおもひて、藥店の胃苓湯を服したまひけれど驗なく、晦日朔日二日と押移りしが、次第に度數重りて、終にかゝる愁とはなりにけり。惟然・支考內議して、いかなる良醫なりとも招きゆはんと申ければ、師曰、我本元虛弱なり。心得ぬ醫にみせ侍りて、藥方いかゞあらん。我性は木節ならでしるものなし、願くは木節を急に呼て見せ侍らん。去來も一同に呼よせ談ずべきともあんなれば、早く消息をおくるべしと也。夫より兩人消息をしたゝめ、京・大津へぞつかはしける。しかるに之道が亭は狹くして、外に間所もなく、多人數入りこみて保養介抱もなるまじくとて、其所此所（ソコココ）とたちまはり、われしる人ありて、御堂前南久太郎町花屋仁左衛門と云者の裏座敷を借ッ受けり。間所も數ありて、亭主が物數奇に奇麗なり。諸事勝手よろし。其夜すぐに御介抱まうして、花屋に移りたまひけり。此時十月三日也。

次郎兵衛記

四日。車庸・畦止・諷竹・舍羅・何中等は師の病氣をしらず、之道亭にいたりたりしに、勞りたまふ事を之道より聞侍りて、花屋にまゐる。

（鼠の尿に腐りて見えず以下處ゝふり）病氣ふ□□（原文缺）につき、問尋の人たりとも、慢りに座敷にとほる間敷と張紙を出す。且、仁左衛門に斷リ置事。

次郎兵衛記

扣帳（座敷入用品請取覺並座敷付之道具品ゝ覺）　次郎兵衛

戊十月四日

一机　一脚　　一硯　一面（墨一挺、水入、小刀）
一烟草盆　二口（火入、灰吹きせる）　　一帚　二本
一夜具　五流（壹具絹、四具木綿）　　一枕　五ツ
一膳　十人前（椀猪口皿添）　　一竈　三口
一釜鍋　一口三口　　一火箸　三
一茶瓶掛　二口　　一火鉢　二口（火箸添、眞鍮）
一茶碗　十　　一茶碗鉢　三口
一薄刄庖丁　三本　　一藥鑵　一口
一藥溜　二ツ　　一研木　一本
一摺鉢　一口　　一炭斗　一ツ
一水嚢　一ツ　　一油德利　一ツ
一盥　二口　　一手水盥　二口
一行燈　二張　　一懸行燈　二張
一挑灯　二張（大小）

右

同四日
一白米　一斗　　同一味噌　三升（赤白）
同一醬油　一升　　同一薪　拾束
同一炭　一俵　　同一油　一升
同一紙　一束　　同一雜紙　一束
同一鹽　一升

右

一ケ月
一座敷料　三步二朱　相渡

右　仁左衛門より受取書取置

飛脚便ニ申遣ゟ。老師、一昨ゝ夜より、少シ惡寒氣御座ゟ處、起居不穩ゟ。之道不勝手ニゟ故、御不自由と存、取計ゟ而、御堂前南久太郎町花屋仁左衛門裏屋敷奇麗閑栖にゟ之条借受、之道請判ニ而、先寓居と定ゟ處、今朝者別而御氣分無心元御樣躰ニゟ。醫者呼申筈ニゟ得共、早く木節ニ御樣躰御見せ被成度との御事、

被仰下候条、則木節ニ別帋遣候。此狀着次第、貴雅にも早〻御下リ相待候。木節御同伴候樣ニ存候。隨分御急可被下候。不一。

十月二日　　惟然
　　　　　　支考

去來樣

猶〻別帋急〻木節ニ御屆賴存候。以上。

今朝之狀、相達候哉と存候。老師御事、昨夜〆泄痢之氣味ニ而俄ニ一變、夜中二十餘度之通氣、是は頃夜園女亭ニ而の菌之御過食故と相考候。一夜之中ニ掌を返すが如ニ、今朝より猶又通痢度數三十余度、我等始、之道手を揉り候迄ニ候。此狀着次第、木節同伴ニ而急ニ御下り相待候。南久太郎町花屋仁左衞門と御尋、早〻御入り可被成候。急〻以上。

十月二日夜子ノ時　　惟然

去來樣

猶〻、大津之衆、其外何方へも、手寄〳〵御申遣可被成候。木節は急に被參候樣御賴申候。伊賀へ之常飛脚は無之、幸羅漢寺之弟子伊勢へ越候ニ、今朝狀賴遣候迄ニ候。

若其方角より幸便も候はゞ、被仰遣可被下候。

三日。廿七行、但晝夜也。天氣曇る。夜半過、去來きたる。二日朝之狀、三日之朝屆く。其座〆直ニ打立、伏見に出しは巳の時なりし。夫より船に打乘、八軒屋に着しは亥の時なりしと、直ニ御病床に參りたりしに師も嬉しさ胸にせまり、しばしはものものたまはざりしが、諸國に因し人〻は我を親のごとく思ひ給ふに、我老ぼれて、やさしき事もなければ、子のごとくおもふともなく、殊更汝は骨肉を分しおもひあれば、三ツ日見ざれば千日のおもひせり。しかるに今度かゝる遠境にて、難治の柴薪の憂に罹り、再會あるまじくおもひ居たりしに、逢見る事の嬉しさよとて、袂をしぼりたまへば、去來もしばしは於咽せしが、暫くして云、僕世務にいとまなければ、させる實意もつくさゞるに、かゝる御懇意の御言を蒙る事、生をへだつとも忘却不仕と、數行の泪にむせぶ。何樣賣藥の効驗心もとなしとて、去來又消息をしたゝめて、飛脚便に木節につかはす。

支考記

同三日夜子の時、追つゞいて木節來る。二日出の兩人の消息共夜着せし故、大津を丑の時に立、一番舟に乘しかど、短日ゆゑ遲着。諸子に會釋もそこ〳〵にして直ニ御樣躰を伺ひ、御脈を胗す。主方逆逸湯を調合す。

支考記

四日。朝、木節申さるゝにより朝鮮人參半兩、道修町伏見屋より取、同く包香十五袋取。天氣よし。之道方より世話にて洗濯老女をやとひ、師の御衣裝、其外連衆の衣裝をすゝぐ。園女より御菓子并水仙を送る。支考・惟然、介抱。次郎兵衞、迚も手屆かね、之道とりはからひとて、舍羅・吞舟と云もの來る。按摩など承る。今日三十度余におよぶ。度ゞに裏急後重あり。

次郎兵衞記

五日。朝、丈草・乙州・正秀きたる。天氣曇る。寒冷甚し。時候のゆゑにや、師時ゞ惡寒の氣あり。朝、次郎兵衞天滿に詣る、晝過歸る。夜着蒲團又ゝ五流・米壹斗・醬油二升・鹽壹升・味噌二升・薪二十束・炭二十貫目・雜帋三束なり。今日師食したまはず、湯素麵一箸なり。夜中までに五十度におよぶ。

次郎兵衞記

六日。天氣陰晴さはまらず。朝の食、入麪三箸。前夜終宵寐入たまはず。暫く睡眠したまふ御目ざめより、去來をちかくめして、先の頃、野明が方に殘し置侍りし、大井川に吟行せし句、

大堰川波にちりなし夏の月　翁

此句、あまり景色過たれど、大井川の夏氣しき、いひかなへたりとおもひゐたりしが、清瀧にて、

清瀧や波にちりこむ靑松葉　翁

と作りし、事柄は變りたれど同巢なりと、人のいはんもいかゞなれば、大ゐ川の句は捨はべらんと汝に申たり。しかるに頃日園女に招れて、

白菊の目にたてゝ見る塵もなし　翁

と吟じたり。是又同案に似て句の道筋おなじ。それ故前の二句を一向に捨はべりて、白菊の句を殘しおき侍

らんとおもふ也。汝が意いかん。去來泪をうかべ、名匠のかく名を惜み、道を重じたまふ有がたさよ。纔句一章に、さまで千辛万苦したまふ御病腦の中の御骨折、風雅の深情こそ尊とけれ。眼あるもの何者か、此句を同案・同巣と見るべき。恐ながら此句を同案・同巣など丶申ものは無眼人と申ものなり。其ゆゑは此句ゝ、景情別ゝ備りて、句意を見る時は、三句ともに別なり。かるがゆゑに、我は句の意を目に見て、句の姿を見ず。青苔日ニ厚ク自ラ無レ塵。これはこれ隱者の高儀をほめたる語。今は園女がいまだ若くして、陌上桑の調（ミサホ）あるをほめたまひたる吟なり。意も妙なり、語も妙なり、世人此句を見るもの、園が清節をしらん。波に塵なしの語は、左太仲が、必シモ非ニ絲ト與一ニハ竹、山水ニモ有ニ清音一といへる絶唱もおもはれ、園が二夫にまみえざる貞潔と、大井・清瀧の絶景と、二句の間相たがつて、感じてもあまりありと申せしかば、師も機嫌よくおはしけり。

去來記

七日。朝より不相應の暖氣なり。曇りて雨なし。藥方逆逸湯に加減、また入麪を好みたまふ。園女より見舞として菓子等贈きたる。次郎兵衛取計て之道に贈る。鬼貫來る。去來應對して還す。園女・可中・渭川來る。去來・支考會釋す。終日藥をめさず。終日曇る。夜になりて晴る。夜に入て、人音もしづかなりければ、灯のもとに人ゝ伽してゐたりければ、乙州・正秀等去來に申けるは、今度師もし泉下の客とならせたまはゞ、此後の風雅いかになり行侍らん。去來默して居たりしが、我も其事心にかゝりしゆゑ、二日の消息届し故、かくいそぎ參りたり。人ゝもさおもひたまふや。さあらば今夜閑靜なり。只今の躰におはしまさば、御快復おぼつかなし。滅後の俳諧をとひたてまつらんとて、靜に枕上に伺ひよりて、機嫌をはからひ問申けり。翁、次郎兵衛にたすけおこされ、息つきたまひてのたまはく、俳諧の變化きはまりなし。しかれども眞行草の三ッをはなれず。其三ッよりして千變萬化す。我いまだその轡をめぐらさず。汝等此以後とても地をはなる

ゝ事なかれ。地とは、心は杜子美が老をおもひ、さびは西上人の道心をしたひ、調は業平が高儀をうつし、いつまでも、我等世にありとおもひ、ゆめ／＼他に化せらるゝ事なかれ。言たき事あれども、息□（原本缺字）口かなはずと、喘ぎたまひければ、呑舟御口を潤す。又藥をまゐらせてしづまりたまふ。各筆をとりてこれを書く。

惟然記

八日。天氣快晴、御不食なり。京の□（轍）士來る。信德より消息もて御病躰を問ふ。同近江の角上より使來る。人ゝ勝手の間にて、今度の御所勞、平復を祈り奉らんとて、住吉大明神に連中より人を立べしと、去來申おくられければ、各しかるべしと、之道・次郎兵衛は鬮當にて、社務林采女方に祝詞をたのみ、厚く神納の品ゝおくらる。各詠

奉納

落つきやから手水して神あつめ　木節

初雪にやがて手ひかむ佐太の宮　正秀

峠こす鴨のさなりや諸きほひ　丈草

起さるゝ聲もうれしき湯婆哉　支考

水仙や使につれて床はなれ　呑舟

居あげていさみつきけり鷹のかほ　伽香

あしかろに竹のはやしやみそさゞい　惟然

神のるすたのみぢからや松の風　之道

日にまして見ます顏なり霜の菊　乙州

こがらしの空みなほすや鶴のこゑ　去來

大勢の集會なりければ、よろこび興じて師を慰め申けり。木節、去來に申けるは、今朝御脈を伺見申に、次第に氣力も衰給ふと見えて脈躰わろし。最初に食滯より起りし泄瀉なれども、根元脾腎の虛にて、大虛の痢疾なり、故に逆逸湯主方なり。猶又加減して心を盡すといへども、藥力とゞかず。願はくば治法を他醫にもとめんとおもふ。去來、師にまうす。師曰、木節が申条尤なれども、いかなる仙方ありて、虎口龍鱗を醫すとも、天業いかんかせん。我かく悟道し侍れば、我呼吸の通はん間は、いつまでも木節が神方を服せむ。他に求むる心なしとのたまひける。風流・道德人みな聞

然するとなし。

支考・乙州等、去來に何かさゝやきければ、去來心得て、病床の機嫌をはからひて申て云、古來より鴻名の宗師、多く大期に辭世有。さばかりの名匠の、辭世はなかりしやと世にいふものもあるべし。あはれ一句を殘したまはゞ、諸門人の望足ぬべし。師の言、きのふの發句はけふの辭世、今日の發句はあすの辭世、我生涯言捨し句ゝ、一句として辭世ならざるはなし。若我辭世はいかにと問人あらば、此年頃いひ捨おきし句、いづれなりとも辭世なりと申たまはれかし。諸法從來常示寂滅相、これは是釋尊の辭世にして、一代の佛教此二句より外はなし。古池や蛙とび込水の音。此句に我一風を興せしより初て辭世なり。其後百千の句を吐に、此意ならざるはなし。こゝをもつて句ゝ辭世ならざるはなしと、申侍る也と。次郎兵衛が傍より口を潤すにしたがひ、息のかぎり語りたまふ。此語實に玄ゝ微妙、翁の凡人ならざるをしるべし。

支考記

夜に入りて嵯峨の野明・爲有より柹を贈り來る。消息そふ。今日まで伊賀より音信なし。去來・乙州申談じ、態と飛脚を差たつべきよし、師に申ければ、師の言、我隱遁の身として虛弱なる身の、數百里の飛杖おもひ立、親族よりとゞめけれど、心儘にせしは我過なり。今大病と申おくりなば、一類中のさわぎ、殊に主公の聞しめしも恐あり。たとひ今度大切におよぶとも、沙汰あるまじとのたまひけり。師の慮の深きこと各感心す。度數六十度におよぶ。

惟然記

九日。諸子の取はからひとして、ふるき衣裝又夜具などの垢つきたる不淨あるを脫かはし、よき衣に召せかへまゐらせ申。師曰、我邊地波濤のほとりに、草を敷寐、塊を枕として、終をとるべき身の、かゝる美ゝしき褥のうへに、しかも未來までの友どち、にぎ〳〵しく鬼錄に上らむと受生の本望なり。丈草・去來と召、昨夜目のあはざるまゝ、不斗案じ入て呑舟に書せたり。各咏じたまへ。

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

枯野をめぐる夢心ともし侍る。いづれなるべき。これは辭世にあらず、辭世にあらざるにもあらず。病中の吟なり。併、かゝる生死の一大事を前に置ながら、いかに生涯好みし一風流とは言ながら、是も妄執の一ッともいふべけん。今はほいなし。去來言、左にあらず。日ゝ朝雲暮雨の間もおかず、山水野鳥のこゑもすてたまはず、心身風雅ならざるなく、かゝる河魚の患につかれ給ひながら、今はのかぎりに、其風神の名章を唱へ給ふ事、諸門葉のよろこび・他門の聞え、末代の龜鑑なりと、涕すゝり泪を流す。眼あるもの是を見ば魂を飛さむ、耳あるもの是きかば、毛髪これがために動かむ。列坐の面ゝ、感慨悲想して、慟絶して聲なし。是師翁一代遺教經なり。此日より殊更におとろへたまへり。度數しれず。

去來記

十日。初時雨せり。師、夜の明がたより度數しれず、ひとしほ腦(惱)みたまへり。折ふしに譫言ありて、とりしめなきこと多し。木節此日芎藥湯をもる。諸子打より食事をすゝめまゐらせけれど、すゝみたまはず。梨實をのぞみたまふ。木節かたく制しけれど、頻りに望みたまふゆゑ、やむ事を得ずすゝめければ、一片味ひてやみ給ふ。木節云、脾胃うくる處なし。死期ちかきにありと云。申の下刻にいたつて人こゝちつきたまふ。今日は一人も食したるものなし。

惟然記

十一日。朝また／＼時雨す。おもひがけなく東武の其角きたる。是は東武の誰彼同伴にて參宮の序、和州・紀州を打めぐり、泉州より浪華に打入りしが、はからずも師の勞りおはすと聞つけ、そこ此處とたづねまはり、漸にかけつけたり。直に病床にまゐりて、皮骨連立し給ひたる躰を見まゐらせて、且愁ひ、且よろこぶ。師も見やりたまひたるまでにて、唯ゝ泪ぐみたまふ。其角も言句なく、さしうつむきゐたりしを、丈草・去來・支考其外の衆、次の間に招き、御病性の始終を物がたる。此夜、夜すがら伽して、おもひよりし事ども

物がたり居たりしに、亥のときごろより、師、夢のさめたるごく、粥を望みたまふ。人ゝ嬉しさかぎりなく、次郎兵衛取計ひて、疾く焚あげてすゝめまゐらす。中かさ椀にて快くめされけり。翌日より巳來の食事なり。土鍋に殘りたるを、去來椀にうつし入ておしいたゞき、

病中のあまりすゝりて冬ごもり　去來

去來曰、趣向を他にもとめず、有あふことを口ずさみて師を慰めまゐらせん。深く案じいらずと頓に句作りたまへ。惟然は前夜正秀と二人にて、一ッの蒲團をひつぱりて被りしに、かなたへひき、こなたへひきて、終夜寐いらざりければ、はてはしら〳〵と夜明けるにぞ、其事を互に笑ひあひて、

ひつぱりて蒲團に寒きわらひ哉　惟然

おもひよる夜伽もしたし冬籠　正秀

一坐是をきゝて、いづれもどつと笑ひければ、師も笑ひたまへり。人ゝ嬉しさかぎりなく、十日巳來の興にぞ有ける。（初しぐれといふより四行十一日の書いう）初しぐれなりければ、空とく晴て日影さしいりたるに、蠅のおほく日南に群りゐたるに、人ゝ鶏ち（のとゝ見るべし）もて蠅をさし取に、上手下手あるを見給ひて、暫く興にいりたまひけれど、大病中のことなれば忽倦たまひ、直に寐所に入たまふ。支考は、師の發句を滅後に一集せん心願あれど、此ごろの病苦に惱みたまふに見あはせゐたりしが、今日機嫌よきに乘じて申出侍らんと、去來に申たりければ、去來はかねて師の心中を知りたりしゆゑ大にいかり、小ざかしき事を申さるゝもの哉、師は平生名聞らしきこと好み給はず。今日漸快き躰を見請はべりて、諸人嬉しとおもふ中に、御氣に逆ふことを聞せ申ては、御心を勞しめ申事奇怪なり。此後御病床ちかくより給ふな、早く其座を立たまへと、聲あらゝかに次の間に追立けり。支考も、はからずものいひ出して、諸子の聞前、面目をうしなひしが、行ゝ惟然に打むかひ、我に何あり、そこ書給へといひて、

しかられて次の間にたつ寒かな　支考

さすが支考なりければ、師もほの聞給ひて、おかしがり給ひけり。

（この二行腐て見えず枯尾）

闇とりて菜飯［（原本缺字）］木節

花集に閭とりこ桑めしたゝかす夜伽哉みな子世みの虫寒くなきつくすとあり

坐子なり［原本缺字］　乙州

うづくまる薬のもとの寒さかな　丈草

吹井より鶴をまねかむ初しぐれ　其角

一ゝ惟然吟聲しければ、師、丈草が句を今一度とのぞみ給ひて、丈草出かされたり、いつ聞てもさびしをり調たり、面白し〳〵と、しはがれしこゑもて譽給ひにけり。いつにかはりし機嫌の麗しきをよろこびけるに、木節一人愁をいだける躰に見えければ、其角其故をとふ。木節云、病に除中の證といへるあり。大病中絶食なるに、俄に食のすゝむことあるは悪症なり。死期遠きにあらずといへり。さはしらず、各さゞめきゐたるに、夜半ごろより、又寒熱往來ありて、夜明ごろより、顔色土のごく見えたまひ、暫くは悶亂し、人も見しりたまはざりしが、やゝあつて又實証になりたまひ、左右に舍羅・呑舟、うしろよりは次郎兵衛いだきまゐらせて介抱し、程なく夜明ければ十二日なり。兼ては閉籠り給ひしが、へだての障子も襖もとりはなさせ、其角・去來・丈草を是へとて向に見給ひ、穢をはゞかれば咫尺したまふなとことわり、行水を望みたまふ。木節頻りに制しけれど、しきりにのぞみ給ふゆゑ、やむことを得ず湯をひかせまゐらせけり。座をしづかにあらため、木節が醫術を盡されし事など、つと〳〵に謝し給ひ、扨三人の衆を近くめされ、乙州・正秀を左右にし、支考・惟然に筆をとらせ、なきあとの事こま〴〵と遺言したまふ。病苦すこしも見えたまはず。人ゝ奇異のおもひをなしけり。伊賀の遺書は手づから認めたまひ、外に京・江戸・美濃・尾張もれざる様に遺言しをはりたまふに、始終は門人中にて筆記す。次第に聲細り、痰喘にて［原本缺字］給ひければ、次郎兵衛素湯にて口を潤しまゐらせけり。やゝ有て去來にむかひたまひ、先頃實永阿闍梨より路通が事を仰有。其后汝が丈草・乙州等に送りし消息、露霜とは聞捨ず。併少しいみはゞかること有て、雲井の余所にはなし侍りぬ。彼が數年の薪水の勞、努ゝわすれおかず。我なき跡にはおよそに見捨たまはず、風流交り給へ。此事たのみ置はべる。諸國にもつたへ給はれかしと、言終りたまひて余言なし。

合掌たゞしく觀音經ときこえて、かすかに聞え、息のかよひも遠くなり、申の刻過て、埋火のあたたまりのさむるがごく、次郎兵衛が抱きまゐらせたるに、よりかゝりて寐入給ひぬとおもふ程に、正念にして終に屬纊につき給ひけり。時に元祿七甲戌(戌)十月十二日申の中刻、御年五十一歲なり。

卽刻不淨を清め、白木の長櫃に納まゐらせ、其夜直に川舟にて伏見まで御供し奉る。其人ゝには、其角・去來・丈草・乙州・正秀・木節・惟然・支考・之道・呑舟・次郎兵衛、以上十一人。花屋仁左衛門が京へ荷物を送る躰にて、長櫃の前後左右をとりまき、念佛誦經おもひ〳〵に供養し奉る。八幡を過る頃、夜もしら〳〵と明はなれけるに、僧李由の下りたまへる舟に行逢ければ、いざとて乘移り、相ともにはかなき物がたりして、程なく京橋につく。夫より狼だに通りにかゝり、急ぎにいそぎしほどに、十三日巳の時過には大津の乙州が宅に入れたてまつりけり。乙州は伏見より先立ていそぎて歸り、座敷を掃除しきよめ、沐浴の用意す。御沐浴は之道・呑舟・次郎兵衛也。御髮の延びさせたまへば、月代には丈草法師まゐられけり。御法衣淨衣等は、智月と乙州が妻縫奉る。淨衣白衣にて召させ參らすべき筈なるを、翁はいかなる事にや、兼て茶色の衣裝こそよけれと、すべて茶色を召れければ、智月尼のはからひとして、淨衣も茶色の服にこそせられける。さて送葬は十四日と定り、彼是日沒になりにけり。

大阪花屋より支考・惟然が二日に仕出の狀、羅漢寺の僧伊勢に急用有て參るよしを、花屋よりしらせければ、是幸ひと賴つかはしけるに、此僧奈良に着たる日より痢疾にて歩行かなはず、やむことを得ず奈良に滞る。夫故十一日朝、伊賀上野に行人あるを聞つけゝれば、右の狀を仕出しけり。此狀、十二日の暮ごろに上野に屆きけり。土芳・卓袋ひらき見るより大に驚き、とる物もとりあえず松尾氏に參りたれば、是も同時に書狀着せりと云。夫より兩人は、したゝめそこ〳〵にして、子の刻過より、兼て案内しりたる近道にかゝり、大和

の帯解までたゞいそぎに急ぎけれど、月入ての事なれば、くらさはくらし、小路の事ゆゑ挑灯も消ぬれば、其夜の明がたに帯解に着く。相知れる方に暫らく休らひて、したゝめなどし、是よりくらがり峠を越れば、大坂までは八九里には過ず。さらばとて、足にまかせてくらがり峠を越え、俊徳海道をたゞ急にいそぎ、平野口より御城の南をかけぬけ、直に久太郎町花屋にかけつけたるは十三日の暮頃なり。何かなしに、翁の御病氣いかにと問ければ、仁左衛門しか〳〵と答ふ。兩人ともに殘念まうすばかりなく、さらば葬送になりとも逢ひたてまつらんとて、又ひきかへし、八軒屋に行。幸ひ出船ありければ、其まゝ飛乘り、伏見京橋に着しは夜明也。直に飛下り狼谷にかゝり、義仲寺に着しは未入棺し給はざるまへなりければ、諸子に斷りて、死顔のうるはしきを拜しまゐらせ、悲歎かぎりなく、一夜も病床に咫尺せざる事をかきくどきけれど、まづ因緣の深きことを身にあまり、有がたく嬉しく燒香につらなりけり。

今の地方を以て見ればくらがり峠をこえて俊徳街道に出ず。十三峠とくらがり峠をおもひ誤られたるなるべし。

土芳卓袋物語

十二日暮に伏見を出舟したる臥高・昌房・探芝・牝玄・曲翠等は、其夜何處にて行違ひたるやらむ、夜明て大坂ニ著。直ニ花屋にはせたるに、諸子御骸を守り奉りて、のぼり給ひぬと聞より、直に又十三日の晝船に大坂より引かへし、其夜酉の刻にふしみにつく。夜半頃に大津に歸る。

昌房物語

義仲寺眞愚上人住職なれば導師なり。三井寺常住院より弟子三人まゐられ、讀經念佛あり。御入棺は其夜酉の刻なり。諸門人通夜して伊賀の一左右をまつ。夜に入ても左右なし。去來・其角・乙州等評議して、葬式いよ〳〵十四日の酉上刻と相究む。晝のうちより集れる人は雲霞のごとく、帳にひかへたる人數、凡三百人餘、しるしらぬ近郷より集る老若男女までをしみ悲しむ。時しも小春の半にて、しづかに天氣晴わたり、月清朗として湖水の面にかゞやき渡り、名にし粟津のまつに吹起るは、無常の嵐かとおもはれて、月はおもしろき

もの、露は哀なるものといへれど、折にふれては何かあはれ成ものならざらむ。矢橋の漣のよするひゞきも、愁人のためには胸にせまり泪を添ふ。

支考記

引導香語

雪月魂魄。風花精神。等閑一句。驚動人天。嗚呼。奇哉芭蕉。妙哉芭蕉。萬里白雲。一輪明月。五十一年。一字不說。

各捻香

丈草　其角　去來　李由　曲翠　正秀
木節　乙州　臥高　惟然　昌房　探芝
泥足　之道　芝栢　牝玄　尙白　土芳
卓袋　許六　丹野　風國　野童　遊力(刀)
野明　角上　胡故　蘇葉　靈椿　素蟄
回鳬　萬里　譏々　遺萃　荒雀　楚江
木枝　扑吹　魚光　支考

諸國代香不記

右の外近江國中は申に及ばず、京・大坂・美濃・尾張・伊勢、其外國〻より京などに登りゐたる諸國の人〻、三世値遇の縁をよろこび、我も〳〵と香手向奉る。其數何百人といふ數しれず。境内狹ければ、表より入たる人は裏へぬけ出るやうにしつらひ道、田の刈跡に道をつけゝれば、燒香の人〻はすべて裏へぬけゝるにぞ、さして騷がしき事もなく、葬埋をはりけるは子の時過になりにける。翁かねて遺命の通り、木曾殿の右のかたに埋葬し奉りけり。

十五日。去來・其角はじめ、膳所・大津の人〻、朝疾詣して、先とて土かきあげて卵塔をかたどり、幸ひ塚のうしろに、年ふりたる柳あるをそのまゝにし、御名の形見とて、枯〻の芭蕉を一本、兼てこのみ給ひたる茶の木の今を盛りなる花とともに移し植て、竹もて垣ゆひまはし、香花を手向奉りけり。日のもと廣しといへども、生前に其名豐葦原の浪に響き、其德芙蓉の絕頂に竝ぶ。人丸・赤人のむかしはいさしらず、末代の今にしては實に我翁一人といふべし。

此一軸再往庵什物　市兵衛　雪芝叟

御先に立候段、殘念ニ可被思召候。如何樣とも又右衛門便ニ被レ成御年被寄、御心靜ニ御臨終可レ被成候。至

（治右衛門 苦蘇〃 意専〃 猿雖〃 十右衛門 半残〃 半左衛門 土芳〃）

爰申上事無ニ御座一候。市兵衛・治右衛門殿・意専老、利不レ残御心得奉レ賴候。中ニも十左衛門殿・半左殿、右之通ニ候。はゝ者・およし、力落し可レ申候。以上。

十月十日　　　　　　桃　青

松尾半左衛門様

新藏は殊ニ骨被折忝候。

翁反故上畢

翁反古 下 終焉日記

十六日。乙州亭に集會して、義仲寺の住持、其外僧徒に禮物、御遺物等の沙汰におよぶ。

昨夜迄大ニ御苦勞被レ成候。扨今日は先師御遺言之通、御遺物夫々配分仕度、其外寺納等之義申談度、且亦伊賀ゟ一向ニ返書も無レ之、至而不審ニ存候。態與人差立申度ニ付拙夫一人之名目少憚存候故、御連名に加入申度、是等之義、及ニ御談合一度、又明後日一七日ニ候條、諸國連中、退散無レ之中、於ニ御靈前一、御追悼俳諧百韵興行仕度、付而者、御終焉之記一章、貴雅御書被レ成度、右條々可ニ申談一間只今ゟ御出坐可レ被レ下候。萬端は面上申止候。以上。

十月十六日　　　　去　來

其角英雅

御書翰拜讀、御念之御事共忝候。此間之御辛勞、難レ盡ニ

一御齋米料　同　一兩
一御供養料　同　一兩
一御茶湯料　同　百匹
一御弟子觀門子　同　百匹
一三井寺常住院御弟子二人　同　二百匹
家來衆三人　銀　三兩

御遺物

一出山佛一躰　御身一寸一分
佛頂禪師より附與、長サ押延へ凡一尺九寸位、頭蔦の葉形り金箔、木曾寺ニあり、丈草に附與。
一鐵如意一本（今長崎にありといふ）
一觀音經　小本一部
一紙縷袈裟　佛頂禪師より附與
一被風
一銅鉢　一口
一木硯　樫木にて旅硯也
一古今集序註　一部
一百人一首　一部
一新式　一部
一奥之細道　一部

筆頭一扨とよ今日は諸君御集會、先師御遺言之御遺物配分、且寺納其外之勘定可レ被レ成旨、又伊賀へ之御文通ニ付、拙者立合申ル樣被ニ仰聞一ル趣畏ル。早速馳參可申ル得共、今日は宿主曲翠子始、臥高・正秀・泥足同心仕、先師御旧跡之幻住庵に罷越、椎之冬木も見、御筆跡の一字一石塔も拜申度前諸仕置、則唯今出立ニてル。乍御不□（原本缺字）御宥免可レ被レ下ル。御遺物其外寺納等之事は、乙主人、諸風子に御談可レ被レ成ル。伊賀へ之御紙面、拙者御連名可レ被レ成旨、隨分御同意仕ル。

一御終焉記之義被ニ仰聞一いかゞ可レ仕哉。併貴命之事ニル故、取懸り見可レ申ル。御病氣最初ゟ之御樣躰、貴兄始、惟然・支考が覺書勿論御夜伽之發句等、御書付御見せ可レ被レ成ル。且次郎兵衛日記、共ニ御見せ可レ被レ成ル。出立、早ゝ以上。（終焉記枯尾花集といふ）（次郎兵衛日記は芭蕉翁四十日迄追て出すべし）

十月十六日　　　　共　角

去來英雅

十七日。乙州亭

一眞愚上人　金　一兩

一御笠　一蓋

一菅蓑　一被

一御杖　一本

右紙纏袈裟より以下七品は、兼て惟然に御附與之御約諾之よしに候故、直に惟然に附與し

惟然に附與ありしものよ今播州噌井山鹿の風雉堂に納る

一御頭陀　一

中ニ杜子美詩集・山家集・外ニ後猿蓑と題ありて哥仙三卷、發句四五吟程、外は御書捨の反故等入。別に紙に包たる布裂、五寸に六寸許、上包に挾ノ細布と有。進上清風と、又外に和歌の古短尺二枚、松島蚶浮ノ繪二枚。

此挾ノ細布蚶浮の畫は今文曉が秘藏す

右の中、紙に包たる五寸に六寸の布裂并松嶋蚶浮之畫、若御支無ニ御座一候はゞ、御形見下措ニ被ニ仰付一可レ被レ下候様奉レ希候。生涯寶物ニ仕度候。

此百韵枯尾花集にあり

十八日。於ニ義仲寺一追善之俳諧百韵卷尾す。鳥羽の文臺、松風の硯寫の木硯、連衆四十三人。

熊壹人差立候。益御平安可レ被レ成ニ御座一奉ニ恭賀一候。皆共無レ異罷在候。御安意可レ被レ下候。然者、尊師於ニ大坂一御大病之處、支考・惟然より申進候得共、御返答無ニ御座一、遠路故紙面遲着と察候。兎角仕候中、拙者共も罷下り、加ニ御保養一候へ共、御養生不レ被ニ相叶一、去十二日終ニ御迁化被レ遊候。旅中之儀ニ御座候故、其夜早速近江木曾寺ニ尊骸を奉レ遷、十四日迄御報奉レ待候へ共、御返答不レ承候間、諸國門人中一等評義ニ而、則十四日之夜、於木曾寺埋葬仕候。委曲は追ゝ土芳・卓袋歸國之上ニ而御承知可レ被レ下候。

一別封之一書者師翁御迁化之日、御認被レ遊候御遺書ニ而御座候。上書迄ニ而御封緘者共時ゟ無レ之候条、左様被ニ思召一御落手可レ被レ下候。

一御遺物之品ゝ者、諸國連衆於ニ義仲寺一集會之上、書記之通無ニ相違一候条、今度御來臨も御座候はゞ、御見屆之上、任ニ御取計一申筈ニ候得共、御左右無ニ御座一候故、不レ得レ止取計置、目錄入ニ御覽一申候。御親類方ニも乍レ憚此旨被ニ仰達一可レ被レ下候。土芳・卓袋歸國口述之上、御返事被レ成可レ被レ下候。一七日御追善供養相仕廻申候故、諸士一同引取申候筈ニ候条願ば御返書承り申度候。書餘兩雅士ニ御聞可レ被レ下候。以上。

十月十九日

去来

共角

松尾半左衛門様

別啓。昨日之俳諧百韵入ニ貴覽一候。

一御遺物目錄之外ニ左之通相殘居候品、御綿入一着御袷同前御肌付同前御帶二筋右は花屋仁左衛門ゟ一昨日次郎兵衛方ニ贈參候。外ニ古御衣裳之類數多在レ之候は、大坂出立取急候故、不レ殘花屋に預置申候。

一御飛脚只今參着被レ致候。尊翰拜見仕候。御返事仕候筈ニ候得共、用相認□(原本缺字)申候故、貴答不レ仕候。

一壽貞子次郎兵衛、御國出立之砌より御供仕居候。御病中始終御葬埋之節迄、拔群之骨折被レ仕候。逐一兩雅ゟ口述可レ及候。御病中間之始末、御病躰惟然・支考・次郎兵衛、拙者迄筆記入ニ貴覽一候。已上。

巨細之御書翰、忝拜誦、御揃益御安泰被レ成ニ御暮一候之由奉ニ遠賀一候。然者今度芭蕉事、於ニ大坂一致ニ遷化一白ニ病中一木曾寺至ニ葬埋一候迄、不レ淺御苦勞被レ成候由、御文面と申、土芳・卓袋ゟも微細ニ致ニ承知一候。惣御連中、別而兩雅丈之御厚情之程、御禮難ニ申盡一候。芭蕉事一所不住之境界ニ候条可ニ斯有一とは、兼而思儲居候得共、今更殘念御推察可レ被レ下候。併病中始終御介抱之事、縱令親族之面ゝ附添居候共、斯迄手は屆不レ申、亡弟身ニ取て、他方之聞え、親類中之美目、身ニ餘り恭奉レ存候。

一白ニ大坂一兩度之御手簡之中、二日之御狀而已漸十二日之暮方に屆候。外之御狀者未相屆不レ申候。芭蕉病氣大切成義と爲ニ御知一候故、早速使者差出候。最早日限過候得共、未病氣ニ而有レ之と許存候。使之者歸りば、十六日之朝罷歸候而、其時遷化之事も、遺骸迄近江之樣ニ送方被成候義も致ニ承知一候。卓袋・土芳近江之樣被參候義も、今度承り候之故、追取返し一人差立候。今度は拙者馳參申筈ニ候得共、亡弟憂許發足之跡ニ而、拙者癚疾勞、而も初癚と申、老人之事に候故、長ゝ相痛漸九月下旬致ニ快氣一候。癚後今以服藥いたし、出勤も不レ仕、氣力も未得不レ申候。不レ能ニ其義一、諸風子之御聞前耻入申

事ニ候。

一芭蕉遺状慥ニ致ニ落手一候。誠ニ一類中打寄開封、何も一字一涙愁傷御思察可レ被レ下候。

一亡者遺物之儀ニ付被ニ仰越一候趣、御入念之御事ニ候。併亡弟入道以來者俗緣之表向無レ之候。僧分之器財之事ニ候条、遺言之品者格別、其外は不レ依ニ何品一直ニ義仲寺ニ寺納共ニ而可レ有レ之哉。夫（原本缺字）□猶又御連中任ニ思召一候間、御存寄次第宜御取計可レ被レ下候。

一壽貞子次郎兵衛事、今度信切之骨折始終之事感入候。存寄も有レ之候。勿論譜代之者ニ候故、其元諸事相仕廻申候はゞ、一日成共早罷歸候樣、乍ニ慮外一被ニ仰入一可レ被レ下候。

一相殘居候と有て、古衣裝四品被ニ贈下一慥ニ致ニ落手一候。外ニ古衣裝之類花屋ニ預被レ置候由、有之品者必御貪着被レ下間敷、其儘ニ被ニ召置一可レ被レ下候。余情拜顏申殘候。以上。

十月廿三日　松尾半左衛門

命清判

晉　其角樣

向井去來樣

御連中樣

追啓、御飛脚道遅ニ而踏迷申され、殊ニ痛所有之由ニ候間、中一日手前ニとゞめ申候。爲レ念申遣置候。以上。

別啓申遣候。芭蕉死去之事、拙者主公、同役共を以申達候處、主公甚殘念ニ被存趣、夫ニ付辭世共は無レ之哉之事被レ尋候故、支考・卓袋口述之通申達候得者、貴丈方之紙面直ニ可レ被レ致ニ披見一との事、任ニ其旨一申候處、重而尋ニ、命終迄ニ發句は無レ之哉、若有レ之候はゞ、直書見度と申事ニ候。若貴丈方、外ゝ、御所持之方も候はゞ、暫く拜借申度候。此段お賴申候。

一自筆之由家集有之候はゞ、書入抔者無レ之哉、有余ゝ宜御賴申候。爲レ其重而如レ是御座候。謹言。

十月廿三日　松尾半左衛門

其角樣

去來樣

奥書之頭陀内之品之中、五寸ニ六寸之切之事、并ニ松島蚶浮之繪之事、御望之由、其外何品によらず、隨分御勝手次第ニ可レ被レ成候。少も不苦候。以上。

以ニ使札一得ニ芳意一候。向寒之節ニ候得共、益御安泰、御寺務可レ被レ成恭賀候。拙者無ニ別条一罷在候。然者芭蕉居士被レ致ニ遷化一候砌、葬式之節者、段々御苦勞被レ成レ下、忝奉レ存候。早速罷越、御禮詞等申述候筈ニ御座候得共、乍レ存踈略打過、背ニ本意一候。此段御宥恕被レ成可レ被レ下候。隨而左之通□（原本缺字）納仕候間、宜御回向被レ成可レ被レ下候。拙者も長々之病後、今以引入居申候故、出勤仕候得者早速罷參可レ仕候。其節拜顏之上万々可ニ申上一候。先右之御禮詞迄、如レ斯御座候。以上。

十一月二日　　松尾半左衛門

義仲寺様

覺

一御布施　　金二百疋

一同御佛米御齋米料　　同二百疋

一同御茶湯料　　同百疋

一御布施　　同百疋　松尾氏一類中

右

以ニ飛札一得ニ御意一申候。益御清雅奉レ賀候。爰許無異ニ居申候。然者、師翁迁化之事承り、途方に暮候。いかに成行可レ申哉。只闇夜と相成、唯愁涙迄に候。取あえず一句冞候。靈前ニ御敬手可レ被レ下候。以上。

十月廿三日　　露沾

去來雅丈

告て來て死顏ゆかし冬の山　　露沾

此外、諸國之吊（弔）儀數百ヶ所、繁雜故ニ除レ之。

頃日土芳・卓袋歸鄉之砌申遣候筈之處、取レ紛失念仕候故、今日壹人差立申候。先以、長々之御所勞、未御快無ニ御座一段、乍レ憚隨分御自愛專一ニ奉レ存候。此間雨雅丈〆被レ成ニ御聞一候通、亡師一七日、於ニ御靈前一御追善之百韵、首尾能興行ニ相成、何れも滿足仕候。然者其席ニ御傳來之鳥羽之文臺立申候。右此文臺之事者、御聞及も候半、季吟老人〆亡師ニ御讓之風雅傳來之雅物ニ御座候。根

（鳥羽文臺今長崎にありといふ）

元玄旨法印ゟ紹巴ニ御傳に成、貞德・貞室・季吟・亡師と傳り候。如レ斯之重器ニ候得者、亡師一代尋常之俳ニは御用も無ニ御座一、深川之重器と承り候迄ニ候。然ルに先年猿蓑集撰成就仕、吟聲之砌、深川より御取寄ニ相成、其儘ニ義仲寺ニ被ニ召置一候。亡師も御門人之中ニ御傳可レ被レ成御心ニも可レ有ニ御座一候得共、亡師者一体此俳諧之事、左様成俗事ニ御貪着被レ成候御氣象にては無ニ御座一、全躰隱逸禪中風雲之行状ニ候得者、傳不傳之處にては無ニ御座一候。併此後者共場にては濟不レ申、今度此儘ニ打捨置候得者、一道者立不レ申、永芭蕉門埋レ候哉共存候。幸ひ此節其角參り居られ候故、於ニ江戸一、其角・嵐雪と申ては、亡師左右之御手と被ニ思召一、無二之御愛弟ニ而御座候。夫故、御靈前ニ而右文臺讓之事、申問候得者、其角頻ニ辭退ニ而、一昨日罷歸申候。許六者病身、木節者老衰、美濃・尾張者遠方ニ而手屆不レ申。外ニ者若輩之者許、夫故一先右文臺を義仲寺眞愚上人ニ預置、一二年も過候はゞ、若年之者共、追ゝ出精之上、拔群之者も出來可レ申、上人ニ申問候得者、洛傍之廢寺、風火災、又は賊難之恐、貧地獨居故、不レ任ニ心底一と申候斷ニ而御座候。只今ニ而者可ニ預置一所も無ニ御座一候。道心之御人体ニ候得者、兎角可ニ申入一筋も無レ之、此上者右之雅物ニ候之条、少比貴方ニ御預り置可レ被レ下候。來春ニ成候はゞ、拙者參以御熟談も可レ仕候。則右之品此者ニ持せ遣候。諸事御賢察可レ被レ下候。恐惶齊言。

十月廿七日　　向井去來

松尾半左衛門様

貴翰捧讀、先以、此間者前後之御取計、重疊御勞煩被ニ成下一、忝奉レ存候。然者、烏羽之文臺之事被ニ仰聞一趣、逐一承知仕候。如ニ貴命一、右文臺之事者、日外亡弟よりも承り、至而大切成雅器ニ御座候由、右之器物引讓之事、御心配之段、御尤千万之事ニ奉レ存候。然ルニ其角能時節ニ參り合被居、辭退之義、手前も不承知ニ存候。芭蕉門人ニ其角・嵐雪と申事者、日本ニ俳諧好候者、誰不レ存者は無レ之候。然者門人中に何人か違背之御人も可レ有レ之共覺不レ申右ニ付而者、拙者方御賴も可レ申候得共、歸郷ニ成候と申

事ニ候得者、不レ能二其義一候。且又眞愚上人御返答之義者、御尤之事ニ奉レ存候。將又拙者方ニ暫く御預可レ被レ成旨、併我等事者肉身之事ニ候得共、俗士之事にて候へ者、風流中之品物、暫も預り候境界ニ無之候。何分ニも是は雅器之事ニ候得者、貴雅方ニ手前ゟ御預申度候。仰之通、明春ニも成候はゞ、拙者罷越、拜面之上、兎も角も可レ仕、是非ゝゝ讓方無二御座一節は、季吟未御存生之事ニ候得者、元之通返上納可レ仕とても先夫迄者、貴雅之方ニ御預り置可レ被レ下候。偏ニ奉賴候。左候はゞ、芭蕉魂魄も可レ爲二滿足一候。卓袋・土芳より始末は承申候。恐惶謹言。

十月廿九日　　松尾半左衛門

命清判

向井去來様

烏羽文臺　　一脚黑塗

長壹尺九寸、幅壹尺二寸、高四寸、板厚三分、筆反壹尺壹寸。

右者師嗣相承之由、季吟翁より先師に御相承被レ成候重器ニ候。今度拙者ニ御預可レ被レ成旨ニ付、慥ニ預置申候。後證如件。

元祿七年甲戌十一月四日　　向井去來

松尾半左衛門殿

但三ケ所疵（二ケ所者小指先程、一ケ所者小キ揩四方之角疵ジ有）

翁反故下畢

大坂心さい橋北久太郎町南入
塩屋忠兵衛

通　說

近頃は俳壇に於て系統の事をやかましく云はないやうになつたが、それでも猶ほ一部の俳人社會には宗匠といふ名が殘つてをり、宗匠卽ち點者となるには師の允許を受けて、何々庵第何世と名乘るといふやうな事が今日でも行はれてゐる。往昔は此風が俳壇の一般に亙つてゐたものであつて、正しい宗家の嫡流としてこそ名聲を得られるのだから系統を嗣ぐといふ事が大に重んぜられたのである。從つて俳人の位置は先づ誰の門人だといふ事から戶籍調べしてかからねばならない、本卷に載せてある俳家系譜書類は何れも、さういふ考から俳人を傳したものなのである。

さて、俳家に系統を重んずる理由は抑も何故であらうかといふに、其には三つの理由があると私は思ふ。其一つは、俳諧なるものは純傳統的なる約束であるといふ考である。「誹諧家譜」(丈石)の序に

儒に道統あり佛に血脈あり、皆邪路に迷はん事を恐てなり、其邪路に陷るを、異端といひ外道といふ、我誹諧は敷嶋の道より出て、祕事を道とす、故に正しき師を得て誓盟し、祕書を授り口訣を受て、道の奧祕を習ひ其道を明かにす、たとへ聰明睿智の人なりとも、傳はらずして知るべき道にあらず、其正しき師傳なくんば、霧海に南針なく、闇夜に燈炬なきがごとく、惛然として行所を知らじ、臆見を以て想像すとも何ぞ正理を悟らむや、今正統もなき闇師、自ら宗匠と稱し、誹諧を道路に賣らんとす、此師に隨ふ誹人、彼の邪路に入て生涯を恍惚の中に終る、早く過を悔ひ、正しき師に隨ふべし

貞門の俳人は皆、斯ういふ考をもつてゐたので、俳句は純傳統の約束なのであるから、師傳なくて解る譯はなし、其

師傳は必ず祕することを要する。「貞德永代記」(隨流)に「九條殿下玖山尊公幷細川玄旨法印、紹巴法眼御談合被レ成、松永貞德に連歌の祕訣を傳へ、俳諧一道の宗匠を許免被レ成しより誹諧はじまれり、然ば連誹兩道共に地下の物に非ず、攝家公方樣より御免しある新在家之源流祕密口傳之大事……」といひ「誹道に連哥の祕訣を傳へしは貞德一人に限る、然るを誹弟器量の人には大儀の受代を課して許免し、誓紙の切紙にて傳誹せられし也」といふのは其である。今日、傳統文學と稱する言葉もあるが、所謂傳統文學とは、東洋の精神とか日本人の氣質とか、民族若くは風俗の上から、しぜんに一つの傳統の上に立たざるを得ない文學の必然性を指して云ふのであつて、その立場からすれば俳諧も亦一種の傳統文學には相違ないけれども、貞門の人達が云ふ所の傳統は、極めて極めて狹い所の約束を指すのであつて、其約束が普遍化してしまへば、約束の妙味たる合言葉を失ふ譯だから、其約束を數段に設けて、彼は連歌、是は誹諧と別ち、其誹諧の中に入つては、祕から極祕といふ風に奥をこしらへて、如何にも深さうに見せかけたものなのである。藝術的の立場から見てこそ全くくだらない事ではあるけれども、當時は之がまじめに是認されたので、さればこそ所謂、外道異端たる談林と貞門との爭論も起つた譯である。系譜から云へば、貞德——季吟——芭蕉といふ風に系をひくべき傳流となるのだが、芭蕉も亦、彼等から見れば邪路に入つたものと見らるべく、しかも芭蕉が「誹諧に古人なし」と喝破したのは、當時にあつて、確に大獅子吼だつたに違ひないのである。

俳家の間に系統の重んぜられた第二の理由は、點者が生活の資を得る便として自分の位置を高くする爲である。現今も俳句の流行は都鄙ともに盛んであるが、貞享元祿以後、太平無事の逸民の多い當時に於ける流行は驚くべきもので、「京羽二重」(林鴻)には京都に於ける誹諧點者並誹諧師を四五町づゝ町筋を限つて列記してゐるが、七條通から松原通までの間に約百人、松原より四條通まで同樣、斯くて西陣まで凡て千人程、其中に點者が六十人もある。點者は

それで衣食の資を得てゐたのだから、如何に誹諧に遊ぶ人達の數が多かつたかといふことが解る。「はいかいのでにはの大事抜書の板行は一枚三錢づゝとて京中をよみ賣にさせける點者も有とかや」「北野の繪馬に點者あまた書て、ゑのころ、鼠、道心者をまぜ、大男に鍬はゝきをもたせ、箕にてはかり、俵につゝみ、淀川へ捨る所を書て掛たり、見物夥しと人々語りあへり」と「貞德永代記」の隨流は皮肉を云つてゐるが、それほどに有象無象の點者が輩出した。而して點を乞ふ側では、猶更句の善惡も判の正否も解らない連中なのだから、世間の評判や看板に依て判ずるより外はなく、從て誰々の門下だといふ風な系統が貴ばれた譯である。之は貞門時代ばかりではなく、芭蕉以後に至つても其風があつて、美濃派の支考も、彥根体の許六も、主張は正反するけれども我こそ芭蕉の嫡流だといふことを看板とし、江戸では葛飾派といひ、江戸座といひ、雪門といひ、何れも芭蕉の直系より出でてゐる事を標榜して立つたのであり前卷に載せた蓼太と雁宕との爭論で、蓼太が雪中庵を借稱するものだとか、いや確に正傳の證據があるとか云ひ合つたのも、自分の門戸を大きくする爲めに、系譜を裏書としようとする心に外ならない。「花見車」(轍士)に

遊女は身を賣り、点師は名を賣て一生の界境あり。傾城となる事、あるひは牢人のおとろへたる娘をつかはし、またに夜番の妹を賣たるなれば、むかしを耻て親ざとをかくす、点者となるも牢人して奉公をかまはれ、町々の家請狀にもきらはれ、もと手もなければ、伽羅の油のみせもかなはず、点者とはなれる也。又は出家には成たれども、なんぞ佛弟子に俗やなからん、うるはしき女をいましめ、うまさうな鯛うなぎをぶくせぬ事の損をおもひて、高みよりこけ落、衣のすそ押切ればたちまち十德の姿と成り、心やすくちよろりと点者になる也。親のゆづりはうけたれども、米の買置にたをされ、分散にあひて大こんりうはさながらならず、また職人には生れ來れど細工が不器用で野らをかはき、謠やにてつきあひたる人をたのみて、点者になりたるも多し。これみないにしへ

を恥て先祖をかくすは、遊女の身を恥るにちがはず、身請をしたれば下やしきにやしなはれて、ゐようえいぐわをきはむ、大名にかゝへられたれば、折ふしの發句斗にて寛樂也、かれこれこの比准ほどよく〳〵かなひたるはなし

と點者をこきおろしてゐる。藝術の何のといふ話ではなく、全く生活の爲の容易なる一職業としての點者が、斯うした系譜には澤山に載せられてゐる。

俳家の間に系譜の重んぜられたる第三の理由としては、以上の二つの如く外部的なものでなく、内部的なる一つを私は擧げたい。それは俳諧を一つの道として、其道を護持する上に於てゞある。尤も之は芭蕉以後の俳諧に於てこそ云はるべき事であるが、俳諧は境地の藝術であつて、其境地の高きに探りいる爲に向上の心をはこぶ、是れ卽ち一つの道をなす事である。道を求むるものは道を體したる師に就て指導されねばならず、道を傳へんとするには道を愛する弟子を待つて附囑しなければならぬ。こゝに系統の關係を生ずることは自然である。一體、佛教には無師獨覺は天魔の種なりといふ風な思想が含まれてゐるが、其中でも殊に禪は以心傳心不立文字をモツトーとするだけあつて、生悟りの自分免許が横行するやうな事になつては、道を錯る事が大きいといふ譯で、其師の允許といふ事を重視してゐる。俳諧の道の師傳も亦之と相似の心理から來てゐる。又、俳諧、殊に俳句を作品として見れば、其作者々々の氣稟に依て、如何樣にも自由に新機軸を出して來ることが出來ようとは理論で云へるだけで、實際はなか〳〵さうは行かず、其の初め據る所の句調の模倣、影響、感化といふものからは俄かには離れがたく、其作者の個性や工夫を以てして、其間から僅に僅に新しく移つて來るだけのものである。例へば、芭蕉の句を見ても、極めて初期のものは貞門の模倣たることは明かであり、次で、談林の影響も亦看取される。その意味で、一俳家の作風を觀察する時に、其人が

何派に據り、誰を師としてゐたかといふ事は、必ず考へてみねばならぬ重要なる視點である。其意味から、俳系の傳統といふものは、古俳諧を研究する上の骨格たるべきものと云ふても好く、本書に輯錄したる諸系譜は其場合に大なる資料的價値を發揮することなのである。けれども、之は科學的心理的研究の立場である。眞の藝術家たるべき作家はさうした理法から結局は一躍進をせずにはゐない。藝術が科學以上なる所以はそこにある。芭蕉の正風には、貞德風の遺臭は少しもなく、談林風の變化と見ることも當らない、それは全く本質的なる別箇の出發點からスタートしてゐる、それは芭蕉の人であり、芭蕉の心である、系統でもなく、傳流でもない。蕪村は師弟として巴人を嗣ぎ、巴人は江戸座系統であるが、蕪村の句境は、師の巴人とも別であり、江戸座趣味とは寧ろ正反對にすらなつてゐる、蕪村が巴人から、俳諧の作に於ては決して師を模するには及ばないと云はれて頓悟したといふ事も彼自ら書いてゐる。一茶に於てもやはりさうである。彼は葛飾派の系統に屬してはゐたが、彼の句は實に彼自身の外の何者でもないので、彼の作を味索する上に於ては、系統といふことは殆ど無用ですらある。して見ると、系譜は畢竟、一つの戸籍簿であつて、戸籍簿は勿論なければならぬものゝ、藝術家としての天才も凡人も戸籍簿の上では同樣なスペースを占めてゐるのである。試に「誹諧家譜」に就て芭蕉を探ねると、季吟門下として、湖春、元隣、俳青として並べてある。「誹諧家譜拾遺集」（十ロ）に就て蕪村を捜ると、巴人系統として、隨古、可都、盛住、蕪村と並べ、その蕪村を傳しては、「與謝氏、當春點列ニ加ヘラレシ由、未ダ告來ラズト雖も、風聞に任セテ之ニ記ス」とあるのは面白い。「葛飾蕉門分脈系圖」（錦江）の中から一茶をさがし出すのはなかなか骨が折れる、それ程彼は隅つこの方に小さく書き込まれてゐる、素丸門としての彼は名もない有象無象の人達の中に他の人の傳よりも行數が少く僅に「一茶、二六庵、小林菊明信州善光寺に住し、寛政二年戊四月七日入門、後判者にすゝみ、竹阿の號を稱し、文化年中一派の規矩を過つによつ

て、白芹翁(素丸)永く風交を絶す、奥羽紀行あり」と記してあるに過ぎない。其も見方に依つては、面白いと思ふ。

俳諧は遊戯であるか、藝術であるかといふことの定見は、現今の俳人の間にもいまだ徹底してゐない。明治の半ばに子規が出て、文學といふ見地から古來の俳諧を見直し、連句を以て非文學とし、俳句も亦、文學的俳句と非なるものとに差別して、俳人等をしておぼろげながら品等の眼を開かしめた事は確かに俳壇の一進歩には違ひないが、其説は精緻なりとは云ひ難い。連句の形式が文學の範疇に外れたものであるとしても、其創作唱和の氣持に藝術の心がないとは云へず、又、俳句なるものが其表現の上だけで所謂文學的に出來上つてゐても、其を作る者が其態度の上で遊戯一片に堕してゐる場合はどうであるか。今日、俳句を文學なりとして之にたづさはつてゐる人々の氣持が、碁將棋などに遊ぶ氣持と根本的にどれだけ違つてゐるであらうか。そこを今日の俳人諸子に一考していたゞきたい。「花見車」には俳諧に遊ぶ事を傾城買に比して斯う書いてある。――

先、金銀のついゑ更になし、傾城ぐるひをして、一月に太夫ひとつづゝ買つて一年を見れば、なんぼしまつにしても三十兩と云ふかたい金はのこらず、誹諧は折ふしの會を催し、点者のつけとゞけ見事にしたりとて一年に十兩はいらず、これほど心やすくして、たのしむ道は外になし

之を讀んで笑ふことはよろしいが、笑つたあとにめい〳〵自身の句作に對する態度心持を反省する必要があらうと思ふ。「花見車」には又、當時の俳人氣質點者氣質に就て次のやうにうがつた觀察をしてゐる。

むかしと今の誹諧の、先、心ざしうら表にかはれり。いにしへは連衆一會興行せんと思へば、十日も前より一巡を廻し、極まれる日は、いかほどの隙入も闕て相つとめ、御影をかけ、香をたき、一巡よみあぐるたびに、我句

の時はきつとかしらをさげてはゞかるよしをのべ、會の中、物がたりもせずして、あげ句よむ時、膝たて直し、禮儀をとゝのへ、跡にていさゝか酒しゐて、歸る時は門前に出てうやまふ事正し。翌日は袴を着し、宗匠のかたに參りて、昨日は御苦勞にかたじけなしと、一包へぎにのせてさし出す。當時はまたさにあらず、点者のかたよりひたすら會をすゝめ、やう／＼に料理を出し、一巡よむまでもなく、先盃をとり／＼に廻し、わが句まへになければ大きなる聲をあらゝげ、嵐三衛門はおしい事をしました、中村七三はのぼらぬかと我がちに云あへ、はては大酒に成て、懷紙がどこにあるやら、點者に褻をさするやら、されど扇鼻紙はまぎれぬやうに取廻し、歸りにはいとまごひさへせず。さて、翌日は宗匠のかたから禮に參り、昨日は色々御馳走、ことにめづらしき貴句を承り、かたじけなくぞんじ奉るときつと禮をのぶる、これあちらこちら也

是は、芭蕉が歿後八年を經た元祿十五年に書かれたもので、右に云ふむかしとは芭蕉在世當時の意義ではなく、貞門内の事であるが、さすが掟をやかましくいふ貞門とて、會席には禮儀を守つたものであらう、それも近來は廢れたといふのである。同書には又、

近年、桃青門人世にはびこり、諸國に頭陀往行して名山古跡を見、または一筋をすゝめてありくに、四五日もとゞめて、大廻しの切字はいかに、第三の字どまりはいかやうにする、戀の句一句にて捨るはいかになど傳受をかたらせ、晝は會に引出し、夜は鳥のなく迄ものかゝせなどして、べつたりとくたびらかし、歸る時は集料句代ばかりさし出して、此方より便狀以てなどゝまぎらかして置也、からしり草鞋茶碗酒は何を以てとゝのふるや、右の句料をつかふ外なし、さるによりて出さぬ集もあるよし也、味なき味噌をふるまひ、蚤蝿にいぢらせ、あまつさへ跡にては下手くその何のとそしりのゝしる也

世間の俳人といふものが概して、さうした氣持であるならば、其を相手として眞面目な點者が出る譯もない。ほんとうに自然の間に逍遥して、吟腸を練らうとする、つまり、ほんとうに俳諧を愛する人は、世間の俳壇から一歩を退かねばなるまい。世間の人を相手にせずば生活の保證を得られないとすれば、いきほひ清貧に安んじなければなるまい、寧ろ無一物の境涯に魂を据ゑねばなるまい。芭蕉以來、正しく俳諧の道を護持した人々の隱遁的なる態度、常人から見れば奇行と思はれる程に恬淡なる行爲は此氣持から理解せらるべきである。「俳諧世說」(閑更)に——

芭蕉翁元祿行脚の終ならん、金城にしばらく杖を休め給へる時、小春亭にて一夜會合ありしに、その席の饗應、山海の珍物をつらね、善美をつくしたる催けなりし、其終に後會の事を約しけるに、翁曰、こよひのもてなし、心づかひの程はいふべくもあらず、されど恨らくは大名の御成のごとくにして、こゝに風雅のさびなしといはんか我は世を浮草のよるべ定めぬたぐひにして、あるは草深き野邊に晝寢の夢を結び、あるは茂りたる木の下に一むらの雨をしのぐの外、浮世に望さらになし、況やかゝる珍物厚味、豈世をさくるものゝ本意ならんや、もしかさねて我と交を結ばんと思ひ給はゞ、食事の煩をひたすら省きたまひ、もし飢ば我より乞なん、かへすがへす此旨をよく守りて只風雅のさびを重んじ給ふべしと申されたり

當時の世間の俳人氣質と、芭蕉の氣持と如何に雲泥ほどの差があつたかといふ事が解る。それだけの差が、世間の俳句と芭蕉一門の俳句との間にも現れてゐたのである。當時金城(金澤)に於ては、秋の坊、句空の如き淸貧の隱者があつた。北枝、牧童は職業についてゐたけれども世外に悠々たる意をもつてゐた。京都の去來は恒產があつた爲に閑雲を樂しみえたのであらうが、丈草に鍋一つ瓦罐一つしか持たずして自適の心を失はなかつた。江戸の其角嵐雪は對俳壇的の生活をしてゐた。それも芭蕉の所謂正風を宣揚する上には必要だつたのであらう。「門人に其角嵐雪あり」と

端書して「雨の手に桃と櫻や草の餅」といふ芭蕉の句は自分の系統的な後繼者として允可を與へた意味だと見られても間違だとは申立てられないやうな、思はせぶりのものだが、その其角や嵐雪が、師の沒後に果して其道を錯ることなく傳へたかといふと、上にも述べた如く、傳統的の嫡流者もあまりたよりにはならない。俳壇的に時めいた其角や嵐雪よりも、隱退的なる去來や丈草の方に、芭蕉の藝術の正しい精神は傳へられたものとも見られよう。してみると根本は芭蕉自身が選んだ生活の態度が一番ほんとうのものだつたといふ事になる。又、芭蕉といふ人が人格的の德をもつてゐたとも云へる。ゴシップ風に當時の俳人をこきおろしたものゝ中にも、芭蕉の惡口だけはどうも見當らぬやうである。當時の俳諧師をすべて遊女を見立てゝ品評した例の「花見車」にも、芭蕉に就ては

△太夫　　　松尾桃青禪定尼

襟のうちにかほさしこんで、ものをふくみたる道中に、風俗をたくみ出されしより、三ケ津はいふに及ばず、國々の君たちもまなべるやうには成たる也

とあつさりと書いてゐる。芭蕉を偉いものとした方の逸話は甚だ多い。「俳諧世說」にあるものだけでも、句案は朝夕に芭蕉を念じて三拜したといふ話、万子が芭蕉の書を以て本尊としたといふ話、芭蕉が近江にて野盜に逢つた時、少しも驚かず、乞ふまゝに與へて、肌つきだけとなり、因果歷然無常迅速の事を懇ろに說き敎へたといふ話、芭蕉が奧羽行脚の時湯殿山にて用ひた紙縷袈裟を後までも持つてゐた事に就ては、「其時の小物まで捨もやらず、持あるき給ふは、其時に應じ其俗に隨ひて、其禮節を忘れ給はざるの至り、あふぎてもなを餘りある高師にして、其德いよ／＼かたく愈高き事を尊むべし」と闌更は書いてゐる。

「芭蕉翁反古文」卽ち「花屋日記」は「芭蕉の死」とも題すべき一つの創作であらうが、之を史料として信を置くべき文

考の「笈日記」、其角の「枯尾華」と較べて見てどうであるかといふに、「花屋日記」は史實として動かぬものは取入れてをり、芭蕉の氣持も好く理解して書いてはあるが、やゝ理想化してゐる點が多い、「花屋日記」の芭蕉は臨終の日の十二日に至つても、かなりしつかりとしてゐて、自ら行水を望んで沐浴をとり、座を靜かに改めて、木節に醫術をつくされた禮を述べ、看護してゐた門人を近く呼んで遺言をし、伊賀への遺書は自ら認め、京、江戸、美濃、尾張の同門への遺言は人々に筆を執らせた。又、去來に向つて、路通の事を「わが亡き後には凡そに見捨てたまはず、風流まじはり給へ」と頼んだ。それから合掌を正しくし、觀音經と聞えて、かすかに誦經するらしく、次第に息も細くなるほどに、次郎兵衛が抱くまゝに倚りかゝりながら睡るやうに瞑目したとある。然し、之は「笈日記」に據ると、遺言狀を認めたのは十日であり木節に言葉を殘したのは十一日、「此後は左右の人をしりぞけて、不淨を浴し、香を燒て後安臥してものいはず」とある。十一日の朝よりは一匙も通らなかつた。臨終の十二日には、午の時ばかりに目のさめたやうに見廻されたので、粥の事をすゝめると、扶けおこされて唇をぬらしたゞけであつた、其日は暖くて障子に蠅が集つてゐた、人々が鳥もちを竹にぬつて狩りあるくのに、上手下手のあるのを見てをかしがられた（花屋日記には之が前日の十一日になつてゐる）それから後は何事もいはずなつて瞑目したとある。此二つを比べると、「笈日記」の方が衰弱しきつた病人の動作として本當らしく、「花屋日記」のやうに、臨終近くなつて起上つて觀音經を誦しながら正念に入つたといふのは、芭蕉といふ人を高僧傳にでもある人のやうに、偉いものにして書いた氣持があると思ふ。「俳諧世説」にしても「花屋日記」にしても、芭蕉歿後それほど遠く隔つてをらずして既に芭蕉を偶像化する傾向が見えてゐる。それから猶時を經て芭蕉の藝術の眞髓といふものは全く理解されぬやうになつても、「正風」といふ名、「芭蕉さま」といふ名ばかりは貴ばれて、それが遂に芭蕉の句でさへあれば佳し惡しの鑑別もせず一がいに拜信されるといふやうな事にも至つたのであ

る。斯うした盲目的な偶像崇拜の氣持を以てしては、芭蕉の人間も芭蕉の藝術も正しく解味することは出來まい。芭蕉に關してばかりではなく、凡て古俳人の逸話を讀む時には、そこに高士として、或は奇人としてうつしてある其行履をうなづくと共に、其奧にある所の其人の人間味を發見するやうにつとめなければならない。例へば、「芭蕉翁頭陀物語」(凉袋)にある、惟然坊が寺の門に寢てるたのを、其子が歩みより、此程尋ねたけれども知れなんだとて、夜具を掛けて枕をさした、坊は快く暖まつて寢ついた後、みかへりもせず脱出した、又、我娘の嫁してゐる所を過ぎた時、娘が馳せ寄つて變りはてた有樣を嘆くと、坊は其顏をつく〴〵と見守り、硯を呼んで、「兩袖にたゞなにとなくしぐれかな」と書いたといふ話の如きでも、惟然坊を單なる畸人としてめづらしがるだけでは、本當の見方ではあるまいと思ふ。芭蕉にしても、誰にしても、畢竟は人間なのだから、而して其人達の尊さは、人間としてのいゝ味にあるのだから、餘りに理想化して、人間離れしたものにして感心するのは、ほんとうに其人を知つて感心する所以ではない。(荻原井泉水)

日本俳書大系第十五卷　終

昭和二年五月五日印刷
昭和二年五月十日發行

非賣品

日本俳書大系
(15)

著作者　神田豐穗

發行者　神田豐穗
東京市日本橋區數寄屋町一番地

印刷者　谷口熊之助
東京市牛込區早稻田鶴卷町四〇三

印刷所
春秋社印刷所

發行所
東京市日本橋區數寄屋町・春秋社內
日本俳書大系刊行會
振替東京二六八七二・電話大手 二一二四 / 二二二四









